THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附録號

第三十七年 第十號 第四百三十號


軍人
美術家
學生

十九版出來

ノーベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

死後は如何

附錄『交靈術とは何ぞや』

四六判上製 定價壹圓九拾錢 郵税十錢

人間の死後は果して如何、**絕滅**か、**永生**か、將た「醒むる無きの睡眠」か、旣成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中一道の光明あり、**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす。**

現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神祕的瞑想と、聰明なる理智との高潮に乘じて此大問題を解決せんとしたる者即ち此書也。譯者は將來世界を震憾すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。附錄とせる『**交靈術とは何ぞや**』に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は、之を讀んで將に大なる**戰慄と畏怖**とを禁じ得ざるべき也。

増富平藏譯

●ショーペンハウエル **隨想錄** 貳圓六拾錢 郵税十二錢

▼久しく品切中のところ訂正再版發行す

英國 ラスキン著

●**永久の歡び** 三版 栗原古城譯 壹圓八拾錢 郵税十錢

●**塵の倫理** 三版 小林一郎譯 貳圓四拾錢 郵税十錢

●**二ツの道** 再版 小林一郎譯 弍圓參拾錢 郵税十錢

●**胡摩と百合** 四版 栗原古城譯 貳圓 郵税十錢

原著一名「王者の寶庫」（讀書論）と「女王の花園」（婦人論）

ノーベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

七版

靈智と運命

◇四六判總布製・定價貳圓貳拾錢・郵税十錢◇

人間の運命は果して**先天的**に**豫定**せられたるものなりや否や**人間は自らの努力**によりて其運命を改造し能ふべきや否や、將た又**人間の理性は奈邊まで信賴**せらるべきものなりや。これ實に全人類の頭腦を惱まし來れる千古の疑團なり。マーテルリンクは、其思索の有らん限りを竭して、遠くは不可思議なる**神祕境**に其思ひを馳せ、近くは**日常生活**の一些事をも見逃さずして所謂『**運命**』の**正體**なるものを剔抉解剖して餘蘊無からしむ。靈智の明鏡一度輝いて萬妖悉く其影を潜むるの槪あり。求道の士は必ずや空しく本書を看過せざるべきを信ず。

東京 本鄕 西片町 **玄黃社**

電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

楠山正雄氏著

原稿紙一千枚を超ゆる大著 一ケ年の苦心に成る！

近代劇十二講

總洋布上製、四六判七百六十頁、寫眞八葉。

定價參圓五拾錢、送料拾貳錢

精到詳密なる近代劇の百科全書出づ

ロマン・ロオラン曰く「近代の不思議は、藝術家が民衆を發見したことである。」と。而して本書の著者楠山正雄氏は、この語に次いで云ふ。「近代劇はこの新しい發見の上に成立つた新しい藝術である。」と。誠に近代劇を云はずして、民衆藝術を云ふ可からず、民衆藝術を措いて、晩近文藝のことを語る可きでない。而して、近代劇に就いての評述は、これまでにも隨分行はれてゐるが、作と人とに就いてその全面容を悉くし、劇壇劇術を說いて全細目に及べるもの本書の如きは未だ曾て無い。四部十二講七十餘章、イプセン以降近代劇の作家の作風と思想とを說くこと數百人、代表作の梗概評釋すべて數百篇。複雜多面なる世界近代劇の全景は、著者が透徹せる視力によつて一眸の下にあつめられてゐる。まさに精到詳密なる近代劇百科全書である。

東京牛込矢來三番地 振替東京一七四二番

新潮社

電話番町 八〇七番 八〇八番 八〇九番

東京 第二部 勞働篇

上司小劍著　石井鶴三装幀並挿畫

◇純眞な青年春田影彦は美しい濱江に死に別れた。愛人の最後に殘した眞實の言葉によつて自分の力で生きようとした彼は、哀愁に充ちた心を抱いて決然勞働の生活に入つた。第二部『勞働篇』は若い影彦の機關夫としての地下室の生活及其の周圍を描く。「愛慾」「勞働」「爭鬪」「建設」の四部作に於て、著者は其の獨自の藝術境を開拓し、主人公影彦を通して、東京の空氣と生活とを巧に表現してゐる。

四六版天金極美本
装幀清洒挿畫高雅
定價二圓五十錢
送料十二錢



◇第一部『愛慾篇』を公けにして、吾文壇に一新時代を劃した『東京』の第二部『勞働篇』は出た。愛慾篇を装幀して絶賞を博した石井氏の苦心の力作六葉を揭載した本篇を藝術愛好の士に薦む。

第一部愛慾篇　定價三・二〇　送料・一二

東京京橋桶町
大阪三休橋南
大鐙閣
振替 東京三三六一八
大阪二七一五五

早大教授 伊達保美著

哲學概論（上卷）

◇四六版ギナーン装 五五〇頁◇定價金參圓五拾錢 送料金十五錢◇

第五版

本書は著しく一般化され又深められた現時の哲學的要求を嚮導すべき嚴重なる前提として同時に又過現一切の哲學的努力に對する批判的研究として、學として成立すべき哲學の本質及課題を究明し、其諸問題の起點と發展と歸向を展示し論述したものである。殊に此上卷に於ては其基礎として理論哲學の諸問題が取扱はれ、讀者をして現代哲學の諸傾向との接觸に導いて居る。涉臘の該博と叙述の嚴正と批判の透徹とは、單り其量に於て、我國哲學概論の文獻中斬然頭角をあらはせる名著として推す可きものである。

◇時事新報評：：哲學の概念及課題を序論に述べ純正哲學の基調たる認識と實在の二部門に就き前者は認識の可能性と起源及び對象、後者は實在の數量と本質及び生成の各三方面に互つて嚴正に取扱ひ、論理の整然として然も文章の明徹なるは、新しき時代の哲學に對する要求を充たす可き最近の傑作である。

◇解放評：：哲學的諸原理諸問題に就ての客觀的資料を豊富に採り入れ。入門者をして哲學の何たるかを知らん、生るに努められた點及び哲學上最近の諸傾向を評論されてゐる點等は、既出の概論書に得られぬ所で、批判的哲學概論として白眉であらう。

早大教授 横山有策著

七版 文學概論

▼四六版 三〇〇頁▼

▼價貳圓送料八錢▼

發兌 東京牛込早稻田鶴巻町 振替東京六〇六九三番 泰文社

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も巻煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の御康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロット味（百日分）金貳圓
カロット具（永久使用 銀模様入）金五拾錢
同 象牙サック入 金壹圓五拾錢

一組

送料（内地十八錢 海外四十八錢）
引替送料（内地卅五錢 海外五十五錢）

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

電話丸の内一九一九 振替東京五二九一一

化粧品

オイデルミン……化粧水

過酸化水素キウカンバー……化粧水

過酸化水素クリーム……美顔クリーム

白粉……七色四色三色

花つばき……香油

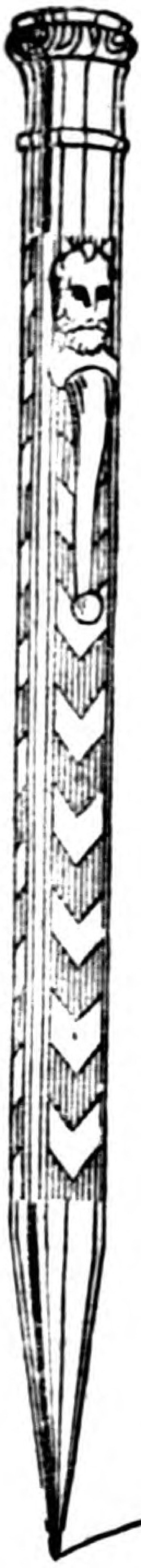
香水……五十餘種

資生堂石鹼……洗顔浴場兼用

粉歯磨……袋入

東京銀座 資生堂化粧品部

支店 大阪東區南久寶寺町



能率増進の二大武器

プラトン萬年筆
プラトンシャープ鉛筆

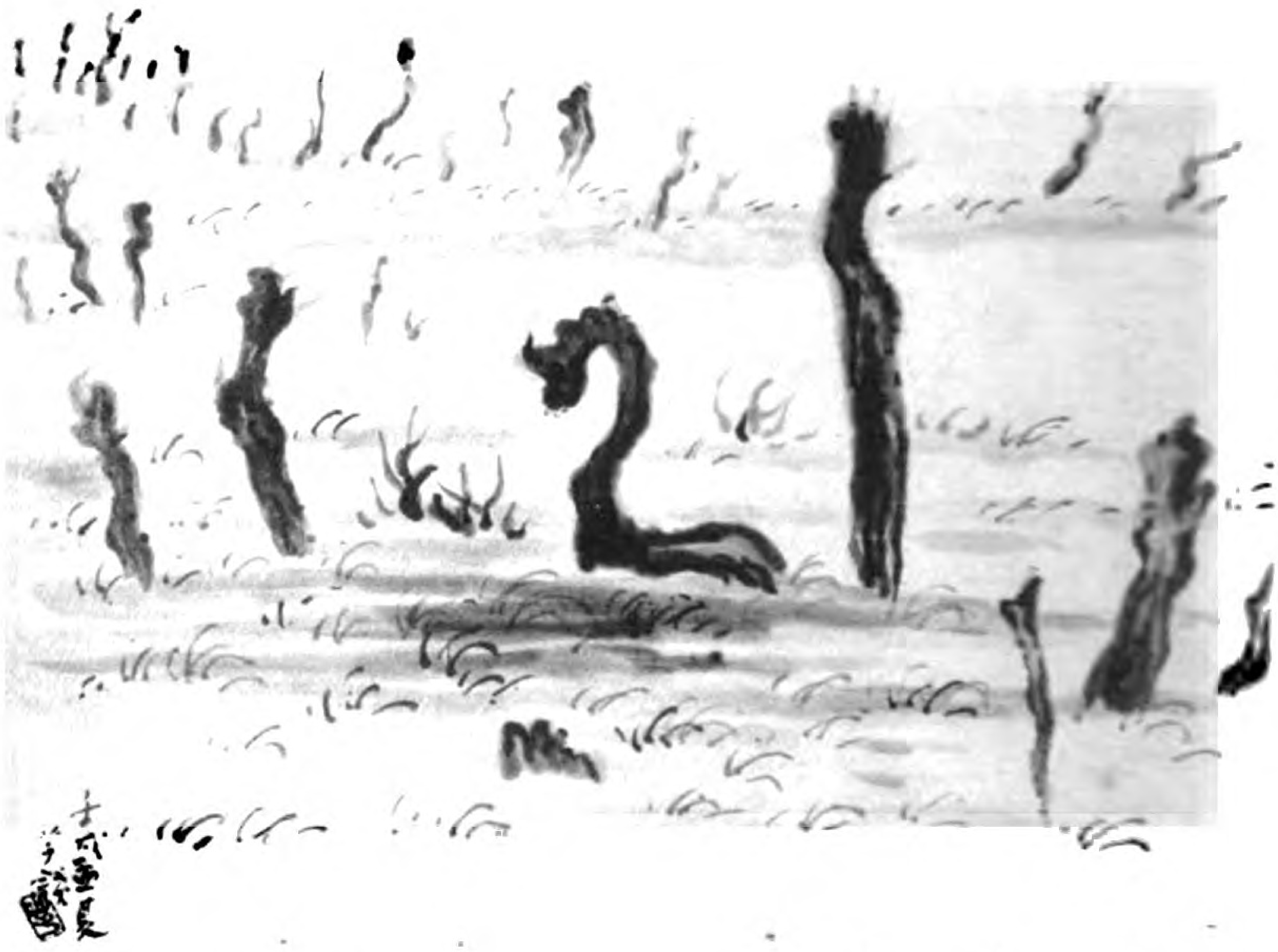
鉛心の繰出しのみが自働的な舶来品より更に一歩を進め繰出し繰入れ共に自働的な點がプラトンシャープの一大特徴であります

書きよい万年筆で通ったプラトン万年筆さ削らないでも直ぐに書けるプラトンシャープ鉛筆さは時間さ勞力を省く点に於いて能率増進の二大武器であります

中山太陽堂文具部發賣







火山湖　　　小川芋錢筆

秋夜の

絶好伴侶・興味津々

浪六先生
の傑作

縮刷 浪六全集

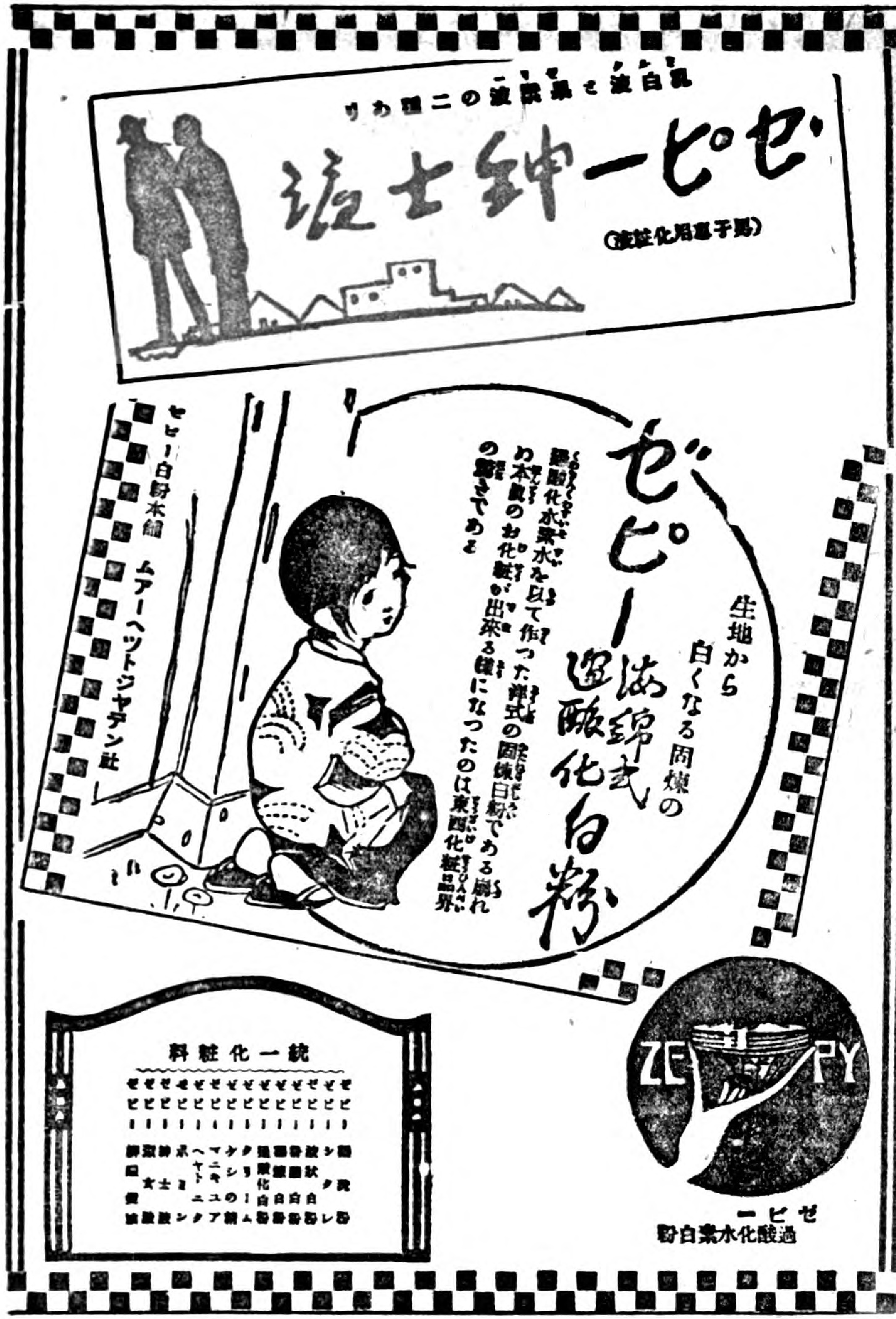
第一編	當世五人男、同後篇、黒田健次、同後篇、續篇、最後の黒田健次、同後篇
第二編	上田力、同後篇、續篇、倉橋幸藏、同後篇、同續篇
第三編	川上三吉、同後篇、續篇、吉田勇藏、花車、しなさだめ
第四第五編	八軒長屋（上巻下巻二册）
第六編	鬼あざみ、やまと心、日本武士、金剛盤、同續篇
第七編	最後の岡崎俊平、同後篇、魚屋助左衛門、呂宋助左衛門、古賀市、武者氣質
第八編	居家處世人間學、同續篇、川柳自由自在、うき世の裏表
第九編	男山、同續篇、男一匹、高倉長右衛門、同後篇
第十編	當世三人兄弟、同前篇、後篇、うやむや日記、元祿名物男、同中篇、後篇、
第十一編	毒婦、同後篇、續篇、仍如件、同後篇
第十二編	夜叉男、大閻魔、うき世双紙、同後篇
第十三編	原田甲斐、同後篇、續篇、武士道、同後篇
第十四編	元祿女、同後篇、當世女、同後篇、續篇
第十五編	現代思潮男女の戰ひ、明治十年、唐撫子
第十六編	豐太閤 大阪城
第十七編	十文字、同後篇、浮舟、煩悶病院、同後篇

▼▼▼▼

新式ポイント活字
袖珍特製箱入美本

定價各
貳圓貳拾錢
郵税内地各冊八錢

東京本石町
至誠堂
振替東京一七四四


乳白液と暴訳液の二種あり
ゼピー紳士液
(男子専用化粧液)
ゼピー
海綿式過酸化白粉
生地から白くなる固煉の
過酸化水素水を以て作った洋式の固煉白粉である崩れぬ本当のお化粧が出来る様になったのは東西化粧品界の驚きである
ゼピー白粉本舗 ムアーヘツトジヤテン社
統一化粧料
ZEPY
ゼピー
過酸化水素白粉

大正十一年

中央公論

九月一日發行

秋季大附錄號

第卅七年第十號

第四百十三號

民衆的訓練の有機的考察

西洋の或國では、國會議員の總選擧でもあると云ふ際、小學校の先生が音頭を取つて兒童に模擬選擧をやらせる慣はしがあるとやら。事實に於て學校敎師を尊敬せぬ我國などで斯んな眞似をやらうものなら、直ぐ村や町の議員連から猛烈な攻擊を喰ふだらう。社會も恐らく之をいゝ事とは認めて吳れまい。何となれば、我國には敎育は政治と密接の交渉に入る可からずとの深い迷信があるから。

敎育と政治との關係に就ては別に大に論ずる丈けの色々の問題はある。現今の我國に見るが如く、政治は到底極度の腐敗を免れぬものとすれば、所謂神聖なる敎育を其の渦中に入らしむ可らざるは言を俟たない。併し何等かの形に於て公の政治に干與するのが凡ての公民の義務である以上、公民としての必要な資性は、之を敎育の訓養に待つの外に途はないではないか。之等の點大に論すべき事が數多くあるが　問題外だから今は略する。

孰れにしても西洋では、學校の先生の公正熱誠なる指導に依り、兒童は幼稚な頭相應に眞劍に社會の利害を考慮し、或は父兄などの意見も聽き、殊には平素師事する所の敎師の思惑に夫となく感化もされて、極めて正直に投票をするさうだ。この眞劍なる態度こそやがて社會に出て色々の公事に盡す所の公民に必要欠く可らざる態度ではないか。西洋の學校では、獨り國會議員の選擧の場合ばかりでなく、或は級長の選擧だとか、或は同級生の相談事だとか、種々の機會に於て同じく眞面目に其意思を決定表示する訓練を受くるとか。斯くして養はれたる態度、將たまた斯くして作り得た氣分其のものは、實に學校を出て實際社會に活動すべき時節になると、其儘公人としての必要なる態度乃至氣分となる。されば公人として活動するに方り、彼等は學窓に居た時と何等違つた心得方を要求さるゝのではない。

此點に於て日本の學校は、監獄と同じく、餘りに實際社會より遮斷され過ぎて居る嫌はないか。日本でも法律學校邊では擬國會をやることはある。中には之を年中行事の一として居るものも少くはない。之も本來の趣意は、將來公人として爲す可き仕事を學生時代から稽古して置かうと云ふに在るのだらうが、吾人の之に對して平

素最も遺憾に思ふのは、其練習せんとする所が專ら手續や懸引の末技に趨るばかりでなく、多くの場合に於て實際の議會に於ける醜狀陋態を其儘模倣するに全力を傾けて悔ゐざることである。議員として斯くあるべき態度を練習するのでなくして、墮落の極に達して居る現實の議會を更に一層誇張して見せることである。若し此間に學生が何等か訓練養成さるゝ所ありとせば、そは公人としての必要なる資性でなくして、其の反對の最も不適當なる忌むべき弊習其ものに外ならない。

併し之は學生の罪ではなくて實は先輩の罪だ。或る意味に於ては爲政者の罪だ。而して何等適當な訓練を與へずして、時には反對の訓練の行はるゝを放任して、而かも突如永い訓練を前提として始めて考へられ得べき底の重要義務の遂行を命ずる例は、我國に於て他にも頗る多い。學校に於ける訓育を政治と絕緣して靑年に重大な公民的義務を課するは其の最も著しい例だが、其外近頃八釜しい問題になつて居るものに關連しての著しいものを探すと勞働組合のそれなどもある。勞働者に組合組織を事實の上に禁止防遏して居り乍ら、彼等に立派な組織的運動がないの、共同的活動の訓練がないのと云ふ。丸で飯を食はさずして働け働けといふ樣なものではないか。

獨り勞働問題ばかりではない、軍隊の問題にしても、警察の問題にしても、多數民衆の行動に何等かの關係を有する部門に於ては、其訓育の効果の社會の全班に及す影響をば、もつと廣くもつと高く觀察するの必要はないか。今日の公民は、例へば學生としてのみ活くるのではない、又固より軍人や勞働者としてのみ活くるのでもない。實際に活きて行くには、其の時々に於て夫れ〳〵の專門的立場はあるが、其間には又公民としての普遍的立場があり、之が根軸となつて吾々の夫れ〳〵の專門的の立場を統一する有機的關係が成り立つのである。

我國の公の施設には、餘りに此の有機的關係の考察が缺けて居りはしないか。根本の健康を養ふことが期せずして手足の爲めにも頭の爲めにもいゝと云ふ樣な要の所にもつと注意するの必要はないだらうか。足ばかり丈夫にすることを考へると、頭の方が疎かになると云ふ樣な、偏した訓練の仕方よりは一日も早く脫却しなければならぬ。若し夫れ故意に斯かる偏僻の施設を樹てゝ多數民衆の眞の開發を阻害せんとする者に對しては、吾人固より飽くまで其妄を爭はずには居られない。

中央公論
第卅七年第十號
秋季大附錄號
第四百三十三號



流行思想を論じて文化の根本問題に及ぶ

文學博士　金子筑水

第一

種々な意味の社會經濟問題と並んで、近頃はまたさまぐな意味の宗教問題が一種の流行思潮であると言はれる。成るほど親鸞上人の思想とか愛の思想又は宗教とかいふたぐひのものが、最近に於ては明らかに或範圍内に於て興味の中心となつてゐるらしい。殊に一部青年間には此の種類の宗教的興味が今や、種々な形式を取つて現はれてゐるらしい。現代の流行思潮とは何ぞ。流行思潮の中心は何ぞ。私はこゝで斯やうな問題を取扱はふとするのではない。單に種々な意味に於て一種の流行思潮と成つてゐる宗教的傾向を中心として、そこから出發して現代文化の種々相を一層廣く且一

層システマチックに觀察して觀たいと思ふ。今日の宗教的傾向は、假令それが或る空疎な一時の流行であるとしても、それは元來現代文化の起伏の上に如何なる意義と暗示とを與へるものであらうか。此の特殊な傾向の裡面乃至背景には何等か重大な文化史上の意義が潜んでゐないであらうか。私は主として此の點を考へて見たいと思ふ。

今日一種の流行を成してゐるといふ宗教的傾向——少なくとも宗教的傾向に類似した傾向に就いては、既に諸家の間にそれぞれの批評や判斷が行はれてゐる。私が讀んだ又は聞いた批評の大部分は、言ひあはせたやうに此の流行思潮に反對する意見で、斯かる流行思潮は要するに根柢の無い一時の現象に過ぎないといふにあるらしい。即ち諸家の批評によれば、今日の宗教的傾向は、餘りにセンチメンタルであり又病的でさへもあり、更に科學上又は哲學上の確實な根據を缺いた頗る單純な幼稚なものであるから、斯やうな宗教的興味が今日のやうな新時代に於て十分に發達し且永續しようとは如何にしても考へられない。畢竟は幼稚な空想や好奇心が手傳つての現象であつて、そはやがて再び消滅すべき泡沫的現象に過ぎないと。此の批評は大體に於て的確であるかも知れない。少なくとも私は此等の批評に對して强い抗議を申立てるほどの根據を持つてゐない。殊に今日までの我國思想界の流行に顧み、更に今日の宗教的傾向が極めて單純幼稚である事を考へあはせると、それが根强い根據を備へて、今後いよいよ眞面目に十分確實に發達し進歩するものとは、今のところ容易に想像されない。もつと深い生活、もつと强い信仰、もつと根據ある情熱に胚胎しないかぎり、今日の傾向はやがて再び消滅すべき泡沫的現象であるかも知れない。斯やうに今日の現象は、諸家の批評のとほり、極めて幼稚なもの未熟なもの或はまた氣まぐれなものであるとしても、然しながら、また他の一面から觀察すれば、斯やうな傾向が假令泡沫的にさへも起こることが我國思想界若くは一層廣く文化の發達の上に果たして何等の關係も何等の意義も何等の暗示さへも與へないものであらうか。斯やうな流行思潮は全然無根據な無意義な現象であつて、他の一般思

想界に對して何等の關係さへも持たないものであらうか。私はそこに尚一層深く考ふべき問題が有ると思ふ。

斯やうな問題を觀察するためには、我々は先づ一層廣く且一層高い立脚地に立たなければならない。部分をば單に部分的にのみ觀察せず、須べからく全體的な立脚地からそれ〴〵の部分を全的に考察しなければならない。先づ我々は今日の宗教的傾向は、全く單獨孤立の現象ではなく、思想界の他の現象と極めて親密な關係を持つてゐることに注意しなければならぬ。此の數年來特殊な意味に於て一種哲學的な又は一種理想主義的な傾向が――これも主として一部青年間の事ではあるが――可なり廣い範圍に於て一種顯著な傾向を成してゐることは爭ふべからざる事實である。それは單に科學萬能主義といふやうなものではなく、寧ろ一種哲學的な意味に於て、深い思想を求めるとか高い人生觀を欲するとかいふたぐひのものであると言はなければならぬ。十年前の現實主義的若しくは實證主義的傾向に反對して、寧ろ一層理想主義的な又は一層メタフイジカルな傾向に向かつて進まんとしつゝあるものがそれである。ドイツ新カント派哲學の輸入は斯かる傾向中の最も顯著な實例である。所謂西南學派の價値哲學や、マールブルヒ學派の文化哲學は、今や一部青年間の最も熱烈な憧憬の的と成つてゐる。カントは再び思想界の明星と成り、フイヒテ、ヘーゲルもまたつゞいて我文壇に復活せんとする勢を示してゐる。廣い文壇に於ては例の享樂主義的な又は一種エロチックな傾向がます〳〵盛であるに對して、他の狹い範圍に於ては、一種神祕主義的な又は一種ロマンチックな傾向が歡迎されるやうな勢が見受けられる。更に一層廣い範圍に於て――甚しく空漠ではあつたが――此の數年來文化主義が可なり力づよく主張されたことは、假令其の主張にはさま〴〵の種類や形式が有つたにもせよ――我思想界の趨勢に注意する者に取つては、頗る重要な現象であり又あつたと言はなければならぬ。蓋し理想主義的思潮は、其の種類と形式とは如何やうにもあれ、すべて永遠的な文化の發達を人生の目的とするものであつて、文化主義はすなはち理想主義の目的を簡單に具體化したも

のに外ならない。随つてまた文化主義の主張や普及やは、やがて理想主義的思想の主張や普及やに外ならない。理想主張から離れた文化主義は畢竟無意味な主張に過ぎないのである。

斯やうな數年來の文化主義の普及や、ドイツ新理想派哲學の流行や、さま〴〵な意味の神秘主義の追求や、此等はすべて今日の宗敎的傾向と併せて、一層高い概念のもとに統一さるべき一全體であるといふこと――これが先づ深く注意さるべき事實である。換言すれば、こゝに列擧した數年來の諸傾向は、決して互に無關係な孤立的現象ではなく、互に親密な關係を備へてゐる全體的現象である。私は此の全體的若くは全一的現象をば單に如何なる名目を以て統括すべきかを知らない。蓋し如何なる名目を用ひても、此の全一的現象を誤なく概括することは到底不可能と考へられるからである。然かも此の場合已むを得ず斯かる全一的傾向をば假に理想主義的風潮とも名づくべきであるとすれば、私は最も純粹な意味に依て此の理想主義といふ言葉を用ひたい。即ちすべて第二義的乃至第三義的な附帶的意義を排除して嚴格に實證主義乃至現實主義に對する純粹理想主義の意味に解釋したい。斯やうな純粹理想主義の根柢がそも〴〵如何なる點に存するかは尙後段に於て概論することゝして、斯やうな理想主義的傾向の特徴としては、これが特殊な意味に於て先づ哲學的であり藝術的であり更に又道德宗敎的であるといふこと――これが先づ注意さるべき事實である。古來の理想主義的傾向が必ず先づ藝術的に哲學的に且道德宗敎的に現れた事實をば私はこゝに一々例證する餘地を持たない。藝術と哲學と宗敎とが互に混合融會してさながら一全體であるが如き觀を呈したが最も純粹な理想主義的傾向が示した事實であつた。殊に我國最近の傾向に於ては、一種哲學的な又はメタフイジカルな傾向と、一種センチメンタルな宗敎的興味とは互に聯關して一層複雜な傾向を成しつゝあるやうに觀られる。先づ藝術的に始まり、哲學的に發達して、必ず終に道德宗敎的に進まなければ已まないが、すべての理想主義的傾向に普通な現象である。

されば新理想派哲學の追求を初めとして、最近の宗教的興味に至るまで、すべて尙幼稚未熟な現象であつて、到底嚴格且純粹な意味に於ての理想主義的傾向ではないとしても、そも〳〵斯くの如き聯關した諸現象が、如何ばかり單純幼稚であるにもせよ、引きつゞいて此處彼處に起こつてきたといふ事は、一般思想界の進歩に取つて決して全く無意味なことでなく、寧ろ何等か重大な意味を暗示するものと判斷されなければならない。即ち現實の事象そのものは微弱を極めたものであつても、それが與へる暗示の意義に至つては頗る重大且深刻であると言はなければならない。斯かる重大な意義とは外でもない、人心はひとへに又いつまでも同一な實證主義的思想にのみ滿足することが出來ず、何等か理想主義的な思想や信仰に賴りどころを求めんとするに至つたといふこと是れである。勿論今日の文化主義の追求や宗教的興味やは、こと〳〵く斯かる純粹な要求から產まれたものとは見られず、寧ろ好事心や不純の態度やに基づいたものが多いとしても、中には在來の現實主義的な實際主義的な又は實證主義的な態度や精神に滿足することが出來ず、如何にかしてそれ以上に一層高い人生の立脚地を求めんとした者が全く皆無であり又あつたとも考へられない。多數の不純な態度の中にも少數者の純な美しい要求が混つてゐたことは決して拒まれない。即ち引きつゞいて種々な理想主義的要求が起こつたといふ事は、假令それが如何ほど單純幼稚なものであつても、少なくとも人心が現實主義乃至實證主義以外に何等かの意味に於て理想主義的根據を得んと欲してゐることを示すもので、そこに我々はおのづからな人心の變化を認めることが出來るのである。私はこゝで實證主義はわるいとか、實際主義は淺薄であるとか、假りそめにもそんな意味のことを言はうとするのではない。現實主義や實證主義やが如何ばかり大なる眞理と生命とを備へたものであつても――事實またそれを備へてゐるのであるが――人心はひとへに斯かる同一の態度や精神にのみ滿足することが出來ず、何等かの意味に於て理想主義的態度を求めるに至るといふことは、今日までの歴史が示した必然又必至な運命であると

言はなければならぬ。そこに我々は人心の最も微妙な變化を認めるのである。

曾て一時文化主義が盛に唱へられた時、世間の多數者からそれは空想であるとして可なり激烈に反對された。そして文化主義や新理想派哲學の追求やは、單に在來の實際的な改造思潮――主として實際的な經濟思潮に對抗して現はれたものであるといふやうに解釋された。勿論實際的な經濟思潮をば單に實證主義の一面を代表するものと觀れば、斯かる解釋も全く誤つたものではないが、然しながら理想派哲學の追求や宗教的興味の昂上やは、決して單に實際的な經濟思潮にのみ對抗して現はれたものでなく、寧ろ一層根本的に今日までの實證主義的精神に對抗して、又は此の精神以上に進まんとして現はれたものであると解釋されなければならぬ。斯く解釋してのみ我々は初めて最近のさまざまな理想主義的風潮に一種の深い意義を見出すことが出來るのである。此の點に於て我々は必然的にドイツ思想界の變遷をも聯想せざるを得ない。此の國の思想界が我が國のそれよりも一層複雜混沌を極めてゐるに拘らず、世紀末から今日へかけて、最も進步した思想界は、十九世紀の實證主義から解脫して、又は此の實證主義の土臺の上に、更に新らしい理想主義を建設せんと努力しつゝあることは、殆ど疑ふべからざる事實である。少なくとも此の國の思想界が單純な實證主義に滿足することが出來ず、寧ろ反撥的に理想主義に向かつて突進しつゝあることは最も明白な事實である。我國最近の思想界――殊にさまざまな理想主義的風潮は、畢竟ドイツの思想界を模倣したもので、彼の地の思想界が混沌を極めてゐるさまは、おのづから我思想界のそれにも酷似してゐると判斷する人も有る。成程斯やうな模倣的傾向も今日多少認められないではないが、然しながら私は今日の此の傾向をば單純に外國の模倣とばかりは解釋したくない。假令そこに濃厚な模倣的傾向が認められても、さまざまな意味で理想主義的思潮を追求せんとする要求が多少でも存在しないかぎり、たゞ偶然的に模倣といふ事が起つてくる筈はない。故にドイツのそれが實證主義から理想主

義への推移であるやうに、我國の思想界も、假令比較的狹い範圍内に於てにせよ、實證主義と對立して、人心が漸く理想主義的精神に就かんとする傾向を備へるに至つたと解釋されなければならない。私はこゝに深く考へなければならない問題があると信ずる。

第二

ウヰリアム・ジエームスが曾て經驗派と唯理派とを對照して、一方を硬派の人他方を軟派の人と呼んだは廣く知られた著名な事實である。ジエームスの解釋によれば、經驗派と唯理派との區別は、決して單純に學理上又は理論上の區別ではなく、實は一層深く人心の互に異なる二の傾向に基づくものに外ならないといふ。所謂テンダー、マインドの軟派の人は、概して理想主義的に又は唯理論的に傾く者であるに反して、所謂タフ、マインドの硬派の人は、概して感覺主義的に又は經驗主義的に傾く者であるといふ。理想主義的の外更に宗教的に樂天的に一元論的に且獨斷的に傾くが軟派の人の自然であるに對して、硬派の人は多く非宗教的に懷疑的に多元的に又は唯物主義的にさへも進まんとする傾向を備へてゐると。ジエームスの考察は、主として唯理主義と經驗主義とを對照して、孰れかといへば經驗主義の方面に眞理を見出だそうとした態度であつて、私がこゝで對照しようとする理想主義と實證主義との區別とは多少考察點を異にしてゐる。ジエームスの見地は著しく認識論的であり、私がこゝで取つてゐる見地は一層廣く哲學的であり人生觀的であり思想的である。斯やうな多少の區別が有るに拘らず、ジエームスの解釋はおのづから理想主義的思想と實證主義的思想の上にも應用される。即ち此の區別は、普通に想像されるやうに、單に學理上又は純理上の區別のみではなく、實は一層深く人心の自然の傾向に胚胎するもの——人心の互に異なる二の傾向に胚胎するものであることに注意されな

ければならない。人心の自然の傾向に胚胎するものであるから、實證的態度も理想的態度も共に活きた現實の生活そのものであつて、決して單純な空理や理論のみではない。同時に又此の二の態度は共に人心の互に異なる傾向に根ざしてゐるのであるから、二の態度の間に起こる軋轢爭鬪は容易に調和されるものでない。理想主義と實證主義との調和は極めて稀にしか實現されないもので、寧ろ兩主義の不調和は人間思想の永遠の實相であるかも知れない。私はこゝで兩主義爭鬪の蹟を觀察したり、又は兩主義の價値の優劣等を比較しようとは思はない。寧ろ此の二の態度は共に人心の自然的傾向に基づくものであるから、二ながら共に活きた現實の生活そのものであつて、決して一方のために他方が犧牲に供せらるべきでなく、出來得べくば二の傾向は互に相調和して一全體を成すべきであるといふが、特に私がこゝに主張せんとする要點である。然も最近十數年間我思想界は實證主義全盛の時代であつて、實證主義の長所と精神とは、假令完全でないまでも、或程度まで多數者によつて認められたに反して、理想主義の根本精神に至つては、今日尙世間に認められず、却つて屢々多數者から誤解されてゐる觀が有る。故に私はこゝで主として理想主義的思潮の特徴を敍述し、此の方面の思想が實證主義の思想と共に人類生活に取つて極めて深い意義を持つてゐる所以を明らかにしたい。勿論理想主義の特徴を明らかにすると言つても、私は哲學上でそれが普通に取扱はれてゐるやうな樣式から離れて、端的に實際生活上から觀た特徴を明らかにしようとするに過ぎない。

勿論一概に理想主義と云つても、それが具體的な活きた生活であるかぎり、それ〴〵種々な特徴を備へて、必しも一律一體に概括さるべきものでない。例へばフランスの理想主義とドイツの理想主義とは必しも同じでなく、又それ等は明らかにイギリスの理想主義とも違つてゐる。然かも各種の理想主義を總括して考へるとき、そして其等がいづれも必然的に人心の或普遍的傾向から發生するものであることを考へるとき、我々はそこにすべての理想主義に共通な根本特

質を發見せざるを得ない。斯かる根本特質が何であるかを明らかにするは勿論哲學の職務であるが、暫らく斯かる組織的研究から離れて、單に實際生活上から觀た特徴のみを順序もなく組織もなく斷片的に列擧すれば、私は先づ第一に其の主觀的特徴を數へざるを得ない。元來實證主義的思想が客觀的特徴を備へてゐるに對して、理想主義的思想が主觀的特徴を備へてゐることは、今日まで普通に指摘された事實であるが、理想主義と實證主義の區別は主として此の點に存し、又理想主義の根本特徴も大かた此の點に存するのであるから、私はこれまで普通に考へられたとは違つた別方面から此の根本特徴を一層特殊なさまに考へて見たいと思ふ。ジェームスは經驗主義的な實證主義的な傾向の人をば「硬いこゝろ」の人々と言つたが、私は別に「確實を尊ぶこゝろ」の人々、又は「精確な事實を尊ぶこゝろ」の人々と解釋したい。確實とか直接とか現實とかは實證主義的傾向の核心であつて、此の確實を尊ぶこゝろは即ち實證主義の本體であるとも云へる。斯やうな確實とか直接とか現實とかの反對は、例へば空想とか感情とか非現實とかいふもののたぐゐで、實證主義に取つては、非現實とか空想とかいふたぐひのものほど惡むべく斥けらるべきものはない。最も直接的な現實的な事實でなければ、實證主義的な人にはどうしても滿足することが出來ないのである。斯かる現實的事實を尊ぶこゝろは即ち近代の自然科學的傾向であつて、自然科學と實證主義とは到底不可分な最も親密な關係を持つてゐる。蓋し實證主義的な人々に取つては、客觀界即ち自然界の事實と眼前直接な實際生活とは最も確實にして且直接な事實であると感ぜられ、客觀界を精確に理解し掌握することゝ、實際生活を確實に完全に整理し組織することゝは、即ち人生に於ける最大事實、否人生そのものであるとさへも感ぜられるのである。同じ事を一層哲學的に言へば、實證主義的傾向の人々に取つては、眼前直接の實際生活が一切の根本であつて、此の實際生活を完全に整理し組織するためには、先づ自然界の客觀的事實を出來るだけ精確に綿密に理解しなければならないと考へられる。コムトによつて代表されたヨー

ロッパの實證主義は明らかに斯やうな道路を取つて進んだものと解釋される。實生活改善、自然科學、社會主義、經濟哲學――これ等はすべて一貫した概念であつて、一として孤立して存立し得るものは無い。廣く眼を開いて出來るだけ確實に精確に客觀的事實を摑まうとするが、どこまでも實證主義的な人々の態度である。ジェームスは主智的傾向は「軟いこゝろ」の常態であると說いたが、私は寧ろ反對に明確を尊ぶ理智的態度はどこまでも實證主義の本來であると見たい。感情や想像や空想やは、實證主義に取つては、單に手段としての價値を備へてゐるだけで、多くの場合に於ては其等は寧ろ「明確」を妨げる邪魔物であり妨害物であるやうに考へられる。そして一たび近代自然科學の洗禮を受けた現代人に取つては、此の事實の尊重といふ主智的態度は、殆ど渾身の肉と成り血と成りおほせて、現代人は此の意味に於ては總て主智的であり又實證主義的であるとも言へる。如何なる意味に於てか理性の批准を經ない思想や感情や信仰やは、すべて誤れる空想として排除されるのである。實證主義の透徹的精神はひとへに此の點に存する。

然るに理想主義的態度に至つては、全くこれと違つてゐる。實證主義の客觀的態度と比較して、理想主義が最も嚴格な意味に於ける主觀的態度であるは言ふまでもない。此の點に於てもジェームスは理想主義的傾向を「軟かなこゝろ」と說明したが、私は別に「內面的な深さを欲するこゝろ」と解釋したい。理想主義的傾向を簡單な言葉に概括することは固より困難であつて、「深さを欲するこゝろ」では甚しく物足りないやうに感ぜられるが、私はこれに特別な意味を含ませて、假に斯やうな言葉を用ひて理想主義的な人々の自然の傾向を考へて見たい。極めておほまかに言へば、實證主義の人々がエキステンシブであるに對して、理想主義の人々は主としてインテンシブであると言へる。理想主義の傾向に取つては、客觀的事象を精確に見分けることが興味の中心ではなく、それは寧ろ主觀的な內面的力の强さや深さや充實さやを經驗せんと欲するところに在る。最も顯著な意味に於て主觀的傾向乃至內面的傾向が先づ理想主義的態度の根柢

であることは到底爭はれない。內面的な深さを味はふ心とは、單に瞑想的にロマンチツクに思想や感情に耽るといふ意味でなく、寧ろ內面から主觀から外面や客觀に向かつてはたらく力を尊重する心を意味する。實證主義の態度の人が自然又は外界から主觀へ受ける外來的印象を尊重するに反して、理想主義の態度の人は內から外へ向かつてはたらく力――即一種セントリフューガルな力の現はれを尊重する傾向を持つてゐる。一層簡單に言へば、インテンシブな精神力の發揚發揮が理想主義の態度の人に自然な傾向で、內面性を備へた力の發現こそは人生に於て最も尊いものに感ぜられるのである。インテンシブ、クリエーション――これが理想主義の根柢であることは、哲學の方面に於ては何人にも知られた事實である。理想主義の態度の人が何故客觀的又は外部からの印象でなく、主として主觀又は內面からの力の現はれに重きを置くかは、到底理論的には說明すべからざる問題であつて、それは實に此のタイプの人に自然な而して固有な傾向であるとしか考へられない。內面性を缺いた事實とか現象とかは、理想主義の態度の人には、何等のジェニュインさも微妙さも備へない雜多蕪雜なものに感ぜられ、內面性を備へた力の現はれのみが、ひとへに微妙にジェニュインに尊く感ぜられるのである。故に現實主義のタイプの人が主として客觀的事實を重んずるに對して、理想主義のタイプの人は主として充實した主觀の力と深さとを愛する自然の傾向を備へてゐるのである。理想主義的傾向の人は、實證主義的傾向の人と全く方向を異にしてゐることに注意されなければならぬ。內面的な深さや微妙さを欲するとは、充實した內面生活の奧義を味はんとするこゝろで、精神生活乃至人格生活の根柢に於て體驗される深い興味にあこがれる傾向に外ならない。能ふかぎり深く、能ふかぎり充實した、そして能ふかぎり微妙な內面生活の詩致を味はんとする傾向が、すべての理想主義的な人々に共通な根本精神で、此等の人々は斯やうな充實した內面生活に於てのみ最も高い人生の奧義を見出だすのである。彼等は必しも明確な智識や確實な智見を求めないわけではないが、明確な智識以上に彼等は寧

ろ深い情熱的な意力や宗教的な無限味を求めんとするのである。情熱的な意力や宗教的な無限味やは、或は屢々明確な智見と衝突し、或は其等の智見以上に存立するものであるから、理想主義者に取つては、明確な智見よりも寧ろ深奥な生活が遙に高い價値を持つものと感ぜられる。普通の智識を以て律すべからざる奥妙深秘な生活が人生の極意と感ぜられるから、主智主義よりは寧ろ直覺主義乃至神秘主義が理想的態度の極意であると解釋される。主觀主義は大抵ミスチシズムに到達するもので、ミスチシズムは即ち理想主義の常道であるとも觀察される。即ち實證主義の世界は、それが明瞭な智識に照らされてゐるだけ、常に明るく透明であるに反して、理想主義の世界は、深秘奥妙であるだけ、それだけ無限味を帶びてミスチツクな特徴を持つてゐる。ノフアーリスが使つたマジツクといふ言葉は、多少極端ではあるが、巧に此の神秘界の特徴を言ひ現はしてゐる。

第三

理想主義的態度と實證主義的態度との對照は、單に主觀主義と客觀主義——人格主義と實際主義との對照のみに留まらない。此の根本的對照の外に、更に他の二三重要な相違又は對照が存する。私は試に尚一二重要な對照をこゝに列擧して見たい。

古來純粹な理想主義的思想が發達した事蹟に就いて觀察すると、そこには必ず次のやうな特殊な事實が有つた。即ち哲學と藝術と宗教とがそれ〲フレツシな活氣に滿ちて、他の時代（非理想主義の時代）に於けるよりはそれ〲特殊な發達を遂げ、然かも此等の三者が各々孤立した狀態に於て存せず、寧ろ互に相聯關して一全體を成したといふが特に目だつた現象であつた。例へば近代ヨーロツパのアイデアリズム全盛時代の如きがそれで、此の時代に於ては、藝術と哲學

と宗教とは各々異常な活氣を呈し、然かも三者殆ど同一體であるが如き觀を呈した。アイデアリズムは同時に藝術でもあり哲學でもあり又宗教でもあつたのである。理想主義的傾向に於ては、何故藝術哲學並びに宗教が異常な活氣を呈するに至るか、細かに其の順序を示すことは困難であるが 先づ實證主義的態度から考察すれば 多少此の間の事情を明かにすることが出來る。實證主義的態度の人々に取つて、そも／＼藝術や宗教が如何なる意味乃至價値を持つてゐるか、頗る不明瞭であるが、少くなくとも實際生活を眼目とする人々に取つて、藝術と宗教とは、それみづからに絶對の價値を備へたものではなく、何等かの意味に於て實際生活に貢獻する程度に於てのみ相等な價値を備へたものであるは明白である。事實極端に實際的な人に取つては、藝術とか宗教とかは如何なる意味を備へてゐるものであるか、甚しく不明瞭であり不得要領であるを免れない。實際生活から見れば、藝術は畢竟贅澤品であつて、それみづからに絶對の價値を備へてゐるものとは如何にしても考へられない。況や宗教に至つては、單に實生活を助成するかぎりに於てのみ必要なもので、其の他の點から觀れば何等の價値も無いものと考へられる。されば多數の實證主義者に取つては、宗教は單に未開時代の遺物であつて、科學的知識が進歩した今日に於いては、最早無用の長物たるのみならず、却つて迷信や無智やを傳播する有害な媒介者に外ならない。若し宗教に相等な價値が有るとすれば、そは專ら幼稚な無智な社會にのみ取つてのことで、科學的に進歩したものに取つては遂に何等の價値も無いと考へられる。これが普通の實證主義者の態度である。

然るに理想主義者の態度に至つては、これと全く違つてゐる。藝術や哲學や宗教やが何故彼等に取つて尊い價値を備へたものであるかは、おほよそ確實に想像することが出來る。彼等に取つての第一義的生活は、どこまでもインテンシブな内面生活であるから、さやうな内面生活こそは彼等に取つてそれみづからに價値を備へた絶對の生活に外ならない。

然るに藝術とか哲學とかは、斯やうな内面生活に對して如何なる關係を持つてゐるかといふと、此等は直に此の内面生活を客觀的に現はしたもので、一層端的に言へば直に尊い内面生活そのものであるとも感ぜられる。就中藝術は或は深く或は高く或は强く感ぜられた内面生活そのものである。隨つて藝術は何等か他のもの丶手段となり、若くは他のために手段としての價値を備へてゐるものでなく、それみづから絕對の價値を備へてゐる尊い内面生活に外ならない。故に藝術は純粹の理想主義が發達した時代に於てのみ眞の純な發達を遂げ、然らざる場合に於ては、到底眞の發達を遂げることが出來ない。藝術の眞の尊重はひとへに理想主義の事であるとも斷言される。更にまた哲學に關してもほゞ同じことが言へる。實證主義的態度に取つても、哲學は實生活組織の要具として高い價値を備へてゐるに相違ないが、然かも哲學が哲學として其のまゝ高く尊い價値あるものと尊崇されるは、主として理想主義的態度によつてゞあると言はなければならぬ　何となれば、哲學は他の自然科學と異なり、藝術と同じく尊い内面生活を客觀化してたものであるから、内面生活が絕對の價値を持つてゐると同じく、哲學もまたそれみづからに絕對的價値を持つてゐるものと考へられる。故に藝術と同じく哲學も主として純な理想主義時代に於て最も深く尊重され且また最も眞實な發達を遂げることが出來るのである。

若しそれ理想主義と宗教との關係に至つては極めて密接であつて、いづれか一方から引離しては到底他方は考へられないほどである。殊に宗教に關しては、理想主義の態度と實證主義の態度と彼れ此れ全く違つてゐる。多數の實證主義者が宗教に對して冷淡であるほどそれほど多數の理想主義者に取つては、宗教は最も親密なものであり且また最も直接な生活である。

理想主義的精神は必ず宗教によつてのみ眞の發達を遂げるのである。故に宗教は單に野蠻時代の遺物のみといふは、

主として極端な實證主義者の主張であつて、理想主義者から觀れば、そはどこまでも永遠に發達すべき活きた生命に外ならない。理想主義的態度と宗教とが何故それほどまで密接であるかは玆で論説さるべきかぎりでないが、理想主義が尊重する内面生活を徹底的にすゝめて行けば、それは必ず宗教的境地に到達すべきは明白である。蓋し極めて簡潔に言へば、宗教とは眞に内面生活を内面生活たらしめる絶對の根據に外ならないから、宗教なしには眞の内面生活は不可能なのである。一層精しく言へば、道德生活を眞に道德生活たらしめる根據、藝術生活を眞に藝術生活たらしめる根據、哲學生活を眞に哲學生活たらしめる根據は即ち宗教に外ならないから、道德藝術哲學等の内面的生活を眞實に完成するためには、人間は必ず宗教的境地に進まなければならない。宗教的境地にまで進まずして道德生活や藝術生活やを完成せんとするは、肝腎の根據根本を固めずして徒に枝葉の末に走ることに外ならない。随つてまた有らゆる意味に於て宗教を否定することは、結局徹底的な内面生活を否定する所以で、内面生活の完成を否定せずしては、宗教のみを否定することは出來ないのであると。これが今日尚一般の理想主義者が維持してゐる思想で、例へばヨーロツパあたりでも、表面は傳統的宗教に對する熱度が低下したに拘らず、尚理想主義的傾向の人々に取つては、新らしい宗教に對する渴望がます〳〵深まりつゝある所以である。

斯やうに理想主義に取つては、哲學藝術及び道德宗教は、それみづからに絶對の價値を備へた活ける人間生活であつて、三者はいづれも尊い内面本位の生活であると觀られる。故に此等の三者は、實證主義的精神よりは、寧ろ理想主義的精神に一層直接なものであることが知れる。随つてまた永遠の文化の發達を目標とする所謂文化主義は理想主義の主張であつて、實證主義から觀れば、そは可なりに空想的な誇張的な主張とも考へられるであらう。蓋し文化主義は哲學

藝術の發達又は宗教の發達そのものが、理想主義に取つては無上に尊い價値を備へたものであると考へられる。故に理想主義は即ち文化主義に外ならないとも解釋される。

さて私は見地を換へて、更に第三の對照として、理想主義が實證主義から異なる別種の特徵をこゝに記して置きたい。こゝに第三の特徵として數へられるものは、實は哲學上の難問題であつて、論旨が餘り抽象的になり專門的に傾くからこゝでは到底其の詳細をつくしがたい。然かも理想主義と實證主義とは、見かたによつては主として此の點から區別されるのであるから、詳細な哲學的論述に渉ることは避けても、少なくとも此の特徵の要點だけはこゝに記されなければならない。我々はこれによつて、いよ／＼明らかに實證主義的精神と理想主義的精神とを區別することが出來るのである。

斯やうな根本區別とは何かと言へば、實證主義は嚴格に相對主義の立脚地に立ち、これに反して理想主義は何等かの意味に於て絕對主義の立脚地に立つといふこと是れである。私はこゝで根本區別に關する哲學上の論說にまで進みたくない。極めておほまかに言ふと、例へば實證主義に取つては決して絕對の眞理とか知識とか事物の標準尺度といふやうなものは無い。萬世不易の絕對的な道德的眞理又は標準とか、又は永久不變の絕對的認識といふ如きは、實證主義に取つては寧ろ奇怪千萬な空想であつて、人間の立脚地からは斯やうな絕對的眞理は到底到達すべからざる空想に過ぎないと觀られる。蓋し人間的知識は盡く經驗からの產物であるから、人間のすべての認識も眞理も物の標準も、盡く蓋然的なプロバビリチーを備へたゞけのものであつて、決して永久的又は不變的又は絕對的であることが出來ない。すべて絕對的といふことは、人間に取つては到底到達すべからざる空想であつて、此の空想の上に立てられた知識はまた同じくすべてモンストラスな空想たるを免れないと。これが實證主義の精神である。

然るに理想主義の立脚地を觀ると、其の根柢には必ず何等かの意味に於ける絶對主義が含まれてゐる。人間の智識や物の尺度やは大部分相對的であるとしても、其の根柢には必ず何等かの意味に於ける絶對的確信が含まれてゐる。絶對的信仰は何であるかは、理想派の哲學に於てもそれ〴〵違つた解釋が取られてゐる。例へばカントみづからも、「事物を認識するとはアプリオリにそれを認識することである」と斷じて、先づ論理的認識にも特殊な絶對性を許し、更に道德生活に於ては、最も顯著に絶對的な「無上命令」を認めたのである。故にカントに取つては、絶對的な認識でなければ眞の認識ではなく、認識といへば、既に其の根柢には絶對性が含まれるのである。新カント派のヰンデルバンドやリツカートは、此のカント精神を復活して、絶對主義の根柢に立つにあらざれば、すべての認識生活も結局不可能不成立に終らざるを得ないと言つてゐる。所謂普遍的妥當性を備へたゾルレンやノルムや規範やは、此の派の人々が認めた絶對性そのものに外ならない。此等理想派の哲學論は暫く別問題として、人間生活に於ては、其の根柢に於て、何等かの意味の絶對性的尺度が確信されるにあらざれば、すべて事物の測定は不可能であるといふ主張は、十分深く考察されなければならない問題である。或意味から言へば、我々は今日まで餘り多く相對主義に慣れ過ぎてゐる。純粹相對主義の立脚地に立つて、果して人間の生活が可能であるかは、今日までは餘り深く考へられなかつた問題である。「人智は純粹に相對的たるべし」といふ實證主義の主張そのものが、既に一種の絶對的斷案の本質を含んでゐるものでないか。若し此の斷案が絶對的でないとすれば、人智は相對的であるといふことも亦絶對的には不確實であるを免れない。「絶對的標準なしには、眞理のあらゆる觀測は不可能である」といふ聖アウグスチヌス以來の宗教的確信は、同時に有らゆる理想主義的思想の根本的確信であつたと批判される。故に理想主義の立脚地から觀れば、實證主義の相對主義といふことは甚しく不安なあやふやなものに感ぜられる。何となれば、相對主義といふことは、若しそれが其の根柢に如何なる意味に

於ても絶對性を含まないとすれば、名目こそは美しく確實らしいが、結局は懷疑主義に陷るものではあるまいか。彼の眞理も此の標準もことごとく相對的な比較的なものであるとすれば、世に確實な眞理や標準と名づけらるべきものは一として存在する理由なく、彼れも此れもことごとく其の時其の場所のものといふことに終つてしまふではないか。絕對的な尺度が無いのであるから、絕對的確實に眞理とか標準とかいふものが有り得る筈が無い。すなはち斯くの如きは、名目こそ相對主義であるが、結局は懷疑主義の立脚地に立つもので、相對主義はすなはち懷疑主義であるといふ結論を免れない。論より證據我々は此の事實をば現に活きた歷史の上に見てゐるではないか。十九世紀末はヨーロッパに於ては一種の懷疑時代であつた。世紀末の此の懷疑的傾向は、勿論種々複雜な他の原因に基づいたことも疑はれないが、此の時代は恰も實證主義全盛の時代であつたことを忘れてはならない。他の目に見える陽はな原因はさほどにも思はれないが、相對主義から結果する一種微妙な懷疑的傾向は、人心を其の根柢から萎靡し腐蝕させるものではあるまいか。殷鑑遠からず、現に今日純粹相對主義の立脚地に立つてゐる者は、いつまでたつてもふら／＼した懷疑的傾向に苦まなければならないではないか。實證主義の立脚地に立つかぎり、我々はいつまでたつても懷疑的傾向から遁れることは出來ないのであると。これが理想主義の主張であり、又其の根本精神の一である。

第四

私は前段に於て、主として理想主義的精神の特徴に就いて、餘り多くを語つたかも知れない。或は可なり面倒な哲學上の問題にさへも涉つて、專門的に過ぎた事を餘り多く語つたかも知れない。私はこゝで妄に實證主義的傾向に反對して、たゞひとへに理想主義的精神にのみ就くべしと主張する者でない。實證主義に關しても、私は十分深い同情と尊敬

とを持つてゐる。たゞ然しながら今日までの我思想界の狀況から言へば、主として實證主義的空氣だけが濃密であつて、理想主義的傾向は殆ど全く閑却された觀が有つた。實證主義的態度が唯一の哲學的態度であつて、理想主義的態度は最早過去の遺物のやうにさへも考へられた。現代人の思想は餘りに實證主義化され科學化され實際化されて、殆ど全く理想主義を無視し放擲し過ぎた觀が甚しかつた。然しながら一層高い立脚地から觀れば、實證主義には實證主義の本領が有り、理想主義には理想主義の本領が備はつてゐることは疑はれない。それにも拘らず最近十數年間、主として實證主義の本領だけが認められて、理想主義の本領に至つては殆ど全く沒却されたかの觀が有つた。故に私が主として理想主義の精神に就いて語ることは、實證主義に對抗してといふよりは、寧ろ今日まで甚しく閑却された理想主義の本領を明らかにせんが爲めに外ならない。

若し理想主義的傾向と實證主義的傾向とは、人心の互に異なる二の自然的傾向に胚胎するものであるとすれば、隨つてまた理想主義には理想主義の本領が有り、實證主義には實證主義の本領が有るとすれば、我々は更に一歩進んで此の二大傾向のそれ〴〵の長短を明らかにし、更に出來得べくは此の二の傾向の大體の比較をも試みなければならない。換言すれば、實證主義と理想主義とをば、彼れ此れ互に引離して別々に其特徴を考察するだけに留めず、更に進んで一層高い見地から統一的に此の二の傾向を觀察しなければならない。即ち私は前段に於て主として分析的な立場から此の二大傾向を觀察したから、以下專ら總合的な立場から主として兩者の長短を明らかにし且出來るだけの範圍に於て兩者の簡單な比較を試みたいと思ふ。

實證主義は實證主義としての本領を備へ、そして理想主義もまた理想主義としての本領を備へてゐることは、前段槪論した兩主義の對照によつてほゞ明白である。主觀本位的であり、文化主義的であり、且絕對主義的な立脚地に立つて

ゐる理想主義は、其の種類と形式とに於ては如何ほど多様であつても、これを總括して言へば。要するに内面生活本位であつて、其の思想的な藝術的な哲學的な又は内面道徳的な宗教的な文化生活は、どこまでも理想主義の眼目である。道徳生活も理想主義の重要な又は根本的な目的であつて、道徳生活の主張なしに理想主義は考へがたい。前段に於て主として哲學藝術宗教を擧げて道徳を數へなかつたは、道徳が理想主義に取つての最高價値であることは勿論であるからである。たゞ理想主義はどこまでも内面生活本位であるから、内面性を無視して、單に外面の結果のみを考へる實際主義とは、おのづから別種の道徳觀を持つてゐる。理想主義の道徳的態度や道徳觀は、實際主義又は實行主義の態度や道徳觀とは甚しく色彩を異にし精神を異にしてゐる。純粋の實行主義に取つては、客觀的な結果が道徳の眼目と考へられるに反して、純粋の理想主義に取つては、客觀的な結果や外的影響よりも、内面生活に於ける動機の純不純や意志の力や又それ等が他の主觀生活に及ぼす影響等が道徳の眼目と考へられる。故に實行的な道徳生活に於ても、理想主義の本位とするところは飽までも充實された内面生活が本位であつて、内面本位主義はどこまでも理想主義の本領であると判斷される。

斯やうな主觀本位の内面主義に比較すれば、實證主義の本領は主として實行主義又は實際主義であることが明白である。尤も實證主義とか經驗主義とかいふ言葉は、主として認識論方面から用ひられた言葉であるから、經驗論や實證論は畢竟如何なる目的に向つて進められるかといへば、それは窮極實際生活の整理と完成とを眼目とする實際主義又は實行主義であることは疑はれない。故に實證主義又は實行主義は、其の本來の精神に於て理想主義とは甚しくかけ離れてゐる。最近の思想界に於て最も鮮明に此の實證主義的精神を發揮したものは例のプラグマチズムであつて、此のプラグマチズムは自己の立場を明確に意識的に理想主義に對立させてゐる。殊にジエームスやデユヰーによつて發達されたプラ

グマチズムは、最も鮮明に實行本位を宣言して、極度に主觀的な理想主義に反對してゐる。實行本位の立脚地から觀れば、内面生活を本位として立てることは、何となく無意義に感ぜられて、客觀的結果のみが主として實生活に直接な意味を持つてゐるやうに考へられる。

斯やうに理想主義と實行主義との本領を區別すれば、我々はそこから自然に此の二の主義又は傾向の長短をも明らかにすることが出來る。即ち理想主義の長所は深さを欲する内面本位主義に存するが、餘りに内面本位の一方に偏する結果、そは動もすれば實行や外的結果やを無視せんとする短所を持つてゐる。一層精確に言へば、内面からの生活を主張せんとする人は、自然の傾向として實行や外的行爲を疎んぜんとする短所に伴はれてゐる。内を重んずるところは、同時に廣く外をも重ずることが出來ないのである。丁度反對に實行本位の實證主義は、主として容觀的に外に向かつて活動する長所を備へてゐるだけ それだけ内に向かつて主觀の活動に重きを置くことが出來ないといふ短所を持つてゐる。斯かる長所と短所とは、個人の場合に於ても明白であるが、更に社會とか民族とかの場合に於ても明確に認められる。例へばヨーロッパの中でも、ドイツとかロシヤとかいふ方面に於ては、いづれかといへば理想主義的傾向が勝つて、實際方面は甚しく見劣りがする觀がある。過日暗殺されたドイツのラーテナウ氏の如きは、公然ドイツ民族は藝術や宗教や道德の民族であつて、決して實業や政治の民でない、殊に政治はフランス人やイギリス人の長所であつて、ドイツ人が最も多く短所とするところであると言つてゐる。イギリスには實際主義的と理想主義的との二の傾向が備はつてゐるから、一概に批評することは困難であるが、大體から言へば、實際主義が勝つて理想主義の脈が微弱であつたことも爭はれない。單に民族の上ばかりでなく、更に時代の上にも同じやうな長短が見られる。例へば歐洲十八世紀の啓蒙思想時代は大體實際主義的であつて、哲學や藝術の脈はさして活潑でなく、これに反して十八世紀末から始まつた理想主義

的時代は必しも特殊な意味に於て實際的とは言はれなかつたのである。

斯やうに理想主義的傾向と實證主義的（若くは實際主義的）傾向とは、各々本領を異にし且それ〳〵長短を異にする全然別種な態度であるから、本來を言へば、二の態度が調和して互に長所短所を補ひあへば、そこに文化の完全な發達が見られるのであるが、實際に於ては兩傾向は決して然かく容易に一致せず、寧ろ互に衝突して一方が他方を征服しなければ已まないやうな勢を見せてゐる。然かも此の衝突又は軋轢が、普通の場合に於ては、其の本質が明らかにされないため、本來何を意味するか、甚しく不明瞭であることを免れない。思想界がこれがために混亂に陥つたためしは古來決して少なくない。現に今日の我思想壇に於ても、此の種類の衝突や軋轢は斷へず隨處に行はれてゐる。理想主義的態度の人が實際主義的態度の人を輕蔑し疎外することは古來の慣例であるが、こゝでは私は主として實證的態度の人が理想的態度の人に加へた非難攻撃を考へて見たい。蓋し現代人は或意味ではこと〳〵く實證的態度の人であるから、世間は知らず識らず今日まで理想主義の態度を非難し來たつたのである。即ち今日まで普通に主張されたところによれば、人間に取つては實行が第一義である、實行に伴はれない思想は空想である、如何ばかり微妙な思想も、如何ばかり深秘な感情も、それが實行に伴はれないかぎりは、すべて空想に過ぎないと。若し此の主張が單に實行を強めるだけの意味ならば至當であらうが、すべての思想生活をも單に實行のための手段と解する意味ならば、それは到底不當な主張であると言はなければならない。先づ普通に用ひられる實行といふ言葉からが甚しく曖昧である。廣く實行といへば、單に外的實行のみならず、更に内面生活に於けるアクションまでも含まなければならない。内的動作が最初であつて、外的動作は其の自然の結果に過ぎない。故にまだ外に現はれない思想生活さへも實は既に立派な實行であつて、ひとり外的動作のみを實行と呼ぶべき理由は無い。思想そのものは、本來外的動作に現はれるが普通の順序であるから、其の意味に

於ては、思想生活は直に實行であるとも言へる。何故內面的動作は手段であつて、外面的動作のみが目的と考へらるべきであらうか。何故外的結果のみが目的と考へられて、內的動作は單に從屬的手段としか考へられねばならぬであらうか。それは要するに實際主義的態度を以て總てを獨占せんとした主張に外ならない。

斯かる偏頗な主張は、單に普通のジャーナリズムの中に見出だされるのみならず、精確を期する哲學の中にさへも屢屢發見される。多數の實證主義者に取つては、實行とか結果とかゞ主要目的であるから、例へば藝術とか宗敎とか學術とかいふたぐひのものは、それみづからに價値を備へてゐるといふよりも、主として實行とか結果とかのためにそれ〴〵の價値を備へてゐるといふ風に考へられる。現に知識とか眞理とか哲學とかは、プラグマチズムに取つては實行のためのインストリユメントであり、又インストリユメントとしてのみそれは善であり價値を備へてゐるのであるから。此の根據をすゝめて行けば、藝術でも宗敎でもこと〴〵く實用のための手段であり方便でなければならない。理想主義が主張する文化の多數は、實用本位主義からは大抵手段であり方便であらねばならない。卽ち結果や實行だけが絕對の目的であつて、主觀性を帶びた生活はたゞ從屬的な第二義的な價値のみを持つてゐるといふやうに考へられる。果たしてこれが公平な觀察と言へるであらうか。

斯やうに考へてくると、理想主義が主張する內面本位の生活――嚴格な意味の文化生活は、實行主義が主張する外面本位の生活と並んで、どこまでも獨自獨得の絕對的價値を備へたもので、決して外的生活のための手段のみとは考へられない。一層精確に言へば、外的な實行生活――卽ち實際生活も、廣い意味では文化體系の中に含まれるものであるが、假にこれを獨得の本領を備へてゐるものとすれば、他の文化生活――卽ち或は藝術的な或は道德的な或は哲學的な或は

が他方のための手段であり方便であるといふことは、如何にしても無寛容な偏狹な主張であるを免れない。內面からの生活を主張する理想主義は、現實的結果を眼目とする實證主義と並んで、十分其の獨得の本領が認められなければならない。

私は此の點に於て、特に經濟生活と他の文化生活との關係を考へて置きたい。元來私は最も廣い意味に於て文化體系の基礎に特に經濟生活を置くべきだといふ考を持つてゐる。然かも便宜上經濟生活を他の文化生活に對立して考へ、更に此の經濟生活をば實際生活の中心と考へることが出來るとすれば、此の意味に於ける經濟生活と他の文化生活との關係は、これまたそれぞれ獨自獨立の本領と價値とを持つてゐるものであつて、決して一方が他方を方便視し、從屬視すべきでないことは明白である。此の點に於ても普通には經濟生活だけが目的であつて、他の文化生活は單に經濟生活の餘剩か又は附屬であるやうに考へられてゐた。經濟問題やそれに聯關した社會問題を取扱つてゐる人々から見れば、哲學や藝術や宗教等に關係してゐる人々は、何となく出世間的な又は眞實の人間生活からは甚しく遠ざかつた態度を取つてゐるやうに考へられる。經濟價値だけに絶對性が與へられて、他の文化生活には相對的價値しか與へられない。これが果たして公平正當な判斷であらうか。

第五

私は簡單に此の論文の結論を記して置きたい。我國の今日までの思想界はひとり實證主義的傾向又は實際主義的傾向だけが勝つてゐて、理想主義的傾向又は文化主義的傾向は餘りに微弱であつた。實際主義が全思想界を支配して、眞の

文化主義は殆ど全く無勢力であつた。たゞし斯く言ふ意味は、我國に於ては實際主義が美事に發達し進歩したといふわけではない。僅に實際主義の脈が我思想界に存したといふ意味に過ぎない。然しながら、一層高く一層公平な立脚地から批評すれば、單に實際生活のみならず、一層複雜微妙な文化生活は、それみづからに於て絕對の價値を備へてゐるものであるから、明確に此の方面の絕對性が認められて、其の意味に於ける文化生活の本領が發揮されることは、今日の我思想界に於ては最も必要且緊急なことではあるまいか。眞の文化生活の絕對性が認められることは、日本文化の進歩のために最も緊急なことではあるまいか。道德藝術哲學宗教等の高い文化生活の本領が發揮されないで、他の實際方面のみの發達によつて、廣い文化の進歩を圖らうとするは、餘りに無意味に餘りに近眼的に且餘りに幼稚な考へかたではなからうか。今や我思想界は或意味に於ては、一種デカダン風な混濁した狀態に沈みつゝあるやうに感ぜられる。文化の根本精神に恐るべき缺陥が存することは、今日の狀態を來たした上に重大な關係を持つてゐると想像される。

或は私が用ひた理想主義といふ言葉には語弊が有るかも知れない。正しい意味の文化主義が一層適切な言葉であるかも知れない。即ち私は單純な實利主義に對して純粹な文化主義を主張する所以である。

社會改革者としてのロバート・オーウエン

林 癸未夫

一 工業家としての前半生

大資本家が一轉して社會主義者となることは、雀が海中に入つて蛤となるほどに不思議なことではない。少くとも吾等は自然界に實在したる一個の例證として、ロバート・オーウエンを見出すことができる。

あらゆる新文化の開拓者が、殊に近世に於ける社會改革運動の先驅者等が、殆ど悉く思想上の迫害と生活上の窮乏とに惱まされざるはなかつた中に、獨りロバート・オーウエンのみは始終世上の聲譽の的となり、多忙なる併し多幸なる私生活を樂みつゝ、その長い一生を過すことができた。これは必ずしも彼がブルジョア階級の出身であるが故ではなく、寧ろ主として彼の高邁なる人格と快美なる品性とに基くものが多かつたと想像せられる。

近世の社會改革運動史上に於けるオーウエンの地位は、一般思想史上に於けるプラトーの地位に頗似してゐる。何となれば、世界文化の主潮を指導したるあらゆる思想の淵源がプラトに於て綜合されてゐるやうに、過去一世紀間に於て社會生活の改善を目的としたる諸運動は、大抵その最初の發案者をオーウエンに歸納することができるからである。

オーウエンは英國の産業革命が善惡二様の意味に於て其爛熟期に達したる時代に、工業家として、しかも産業革命の中樞ともいふべき紡績工場の支配人として其公生涯を初めた。彼は一使用人たる地位に於て、技術的にも經濟的にも忽ち工場管理者としての優れたる手腕を發揮した。彼は年歯僅二十一二歳、紡績界に入りて未だ兩三年を經たるのみなりしに拘らず、包裝の上に彼の名を記したる綿絲が、他の同等品よりも一割の高價を以て賣られたといふ一事だけでも、彼が天才的實務家であつたことを知ることができる。併し彼が工業家としての眞の事業は、彼がマンチエスターを去つてグラスゴーに近きニューラナ

ルクに獨立した紡績工場を經營するに至つてから初まつたものである。爾來二十有餘年間、彼は英國に於ける最大の紡績工場主の一人として、其機械的設備に於ても、其作業方法に於ても、其製品に於ても、常に第一流の聲價を落さなかつた。事業上の收益は、彼に獨特の支出が多かつたゝめに、屢々他の共同出資者の不滿を買つた程に他の同業者よりは少額であつたやうに思はれるけれども、彼が單に一個の企業家としても大なる成功者であつたことは固より疑ふ餘地のない所であつた。

併しながらニューラナルクの名が彼の名と共に世界に喧傳されるに至つたのは、企業家としての彼の成功によるのではなくして、溫情主義的傭主としての彼の名聲によつたものであることは勿論である。當時彼の實施したる職工優遇の諸方法を今日の工業界に求めるならば、格別珍とするに足らない。それは現今諸産業國に於ける一流の工場に於て、幾多の實例を擧げることのできる職工の娯樂、慰安、敎育等の諸施設に外ならないからである。併し一度吾等が過去に歸つて、彼の時代に於ける英國の工業經營法なるものが如何なる狀態に在つたか、殊に一般の紡績工場内に於ける職工が如何なる待遇を受けつゝあつたかを背景として、オーウエンの工場を觀察するならば、眞にそれは大砂漠の中の唯一のオーシスであつたことが分る。凡そ世界の工業史上に於て、英國の産業革命時代に於ける紡績工場勞働ほどの非人道的事實は他に決して類例を求められない。若し假に求め得るとするならば、それは最も奴隷の酷使された古羅馬の或時代か、さなくば現代の日本に於ける所謂「地獄部屋」だけであらうと思はれる。私は今それを評說するの暇がない。唯當時大多數の紡績工場に於ては、五歳乃至十歳のいたいけなる兒童等が、殆ど奴隷賣買と同樣なる形式によつて、牢獄の如く設備されたる工場内に伴れ込まれ、飢渴と鞭撻との苛責の下に一日十四五時間の勞働に服せしめられ、頻々として病死者と發狂者と自殺者とを出したといふ悲慘な事實だけ擧げても、それで全班を察することができやうと思ふ。其富强を以て長く全世界を壓したる英國の隆昌は、かくの如き無殘なる稚き生命の蹂躙によつて贏ち得られたるものであることを想ふ時に、誰か良心の戰慄を禁じ得る者があらうか。一方に於ては勞働者を保護すべき一片の法令だもなく、他方に於ては勞働者の團結が嚴禁されてゐた當時に於て、しかも世界の商權を掌握して、國内の富は驚くべき迅速を以て蓄積せられ、工業の發達が國利民福の隨一として謳歌されてゐた當時に於て、社會主義者の所謂資本家の勞働搾取制度が無制限に英國の産業界を橫行してゐたことは毫も怪むに足らない。要するに當時に於ける工場經營は、勞働者

の心身の健康には何等顧慮する所なく、最少の報酬を以て最大の時間彼等を驅使することを以て、其要訣とせられてゐたのである。稀に彼等に憐愍の情を懷く傭主があつても、報酬を增し或は時間を減ずることによつて生產費を高め、市場の競爭に敗れることを虞れたがゆゑに、敢て之を實行するだけの勇氣を誰も有たなかつたのである。

かゝる時代に於てロバート・オーウェン彼果して何者ぞ、未だ一般に其名の知られざる年少後進の一工場主として、破天荒なる職工優遇の方法を擅行し、大人職工の勞働時間を十二時間（内食事休憩時間一時半を含む）に、少年のそれを六時間に制限し、十歲未滿及初等教育を卒へざる兒童の就業を禁止し、賃金を破格に增給し、衛生的なる住宅を營み、見事なる食堂休憩室を設け、音樂舞踏場を建てて、職工の慰安娛樂に供し、學校圖書館を經營して教化訓育を志し、勞働者及其家族の精神的及物質的生活に驚くべき改善の實績を示しつゝ、しかも能く工場の生產能率を維持し、收益を擧げ規模を擴張し、マンチエスターに於ける第一流の紡績工場に比して毫も遜色のなき經營振を發揮したことは、寔に當時に於て天下の驚異に値する程の出來事であつたのである。

かくの如くにしてスコットランドに偏在するニューラナアクの一村は英國に於て最も著名なる地名の一つとなつた。苟くも杖を北國に牽く旅客に取つては、オーウェンの工場を訪ふことは、エディンバラの古城を視るのと同じく、プログラムの重要な一項目とせられた。學者も、僧侶も、政治家も、貴婦人もニューラナルクを知らざるを以て恥とした。外國より渡來したる王侯大官も必ず茲を參觀することを忘れなかつた。かくて毎年此工場を讃美するために來る訪問客は二千名を下らなかつたと傳へられて居る。

オーウェン自らも亦文書に講演に、自己の實驗を吹聽して職工優遇の必ずしも經濟的に不利ならざるを力說し、他工場主の之に倣はんことを熱心に勸誘した。而して彼の意見は當時徐々に擡頭しつゝあつた工場法制定運動に多大の勢援を與へ、中央の政治家や、議會の調査委員會も、喜んで彼の說を聽かうとするに至つた。かくて彼の名聲は最早彼をして一工場主たる地位に安住することを許さずして、次第に彼は其理想を國家及社會に行はんとするの志を立てるやうになつた。

二　社會改革者としての後半生

ロバート・オーウェンが專心社會改革運動に從事すべく其光榮ある工業家としての前半生に別を告げた時には、既に年齒五

十に達してゐた。爾來三十有餘年間の彼の後半生は、終始一日だも怠らざる社會改革の計畫と宣傳と實行とに捧げられた。それにも拘らず彼の前半生が成功と名聲を以て輝いてゐたに引きかへ、彼の後半生は、たとひ名聲に於て失ふ所はなかつたにしても、殆ど總てが失敗の記錄の連續であつた。その理由は單純である。工業家としての彼は彼一個の力に於て出來得べき事を行つたに反して、社會改革者としての彼は多數の力に於ても出來得べからざる事を行はんとしたからである。言ひかへれば、彼は總ての被傭者を自己の意志によつて支配することのできる工場內の君主たるべき地位に在つたがゆゑに前には成功し、總ての群衆が正義と友愛によつて行動することを要する自治社會の一員たるべき地位に在つたがゆゑに後には失敗したものと私は信ずる。

社會改革運動者としての彼の事業は頗る多方面に亙つてゐる。彼は共產社會の建設を試みた。彼は消費組合の創設に努力した。彼は全國的勞働組合の組織に盡瘁した。彼は貨幣賣買制度の廢止を目的とする勞働交換所を經營した。彼は自由教育制度を皷吹した。彼は共產主義者でもあり、國家社會主義者でもあり、サンジカリストでもあり、ギルド社會主義者でもあつた。勿論是等の諸主義は今日に於ての如く學理的體系を供へて同時に彼の腦中に混在してゐたのではないけれども、（又それは不可能でもある）彼の後半生に於てつぎ〳〵に發展したる共思想及計畫の中には、確に是等の諸主義の根底をなす所の諸思想の萠芽と認めらるべきものが在つたのである。

彼の所說は常に直覺的であり、獨斷的であり、從つて非科學的であつたがゆゑに、矛盾は彼に於て免かれ難い所であつた。從つて彼は今日の如き社會主義の分派に於ては、何れの派にも專屬せしめることができない代りに、又何れの派にも共鳴せらるべき思想の斷片を有つて居つた。これ彼が今日尙社會主義の父と呼ばれる所以であらう。

例へばギルド社會主義者としての彼は、一八三四年に建築職工の大同團結たる Grand national Guild of Builders が組織された當時唱道したる彼の全國產業合同論によつて伺ふことができる。彼はかう說いた。吾等が多年の經驗上、親方(マスター)が親方と相爭つてゐる間は、職人も親方も共に向上ができない。從つて此弊害を除くの途は各產業を全國的に統一する組織を設けるより外はない。各々の工業に從事する傭主及被傭者は合同して、先づ作業の實施に便利なる適宜の員數を以て各町村每に一團體を造り、各團體の代表者が相寄つて地方會を組織し、順次擴大して全國會に集中される。而して一旦全國的に統一された

る各種工業は更に同一産業に屬するもののみ相寄つて一會社を組織する。例へば被服會社の下に、裁縫、帽子、靴等の諸工業が結束される。總てかくの如くにして最後に生産者の全國的大組織を完成しやうといふのがオーウェンの主張の輪廓である。彼の此提唱に動かされて直に新設されたのが Grand National Consolidated Trade Union of Great Britain and Ireland であつて、僅か數週間にして百萬の加盟者を得たと傳へられたが、其聲のみ徒に大にして、其實は之に副はず、數年にして解體の已むなきに至つたけれども、現時に於けるホブソンやコール等の所謂ナショナル・ギルド運動は、畢竟理論的に整頓せられたるオーウェン主義の復活と見て差支ないのである。

次にオーウェンの思想中に於けるサンヂカリズム的傾向は、社會改造の手段として現存の政治機關の力に依頼することを、無効として排斥した點に於て之を認めることができる。彼は穀物條例の廢止、選擧權の擴張といふが如き、民衆の政治運動に對しては同情を有しなかつた。ニューラナルク時代の彼は工場法令の改正運動に對して屢々友人から彼の努力を要請され、之に參加することを避けるわけには行かなかつたけれども、彼自身としては此問題に多くの興味を引かれなかつた。從つて彼の後半生に於て、一時英國の上下を震駭する程の勢を呈したチャーチストの普通選擧運動の如きも、彼は寧ろ輕蔑の眼を以て之を眺めてゐた。彼は曾てチャーチスト運動者に告げて云ふた。「諸君は其要求を物質的に、精神的に、道徳的に將現實的に、即座に充し得べき方向に直進しないで、何が故に無用なる理論に其時間を徒費してゐるのであるか。……假に諸君が明日其目的を達したとしても、諸君以上に其効果に對して失望する者は決してあり得まい。何となれば目下諸君又は社會に取りて有用なものは、決して諸君の政治的條件の變更によつて贏ち得べき性質のものではないからである。」然らば當時彼は如何なる手段によつて彼等及社會に取りて有用なるものを贏ち得んと目論見つゝあつたかと言へば、それは實にクヰンウードに建設されたやうな、自治的生産社會に外ならなかつた。此意味に於て彼は確にサンヂカリズムの先蹤をなしたと言ひ得るのである。

前に述べたやうに社會改革運動者としてのオーウェンの生涯は、つぎ／＼に新しい計畫の立案と宣傳と實行と而して其失敗との連續であつた。如何なる計畫にせよ、一旦彼の確信から案出された以上は、それが識者の冷靜なる批判からすれば、如何に杜撰極まるものであつても、必ず直に之を實行に移さなければ安堵して居ることのできぬのが、彼に著しい性格の一つであ

つた。之は一面彼が如何なる失敗の經驗にも決して意氣の沮喪を感ぜざる生來の樂觀癖（然りそれは實際「癖」と名けて可いものであつた）を有つてゐたからでもあるが、又一面には彼が人間の道德的志向を過信して、苟くも主義によつて善良なる組織である以上は、何人も彼と同じ程度の誠實熱心を以て、之を擁護するに相違ないといふ誤まれる豫斷に導かれてゐたからでもある。勿論かゝる性癖は彼の性格に美しい光彩を與へたもので、彼が如何な社會の人々からも敬愛せられ、彼の言動は屢々餘りに急進的として危まれたに拘らず、彼が終始貴族、政治家、學者等の間に、多數の親友を失はなかつた原因であつた。「過を見て仁を知る」といふ語は蓋しオーウェンに於て最も適當な一例を見出すことができるのである。

三　共產社會計畫の動機

オーウェンによつて計畫實行せられた社會改革案中、吾等に最も興味あり且研究の對象として最も教訓的意義に富むものは、蓋し其共產社會の建設であらう。私は彼の共產社會に對して所懷を述ぶるに先ち、まづそれが如何にして建設せられ、如何にして瓦解したかの史實を概略物語るであらう。

オーウェンが其理想とする新社會を建設しやうと志すに至つた直接の動機は、ナポレオン戰爭後、英國が一大不景氣に陷つた當時、勞働貧民救濟協會（The Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring poor）が下層階級の非常なる生活難を救濟する方法を案出するために、ヨーク公を會長とする一調查委員會を設けた時、オーウェンも其委員の一人として選ばれたことに在つたと思はれる。彼は此委員會の席上に於て有力なる演說を試み、現下の悲況を惹起した原因を二つの事情に歸した。一つは戰時中の軍用品に對する莫大な需要が一時になくなつたことであり、一つは機械が人間の勞力に置換へられたことである。彼の意見は委員の多數に深い感動を與へたので、忽ち彼は選ばれて委員會の報告起草者とせられた。彼の起草した報告は『世界維新計畫』（The plan for the Regeneration of the world）と名けられたもので、彼の新社會建設に關する理想が具體的に發表されたのは之が其最初であつた。彼の記す所によると、貧民政策の根本義としては、先づ兒童の保護を以て第一とする。兒童をして惡習に感染せしめず、又彼等の德性を培養し、有用なる業務を修得せしめるがためには、其父兄に適當なる仕事を與へ、彼等自身のためにも又社會全體のためにも、最大の福利を生み出すが如き方向に彼等の勞働と生活とを指導することが肝要であり、又邪惡なる諸種の誘

感を抑け、各人の利益と義務とを密接に結合することのできるやうな境遇の下に彼等を安住せしめることが何よりも大切である。

かういふ趣旨から出發して、オーウエンは一群の勞働者をして各々獨立した自足經濟を有する産業團體を形造らせるといふ計畫を案出した。此團體は五百人乃至千五百人から成立つものを手頃とする。餘り小さ過ぎると管理費が嵩み、餘り大き過ぎると有能に働かなくなる。團體員の日常生活資料は悉く團體内に於て生産することを原則とするがゆゑに、各人は其才能に應じて必ず何等かの勞働に服するの義務が有る。而して工場建設其他の起業資金は特志家の義捐に俟つか或は政府から借入れる。

これが概略の輪廓であるが、オーウエンは此の如き自治團體の特長として次の三點を擧げた。第一には貧民兒童を教育するに最も簡易にして且最も有能なる方法であること、第二は一定の地域内に於ける住民の生活の保證を、他の如何なる方法よりも多數人に及ぼすことのできること、第三には實行が比較的に容易であることと之であつた。

右の如くオーウエンの最初の計畫は單に貧民救濟の一法として案出されたものに過ぎなかつたが、彼の性格に特有なる樂觀論は、間もなく彼をして右の計畫を全世界の改造案にまで押進めしむるに至つた。彼は其理想を宣傳するがために熱心に奔走し、其計畫を記載した新聞紙三萬部を購入して、全國各寺院の僧侶に配付したりなどした。

併しながら世評は容易に彼の提唱を首肯しなかつた。オーウエンの主張するが如き團體が果して獨立して自足經濟を維持することができるかどうか。若し自足經濟を維持しようとするならば、近世産業組織の一要素たる分業を行ふには團體員としての勞働者が餘りに少數であるからして、生産費は必ず不廉となるに相違ない。若し又自足經濟の維持を必要としないならば、他の團體との間に物資の交換を餘儀なくされることによつて、團體本來の目的たる經濟的獨立性を失ひ、一般商業の下に在つて、常に市場の狀況に支配されなければならないことになる。これがオーウエンの提案の主たる弱點として論者から指摘された。而して彼の撓まざる宣傳にも拘らず、英國民は之に傾聽するには餘りに現實的であつたのである。

四　最初の共産社會の建設

オーウエンの計畫した共産社會が初めて實現されたのは、北米のインデイアナ洲に於けるニューハーモニーの「新しき村」

であつた。一八二四年オーウエンは此村を手に入れるために自ら三萬磅を支拂つた。土地は豐饒で、氣候は溫和であつたが、もと此村はラパイトと稱する特種の宗教團體によつて經營されてゐたもので、家屋、道路、產業其他の生活施設が極めて不完全な狀態に在つたので、オーウエンの期するが如き文化的新社會の鄕土としては、殆ど荒野も同樣であつた。彼は此新社會の一員たらんと欲する者は、有色人種以外、全世界の人類に向つて開放すべきことを宣言したので、忽ち數百名の應募者を得たが、彼等の多數は實行家といふよりは夢想家であつた。彼等は餘りに急進的な理想家でなければ、餘りに懶惰な議論家であつた。餘りに放縱な自由主義者でなければ、餘りに無識な不平家であつた。彼等の共產主義に對する共鳴は、實は唯彼等の過去の生活の失敗からのみ鼓吹されたやうな敗殘者の一群が、風を望んでニユーハーモニーに馳せ參じたものと見てよかつた。

從つて是等の烏合の衆に對して、直にオーウエンの理想を實施することは不可能であつたので、最初の間は各自の携へ來つた資金や其才能に應じて、物質上の不平等を認め、家具其他の動產の私有を許し、各人の作業と消費との間に貸借の計算を行ふが如き舊社會の習慣を幾分か其儘踏襲しなければならなかつた。當時オーウエンは三箇年の後を期して、必ず過去の利己的個人主義の諸害毒を一掃したる平等の一新社會を建設するがために努力すべきであることを告げて、衆人を激勵した。

併しオーウエンは自ら定めた三箇年を待つことができなかつた。彼はニユーハーモニーの事業が其緖に就くと同時に、一旦英國に歸つて新社會の經營に必要な科學者を募集したが、翌一八二六年の一月に再び渡米するや否や、豫定の準備期間を短縮して、卽時新社會の完成に取りかゝつた。而して全會員から選ばれた七名の委員によつて起草されたニユーハーモニーの新憲法は次の三箇條を其根本義としてゐた。

一、全會員は一家族であつて、任務の如何による上下の差別は全く之を認めない。

一、全會員の食物、衣服及教育は各自の年齡に應じて能ふ限り同等とする。而して實行でき次第各自の住宅や其設備を同程度のものにする。

一、男女各員とも全體の福利のために最善の奉仕をする。

次に行政機關を農業、工業、學術（文學、科學及教育）、家庭經濟、一般經濟及商業の六部に分ち、各部を更に細別して各々それに適當なる主務者を設け、各主務者は更に各部の總主任者を選び、總主任者は相寄つて全部を統轄すべき合議機關を形造るといふ仕組であつた。

此年オーウエンの息子ロバート・デール・オーウエンが本國から來て父の事業を助けた。彼の熱心な努力によつて、新社會は大に活況を呈した。彼等の手に成つた『ニューハーモニー・ガゼツト』誌の記す所によると、「全員が平等の權利と平等の義務との上に築かれたる此社會は、次第に安定して、光彩を放ちつゝある。吾等の街路には怠惰者の群は全く其跡を絶ち、各人擧つて忙しく其受持つ業務にいそしんでゐる。」毎週演藝會や舞踏會其他さまざまの社交的歡樂が行はれた。又屢々討論會が催されて、完全に言論の自由が認められた。住宅は粗造で狹くはあつたが、併し他に勤務を要する仕事が澤山あつたので、皆我慢して不平を訴へなかつた。彼等の間に協同一致の精神と、勤勉努力の熱心とが行渡つてゐて、新社會の前途は希望に滿ちてゐるやうに思はれた。かくて創立後まだ一年も經ないのに、既に其成功を傳へ聞いて、わざわざ參觀に出かけて來る知名の人さへ少くなかつたのである。

併しながらこんな好況は半歲以上とは續かなかつた。會員仲間の品格、教養、趣味の相違は、次第に彼等の信賴と友情を疎隔せしめる原因となつた。それは先づ彼等の社交の上に影響を現し初めた。年若き淑女は粗野な男と手を組んで踊ることを好まず、教育ある青年は無識なる老人と議論を交へることを避けた。そしていつしか彼等は有識にして上品なる部類と、無識にして下品なる部類との二群に分れたが、各群の間でも亦自然に類を以て集つて行つたので、一ケ年の後には少くも七八群の會員が作業の上にも娛樂の上にも、各々分離して生活することを欲するやうな氣分になつてゐた。

しかのみならず、此社會の行政方法に對しても種々なる不平が表はれて來た。飮食物其他の生活資料が極端に節約されなければならぬことが何人にも第一の苦痛であつた。又農事や工作の如き生產的な業務に從事する者の割合に、不生產な書記的事務を行ふ者が多過ぎたことも一部の苦情の種となつた。其間に公金竊盜といふ忌まはしい事件も起つた。又公有の不動產を管理する便宜上之を二十五人の代表者に分割するといふ議も起つたが、徒に紛議を重ねたのみで、到底圓滿に實行することは困難であつた。

かく會員仲間の不調和のために、新社會破綻の徵候が次第に顯然たるに及んで、流石樂天主義のオーウエンも一八二七年の『ニューハーモニー・ガゼツト』で次の如く其失敗を明言するに至つた。「かく多數なる人口を一社會に結束して、圓滑に自治を行はしめるには、彼等の感情は餘りに區々であり、彼等の習慣は又餘りに相違してゐる。……生產の減退の原因は、一部は

公有財産に對する會員の不注意からであり、一部は經驗を尊重する念慮の缺乏からである。そして是等の原因は延ゐて會員相互間の信頼を傷け、彼等の間に存する作業の不均や習慣の不一致によつて一層増長せられた。」

かくて其年の五月ニューハーモニーの「新しい村」は僅か二年足らずの壽命を保つたのみで解體を餘儀なくされるに至つた。舊村民の一部は五群に分れて別々の村を組織したので、オーウエンは彼等の各々に土地と財貨とを分配して引續き共産制度を維持せんことを望んだ。この五群の何れにも加入することを欲しなかつた者は、多少づゝ傷けられた感情を懐きながら此土地を去つた。間もなくオーウエンも亦英國に歸つたが、併し如何なる場合にも將來の樂觀を棄てることのできない彼は、殘存する五箇の共産村が、やがては米國全土に新社會組織を蔓延させる萠芽であらうといふ愉快なる豫想を殘して行つた。

翌年（一八二八年）の四月オーウエンは彼が植ゑつけて來た新社會の五つの芽生が如何に成長したかを見ることを樂んで再びニューハーモニーを訪れた。併しながら彼の樂しき期待は全く裏切られて、彼は唯其處に共産主義を全く沒却したる個人經濟への復歸を見たのみであつた。彼は自らかう述懐してゐる。「私は個人制度の習慣が如何ばかり力強いものであるかゞ初めて解つた。……この最後の實驗によつて、個人制度に慣らされたる人々が、迷信的にそれに執着して、寛容慈愛の道徳性を修養することを欲しないことが明白になつた。是等の道徳性こそ各員間の信頼と調和とを増進するに最も肝要なものであるのに、之を失つては最早社會は存立することができない。」

かくて彼は失望の中に再び此處を立去つた。而してニューハーモニーの共産村の殘骸は何等の特色もない世間並の一村落として其生活を續けて行つた。

五　別箇の經驗

オーウエンの熱心なる信者の一人であつたアブラム・コムブが、スコツトランドのオルビストンに共産社會を建設したのは、一八二六年即ちニューハーモニーのそれと殆ど同時であつた。オーウエンは直接コムブの計畫を助けるわけには行かなかつたけれども、一切の施設が彼の理想から模寫されたものであつたことは言ふまでもなかつた。

コムブは元來エヂンバラでかなり成功した出版業者であつたが、オーウエン宗の信徒となるに及んで、是非とも自ら共産主義の理想郷を實現しやうと志し、自己の全資産を投じ、尚不足な部分は借財して、グラスゴーの東方九哩のオルビストンに

必要な土地を購入したのは一八二五年であつた。そして直に數百人を收容することのできる石造の大宿舍の建築に着手した。此建物は翌年の四月茲で新社會生活が創められた時には未だ完成してゐなかつたけれども、大人は各々私室を與へられ、炊事は總て共同的に行はれ、飲食は揃つて食堂の中で行ふことができた。

此新社會の一員たらんことを希望した者はニユーハーモニーと同樣、何等の取捨選擇もなく受け容れられた。しかも其結果は、會員の一人であつた或者の批評によると、「男も女も子供も、最も惡い者のみが選擇されたーのと同樣であつて、恐らく英國に於ける最劣等の人民を以て組織されたやうなものであつた。併しコムプは忠實にオーウェンの主張に聽從して、決して來る者を拒まざる其方針を更へることを欲しなかつた。彼は後日から言つた。「吾等の志は無智と貧窮と惡德とを退治するに在つた。從つて吾等の經驗に上つた人々が無智であり貧窮であり不德であつたことを力說するのは、只失敗に對する卑怯な遁辭に過ぎない。」しかのみならず彼は無強制無干涉のオーウェンの理想を遵奉するがために、最初の間は何等の組織をも造らず、何等の規定をも設けないで、全く自由放任の生活を營まうとした。各人は只此社會に對する奉仕の至誠によつてのみ勤勉忠實であるべき筈であると彼は確信してゐた。勿論彼の此確信は直に破られて、公益と相容れない利己心は到る處に發動した。殊に自己の勞働の果實は自ら之を占有しやうとする者　若しくは共同の貯藏に成るべく少く捧げて成るべく多くを受けやうとする者が大部分であることが發見された。茲に於てコムプも無政府主義の非を悟つて、全員を職業によつて數班に別ち、小人數の間の相互監視によつて規律を維持するの方法を取ることにした。鑄物班、果實班、乳酪班、建築班、帽子班、被服班、靴班等が設けられ、飲食に關する仕事も亦婦人たちの數班によつて分擔されることになつた。勞働に對する報酬は初めは世間並の賃率によつて切符を以て支拂はれたが、後に會員の決議により、各自の就業時間に比例して均等の率により、共同生活資料を分配するといふ制度に改めた。

オーウェンの持論に從つて、兒童の教育には特別の注意が拂はれた。總て兒童の養育費は社會全體の負擔とする主義によつて、彼等の衣食及教育に要する費用は全部共同資源の中から支出せられ、各人に貸與するといふ形式を取つた。而して此債務は督促せずとも、兒童が成人の後には、自の勤勞によつて得た收入の中から任意に返納するであらうと期待されたが、此樂觀的期待も亦確にオーウェン流といふべきであつた。

かくて一八二七年の春から夏にかけてオルビストンの全盛時代が出現した。諸設備も著しく面目を改め、道路は敷かれ、花園は修飾された。諸工場も都合好く營まれ、家政の方面も次第に整頓した。手にをへなかつた小供等の悪戯や喧騒も幾分かやはらいで、將來オーケストラを造らせる準備として、彼等に音樂が授けられた。當時會員であつた一婦人の手紙によると「此處はまるで別世界のやうです。私は昨夕一つの集會に臨みましたが、あんな愉快な事はまだ覺えませんでした。此處では毎週三回づゝ舞踏會が催されます。ほんとに此處は美味い物を飲んだり食つたりしながら、愉快をつくすばかりです。」而して此幸福な新社會を飾つた花冠とも見るべきは演藝場が建立せられ、其年の夏初めて此村を訪問したロバート・オーウエンが、其舞臺の上に立つて心からコムブの成功を祝福したことであつた。

併しながらオルビストンに於ける黄金の夢も永くは續かなかつた。會員の多くは共産制度によつて與へられた各々の特權を極度に利用しやうと試みたが、殊に目立つた弊害は共同生活資料を各自の就業時間の多寡に比例して分配することに定められてゐたゝめに、其記帳係を欺いて自己の就業時間を實際以上に計算させやうとする會員が少くないことであつた。又會員は共同生活に必要なだけの生産を行つて尚剩つた時間があれば、隨意に外部の傭主に使はれて餘分に個人的の收入を得ることを許されてゐたので、不誠實な輩はとかく外部に出て働くことを好み、誠實な輩のみが常に内部で働くといふ傾向を生じた。そのため一八二七年の六月には、會員二百九十八名中、全く外部でのみ勞働する者が七十七名に達した。しかも彼等は外部で得た賃金によつて、内部で眞面目に働いてゐる者よりも豊かな生活を營むことができたのみならず、比較的安價な食料を内部で購うて外部に密賣し、不正な利益を貪る者さへあつた。

かく會員間の道徳的頽廢が次第に著しくならうとしてゐた一八二七年の八月に創立者のコムブが死んだ。其弟のウヰリアムは暫く此新社會を繼續しやうと努力したけれども、到底見込のないことが判つたのみならず、最初の創立費を調達するために地所家屋を抵當に入れてあつたので、債權者からは容捨なき督促を受け、財政的の破綻は免れ難い狀況に在つた。そこでウヰリアムは其年の秋全會員に退散を要求し、間もなく遺つた財産は競賣に附されて、折角の理想郷も僅か一年半の存在しか保つことができなかつた。

六　繰返されたる共産社會の失敗

如何なる失敗によつても曾て其勇氣を摧かれたことのないオ

ーウエンは、ニユーハーモニー及オルビストンの瓦解後十二年を經て、復もや新社會建設の計畫に取りかゝつた。今度は一名に付き五十磅の共同出資募集を以て初めたが、一八三九年に約六十名の應募者があつたので、ハムプシエヤのクヰンウードに廣い農園を購入して「新しい村」の位置を定めた。併し今度も亦加入者の性質を選擇することをしなかつたので、最初から種々なる仲間の紛議を生じ、屢々財政上の困難に出會つたが、漸く是等の故障に打克ち、諸般の準備が整うて、いよ／＼新社會生活が開かれたのは一八四二年であつた。總人口約六百で、約三萬磅を投じた一大家屋の中に寢食を共にした。例によつて最初の間は極めて良成績であつたので、忽ち世人の視聽を惹いた。當時其實況を報告して宗教家仲間の疑惑を解かうとしたエキセーターの一僧侶の書翰は次の如く記されてゐる。

「彼等は全國から最良の器具と作業方法とを玆に寄集めて居る。……貧困なる住民の間に彼等は富を作り且樂んでゐる。無智なる住民の間に彼等は教育を施してゐる。仕事の乏しい住民の間に彼等は仕事を增してゐる。德行高からぬ住民の間に彼等は、彼等を知る者及最初彼等を疑ふた者總ての尊敬を値すべき模範を自ら示してゐる。若し彼等の主義とする所が、世評の如く社會に危險なものであるならば、彼等を抑壓するに何を以てすべきであるか。僧侶たちが幾ら呪つたからといつて、彼の廣い農園を海に沈めることもできまい。又彼の穀物を腐らせてしまふこともできまい。」

又當時「モーニング・クロニクル」に掲載せられた或人の視察記は最も興味あるものであつた。其中で炊事場に關して述べた所によると、三四名の婦人が皿洗ひをしてゐたが、それは一つの機械を使つて、殆ど信ぜられない程の手早さを以て行はれてゐた。料理場にはあらゆる最新の便利な設備が取附けてあつて、一例を言へば、料理場から食堂の間には一つのトンネルが設けられ、食器食物は總て其中を走る車によつて運搬されてゐた。

會員の作業は建築、農園、煉瓦、道路、牧畜等に分れて多く熟練勞働に服し、不熟練勞働は大抵近村から雇入れた人夫を使ひ、一週九志の賃金を與へてゐたが、それは當時の世間並の賃金よりは遙に高かつた。

併しながら間もなく此新社會は財政難に襲はれた。彼等の勤勉も彼等の生活を維持するに足る程の收入を得るに困難であることが知られて來た。そこで彼等は先づ食物を出來るだけ儉約することゝし、朝飯はクリームの入らぬコーヒーとバタを付けた麵麭だけとし、晩飯は其外にプディングの類と野菜を加へる

だけで、肉類は一切用ゐないことにした。それでも一八四四年度には二千九百磅の缺損を生じた。そこで經濟に堪能な者を擧げて種々財政難の救濟に努めたけれども、到底破産を免かれ難いことが明になつたので、翌年の夏此新社會も亦解散の已むなきに至つた。

七　彼の道德觀と共産主義

私はロバート・オーウェン自ら又は彼の信徒によつて實行された共産社會の建設と其瓦解とに關する概略の事實を述べた。之に就て吾々の考へなければならぬことは、何故に是等の尊き理想の産物が、現實の世界に存續することができなかつたかといふことである。オーウェンの共産社會はあらゆる共産社會を通じての根本的背理に原因して當然失敗すべき筈であるが故に失敗したものであらうか。或は特に彼等の組織に缺陷があり、或は其經營に疎漏があつたといふ偶然の理由によつて本來失敗すべからざるに失敗したものであらうか。これが重要なる研究の題目でなくてはならない。

惟ふに付て人類の思考に上りたる最も完全なる共産社會の記述としては、プラトーの『共和國』の右に出づるものはあるまい。恐らくオーウェンも其着想を茲から得來つたものと想像される。然るにアリストートルはプラトーの理想郷に對する批評に於て、次の諸缺點を指摘してゐる。第一に公有財産の分配は絕間なき紛爭の原因となるであらう。何となれば人民は其受くる所の分量が自分の能力に該當してゐないと抗論するであらうから。第二に他の者と強制的に團體生活を營ましむることは、相互に衝突を起して調和を保つことが困難である。第三に公有財産の保管は特に何人の利益にもあらざるがゆゑに、總ての人によつて等閑に附せられ易い。第四に個人の所有を任意に他人に分配せしめることは、強制的に同一物を共有するよりは道德的に優つた善行である。然るに共産制度は寛容と博愛とを必要とせざるがゆゑに、自ら是等の美德を滅失せしめる。第五に共産制度は極めて小社會に於て行はれる場合の外は、人民の自治は名のみであつて、其實を行ふことが不可能である。

このアリストートルの批評は一言以て之を蔽へば、人間の固有の道德性が共産制度を維持するに適當でないといふことに歸着するやうに思はれる。而してオーウェンの共産社會の失敗も、其主たる原因の一つは確に其成員の道德的缺陷に在つたことは疑はれない。

惟ふに生産の協同と、所有の公共と、消費の平等とが共産主義の理想であるけれども、公有の財産はそれが各自の生活資料

として消費される前には、必ず一度各人に對して分配されることを要する。而して此分配が公正に、しかも各自の眞實の需要に適當するやうに行はれるがためには、形式上之に關與する各自の權利が同等でなければならぬばかりでなく、相互が理解と友情とによつて結ばれたる關係に在ることが必要とされる。何となれば此關係なくしては、分配の管理に當る或一人若しくは數人に對し、彼等が眞に良く公正であり得ることを一般から信用され難いばかりでなく、同時に又百人百樣であるべき筈の各自の眞實の需要に適當せしめるがために、必ず必要である所の、成員相互間に於ける同情と忠恕が存在し難いからである。若し一度公正であることの信用が傷けられ、眞實の需要が調節を缺ぐならば、其社會生活は直に圓滑を失ひ、延て第二第三の障碍を續出して、終に全體の破綻を來すに相違ないのである。

併しながら、共產社會の成員が政治的に平等の權利を與へられることは、單に一つの制度としてまのあたり實行のできることであるから、之に對してはさほどの困難はないと見てよいけれども、彼等が相互に理解と友情とによつて結ばれ得るがためには、彼等が總て常に共同の福利の上にのみ行動して、決して他害を伴ふ自利を絕對に求めないだけの道念の所持者であり、且其實行者であることを前提としなければならぬ。他の點に於ては各自の性格や趣味や主張に何れ程の相違があらうとも、此道念だけは共同一致して遵奉されなければならぬ。各自が己れ先づさうであり、他の全員亦悉くさうであるといふ確信の上にのみ、共產主義者の理解と友情とが建設され得るのである。從つてかくあるがためには、第一に一共產社會の成員として選ばれる者が、悉く右の如き道念の保持に堪ゆる人物であることを必要とし、第二には彼等が相互に同一の道念の遵奉者であることを確認すべき機會を有ち得る程度に、彼等の間に交友あることを必要とするのである。併しながら此第一の條件は生來特に利己的とは言へないにしても多年個人的經濟に慣熟したる各自の生活上の習慣を、一朝にして根本的に革めることが、何人に取つても無意識的に種々なる障碍を伴ふものであることを豫想しなければならぬし、第二の條件は共產社會の成員が人數に於て比較的少數に制限されなければならぬことによつて、現代文化の物質的方面の惠澤を享有することが、甚しく難澁となることを覺悟しなければならぬのである。

此故に若し何人にもせよ、人類全體に對してゞなく、唯其一小部分に對してのみ、特殊の共產制度を實施しやうと企てる場合に於ては、先づ其成員を選擇するに嚴重な考査を以てし、飽くまでも彼等の人格品性に於て、共產的社會道德の嚴守に堪ゆ

る資格を有する者のみを選擇すべきであることは、必然の用意でなければならぬ筈である。然るに前に述べたやうに、オーウェンもコムブも成員の選擇には毫も意を用ゐなかつたのみならず、寧ろ成員の資格を限定することを以て、彼等の主義として不合理でもあり不必要でもあると認めてゐたのである。

何故にオーウェンがかく局外者からは無謀と思はれるやうな方針を執つて動かなかつたかの理由は、彼の德性論を知ることによつてのみ領解することができる。彼の小著『新道德世界』(The New Moral World)に說く所を約言すれば、彼は人間の道德性(Character)を形造る作用を二つの因由に歸してゐる。一つは生れつき(Birth)即ち先天的内在的のものであり、一つは境遇(Circumstance)即ち後天的外來的のものである。此二つの因由は生より死に至るまで絕えず相互に主動し反動しつゝ人間の道德性を陶冶し形成するものである。此故に人の道德性が生れつきのまゝに放任されるならば、其固有の感情と信念とが、其行爲の動機たる意志を創造して、常に其行爲を支配するのであるけれども、併し何人も社會生活の一員である以上は、決して生れつきのまゝに放任されることを許されない。必ず後天的外來的の影響、即ち境遇の勢力によつて感化せられ、先天的の道德性は必ず之がために變化を受ける。從つて總ての人の道德性は、其生れつきは如何樣であつても、機械的疾患に原因する部分を除くの外は、其境遇の力の正邪及强弱如何によつて、非常に劣等にも、又非常に優等にも陶冶することのできるものである。かう彼は說いたのである。

オーウェンはかくの如く道德性の形成に及ぼす境遇の力を甚だ重要視した。彼は常に環境の重要さを高調し、生れつきの特質を輕視し、進んで道德性が個人の精進反省によつて琢磨洗練さるべき可能性をも否認し、寧ろ外界の境遇のみが個人の意志とは無交涉に其道德性の上に作用するものであると力說したのであつた。此故に彼から見れば、各自の道德性の正邪善惡に對する責任を當該個人に歸屬せしめることは明に背理であつて、それは畢竟彼等の生息しつゝある社會全體としての責任に外ならぬのである。社會の疾患、人類の苦惱こそ、各個人の道德性を邪惡ならしむる唯一の原因であつて、若し社會の組織と其活動とが眞理正道でさへあるならば、各個人は必然的に正善であるべき筈なのである。

右に說くが如きオーウェンの理論を念頭に置いて觀察するならば、彼が眞理正道の組織であり活動であるとした所の共產社會を建設せんとするに當り、其成員の道德性を考査して採否を決するが如き方法を排斥したる所以は自ら明白である。彼から

すれば、成員の道德性は彼等自身のものでなくして、實は彼等が過去に於て生息したる社會のものなのである。然らば今彼等が過去の社會と絕緣して、新しい社會に入る以上は、彼の道德性も亦既往のそれから完全に蟬脫して、新たなる內容を有するに至るであらうことは必至の事態である。いづくんぞ彼等の過去を詮議だてするの必要があらうか。かう彼は確信したのであつた。

八　共產社會失敗の道德的原因

恐らくオーウェンの共產社會の失敗の、唯一にはあらずとするも最大の原因は、全く人間の道德性の變化のプロセスに關する彼の誤つたる解釋に在つたと私は信ずる。勿論境遇の感化が人間の道念の陶冶に與つて力あることは爭はれない。オーウェンは餘りに境遇の影響を誇張し過ぎた嫌ひはあるけれども、併し人間の社會道德が經濟事情によつて著しく支配されるものであることが拒まれない以上は、過去の個人經濟組織が、人間の利己心の培養に寄與した程度の多大であつたことは否認することはできない。而して此利己心があらゆる社會的惡德の最大の因由をなすものであることも疑ひない。此故にオーウェンが個人經濟を全廢して、之に代ふるに公共經濟を以てすることによつて社會的惡德を根絕することができると豫想したことは、經濟のみを境遇と看做した點に論理的缺陷が存するにも拘らず、其着想の根柢に於て決して誤つてはゐないと私は思ふのである。

唯私が彼に遺憾とする所は、彼が人間の道德性の變化の過程に於て必ず伴ふ所のエナーシヤを考慮に加へなかつたこと之である。道德性の變化は可能であつても、その變化は必ず個性と環境との複雜なる勢力に動かされて、種々なるプロセスを經由せずには行はれ得ないものである。此プロセスなる語は時間といふ語に置換へてもよい。人間は如何に周圍の事情が變化したからと言つて、卽座に己れの心理を之に順應させるわけには行かぬ。花嫁は結婚の翌日から直に處女の氣分を妻の氣分に替へることはできぬ。彼女が從來未知の世界であつた所の夫の家庭に安住して、妻としての職能を遺憾なく發揮し得るがためには、少くも數箇月乃至數箇年を經た後でなければならぬ。併し花嫁の心理的變化は之を新に共產社會に入つた者の心理的變化に比較するならば、遙に容易に行はるべき理由がある。何となれば彼女は、其處女の時代に於て、其母に就き、又は親戚朋友間の妻に就き、或は讀書會話の間に於て、夫婦の關係や家政の內情に對し、豐富なる豫備智識を修めるの機會を有したことによつ

て、自ら强ゐて努めざるも既に其大體には通じてゐたに相違ないからである。

併しながら共産社會の新加入者に取つては、右の花嫁の豫備智識に比すべき何物も存しない。總員が悉く無經驗者の集合であり、且模範とすべき實例が他に全く存しない。殊に彼等は其祖先が數千年來維持し來り、己も亦生來慣熟したる個人經濟の生活様式を即座に振棄てゝ、唯漠然抽象的にのみ理解したる公共經濟を現實界に構造しやうとするのであるから、其處に種々なる疑惧、困惑の伴ふことは固より當然である。併し之はまだ打克つことのできぬ障碍ではない。若し新社會の組織が合理的であり、且それが各員によつて正當に領解されてゐるならば、彼等は新制度を協贊することに躊躇はしないであらう。唯彼等に最も打克ち難い障碍と思はれるのは、彼等の心理を半無意識的に支配する所の利己心、即ち過去の個人經濟の下には生存手段として或程度迄は絶對に必要であつたが、現在の公共經濟の下には絶對に禁物であり又不必要であるべき筈の利己心が、非常に執拗に彼等の道德觀念中の古巣に立籠つてゐて飛び去らないことである。

この利己心こそは、花嫁の胸に秘めたる仇し戀の如く、共産主義者に取つては獅子心中の蟲である。共産社會に破綻を持來す不道德性の根幹をなすものである。オーウエンはこの利己心は他の枝葉の不道德性と同じく、共産制度の斧鉞によつて、たちどころに一掃し盡し得べきものと信じてゐた。然るに事實に於てそれは斧鉞其物を破壞せしめる程に堅硬であつた。惟ふに人間の利己心は、吾等の理性が共産制度を是認したからといつて、或は躬自ら其實行の中に置かれたからといつて、直に之を棄て去ることのできる程、吾等の道德性の中に淺い根柢を有するものではない。吾等が直接且即時に消費するために吾等の前に置かれた物の外は悉く共同の所有物であることを認識することだけによつて、利己心が取除かれるものならば、其實行は比較的容易であるけれども、共産社會を維持するためにもつと必要なことは、其成員各自が共同の財産を保管するためにする注意が自己の私有財産に於ける注意と同一であり、更に共同の生産を營むためにする努力が、自己の爲のみの生産を行ふ場合に於ける努力と同一であり得ることほどさやうに其利己心が取除かれ、又かくして共同に生産保管したる物を各自の消費のために分配するに當り、各人の年齡、體質、嗜好、趣味に應じ、各々が眞實の需要に適當するやうな方法を以てすることが、圓滿に行はれ得ることほどさやうに、其利己心が取除かれることなのである。しかも此程度にまで利己心を取除くがため

には、前に述べたやうに全成員が理解と友情とによつて緊密に結付けられてゐなければ能はぬことである。この完全なる相互の理解と友情とが成立つまでには、成員各自の個性の相違に基く、種々なる困難が豫想されるが、假にそれ等の困難が打克たれたとしても、利己心の共同放棄の上に共產制度が首尾好く運用せられるに至るまでには、少くとも數箇のゼネレーションを通じての教育と訓練とを必要とするに相違ないと私は思ふのである。

今日の共產主義者によつて講策されつゝあるやうに、數百千萬人より成る一大社會に對し、一擧に共產制度を實施しやうとするには、其制度の下に包括さるべき者を取捨選擇することは全く不可能であることは言ふまでもない。併しオーウエンの實行したる共產社會は、僅か數百の人數を以て、現社會の離れ小嶋として建設されたのである。從つて彼の計畫からすれば、共最初に比較的利己心を離脫し易い、共產道德の志向に勝つた人々のみを選拔するの自由が與へられてゐたのである。それにも拘らず彼が好んで此自由を放棄し、ことさら失敗の原因を造つたと見られるのは、畢竟彼が道德性變化のプロセスを十分洞察しなかつた爲であつたと斷じて差支ないと私は思ふ。

九　共產社會失敗の經濟的原因

オーウエンの共產社會を失敗に了らしめたる主たる原因の他の一つは、彼が近代の產業組織の社會生活上に於ける効果を十分理解してゐなかつた點に在ると私は思ふ。彼は產業革命の完成期に於ける最高級の工業家であつただけに、工場制度と機械生產とが有する文化的のメリットは之を尊重することに於て決して人後に墜ちなかつた。前に述べたクキンウードの炊事場の光景だけに見ても、彼が及ぶ限り最新の機械的設備の利用に鋭意してゐたことが分る。彼はジョン・ラスキンの如く、決して物質文明の呪詛者ではなかつたのみならず、寧ろ其熱心な奬勵者であつたと言へる。此點に於て彼の志向は確にラスキンよりも實際的であり、且疑ひもなく正當であつた。

併しながら、彼に許すべからざる過失は、彼の計畫したるが如き僅か數百名の一小社會に於て、しかも豊富ならざる資力を以てして、彼の希望するが如き新物質文明の惠澤を保有する所の社會生活を實現することが、近世殊に工場制度の相當に發達したる國土に於ては、最早到底不可能であることを彼が豫知しなかつたこと之である。若し中世期に於けるが如く、工業は家内の手工業に限られて居り、普通人の生活資料に對する欲望

は、主として農耕、漁獵等によつて得る自然物に限られてゐるものならば、數百名から成る共産社會の維持も必ずしも困難ではなかつたであらう。現に北米初期の移民中の特殊宗教團體によつて形造られた共産部落の如きは其實例と見ることができる。併しながら既に工場工業の齎したる物質文明、即ち豐富にして多種なる生活資料を低廉に且輕便に利用することのできる經驗を一旦覺えたる者どもが、之を振棄てゝ再び過去の質素單純なる生活資料に甘ずるといふことは非常な苦痛である。而して又事實不可能と見て差支ない。從つて若し共産社會の住民が過去に立歸ることなしに、其生活狀態を維持して行かうとするには、是非とも其社會内に於ける人口に應じて、外界の社會に於けると同程度の生産力を常に保有してゐなければならぬことになるのである。しかせなければ共産社會の自足經濟を維持することができないからである。併し數百人の小社會に於て數百種類の生活資料の生産力を、外界の社會と同程度に保有することの不可能なるはいふまでもない。玆に於て共産社會の住民が、農耕漁獵の收獲物を以て生活資料を充たしたる過去の狀態に復歸することを甘ぜざる限りは、彼等の自足經濟が到底存立し得べき理由はないのである。

尤も自足經濟は必ずしも共産制度の必然的要素ではない。現にオルビストンやクヰンウードでは最初から純然たる自足經濟を行ふといふ企ではなかつたらしい。これは生活資料の缺乏に惱んだニユーハーモニーの實驗に敎へられたゝめであつたと思はれる。假令自足經濟を廢して、生活資料の一部を外界から購入しても、内部に於ける分業と生活資料の公正な分配とさへ行はれるならば、必ずしも主義に於て共産制度と相悖るものではないことは勿論である。併し近世の産業組織の相當に發達したる國土に於ては、假令自足經濟を放棄したからと言つて、共産社會の經濟が到底維持できないものであることは、クヰンウードの經驗が良く之を示してゐる。共産社會の成員が如何に勤勉努力しても、彼等の生産能率が、外界に於ける大規模なる産業組織に企及すべくもないことはいふまでもあるまい。其結果として、彼等によつて造られる生産價値は、彼等と同じ程度の勞働を以てする外界の生産價値に比し、常に寡少であることを免かれないがゆゑに、彼等が其生活資料を外界に俟つこと多ければ多いほど、彼等は支出超過による缺損を增大することになるのである。而して彼等の經濟は早晩必ず破綻を來すに違ひないのである。

オーウエンは確に此睹易き經濟的理論を無視したのである。彼は到底相容れない矛盾を強ゐて接合しやうと企てたものであ

つた。何となれば僅に數百人から成る小社會に共產制度を實施することゝ、近代の物質的文化の產物を享有することゝは、如何にしても兩立することのできない關係に在るからである。

十　オーウエンから享くべき現代人の敎訓

私はロバート・オーウエンによつて建設せられた共產社會の失敗を、道德的と經濟的との二方面から觀察した。卽ち之を約言するならば、人間の道德性が社會的環境から受ける感化は、環境そのものゝ變化よりは遙に緩漫で、漸進的にしか効果が顯はれないからして、特に共產社會に於て必要とせらるゝ道德性を多分に具備する者のみを選擇して成員となさない限りは、共產制度の維持は不可能であるのに、オーウエンが此理を十分省察しなかつたこと、及近世社會の經濟組織の下に在りては、少數人から成る獨立の社會は、農耕漁獵の原始的生活資料に滿足せざる限り、到底自足經濟を營むことも流通經濟を營むことも、全く不可能であるに拘はらず、オーウエンが此理を殆ど考慮しなかつたことの二つの原因が、彼の計畫を瓦解せしめた所以であつた。たとひ彼ならずとするも、彼のと類似したる諸計畫が、同樣の理由によつて瓦解せざるを得ないことは言ふまでもない所である。

惟ふにオーウエンの失敗は、單に過去の事實として、歷史的興味を吾等に提供するだけで已むべきではない。吾等は當に現代に切實なる活きた敎訓を之から得なければならず、又確に得ることができると私は信ずる

私の見る所によれば、現代に於ける社會改革論者の有する通弊は餘りに制度を過重視して、此制度を維持し運用すべき人間性を無視するか、少くも輕視してゐる所に在る。例へば資本主義の害毒は呪詛するに十分な理由を有するかも知れない。併しながら此資本主義は決して或暴君により案出せられ、强行せられたる制度ではなくして、實に數世紀に亘つて人間性の自然に產出したる一箇の習慣であることを思はなければならぬ。勿論此習慣を確保するために、種々なる制度が設けられたには相違ないけれども、併しそれは資本主義が大多數の人間の常識として體驗せらるゝに至つた後の事であつて、是亦詮ずる所人間性の一表現と看做すべきものである。此故に資本主義の弊害に目ざめて之を打破するは可い。併し打破した後に敷かるべき新制度は、それが制度たるの故を以て、直に克く人類に尊重遵守されると思ふならば、それは飛んでもない早計である。何となれば吾等の習慣が、常識が、言ひかへれば吾等の社會的心理が、ピツタリと右の制度の內容と一致した後でなければ、吾等は之を

尊重遵守するに堪へないからである。若しさういふプロセスを經ないで强ゐて此制度を施行しやうとするならば、それはやはり一箇の暴君政治に外ならない。たとひそれが組織の上ではデモクラシーの形によつて行はれやうとも、其實は專制政治と何等選む所はない。制度は一日にして之を改めることができるが、之を支持すべき人間の道德性はゼネレーションに次ぐにゼネレーションを以てして、初めて之を改めることができるのである。此故に若し此道德性の推移を無視して、或一國に革命が行はれたとするならば、たとひ其革命後の新制度が窮極に於て人間の福利に貢獻する所が如何に大なるにせよ、其制度を守護するに極端なる武斷的專制政策を以てせざる限りは、必ず其制度は國民の道德性が之を容認しないことによつて崩壞するか、少くも大修正を餘儀なくされるに相違ないのである。從つてかくの如き過渡期の混亂と犧牲とを避けつゝ、革新の事業を完成せんことを欲する者は、制度の變更と道德性の推移とをして、常に步調を一つにして進ましむることに意を致さなければならない筈である。之がオーウエンの事蹟から吾等の受くべき教訓の隨一ではあるまいか。

次に吾等の記憶しなければならぬことは、現代に於ける社會の經濟生活は、オーウエンの時代に比し、更にますます複雜となつて來たからして、數百人は愚か、數萬人でも、數十萬人でも、到底現代の物質的文化を保有し得る所の獨立的共產社會を建設することが最早絕對に不可能となつたこと之である。少くも一國家が全體として之を行はない限り、國家の中の或一部分のみが、たとひ彼等の道德性が十分に具備されてゐたとしても、共產制度を實行し得やうとは吾等の想像し難い所である。否、生活資料の國際的分業作用が漸次發達し來れる當今に於ては一國家全體としても種々なる不便不利を忍ばずしては、他國と無交涉に共產制度を實施するは餘程困難であらうと想はれる。而して之は共產制度に限らず、他の革命的諸提案の何れに對しても言ひ得ることである。此事は私が今更めて指摘するまでもなく、既に多くの社會改革論者によつて自覺されてゐることであるけれども、亦オーウエンの失敗から受くべき教訓の一つとして擧げることができやうと思ふ。

オーウエンが果して「社會主義の父」であるならば、其子孫は父親の遺した教訓を深く省慮しなければならない。

日佛文化協同の提唱

法學博士 杉山直治郎

目次

一、佛蘭西大學使節の來朝と爾後の經過
一、大學使節の來朝　二、爾後日佛兩國に於ける經過
二、諸外國に於ける佛蘭西文化提唱の大勢
三、一般諸國に於ける施設　四、佛國に於ける施設
三、明治及び大正の文化的國是の概觀
五、我國に於ける日佛文化協同運動自發機運の切迫　六、維新以來外國文化に對する我國文化方針の三變　七、英獨佛三文化に對する我偏頗的態度の殘存
四、我國の文化的偏傾の社會的原因及び其推移
八、第一次的社會原因　九、第二次的社會原因　一〇、右原因の推移に關する省察
五、佛蘭西文化の價値
一一、大戰前の價値　一二、大戰後の價値
六、我國文化現狀の不合理、不得策
一三、我文化現狀の不合理　一四、我文化現狀の不得策
七、日佛文化協同の急務
一五、佛文化偏輕矯正の急要　一六、三種の反對論の可能と無價値
八、新方針實現の主要方策
一七、外國語教育に於ける佛語の進展　一八、日佛會館の設立

一

一　大正八年夏大戰の幕漸く閉ぢて、平和會議の進行世界の視聽を巴里に集めつゝある時に方り、佛國政府は夙く既に我國との文化的提携の大策を樹てんとし、里昂大學總長「ジュバン」氏及び同文科大學教授「クーラン」氏を大學使節（La mission universitaire）として我國に派遣した。

私は當時の東京帝國大學總長山川先生の命を承け、辰野、後藤の兩氏と共に同使節を橫濱埠頭に迎へ、且つ東道の役を務め

た機緣を有する。又同使節の來朝を以て後述の理由に依り、恰かも我文化上の根本缺陷に對する好箇の轉機をなすものと信じたる爲、爾來此事に關して微衷を致し來つたのである。此の點から此事に關してその經過を述べ又卑見を披陳し大方の敎を乞ふに付て全く資格と緣故とを有しない者ではないと思ふ。

同使節は我國朝野の有力者と會見し、日佛兩文化の相互的硏究及び協働の恒久的關係を樹立し、之に因て兩國學界延て兩國民の文化的共通利益を收得するは勿論、その相互的理解と尊重とに依る兩者の精神的親密を增大するの利益を勸說し、且つ其の方法を協議した。

同使節の提言の內容を見るに、例へば佛國有爲の靑年を我國に留學せしむると言ふ如き、又同國一流の學者を交替に我國に派遣せむとする如き、全く我文化の眞價値を認識し尊重するの精神に基いたものである事を知るに足るのである。

二　同使節は表面何等の成案を見るに至らずして歸國せられたる如きも、其の來朝は漸次日佛兩國間に成熟せむとする果實を結ぶに至つたのである。

卽ち一昨年暮我國に於ても日佛文化協同の提案を見、續いて昨春朝野の有志會同の結果、澁澤、古市其他の諸氏より成る委員會が組織され屢々相會して、其講究審議に從事するに至つた（詳細は大正十年日佛協會々報に譲る）。一方佛國に於ては、我子弟の同國留學を促進せむ爲め、佛國高等教育の門戶を開放し、我中學教育又は高等學校教育修了者を、佛國に於ける同等の資格者と認め、其入學を許可することとした、更に進んで昨大正十年度に於ては佛國外務省對外奉仕局より、三十萬フランを我國に於ける日佛文化協同施設に對して支出するの決定を爲した。若し愈々我國に本協同事業が確立するに於ては、年々同額の補助を佛國政府より受くる望があるのである。之は大戰の疮痍を承けた佛國現時の財政狀態より見れば餘程の奮發と認めねばならない、其間東京及び巴里に於ける兩國大使館を通して日佛相互の聯絡を持せるのみならず、昨暮佛國大使「クローデル」氏の着任以來益々彼我の熱心と愼重の講究とを加へ、今や此協同事業に就ての確信ある成案を得るに至つたのである。

二

三　抑も佛蘭西との文化協同の問題は、實は我國のみの問題ではなく、今日世界各國の問題である。又我國では可なり永く懸案となつて居たが、多數の文明諸國では着々解決され實行に入つて居るのである。今此趣旨に基く汎ゆる施設方面に行き亘て其狀況を明にすべく充分なる資料を持たないことを遺憾とす

るが、私の寡聞を以てしても、此の點に付ては次の諸施設を見るのである。其の内(1)、(2)、(4)、(7)、(16)、の外は大戰以來の創立に係るものである。(cf, v° Langue française, Clunet, Tables générales et Tables annuelles ; Revue internationale de l'enseignement)。

(1) 亞典に於ける學校、之は主として考古學及び歷史研究に依る希臘古文明の闡明に努むると同時に、希佛兩文化の協同を圖るものである。

(2) 羅馬に於ける學校、之は古代羅馬の文明の闡明を目的とする考古及び歷史の研究に從事すると同時に、伊佛兩文明の協同を圖るものである。

(3) 「フローランス」に於ける佛蘭西學院(L'Institut français)

(4) 「ペトログラード」に於ける佛蘭西學院

(5) 馬德里に於ける「ヴエラスケ」會館 (La Maison Vélasquez)

(6) 「バルセロナ」に於ける佛蘭西學院(L'Institut Français)

(7) 倫敦の佛蘭西學院、之は千九百十年佛蘭西の「オルリアツク」孃 (Mademoiselle d'Orliac) に依て創設され、爾後結婚後の同孃即ち Born 夫人及び Lord Asquith を首腦とする委員會に依りて經營せられ、其の教育上の實績は益々英佛朝野の人士の認識する所となり、英政府は補助金を交附し、倫敦市は敷地建物を寄附し、又佛國對外奉仕局も補助金を交附し、「リトル」大學は之を後援することとなり、昨年二月二十六日盛大なる移轉式を擧行した(詳細はRevue internationale de l'enseignement, 1921, n° 3 et 4, p. 149 à 151 參照)。

(8) 倫敦佛蘭西學院會館(La Maison de l'Institut de France à Londre)

之は一昨千九百二十年「ロスチャイルド男爵」(Baron Edmond de Rothschild)が、毎年の經費を支持するに足る一大資金及び宏大なる建物敷地を寄附して設立した「エドモン、ド、ロチルド」財團である。主として倫敦に滞在して學術、美術、文藝に關する研究に從事せむと欲する佛蘭西人を收容する會館である。(詳細は Revue internationale de l'enseignement, 1921, n° 11 et12, p. 353 à 355 參照)。

(9) 「プラーグ」の佛蘭西學院

千九百二十年巴里に於ける「巴里スラーヴ學院」の設置を見たが、次いでプラーグに「プラーグ佛蘭西學院」が設立され、佛と「チエツコスロヴワキヤ」との間にも文化協同が成立たのである (詳細はRevue internationale de l' enseignement, 1921, n° 1 et 2, p. 66 à 69 參照)。

(10)「シカゴ」大學に於ける佛蘭西會館(La Maison française)(千九百十九年六月創立羅典諸語科附屬)。「コランビヤ」大學の佛蘭西會館。「ルーヴァン圖書館」(La Bibliothèque Louvain) 等 (Rev. int. let enseignement, ibid, p. 33 et suiv.)。

(11) 佛支文化協同、之は主として一昨々年「ジュパン」氏及び一昨年「パンルヴェ」氏の來支の結果佛支兩國に於て種々の形を以て具體的の實現を見たのである。卽ち佛支間の文化協同の如きも其交渉は大體我國に後れて端緒を開き而して後の雁が先となつたのである詳細は大正九年十二月十五日外交時報第三八七號所載注目すべき佛支の文化的提携、及び一瀬勇三郎氏佛蘭西同好會講演萬朝報本年六月九日佛文欄に讓る)。

四　以上は一般諸國に於ける施設であるが、更に佛國内に生れ出た施設にも左のものがある。

(12) 東洋友人佛蘭西協會 (L' Association française des amis de l'orient)

之は昨年巴里に佛國人に依つて設立せられ、弘く東洋諸國(我國を始め支那、暹羅其他を含む)と佛國との文化協同を目的とする (詳細は Bulletin de l'Association française des Amis de l'Orient, 1921, n° 1に讓る)。

(13) 里昂法科大學の比較法學院 (L' Intstitut de droit Comparé)

之は千九百二十一年主として「ラムベール」教授の盡力に依て創設された比較法的實驗所とも云ふべきもので、差し當り主力を英米法と佛法との比較研究に傾注しつゝある、而かもそれは我文法を越えて是等諸法の判例法を明にするに止らず、經濟學者と協力して、經濟と法律との聯繫的研究にまで進み入る社會法學的比較研究方針である。之に因て羅典法律文化と英米法律文化との提携協働の將來が大に囑目され、延て兩國の產業關係にも多大の好影響を及ぼすものとされ、從て國家並に商工業の大團體に依て援助さるべきものと評されてゐる(詳細は Prof. Lambert, L' Institut de droit Comparé, son brogramme, ses méthode l'enseignement; Leçon faite à la séance d'inauguration, 1921 に讓る)。

(14) 佛蘭西日本留學生保護會 (Le Comité de patronage des étudiants japonais en France)

之はソルボンヌで日本文明史講座を擔當する「ルヴオン」教授の發意に基き、我大使館でも援助して數月前に出來た日佛文化協同の一種の實現に外ならない。

(15) 巴里の大學街 (La Cité universitaire)

之は佛蘭西の富豪「デュッチユ」(Emile Deutsch)氏の一億フランの寄附を基礎とせる財團の企劃に屬し、巴里市及び巴里大學の後援の下に、巴里大學に學ぶ内外國の學生の爲めに、大規模なる國際的寄宿舍及び倶樂部を供給し、運動、遊戯、藝術に付ても進歩した諸施設を伴ふ一大樂園を作り出さんとするものであつて、英米伊其他の諸國も之に參加し、事業の開始を見るのも明年に在ると云ふことである(詳細は千九百二十年十二月五日「ル・タム」紙に讓る)。

(16) 佛蘭西教育國民事務局(L'Office nationale des Universités et écoles françaises)

之は千九百十年の創立に係り佛國政府の補助を受ける私設の社團である。其主たる事業は外國から佛蘭西に留學する學生に對して、其の見學、旅行に便宜を與へ、之に適する教育を施設し、又之に適する教課書等を作り、佛國と他國との講演を交換する等に存する。其の分局(bureau)は英吉利、北米合衆國、西班牙、葡萄牙、瑞西等に設けられ、本年亦和蘭に設置されることとなつた(詳細は Revue intern de L'enseignement, 1922 nº 3et 44, p. 113 et suiv. に讓る)。

(17) 此外國際法律聯合(L' Union juridique internationale)及び佛蘭西文政科學士院(L'Académie fraçaise des sciences morales et politiques)の保護の下に昨年設立されたる「巴里の萬國國際法學校」(L'Ecole internationale de droit internationale)の如きも佛を中心とする一種の文化協同に外ならない(詳細は Revue de droit internationale et de législation Comparée, 1920, no 2, p. 149 et suiv; Revue des sciences politique, 1920, p. 653 et suiv. 參照)。

(18) 若し夫れ佛の内外に渉り、佛を中心とする規模の最も雄大なる文化協同は『聯合國及び友邦間の立法同盟』(L' Union législative entre les nations amies et alliées)であらう。

之は大體に於て『羅典立法同盟』(L' Union législatives entre les nations latines)とも稱すべき實質のものである。一九一九年四月巴里に於て發會式を舉行し、佛蘭西、伊太利、白耳義、羅馬尼、希臘、西班牙、葡萄牙、加奈陀(クェーベツフ州)を加盟國とし(南米諸國や波蘭も參加せむとしてゐる)、民法商法の二大法典を始め、國際私法や民事訴訟法にも渉つて、此等の加盟諸國に共通なる二十世紀の模範的法典を共同に立法せむとするものである(詳細は拙稿統一法の過去現在及び將來、法學協會雜誌三八卷二號七七頁乃至九五頁に讓る。)

尙ほ佛の富豪カーン(Kahn)氏に依つて我國其他各國に設立された財團の如き類の文化協同的施設は總て茲には揭げな

い。蓋し其目的が特に佛蘭西との文化協同に存するものではないからである)。

右に陳べたる所は自ら大戰後の世界に於ける文化主義、國際連帶主義の進展の一方面を證するものであるが、同時に特に佛蘭西文化の提携的價値が大戰以後世界に通認せられ來つた消息を語るものでなくて何であらうぞ。而かも此數多き文化協同の中に在て、佛蘭西は我國に對しては、第一流學者派遣の意氣込と云ひ、年三十萬フラン支出の議定と言ひ、特に日佛文化協同を見ること、尋常ならざる熱誠が溢れて居る。それにも拘はらず今日に至つては我國が、此文化的國際連帶主義の實現に後れ弥せとなつてゐるのは文化國民として不面目の感なきを得ないのである。

三

五　さりながら我等の日佛文化協同の主張や努力は、決して佛國よりの他發的行動に曳き摺られ、又は諸外國と佛との文化的協同施設の風潮に捲込まれての受働的のものではない。我國に於ては之より先き全然自由なる國家本位の立場よりして、日佛文化協同なる新國策樹立の要が既に漸く切迫せるものあることは、我國一部の有識者の痛切に感得して居つた所であつて、早晩一大覺醒運動の自發を見ねば收らない機運に立ち至つて居つたのである。されば前述せる佛蘭西大學使節の來朝は、偶々此の必然的の運命に在つた內面的覺醒運動の自發に、機會を與へる導火線となつたものに過ぎないと同時に、我文化の改新發展を助くべき外來の福音否な天來の福音とも云ふべきものなのである。

そは何故であるか。次ぎにその理由を述べて見たい。

六　抑も我が明治文化の躍進が世界文化史上類例を見ない所であることは、中外の人士の齊しく讃歎する所であるが、其の重なる原因は虛心坦懷に言へば、何としても我國民の外國文明に對する比較攝取能力に依る、西歐の文化制度の補短採長に存することは否み得ない。而して此の我が進步の外部原因を成した西歐文明を分析するならば、少くも明治文化の前半期は、哲學等の例外はあるが、概して英米文明よりも、將た獨逸文明よりも、大體に於て佛文明に負ふ所最も多大であつたことも亦識者の通認する所である。即ち明治文化の進步の外因の半ばは佛蘭西から來たと言はねばならぬ(此點に付ては今春ジョッフル元帥來朝に際し、二月二三日乃至二八日のやまと新聞に、「過去現在未來に於ける日佛關係」と題して、卑見の大體を述べて置いたから玆には再說しない)。

然るに十九世紀の末葉よりかけて二十世紀に入つて此方大戰前までの十數年間は、敢て陸軍に限らず、我國文化界は醫學を急先鋒とし、哲學、法學等を第二陣とし、滔々相率ゐて獨逸文化萬能、獨逸文化心醉に陷り、殆んど獨逸の文化的覇權主義即ち此意味に於ける全日耳曼主義(Deutschtum)の傘下に歸趨屬すとも言ふべき陋狀を呈した。其結果は自然他の種の文化に對する閑却的傾向を生じた。就中羅典文明の代表者たる佛蘭西文化にのみ見出だし得る獨特の美點長所にして、我國の改善進歩の要求にも適合すべき幾多無形の寶玉は、全く路傍の紙屑と同樣一顧をも報ゐられない底の一般的風潮を漸成するに至つたのである(此點に付ても詳細は前揭やまと新聞の卑見に讓る)。

流石に大戰以後の我國は國際的文化協同及び比較文化研究傾向の進勢と相待ちて、稍や此獨逸文化に對する盲目的心醉と精神的桎梏とより覺醒し解放さるゝの初兆を呈すると共に、佛蘭西文化に對する多年の皆旣蝕は少しく晴れて、幾分其の恢光の輝きを見るに至つた。

七　併しそは唯一部の恢興に過ぎない、獨佛兩文化の偏重偏輕の大部分は、今日尚依然として吾人の眼前に横はり、歷々指呼し得べき事實として存して居る。試に官立高等學校の外國語教育に於ける英、獨、佛三語の地位を一見せられたい、澁澤子爵は佛語は繼子教育だも受け得ないと評されたが、誠に其通りである。幸に本來我文部省に於て一部の改善は施したが、尚此三語の分布待遇が如何に不公平なるものあるかは、次項の第六に述べる通りである。而かも之は唯外形に顯はれたる一事例に過ぎない。我文化及び制度の全般に亙り、有形無形無數の偏傾は、略ぼ之と大同小異の狀態に於て、今日尚到る處に彌漫しつゝあることを、認めない譯には行かないのである。

四

八　今如何にして此かる重獨輕佛の跛行狀態が我國に生起したか、又存續しつゝあるか。佛蘭西文化を本位として之を言ふならば、我國に於て佛文化の進展が障碍されたる社會的原因如何。何よりも此原因の考察が先決問題であると思ふ。

私は之に對して次の諸原因を數へるのである。

(第一)普佛戰爭

最も之に動されたのは我陸軍軍人であつたが、而かも其影響は戰後十年を經て我國一般社會に對して漸次顯著となつた。尤も之は獨逸の戰勝其ものが直接原因の全部ではなく、其一半は爾後に於ける獨逸文化の興隆や諸般の制度の組織化的進步にも基くことは認めねばならない。而も勢の趨く所獨逸の勢力をし

で遂には度外に進展擴大せしめる原因を醸成した。尙ほ露獨佛の干涉に因る遼東半島の還附は我國民の對外文化態度に對する影響としては一時的であり且つ大したものではなかつたと思ふ。

(第二) 新興國民としての我國民と獨逸國民との事情の類似又は其外觀と、佛國民との事情の差隔又は其外觀

(一) 國體又は政體に付ては、佛の共和主義、自由民權說は我國と相容れず、反之獨の君主々義國家主義は我國に適合する如き外觀を呈した。之より生じた最も顯著なる影響は我憲法行政法等に之を看るが、その影響の範圍は必らずしもそれに止らない。

尙ほ維新前に遡れば英の朝廷支持に對して佛の德川援助の如き事跡あり、又後の出來事としては幸德事件の巨魁が佛蘭西學者中江兆民氏の門下たりし爲一時多少の累を佛文化に及ぼしたとの說もあるが、前事跡は勿論、後事件とても、取り立てて言ふ程の影響は生じなかつたことと思ふ。

(二) 明治二十年代に歐化主義の反動として興つた我日本主義や國粹運動は、獨逸の國民主義、歷史主義的運動とその意氣相通ずるものあり、一時我國一部の有力者をして獨逸國民との共鳴を感ぜしめた樣である。

(三) 法律に付て言へば、前世紀末葉に於て獨日兩國共に法典編纂に力を注いだと云ふ類似の事情其ものは未だ以て此兩法を結び付ける有力なる原因にはならなかつた樣であるが、現世紀の初頭に東西齊しく新法典國として名乘を掲げた時に於ては、我法典の內容半ばは既に佛法を離れて獨法化して居つた。殊にその時以來新法典國として一と通りの註釋的完成卽ち新規の諸法典の意義適用の確定を急務とする事情に付ては日獨兩法の境遇は他の何れの國々との間よりも似通つて居つた。而かも此獨文法の註釋的論理解釋卽ち概念法學は由來獨逸國民の長技として推さるる所である。西歐風の法典國として後進國たる我法律界が忽ち獨逸法律學の風靡する所となつたのは主として當時の事情の然らしむる所であつた。之と同時に他の半面に於ては此る註釋法主義の我國と、半ば以上判例的不文法狀態に在り、從つて社會法的學風に依つて居つた佛法とは自ら事情の離隔が存した、又我法學界は悠る々々其實質を味得する餘裕もなかつた。此て佛法の長所は自ら看過され勢力の減退を來たした。

(第三) 明治初年の佛蘭西文化萬能に對する反動。

明治二十年代に至つて明治初年以來の歐化主義に對する國粹主義の反動が生じたが、其歐化主義の中心は佛文化に存じた爲、反動も亦主として佛文化に集中する傾向を生じた。

其の顯著な表現と見るべき法律上の反動運動に付て言へば、舊民法斷行、延期の爭及び斷行派の一敗はそれである。此延期論の提租は正當な歸着であつて、之に因る佛文化の勢力頓挫の如きも或程度までは止むを得ない。而かも結果は正當の限界に止らず、其の餘勢の急奔する所延ゐて從來の佛文化偏傾を正反對の極端に導く一因を成した。

今にして思へば舊民法は決して當時の生きた佛法即ち當時までに學說判例に依て進步し來つた佛法を代表したものではない、其實半ば殘骸に化した那翁法典に依つたのであつた。若しも舊民法にして當時に於ける佛民法の最新の進步を代表したものであつたならば、あれまでの非難も受けなかつたであらう又あれまでの失敗は見なかつたことと思ふ。現に一面獨新民法に依ると共に他面進步せる佛民法をとり入れた瑞西新民法はその佛法的分子の採用に基因して獨法以上の成功をかち得たのである。此意味に於て舊民法は佛民法に對して最負の曳き倒ほしの結果に了はつた意味がないとは言へない。

(第四) 獨文化の形式主義と佛文化の實質主義との牽引力の相違

(一) 獨文化には形式の整頓、學習の組織の利便と言ふ武器があつて、之は何人からも容易に認められる特長である。反之從來の佛文化に蓄積された實質的優秀性は少くも其の或部門に在ては其學習の困難不便に蔽はれて看過され易い不利が纏綿して居つた。殊に從來の獨佛兩文化の間には形式の外觀上に新舊の相違が往々存して居つた。

獨の新法典の新式の外觀と佛那翁法典の舊式の外觀との對照がその一つの適例である。而も生きた佛法の內容は其實六七分通り不文法であり、然らざるも特別法であつて、近世初頭の那翁法典の實質は之等に依て何時の間にか廿世紀式の現代法と新陳代謝して居るが、我國では專門の學者すら案外此實消息に通じて居らなかつたことは、妄りに法典の條文の表に拘泥して佛法の舊式を批評し去る類の論文が從來多數を占めて居つたのでも分る。英法は無論不文法であるが、その不文法たることは夙に天下周知のことであるに反し、佛法は法典國なりとの那翁時代の過去の事實が、今日の觀念となつて居る爲、不當に眞價以下に評價される損失を免れないのである。獨佛兩文化の對照は、恰も金ぴかの新都市たる伯林と、澁い趣味の舊都市たる巴里とのそれにも比すべき或ものがあると言ふのは、或點からは必ずしも無稽の言ではない樣に感じられる。

(二) 獨文化の抽象的性癖煩瑣的性癖は衆俗に對しては寧ろ神秘高尙の感あらしめ、佛文化の實益的性癖洗練されたる簡易の

性癖は兎もすれば却て淺薄卑俗の思ひあらしめる傾向がある。

（第五）宣傳に關する獨逸の普佛戰爭後の積極主義と佛蘭西の從來の消極態度との相違

此相違は、我國民に對しても兩文化に對する判斷信用の上に不當な割增割引を生ぜしめた。必らずしも我國に限らず諸國に於て前世紀の終頃から往々佛蘭西文化衰へたりとの聲を聞いたのは、主として右第四第五の二事情に基因して居つたと思ふ。

九（第六）我外國語敎育制度に於ける佛語の偏輕。

抑も我國の外國語敎育に於て、英獨二語を偏重し佛語を偏輕するの跛行的組織は、前世紀の末葉以來我國家敎育制度の根本的缺陷を成して來た。我國に於ける佛蘭西文化不振の最も重大なる禍因は恐らくは此執拗にして永く改められざる缺陷に伏在すると信ずる。從て此點に付ては少しく詳述の必要を感ずる。

我中等の外國語敎育に於ては、獨佛兩語は共に全然度外視せられ、專ら英語本位であることは今更言ふまでもない。此點に付ても大に批議すべきものがあるが、議論の餘りに多岐となるを慮り今は暫く論じない。玆では最主要の缺陷卽ち外國語敎育組織の正系にして且つ其の脊髓を成すものとも謂ふべき高等學校のそれのみに就て謂はう。

高等學校の外國語敎育に付ては、二十餘年前全國に六校を存した時代に於て既に英獨兩語に偏傾し、佛語に付ては單に第一及び第三の兩高等學校の第一部の一部分に於て之を第一外國語として認めたに過ぎなかつた。其の擴張、就中大正七八年に於ける敎育制度の大擴張の結果、昨大正十年に至ては高等學校の數は十七を數へることゝなつたに拘はらず、此等の增設諸校に在ても何れも判で押した樣に英獨兩語を必修外國語とし、却て最も不足とせらるる佛語の級に至ては其内の一校にだも之を置かれなかつた。其の爲め英獨二語と佛語との間に存して居つた不均衡は往年のそれに幾倍し、比例的には國家の佛語敎育は益々衰退に陷る結果となつた。

而かも後段述ぶる如き大戰以後佛語佛文化の振興の世界的大勢は我國にも波及し、佛語に對する我國の學問上及び諸般の社會上の必要と、子弟及び父兄の佛語に對する需要とは共に著るしく增大し、私立の諸學校に於ける佛語敎育は夙くも之れが反映として之に順應するの施設と繁榮とを實現し、東京帝國大學の如きも此新機運に適應して高等學校に於ける佛語敎育の不足を補ふの途を講ずるの止むを得ざるに至つた。唯獨り肝腎なる本家本元の文部當局者のみは、此益々增大し來る社會要求に順應するの措置を全く缺いて居つたのである。

右の缺陷は單に高等學校敎育の缺陷たるに止まらなかつたと

とは言ふまでもない。即ち之が爲め一面には中學教育に於ける佛語の發達を抑止し、他面には次の（第七）に述べる通りに、公私の海外研究者の英獨佛に於ける分布をして、國內教育同樣の偏頗に陷らしむるの禍因を成した。更に又（第八）に一言する如く、大學に於ける羅典文化の教授又は研究をも不能に近からしめた。延ゐては弘く今日我學界及び官民全般の羅典文化の不利用も亦此佛語教育の不備に胚胎する所勘くないのである。而して又此の如きは我中學校令、高等學校令、大學令、及び高等教育會議等に於ける英獨佛の三語及び三文化に對する平等待遇の精神に戻つた嫌があつたのである。

幸に、我文部當局は漸く玆に察知する所があり、今春に至て浦和、大阪、福岡の新設三高等學校の一部、即ち文科又は理科に於て佛語を必修語とするに至つた。其爲佛語の繼子扱ひは幾分の緩和を見るに至つた。但し右の緩和を以てしても現狀は尙且次の通りである。

現存高等學校の數は、新設の七年制東京高等學校をも數ふれば二十一を算するが、此七年制の東京高等學校に於て佛語級を三年級又は、五年級より存置するや否やの問題は、未決の樣であるから暫く別とし（之とても初年級より佛語を置くを理想とするが）、自餘廿校に付て言へば、英語獨語は此悉くの學校に必修語及び選擇語として存置され、佛語は反之上述五校に置かれるに過ぎない上に、文科又は理科の何れか一のみに止まつて居る。故に必修語のみに付て言ふも英語及び獨語級は、各高等學校の三ケの年級を合算すれば、各々百貳拾を數ふるに對して、佛語の級は全國を通じて僅に拾五に過ぎない。而も或高等學校例へば一高に就て見れば文科に在ては英語級は三組、又理科に在ては英語級三組、獨語級二た組となつて居る、他の高等學校に付て全部の高等學校一覽が揃はないので今一々調べては見ないが或程度まで之に準ずることと思ふ。故に佛語級に對する英語級又は獨語級の割合は、到底佛十五に對する英又は獨の百貳十位の割合には、止らないことが分る。之は言語に絕へた不均衡ではあるまいか。

されば上述二十年前の不均衡は今春の佛語級新設を以てしても尙且つ改善さるゝに足らないのみならず、比率より言へば一層甚しくなつて居る。今日社會的不平等として財產組織の不平等は絕叫されて居るが、此教育組織の不平等に付ては我國一般識者が全く之を看過して居るのは寧ろ不思議である。

所謂高等學校の六年增設計畫なるものは明春及び明後春開設の靜岡、姬路、廣島、高知の四校を以て終了するものと聞く。知らず文部當局は少くも此新設高等學校に對して今春同樣佛語

級を設置するの方針なりや否や、私共は未だ此點に關する積極的の吉報を耳にする能はざるを悲しむで居る。

(第七) 海外留學生及び視察者の獨佛に於ける分布の過不及

海外視察者就中在外研究員は、我國特殊の仕上教育を受ける文化的選良で、何れも我國の文化的指導階級を或は既に形成し或は將來形成すべき人々である。此等の人々は皆に歸朝後諸外國の文化の我國に於ける最有力なる紹介者たるのみでなく、自然其最も長く滯在し、見學し、理解せる國の文化を第一位に推賞し鼓吹するを常とする。故に海外留學生又は視察者の獨、佛、英、米等に於ける分布の如何は、是等諸外國文化の我國に於ける勢力の消長に至大の關係を有すること明である。

然るに此分布に付て見るも現世紀以來佛は甚しく閑却され來つた。此佛國閑却の原因は上來述べた諸原因に基き、重獨輕佛の一般的風潮に因ることは勿論であるが、就中前述の外國語教育の偏傾がその最大原因を成して居る。蓋し此等の人々にして假令佛を研究又は視察の主なる舞臺と爲さむと欲しても、其在學時代に受けた語學教育の關係上、其志を遂するに不便なる爲、自然佛蘭西滯在を省略するに至る。又偶々滯在しても之を從とするに止まる、從て佛語其他の素養や期間の關係上佛蘭西文化制度の所長を味ふに及ばずして去るのは惜しむに足らない。そして此等の佛蘭西を理解するに至らざりし人々中、佛蘭西を知らずと告白するは稀れなる君子であつて、佛蘭西は語るに足らずとけなし去る當世人が多數である。而かも此多數有力者の論爭が如何に世論を支配するかは謂はずして明である。

(第八) 諸大學に於ける佛蘭西關係の學科の教育の不足又は其研究の不振。

例之帝國大學に於ける佛文學の講座は英獨文學と異り從來東大に唯一つ存したのみ、今や漸く京大に開かれんとするに至つた。又佛蘭西法の講座の如きは東西兩帝大のみに之を見るに過ぎない、私立諸大學には英法又は獨法の講義は近年其の再現を見るに至つたが、佛法の講義は今日尚之を缺いて居る。帝大に於ける佛文學や佛法の研修者の如きも高等學校に於ける佛語級の過小の結果、英獨の文學又は法律の研修者とは比較にならない少數である。又一般教授の研究態度の如きも、學生時代の學習傾向、語學、留學地等が因を成して、自然獨學風が主となり佛學風は最も後廻しとなるのが、例外はあるが、今日尚一般である。就中醫學の如きは、今日尚官私の諸學校おしなべて此偏傾が最も極端に發露して居る。但し此點に付ても近年殊に大戰以後多數の學科に付て改善の趨勢が相當に看取され得る。

(第九) 綜合的原因としての獨逸文化萬能思想及び其反面に於

ける佛蘭西文化蔑視思想

以上の諸原因が相集積して、諸般の教養の上に、施設の上に、利用の上に、到る處獨逸文化の偏重と佛蘭西文化の偏輕とが行はれ來つた爲、自然獨逸文化萬能、佛蘭西文化無能の思想が、我社會に彌漫する形勢を増長せしめた、而して此思想が亦彌が上にも、之に養成せられたる者の増加に從ひ、上記の偏頗を募らしめた。畢竟相互に因となり又果となつて重獨輕佛の缺陷を極端に導き來つたものに外ならないのである。

一〇　然るに最近の社會實勢に依つて觀察するに、時世は既に廻轉し、上述の諸原因は今や其一半は其實消滅に歸し、他の面目一半は一新の運命に押し詰められて居るを見るのである。

先づ第一の原因及び第三の原因が、既に時の力に因つて一掃されたことは勿論である。

第二の原因も亦當時と今日とは實情を異にすること明白である。唯特に(三)の點に就て注意すれば足りやう。

大戰以後は先づ以て法律國民主義が衰へ法律國際協同主義が盛んとなつた。その利益は元より至大であるが、半面には自國特殊の社會事情に乖離する法律發生の危險も伴ふ、それだけ比較國法學が重要になつた、之には獨の法律國民主義では駄目で、佛の比較國法學に依らねばならない。第二に大戰以後は個人自由の資本主義的原理を基調とする現在の如き各國の法律では追付かなくなつた。法の社會化を必要とするに至つた。而かも其社會化の原理を何に求めるか、其具體的構成を如何に定めるか、今日の如き過渡的動搖の時代に於て、立法に、解釋に、之を解決して中正を得るは眞に容易の業でない。此時局艱難に際しては、最早や獨逸法の特長たる概念法學的主潮では間に合はなくなつた。主として佛蘭西の唱たる法律の新理想主義即ち連帶的原理と社會法學的方法とに依賴せねばならなくなつた（總べて此點の詳論は法律評論社創立十週年記念論文集所載、拙稿『法律思想の發達』に讓る）。此くして獨逸法の學風と共鳴した我社會の昨日の事情は、今日一變して佛學風と契合する運命となつて來た。

第五の原因に付ては、大戰後の佛蘭西は、夫の外務省所管の對外佛事業奉仕局（Le service des seures françaises à l'étranger）を中心機關として、他國に對し大規模なる文化的奉仕の國策を樹つるに至つた。之は佛文化が如實に他國文化の利益と進歩とに貢獻することによつて、自然間接なる佛文化の宣傳となる趣意である。

第四原因に付ても、形式の整頓に於て、又他國學徒に對する利便なる學習的組織に付て、佛蘭西には近來其面目の一新を認

めしむる事實の表はれがある。例之巴里大學でも又地方の諸大學でも、特に外國留學生に對して各種の佛蘭西、文化の大綱を知得せしむる講義等の施設に意を用ひ、又大學教授等によつて信頼するに足る大體の教課書が相踵いで出版されるを見る。又從來に於ても佛研究に關する組織不備の我邦學者の弊は、一には佛の組織に既に存在して居つた獨特の長所に通ずるだけの明を缺いて居つたことも其一因を成して居つたことと思はれる。

此外前に一言した古い法典に依る舊式の外觀から佛法が是まで蒙つて居つた對外信用上の不利益の如きも、既に羅典立法同盟の成立を見た以上、今後其目的の實現に連れて減却するのみならず、羅典法の眞價は之に依て益々高まり且つ充分の認識を得ることゝなるであらう。

更に先度の世界大戰は端なくも佛蘭西の底力が有形の方面のみならず、精神上殊に文化上に如何に大なるものあるかを証據立てた。獨人の戰爭に對する、科學的準備と其れに基く不意の攻撃とに對して、無準備の佛人は一々科學的創造力を發揮して、之に對抗し、遂には之を凌駕した。毒瓦斯に付て爆藥に付て、航空機に付て、裝甲自働車に付て、攻撃砲に付て何れもそうである。之等に要する材料の如きも、獨は其本國及び佛北部の占領に依て絕對に優勢であつたのに、佛が此點に付ても他國の援助をからずして、遂に右の如き優勢を占めたのは、全く其文化の底力に因るものに外ならない。之が大戰前佛蘭西文化に對する眞價以下の評價の傾向を一掃する一因子となつたことも勿論である。況んや大後戰に於ける佛文化の振興の形勢顯著なるものあるに於てをや、(次項第五)。從來自國文化の諸國に於る不當減退に對して、往々顰そめられた佛人の愁眉も今は晴やかとなつた觀がある。

第六の原因に就ては現狀は尙我文化的缺陷の最大禍因を成して居るが、若し今春の新施設が一大刷新の端緒たる意味は持たないと假定しても、而かも何時までか時世の進運に逆らつて此不平等の組織が持續されやうぞ。

第七及び八の原因に就ては、獨逸文化交通に對する世界的封鎖と、獨逸自身の故意的閉鎖とに因つて、一時日獨文化交通の杜絕を來たし爲に我留學生視察者の獨逸在留は勿論、我學界の研究上にも顯著な消極的結果を生じたが、それは元より一時的變態に過ぎず、今日此種の一時的故障は大部分消へ失せた。但し上來述べた持續的社會推移に因て、留學視察及び研究上の佛文化閑却も、漸次的改新の兆候は、或程度まで認め得られないではない。而かも右述外國語教育の偏頗等が尙甚しく纏綿して、此

二點の缺陷の大部分を依然たらしめて居る。

第九の原因に至ては、以上諸因子の相互的、綜合的因果關係である以上、右の諸推移に伴隨して決定されるのは素よりである。再言すれば此點に付ても大戰以後或程度まで新生面が開けて來た事實を看取するに難くないが、それは尙全局面展開の端緒と見るを得るに止まる。

以上我國に於ける佛文化偏輕の社會原因に關する推移に就て考察せる處を要約すれば、第一乃至第五の原因は大體に於て最早跡を絕ち、唯だ第六乃至第九の原因の尙大部分殘存するのみである。

而かるに玆に注意すべきは、前五者は第一次的基礎的原因であつて、後四者は第二次的派生的原因である。既に基礎的原因が消滅したにも拘はらず、其派生的原因のみが殘存するは何うしたものであらうか。之は畢竟基礎的原因の客觀的消滅が、未だ主觀的に我國朝野の識者の間にすら遍く且つ充分に認識さるゝに至らない爲である。

此點よりすれば、此等の諸原因及び新陳代謝の眞相が輿論の理解を得ると言ふことは、我文化の爲に正に刻下の一急務と斷言せねばならぬ。

五

一一　然らば如上の外國文化に對する我國の偏傾的態度の持續は、我國にとつて果して正當であるか又は得策であるか。

之れが批判を爲す爲には、上述の社會的考察の外に、尙ほ各國文化の價値殊に佛文化の價値如何を究明することが先決問題である。

抽象的に言へば各國文化は、各獨特の長所を有すると同時に、又短所をも免れないことは言ふまでもない。特に我國文化に最重大の關係ある西歐文明を包括して言へば、羅典文明、「アングロサキソン」文明。チユートン文明各自獨特の長所短所を有すると等しく、此三種文明を代表する佛、英、米、獨の各文明に付て言ふも、各自獨特の長短あることは今更言ふまでもない。

然しながら具體的に且つ特に佛文化の價値に付て言はうか、佛文化が他の如何なる種類の文化に比しても優るとも劣らない眞價値を有することは、世界學界の間には定評の存する所であつて、今更吾人の辯を蛇足とする。併し佛文化の爾かく無視されて居る我國の情勢に對しては、此分り切つたことに付て一應駄目を推すのも強ち無用ではない樣に思ふ。

(第一)佛文化の本質的價値は優秀である。

先づ佛語が從來に於ても世界に於ける用語として如何なる地位勢力を占め來つたかは、佛語を閑却する我國民の想像以上に在る。商業上には世界の三分二に行はれると稱する英語の弘通を第一に推さねばならないが、此範圍に於ても英語に次ぐものは無論佛語である。然かし社交上、儀禮上、國際會合上、學術上等商業以外の諸般の用語、殊に文化上の用語としては、佛語を以て世界第一とする。英語と雖も之に及ばざること遠い。大戰以後國際會議や國際的學會等に列席された諸家の實驗談に聞くも、此等に於ける佛語の勢力が世界第一なるを知るに足る、即ち例之或本會議とか行政とかには專ら佛語に依り、又佛英兩語の併用が認められる場合にも、理解者の多い爲め佛語に依る方効果が多大であると言ふことである。

此樣に佛語が世界的勢力を有するのは、主として其表言の豐富にして且つ措辭の優美なると、而かも文法の正確にして思想の明瞭なるとに基因する所少くない。而も他の一面に於ては種々なる範圍に於ける佛語の勢力は、一つにはその諸範圍の事項自體に付ての佛文化の價値の表現に外ならぬことをも忘れてはならない。

此外美術等に關する佛の他位の如きも同樣である。

若し夫れ佛蘭西の科學に至ては、發明創造の天才的國民としては他の追隨を許さない一事より推しても、その獨擅場に屬するものの豐富なるを想察するに餘りあるであらう。例之自然科學に在ては、世界第一の目ある數學を始めとして、天文學、物理學の如き、又其應用としての造船、砲工、航空等の如き、又醫學に就ては細菌科、神經科等の如き、人文科學に在ては社會學、哲學、文學、法學の如き、又法學中の特長としては比較法學其他の社會法學の如き。社會思想としては近代の始めに於ける自由平等思想の如き、其の延長としての現代に於ける社會連帶思想の如き、何れも人類共同の進歩に偉大の貢獻をなして居るのである(拙話、前掲、過、現、未に於ける日佛關係參照)。

右は素より極めて一端の消息に過ぎない、佛蘭西文化、科學の各方面に於ける殆んど無數の獨特の長所と、世界的の貢獻との紹介に付ては、知識の狹い私の到底企て及ぶ所でない。是等の詳細に至ては先年桑港世界博覽會に出展されたる佛國一流學者の分擔執筆に係る「佛蘭西科學」(La science française, 2 volumes, Paris 1915)に付いて知られたい。そしてその內の法律學に付ては本年正月一日乃至七月十五日中央法律新報連載の「ラルノード學長佛蘭西の法律學」なる邦譯山路、千葉兩學士の分担がある。此外重德氏の現代のフランス及びフランス文化の

最近知友の二著を讀まれたい。

(第二) 佛文化は理論と實用との中庸を得て居る特質を有する。

凡そ一國文化は進歩して居れば居る程多樣複雜を極めるものであるから、佛英獨等の諸文化の特質に付ては、之を統一的の鑄型に入れて批評することは、元來無理な注文ではあるが、大樣次の傾向を認め得る樣に思ふ。

英文化は具體的、實用であるが、多くの場合餘りに理論と系統とを缺く憾みがある。獨文化は哲學的であり、概念的であり、論理的であり、緻密であると言ふが、此等は明かに其長所であると同時に轉て其短所となり動もすれば實益を離れて抽象、煩瑣、空疎の形式論に失し、兎もすれば複雜、鈍重澁滯の嫌がある。

佛蘭西はルソーに依て見れば理想の本國であり、コムトによつて見れば現實の本山たる觀もあるが、近代以降の文明史を大觀すれば、寧ろ此兩極端の中庸を得るに近い。即ち系統も立ち、理論も透明で、其觀念と表言とは洗練された簡明と正確とを有し、而かも實益と終始するの適度性を示すものは佛文化であると思ふ。佛蘭西思想が觀念の直截、理論の嚴正と、實在の直視直覺の正當と、此二方面を兼ねた天賦の能力を有することは、近代思想形成の重要なる時機に際會して、屢々空疎にして迷宮にさ迷はしめる思想混迷に解決を與へ、正しき出口を指示した數多い例證によつて示されて居る。アリストートルの思想を變へしたデカルトや、近代的比較法學を開始したモンテスキューや、近代化學を創成したラヴォワジエや、細菌學を建設して近代醫學の新路を開拓したパストゥールや、スエズ運河を開通したレセップや。何れも之れである。

特に法律に就て言へば以上の相違は獨逸の概念法學、佛蘭西の新理想法主義、即ち概念の正確は棄てることなく、理想と現實とを調節して之に配合する特長の相違となつて表現して居る。夫の獨法は貴族的、官僚的であり、佛法が民衆的でありと言はれ又獨法が偏狹硬直であり、佛法が彈力性を有すと言はれるのも之に基因する。

(第三) 佛文化は英獨兩文化に比して他國民に適合し、利用に容易なる特質を有する。

之は主として社會的科學の範圍に就ての事である。そして特に法律文化に付て言へば、獨逸法律文化の軍國主義的性癖なること又力を以て法や權利の基礎とすると言ふことは、大戰中佛英其他の學界によつて痛論せられたが、此點は私の無條件に同意するを欲しなかつた所であり、我國學界に於ても公正な論評を見た。又之と牽聯して獨逸法律文化は所謂獨逸主義により文

化的覇權を獲得し、又文化的覇權を通ほして政治的覇權を世界に行はむと企圖した形跡ありと言ふ。フイエ、ブロンデル、ラルノード、オーベリ諸家の說の如きも、今日の如き獨逸の頽勢に際しては今更力を入れて其の當否を論ずるは、最早や時後れの遊戯に過ぎない感がある。而かも例へば獨逸民法典を捉へて言へば、その內容はあまりに國民的であり、それが嚴密な論理で束縛し屈伸性を奪ふ結果、益々他國民には不適合のものたらしめる嫌あることは認めねばなるまい（Auléry p. 234 et 235參照）。

英吉利に至つては所謂 splendid isolation の傾向は强ち外交の範圍には限らず、文化の範圍に於ても從來根を張つて居つたと形容するを得やう。詳言すれば英文化の實質は由來餘りに國民本位であつて他國文化と相隔離し相互的影響性同化性に乏しい憾みがある。

如上の獨英兩文化と異り、最も多岐多方面であり、殊に世界的人類的性質に富むで居り、從て他國にとつて之を採用し、之を自國特殊の事情に同化せしむるに最も容易なる實質を有するものは佛文化であらう。

（第四）佛文化は世界的に各國文化を研究する上にも、又自國文化を世界的たらしむる上にも、利便である。

(一) 佛文化は決して羅典諸國の文化の代表者たるに止らない。佛蘭西は實に各國文化の世界的市場であつて、又それ等の比較研究の本場であると言へる。各國の文化に通曉し、各國の文化を對比するには、佛文化を通ほすことが、他の文化を通ほしてよりも遙に效果を收め得ることは定評が在る。

(二) 佛蘭西は一國文化てふ金屬を世界的通貨に鑄造する所であるとも言ひ得やう。蓋し佛は淡白公平なる眞理の愛好者にして、其價値判斷と採否去就とに付て其對象たる事項の傳統の如何に拘泥せず、その淵源が自國のものたると外來のものたるとに依つて差別を設けない。加之複雜の內容を平明に說明するに付て獨特の能力を有する。英國の代議政がモンテスキューの研究を待つて世界的となつた如きは何人も知る一例である。佛蘭西を通過しないで世界的となつた大思想や文明的大原理なしとのギゾーの詞は誇言ではない。

(以上第一乃至第四の諸點に就ては、當該箇所に於て旣に與げたる諸書の外、尙次の書參照)

Guizot, Histoire de la civilisation en France;

Alfred Fouillée, La psychologie du peuple français;

Du même, Esquisse psychologique des peuples européens;

Du même, Tempérament et caractère; Du même, L'Idée

moderne du droit; Du memé, La France au point de vue morale; G. Matisse, Le mouvement scientifique contemporain en France, Collection Payot.

Gonneau et Sénéchal, La France et les français, 1920 spéc. p. 203 et Suiv.

Histoire de la Nation française des origines préhistoriques jusqu' à nos jours, avec une introduction de G. Hanotaux 15 vol. 1910, Librairie plon et Nourrit. 等)。

(第五) 佛文化は特に我國民に適合する性質を有する。

英語、英文化よりも、獨語、獨文化よりも、我等同胞の頭腦に入り易いのは佛語、佛文化であることは此等三者に渉つて學んだ者の感ずる經驗である。日佛兩國民は數多の點に於て共通性を有すと謂はれる。ジョッフル元帥は其例として、佛の騎士氣質と我武士道と、又佛の嗜好と我美術的思想との類似を指摘せられたが、兩國民の社會連帶的思想の如きも此例であるし、又玆に謂ふ如く佛語が我同胞に適して居る點の如きも、矢張り此國民性の共通なる事が其根柢を成して居るのではないかと思はれる。

以上は從來に於て通認せられ來つた佛蘭西文化の全體としての價値論である。之に關聯して注意すべきは『佛文化の停滯』なる語を從來往々聞いたことである。私は此語にも事實に觸れて居るものがあつたと認める。例之發明發見は多くの場合佛人の獨擅場であつたと同時に、それはやりつ放しで仕上げは獨人に委ねたが如き、形式の整頓、組織の完備を忽緒に附した傾向の如き、遂に他國民を拔く進歩を一時に遂げて仕舞つた爲、其後の注意を怠つてゐる間に、他國民の濶大的採用と、改良とによつて追越されたと言ふ如き部分は必らずしも少くない。佛國民は金剛石を掘出し、獨國民は之を磨くとは、獨逸ボン大學のクローメ教授の詞であるが、之は多數の場合に當つてると思はれる。此樣にして佛文化には斑らがあつた。佛文化の停滯と言ふ事實は此意味に於て存在したと言へる。併しそれは從來最大の尊重を享受し來つた佛文化の世界的地位に對して言はれるのであり、又特殊の部分部分に付ての意味に過ぎなかつたのである。唯それが誇大に響いて佛文化の對外信用に過度の損失を與へたのである。全體觀としての以上の判斷を妨ぐるに足らないのである。

三 (第六) 大戰後に於ける佛語、佛文化の振興

然るに玆に最も注意を要する點は、是等佛文化の諸特長は、大戰後に至つて更に著大な進展の形勢を示して來たつたことである。

（一）抑も前に一言せる佛文化の停滯なることは、縱令部分的にもせよ何に基因したか、私は之を佛蘭西國民の天才的資質、所謂名人氣質に歸して居る。發奮努力するときは忽ち跳躍的進步を遂げ時流を拔いて其模範となる爲、そこに綏みを生じて少なくも部分的には一時停滯の傾向を來たす。其結果としての不備や相對的退步に刺激され、一度び桃源の夢から覺めれば、又起つて世界の耳目を新にする跳躍をなす。されば停滯期に付いて見れば他國に劣る部分的缺陷を呈するが、一と度飛躍する時は其缺陷の部分に付てすら他國を凌駕し、之が模範となる。英のダイシーであつたと思ふが、國民の進步の態樣にも二種あることを說いて居る。一は不斷的漸進主義で英がその典型である。他は回歸的躍進主義で佛が其典型であると言ふのである。此觀察は確に肯綮に當るものがあると思ふ。

然るに大戰以後に於ける佛蘭西國民の自信と努力との增大、文化的國是の確立、國際的地位の向上等に因る、佛文化の品質的改善と、利用價値の增進と、之に伴つての各國に於ける佛語、佛文化の社會需要の增加と、勢力の普及とは、寔に識者の耳目を驚かすものがある。特に法律に付て言へば大戰以後に於ける佛法進步の原動力と目すべきものが四つあり、同法の今後は益々刮目に價するものがある。此事は恰度今月の法學協會雜誌にアルザス、ロレーヌの法制に就てと題する論文の結論に述べて置いた。然かも同樣の徵候は他の學科に就ても看取し得ることと信ずる。

是等の實勢に依つて見れば、今や佛蘭西には十八世紀末から十九世紀初頭に亙つてのあの大飛躍の時機が回歸し來つたものではないかと考へられる。故に大戰前の部分的停頓に見て、最近の大活動期に入れる佛文化を閑却するは自から二重の遺算である、佛國民性の理解なきに座する誤りである（前揭拙稿）。

他の半面に於て獨逸文化は何うであるか。私は獨逸の混沌たる有樣や支拂不能の報道に接しても、獨逸の滅亡と言ふが如き豫想には耳を傾けない。併し大戰に因つて獨逸が受けたあの絕大なる物質上、精神上の打擊は、其文化をも衰耗せしむるの影響を及ばさねばやまないことは今日では殆んど明白となつた。又事は不合理に相違ないが、大戰以後獨逸文化は各國文化の協同的進步圈より疎外せられる持續的實狀の下に立つて居る。是等の實情に照らして考へれば、同文化は恐らく相當長き將來に於ては、從來に於ける程の文化的活動力を恢復し、能率を發揮する見込みがない、又他國に對しても從來の如き文化的貢獻を爲すことは望み得ないと思ふ。

此秋に方り獨逸文化の衰頽を補つて、益々倍加的の貢獻を他

國に爲し得るもの、又從つて文化提携の對手として各國の重視に價するものとしては、先づ以て佛蘭西文化をその隨一に推さねばならないことは、同文化の本質に付いて上述した所に由つて見るも明かである。

一層弘く言へば大戰以後は獨逸系統に屬する墺太利其他の文化は一般に衰頽に趨き、佛蘭西系統に屬する伊白其他舊新諸國の文明は一般に進勢を示す。此點よりするも前者を代表する獨逸文明と、後者を代表する佛蘭西文明との消長並に其利用價値の分かるる所を認めざるを得ない。

(二) 更に獨逸文化の特色と、佛蘭西文化の特色との間には、世界に於ける新時代の文化的傾向に徴して、隆替の徴候が仄見える。再言すれば上述第二乃至第四の獨逸文化の特色は、此新傾向と逆行するを免れないと共に、其れ等の佛の諸特色は恰も此新傾向と契合する。

玆にも法律に付いてのみ一言しやう。此範圍に於ても大戰後顯著なる世界的趨勢は、新理想主義にある。法律の動狀に付いて之を言へば、概念法學凋落して、比較法學、判例法學其他の社會法學の隆興が世界の大勢たらむとする。又法律の靜狀に就いて言へばマルキシズムに對して、ソリダリズムが優勝せむとする。之れ即ち獨學風、獨思想と、佛學風、佛思想との隆替を語るものに外ならない(前掲、拙稿、法律思想の進步、參照。尙前項第二原因(三)の推移對照)。

是に由つて觀れば、茲に述べた如き、佛蘭西と多數文明國との間に種々なる文化協同の關係が開始された一般的現象は、決して人爲的の出來事ではなく、時運の自ら然らしむるに因るものと認むべきではないか。

六

一三 以上述べた處に由り、私は我文化の現狀に對して、批判を爲すを得るに至つた。

先づ我文化の跛行的狀態は、文化觀念上又は研究方法上、不正當、不合理のものなることは蔽ひ得べくもない。

蓋しそれぞれの特色ある數文化中の一に偏傾して他を遺却するの文化方針が、學問研究の方法として幼稚たるは言を須たぬ。況んや其遺却が西歐文化の明星とも云ふべき佛文化たるに於てをや。而かも此の如きは單に遺却されたる文化即ち佛文化の特長より生ずる利益を享受する機會を、我國民に對して遮止するには止らない。我國多數者の偏倒せる文化即ち獨文化其ものに對してすら眞の理解を得るの途ではない。即ち該文化の前には盲目となり唯單純に之を受容するの弊害に陷るを免れな

い。抑も國際文化の交通及び影響の密接鋭敏なること今日の如き時世に於ては、他文化の利長を逸するの損失も憂ふべきであるが、他文化の短弊の累を蒙るの危害は更に一層畏るべきものがある。之は恰も外國發見の新藥の輸入の利害と其趣を同ふする。此利長を逸せず而かも此危害を避けるが爲めには、諸文化に行き亘つての偏せざる比較と、國民本位の考察とに依る外はない、再言すれば自國的比較文化研究の方針に依る外はない。

凡そ一國文化の進度を測定する一標準は、外國文化本位なるか、比較文化本位なるかに在ることは、各國文化の歴史及び現狀の實證する所である。若し夫れ一國文化が一外國文化に偏傾するの域を超へて、之に隷屬するの實狀に在るとしたならば、そは單に其國文化の幼稚なるを表白するには止らない、正に文化的國家としての獨立を失へるもの、その社會の一大恥辱であると謂はねばなるまい。

私は敢て我文化現狀を以て隷屬的なりとは言はない、併しながら果して比較本位なりと斷言するを得るや否やを疑ふ、否な今日尚未だ外國文化本位たるの域を全く脫却するに至つたと斷言し得ざるを悲しむ。

而かも此の如きは我國に於ける此等文化の隆替に關する社會原因及び推移に照らして、必然不可避のものではなく、又正當の根據あるものでもない、何となれば我國に於ける佛文化認識の障碍たる基礎的社會原因は最早大體消滅せるに拘はらず、唯我社會が之を意識すること充分ならざる爲に、派生的障碍原因のみが殘存しつつあるに外ならざることは、旣に詳述せる通りであるからである（四項參照）。

勿論私は明治初年の佛文化偏傾をも謳歌する者ではない。否な之も勿論理想には遠いのである。唯其の偏傾は當時の事情に照らして諒とすべきものあるを思ふのみである。又私は次いで到來した獨逸文化の隆興に對しても、彼我新興の國情類似せる所ありし時代には、止むを得ざるものありしと考へると同時に、獨逸文化の我國に齎らせる寄與の方面に付ては、之を承認し感謝するに吝かでないことは、其以前に於ける佛文化の貢獻に對して然ると同樣である。唯獨逸文化に對する信賴畢に極端に奔せ、自然延ゐて他文化を壅塞するに至れる弊短は、獨逸文化の利長の大なるを以てしても、之を償ふに足らざるに至れるを如何せん。加之時代も疾くに回轉して大戰後の今日に於ては獨文化に依賴すること爾く多大なりし事情は旣に過去に歸した。

之と同時に佛蘭西文化が新時代の要求を充たし、今後の進歩に貢獻する部分は益々擴大して來た。我國に於て重視すべき外國文化の第一列には佛蘭西文化は如何に內端に見積つても之を

置かない譯には行かない（四項社會推移、五項第六）。それにも拘はらず今日に在て尙ほ現狀の如き獨佛兩文化の間の偏頗が持續されて居るは、社會的考察上正當の根據を有せざるものと斷言せざるを得ないのである。

而かも前にも一言した如く此社會的根據の推移が、我國一般識者の間にすら未だ充分の認識を得るに至らないのは、我文運進展の爲に遺憾とする所である、此點に付ての我社會意識の覺醒は寔に急務中の急務であると思ふ。

一四　更に轉じて實利上、政策上の見地よりすれば如何。

先づ專ら自國的立場から言はう。

曩にも一言した通り我國文化の從來の進步は何としても西歐文明の攝取と利用とに職として由るものであることは否むべからざる事實である（三項）。我國民將來の理想としては、國民的獨創に依て、日本文化をして西歐文化以上に出でしむるに在ることは、言ふを待たないが、此大志を成し遂ぐるには無用の勞力を節約して出來得る限りの精力を要領良く使用せねばならぬ。其爲には西歐文明に於て案出濟み、試練濟みのものに對して、眼と耳とを塞いで、重複的に創造的勞力を徒費して居つては追付いた話ではない。既成の智惠經驗は宜しく最少の勞力を以て自國に收め、之を土臺とし、出發點として、更に其上に出でる所の創造に主力を傾注するのが賢明な方策である（詳細は拙文比較法學の根據、法學協會雜誌三七卷九號殊に、七六頁乃至七九頁に讓る）。

然るにその西歐文化の主要素としての佛文化の地位は上述の通りである（五項）。佛文化閑却の現時の實狀を此儘放置すると改新するとは、世界の寶庫より運び出される智惠經驗の約三分の一を遺棄するか、我物とするかの分れ目である。叙上の意味に於て我文運進步の外來的或は原料的原動力の凡そ三分の一の得喪に關するのである。之れは由々しき國家損益上の大問題ではないか。

次ぎに國際的の見地から考へて見やう。

佛蘭西と諸文明國との文化協同の大勢は最早や玆には反復しまい（二項）そは暫らく措き、佛蘭西大學使節の來朝以來日佛兩國に於ける曩述の經過（一項）に依て見れば、本企畫は今日に於ては言はば既に放たれたる矢である、所謂乘つ引きならぬ一種の行懸りを生じたものである。我文化の眞價値を認識し尊重して佛國民より尋常ならざる熱誠を以て差し伸べたる握手に對して、萬一我國民にして手を引くとしたならば、自然兩國民の親交をも傷くるの虞がないとは言へない。又文化國民として不誠意無能の侮蔑を世界に購ひ、又非文化主義、軍國主義との

一部の惡聲に褒貶するの嫌もある。佛大學使節來朝の當初に於てすら然うである。況んや日佛兩國官民一致の盡力となり、其の間に一種の連帶責任を生じた今日に於てをや。

而かも尙考へねばならぬ方面がある。

我國は大戰以後の趨勢たる世界的文化協同に於て、將來の受働的地位より脫却し多數社會と連繫して能働的活動を爲すの域に進まねばならないことは勿論である。然るに親獨疎佛の我文化狀態は之に對して一大障碍を成すものである。一步を進めて謂へば、獨偏倚の我現狀は動もすれば我國文化の獨立を傷くる嫌あること旣述の如くなるのみならず、さらでだに識者の往々憂ふる所たる我國を脅威する國際的孤立の形勢を益々助長するの危險性を全然包藏しないとは言ひ得ない樣に感ぜられる。

之と關聯して尙考慮すべき一事がある。對外文化宣傳は大戰後の今日各國の重要政策たるに至つたことは顯著なる大勢である、然らば我國には此點に付て他國に後れない經綸があるか。否な、我國文化又は一般社會事情が各國に理解を得ず又は誤解を受けることの如何に甚しいものであるかは、寧ろ豫想の外である。私は今秋發刊さるべき巴里の比較法制協會創立五十週年記念論文集へ、明治大正半百年の法制の發達に關する論文を寄せたが、其準備として我法制並びに其背景たる諸文化に關する歐米の文獻を漁ひて、その誤解の甚しきに慨歎した。我國では對外宣傳の積極的經綸所ではなく、此不理解を補充し此誤解を矯正する統一的組織すら全く缺けて居る感がある。世界に於ける我國現下の不信用が甚しいのは此宣傳に拙ないことが一大原因を成して居ると思ふ。隣邦支那に於てすら日露戰後折角扶植した我文化的勢力の退嬰を見つゝあるのも或點からすれば此一反映とも見られる。我國が孤立の形勢に在るとの悲報は此點からも大に警戒を與へる意味を有する。

果して然らば、之れが對策としては各國文明の世界的改鑄所たり、各國文化の世界的市場たる佛國を通ふして、我文化の理解融合を諸國民に得るを以て最も根本的のものとする。況んや我國文化の名聲を高めて世界的たらしめむとの積極的抱負を有するに於てをや。然るに此意味の日佛文化提携の急務の如きも全く放置されて居る、是れ我國の爲に甚だ遺憾とする所である。

七

一五　右に陳述した所に由り我文化現狀は全然不合理且つ不得策である、而かも其如何は我國文運從て又國運全體の消長と根本的關係を有するものであるを知つた。於是、吾人の到達する結論は今や明である。曰く我文化國是は根本的建直しを急務と

する。而て其主眼は英獨兩文化殊に獨文化の偏重、佛文化の偏輕の矯正に存すると。

一六　吾人の此主張に對しては三種の反對論を想像し得やう。

其第一は、既に大戰以後外國文化に對する我偏頗狀態改善の徵候を呈せる以上は、故らに人爲的干渉手段を施す必要なしとの議論である。併し私共は我文化現狀及び其改善の徵候のみを以ては晏如たるを得ない、何となれば佛文化偏輕なる缺陷の大部分は尙依然蟠屈して不合理を續け、國內的國際的に我進歩を妨げ我脅威を成すこと上述の如くであるからである。又此反對論は社會の進化を以て單に自然の推移のみに因るものとなす單純進化論である、而かも其進化の反面の根本は人間の自律的努力即ち進歩に存するを辨知せざるものである。されば又佛文化の部分的恢復の曙光に接するに因て將來必らず自然の大光明に接するに到るものと樂觀することをも得ざるものがある、何となれば折角の新兆候も更に此機を逸せず大に之を助長するに努力せざらんか、或は停滯或は逆轉の虞なしとしないからである。

第二に想像し得る反對論は、佛文化運動が他國文化殊に反獨逸文化主義ならざるやを危ぶみ、或は少くとも英米兩國に對して此運動を遠慮せざるべからずとする氣兼論である。我等の志す所は佛文化本位の明治初年時代を再現せんとするに存するものでないことは言ふを須たない。私共は唯上述せる如き餘りに甚しき獨佛文化の偏重偏輕の不當と不利とに堪ゆる能はずして、寧ろ當然過ぐる平等精神を高調するのみである。再言すれば我國に於ける餘りに過不及の甚しき獨佛文化の現狀に對する對症療法の必要上、獨り所由なく取殘されたる佛文化の缺陷を補匡し、他文化の利用と平衡を得るの域に達する迄は、我力には限りがある故、當分外國文化に對する我主力を佛文化に傾注する必要ありと主張するのみ。從つて又此均衡を得るまでは既に行き過ぎたる獨文化に付ては、之れ以上の進展の需鎭は暫らく之を後にするは止むを得ざる所なると同時に、之に注がるべき力の一半を佛文化のそれに振り向くるを以て、時宜に適せりと爲すの趣意に外ならない。

私共の本來の精神は決して他文化を抑へる點には存しない、一に不足なる佛文化を揚ぐるに存するのみである。若し一國國民の心理にして如何に或特定の文化を尊重するとも、爲めに他文化の閑却に陷る虞なく、又一國の國力にして、如何に多數の文化に對しても多々益之を迎へて施設し得る無限のものであるとしたならば、私共は單に佛文化の利用と施設とを主張するに止まり、獨文化の偏重などを云爲したい考は毛頭持たないので

ある。唯如何にせん此の如き無限なる無形有形の力は何れの國民にも望み得ないのである。是れ私共をして偏輕偏重の矯正を叫ばしむるの止むなき所以である。

要するに私共の終局目的は、此くして我國が自國的文化比較の基礎としての、羅典、アングロサキソン、チュウトンの三文化の、普遍公平なる利用の域に到達するを期するの、微衷に外ならないのである。

更に日佛文化協同は英米に對し遠慮せざるべからずとするの氣兼說の如きは勿論採るに足らないのである。何となれば本協同に依て始めて日佛文化協同は日英、日米の文化協同と略ぼ同等の地位に達し得るに過ぎない而かも共間何等の反英米文化運動の意味を含まず、却て英米文化の理解を助け、又既述せる佛英米の文化協同の大勢に歩調を合はすものである、再言すれば本協同に依てこそ佛を連鎖として間接には我國と英米との間にも又或程度の文化的聯絡を保ち、より良く相互の理會融合を進め得るに至るものであるからである。日佛文化協同は佛國より手を差し伸べられたるに應じて握手を爲すものに外ならない、此前例に依て更に英米より手を差伸べたる場合には我文化政策上不當とならない範圍に於ては、吾人は歡んで之に應ずべきものたること勿論である。

日佛文化協同に反對なる第三種の思想としては、或は此協同を以て不急の閑事業と做す者あるを保せざることである。

言ふまでもなく此の如きは物質主義的近視者の短見に過ぎない。

抑も大戰を軸として廻轉したる新世界に於ては、各社會の發展努力の目標は、最早政治と軍備とには存せずして、經濟と文化とに移つたのである。而して經濟に付ては各社會の競爭が寧ろ主なる傾向を爲すに反し、文化に付ては國際的協同に依て各社會個別の微力を補充し、進歩向上の世界的偉力を發揚せんとするの趨勢顯著なることは、遠くは國際聯盟に徵するも、近くは華府會議等に徵するも之を看取するに難くない。而して此國際的文化協同に落伍者となるものは、啻に精神生活上の不幸を招くのみでなく、遂に延いて經濟的競爭力の根幹に枯渇を來たすに至るを免れない。有形の經濟と無形の文化とは共發展に付て互に相關聯するのみならず、その根本は寧ろ後者に在ることは、各國經濟の隆替史に徵するも疑を容れざる所である。是れ動もすれば文化を輕んずる風あるを免れざる我國に於て特に最も留意を要する點である。

文化協同の問題は此の如く各國同樣我國に於ても新時代の最重大なる問題に關する問題なるに拘はらず、我國に於ける之れ

が現狀には根本的缺陷ありて而かも最も等閑視せらるるの狀あること旣述の如くである。

果して然らば今日我國には幾多の改造問題の解決を待つもの横はるも、其內最も根本的にして而かも其實急要なる建直しの問題は、文化協同に關する我國是のそれにあらずして何であらう。而して又此建直しの中心は佛蘭西文化に對する我國民の朝野を通じての態度の一新に存せずして何であらう。

一七　然らば此新國是を實現すべき改新の具體的方策如何。

之に對する回答は、上述せる我文化偏傾の社會的成因及び其推移に關する旣陳の考察が、吾人に教示する所である。抽象的に之を言へば、消極的には旣述せる如き日佛文化協同に對する第一次的障碍原因の主觀的存續を氷釋せしめ、又第二次的障碍原因の實存を刈除し、更に進んで積極的に日佛文化協同の進展の趨勢を助長するの新施設を計畫するに存する。

此趣意に副ふ具體的の施設として望ましいものは素より少くないのであるが、就中最も重要にして且つ刻下の急務に屬する第一次的施設と信ずるものが二つある。其一は前述の第二次的障碍原因の中心點、卽ち外國語教育に於ける佛語の繼子扱ひを改めて、英語には及ばないまでも少くとも獨語と同等の地位に進めるの新施設である。其二は日佛會館の建設である。

此二施設に付ては冒頭に一言した日佛文化協同の提案に、粗雜ながらも其骨子は陳述されてある。實は之は私が當時の東京帝國大學總長山川先生並びに富井先生を始め其他の有力者の示教をも參酌して作つた案で、日佛協會の委員會でも採用されたものに外ならないのである。其後の會議講究の結果細目に付ては變更を生じたが根本は渝らないのである。

玆には都合に依り主として第一の點に付き更に其要領を披陳して見たいと思ふ。

（第一）外國語教育に於ける佛語の進展。

之に付ても、私立、官公立の諸組織に跨り、又中等、高等の諸學校に渉り、更に女子教育にまで及んで、種々の點に付て努力を必要とすること勿論であるが、其一端は前述參考案に讓る。玆には此等全體の脊髓を成すと認むべき官立の高等學校に於ける佛語教育の缺陷に對する補正の方策、卽ち急務中の急務に屬する改善施設の中心のみを陳べるに止めることとする。

元來是れまで官立高等學校に於て佛語級を設けて欲しいと言ふ要望に對し、反對意見の根據とせられて居たのは、主として次の三點であつた樣に聞いて居る。其一は佛語に對する社會並に學生本人及び父兄の要求が少いこと。其二は第一の結果として優秀の學生を得る能はざること。其三は相當の教師を得る能

はざること。是れである。

以上の内第一及び第二の障碍は既往に於ても誇大に考へられた傾きがあつたが、殊に大戰後の時代の廻轉に依て既に消滅した。第一點に付ては曩に述べた所に讓つて再び贅しない（第四項第六、第五項第六、參照）。第二點に付ては殊に近來の一高、三高及び新設三校に於ける佛語級入學の學生の優秀なる事實が之に對する反證となる。唯第三點即ち教師の供給難なることに付には、今日尚或程度まで實存する障碍たるを認める。此障碍は反面より言へば從來に於ける佛語教育の閑却が其一因を成して居るが、今徒らに之を悔むも詮がない。唯這般の悪果の纏綿より一日も早く脱却するの要ありとせば、此上佛語教育の不備を補充するに怠つてはならないことを特に念頭に置かねばならぬ。而かも最も注意すべきは此教師供給難は今日と雖も決して、絶對的のものではないことである、此事は尚直き後に説明する。

右の次第であるから、大戰以後佛語教育に關する新施設の急務と可能とは、次第に官私の教育機關に於て通認を經る傾向を增し、既に大なり小なり實施の域に進み入つた。併し最肝腎なる官立高等學校に於ける佛語教育の大缺陷に付ては、今春僅に一部分の補充が實現されたるに止まる、而も其改善は尚甚だ不充分であつて、眞に其端緒を開いたと云ひ得るに過ぎない（第四項第六參照）。今春に於る此第一回の端緒に對して、第二回以下の改善的施設の續行は當然であるが、不幸にして萬々一にも之が實現されないとしたならば、第一回のそれは眞に申譯的のものに過ぎないと評する外ないこととならう。

之に付ては私共は次の諸點の實現を希望して止まない者である。

（一）　三年制と七年制とを問はず、新設高等學校には必らず必修佛語級を設置すること。

高等學校の新設は明年及び明後年に於ける靜岡、姫路、廣島、高知の四校を以て打切りと爲ること曩にも一言した通り（第四項第六）とすれば、此主張は實際の適用としては、豫測の外なる將來は兎に角、差當つては此四校並に東京高等學校に佛語級を設置せられたいと言ふ要求に歸着する。今や此五校に佛語級を置くと否との問題は、佛語教育の缺陷を補充するの機會を半永久的に逸し去ると否との重大なる分れ目である。此際私共は悔を永き將來に遺さざらむ爲に、此點に付て當局並に我國識者に充分の考慮を煩はしたい。

若しも此等の五校に付て、從來の英獨兩語存置主義に對し、財政上、管理上其他の點よりして、英獨佛三語の併置には少らさ

る實行難が伴ふとせば（一高のみならず、今春新設の三高等學校には三語級を併置した事實より推すも、大した困難はないことと察するが）、現在の堪ふべからざる不均衡に鑑み、佛語教育の大穴を補充すると言ふ幾層倍も大なる急務の前には、既に不足を覺へない獨語級の新設を犧牲とし英佛兩語設置主義をとる外はないと思ふ（尚後述四參照）。

從來の施設の跡に徵すれば、英獨兩語の學級設置が絕對の必要であつて、其の爲佛語級の設置を犧牲にするは當然と考ふるの先天的思想が存し來つたものの如き感あらしめる。之は因はれたる觀念と評する外はない。實は一歩を進めて言へば、我國では餘程公平な識者と雖も、英語だけは第一外國語として他の一切の外國語を凌駕する根據が、恰かも先天的に運命づけられて居る如く考へて何等の疑問を挾さない樣に見えるが、因襲の力も亦驚くべきものと云はねばならぬ。獨語は勿論、英語とても商業に付ては格別、決して我文化にとつて佛語以上の價値を持つたものではない。此種の惰性的觀念が佛文化の繼子扱の因を成して居ることが少くないことを痛感する、總て此種の觀念が一掃せられ、後天的に冷靜公平に考へ直ほされることが根本的に望ましいのである。

（二）殊に七年制高等學校には初年級より佛語級を設置すること

七年制高等學校は、實際に於ては目下の所私立の武藏野高等學校を除く外、官立としは東京高等學校のみに止まるのであるから、本主張の差當つての適用は東京高等學校に歸着する。而かも今春授業の開始された同校の初年級には佛語級設置を見るに至らなんだのは遺憾に堪へない、併し一兩年內に初年級から之を置くことは必らずしも不可能ではなからう。それも事情困難であるとすれば三年級又は五年級より之を置くや否やが未決の問題として殘る譯であつて、之れが一縷の望の繫る所である。せめては三年級より是非設置を缺かない樣にありたい、官立七年制高等學校としては本校が魁であるから、佛語級の設置を初年級よりするの徹底的施設までには行かないとしても、三年級よりする程度の先例は少くも示されたい。本校に在ては佛語の良教授を得るのは其位置上どの高等學校よりも容易である。從て帝國全體の高等學校教育の統一的見地からして、此佛語教育の缺陷を補塡するの任務の一部は、自然此新設の東京高等學校の肩上に落ち來る譯である（後述（五）參照）。又文部當局としても、此佛語教育不備の現狀を補救するに意ある以上は、何は措いても此東京高等學校に對しては出來得る限り其の施設を爲さねばならない道理である。此場合に對しては良教授を得る

ことが出來ないと言ふ佛語級設置に對抗する唯一つの抗辯すらあり得ないではないか。

(三) 佛語級設置は文理兩科を通ずること。

蓋し文理兩科中の一に置く以上は、殘る所の一科に之を置くの費用勞力等は、約三分の一の增加を以て足るであらう。然らば其一半に止むるは國家經濟上の不利益たるを免れまい。此點に於て私は窃に今春の三高等學校に於ける佛語級施設が、文科又は理科の一に止まつたことを遺憾とする。之は從來一高三高に付ても同一であるが、此等の五校には今後殘りの科にも右の理由により佛語級を置くの措置を望む者である。新設の場合には尙更さうである。

(四) 高等學校に於ける佛語敎師の資格を擴張すること。

私は前に今日高等學校に於ける佛語級設置に對する唯一の故障は敎師の供給難に存し、それとても絕對的のものではないと言つた。其意味は第一には敎師供給の淵源の點から相對的であり、第二には殊に場所の點から相對的であると言ふことである。玆に佛語敎師の資格の擴張を提言するのは此第一の見地に基くのである。蓋し高等學校佛語の敎師の採用範圍を佛文學出身の學士に限るとする從來の當局の方針に依れば、此種學士は今後數年間は尙極めて少數なる故、近年盛んになつた社會の需用に應じ切れず、從つて遠隔なる地方の高等學校の招聘に應ずる者を得るに苦しむを免れない。併し此現狀に對しては當面の補充方策が相當にあると考へる。又佛語敎育の不備此くも甚しき現狀に對しては此補充方策を實行する特別の必要は充分に存する。

(1) 採用の實際の範圍を外國語學校佛語科出身者に擴張すること。

同科修了者は直ちに敎授たる法規上の資格を有しないが、講師として採用するには差支へがない。そして在職五ケ年を經過すれば敎授たる資格を得る譯である。今春現に福岡高校に此方途を執つたのである。

(2) 帝國大學佛法科出身其他の法學士を法學通論の敎授に迎へ、同時に一時佛語の敎授を兼擔せしむる方法を實行すること。

之には必らずしも高尙なる佛文學の敎養はなくとも、曉星中學出身者其他比較的佛語の力が强い者ならば、其任に當り得ると思ふ。讀書などならば無論充分に堪へやう。尙同樣の擴張方法は此以外にも存しやう、例之佛語の經濟を修めた經濟學士を經濟學の敎授に迎へ同時に佛語の敎授を兼ねしめる類である。

(3) 佛語に對しても高等學校敎師檢定試驗を行ふこと。

外國語に關する高校教師の檢定試驗に付ては、今日までは英獨語に限つて施行されて來た次第であるが、佛語に付て教師の缺乏に苦しむとせば、それにも拘はらず之を佛語に及ぼさなかつたことは當を得ない、佛語に付ては其必要は英獨語に幾倍する。殊に上述外國語學校卒業者及び法學士、經濟學士に對して其希望に應じて直ちに檢定試驗を施し、合格者には正式の佛語の教授資格を認めることは前述(1)(2)の効果を益々大ならしめる所以である。若し當局者にして此方針を可とせられなば、今よりして充分の期間を與へて第一回の本檢定試驗施行を告示せられたいのである。

(4) 佛語に對しても外國の學位所有者に對して英語と同樣の無試驗檢定の途を開くこと。

現制は英語に付ては所謂 High school の出身者には此特典を許與して居る、佛語に付ては一層其必要あること(3)と同樣である(高等學校令一六條參照)而して此特典は現在に於ても多少の適用があらう。殊に襲述せる如き佛國高等教育の門戸開放其他佛蘭西文化近時の諸般の興隆より推すときは、今後の適用と實益とは次第に增大するであらう。

(五) 特に東京及び其附近の高等學校に於て、既設と新設とを問はず、可及的多数の佛語級を設置すること

當局側の方途を聞くに於ては、首都から隔たつた地方の高等學校に於ても、相當なる教師を得ることが出來ると思ふ。現に今春佛語新設の三校共に良教師を得て居るのである、況んや前陳の擴張を實行するに於ておや。假りに數百歩を讓り此くしても尚遠隔なる地方の高等學校には良教師を得る多少の困難が存するとしても、東京及び其附近にはそれが存しないことは言ふまでもない。加之愈後述する日佛會館が設立を見ることとならば、佛人の良教師の如きも之れが供給に容易となるであらう。

然らば一高、七年制東京高等學校、浦和高校等に佛語に付ては數組を併置さへすれば、教師供給難の問題は其範圍に於ては立所に解決し得るではないか。

又此意味に於ては、明年及び明後年に新設される地方の高等學校の內でも、例へば靜岡高校の如きは東京からかけ持ちする とは不能ではない、佛語教育の不備を慨する有力な佛語學者中多少の困難は冒しても此任に當て呉れる人はあると思ふ。同樣に三高や大阪高校にも京都帝大新設の佛文學の教授其他の人々の援助に依つて同樣の施設を爲し得ることと考へる。

然るに現狀は如何であるか、一高を見るに英獨兩語が文理全科に置かれ、佛語が文科のみに置かるるに止まることと上述の通りである。其上理科に付ては英語級は3組(約百廿人)又獨語

級は2組（約八十人）にして、文科に付て見るも獨語は一と組なるも英語は三組の收容あるに反し、佛語級は一と組の收容あるのみ、此の如きは前述の要求よりすれば正に緩急顛倒せる跛行的組織と言はねばなるまい。

更に目前の新施設としても、東京高等學校に於ける佛語級設置すら未決の有樣であり　又新設されむとする四高等學校中靜岡にすら今以て設置の模樣が見へない。之は私共の首肯を得ない處である。

以上(四)及び(五)に開陳した處に依て見れば、佛語級設置に對し今日唯一の故障として對抗せられつつある教師難なるものは、決して解決不能の故障ではない、否な當局にして本氣に一と奮發すれば寧ろ解決容易の問題であることを疑はない。又此くして佛語教育に關する今日までの大缺陷を補ふことが、とりもなほさず高等學校其他に益々此方面の良教授を得しむる本源の確立に外ならないのである。然るに萬一當局にして良教師の供給難を楯として此本源の缺陷を何時々々までも其儘に放置するとせば忌憚なく言へばそれは本末顛倒の感なきを得ない。從つて又此の如くならば佛語の教授供給難の全責任は當局者に於て之を負はねばならぬこととなるであらう。

適用を見るべき必要あり、殊に其一半は今日を過ごしては取返へしの付かぬ刻下の急務に屬すと信ずる點を、今一度繰返へし、以て當局の明斷を仰ぎたいと思ふ。それは佛語教師の採用範圍を擴張し、以て將に新設されむとする四校に佛語級を置くこと、東京高等學校に佛語級數組を設置すること、一高、浦和、三高、大阪の諸高等學校にも佛語級の增設を斷行すること、是れである。

一八（第二）日佛會館の設立

私共の信ずる所に依れば、我國に於ける佛蘭西文化利用の前に橫はる、主觀客觀の一切の障碍原因を、直接又は間接に刈除し、進んで我國民の汎らゆる方面に於ける佛蘭西文化の利用能力を增大し、直接利用の効果を收得せしめ、更に進んでは佛蘭西文化を通ほして我文化を各國に宣傳し、以て消極積極の兩方面よりして、我日佛文化協同に對する現在の缺陷を補匡し得しむるの原動力たり、中心たるものは、此會館を措いて他に求むべきでない。此く斷言するは大膽に失する如きも、決して無責任の放言ではないと云ふ自信を持つて居る、之に付ては上述拙案日佛文化協同案に其一班を述べてあるが、今日ではそれ以上遙に精確なる成案を持つに至つたのである。但し之に對ては別

付して到底を忘ふことゝし、茲にはこれ以上議論を惹くことを遠慮しやうと思ふ。

私共の主眼とする一施設は以上の通りである。若し吾國民にして上述の文化的改造を不必要とするとせば亦何をか云はう。苟くもこれが實行の必要を認め、之れが決行に意あるに拘らず、如上の中心的施設の費用と勞力とを回避せんか、他に凡百の計畫を遂らしても、恐らくそれらは根幹相攻の措溯せる状態と一般たるを免れないであらう。

以上日佛文化協同の主張に關し、熱心の餘り言議思はず當を失せる所或は少らざるやを畏れる、偏へに大方の寛容と示教とを祈る。

（完）

歐羅巴の惱み

（不徹底なる民族主義の實現）

法學博士　米田　實

（一）

世界大戰が終つて正さに三年十箇月、世界の政治家が戰爭の目的として呼號した民族主義の實現といふことは果して直に實現したであらうか。顧るに五ケ年に亙つた大戰が、一千萬の死者二千萬の負傷者を出し、四千億圓の大金を費したのは誰も知る所だが、それのみならず、歐洲の政治及經濟組織を破壞し、その社會を混亂せしめて非常なる犧牲を敢てせしめたことも疑ひが無い、知らず共敢てした犧牲は他方面の民族自由の實現によつて、果して償はれて居ろかどうか、ウイルソン、ロイドヂヨーヂ、クレマンソー、ソンニーノの諸政治家は、歐洲をデモクラシーの爲めに安全にすると共に、民族主義から觀て不公平である所の領土を公平に改むるといふことを、戰爭の目的として熱心に痛烈に叫んで居たのであつたが、其デモクラシーは始

らく措き民族主義に依る領土の分配は如何に行はれて居るか、今に於て之を見るも恐らくは興味ないことではなからうと思ふ。

(二)

先づ順序上東方から始めて見やう、東方で日に消くのは土耳其である、土耳其は四百六十餘年前君府(コンスタンチノープル)を占領して以來常に列國間の問題となつて居たものである、それは露西亞がビザンツ帝國の後繼者として、君府恢復の野心を有つて居たことも一の原因であつたが、同時に土耳其の領域内に幾多の民族があり、其民族の開放自由といふことが問題になつて、種々紛紛たる内政外政上の爭議を生じたものである、之に加へて英國が地中海に根據地を有する結果、露西亞の勢力南下によつて自己の側面を衝かるゝことを怖れ、露國の政策に反對し、一波萬波を生ずるの紛爭を見たものであつた、之は今回の大戰で滿足に解決せらるゝことは、幾多理想家の希望して居つた所であつた、然るにそれは果して實現したであらうか、列强が土耳其問題解決を協定したのは、言ふまでもなく一九二〇年八月十日のゼーヴル條約である、之には我日本も調印國となつて居る、之

した如き、民族主義上吾々が別に異存を唱ふる理由を發見せぬ所である、唯アラビヤ人多きパレスチンに猶太人中心の新國家を實現し、又同じくアラビヤ人三百萬(回々教徒)に對し基督教徒五十萬を數ふるシリアに於て、佛國の委任統治の下に基督教徒に重きを置く國家を作らんとするが如きは、多少民族主義的見地からは、非難の餘地はあるが、一は猶太人とパレスチンとの古き歴史的關係を稽へ、又一千年に亙るシリア基督教徒の地位に鑑るときは情狀斟酌すべきものあることを思ふ、併し唯土耳其その物の新領域の決定に至つては、民族主義から觀て不公平のものが多いやうに思ふ、殊に本年三月巴里に開いた英佛以下聯合國會議で土耳其に有利な變更策を講ぜられたけれども、之を觀るも尙不十分極るは甚遺憾ではあるまい乎、然らば順序上先づゼーヴル條約に依る土耳其の新領域とは何か、と言ふに概括的に說くと、面積六十萬方里であつた土耳其は、十八萬四千方里となり、人口二千萬であつた土耳其は人口八百萬の小邦となつたのである、何れ土耳其の領域の狹小せらるべきことは明かであつたが、此新領域は如何に見ても決して公平のものではなかつた、其要點を擧ぐれば先づ第一にスミルナ方面である、蓋し土耳其人は從來の領域の多數を失はねばならぬとし

ある、小亞細亞方面は土耳其人が多數住居し土耳其の要港となるべき場所である、而してスミルナは如何といふに、スミルナ港のみを觀る時は成程多數の希臘人が居るには違ひない、殊にスミルナ市は人口三十七萬五千を有し、希臘の首府雅典よりも人口多く加ふるに商業殷も殷賑を極め、戰爭開始當時即ち一九一四年頃の貿易表等を見ても、煙草約三百萬圓、阿片二百六十萬圓、を初めとし、カーペット類獸皮、橄欖油、羊毛、豆其他種々の產物を輸出して同地方一切の貿易を集めて居る姿である、故に商賈人で、利に敏な希臘人が之を重視するのは尤であるが、少しく眼を廣くする時は、此港は土耳其人の故鄕であり根據地である所の小亞細亞一帶の要港たることを忘れてはならない、蓋し同港や小亞細亞の關門にして、經濟的にも政治的にも最も大切なる場所である、若しスミルナ奥地に於ける土耳其人の產物なかりせば、スミルナの商業は存立しない、土耳其人もスミルナを失へば適當なる經濟的產物の出口を絕たれるのである、民族主義と云つても單に一市街の人口の偶然なる事情を元にして、其奥地に於ける數百萬の人口を犧牲にすることは、民族主義から觀ても決して公平なことではない、然るにゼーヴル條約は土耳其にスミルナ地帶の主權を維持せしむる空名を與へて、然も直ちに事實上此主權を希臘に委せしむることにした、希臘は其地に[illegible]を建てたのみならず、スミルナ出身の土耳其人に對する外交上の[illegible]は希臘に收められ、スミルナ出身の在海外土耳其人は希臘政府の保護を受けなければならぬ運命にさへ陷つた、又スミルナ地方議會は設けられ、玆に於ても大體希臘憲法主義を採用することになつた、尙三年後の一九二五年に於てスミルナ一帶は明かに希臘に併合せらるゝ可能性をも許して居るのである、之に對して小亞細亞に於ける多數土耳其人が不平を懲ふるのは誰か當然と思はぬものがあらう。

次きは歐羅巴土耳其のスレシヤ(トラキヤ)である、顧るに、歐羅巴土耳其に於ては、英佛諸國は一九一五年に露西亞に君府を與ふるの約をして居たこと世人の知る如くであつた、之は土耳其に取りては其歷史的地位に對しても、就中回々敎徒間に於ける權威に對しても、君府が過去五世紀間回々敎の本山化して居つた事情に對して、容易ならぬ打擊と見るべきものであつた、然るに一九一七年露西亞の革命勃發しレニン過激政府の出現の爲めに、英佛の對露國讓步が取消され、辛うじて君府が土耳其の手に殘さるるを得たのは、確かに土耳其の幸福と見る可きであつた、併し尙ゼーヴル條約が希臘にスレシヤ一帶を與へたことは、民族主義の上から觀て決して正當といふことは出來な

いのである。今スレシヤ地方の人口を検するに、之に就ては希臘人勃牙利人等が成る可く各自己に都合よき統計を發表して居る、爲めに往々統計信じ難きの觀なきを得ないこと、昨年佛國首相ブリアン氏も慷慨した通りである、併し目下假りにスレシヤ一帶を熱望して居り其爲めに最もスレシヤに對するの主張を高調して居る、希臘人が正當と認めて引用して居る統計に依るも、スレシヤを東部、西部と分たず、之を一括して勘定すると、その最大多數者は矢張り土耳共人であつて、五十三萬五千人を數へて居り、其次は希臘人の四十七萬、勃牙利人の十萬九千を數へて居るでは無い乎、尤も希臘人は說いて言ふ「右人口中、土耳共人口の多いのは西部スレシヤである、此地では土耳共人二十八萬人に對して希臘人七萬を數ふるに過ぎぬ、然かも此西スレシアは夙に希臘領たる可く決定して居り、之は今日の問題では無いのである、唯だ問題たるは東スレシアであるが、此東部スレシアの人口統計に至つては土耳共人二十五萬に對し、希臘人四十萬を數へて居る、從つて東スレシアが希臘に附せらるゝは、至當ではあるまい乎」と、吾人は之に對して、先づスレシアの如き狹小地域の人口が、一括して論ぜられずに、東西に二分して計算せられねばならぬ、ことに同意し難いことと[illegible]

東部スレシア——希臘人がその人口多しとしつゝあつた東部スレシアも、今日の實狀を見ると、遙かに土耳共人の方が多くなつて居る、蓋し東部スレシアに希臘人多しとした統計、これは土耳共が屢々公式統計を取らぬ爲め、止むを得ず今猶歐洲政治家の一部さへ、止むを得ず之に依據して居るけれど、識者はその太た古い統計たることを忘れてはならない、然らば今日、東部スレシアの人口形勢如何と言ふに、一九一二年及一九一三年巴爾幹戰爭の結果、マセドニア其他歐洲の土耳共領が希臘、勃牙利等に併合せられたので、此等の部分に住居して居た土耳共人等は、着々殘留せる歐洲土耳共領たるスレシアに移住し而して此傾向は世界大戰中も繼續した、之に反して希臘人數に至つては、大戰中「希土開戰」の關係で西方に移つたもの多く、非常に減少したので、今や東部スレシアの人口狀態は土耳共人の方遙かに有利となつたのである、是に於て乎、昨年來佛國首相ブリアン氏か東スレシアの處分をその住民の投票に委せんことを提議すると、土耳共代表者は欣喜之に贊成したが、希臘代表者は頗る難色を示したのである、今日希臘側は、スレシアに於ける土共耳人增加を人爲的なりとて、難癖を附け爲めに昔日の人口統計に據らんことを主張して居るが、翻つて想ふ[illegible]

[illegible]

[illegible]數位をして、止む無く、僅かに殘存する所の土耳共スレシアに集中せしめたその重なる責任者の一は、實に希臘自身では無かつた乎、斯く考へて來ると、吾人は現在の領土分配に於て、現在に於ける東部スレシアの人口狀態を無視す可き理由を發見し得ぬのである。

尤も希臘は、東スレシア獲取理由として、土耳共人の政治的能力、自國の軍事的事情などをも說いたのである即ちスレシアを他國に委すると、その海岸一帶が潜航艇の根據地となるとか、土耳共人は政治的能力が無いとか說いたのである、而して一九二〇年八月ゼーヴル會議當時、彼の巧妙なる希臘の外交家ヴェネゼロス氏猶ほ自國政權を掌握し居り、聯合國も氏に對する厚意と信用とに動かされて、遂にスレシアを希臘に移したものなることとは、想像するに難く無い。

所が最近に及び英佛諸國も多少覺醒し漸く此不公正狀態を訂正する傾向を生じて來たのは、欣ぶ可き所である、それは昨年三月倫敦會議に於て第一に現はれ、更に本年三月巴里聯合國會議に於ても現はれて來た、昨年三月の倫敦會議では大に土耳共に讓步しダーダネルス、ボスポラス海峽の列强管理に於て土耳共を委員長とする如き讓步をなし、又スミルナに就ても多少の讓步を[illegible]なりとしたなかつた、[illegible]の手に歸したことを[illegible]したのである、希臘も[illegible]一致するを得ずして倫敦を退去し、次で昨年の三月末から夏にかけて希臘土耳共間の小戰爭が亞細亞土耳共に於て再開されたのであつた、然るに共後列强殊に英佛兩國は漸次土耳共の立場を認め、又土耳共に讓步するの賢明なるを認めて、共結果本年三月の巴里會議となつて現はれたのである、尤も此結果の發生に就ては何と云つても第一に土耳共の正當政府以外に、アンゴラに革命政府を樹立して土耳共民族のために氣焰を昂めた四十一歲の好軍人ムスタハ、ケマール、パシャの功績を指摘しない譯には行かない、彼は元サロニカの低級稅關吏の子と生れた、今より十四年前の土耳共の革命に於ては、所謂革命派に投じて大いに活動し、一九一三年例の巴爾幹戰爭の際アドリヤノーブル恢復に戰功を收め、一九一五年英國が我日本軍の旅順若くは靑島攻擊に倣つて、ダーダネルス攻擊を始めた時に之を擊退した人物である、彼は又た餘りに獨逸に利用せらるるの土耳共に取りて恐なることを指摘した先見者の一人であつた、此人物がアンゴラに地盤を作つて熱誠なる土耳共靑年を自分の周圍に集め、相俱に希臘軍の前進に對抗し、就中昨年希臘軍の土軍左翼

包圍策を失敗せしめ、之をして二十一日間を空費させ、英氣を阻喪せしめた作戰の如きは最も巧妙なる遣り口として歴史上に殘る所であらうと思はれる、此男の活動も大に聯合國を反省せしむる上に於て力あつたと思はれるが、更に他に聯合國の反省を促すに重大な關係があつたのは、印度其他に於ける回々教徒の對土其耳同情であつたこと言ふ迄も無い、今日回々教徒は約二億二三千萬を數へ、其中四百萬は歐羅巴に居り、三萬はアメリカ州に居るが二千五百萬は南太平洋方面に居る、而して最も多く居るのは亞細亞の一億四千萬、亞弗利加の五千萬である、而して英國領土内には約一擕の回々教徒が居り、其中印度に在る回々教徒は六千六百萬人を數ふるのである、此等回々教徒の對土耳其同情は大に英佛を刺戟せねば止まぬのだが、就中印度に在る回々教徒は一九一九年春以來寺院等に會合して、土耳其の保全を望み、決議案を通過し英國政府に請願したこと幾度なるを知らなかつた、所が最近に於て彼等回々教徒は英國が土耳其の保全に冷淡なるを憤りて、漸く從來相反目して居たヒンヅウと提携し、印度に於て漸々排英の態度を執り初めて來た、時恰も印度に於て聖雄ガンデイの起るに際して、ヒンヅウ、回々教徒相俱に英國の印度政府無後援、受動的反對といふが如き政

印度人を相手に英國マンチエスター其他各地から輸送し來つた棉布衣類はボイコツトせられ、英國製品は街頭に於て燒棄せらるゝの有樣であつた、又印度に於て多少土民に參政權を與へ其反對を緩和せんとする英國政府の方策も人民の不協力的政策とで、その効を奏し難い有樣となつた、而して其餘波は英國皇太子の最近印度訪問に於ける一種のボイコツトとさへ現はれたこと世人の知る如くである、茲に於て印度總督レツテング伯は書を飛ばして、土耳其に公正の待遇を與ゆるにあらざれば印度の統治困難なることを說き、印度事務大臣モンタギユー氏は外務大臣に一應の相談もなく、土耳其同情の公文を發表し、遂に英國內閣の內訌となり印度事務大臣自身の辭職を見るに至つた程である、斯の如き形勢こそ實に英國政府をして遂に步を讓りて、昨年十月既に業にアンゴラ政府と提携を約せる佛國と相議し、今春三月土耳其領土擴張案を作成せしめた所以である、其擴張案の一はスミルナに於ける希臘の勢力を排して土耳其の權力を强くすることゝし、又歐羅巴土耳其に於ては黑海岸のミデアより南下して居た、土耳其希臘間の國境線を西進せしめて、北キルクキリツセより南マルモラ海のガノスに至る一線を以て國境とすることに變更した、爲めに土耳其の領域は西方へ約四

[illegible]的破壊から免るゝこととなつたのである、是は誠に非常なる割土譲歩たるに違ひ無い、吾人は土耳其の爲めに多少欣賀せざるを得無い、然かも之を民族主義に照して考ふると、猶ほ甚だ不滿足と言はねばならぬ、何ぞやスミルナの處分案は、猶不明瞭の節殘れるを以て、姑らく批評を差控ゆるとしても、スレシヤの土耳其領域は、不公正であるからである、蓋し土耳其民族數やスレシア全體に亙りて久しき年月の間、優勢であり、唯だ東部スレシアに於てのみ或時期に於て希臘人口に劣つたけれども、之も希臘が計畫した巴爾幹戰役及之に伴へる倫敦講和條約の結果、止むを得ず割譲舊土領から移つた土耳其人口の爲め、今や優勢を持せること、既述の通りだ、然るに本年三月聯合國案のキルクキリセ東方の一點より南下してガノスに達する國境線の如きは、先づ西部スレシアを希臘に附與したのである、是れ不當の一である、次で土耳其首府君斯丹丁堡の最も近い奥地東部スレシアさへも、その半分以上を希臘の手に留めたものである、是れ不當の二である。

誰か土耳其の民族主義の爲めに此不徹底なる成行を悲まざるものがあらう。

三

次に吾等の眼に映ずるものは墺地利である墺地利は戰前面積二十六萬方里人口五千萬の光榮ある墺洪國を作つて居たのであるが、戰後洪牙利、チエツクスロヷアキア、ユーゴースラヴイヤ、波蘭が各獨立し爲めに殘留せる墺地利は面積三萬方里人口六百萬の小弱國となり了つたのである、此墺地利に就て問題となるのはそれが獨立國として、果して今後繼續して行かれるかである、其六百萬の人口中約二百萬は維也納の都會に住むもので、維也納は面積二十六萬、人口五千萬の大國の首府であつたらばこそ維持されたのであつた、然るに今や其背景は頗る貧弱なものとなり、謂ば日本帝國の首府であつた東京が單に東京府下及び埼玉縣の首府と變つたやうなものである、斯くして其維也納が如何にして存立するかは固より大問題であらねばならぬ、が維納也問題は姑らく別としても、凡そ弱く狹い一地方が一國として立つと一地方として立つのとは其住民の負擔、經費が非常に違ふ、然るに分裂の後に殘されたる墺地利國を見るに、天産物極めて少なく甚だ貧弱なる國である、其農業地鑛山地工業地は喪失し、國として一國を支ふるだけの需要物は國内に於て得られさうにも見られない、爲めに墺地利國内の工業家

銀行家商人等は已むを得ず波蘭、チェックスロヴァキア等に於て營業しなければならぬ狀態である、況んや其周圍には墺地利よりも有力なる國家が現はれて居る、人口四千萬、雄を南方に唱ふる伊太利は無論のこと、其外人口千二百萬のチェックスロヴァキア國、海こそないが豐富なる資源を有し、石炭の如き舊墺國全體の產額の八割五分を產し戰前から工業の發達して居たのは此地方である、墺地利國の輸出は主にチェックスロヴァキアの產物が多かつた、南のユーゴースラヴィヤにしても人口千百萬を唱へ波蘭に至つては人口二千七百萬を唱ふ、此間に僅か六百萬の墺地利が獨立國として存立し行くことの困難なるは固より當然と言はねばならぬ、玆に於て墺地利では夙に獨逸との併合論が盛んになつて來た、這は墺國人として民族主義の上から觀て正當のことであると共に、墺國の難局を救ひ新たなる進路を發見する唯一の策と思はれたのである、過去の歷史を觀ても十九世紀の中半迄は墺國は獨逸聯邦の首班であつた、それが普魯西との勢力爭に破れた結果、一八六六年八月二十三日のプラグ墺普講和條約第四條に於て、舊獨逸聯邦の改造、墺國除外が決定せられて、遂に分離の運命に立至つたのであるが、其民族關係を觀ると墺國は六千萬獨逸國民と同じく獨逸人である民の氣質が非常に酷似して居る、墺國は互ひに酷似し且つ歷史的に友邦であつた巴威、ウルテンブルグ、サクソニー諸州と共に、新獨逸に加つて行くことは決して心細い感じのする譯のものではない、又宗教から云つても獨逸中に於て普魯西こそ新教國であるが、巴威、サクソニー其他は墺國同樣羅馬教國である、是等の關係も非常に都合が良い、そこで墺國では世界大戰が終り、愈休戰となつた一九一八年十一月に於て、既に所謂墺國大會議が催されて「墺洪國の破れた中より獨逸及獨系墺地利の密接なる永久的協同生活を現はさんことを希望す」といふ決議をした、翌一九一九年維也納政府は一月一日付を以て列國政府に覺書を送り「新墺地利國と獨逸との合併は世界に取つて有害でなく非常に有利である」と主張し、且つ獨系墺國と獨逸との合併は之によつて對獨逸共和國内に於ける南部獨逸分子の勢力を增加するものであつて、是迄獨逸に於て優勢を占めて居た北獨逸の普魯西主義に對抗し、之を制肘して、勢力の權衡を作出すであらうと明言した、之に續いて墺國の全部に亘り盛に合併論が唱道され、獨逸に於ても亦合併論が盛んであつた、而て一九一九年二月十六日墺國の總選擧が行はれた結果、確かに獨逸墺國の合併が人民の輿論であるといふことを證明するに至つ

を占めた社會民主黨は、全部獨墺合併論者であつた、五十九名を占めた基督教社會黨議員も、其約半數は獨墺合併派であつた、茲に於て三月に維也納に開かれた墺國々民大會議委員會は、滿場一致を以て獨墺合併案を可決したのである、其要領は「民主的共和國墺地利は任意的に且人民大多數の希望に基いて獨逸民主共和國との合併を可決支持す」といふのであつて、之に關する實行細目をも起草した、之と前後して墺國外務大臣バウエル博士は獨逸に赴き獨逸外務大臣ブロックドルフ、ランツアウ伯と合併問題を協議し、飛行機に搭乘して維也納に歸着したといふやうなことも起つたのであつた、右の如き有樣なるに拘らず何が故に今日、獨逸との合併が出來ぬ乎、それは一に聯合國が一九一九年六月廿八日のヴエルサイユ對獨講和條約に於て、墺國と獨逸との併合を禁止し、一九一六年九月十日のサンゼルマン聯合國對墺地利講和條約に於ても之を禁止した爲めたること、言ふ迄も無い所である、何が故に列强が之を禁止したかといふに、獨逸は例のアルサス、ローレンを奪はれ、更に波蘭の獨立となり六千五百萬の人口中約四百萬の人口を失つたけれど、若し墺國を併合するとその人口は忽ち六千六百萬となり、國としては從來よりも大きく變はるからである、換言すれば斯くの如き發展は獨逸の再起を憂ふる佛蘭西其他の聯合國が實現する所であり、爲めに民族主義を蹂躪しつゝある自己等の平生を忘れて、茲には無理を墺國に强ゐたものに外ならない、又た他の一因としては、チエックスロヴアキア等が全力を盡して、墺國の地位の動搖變化を妨げたのにもあらう、之が爲めに墺國の合併熱は一度び壓せられたけれども、其後その民族運動は猶止まぬのである、其重なるものを擧げると、昨年四月チロル地方に人民投票が行はれたが、十五萬の投票總數中獨墺の合併を可とするもの十一萬票の多數に上り、之を否とするものは僅々一千五百票であつた、それより一ケ月後にはサルツブルグに於ても同じく人民投票が行はれ、其總票數は六萬八千二百であつたが、中合併に贊成するもの實に六萬七千五百票に上つた、シチリヤ其他に於ても人民投票の企てがあつた、其爲め當時墺地利宰相マイエル博士は辭職しなければならぬ破目に陷つたのである、斯の如く墺獨合併運動が盛であつた一方、墺國政府當局者は之に對しては無論合併贊成であるが、唯差當つて合併の結果が英佛其他の周圍の諸小國の反對に鑑み、實現困難なるを看て政府としては別種の政策を一時的に取つて居たのであつた、然るに此の政策が最近失敗に歸せんとしつゝある事實は豈更らに獨墺合併の機運を盛にすることを語るものではなからうか。

今少しく其經過を述べて見ると、墺國首相ショーバアー氏は何分サン、ゼルマン條約の規定あり佛國等の立場があり、チエツクスロヴアキア其他隣邦の政策があつて、急に獨逸との併合も困難であり、從つて獨逸との併合によつて墺國の窮境を救ふといふことの困難なるを看たので、寧ろ一應チエツクスロヴアキア、ユーゴースラヴイヤ其他舊墺洪國の領土に屬した諸國と提携を爲し、又此提携によつて、聯合諸國の同情を得、其援助を受くることによつて、墺國現下の難關を救はんとしたのであつた、玆に於て彼は昨年末チエツクスロヴアキアと提携を爲し、彼の有名なラナ協定なるものを定めたのである、而して此ラナ協定は軈て所謂プラグ條約となつたものである、最初はラナに於て協議を開き次でプラグ協議を移し、昨年十二月十六日チエツクスロヴアツク首相ベネツシユと、墺地利總理大臣ショーパアーとの間に調印された此條約は十一ケ條より成り、兩國は相互にサンゼルマン條約トリアノン條約を實行すること、相互の領土を尊重し、外交的政治的に助合ふこと、其一方の國が他より攻擊せられたる場合に於ては好意的中立を維持すること、二國は相互に相互の國に對する陰謀を自國内に於て行ふものあるを許さないこと、其他種々の協定を爲した、同時に又た今後墺ること、石炭其他の供給に就て便宜を與ふることを約束したのであつた、此約束の結果チエツクスロヴアツキアよりは墺國の需要する各種の材料を供給する外に、約二千萬圓の借款を許した、此政策は又た英佛方面にも好影響を生じ、首相ショーバアー氏の考へて居た「聯合國の同情を有するチエツクスロヴアキア其他との提携策によつて、聯合國側の同情と其援助とを得んとする」策は全然無効ではなかつた、卽ち英國は今年墺國に二千五百萬圓を貸すことになり、ヤングといふ人が英國政府から該借款の使途に就て多少の監督を行ふ爲め維也納に送られた位であつた、斯くなると佛蘭西側でも一千萬圓を貸さうとする形勢が現はれ、伊太利も之に同情する狀態が現はれ形勢は一時非常に良好となり、墺國の窮境も多少ショーパアーの新政策によつて救はれるであらうと思はれたのであつた、併し乍ら英國及チエツクスロヴツキアの對墺援助は一時的であり、永續的となり得無かつた、英國が貸した二千五百萬圓は成るべく對外爲替關係の安定のために使はるゝことになつて居たが、それも忽ち使ひ盡されて了つた、佛伊兩國の援助も却々來るべくして事實忽には來ないチエツクスロヴアキアよりの借金は使ひ果して了つた、玆に於て首相ショパアー氏は救をゼノア會議に求むべく本

たこと甚く失敗に歸し、墺民衆が聯合國其他より求むるの途は遂に絶へたのである、是に於て乎ショーバアー氏は已むを得ず五月末にゼノアより歸來し、遂に辭職するの餘儀なきに至つた、蓋し是より先きショーバアー内閣の支持者の中には、汎獨系派等も加つて居たのであるが、チエツクスロヴアツクとの提携及新聯合國政策は汎獨系其他の反對を買ひ、爲めにショーバアー氏は一時在野反對黨であつた社會民主黨の援けを得、漸くそれによつて僅かにチエツクスロヴアキアとの條約の批准を行ふことが出來たのである、社會民主黨と雖も決して反獨逸系ではない、唯だ對外關係を顧念して一時的に墺國經濟事情の必要からショーバアーの政策に同意したのに止まつたのである、其後汎獨系は他の問題に於てもショーバアー内閣を助けず、社會民主黨一般の問題に於てショーバアー内閣を助くることを躊躇し内閣の運命危機に瀕したる矢先き、ゼノア會議に繫いだ一縷の望みは切れ果て、遂に辭職したのに外ならないのである、然るに其後之に代つて内閣を組織したものは誰であつたか、サイペル博士其人である、彼は所謂羅馬教系に屬する基督社會黨の領袖株であり、最も熱烈なる親獨派である、彼は汎獨派と提携して新内閣を組織したのである、而して今後は此内閣の性質から見ても又た、ショーバアー氏が聯合國と提携して以て成果を

欲め得なかつた過去の歴史に照しても墺國に於て墺民が民族との合併運動に熱心に歩を向け茲にその國運救濟策を圖らねばならぬ運命に在ると思ふ、此際聯合國は果して何時迄現在の民族主義蹂躙の獨墺合併禁止を續けんとするであらう乎、併し兎も角も今後の發展如何は別として、今日中歐に於ても最も甚しい窮境に陥つて居り、慘狀言ふに堪え無い墺國共和の現狀こそは實に聯合國が民族主義を無視した遣り方を反映して居る最も雄辯な證據と云つて宜いのである。

（四）

次に吾々の眼を惹くのは目下中央歐羅巴に出現して其所謂小協商(リツトル・アンタント)の一となつて居ると言ふ小協商であらねばならぬ、然らば小協商とは何かといふに人口一千七百萬を有する羅馬尼、同じく一千百萬を有するユーゴースラヴイヤ、人口一千二百萬を數ふるチエツクスロヴアキア、同じく二千七百萬を有する波蘭並に人口六百萬を有する墺地利を含む諸國の聯合を意味するものである、之は一九二〇年八月チエツクスロヴアツキヤ及ユーゴースラヴイヤ間條約、一九二一年四月の羅馬尼チエツクスロヴアキア間條約、一九二一年六月の羅馬尼及ユーゴースラヴイヤ間條約が最も重なるものとして、此協商の基礎を爲して居

る、次に一九二一年三月に成つた露西亞對抗的意義の羅馬尼及波蘭間の條約、一九二一年十一月に成つた波蘭及チエックスロヴアキア間の條約、此二條約が更に加はつて一層其基礎を堅くし、又それ程鞏固ではないが昨年十二月に出來た前述の墺國とチエックスロヴアキとの條約もありて、此協商を完成したものである、何が故に此歐洲小協商といふのが出來たか、それに就て或點から觀ると歐羅巴で民族主義を本として、幾多の獨立國を實現したが、併て周圍の關係に於て、國として存立する上からは、小さい國では矢張心細いのである、第一に周圍に强國がある、それに對抗して國を立てゝ行く上に於ても不十分である、第二に諸國が餘りに林の如く立てば、國際紛議が起り易い、從つて紛議を避くる方法として、互に親和する點からも一の協同を作る必要がある、今一つは昨年十一月ポートロッサ會議に於ても現はれ本年のゼノア會議にも現はれたやうに、從來經濟的に共通して居た彼等が遙かに數國に分裂したので、經濟的關係が紛糾を極めて來る、左れば此間に處する策としては從來一國として經濟的に相援け相率ゐて居た共通生活、其國土分配以前の相互經濟的依賴狀態を、如何なる形式かによつて今日及び今後に繼續するにあらざれば、國民生活が困難である、こ

ならないのである、無論是等の國は各國によつてそれ〳〵立場を異にする、例を擧ぐれば波蘭と羅馬尼國は最も多く露西亞を怖れて居る、波蘭の如きは一九一九年の春講和會議に於て大體國境を決定し、一九二〇年七月に列强の斡旋でテッセン問題が決定し、一九二一年三月にリガ條約で露西亞と波蘭との東方國境問題を解決し、同十月には上シレシヤ問題を決定し、本年三月には波蘭に取つては滿足だが、相對國のリトアニアには最も不滿足なるウイルナ領有問題の解決を見たのであつた、斯の如くして國境問題は大部分解決したやうなものゝ、何分にも露國の過激主義に對して波蘭が極端なる非過激主義である關係と、双方を根據地として宣傳を行ふ分子が多いことの爲めに紛議が絶えない、羅馬尼に至つてはベサラビヤ問題の爲めに露西亞を恐るゝこと甚しく、つまり波羅兩國は排露的であらざるを得無い、然るに之に反してチエックスロヴアキア及びユーゴースラヴイアが露西亞と親善であり之に好意を有するは世人の知る如くである、チエックスロヴアキアの恐るゝ所は露西亞でなくて獨逸勢力の增進と其壓迫であり、殊に洪牙利の勢力及び其異圖を懷くことである、ユーゴースラヴイアも亦之と同じく獨逸と洪牙利の勢力を怖れて居る、斯の如く各特殊事情の爲めに諸國

族に當るといふやうな必要を生じたことは云ふまでもない、文きに彼等が大戰の好運に乘じて、民族主義の國を立て得たのは宜いが餘りに小さい國として立つことは非常に困難であることをも經驗して來た、經濟的見地から殊に此感じ深かゝざるを得無い、是れも小協商成立の一副因と見られぬでも無い、併し吾人は此小協商形成の現象に對して、ドウしても一層重要なる原因の一として擧げなければならぬものは、數國の建設並に領土分配に於て民族主義に遵ふこと極めて多いといふ事實が即ち此小協商を作らしむるに至つた、最も有力なる原因であること是である、世人は決して此點を見逃してはならない。

何故ぞ、先づ第一に此小協商なるものが誰によつて企てられ、如何にして出來たかを考へると能く判る、小協商の計劃はチエツクスロヴアキア國と羅馬尼國とが中心となりて出來たものである、久しくチエツクスロヴアキア國外相であり、昨年以來首相となつて居るエドワード、ベネツシユ氏と羅馬尼國に於て度々總理大臣となり、最近迄外務大臣として活動し今年六月故人となつたタケヨネスク氏こそ實に小協商の父母と稱する人々である、就中最も功績顯著なるはベネツシユ氏である、彼は本年僅かに三十八歲、歐羅巴で言ふと、最も若い外交家、政治家に屬するのだ、過去一兩年間非凡の人傑たることを禁證して

交た、最近ゼノア會議に出席して、其偉大の外交家となり、巴里在敎に往來したのでも、彼が大國間にさへ信用と勢力を有することが分るのである、彼は元ボヘミヤの農家に生れ、戰爭中は流浪して英國佛國等に居たのである、そしてチエツクスロヴアキアの建設に努力し政治家の間に遊說して居た人である、併し彼は實際家である、唯單に空名に走り空想に捉はるゝ人ではない、學者である彼はプラグ大學に於て敎授たり、社會學政治學に造詣深いが、又た生きた實際政治にも熟達であつた、彼は夙にチエツクスロヴアキア國維持のためには、どうしても此小協商を作らなければならぬといふ見地を持し、今より四年前既に共運動を始めたのであつた、此相手になつたのはタケヨネスク氏である、彼はベネツシユに比すれば古くから有名な政治家であり、夙に排獨墺、親英佛派として知られて居り、戰爭前から羅馬尼の政界に活躍した、而して世界の大戰が開かるゝと、動もすれば獨逸に傾かんとする勢ひのあつたカロロ王に反對して羅馬尼をして遂に中立を維持せしめたのも、彼の力が多く、後一九一六年夏之を聯合國側に參戰せしめた事に於ても、彼は此氣運を齎らすに最も與つて力あつたものである、彼は「英佛の提携を根柢に置き、其上に羅馬尼の國策を樹てた」人である、斯くして遂に羅馬尼をして戰前人口七百萬の小國より一千七百萬

の國家に大膨脹を遂げさせた功勞者である、然るにチエツクスロヴアキアと雜馬尼とは共通の弱味を有つて居る、其は世界の大戰後の國境改訂に於て戰勝國の勢ひに乘じて、他の民族主義を無視して成るべく廣く自分の國境を定めたことに外ならない、換言すれば共に共に民族主義蹂躙を犯したのである、先づチエツクスロヴアキアから云へば自國々境の劃定に際して、獨逸に近き方面で獨逸人多き地帶をも自國領土とした、又た舊洪牙利領を自國領とするに當つて、洪牙人多き地帶をも含ましめたのであつた（因に、ゲール、コマロム、及びポソニーの三郡が一部的にチエツク國側に割取せられたのは、最も洪牙利人の惡感を挑發ししたのである）斯くの如くにして少くともチエツクスロヴアキアは今や四百萬の獨逸人を含み、又五六十萬の洪牙利（マジヤール）人を含んで居る、之が卽ちチエツクスロヴアキア國が大に獨逸國を憂慮するに至つた所以であり、就中最近墺國が獨逸と合併し所謂獨逸民族の國家が大きくなることを防止するに全力を盡し、そが爲めに小協商を要求して居る所以である、蓋し獨逸國が大きくなることはチエツクスロヴアキアの國境內の獨逸人多數の地域に脅威を及ぼし、此等獨逸人と獨墺人との接近を促がし、獨逸及チエツクスロヴアキア間の國際紛議からである、茲に於てチエツクスロヴアキアは全力を盡して聯合國に對して墺獨合併を阻止するの案を立て、一方に於ては金員を貸與して獨逸より墺國を引離すの策に出で、又小協商を作り未だ提携力は弱いが七千萬の人口を含めて居る其力によつて、チエツクスロヴアキア對獨逸關係問題に處し、又たチエツクスロヴアキアに惡感を强うして居る洪牙利を威壓せんと企て居るのである、次に雜馬尼は如何といふに、同國は露國崩壞に乘じ恣まゝに露西亞領より人口二百三十四萬のベサラビヤを收め又たサンゼルマン及びトリアノン兩講和條約で舊墺地利洪牙利領よりはツランシルバニヤを初とし人口約六百餘萬を含む地帶を奪取したのである、所が右ベサラビヤは一八七八年伯林條約以前に雜馬尼の領土であつたといふ歷史もあるが、今より五十六年前卽ち巴里條約以前に遡るときは、其露西亞の領土であつたことは誰も知る如くである、併し歷史的の爭ひは別として、人口上ベサラビヤには雜馬尼人が相當多數居住して居るから、其重要なる部分を雜馬尼に歸らすことは決して不當で無いけれど、然も今回の領土の分配方法は雜馬尼が、露西亞の頽壞したる難境に乘じて、成るべく廣く領土を取込んだものであり、卽ち適度を超へて露國人の民族主義を侵した姿がある、其結果露國との

チェリンは羅馬尼使節を嘲罵したのである、次きにツランシルヴニヤ方面は如何といふに、共處には羅馬尼人が相當に居住して居り、之が獲取は不當ではないが、唯だ其領土分配の仕方は矢張りベサラビヤに於けると同様、幾多のマヂアール人（即ち洪牙利人）居住地域をも羅馬尼に收めたのである、羅馬尼が洪牙利から得たのは、全部獲取の郡數、十九、一部獲得の郡數五郡であるが、之は分配法困難な事情もあつたけれども、そが公平だと言ひ難きのみで無く、兎も角も爲めに百二十萬の洪牙利人を羅馬尼に收めたので、洪牙利人の不平は頗る深いことを見逃してはならない、同時にツランシルヴニア等のマヂヤール人も反羅馬尼運動を止めないのである、羅馬尼王フエルヂナンド陛下は「我新軍隊にツランシルヴニア出身の洪牙利人の加はれることは正さにマヂヤール人歸服の證左なり」と言はれたが、然も他方を見ると、ツランシルヴニヤで、マヂヤール人の將校たりしものが一名も羅馬尼軍に入らぬことを忘れてはならない、以上簡短だけれども、以て羅馬尼がベサラビアにつきて露國に對する如くツランシルヴニヤ方面に於ても洪牙利を怖れざるを得ないことが判明するだらうかと思ふ。

已に上記の如き事情下に立つて居る、則ち誰かチエックスロヴアキア及羅馬尼が中心となり、換言すれば其二國の大政治家として目さるゝベネツシユ氏及びタケヨネスク氏が中心となつて小協商を生み出した所以の一大理由、即ち、民族主義を無視した跡始末として小協商を要するに至つた點を了解するに苦しむものがあらう、予をして言はしむると、チエックスロヴアキア國の出現も、羅馬尼の齊墺洪領　露領獲得も、大體民族主義に適ふものであるけれど、唯だ戰勝の勢ひに乘じ、餘りに進み過ぎて、別に又た復た民族主義を侵すこととなつたのである、此際に於て寧ろ彼等が執る可き賢明な策は、寧ろ相手國に有利なる領域修正、境界修正を行ひ、以て將來の禍根を除去するに存するではあるまい乎、顧るに羅馬尼とチエックスロヴアキアとの二國間には一九二一年六月協約成立の場合に、兩國の親善を深くせしむる目的を以て、講和條約による領土分配に變更したのであつた、それは外でもない羅馬尼は人口約三千人のチエック人のみを含んで居る三ケ村を、チエックスロヴアキアに讓與し、之に反してチエックスロヴアキアは同じく七千の羅馬尼人を含んで居る八ケ村を羅馬尼に讓渡したこと是れである、這は云ふ迄もなく賢明なる民族問題の解決である、予は對露獨洪關係に於ても同一の方策を講ずることそ羅馬尼及チエックに取つて有利ではあるまいかと考ふるものである、唯範圍廣汎に亘り事情錯綜せる爲め、諸國徒らに慾に捉はれて居るのは誠に氣の毒

と言はねばならぬ、以上の事實は一方に於て民族主義の國家が民族主義によつて小國を作り然も、獨立の力が十分でないか、聯合の形勢を作り易いといふ好教訓をも示すのであらうが、然もそれと共に若くはそれ以上に今日の中央歐羅巴東歐羅巴に至つては、新國土の分配は必ずしも民族主義から觀て飽く迄公正とは云はれなく、それ丈け將來の禍根を藏することを、立證するものではあるまいか。

五、

以上は歐洲大戰爭に關係のあつた區域に於ける、民族主義實現の不徹底なる點を述べたのであるが、其他之に直接關係なき地域に於ける民族主義の惱みの多いことは勿論である、例へば埃及の如き獨立の名は得たが、那は決して眞の獨立ではない、是れ獨立黨の最も有力なる領袖で、曾つては埃及内閣の一員として政局に當つたザグルールパーシヤが埃及獨立と言ふ目出度ひ曉に英官憲の爲めに捕はれて印度錫蘭島に流された如き事實を觀ても明かである、次に印度に於ける最近の問題は吾々の言を待つ迄もないことである、併し他地は姑らく措き歐羅巴それ自身と雖も民族主義の上から觀た成績上述の如く、爲めに民族平和若くは自由に依つて國際的平和生活を齎らすを得無いことは、抑も何等の悲む可き事實であらう。

以上で予が紹介せんと志した歐洲の不徹底な民族主義實現の一端は略ぼ紹介し得たと考へる、依つて玆に筆を擱き度いと思ふのである、併し終りに臨んで一言せざるを得無いのは、完全な民族主義的領域分配、民族解放の實現が頗る困難なこと是れである。それには歷史的事情もあらうし、地理的事情もあり、又た軍事的必要と言ふ立場もあつて、局面を紛糾せしむるに違ひ無いが、最も厄介なものは、諸國の政治家が今日に於ても十九世紀の舊政治家メテルニッヒ流の便宜主義に左右せられて居ること是れである、彼等は言論でこそ理想を説き主義を説くが、實行に入ると、昨日の名論、棄てゝ弊履の如くなるのである、チロン博士であつたと覺ゆるが、是非善惡は姑らく置き、兎も角主義に依つて行動するのは、一露國の過激派政府のみと言つたことがある、然り、今日歐洲諸政治家の行動を見ると、主義に依つて働く場合もあるが、それは其方が自己に好都合な場合であり、一旦不都合になると、折角の金科玉條を忽ち捨てゝ顧み無いのである、斯くの如き間に在りて如何でか徹底的な民族主義の發揚を見、之に依つて國際平和策を講ずることを出來得やう、

斯く考へて來ると、吾人は差當り民族主義の徹底的實現・民

族自由の實現ばかりに依賴することの實際政策として賢明ならざるを感ずるのである、無論今後も達識の人道家が政治家を鞭韃して民族主義の實現に努力を繼續することは必要に違ひ無いが、何分その進捗が、牛歩遲々たる嫌なき現在に在りては、矢張り他方に於て世界諸國を通して人種的差別待遇、民族的差別待遇を排除し、眞に國民平等を實現する各國政治の改革運動を起し、之に依つて民族主義の不徹底的實現の缺陷（或る地帶に於ては完全なる民族主義無視の暴狀）を補ふのが急務であり、志士仁人の義務であらうと思ふ、勿論此國內政治上民族平等の實現も、牛歩遲々たること、民族主義の實現のそれに同じいことであらうが、同じ牛歩遲々であつても、せめて同時に二方面から改革策を進めることは、それ丈け今日不均等の待遇に惱む若干民族の苦惱を輕くする所以ではあるまい乎然かも斯く言ふ予は決して民族主義を輕視するものでは無い、幸ひに便宜主義のロイドヂョルヂ、ポアンカレー、カーズン等諸政治家に代つて、新たに主張堅固で雄腕敏才な大政治家が現はれ、歐洲の中流的國家を說得し、比較的一層完美な民族自由を實現せんことは、固より予の翹望して措かざる所である。

ローマ字論者とエスペラント

海軍少佐　福永恭助

A——此頃エスペラントの素晴しい勢はどうだい。「公論」や「改造」のやうな大雜誌が每號エス語論を載せだしたぢやないか。處で君の方の景氣はどうだい。

B——ローマ字の事かね？　着々やつて居るよ。いづれ國家が正式にそれを採用するのも程遠くはあるまい。

A——「程遠くはあるまい」は心細いね。もつと積極的に猛烈な運動を始めたらどうだ。政府に向つても國民に對しても。

B——着々やつて居るよ。が併しこの問題ばつかりは氣永にやらなければいけない、成功をあせることは寧ろ大禁物だ。特に線香花火の國民に對してはね。

A――熱し易く冷め易いからと云ふのか。その國民性を旨く利用して掛らなければ宣傳は落第だよ。兎に角マア慥りやつて貰はう。處で今日は一つ問題があるんだ……と謂ふのは外でも無いが、君達ローマジストはエスペラントに就いてどう考へて居るのかね？

B――ア丶大變結構なものだと思つてる。

A――議會の大臣の答辯見たいな返答だね。木で鼻を括つたやうな挨拶は此際御斷りだ。

B――惡意にとられては困る。細かい事を言つたら多少不滿足な點もあるだらうが大體に於いて僕は國際補助語の必要な事を痛切に感じて居るのだからエスペラントに不贊成であると云ふ道理が無い。現に吾々の仲間にはエスペランチストが澤山に居る、日本エスペラント社のO君からして日本ローマ字會員だよ。

A――これは初耳だ。エスペラント主義とローマ字主義とは氷炭相容れ無い筈ぢやなかつたかね？『英語の勢力を今日無視する譯には行か無い』と云ふのが君達の立場ぢやなかつたか。

B――大變な誤解だ。それはローマ字論者の內でも偏つた連中の云ふ事で、所謂ヘボン式ローマ字即英語風のローマ字を唱へるM氏一派の說さ。僕達のはどこにも偏ら無い日本式ローマ字さ。

A――矢つ張り偏つてるぢやないか、日本式だなんて。

B――揚足をとつちやいけない、日本の國字の綴り方が日本語の性質に合ふやうに日本式に偏つて居るのは當然過ぎる程當然なことだ。何？ それがエスペラント主義に合致しないと云ふのか。さうぢやない。エスペラントと云ふのは、エスペランチストも云つてる通り國際補助語なのだから國內語の問題には不干涉の立場にある。

A――さうかしら？ ぢやこれはどうしたんだい、莫哀山莊主人の意見は。

B――何んだそれは、成程日日新聞の切抜きか。昨日と一昨日の隨想漫錄だね、何と言つてるかね。

A――いゝか『我國の文字や言語は根本的に不便不利がある』そこ迄は君の云ひさうな事だがそれから先きが違つてる、『然らばどうしたらよからう？ ローマ字にするか、假名に改めるか、いづれも駄目だ！ やむなくんば第二國語としてエスペラントを採用し之を義務敎育課目中に加へる事になれば遠からず日用語となるだらう』とあるぜ

B『――ローマ字も假名も駄目だ！』と云ふ理由は別に書いてないやうだね。『やむなくんば』は意味深長だが、山莊主人未

だよくエスペラントの主張を御存知無いらしいね、そんな口吻では。いつだつたか「公論」でエス學會のI君が建部學士に對して言つてたぢやないか、『エスペラントは國語を排斥する世界語ではなくして、國語の外に立ち之と兩立する國際語である』と。一國の言葉を替へると謂ふ事は、僅か許りの單語の改正なら兎も角、impossible の事で無いにしても、それは、next to impossible な事だ。

A――一寸待つた。英語に偏らないと云ふ君がさう續け樣に英語を連發するのは穩當で無いぞ。

B――仲々急所を衝くね。だがこれに就いて面白い話がある。例の森有禮卿だね、あの人が明治の初年に駐英公使をしてた時莫哀山莊主人と同樣な考から『日本語の使用を嚴禁して之に代ふるに將に世界語たるべき英語を採用してはどうか』と云ふ事に就いて有名なロード・ケルビンの友達でオックスフォード大學の博言學者マックス・ミラー博士の意見を求めたと思ひ給へ。その時ミラー先生の答へたのが今僕の言つた英語なのだよ。

A――成程……地中海はマルタ島のやうな小さな島でさへ英國政府があれ程英語の普及に努力して居るのにマルタ人は決してマルタ語を捨てて無いからね。

B――それよりか君、大英國の御膝元のスコットランドでも英語を使はない所があるよ。民族と言葉と云ふものは根強い關係のあるものだ。

A――處でさうなると日本語は替へられず、さりとて習ふに難しい日本語をいつまでも使はせられる日本人は宿命的に發展を封ぜられて仕舞つた格だね。さうだとすると鳥渡悲觀せざるを得ない。

B――早まつちやいけない。山莊主人や森有禮卿の難しい難しいと云つてるのは、實は日本語其物が難しいのではなくて、日本語を寫す國字が難しいのだ。例へば「サクラ」なら「サクラ」と云ふ語にした處で兒童がそれを覺える事の難易は英語の cherry や佛語の cerisier に較べて少しの相違も無い――いや寧ろ「サクラ」の方が日本人にとつては易しいと云へる位だ。唯どうもいけないのはそれを寫す文字だ「櫻」と云ふ文字が兒童の教育を阻害し國民の發展を閉塞するのだ。だからそれをローマ字で Sakura と書くことにすればこれは苦も無く解決の附く問題なのだ。僕等はそれを今君達に勸めて居るのぢやないか。ちつとも日本の前途を悲觀する事は無い。

A――待て待て、君の云ふのは「サクラ」とか「うめ」とか云ふありふれた言葉に就いてこそ當て嵌るけれども漢語と云ふ

奴は矢つ張り難しいよ。

B——いや漢語必ずしも難しか無い。「ヒコーキ」と云ふ漢語は aeroplane より難かしいと云ふのか君は

A——それは難しいさ。「ヒコーキ」の「ヒ」は「飛ぶ」を示し「コー」は「行く」の漢音で「キ」は「機械」の「機」だと云ふ事を覺えるのは生易しい事ではない。

B——君の言つてる事は語源を教へる場合の話だ。語の教育に一々語源から說き起こしてそれを分解的に教へる事必ずしも無用だとは云はないが、それは兒童教育にはなくてもがなの事だ。「ヒコーキ」と云ふ全體の言葉があの空を翔る飛行機の事を指すのだと教へればいい。言葉といふものはさう云ふ風に語其儘のものを棒暗記するのが一番大切なのだ。

A——！さうか知ら？ 語を分解して教へたり又語源其物がいつも眼に見える樣な漢字の「飛行機」で「ヒコーキ」を教へた方が聯想とか印象とか云ふ方面が强いから言葉を早く覺える効能がありやしないかね。

B——聯想や印象が多少强くなる事は事實だが、さう云ふ言葉の教授法は近代はもう廢たれたよ。その方面を主として教授をすると語の音や抑揚に對する注意が自然と疎になつては仕舞ふ。基礎教育では語源を教へたり字を書いて見せたりしない方がいい。殊に漢字などを使つてる間は

A——似たやうな事は誰からか聞いた事がある。さうだ、親類の娘が佛英和に通つてるが、近頃は英語を教へるのに矢張り字を見せないさうだね。それで生徒はめいめい假名でいろんな符號を作つて心憶えにしてゐるさうだ。

B——僕達の中學時代には cotton は「コットトン」、other は「オツトハー」とやつたものだ。

A——大分脫線氣味だから一先づもとに戻らう。そこで「ヒコーキ」はまあ知れ渡つた言葉だからいいとして、軍隊あたりで使ふ言葉には隨分難かしい漢語があるよ。物乾場の事を「乾燥場」と云つたり、君帳面の事を「手簿」と云ふんだからね。新兵は隨分苦勞してるぜ。

B——それは事實だ。併しそれ等の語は廣く知れ渡つて居ない言葉だからこそ難解なので、漢語であるが故に難解だとは必ずしも云へない。

A——漢語排斥屋の君としては少しお可笑な說ではないかね。漢語は卽準外國語だと云ふから廣く日本人に知れ渡つて居ないと云ふ事それ自身と同じ意味を含んぢや居ないかね。

B——だから『必ずしも』と斷つた次第だ。日本化しない漢語なんか少しも庇やしないさ。

A――それに尚漢語には同音異義の語が多くつてね。軍旗、軍紀、軍器。軍機、聞いただけぢや何の事か薩張り判りやしない。これ又日本語が難しいと批難される點だね。

B――そんな言葉を使ふ人が悪いのさ。軍旗はチャント聯隊旗と云ふ立派な言ひ方がある。軍紀だつて軍隊の紀律とかたゞ紀律とか云へばいい。大抵の場合は特に「軍」とか「軍隊」とか云ふ意味を含ませる必要はない筈だから紀律で充分な話だ。軍器は勿論武器とか兵器とかに言ひ換へる。軍機か、そりや軍隊の秘密とするさ。何長つたらしいつて？ 長つたらしくたつて間違へるよりはマシだ。それに大抵の場合は軍紀同様で、たゞ秘密で充分用が足りるのだよ、さう云ふ風にやつて行けば少しも不都合はない、所謂吾々の Kotoba-naoshi と名付ける奴で、今吾々は着々と實行して居る、詰り國語整理だね。これさへ仕遂げればもともと日本語の本質は立派なものだから少しも心配する事は無い。全體日本語としては寧ろお客様の位置にある漢語の而もそれの一部分に不都合があるからと云つて日本語全部に愛憎を盡かすのはチト早過ぎはしないかね。

A――それなら君は漢語の整理が可能だと思ふか。變挺な漢語が濫造されるのは君、軍隊計りぢやないよ。近頃新聞に出る新熟語を見給へ、まるで滅茶だ。

B――そこだよ君。漢字を國字としてゐるからこそさう云ふ風になるので、ローマ字はそれを救ふ上にも効果があるといふ事に就いては去年僕は「公論」に書いといた筈だが。

A――！あれは讀んださ。それなら未だ外にある、日本語には英語のI（アイ）に相當する言葉が「ワタシ」、「ワタクシ」、「オレ」、「ボク」……など幾つもあるのはどうだ。それらを覺えるだけでも日本人は餘計な苦勞をして居るのぢやないか。英語なら目上の人にだつて目下の人にだつてI（アイ）一つで濟んでるぢやないか。

B――それも多過ぎれば國語整理で節分けさへすれば片付く問題だ。但し此處で一寸言つて置く事がある。日本人の物言ひが目上の人と目下の人とで違つて居るのは言葉其物の問題ではなくて實は思想の問題なのだ。よくいへば長上を敬ふ、悪く云へば階級思想の旺盛な人種が、それに相當した思想表現法を持つて居るのは少しも怪しむに足りない。若しさう云ふ思想其物がいけないと云ふならばそれは少し問題が違ふ。

A――思想其物に就いても、もつとデモクラチックにならなければならないが、それにしても今使はれて居る言葉は近代人の思想以上に複雑だよ、

B――そんなのがあつたら即國語整理さ。何？ 整理をして

も多少は殘るつて。それは仕方が無い。近代人の思想だつて矢張り敬語の少し位は殘し度いのだもの。

A――それだけ矢張り歐米語に較べて複雜さが殘つて居る事になる。

B――それはどうも致し方が無い。民族や國民がそれを好むのだから。例へば外國語には男性、女性、中性などがあつて、名詞計りでなく働詞から形容詞まで主格の性の變化に從つて變るのがあるが、それも其國民の好き好きだから仕方が無い。そんなのに較べても君は日本語の方が複雜だと云ふのか。

A――いや複雜必ずしも惡くはないと僕は思ふね。餘り簡單すぎて look も see もたゞ「みる」一つしか持たないのは思想の幼稚なものとして決して感心された話ぢやない。

B――これは君にも似合はない議論だ。複雜な方が好いと云ふなら目上の人と目下の人とで言ひ廻し方や言葉が違ふやうな發達をした方がズツト思想が複雜なのぢやないか。

A――いや、そんな方面で複雜なのはいけない。もつと科學的に複雜なのでなければ。

B――そんな事を云ふなら日本語の「ほそい」、「こまかい」、「せまい」、「ちいさい」などに對する英語や獨逸語や佛蘭西語を捜して見給へ。一概にそんなことはいえない筈だから、尤も日本人の智識や思想に非科學的な處は澤山ある。それを振興するためにも國字改造の必要がある譯だが、兎に角今日我國は主に西洋から文明を輸入して居るから舶來智識や舶來思想を言ひ顯はすのにウマイ日本語譯が無いのは事實だ。これも國語整理でやる仕事の一つだ。

A――何んでもかんでも國語整理に押し付けて仕舞ふのが君の手のやうだが、全體君の所謂「國語整理」でやる仕事は何んだい？

B――人に依つて「國語整理」の解釋が多少違ふだらうが、僕は次のやうに見て居る。

（イ）今の日本人の智識や思想に較べて、不足して居る言葉を作ること。

（ロ）同音異義の漢語や字を見なければ判らないと云ふ樣な漢語を直したり、よい本來の日本語があるにも拘らずそれを捨てて外國語や漢語をとると云ふ惡風を直すこと。

（ハ）今日の日本人の智識や思想に較べて、多過ぎる言葉を削りとること

A――文體の問題はどうなるかね。

B――言ふ迄も無く、口で言ひ耳で聞く通りの話し言葉風さ。これで國語問題も國字問題も一擧にして片が付く譯だ。

A——それには尙、今日新らしい言葉の作り方を新聞記者や文學者の勝手氣儘に放任してあるが、あれは禁止しなくてはなるまいと思ふがどうか。

B——ローマ字を使ふ樣になればこれ迄のやうに只漢字を二つ三つ並べて新熟語を作ると云ふ風な惡習は自然と無くなるらしく思はれるが、それにしても國家が何か「國語整理制定常設委員會」と云つた風な組織を設けて世の中を指導する必要があるね。「プロパガンダ」を陸軍だけが一時「普傳(ふでん)」と譯して居つたやうな事を避けるために。尤も委員の選び方にはよく氣をつけなきやならないがね。外國は皆さうやつて居るのだよ。

A——段々話が變つてエスペラント問題はそつち退けになつて仕舞つた。さつき君は「多少不滿足な點はあるが」と云ふやうな事を云つたがエスペラントのどこに不滿足があるのかね。エス語が「何處の國にも偏らない中立語」だと云ふのが嘘で、東洋人から見れば「著しく歐米に偏つた中立語」だからと云ふのかね。

B——それは事實だ。エス語は英國人が聞けば餘程英語臭くとれるし又獨逸人が見れば獨逸語に似て居ると云ふし、佛蘭人には佛語が過分に採り入れてあるやうに思はれるに拘らず、日本人から見ると此感じは餘程薄い。それはザメンホフが東洋の事を忘れて居つたからで、當時の世界の大勢がまだ人々の注意を太平洋方面に向ける迄になつて居なかつた故(せい)もある。が併し偶然と云はうか言語學上日本語の優れて居る爲めであらうか、エスペラントの單語こそは歐洲に云つて居るだらうが、それの文法が餘程日本語に似て居るし、發音から云つても外の外國語よりも日本人に納得され易い。たゞそれの綴り方が一字一音と云ふ事に囚はれ過ぎて符號の多過ぎるのは色々な點で不便が多からう。印刷體で丈の低い字の上にも丈の高い字の上にも山形(accent circonflex)が附いて居るのなども實際問題としてはどうかね。Ja, ju, jo も矢張り ya, yu, yo を使つた方が萬國的性質を餘計持つ事になりはしないかね。こんな事は大體論から云へば勿論些細な問題でどつちでも好いやうなものの、どつちでもよければ成るべく好い方を採ると云ふのが僕等の考だね。此邊をイド語(Ido)がどうやつてるかしら。兎に角僕は精しく研究して居ないからハッキリした事は今言ひ難いが。

A——主義に於いて國際語に贊成して居乍ら精しく研究して居ないとは君にも似合はないね。ローマ字問題の時そんな物言ひをすると君は不熱心を猛烈に批難する癖に。エス學會のO(オー)君などは熱心なものだと云ふぜ。マダムを貰ふのにもエス語をやると云ふ事が條件だつたと云ふぢやないか。

B——誤解してはいけない。僕は國際語問題を省みないと云ふのぢや決して無い。個人に就ても社會生活があり、國家に就いても國際生活がある限り此の問題の重要さは決して失はれない。これから大に研究にとりかゝらうと云ふのだよ。併しこれ丈けの事は君の耳に入れて置く必要がある。と云ふのは、君達の言ひ草に『今日の日本人の生活には自己の充實といふ事が忘れられて居る』と云ふ一節があるね。例へば住宅を建てるにした處で、これ迄の日本人は、客間のやうな滅多に使はれない室の床柱に數百金を投じて家族は北側のジメ〳〵した陰氣な部室に燻ぶつて居る。また自分達は豆腐のおからに澤庵の尻尾位でお茶漬サラ〳〵と濟まして居るのにお客樣には二の膳附の御料理だ。盆暮の贈答品に金を掛けるのも同じ筆法で、交際費に計り力瘤を入れて自己の生活の充實と云ふ事に甚だ冷淡であると云つた風な思想が今日多くの生活改善論者の主張ではなかつたか。之は誠に左もあるべき事で、自己の生活を後廻しにして置いて交際に力瘤を入れ過ぎるのは確に不眞面目なやり方だ。それに共鳴する君が、日本語の問題即日本人自身の問題を後廻しにして外國人と交際する場合に始めて必要な——廣く世界と附き合ふと云ふ事を決して輕視して云ふのではない。世界的日本と云ふ事を頂く見ればこそ吾々は世界共通の文字と云ふ事を大切にするのだが——國際語の問題に努力しろと僕を責めるのだつたら聊か當を得て居ないと思ふ。尤も人各々好む處ありで、エス語界のO君やI君やN博士やK博士が、それの普及に生涯を抛つて居られる事が間違つて居ると云ふのではない。間違つて居ない處か人類の幸福と云ふ大きな眼から見てあり難い事だと僕は思つて居る。併し日本國民全體を目標として議論をし宣傳をする場合には、誰が何と云つても、日本語ローマ字問題が第一でなければならない。この意味で今日中等學校でやつて居る英語の代りにエスペラントを敎へろと云ふ「公論」のIの君の說には賛成だが、小學校にそれを課すべしと云ふ莫哀山莊主人の主張には賛成が出來ない。少くとも小學校にローマ字を課すると云ふ事がそれに先んじて實現された上でなければ。

（八月十四日）

富豪の脱稅處罰と稅法制定者の責任

法學博士　堀江歸一

脱稅の起る所以

ジョン、スチューアート、ミルの著はした經濟原論の內に、脱稅に關して、興味深き說が述べられて居る。其れは「今日世間に於て、普通の標準を以つて許される道德を具有して居る人であつても、一旦自分の納付する租稅に就て、輕重孰れかに之を決しなければならぬような疑義が起ると、必ず自分に利益あるやう、即ち稅金の輕く爲るやうに解釋する」と云ふ說であるが、如何にも其通りであつて、租稅に就て、幾ら納付するのが正しいかと云ふ問題に接したならば、人々は必ず少額の納稅をして、平然として居るであらう。更に此感情が强く爲れば、人は機會を求め、口實を尋ねて、國家に納付す可き租稅の逋脱を企てゝ內心得々として居るかも知れない。然らば租稅の逋脱を計畫する人は餘程其性質に於て狡猾であり、其行狀に於て放縱であつて、法律にさへ觸れなければ、詐欺盜賊位い働くかと云ふに必ずしもさうでなく、世間一般の是なりとするだけの德義は辨へて居り、大した不義理もしないし、又沒義道の事もたいのに、獨り租稅の問題に爲ると平氣に脱稅を行ひ、國家を欺いて、憚る所なきを常とするが一般であつて、茲に掲げたミルの說あるのも、亦敢て怪むに足らない。

然らば脱稅なるものは何故に起るのであらうか。固より其根本の原因としては、租稅の負擔の重きに過ぐることを擧げなければならぬ。必ずしも租稅の負擔額ばかりには止まらない、自己の納付す可き租稅額の過大なる場合に於ても、其過大であると云ふことが一方に逋脱行爲に對する大なる誘惑と爲るのは、爭う可からざる事實に屬する。人の本性は元來善なるものであつて、特に惡を好むと云ふ變質者例へば谷崎潤一郎氏の小說に描かれる惡魔主義の人物でもあれば兎に角然らざる限り自ら進んで國家の法律に違背することを喜び、其發覺した際に制裁を蒙る危險を賭して、脱稅を敢てするものはあるまい、唯租稅

の金額が餘りに過重であるとすれば、其納付者であると、負擔者であるとを問はず、脫税を冒した場合に自己の負擔の輕減されることが甚だ大であつて、自己の良心を苦しめる惱みなり、發覺の際に於ける制裁なりを償うて、餘りあるとすれば、小人の常として、脫税に依つて、不正の利益を貪らうとする賤しき念を催ほさゞるを得ないであらう。堂々たる紳士貴婦人が税關に於て、貴金屬寶石等の密輸入を企てるのは、何れも是等の物品に對する輸入税率が諸國を通じて、高きに過ぐることに基く。誠に脫税の由つて生ずる原因の租税過重に存することは、吾人の第一に認めなければならぬ所である。

租税に對する國民の理解

第二に脫税の原因を以つて見る可きは、租税なり、國家財政なりの本質に對する國民の無智であり、又國民道德の程度の低いことである。租税の收入は今日如何なる組織の下に立てられた財政に於ても、國家收入の根幹と爲るものであつて、租税收入の豐富であることゝ、其確實であることゝ、社會の進步に伴つて、共漸進的に増加することゝの三條件が備はつて、始めて國家財政の基礎の鞏固なることを得るのである。然らば國民の間に脫税が行はれて、如何なる税法を以て彼等に臨んでも、倘ほ脫税が行はれるとしたならば、時勢が幾ら進步し、國富が如何程増加しても、租税の收入は是等と相待つて、増加するを得ない、即ち一國に於ける租税の收入は脫税の念慮の消長若しくは之に對する取締りの寬嚴に依つて、増減する譯であつて、確實であることを期しられないし、一部の國民に對する負擔の重い割合に、充分の收入を收めるを得ないと云ふ種々の缺點を免がれない。一國に脫税者があればあるだけ、斯の如き弊害を釀成して、一國の租税制度——更に進んでは財政制度を毀傷するのであつて、彼等脫税者の罪は恰も建築物に於ける白蟻と撰ぶ所はない。

更に脫税の弊害として、私の指摘しようと欲するのは、脫税者の所業の他の納税者に對する影響である。蓋し國家が自己に託された或る程度或る種類の職務を履行するに就ては、必ず若干額の經常收入を必要とし、而して其内の大部分は之を租税の收入に仰がなければならぬであらう。而して一國の租税制度に於ては、例へば我國に於ける地租所得税酒税と云ふが如き、重要なる税目として依賴す可きものがある。然るに是等の租税に於て、一部の納税者は概して廉直であるが、他の一部に不正直の者があつて、税金の逋脫を事として居つたならば、如何なる結果を生ずるであらう。國家は其主として依賴する租税から、

當然豫期され可きだけの收入を收められないとすれば、其缺額は其稅目なり、他稅目なりに於ける廉直なる納稅者に特に重稅を賦課すると云ふ形に於て、補充しなければならぬ。随つて一の稅目に脫稅者のあると云ふことは、不正直なる者の負擔を不正の手段の下に、輕くして、廉直なる者の負擔を不當に重くするに至らざるを得ない。脫稅者は單に國家に對して、不利益なる所業を敢てして居るに止まらず、實に自己の同胞に對しても亦或る損害を及ぼして居るのである。更に斯る納稅者に依つて、逋脫される租稅が營業稅とか又は消費稅のやうなものであるとする。不正の手段に依つて稅金の逋脫を謀つて、此事に成效した者は廉直に稅金を納付した者に比較して、逋脫額だけ、自家の店舗に於て販賣する物品を廉價にするを得る餘地を見出す譯である。即ち逋脫者は自己の不德義を資本とし、又之を武器として、廉直なる同業者に向つて、不法不正の競爭を試みる次第であつて、結局同業者の倒れるまで此種の競爭を續けるであらし、始めは廉直であつた同業者も不正者流の競爭に對抗するには、同樣の武器を取らなければならぬと考へ、自他相率いて脫稅者たるに至るであらう。

若しも今日人が天下の公道を通行する場合に、道路が狹くして、他人と衝突しさうに爲つたとしたならば、互に讓り合ふのが當然の道德であつて、我物顏に往來を闊歩し、人寄らば人を斬る可く、馬觸るれば、馬を斬る可しと云ふが如き態度に出る者があつたならば、士人の道德を解せざるものとして、何人も彼を憎むであらう。脫稅者の所業の橫暴であり、而して自己の同胞に迷惑損害を及ぼすことの大なるは、此無遠慮なる通行人と異なる所なき筈であるのに、道路の通行に就て、德義を遵守する人が租稅に就ては、道德を蹂躪して、顧みないと云ふのは、詰り租稅に關する知識の缺如の之を然らしめる所少なしとしないであらう。然しながら社會の一部に於ては、稅法なり、財政の問題なりに就て、必ずしも無智ではなく、寧ろ相當の知識を持つて居りながら、却つて之を逆用して、脫稅の方便を工夫し又實用する者のあるに至つては、國民道德の頹廢を語るものとして大に之を矯正するの計を運らざる可からざる所以である。

國民の惡戯心と復仇心

脫稅の原因として、第三に私の指摘しやうとするのは、國民の惡戯心であり、又復仇心である。今日の社會に於ては、如何なる人と雖も、多少の惡戯心や、復仇心を持たないものはあるまい、租稅を徵收するのは、固より國家の權利であつて、國民たるもの、其納付を全うする義務を荷ふことは勿論であるとしてゞ、心なき收稅官が妄に法規を楯として、徵稅手續を行ひ

としたならば、納税者の方では何か或る反抗を試みて、收税官を困惑させようと云ふような一種の氣分の起ることを免がれないであらう。殊に租税の負擔は其之を負擔する度毎に、酷烈に又確實に國民の感じる所であるに反し、其納税が國家の財政を豐にして、國家をして或る職務を遂行するに至らしめたとしても、斯くて國民に與へる利益は多く無形のものであつて、何等の感觸を彼等に與へるに至らない。國民は何ものをも與へられずして、自家の所得を奪はれ、利益の漠然たるに對して、犧牲の頗る適確である以上は、徴税手續を憎み、租税を忌み、收税官を嫌うの念は凝つて、脱税に爲り、斯くて收税官に酬ゆるものとする間違つた觀念を生ずることとなしとしないのである。

税法に於ける規定の不備

最後に脱税の原因として、私の擧げんとするものは、税法に於ける規定の不備である。英國の所得税が比較的正確に適用されて居ると云ふことは、天下の公評である。如何にも國富なり國民所得なりの増加するが如くに、所得税の收入も亦增加する、所得税の税率一片（ペニー）を單位として、其收入を算出すると、時勢の進歩と共に、收入の増加することの如き、所得税の徴收の行き届いて居ることを示す證左とするに足りるが、然し之を以つて、直に英國人の公德の程度の高いことの結果とするのは、聊か早計の嫌ありとしないであらうか。私をして云はしめれば、英國の所得税法が比較的巧妙に運用される原因の大部分は源泉課税法に在ると考へる。所得の種類を其出つて生ずる源泉に就てA、B、C、D、Eに分ち、是等の所得に課税するに當つて、出來得る限り、其源泉に遡つて税金を徴收する結果、所得税を國庫に納付して、徴税手續に當る者は税金の輕重に關して、何等の利害關係を持たない第三者であると云ふことが所得税の徴收に關して、脱税を行うことを制するに至らしめる所以と爲るのである。固より英國は立憲政治發祥の國であり、又政治に對する國民の理解の進んだ國であると云ふことの關係から、脱税などの少なかる可き譯であるが、尙ほ所得税の確實に行はれて居ることに對しては、私は源泉課税法の然らしめる所であると斷定するに、躊躇しない者である。然らば此反對に綜合課税法の行はれる場合には如何であるか。此課税法の下に於ては、納税者は自己が各方面から收める所得を其手許に於て綜合し、其全體の合計額に就て課税する仕組であつて見れば、所得の高低に依つて、直に税金に輕重の差を生じ、而して其高低は納税者一箇の意思に依つて、如何ようにも之を届出ることが出來、此届出に對しては、官廳の方で、必ずしも嚴密なる査定を

施すだけの材料もなく、見込もないとすれば、納税者が此際に乘じて、所得の届出を低くして以つて脱税を試みようとすることは、最も陥り易い所としなければならぬ。

我國所得税に於ける脱税

私は以上抽象的に脱税の由つて起る所以を説明した。今日恰も我國に於て、所得税に關する脱税問題の起つて居る際であるから、脱税の理由を我國所得税法に應用して、考察を試みよう。第一我國に於て現行所得税々率の過重であることは、論を俟たない、成る程英國に於ては普通税率と超過税率とを合せて、所得税の最高税率の五割一分六厘に上つたことがあり、北米合衆國に於ても、最高率の六割以上に達したことはあるが、是等は何れも戰時非常の際に行はれた所であつて、以つて一般を律するを得ない。我國の所得税が其最高率に於て三割六分に居るが如き、何としても苛重であると云はれよう。然らば何故に我國に於て所得税が斯く苛重の税率に爲るかと云へば、政府の方で納税者の間に脱税の行はれる事實を見越し、脱税と云ふ不法の手段に依つて、國民自ら負擔を輕くするから、政府の方では、殊更に税率を重くして、負擔を正當の點に維持しようとする一方に納税者の方では、政府が既に斯る、掛引に依つて、高い税率を適用しようとし、其裏面に於ては、脱税の或る程度まで行はれることを承認して居るものである以上は、何人も真正直に此高い税率に依つて定められた負擔に當つて堪まるものでない、或る程度まで脱税に依つて、負擔を輕くしようとするのである。即ち脱税が行はれるから、税率を重くしよう、税率が重いから、脱税をしようと云ふ工合に、官民互に相誘い相欺いて、租税の運用を不完全ならしめるのであつて、罪は正に双方に在りとしなければならぬ。其の趣きは縁日に於ける植木の賣買と同様掛値をするから、値切らう、値切るから、掛値をしようと云ふ次第であつて、國家税法の運用が縁日植木の賣買と同様の掛引に供されることは、吾人の税法自體の爲めに、甚だしく遺憾とする所である。政府たるもの、脱税に對する取締りを勵行するにさきだち、税率の過重である結果として、脱税の誘致される事實に就て、反省する所なければならない。輸入税が重くなれば、必ず密輸を促す如くに、他の租税が重くなれば、其結果として、脱税を生ずると云ふことは、已むを得ざる事實に屬する所であるやうなもの丶、世間の納税者必ずしも盡く脱税を企圖する者ばかりではなく、時には最も廉直に納税の義務を果さうとする者もあらうし、又官吏の國家より給與される俸給の如く、何としても脱税を試みる能はざるものもある。然ら

ば國家が千篇一律に納税者即ち脱税者であると見做し、重率の課税に依つて、脱税に酬いる方針に出でたならば、斯る脱税を敢てせざる人や、脱税をする能はざる人は其爲めに過重の負擔に虐げられ、後者の地位に居る人の如きは、泣寢入りと爲るの外ないとしても、前者の地位に居る人の如きは、心ならずも脱税者たらざるを得ざるの境遇に陷りはしないであらうか、私の疑を挾む所である。

團體的道德と消極的抵抗

我國民が租税に對して、如何なる程度の理解を持つて居るであらうか。租税に關する道德は要するに一種の團體道德である。租税の收入が國庫に這入り、國家をして種々の職務を盡さしめる財源と爲る。自分が國民として納税の義務に當ることは、自分一箇の爲めでなくして、社會全體の利益に殉ずる所以であると共に、自分が脱税に依つて、租税の負擔を回避することは、自分の負擔に屬する租税を自分以外の人の負擔に歸せしめ、他人の費用に依頼して、國家職務の利益を受けると云ふ耻づ可き結果を生ずる、斯くては人として寄生蟲的生活をするものであると云ふ此意識が人々をして脱税行爲を愼ましめる所以と爲るのであつて、其要點は團體道德の發展に外ならない。然るに我國に於ては從來斯る團體道德の教養は國民の間に最も著しく缺けて居つた。自分一箇の利益に爲れば、他人の迷惑や、損害の如きは、之を眼中に置かないと云ふことが我國民年來の弊習であつて、團體的生活の發達しないのも、其原因は此一事に外ならないとしたならば、租税の納付に就て、教養の缺如した事實を示すことも亦當然であるとしなければならぬ。

英國あたりで地方税の徴收に關して、時々興味ある事實を生ずることがある。或る地方税の徴收法甚だ宜しきを得ない、納税者が幾ら收税官に改正を要求しても、頑として之を容れない場合に、英國地方民は如何なる手段を講じるかと云ふに、所謂消極的抵抗を試みるのである。消極的抵抗を税法に適用すれば、詰り納税者が盡く申合はせた上、期日に租税を納付しないで、殊更に滯納處分を受けるのである、斯くて收税官吏は已むを得ず納税者の財産を差押へて、公賣處分に付し、其賣却代金を租税收入に代へるの外に道はないが、納税者の方では、公賣處分の際手を廻して、自己の所有に屬する財産は總て之を買戻す方法を取るのであつて、其間に大した苦痛もないが、收税官吏の側に立つて見れば、收入の收納期は後れる、收入を徴收するには大なる手數と費用とを要する、二度三度と納税者に此消極的抵抗を繰返へされては手數倒れと爲ることを恐れて、納税者の要求に

甚だしい無理の件はない限り、之に應ずることゝ爲るのである。

随つて私は消極的抵抗法の行はれる場合に、英國人に存外惡戯氣分があつたり、茶目氣質のあつたりすることは、之を認めるが、同時に何處までも遵法的精神を以つて、終始しようとする氣魄の存することを知るのである。遵法的精神と申すのは、如何なる惡法であつても、其法律として効力を有する間は之を遵奉するが、同時に國民の全力を擧げて、惡法の改正に勉め、議會を通じて之を良法たらしめる、惡法たるの故を以つて、之に違反する口實を求めない、と云ふ意味であつて、此精神こそ英國に於て立憲政治の發達、今日の如きに至つた所以であると共に、稅法の運用に於ても亦充分に効果を擧げるに至るのである。歐米諸國に於ては、所得に關する申告を納稅者自身なり、又は第三者なりに行はせる場合に、必ず宣誓をさせる、此宣誓が如何なる程度まで、申告者の德義心を緊張せしめるかは、一個の問題であるが、或は耶蘇教國民として、幼時から神の畏る可き敬う可きことを教へ込まれた結果、上記の遵法的精神と相俟つて、此宣誓が相當の効果を齎すことは、吾人の承認するに躊躇せざる所である。

日本人の遵法的精神

翻つて是等の諸點に就て、我國の實狀を見れば如何であらうか、我國民に惡戯氣分があり、反抗氣質のあることは、明白の事實であつて、是れは封建時代の久しい間を通じて、民意が常に抑壓され、暢達の機會を得なかつた爲めに、釀成された一種の國民的氣分と見られるであらう。然らば一方に國民に遵法的精神の熾烈なるものゝあるを見るであらうが。立憲政治が行はれてから既に三十餘年を經過し必ずしも其時代は短かしとしないに拘はらず、國民は遵法的精神に於て、豊なりと見るを得ない、惡法があれば、之を改正することに努力するよりも、先づ自分一個に於て、其擘肘を免かれることを工風するのが一般である。卽ち稅法に就て云へば、隨分或る種類の租稅に向つて、惡稅呼りをして、法の改廢を求める場合があるかも知れないが、同時に脫稅に依つて、負擔を免かれる方が簡單に効果を擧げる所以であるとする考の强いことを否定するを得ない、斯の如くして溫順なる者は遵法を强いられ、反抗的氣分の豊なる者は背法を事とするが如き、社會をして健全なる發達に就かしめる所以でないのであつて、脫稅問題を解決するには、國民の遵法的精神を旺盛ならしめることを必要とする。

但し我國民をして右に述べた如く、悪法が行はれて居つても、之を改正しようとせず、自分一個だけ其適用を免かれて、自ら救はうと云ふが如き、利己的觀念を懷かせ、租税に關する道德を著しく頽廢するに至らしめたことに就ては、單に個人のみを責めるを得ない、政府にも亦負ふ可き責任の大なるものゝあることを認めなければならぬ。即ち近年政友會内閣の下に續出した綱紀の頽廢官紀の紊亂は吾人に何を語るであらうか、抑も亦全國の國税負擔者に如何なる感觸を懷かしめるであらうか、綱紀頽廢官紀紊亂の結果として、我國の國庫が果して幾何の損失を蒙つたかは之を知るを得ないが、兎に角官界に多數の貪官汚吏が巣を作り、網を張り、不正の利を漁すること、多年に及んだ次第であるからには、彼等の嚢裡を肥して、一方に國庫を貧うした金額は些少なりとするを得ないであらう。其司法處分に付せられたものは、若干の追徴金が犯罪者に課せられて、國庫の損失を塡補することゝ爲るが、果して損失金の幾何が塡補されるかは、不定の問題に屬すると共に、不正事件に依つては、全然司法處分に付せられないものもあり、兎に角國庫に大なる損害を及ぼさゞれば已まないであらう。斯の如く考を進めて行くと、如何に爲るであらうか。納税者は如何に廉直に重税の負擔に當る、其爲めには自己の生活を壓迫されたり、生活程度を引下げたりするやうな苦痛を蒙るとしても、國家の爲めに、之を忍ぶとする。然も自己の負擔した租税收入は必ずしも國家全般の用に供されるのでなく、或は貪官汚吏の奪ふ所と爲ると云ふことを知つたならば、納税者は所謂犬骨折つて、鷹に取られるの嘆を免かれないのみならず、平生租税の負擔を苦痛として居る者は得たり、賢しと此處に口實を求めて、脱税を敢てするに至ることとなしとしない。脱税は我國に於て以前から行はれて居り、殊に所得税に於て、脱税の避け難きものであることは、明治二十年同税法の實施以來國民の總て承知して居る所であるが、其れにしても近時に當つて、特に脱税騷ぎの續出するに就ては、綱紀頽廢、官紀紊亂に對する一部納税者の反感の現はれたものと見ることを至當とする。然らば政友會の如き、原内閣に於て、又高橋内閣に於て、綱紀を頽廢させ、官紀を紊亂させて、顧みなかつた以上は、實に脱税の流行に對する責任者であり、加藤内閣と雖も、此點に就て、堅く戒むる所たかつたならば、益々脱税の悪風を社會に誘致し、政府自ら苦むばかりに止まらず、自ら求めて國民の道德を破壞するの愚を演ぜざるを得ないであらう。

我國所得税法の缺陷

即ち我國の現狀を以つて、之を論ずれば、脱税は幾ら悪風であつて、抑制しなければならぬものであるとしても、一方に此悪風を誘致し、助長する幾多の事情が存在して居るのである。然しながら此場合に我國の租税法規が完璧を得て居つて一寸一分の隙も無いものであれば、尚ほ脱税の行はれることを防ぐ効果がある譯であるが、如何せん現行法規は其然るを得ない。私は所得税法に就て此事を論じよう。元來我國の所得税法に於て、法人所得と個人所得とを區別し、前者に對しては源泉課税法の下に、比例税法を後者に對しては綜合課税法の下に、累進税法を適用することを趣意とする改正の行はれたのは、明治三十二年であつて、其理由とする所は法人所得に對する源泉課税の適用に依つて、脱税の弊害を抑制しようとする一事に在つた。如何にも法人の利益金が配當金として、賞與金として、關係者個々の手元に分散し了つた場合に、其個人に就て個別的に課税するよりも、法人に就て課税した方が徴税手續の簡單に行はれるのは勿論、脱税の行はれる餘地を少なからしめる道理である。此點に於ける考の立て方は宜しかつた樣な物の、他に重大なる缺陷を當局者自ら作つたのである。即ち法人の所得に對しては、比例税を賦課して置きながら、個人の所得に對しては、累進税を賦課することゝした結果、個人にして法人所得に對する比例税よりも、重い累進税を賦課される程度の所得の收められる狀態に爲ると、個人所得として、多々益々增加する累進税を賦課されるよりも、自己の營業組織を法人に改造し、幾ら所得が增加しても、一律の比例税を適用される方が有利であるとし、續々組織を法人に改めるに至つた。若しも其法人なるものが眞實企業經營の必要に胚胎したものであつて、社會多數の人々から廣く株式の形態で、多額の資本金を醵集し、大企業の形體を取つたとすれば、尚ほ恕す可きであるが、唯法人として所得税の負擔を輕減する目的に出でたのであるから、其法人たる親族朋友使用人等の名義を藉りて、組織されたるものに過ぎなかつた。斯の如きは税法の規定不備であつて、税法自ら合法的に脱税の行はれる道を示したのと異ならない。然しながら兎に角我國に於て、從來個人名義で經營された富豪の事業が合法的脱税の目的を達する爲めに、遂に法人に改造された事は、爭う可からざる事實であつた。斯くて其後の改正に於ては、法人を(甲)合名會社、合資會社と(乙)株式會社、株式合資會社其他の法人との二種に分ち、前者は個人事業と資金調達上に於て大差なきものであるから、其所得に對しては、大體個人所得に對する累進税と均衡を保つ累進税率を適用しながら、後者に對しては比例税率を適用することゝし、唯株式會社株式合資會社であつて

も、株式會社に於ける株主の數、株式合資會社に於ける株主及び社員の數が二十人以下である場合には、其所得に對して、合名會社合資會社に對する税率即ち累進税率を適用することゝした。換言すれば法律は株主なり出資者なりの二十人以下である會社は表面株式會社であり、株式合資會社であつても、先づ脱税の目的を達する爲めに、組織されたものと見做し、斯く變形されない時代即ち個人組織の事業であつた時代に於けると略ぼ異ならざる程度の累進税率を適用することゝし、以つて合法的脱税の行はれる餘地を少なくしようとしたのである。然しながら斯く法律が改正された所で、合法的脱税の目的を達しようとする場合には、株式會社に於て單に二十人以上の株主さへ作れば宜しいのであり、使用人を名義だけの株主とし、其株式は委任狀付で主人たる本來の資本家が預つて置く方法に出でたならば、企業の實質は個人組織であつて、表面の體裁は之を株主二十人以上の株式會社とし、以つて合法的に脱税を行う餘地を見出し得るのである。

右は我國在來の所得税法に於ける一大缺點であつて、斯る缺點の生ずる源は一つの税法の下に於て、源泉課税法と累進課税法と云ふ二つの兩立す可からざる徴税法を併せ行はうとする一事に外ならない。源泉課税法で行くならば、比例税主義で徹底

せしめる、其場合に若しも大額の所得に重税を課したければ、英國流の超過税制度を以つてするのが正しい、累進税法を採用するならば、綜合課税法を以つてしなければならぬ。我國が所得税法に於て、此原則を蹂躙し、源泉課税法と累進税法とを併用したことが今日に至るまで合法的脱税を誘致して、已まさる所以である。大正九年我國の所得税法は改正され、法人所得に對しても、資本金に對する超過所得留保所得、配當所得、淸算所得等種々の名稱に於て課税されるように爲つたが、個人所得に對する税率に比較して、法人所得に對する税率の低いのは明白であり、而して是れは低くして置かなければならぬ道理である。さうすると今相當の資産を有する人が自己の家族なり、親族なりを株主として一の株式會社を組織し、各自の持株は盡く其會社の名義に書替へる、一方に各株主の家計費まで盡く會社の營業費を以つて支辨し、會社は名義書替に依つて、取得した株式の配當金から、各株主の爲めに會社の支拂う株主の家計費を差引き、尙ほ殘餘に剩する利益金があつても、資産の評價を嚴重にしたり、其他の方法で、之を隱匿するに勉めたならば、此法人たる株式會社は所得税を負擔しないで共に、之に株式の名義を書替へた財産家も所得税の負擔を免かれる、全部之を免かれないとしても、斯る會社を利用しなかつた時に比較して、之を

確認するに難しとしない。

脫税の行はるるは當然なり

昨今世間に傳承される富豪の脫税と云ふことは、多く右の形式で行はれて居るようであつて、要するに法の不備を利用したものに外ならない。政府自ら不備なる法律を制定し、納税者をして合法的脫税を行うに便せしめる、單に一年二年の事ではない、多年に亙つて、其弊を助成し來つたのであつて、而して弊害の人目に觸れ易きに至ると、遽に狼狽して、脫税取締りに浮き身を窶すが如きは、何たる無定見の事であらうか。是れでは政府自ら穽を作つて、人民の之に陷るのを待つの惨酷なると擇ぶ所ありとするを得るであらうか。所謂保全會社として、同族の財産を保管する法人組織に對して、嚴重なる監督を加へると云ふことや、脫税の目的を以つて、保全會社を利用したと認められる財産家に嚴重なる制裁を加へると云ふことの如き、自ら脫税取締の一法たるを失はないであらうが、之に對しては私は二つの困難の伴うことを認める、第一は政府自ら不完全なる即ち合法的脫税の行はれるような法律を制定し、脫税の行はれるのに對して、一部の責任を負はなければならぬ事情のあることであり、第二は政府の最も畏怖する金權者階級の勢力に反抗することである。第一の點は既に從來論述した通りであつて、國民政府自ら合法的に脫税の行はれる道を開いて置きながら、國民が其道を通行しようとすると、遽に之を塞ぐ、啻に之を塞ぐばかりでなく、通行者を罰すると云ふことは、恰も一片の推量に依つて、人を處罰すると同様であつて、穩當を缺くの嫌ありとしないであらうか、私の疑を挾まざるを得ざる所である。第二の點に就て考へるに、我國近年の政府位い、富豪に對して、弱いものはない、如何なる政策を行うにも、必ず富豪の諒解を求めようとする、富豪の意に反しては、殆ど何事をも行うことの出來ない貪緣が結ばれて居るとも見られる。或は原内閣が往年所得税法を改正する場合に、配當金や、賞與金などに課税を及ぼしながら保全會社風の方法に依つて、公然合法的脫税の行はれる抜け路を設けて置いたのは、一部の富豪と狎れ合の結果であると云ふ説もある次第であつて、其以前から一部の富豪は其れ〳〵保全會社を組織して居つたし、其以後に於て、同様の組織を爲すものゝあるのを見たならば、此説にも或は多少の根據あるやにも思はれる。斯る場合に後の内閣殊に金權政治を奉ずる黨に於て同様の信念を持つ後の内閣に依つて、唯一の抜け路たる保全會社利用の計の杜塞されるようなことが果して實際に行はれるであらうかどうか、一個の問題に屬する。過日來税務官

實に依つて、摘發された某々富豪の脱税事件にしても、結末の頗る曖昧裡に經過しようとする事實は世人の眼に何と映ずるであらうか。

脱税取締の道

或は國に依つては、富豪の脱税は何としても致し方のないものであると諦めを付け、其代り彼等の脱税を補塡させる意味に於て平生財産税を賦課しようとか、又は相續の行はれる際に相續税を賦課しようとか云ふ説もある。詰り一方の足らざる所を他方に依つて補はうとする趣意であるが、當初の脱税額と後の課税額との間に、或る均衡が保たれゝば兎に角、然らざる限り斯る方法は税法を正しくしようとして、却つて紛更を招くの原因たらざれば已まない。寧ろ脱税は正面から之を豫防し、防遏する工風に出づるのを至當とする。

私は此點に就て、千九百十九年英國に於て組織された所得税法調査委員會が脱税に關して、報告した議論を回想せざる得ない。蓋し英國に於ても歐洲戰時所得税率の急劇に引上げられた結果、所得の各種中、D種即ち營業所得に就て脱税の行はれることが盛に爲り、之に對抗する方法に就いて、種々の議論が湧起したやうであるが、委員會は結局左の言を以つて、一切の説を綜括したのである。

脱税に對しては、之を取締る爲めに、種々の點に於て、行政上の權能を强大ならしめなければならぬ。然しながら此點に關して、吾人は二つの危險を避けなければならぬ。一方に從來經驗の敎へる所に據ると、税法の成效を保證するには、公衆が法律は公平に、又確實に施行されて居り、脱税や、詐欺は防遏されると共に、其發見される毎に、處罰されると云ふ信念を持ち、他の一方に行政上の方式や、行爲を如何に嚴重にすることが肝要であるとしても、産業に妨害を加へたり、當業者を憤らしたり、又租税をして充分の收入を國庫に齎らしめるに必要である國民の好意を破壞したりしないようにすることが肝要である。

英國に於ては、或は斯る上品なる議論を以つて可なりとするを得るかも知れない。然も脱税の横行する、殊に富豪財産家の間に横行する、日本に於ては、罰則を嚴重にし、而して之を勵行する、更に法律の制裁のみに止まらず、社會上の制裁をも加へることが必要と爲りはしないであらうか。富豪が脱税を計畫し、其發覺した場合に、他の富豪が同病相憐れむが如き眼を以つて、彼に同情を寄せるようであつては、脱税の取締りも亦困難であるとしなければならぬ。而して富豪が何處までも改悛す

る所を知らず寧ろ金權政治の下に、其庇保に狎れて、常に脫稅を工風し、然も免かれて恥づる所なく、自己の負擔す可き稅金額を他の資力の薄弱なる階級に負擔させて、平然たる狀態であつたならば、結局民衆の間に經濟組織の改善を叫ぶ聲の起るを見るに至りはしないであらうか。日本で若し富豪や、財產家が脫稅を敢てせず、廉直に租稅の負擔に當つたならば、ドノ位までに現行租稅の收入に增加を見るであらうか、正確の計算は之を爲すを得ないが、今日中流以下の階級に課されて居る租稅の多くを廢止する餘裕は優に財政上に生ずるであらうと思はれる。稅法整理新稅賦課と云ふことは、我國年來の懸案であるが、脫稅に對する取締り殊に富豪の自發的意思に據る脫稅の戒愼は必ず自然的に稅法整理に要する財源を立ち所に調達せしめるに至るであらう。唯富豪自ら自發的に現在の經濟組織の下に於て、此要求に適う所業をするか、其れとも富豪が從來の態度を改めない間に、彼等を强制する社會的勢力が起つて、富豪をして積年漏脫して居つた負擔を一擧に決濟せしめる樣に爲りはしないか、此點に就ては、私は何としても確な豫想を下すを得ないのである。

然し此事は稅法以外に重大なる關係を持つ問題であるから、寧ろ詳說することは他日に讓り、最後に私の一言したいと思ふのは、稅法其ものが不備であり、稅率其ものが苛酷であり、而して國民の道德的情操の普遍的に發達して居らないと云ふような場合には、脫稅の行はれる誘因は甚く備はつて居るのであつて、隨つて是等諸種の事情を改善し、刈除しないで、獨り脫稅を取締らうとしても、恰も底なき桶に水を汲むのと同じく、勞して益なきことであると云ふ道理である。嚴重なる處罰は偶々處罰された脫稅者を矜かすに足るが、他の未遂者には何等の效果を持たず、法規を嚴重にすれば、斯く嚴重に爲つた法規を冒すことに興味を覺へる不逞者流亦なしとしないのである。何れにしても我國に於て脫稅者流の橫行するに就ては稅法の不備與つて力ありとしなければならぬ。脫稅者に對しては、稅法の示す通り、脫稅額の三倍に相當する罰金を課することは然る可き所であらうが、事の疑はしきもの殊に稅法に許された合法的脫稅者を處罰するのは、大なる間違であり、之を處罰する前に、法規其ものを改正することが急務であり、又稅法の立案者自ら責任を負うことも必要であると考へられる。

國民黨の解黨と犬養氏の進退

文學博士　三宅雪嶺

（一）

立憲國民黨は明治四十二年三月十三日結黨し、大正十一年九月一日解黨し、十二年半の命脈を維持し、黨員の數の少い割に政界に活動し、少くとも種々の問題を提供する所があつた。總理犬養氏と密接の關係があり、犬養即ち國民黨、國民黨即ち犬養と視られる程であつた。犬養氏が年齡五十六より六十八までの働きが現はれ、生涯の傑作を形造るか形造らぬかと云ふ所である。之を稱して傑作とする者は無く、さりとて失敗の跡のみとするのは、大いに誤つて居る。實は犬養氏の特長の最も現はれるのは、他より壓迫を蒙る際に於てし、即ち強い力を以て逼まられる處を捻ぢ返し、勝利でなければ引分け、惡く行つて預りにする所に在る。國民黨の爲めに働き來つたものの、犬養らしい手腕は、國民黨結黨前一年間に現はれて居る。

明治四十二年二月二十七日、憲政本黨評議員會で犬養を除名するに決し、犬養が之に應ぜず、評議員會の決議を無効にし、決議に加はつた者をして、屈伏するの餘儀なきに至らしめた。新に國民黨と稱するの必要を生じたのも、之に基く。犬養のみの力でなく、眞面目半分、面白半分、寄つて集つて之を擔ぎ上げたとも云ふけれど、擔ぎ上げられるに適して居つたのを認めねばならぬ。同僚の領袖連が悉く敵となり、己一人、孤軍奮鬪する所、天晴れの見物たるを失はぬ。本來の意地に加へるに觸るれば斬れる才能を以てし、殆ど一分の隙をも見出す事が出來ぬ。若し犬養氏にして平時に其努力を續けたならば、何れ程活躍するか測り知り難い。

壓迫が緩むと共に、氣分が緩み、特別に爲す所無いので、折角廻り來つた機會が去つて了ふ。平生は策士でも何でもなく、寧ろ好々爺の部類に入り、策士と考へた者が、齒痒く感ずるのである。好々爺が辛辣と見ゆるのは、口の惡いのに在る。舌頭が鋭いので、利益を得る事があり、損失を招く事があり、所謂寸

鉄人を殺すや、殺す可きを殺すのは分つて居り、殺す可からざるを殺すに至つて、人を害ひ自らを賊ふに終る。氣前の好い所があり、思ひ遣りもあり、涙脆ろけれど、人を毛嫌ひする事甚だしく、厭やと思ふ者に對し、毒舌を揮はずに居れぬ。持つて生れた癖ながら、困つた癖である。老熟していくらか治つたやうでも、云はなくて可い事を云はずに置かれぬ。自分で何程の事と思はず、冗談のつもりでも、聞く者はさうでなく、人によつて怨骨髓に徹すると云ふやうな事がある。當り觸りなければ談話は愉快、實も花もあるやうで、只意はず識らず、毒の迸るので困る。物事の解りが好く、特に人間關係に於いて通ぜざる莫しと云ふの有様であつて、若し通ぜぬ所あれば、惡口が何の影響を及ぼすかを察せぬ所に在らう。

人に反對する事は惡くなく、反對す可きは何處までも反對す可きであるけれど、刄物を用ゆるならば、鋭利に斫り、毒を貽さぬやうにす可きである。犬養氏は毒を貽す意でなければ、毒で痛みを感ずる者あるを打消す事が出來ぬ。兩雄並び立たず、肩を並べる者は、斬つて捨てると云ふ程でなく、相應に人と折合ふにしても、互角の地位と心得る者は、氣拙く感ずる様な事がある。其處を穩かに過し、共同の敵に對し、攻撃の矛を差向ければ、黨首として得難い人物となつたらう。毛嫌して惡口を云はずに居れぬ癖を治し得ぬだけに、起らなくて可い波動が屢々起つた。今一層器が大きいか、今一層器が小いかすれば、頗る始末好けれど、彼の如き程度であるが爲め、あたら人物を以て、能力程に働く事が出來ぬ。

(二)

犬養氏は畢竟何に最も適したらうか。政治か政治以外か。或は政治以外と考へられるが、政治上に比較的成功しないのは、廻り合せの善くない所もある。同じく泳ぎ出しても、逆流があり、順流があり、同一の努力で結果を異にする。犬養氏が早く自由黨に入つて、何程働き得たかを知り難いとし、早く改進黨に入つた事が餘り有利でなかつたらしい。後藤伯の大同團結に加はり、後に何とか展開の道を求めさうであつて、さう行かなんだ。

改進黨は自由黨に後れて出來上つたが爲めか、政黨として新に例を造るよりも、他の例に倣ふの傾向がある。人一倍押強好きで六つかし家と見えながら、他黨の成敗を見、成功した所に倣はうとする。我こそは模範的政黨として立たう、他黨の如何を問はぬと云ふ趣が無い。自由黨は善かれ惡かれ其の趣がある。元老伊藤公を首領に押立てたのは、黨の歴史から考へて盜

づべき事であつても兎も角も昨日まで鎬を削つて爭つた所と手を握り、世間の事大主義者を煙に卷くを憚らぬ。伊藤は天皇の御思召と云ふので總裁專制の風を吹かせ、星は之に逆はず、やるだけやらせれば、此方のものと嘯く。

伊藤を總裁にして、立憲政友會の名に於て成功したので、改進黨系の憲政本黨で桂公を總裁に頂かうとした。大石氏が星の役目を勤めるのである。若し桂が立憲同志會を組織し、尙ほ元氣に活動し得たなら、政友會に匹敵し得たとも考へられるけれど、其處は人頼みにする事は人次第、幾何もなく桂が病んで歿したとあつては、折角の局面展開策も展開の効能が無い。

憲政本黨で改革非改革の諍ひが烈しく、改革派が犬養を除名して却て失敗し、更に仲直りして國民黨を組織し、犬養を置き放りにして新政黨に走せ加はつたのは、桂の病歿した所から觀れば、得策と云ふ事が出來ぬ。同志會となつて何の利益を得たか。副總裁加藤子を總裁に頂くに止り、後に其總裁及び領袖が大隈內閣に加り、犬養をして閣外に居らしめたけれど、桂に從はねばさう成れなんだと云へぬ。大隈が十七年目で政權に與つたのは桂の爲めでなく、山縣公さへ之に贊同せずに居れなんだのである。

改進黨系が大隈を去り、桂に從はうとしたのは得策であつたと云へるか、何うか。犬養氏が桂に從ふを肯じなかつたのは、官僚軍閥等の關係よりも、意地づくの事であつたにせよ、特別に事を過つて居るとせぬ。憲政本黨で大隈を總理にし、其の儘に續いても、運の開ける時無かつたとせぬ。何分にも政友會の勢ひ好く、空しく之を觀て居る事が出來ず、彼が伊藤とか西園寺とかを擔げば、此方は桂を擔がうとて、擔ぐを專らにし、其他を考へ樣とせぬ。人頼みせず、自ら奮發して働く事が出來ぬとは、遺憾の限でないか。細工は流々仕上げを御らうじろと云ふけれど、細工は巧みのやうで巧みでなく、骨折り損の草臥れ儲けのやうな處がある。犬養から見れば、態見ろと云ふ所であらうが、それと云ふのも犬養が餘計な事を口走り、人を怒らす所が與つて居る。

（三）

併し大石や河野や武富や箕浦や島田や、五領袖と云ふ面々が、一犬養を持て餘し、桂に走せ參じ、加藤に從はうと云ふ事、智惠のある處置と云へるか、何うか。犬養にも困るけれど、之を眼の仇にせずに居れぬと云ふのも、自らの器の小さきを證明するでないか。器の小さいのは直しやうないとし、新政黨に走つて何の利益を得たか。大隈內閣に列した連中は、それで利益を

得たと思はうが、島田は何の得る所あつたか。島田氏は犬養と好くないにせよ、加藤總裁の下に居るべきものか、何うか。憲政本黨評議員會で犬養を除名する時、島田が平素犬養に快からざるに拘らず、其除名に反對し、忍んで犬養と共に居るか、又は無所屬に入り、單獨議員として立つたならば、氏の志す所の政治教育の効能多いでないか。元來犬養も犬養なら、五領袖も五領袖である。婦人のヒステリーを相手に、彼れ是れ云ふのは、云ふ方が怪しまれるが、犬養の惡口を彼れ是れ根に持つのも、餘り見つとも善いものではなからう。

大石氏は犬養の惡口を氣にするのでなく、何か大きな事を企てたい、早く政權にありつきたいと云ふのであるが、それにして、畢り何の得る所あつたか。犬養のヒステリーを介抱しても始まらず、加藤總裁を頂くのも結構でなく、禪坊主の仲間入りする事になつた。河野、武富、箕浦等、辛抱して居れば、加藤内閣に加はり得るかも知れぬが、改革とか非改革とか騷いだ程の事がないでないか。犬養に困ると云ふのは、實は自らの始末に困るのでないか。犬養の毒舌に堪へられぬと云はうが、其毒舌に堪へられぬ位で、何程の事を爲し得るか。犬養なんか何うでも可いと云ふならば、何故に之を置去りにして續々脫黨したか。考へて見れば、犬養も惡いが五領袖も惡く、大きな顏の出來るものが無いでないか。

尾崎氏は或點で頗る重寶、憲政本黨で改革非改革の騷ぎの起る前、早く伊藤の政友會創立に走せ參じた。そして大隈内閣成立の時に入閣し、今は天下の政黨を經巡つた成れの果、一本立ちと稱して居る。尾崎は單獨議員が好いか、黨首たるが好いか、黨首たらうとして成れぬのでないかと云ふが、之れ亦心得方一つで、成れぬと限らぬ。今は心得方を改めやうとして、既に遲く、何の政黨も面白くなく、一人で通す外なからう。

曾て犬養氏と共に運動した人々は、各々相應の能力あり、捨賣りにしても大臣位の値はあるが、それが兎に角失意の狀態で過すのは何と云ふ事か。互に少し讓合ふのみにて、政界に現在よりも大なる勢力を造り得ると考へらるるが、其少しく讓合ふ所が、人間の悲しさ、高い塔より飛び降りるより難しいか。下らぬ事に角突合ひする程下らぬ事なく、其の下らぬ事をせずに居れぬとは、情ない次第でないか。

(四)

國民黨は十二年半で解黨し、脫黨連は夫れ見たかと云はうが、脫黨連自ら省みて何の爲す所あつたかと考ふべきである。誰が善いか、誰が惡いか、誰が分つて居るか、誰が分つて居ら

ぬか。國民黨が始めて成立した時、議員の數九十人、漸次減じて二十九名に及び、犬養總理が何と我慢しても、手の出し樣が無いとの非難あつたとし、犬養を頂いて、何日政權にありつき得やうもなく、それで二十幾名と纏まるのは、他に何人が之を能くするか。政友會が絕對多數を制するのも、政府黨としての事であつて、政權を斷念するを餘儀なくされ、何人が踏み止まるであらうか。憲政會も朧ろに政權を當てにして纏まつて居り、如何にしても望み得ぬとあつて、何人が殘らうか。二十幾人なんか求めたとて仕方無く、其首領となるなど、精神の健康を問ひたいと云ふであらう。實に二十幾人で何とも仕樣がない。

併し時が時ならば、それで全く效能が無いと云へぬ。第十九、第二十、第二十一、第二十二議會は政友會と憲政本黨との差が三と二とより少く、それ位ならば、第三黨で何とか操る事が出來る。英國の如く二大政黨が對立せば、パーネルが少數で之を操つた。同志會が出來てから、政友會の半數に足らず、大隈內閣の餘勢で憲政會が假に二倍したけれど、後更に潰倒したのみならず、動もすれば三と一との差にならうとする。斯くて第三黨の働く可き餘地無く、現在より何倍したとて、力を伸すに難い。二大政黨が相對立せぬと云ふ事が、國民黨の效用を無くしたと云へる。

數の上よりせば、憲政會の百名を以て何を爲し得たか。國民黨は決議に臨んで云ふに足らぬけれど、憲政會とて云ふに足る程でないではないか。國民黨は政黨と云へぬ程少數ながら、交涉團體として存在し、單獨議員よりも發議の便を得る事が多く、延いて從來他に卒先して議案を提案した事幾回にも上る。普選案にしても、軍縮案にしても、他に先じて居る。先じただけで何の役に立たぬと云はうが、全く之を除外すれば、議會の頗る寂しきを覺ゆるでないか。世間で興味を持つて注意し、爲めに關係知識を地方に押及ぼす事少くない。一度び犬養氏が演壇に立つや、院內及び院外が、注意を拂ふのは何物かを期待しての事でないか。

犬養氏が憲政會の惡口を云ふのは、例の癖で困つたものとし、憲政會議員が何かにつけ、犬養及び國民黨を惡し樣に云ふのも困つたものでないか。犬養の癖は世間で知つて居り、又例の癖かと云ふて過ぎるが、憲政會に就て、それ程までに知つて居らぬ。第二大政黨と稱しつゝ、國民黨を嘲けるのは、自らの力を弱めるの嫌ひがある。犬養は反撥性に富み、之を攻擊すれば躍鬼になつて怒るが、穩かにせば怒りやうが無い。喧嘩が面白いとあらば兎も角、大政黨も內閣組織の大命の降るのを待つならば、小さな政黨から、彼れ是れ云はれたとて、默して濟

むべきであり、出來るならば、頭を下げて下手に出づるのが宜い。憲政會に領袖連がずらつと顏を並べて居り、犬養に負けぬ惡口を付くなど、埒も無い沙汰ではないか。賣られた喧嘩は買ひたくもならうが、好い年をして、隨分經驗をも積んで、賣り言葉に買ひ言葉など、體裁の好くないものでないか。さういふ事では、現内閣が總選擧を公平にしても、反對黨が勝てる見込みであるか頗る疑はしい。

（五）

今回犬養總理が國民黨を解黨するに決し、解黨後に何を爲すであらうか。いくらか事實上に、國民黨を擴張するに過ぎぬでないかと云はれるが、世間に唱へる通りのみとも受け取られず、別にいくらかの所存もあらうけれど、さう云ふ事を一々氣にして何を爲し得るか。國民黨が大きくなるにしても、他の何物が力を得るにしても、國家社會を如何にするのが最も良いかを考へ、之に適合するならば、片々から實行す可きでないか。大隈内閣が一擧して政友會を半減し、與黨をして之に代はらしめたのは、干渉もあるけれど、政友會の地盤の外觀程鞏固でない事を立證して居る。總選擧の出ようによつて政友會を打崩す事は、必ずしも不可能の事とせぬ。

但、政友會を攻擊するのは下手拙の事、上手な者は、金持ち喧嘩せず、大局から打算して、戰はずして得る所が多い。敢て政友會を敵とせず、國家社會の爲めに斯く〳〵せねばならぬ、今の狀態で續かば、獨逸の二の舞どころか、西班牙の二の舞せねばならぬ事を明かにす可きである。何處を突ついても瀆職問題が起るとは、何と云ふ體たらくであるか。國民黨は解黨して舊態に戀々せず、大局より觀て事を圖れば、それで可い。國家社會へ善い事を爲し、世界の公道に撞着しさへせねば、惡い結果の來ようが無い。憲政會も眼を拭ふて見るが好い。政友會も大抵にして、考へ直す可きである。

犬養氏が眼識の透徹しながら、國民黨總理だとか、木堂會とか、一種の名義に拘泥する形あるは不似合である。惡い事でないにせよ、餘り階級めいた事は、せぬ方が可いでないか。年と共に元氣こそ增さね、いよいよ圓熟すべきである。老後の一快事、犬養の眞面目玆處に在ると云ふを明かにしては、何う云ふものであるか。今から國民黨を何倍したとて知れたもの、それよりも小功名を眼中に措かず、總理でもなく、先生でもなく、性格の玲瓏玉の如きを示さば、政界の氣運を動かすに於いて、策士者流の惡策に優ること遠いでなか。



整腸に消化に保健に

ビオフェルミン

は第一の良剤として選ばる

既に腸疾患に悩むもの、常に腸機能の衰弱せるもののはビオフエルミンの服用に依つて速に健康に導かる。

粉末及錠剤あり、全國知名薬店に販賣す（説明書郵呈）

發賣元　大阪市東區道修町　株式會社　武田長兵衛商店

製造元　神戸市二番町　神戸衛生實験所

農村に關する諸問題

農村社會學の必要

農學士 有元英夫

農村問題の社會學的研究

農業及び農村に關する諸問題を社會學的に研究する方面が、農業經濟學から分離して、獨立した一の學問として農業教育界に認められるやうになつたのは、ごく最近のことであつて、農村社會學研究の最も發達して居る米國の如きは目下州立大學中の四割五分は農村社會學の講座を有し、其他農學校、師範學校等で盛んに此の講義が流行して居る。故に同地では農村社會學の何物たるかを知らねば、農業教師にも技術員にもなる資格が無いくらいに考へられるやふになつた。また歐洲に於ても英、佛は勿論獨逸、伊太利諸國でも農村社會學の研究が盛んに行はれて居るが、米國ほど未だ盛大といふことは出來ない。今や農村社會學の研究を離れて農業及び農村問題を論ずる能はぬやうな大勢にあるに拘らず、我國では未だ何れの學校でもこの學問を等閑に付し、大學に於てすら一の講座が設置されてない有樣であるから、その研究も頗る幼稚たるを免れない。併し我國に於ても農村社會學の研究は無論必要であつて、將來は必ずこの學問の發達を來す、否發達させねばならぬものと思ふ。

尤も歐洲に於ては農村問題を部分的に論議するに至つたのは既に羅馬時代の昔しからであつて、其後社會學及び農業經濟學が發達するに至つて、漸次農村問題の社會學的研究が進み、殊に獨、英、佛に於ては重要なる社會問題として、都市問題に對立して論究された。更に米國に於ては國情として農村問題解決の要は歐洲よりも一層痛切なるものがあつた。今では堂々と大學で講義され、專門の教授、研究家が澤山居るけれども、二十年前は矢張歐洲と同樣、社會學者及び農業經濟學者によつて部分的に研究されて居るに過ぎなかつた。

米國における農村社會學の發達

米國に於て農村社會學（Rural Sociology）が發達するに至つた歴史を調べて見ると、一八九四、五年頃シカゴ大學の社會學部で、ヘンダーソン教授（C. R. Henderson）が農村社會生活に關する講義をはじめたのが、恐らく米國におけるこの學問の濫觴であらふ。最初十六人の生徒が講義を受けて居た。ヘンダーソン教授の死ぬる二、三年前まで毎夏この講義が續けられた。其後講義は「農村生活」と改題された。

一九〇二年の終りにバターフイールド氏（Kenyon L. Butterfield）がミシガン大學で「農村社會學」の名の下に講義をはじめた、これが農村社會學といふ名の起りである。一九〇三年にバターフイールド氏は「米國農業教育界の未耕地」といふ題の論文を發表して、農學生に農村の社會科學研究の必要を説いた。一九〇四年に同氏はロードアイランド農科大學長として、二三の賜地農學校（Land grant College）に農村社會學の講座を開いた。また同年にコーネル大學、一九〇六、七年にミゾリー大學及マサチユーセツツ農科大學、一九〇八、九年にはノースダコタ大學、更に一九一〇、一一年に二つ、一九一二、一三年には四つ、一九一三、一四年には五つ、一九一四、一五年には八つ、一九一五、六年には五つ、一九一六、七年には二つ、の研究所が出來た。

四十八の賜地農學校の六割四分、二十の州立大學の四割五分、九十一の師範學校のうちの三割二分、三百の他の大學及び專門學校の九分、四百五十九の科學研究所中の二割一分は農村社會學を講義して居る。斯の如く米國では農村社會學は農業界に於て閑却することの出來ない重要な學問となつて居るのである。

農村社會學の定義

然らば農村社會學は何を研究し、何を敎へる學問か、その目的及び範圍如何について、米國の諸教授の下した定義の二三を擧げて見ると、

一、農村社會學とは、田舍の文化生活を建設する基礎として、農村生活の意義及び實際を研究するものである（フオー氏 Paul L. Vogt——前オハヨー州大學農業經濟及び農村社會學教授）

二、農村社會學とは、農村生活をもつと充實した組織にするためそれに動く社會的力及び條件を研究するものである（フエラン教授 John Phelan マサチユーセツツ州立大學農村社會學教授）

三、農村社會學とは、農村生活の發達、進化、組織に及ぼす作用及び力を研究するものである。(ベルナルド氏 L. L. Bernard——ミネソタ大學教授)

四、農村社會學とは、農村社會組織の現狀、改良、進化について研究するものである。ハージング氏 A. S. Harding サウスダコタ大學教授)

五、農村社會學とは、農村に住する人及び各人相互の關係に於ける力及び條件を研究するものである。ブルンハム Ernst Brunham——西部州立師範學校教授)

六、農村社會學は農村生活者の性質、反應及び團體的行動の學問である(ブランソン氏 E. C. Branson——ノース、カロライナ大學教授)

七、農村社會學は、農村でお互に生活してる農家に關係した學問で、農村が人間の性質に及ぼす影響を研究するものである。故にこの學問は「農村生活」の快適、農家日常生活方法の改善、農村文明の建設等を取扱ふものである(バターフィールド氏——マサチユーセツツ農科大學)

そのほか種々の定義が下されてあるけれども、大同小異で、要するに農村は特殊な社會狀態を形成して居るから、その生活及び生活者各自の關係及び團體的行動を調査して、その組織を改善し、文化を基礎とする、より好い生活方法を見出すことを研究するのが農村社會學の目的である。

農村の人の大部分は農家であるが、農家が農業によつて、より多くを生産せんとするのは農業技術方面に屬する。更により多くの利益を擧げんとするのは農業經濟學の領域である。けれども、より多く生産し、より多く利益を擧げることが農業の最後の目的ではなく、結局より好き生活をすることが農業最終の結着點である。經濟學はたゞ富の學問で富が農村生活をより多く幸福にする唯一の材料ではない。故に農家の生活を改善するのには單に經濟學的研究による物質的の材料だけでは充分でない。必ず更に人間として生活するに對する社會學の研究が必要である。農業は他の生産業に比して利益が薄い。然らば農業をしてもつと利益を多くするやうな方法を講じたならば、農村生活は愉快になつて、都會から田舍へ反對に人口が流入するであらふかといへば必ずしもさうでない。更に社會施設を完備せしめなければ農家は生活の安定が得られない。富は萬能である。けれども富で買ふことの出來ぬものも無ければならぬ。例へば健康の如きもはの富ばかりでは買うことは出來ない。かくして經濟學だけでは農村問題を解決することが困難になつたから、更に社會學的に衝つ込んでこれを研究しやふと言ふのである。

併し如何に農村社會學が勃興したと言つても、決して從來の農業經濟學を無視しやうとするのではない。矢張富もまた生活を安定せしめる重要な材料であるから。

農村社會學と農業經濟學とは同じ物を取扱ふのであるが、その見方が違う。例へば農村の道路といふものに就て考へても、經濟學では、よい道路は農産物の運搬が便利になつて生産費が節約されるとか、地價が騰貴するとか、農業組織が改善されるとかの方面が講究されるけれども、社會學に於ては、社會的交際が便利になる。生活の滿足を與へる。集會に便利である。農家の協同的活動が盛んになる。教育が普及する、教會に行くに便利になる等の社會組織上の變化について講究されることになる。要するに農村社會學は農家が、もつと滿足して、もつと健全に農村に生活し得るやふに講究するのが主なる目的である。一九一七年八月パータレーで開かれた米國各農事試驗、農科大學協議會に於て議長ベンジヤミンホイラー氏の演說中に「我々の仕事は結局社會學的の仕事である。耕耘技術に於て土地の表面をほじくるといふことの研究は、土地を如何にして家庭に利用せしめやふかとするに過ぎない」またバターフイルド氏が「改良された耕地は玉蜀黍ばかりでなく文明を生産し馬鈴薯ばかりでなく文化を、小麥ばかりでなく意義ある人格を生産するものである」と言つた語は、農村社會學の研究が農業界に於て如何に必要であるかを裏書するものである。

農村社會學發達の誘因

都會はあらゆる文明の中心であつて、其所には各種の文化設備が完成し、都市人は益々幸福な生活を樂しむことが出來るやふになつた。然るに農村は文化の發達が都會に較べて著しく後れ、其所に住する農民の生活は甚だ都市人のそれと遠ざかつた原始的のものである。殊に封建時代の農民は殆んど人格の自由をすら認められない、一の土地の附屬物に過ぎなかつた。彼等の政治的位置が既に斯の如くであつたから、その日常生活に至つては實に家畜に近い有様であつた。其の間に都會の文明は日進月歩の勢を以て發達した。農業技術方面に關しては科學の進步と共に漸次進步し更に農業經濟學、農業經營學等の研究によつて農家の收益も次第に增加の傾向を持つた。歐州に於ては農業は最初英國に於て最も發達した。其後獨逸に於て農學が勃興し、農學の祖と稱せられるアドルフ、フオン、テヤノーが出で、更に農藝化學方面にリービッヒ氏が出て、農業は益進步の域に向つた。併し農民の社會的位置は依然たるもので、農村と都會との文明の差は絕えず或る間隔を以て進行した。獨逸の農業進

歩に反比例して英國の農業は衰微の一方にのみ進んだ。獨逸ではスタイン及びハーデンベルヒの農政改革となつて、所謂農民の解放が實行されたから、農民の社會的地位も漸次高まるやふになつたが、なほ農村生活は國民にとつて厭はしきものであつた。英國に於ては耕地の大部分は少數の大貴族に領有せられ、彼等は大都會に遊食し、農家は貴族の小作人として勞働の剩餘價値は絶えず貴族に搾取せられ、農村に住する農民は一種の異教徒の如く取扱はれ、殆んど奴隷の如く見做されて居た。佛國は當時英國よりも農業は進歩して居たが、十九世紀のはじめ、時の英國農務局長アーサーヤング氏は佛國に旅行して、親しく農村の狀態を視察し、農業の開發は先づ農村生活を改善するに在りと叫ばしめた。斯く農業は兎も角進歩するに至つたけれども農村生活の改善は之に伴はなかつた。併し後者は國家政策の重大問題で、人口の都市集中現象を防遏するには、どうしても農村文明を出來るだけ都會文明に近づけて、其の差を少なくするより外は無い。それには物質問題もあるけれども社會組織の改革が必要である。獨逸では數十年來農業經濟方面に關し、ロッシエル、コンラード、シユモーラー、フイリポキツチ等の一般經濟學者が盛んに研究し、他方にはゴルツ、ブツヘンベルゲル、ボール等の學者が農業の社會政策方面を研究して、遂に農政學の研究が益盛んとなつた。併し農村生活の實際問題の研究に至つてはまだ幼稚であつた。

一方米國に於ては無限の肥沃なる土地を開拓し、農産物は年々歐州から移住する農民によつて多額を擧げ、其他工、商業の發達のため世界の富は米國に集まり、工業の勃興につれて農業の技術も進歩した。そして農家の收入も甚だ巨額なものであつた。併し都會と田舍との文明の差は歐州と同樣に益々懸隔がはげしくなり、都會集中現象も甚だ顯著となり、英國で流行する不在地主主義（Absentee Landlordism）が米國にも傳染して、地主は都會に集中し、贅澤に暮し、農家は交通不便な田舍で、不便の生活を送らねばならぬ運命を持つ。如何に物質的の收益が多くても、社會生活の幸福は物質だけでは得られない。それならば如何にして農村生活を都會生活に劣らぬ愉快なものにするかについては當然、一般が考へねばならぬことになつた。所が今迄無限の沃野が開拓されて、無限の農産物が生産され、永久に豐富な食料を國民に供給してくれるものと信じ切つて居たのが工商業の異狀なる發展に對し農業は必しも進歩しない。十數年前、米國農業の衰退を叫ぶものが現れ、若しこのまゝに放置して置いたならば米國は遂に食料の輸入國とならねばならぬと唱へられ、その警鐘を亂打した有力なる一人は大平洋

鐵道會社長ジェームス、ヒル氏である。そして其の對策としては農村生活を改善して、農民の幸福を増すのが根本であると提唱した。これに共鳴したものは、時の大統領ローズベルト氏で、遂に農村生活委員なるものを任命して一九〇八年八月十日第一回の會議を開いた。其後第二回を一九一九年にシカゴで次いで一九二〇年十月にスプリングフイールドで第三回國民農村生活大會なる名の下に研究會を開いた。是等の社會的注意が結晶して、一面には農村社會學の完成及び發達の誘因をなしたのである。

また歐州に於ては農村問題が切りに論議されて居るうちに世界大戰となり、交戰國の農業は衰頽し、交戰地の農村は全く荒廢に歸せんとした故に農村問題の研究は更に新しき意味を加へるに至つた。其所で戰後佛國及び白耳義で重要なる會議が相次いで開かれた。卽ち一九一九年の六―七月に巴里で、「佛國農業大會」が開かれ、其の年の九―一〇月に白耳義で「農業復興及び農村生活改善國民大會」が催された。其他の諸國に於ても農村改造問題は一時にやかましくなり、從つて農村社會學の研究も一の流行となるに至つた。殊に英國の農村問題は政治的にも社會的にも甚だ重要な關係を持ち種々の對策も講ぜられて居るが、學術的研究も決して怠つては居らぬ。例へばオックスフォード大學の農村社會學講義の一部を擧げて見ると農村社會の經濟的基礎、及びその物質的狀態、農村社會の精神的狀態、民間農業團體、農村社會の組織、都市と農村との社會的關係等がある。斯くして農村社會學は農業經濟學と社會學との混血兒として產れ、今や彼は歐米の農業界で花形役者となつて居る觀がある。

農村社會學の內容及び範圍

農村社會學の研究要目の重要なるものを擧げると次の如くである。

第一、農村社會組織
第二、農村生活の精神的物質的狀態
第三、都會と農村との比較
第四、農業經營と農村生活
第五、土地及び勞働問題
第六、農村の社交及び娛樂
第七、農村敎育、農民心理
第八、農村道德及び警察
第九、農村經濟組織
第一〇、農村敎會問題
第一一、保健、衛生、交通、通信

第一二、農村社交的機關
第一三、農村調査
第一四、農村指導、農村家庭

農村問題は農政方面からも、社會方面からも、經濟方面からも、技術方面からも講究せねばならぬが、其の領分の區別が複雜で、混亂のきらいがある。殊に農政學と農村社會學との區別の如き甚だ不明瞭で、農政學もまた一の社會政策の學問であるから、前に記した項目のうち農政學方面で研究されて居るものもある。併し農政學は主として國家と農業及び農民との關係を論じたもので農村社會學は農民生活及び、農民相互の關係を論じたものである。米國で農業經營協會の第一回總會（一九一〇年）に於て是等の區別を明瞭ならしめるため、委員を撰んで研究した結果、農村問題の研究を次の四種に區別した。

一、技術方面　農場實習及び農學を含む（Farm Practice & Agricultural Science）
　これは自然法に關する原則の發見、及びこれを植物動物の生產に應用すること

二、事務方面　農業管理學及び農業經營學（Farm Administration or Farm Management）
　これは單位面積から最大の利益を擧げるため土地、勞働、資本相互の調節

三、產業方面　農業經濟學（Agricultural Economics）
　これは、農家と產業組織の他の要素との關係を取扱ふもので、小作制度、運搬方法、販賣方法、租稅制度、金融機關、及び保護奬勵に關する法律

四、社會方面　農村社會學（Rural Sociology）
　これは、如何にして、農家が、各自の個性の發達に應じて、產業的、社會的環境に處し、共同の利益のために最もよく協力し、共同生活の發達を促すための永久的機關を作り得るか、また如何にして國家の安寧に貢獻する目的のための農村生活に於ける個人及び共同方法を最もよく組織すべきかについて講究する。

農村社會學は一般社會學の方面から研究の步を進むべきものであるけれども、農村社會と農業とは離る可らざる密接な關係を持つて居るから、農業を知らずして農村社會學を研究するのは不便である。農業經濟學と農村社會學と比較對照して兩方面から觀察しなければ農村問題を解決することは出來ない。故に米國に於ては農村社會學は多くは農科大學に於て講義されて居る。この學問は最も新しく現れただけ、その內容も充分に確定して居らないから、從つてその範圍も判然と區別することは可能

でないけれども、要は如何にして農村生活を好くするかゞ主なる目的であるから、是等の點について餘り深く詮索する必要はない、極めて自由に研究の領域をきめればよいのである。これに關する教科書の如きも二三出版されて居るけれども、未だ以て滿足な内容を有するものと見ることは出來ない。將來は農村問題の社會學的研究は益々發達して行くものと想像される。

我國と農村社會學

農學は天然を相手にするが、農村社會學は人を相手にする。天然の狀態は地方によつて種々異るけれども、人の社會は地方によつて更に一層人情、風俗、社會組織を異にして居る。故に外國の農村社會學を取つて以て、そのまゝ我國の農村に應用するのは無論間違つて居る。我國には我國の農村社會に適した農村社會學が現れねばならない。

我國に於ても農村問題は農業經濟學者、農政學者等によつて數次論究された。併し農村社會學者として專門的に研究して居る者は甚だ少ない。從つてこれが研究材料も極めて乏しいのである。元來我國の教育界では、農業經營學、農業經濟學、農政學の區別すら充分立つて居らぬ。まして農村社會學の如きは全く處女地と言つて好い位である。

我國の農村の社會學的研究は、歐米に劣らぬ必要を感ずる。尤も我國の農家と米國の農家とを比較すると、富の程度、收入の程度に著しき差があり、從つて生活の程度も我國の農家は米國のそれよりも低く、農村文化施設も同様である。故に我國の農村問題は物質的方面から解決される部面は米國よりも大である。即ち農業經濟上からの研究はまだ必要で、効果も大きい、けれども、たとへ我國の農家が物質的に貧弱であるにしても、一の社會を構成して居る以上、より幸福な農村生活を樂しましめるためには矢張社會學的研究が必要である。近頃やかましい地主小作の問題でも、經濟方面から或る程度までの解決は付く、けれども根本的の對策に至つては、社會學的立場からその眞相を窮めて案出するに非ざれば適切のものを見出すことは出來ない。しかも小作問題は我國農村問題の一項目に過ぎないので、他に社會學的に講究せねばならぬ幾多の項目のあることを等閑に付すべきでない。殊に農村文化問題の如きは、どうしても農村社會學の方面から解決せねばならぬのであるまいか。

農業經濟學も農政學も深く考査すれば結局農村社會學の問題に落ちて來る。例へば農業經濟學で一の生産要素として取扱はれて居る勞働の如きも、勞働の量は勞働力と勞働心と掛け合せたものである。然らば如何にして勞働力を增加し、勞働心を勃

發せしむべきやについては既に經濟學の範圍を離れて社會學の領域に侵入する。農村勞働問題の如きも寧ろ農村社會學に於て講究すべきものである。小作問題の如きは農政學の研究題目とするのは不都合な點が多い。然るに、これまで我國の農政學者、農業經濟學者のうちには、主として農村社會問題に主力を濺ぎ、本職の方面を輕視する者もある。近頃地方で農會の技術員等のやる所謂農事講話の中には、この方面が甚だ多く這入つて居る。然るに農村社會問題は、未だ我國では組織的に研究されて居らぬから、種々の統計とか、研究の結果等の材料に乏しく、單なる議論として、表面的な根據の薄い說を述べるに過ぎない。故に將來はもつと農村社會學の研究を發達せしめて、その結果を實際に應用するやふに務めねばならぬ、我國の農業試驗場の如きは今では單に技術の試驗を行ふに過ぎないが、先になれば米國あたりの試驗と同樣經營方面の試驗もやり、更に進んでは社會學的の調査もやるやふにしたいものである。

農業教育界に於ても農村社會學なるものを獨立せしめて、少なくも專門學校以上では正課として講義を生徒に授け、また農村の普通教育にたづさわる人々にも農村社會學の一般を講ずるのは決して無駄ではない。農政學の如きは主として國家の政策を論ずる學問であるから、官吏、政治家等にはその知識が必要であるけれども、一般の農業者としては、有つて邪魔には無論成らないが、それよりも農村生活の實際に觸れた學問である農村社會學を敎へた方が、敎育の効果は大である。要するに我國の農村問題は農業經濟學や農政學では到底解決の付かないことだけは斷言して憚らない。

歐米の農村組織と我國のそれとを比較すると、歐米の農村に於ては敎會の勢力が社會上に重要な影響を及ぼし、道徳修養の方面は敎會の牧師が專ら指導者として精神的に農村のために盡し更に敎會は小學校と並んで社交上の中心をなして居る。また敎會は一の休養（Recreation）の機關としても種々の倶樂部と相並んで重要な地位を占め、從つて農村敎會問題は農村社會學の一研究項目となつて居る。この敎會の活動といふ點が彼我農村社會組織の重要なる差異であつて、歐米の敎會の牧師は單に宗教上の仕事をするばかりでなく、種々の社會方面、時としては經濟方面にも頭を突込んで農村の爲に働いて居る。牧師は我國では僧侶とか神官に相當する社會的地位にあるけれども、社會的の關係に至つては到底比べものにならない。我國の農村に於ける修養または敎養機關としては小學校があるばかりである。しかも小學校は主として子供の修養機關であつて、青年、その他一般農村男女の修養のためには何等の施設がない。小學

校の校長が青年團長となつて青年を指導することも効果があらふけれども、矢張片手間に過ぎないから充分な活動をすることは出來ない。神官僧侶に至つては殆んど問題にならない。近頃種々の方面から農村に於て修養上の講話が行はれるけれども、是等は何等科學的基礎の下に立つた材料によつてるので無く、昔し流の道話の域を脱しない。今でこそ是等の講話は農村に於て歡迎されるけれども、漸次かゝる種類のものには、少なくも青年は滿足しなくなる。我國の農村が歐米の教會の如きものを持たず、牧師の如き社會指導者を持たないことは、甚だしき缺陷を社會組織のうちに見出すものである。故に今後は農村社會學研究の振興を圖り、我國農村を統計的に、歷史的に、科學的に、調査研究して、相當の機關を設け、物質的から更に進んで精神的に幸福にして意義ある生活を農村に與へる工風をしなければならぬ、國民の文化的發展の上から言つても、國民の大部分を占むる農村人の生活を、もつとより好く改造することは農村社會學の使命であらねばならぬ。その具體方法及び我國農村社會組織の内容を紹介するのは農村社會學そのものゝ仕事であるから。玆には農村社會學なる學問が時世の要求に應じて歐米に於て新しく産れ出で、その研究は益々進展しつゝあるが、我國に於ては未だ以て農村問題を科學的に研究する者が少ない。併し我國の現狀はその必要の程度は敢て歐米に讓らないから、農村社會學の發達を圖らねばならぬことだけを述ぶるに止めて置く。

農村文化と娯樂

諸井四郎

一

農村問題が高唱せらるゝに至つて、地主對小作人間の軋轢が意外に猛烈になつた點より見れば單に利益の爭に相違ないが、其根柢は時勢の推移による思想の變化から出發して、都鄙生活の甚しき懸隔等より自然に目醒めたるにあるはいふまでもない。殊に農民は都會の工業に比して其利益も薄く其勞苦に對して何等の滿足すべき慰安も少ないので農村生活に對し倦怠の心を生じたのである、隨て農業を立派なる産業として有利ならしめ、地主小作人共に農村に安定すべきかは世を擧げて論じて居る處であるが、農村自治といひ農村經營といふも結局農民の經濟的地位を向上しなければ農村の繁榮を圖ることは覺束ない、

然も其思想の覺醒は著しいが、農民は依然として教育もなく品格もなく野生の儘に生存して居る。何としても農村の心裡を開發し知識を啓發して文化を深めることを第一義とせねばならぬが、之と共に農業に執着して其勤勞を神聖なるものとし之を渴仰し之を崇拜せしむるの精神を養ふ事を必要とする、之が爲には其生活を愉快ならしむるに在る。實際上農村生活の單調にして趣味なき境涯は、鍬を執て額に汗するも之を誇りとすべき何等の享樂がない、然も男子は兎に角社交の人として或は隣村の會合もあり、稀には都會に入るの機會もあり幾分慰安に接するの機會もあるが、農村婦人の如きは隨分氣の毒な境涯に在る、妙齡の美しき時代から何の用捨もなく風雨に曝されて勞作に追はれ汗と脂とに滲しんで孜々として働らいて居る、殆んど夫れが天命であるかの如く思はしむるのである。之が爲め近來男子と同じく都會生活に憧れて田園を驅け出すものも少なくない、田家の主婦として天然の儘なる生存に滿足して文化の何物たるも知らず尤も從順に一生を送つてゐるのは、都會婦人の虚飾と精神上の苦痛に煩悶するに比すれば其眞情掬すべきものがあるが、其男子と協同して勞苦を共にし一生を送つてゐるのは、之を都會に於ける婦人が文化の理想に憧がれて如何に藝術心を滿足せしめ科學の修養を積まんとするに比べては、農村婦人は全く無關心といひながら同情すべき立場に在る。實に現在農村には農業に從事してゐる女が八百六十萬人の多數を算して居る、其七割は既配偶者である。彼等は夫婦相揃つて野良に出て愛兒が泣けば田の畔の草の上に坐つて乳をふくませる姿を見ては、如何にも生活を蹂み躙られたかの感じがする、隨て農村勞働に付ては如何にせば之を趣味あらしめ都會の誘惑から免かるゝを得るか、農村娛樂に付て研究することも必要であると思ふ。固より農村は四圍の環境が天然の畫圖を爲して四季折々の清新なる氣分と獨特の風趣とは都會に見るべからざる光景ではあるが、都會が已に民衆娛樂に憧がるゝ時代に於て、農村のみが最早徒らに靜寂な情緒を以て滿足することは出來ないのは怪しむに足らない、玆に於て農村娛樂の必要を感ずるのである。

二

在來の趣味としては、田園を開墾するの傍ら西瓜とか胡瓜とか其他の野菜を栽培するの樂みも固より趣味深きものではあるが、別に花園を設けて菊の花、薔薇の花、若くは朝顏の如き折々の四季の花を栽培して園藝の趣味を解せしめ、其成績の良好なるものは表彰の途を開き、培養方法に注意し花壇の講究に各自の思を凝らし、一には朝夕眺めとなし一には之を市中に搬出

するものも必ずしも金錢の利を得るの目的のみならず、國民の技能を錬ひ婦人小兒共に高尚なる趣味を養ふことも出來る。又農民が工藝品を作り所謂農村美術として農村の手工による素材をとつて刳物を作るとか、模様を付け彫刻を爲し又は染拔を描いて一個の製品を作ることも趣味がある。博多人形宇治人形其他アイヌ人形の如き朴訥にして趣味あるものである。工藝彫刻品が何の素養もない野性の儘の手に仕上げられ、自由の意志と活動とで無限の內容から無限の産物を造るといふことは創造の悅樂がある、機械的工藝品に比べて無限の情味がある、又堅牢なる特色があるから、其仕事の出來榮よりも之を造るといふことが望ましく面白きものである。露西亞に於ては農民の手工品が頗る發達して、手工品の種類には匙皿などから玩具、文房具、風俗人形、紙細工、籠、織物、陶器、家具等更に一般的のものに進歩して居るといふことである。我國に於ても農村の副業ともなるから、農村補修教育として補修工業の一科と爲し意匠圖案等の練習をすることも必要である、之が爲め山林の廉價拂下を爲し、若くは博物館は各種の參考品を貸與して之を奬勵し之を擴張することも一策である。斯くすれば農閑を利用して殊に嚴冬の所謂冬籠りの期節には爐燵の中で休息しながら作業を爲すことも出來る、斯る農業の藝術趣味の普及は現代の農民藝術として副業としては適當なるも、之を娛樂の一端と見ることは、或は時代遲れかも知れない、又露西亞に於ても農村の手工業は次第に衰微して行くといふことであるが、文化の進歩と共に努めて創造的の作品を工夫するなれば僅かに職業の藝術化といふことが出來ると思ふ。然し花や野菜の栽培にしても美術手工にしても何れも副業の性質に屬するもので、所謂職業の藝術化といふことは出來るが、之を以て眞の娛樂機關と見ることは出來ない。何としても一般農村の慰藉となり鼓吹するには剌戟多き藝術趣味を涵養することを必要とする。

三

都會に於ける娛樂の民衆化といふことも頗る世上の問題となつて居る、成程在來の歌舞伎芝居とか淨瑠璃の如きものは觀衆の範圍が固定して一の特權階級の觀賞に限られて其觀覽料の高價なると鑑賞的なることは物質的にも精神的にも一般民衆の娛樂となることは出來ないのである。之が爲め民衆娛樂となるべきものは普遍性のものでなければならない、普通の芝居を始め曲馬、曲藝、馬鹿囃、寄席、殊に近來は活動寫眞が最も代表的として擧げられて居るが、之には四季折々のもの又常設的のものやら一時的のものやら其種類が千差萬別で淺草の公園を始

め各處に民衆娯樂として盛んに行はれ、之は玄人的の鑑賞的から超越して單に觀賞的のものであるので兎に角一般の娯樂機關になつて居る。何れにせよ都會には自己が其享樂の主となるものは殆んどない、近頃流行の舞踏の如きものは此部類にあるが之は一部のブルジョア階級に屬するものといはねばならぬ。都會と農村の藝術的趣味には觀賞的なると享樂的なるとの間に自から相違がある。元來農村にては一年の收穫が終つて來年の種が用意されると、多數の村人は鎭守の森に集つて衷心から敬虔なる神の惠みを感謝する、其無邪氣にして眞率なる喜悅に對して神慮も之を納受するのである、之が爲め昔は神社や佛閣が其殿堂若くは廣庭を舞臺として民衆に提供したのである、過去の時代に於ては大抵皆宗教的儀式が祝祭行事に大いなる關係を有して居つた鎭守祭の太々神樂も灌佛會の花祭も畢竟藝術としての文化の基礎は宗教的信仰から來て居るのである。何としても田園の藝術的享樂は全く都會の夫と背馳して自己享樂を主とするも之が爲めである、卽ち自から藝術的陶醉の人となつて湧躍し活働し踊り狂つて藝術家となることとである。都會の芝居は觀覽料を支拂はねばならぬ、殊に技藝が優秀になると民衆の觀覽に供することが出來ない、然るに田園の享樂は開放的衆樂的で其必要がない、隨て村芝居にしても盆踊にしても團體的に一村のものが遊ぶには尤も適當した田園の享樂である。晝の暑さも晩來の驟雨に一掃されて一輪鏡の如き清光が中空に懸つた時遊樂の夏の夜は尤も圓滿なるものとなる。薄暗がりの村の小路から若い男女が白粉を塗つた頰を赤くしたり樣々の姿を扮へて、今や昔の武士やら紳士やら貴女やら遊女やらに粉して櫓太鼓の下に圓陣を作つて踊り狂つて其亂調に達したる時は最も觀樂の至境に入つたのである。斯くて彼等は煙の如くに舞ひ上つた塵埃の裡に夜を撤して始めて自己の享樂が農村に慰安と休養とを與へ其元氣を鼓舞するの手段となる。然し田舍は兎角野卑に流れて此嚴肅なるべき祝祭が藝術氣分となつてから稍もすると不眞面目に陷り易く何の價値もなく徒らに頽廢したる陶樂氣分に陷り易い、今日の盆踊の如きものも享樂としては推奬すべきであるが風紀の上から大いに考慮すべきものである。近來官憲から此享樂を奪はれんとするも畢竟之が爲めである。

四

文化の根柢の淺い農村に對しても在來の儘に奬勵すべきものもあるが、年々一律なる盆踊の內容は正式に根本的に刷新する必要がある。兎に角淸新潑溂たる精神の發露によつて積極的創造的氣魂から生れた藝術を味はしめ之を遺憾なく發揮して新

機轉を出すことが必要である、夫れには坪内博士によつて高唱せらるゝページエントの如きものは農村には特に適するものと思ふ。此劇にいはれて居る足場懸け、棧敷、棧舗、土臺などといふことは丁度田舍の堀立小屋の假舞臺に相當するが倚寺の本堂でも差支ない、田舍は其天然の綺畫的活動寫眞的見せ物的であるから、山林湖沼若くは平野等總てが背景となり、自然の大舞臺となつて居る。此處に出演し參加するものは鍬を執つて働らく農民が其儘役者となり自から藝術境涯の人となる。石川地方の蝗送りの如き夏土用の最中に松明を焚き太鼓を叩き田圃を練り廻る、若くは廣島地方で田植には青年婦女が美裝して之も鳴物入りで仕事をする、之等も一種の藝術である。何れにせよ農民自から藝術家となつて自ら踊り自から振り付けを爲し享樂的の天地の人となることは其感興が殊に深いのである、或は技術的監督として一時專門的俳優を傭聘して稽古することも面白い、在來の盆踊の笛太鼓を基礎として民謠田舍踊其儘にするも差支ないが、然し其中へ西洋の音樂を調和して氣分を新らしくするのも一策である。劇の精神的解決の徹底するには社會の事實が問題となることであるが、農村は殊に祖先を崇拜するの深きより自然鄕土を愛するのであるから、鄕土の歷史的地位を其心中に映せしめ農民が時々鄕土となり祖先となり其憧憬の中心人物となりて、鄕土の歷史を自然と其身に泌み込ますは農村の劇として隨分面白いと思ふ。之を時代に順應して新らしい智識と新らしい情緒に目ざめる、畢竟市町村の主義と抱負とを發揚し進んで愛國的思想を鼓吹し、作り易く演じ易く如何なる素人も參加することの出來るものがよい、時勢の推移風俗習慣の變遷等人間生活の機微を知らしむ、慰藉休安の間に共同親和の訓練となり、農民共ものが創造的に生み出したる所謂娛樂の民衆化したるものでなければならない、何れにせよ現代の人は神經を過勞するから娛樂も刺戟多きものを好む、隨て享樂も自然強くなつて來たが、村芝居の如きものも文化の進步と共に一段と革新向上するの必要がある。

五

農村文化を深めるには何としても公會堂設置の必要がある、之は必らずしも都會に於けるが如き立派なる建物を必要としない、極端にいはゞ、堀立小屋でも良いのである。隣村相集つて便宜の地に設備すべきである、指導者は農村の青年團が中心とならねばならぬ。公會堂の使命は歐米の社會同化事業の夫と同じく一般農民に文化の福音を齎らすことである、彼等の人格を改造し知識を開發し或は補修教育の爲め或は實際的指導を爲す

べく通俗の講話講習を催し、進んで補導誘掖の事業を爲すは勿論青年團同窓會、婦人會、家庭會開會の場所とし、時々村民娯樂の試演場に當て又は活動寫眞を設け其外音樂會、繪畫展覽會又は花卉の展覽會を開催し、出來得るなれば書籍を蒐め新聞雜誌を具へ付けて圖書館らしきものを設け、更に進んで公設浴場を設ける必要がある。都市に於ては多くは三伏の夏の暑を凌ぐべき水泳場を設備するが、農村に於て清冽なる小川の流れは天然の浴場として之が必要なきも、寧ろ冬期に於て農村娯樂として特定の日に於て公設浴場を設けることも必要がある。固より鑛泉溫泉の在る處にては其設備あるも、一般農村にては或は公會堂の附屬として之を設備するも一策である。清潔は神聖に隣すといふ西諺あり、實際高潔なる精神を涵養するには先づ其身體は清潔ならしむべきである、先づ其身體を清潔にするは必らずしも衛生の爲めのみならず、口を清めて神に禮拜するが如き其心身を高潔ならしむるものである、斯くして共同會合の風を興し趣味ある音樂を聽くことを得せしめ以て娯樂若くは社會教育に資し、知識と趣味の向上を圖り農民の自由なる親切なる隣人として同情と親和を基として、深刻を極めたる階級鬪爭と利潤の爭奪に向つて荒くれた人心を調節して、春風駘蕩たる自然の氣分に歸るべく快活に清新なる氣分を養はしむれば、各人に知らず識らず娯樂と訓育とを受けしむるの利益あるのみならず農村爭議の如きも自然に緩和すべきである。現今の如く社會風教の墮落、道德の頽廢は其極に達したる場合に於ては、文化の力により根本的に頭腦を改良することが特に必要である、之は敢て農村と限らないが都會と農村と今日の如く文明の懸隔を生じた場合には特に痛切に其必要を感ずるのである。以上の設備は固より經濟上俄かに之を望むことは出來ないが然も地主は時代思潮に顧み大いに覺醒して其の協力により徐々に之に着手して其緒に就かば將來の完成得て期すべしと思ふ。

都市社會問題より農村社會問題へ

堀江歸一

都市社會問題の發生

從來社會問題と云へば、都市殊に東京、大阪、神戸の如き大都會に起ることに限られ、又事實是等の大都會に居住する工業勞働者の賃銀や、勞働時間や、勞働狀態に關する、諸種の問題な

り、又は是等を改善しようとする運動なりが社會問題の殆ど總てを占めて居り、他に同種類のものを見るに至らなかつたのである。何故に然るかと云へば是等の大都會に於ては、夙に資本が株式や債劵の形で、全國から集中され、斯くて集中された資本の大部分が工業的企業に向つて、投入される爲め、次第に大規模の工場工業が勃興し、是等の工場に依つて、全國から多數の職工勞働者が募集されるであらう。是等は工場に通勤することの必要から、必ず工場の附近に住居を占めようとし、又工場主は女工の爲めに寄宿舍を開設し以つて遠國から募集し來つた女工の生活に便せしめようとする。斯くて職工の住宅問題も、寄住問題も起れば、寄宿舍に於ける女工の衞生風紀問題も起り、モツト根本的に云へば、是等勞働者の生活費は都會生活の結果として、自ら増嵩することの免かれ難きに當つて彼等の獲得する賃銀は果して、此生活費と均衡を保つであらうか、兩者の間に均衡を得せしめる目的を以つて、勞働者が團體的運動を企て、工場主又は其團體に對して、對抗を試みるに至つたならば、玆に社會問題なり、勞働問題なりは、其發端を開き、勞働者が自己の地位境遇に就て、自覺するように爲ると、勞働問題は眞劍味を帶びて來るのである。

我國近年の狀況

近年我國の大都會に於て、勞働運動の目覺しく發達するように爲り、勞働者の多數に集まる所には必ず勞働組合が組織され、團體の下に、勞働運動の行はれるに至つたのは、全く右の如き事情に依るものであつて、斯る勢を以つて進んだならば、結局如何なる所まで進むか、殆ど測り知るを得なかつた。現に團體交涉權とか、工場管理權とか云ふことすら、一般勞働運動の目標と爲つた次第である。然るに最近一兩年の間、勞働運動は甚だ沈衰し、各種勞働團體は氣息奄々の狀に居ることは、爭う可からざる事實に屬する。何故一時彼の如く熾烈を極めた勞働運動が今日の狀態に陷つたのであらうか。政府が勞働組合や、勞働運動を繼兒扱にし、機會あれば、之を虐げる、而して事業主も組合を壓抑する目的の下に、組合員に差別的取扱をすると云ふことが一の原因に相違ないが、他の原因としては、昨今の不景氣を擧げなければならぬ。卽ち經濟社會の動搖と共に、商工業上の利益の著しく減少した結果、何れの工場も事業の規模を縮小するか、又は閉鎖を斷行しようとし始めた、斯る際に勞働者が自己の地位を高める爲めに、何か運動を試みれば、直に事業主に馘首解傭の口實を與へるようなものであり、又一旦解

備されたならば、容易に他に代る可き職業に就くことを得ない、一方に勞働組合の方でも、組合員中に失業者が多く、醵金も充分に集まらず、會計上窮境に居る爲め、勞働爭議に就て、勞働者の生活を支持することは、事實に於て困難であり、中には組合にして解散の已むを得ざるに至つたものもある。勞働運動が何時まで斯る停頓した狀態に居るかどうかは、一個の問題であるが、兎に角不景氣の今日は工業勞働者に取つて、勞働運動の蟄伏時代であるとしなければならぬ。

農村の社會問題

斯の如く都會に於て、勞働運動の沈衰したのに對し、農村に於て一種の社會的運動の盛に爲つたことは、吾人の注目に値する所である。固より農村に於ける此種の運動は地主と小作人との間に起つて居るのであり、而して小作人は純然たる勞働者ではなく、寧ろ大なり、小なり企業家の地位を占めるものであるから、之を以つて勞働運動とすることは、當れりとするを得ないが、一種の社會的運動であると云ふことは、間違ひのない所であらう。何故從來因襲と習慣とに支配されることに安んじて居つた地主と小作人との間に爭議を生ずるに至つたのであるか。爭議の要點は即ち小作料の高低に關聯するのであつて、地主の方

で組合を組織し、其組合に屬する一の地主に對して不都合の所業（地主の方から見て）をした小作人には總ての地主に於て、今後土地を貸渡さないことゝし、以つて小作人に壓迫を加へようとすれば小作人の方でも夫れ〴〵之に對抗する爲めに組合を設け組合に屬する小作人の一に向つて、不法の態度に出でた地主の土地は總ての小作人に於て借受けることを拒絕し、若しも地主から他の地方から小作人でも誘つて來るとか、又は自作農でも試みようとする場合には、極力之に妨害すると云ふような工合に都會に於ける工業勞働の爭議に用いられる幾多の戰術が農業地の社會運動にも用いられるのである。從來久しい間を通じて、地主と小作人とは主從の關係に於て、律せられることが多かつた。歐洲諸國に於ては、夙に此點に於ける改革が行はれ、始め土地に定着せしめられた農奴が自由勞働者と爲り、又は小作人として對等の地位に於て、地主と小作條件を協定するに至つた、我國に於ても、地主と小作人とは、對等の地位に居る可き道理であるのに、多年の因襲は地主をして小作人に對して壓倒的勢力を持たしめ、小作人亦萬一の場合に、地主の憐れを乞うて、自己の欲する所を果さうと云ふ卑劣の根性があり、加ふるに社會上の習慣は地主を尊敬して、小作人を輕蔑する等の事實が相集まつて、遂に小作人をして或る程度まで地主

に從屬するに至らしめた。即ち小作人は此地主の歡心を失つて、從來の土地を耕作することを得なければ、一家を擧げて、路頭に迷うであらうと云ふ考を持てば、地主亦此考を以つて、小作人に一種の威壓を加へ、社會上に上下優劣の差別を作るに至つた。今日の農村爭議には此現狀を打破する思想の潜んで居ることを否定するを得ないであらう。

我國に於て農村爭議の生ずる原因

斯る變動の地方農村に生ずるに至つた理由は、之を種々の事情に求めるを得るであらう。

第一は地主小作人間に於ける情誼の缺如して來たことである。從來多年を通じて、地主小作人間の關係の頗る平穩であつたことは兩者の間に一種の情誼の存在する爲めであつた。即ち地主は小作人を愛撫し、小作人は地主を敬慕する、斯くて、兩者の間に培はれた關係は二代三代の久しきを通じて、存續すると云ふことが地方に於ける經濟的關係を律する特徴であつた。然るに近年生存競爭の劇しく爲るに隨ひ、兩者共に利己的觀念を以つて、日常の行動を律する結果、上記の如き純眞の氣風は自ら地を拂ひ、互に利益の爲めに、鬪爭せざるを得ざるに至つたのである。

第二は土地經營上に於ける商業主義の流行するに至つたことである。或は地方に蟠居する大地主の或る者は餘程以前から何代と云ふ間を通じて、土地を所有して居り、所有地を小作に付するに就て、必ずしも幾らの利廻に達するだけの小作料を徵收しなければならぬと云ふ程に、切迫した考を持つて居らず、自然大旦那と云ふが如き餘裕ある態度を以つて、小作人に臨むことは農村に於ける平和の維持に資するを得たのであるが、地方に依つては、都會の資本家が放資の方便として、土地を買入れた場合がある。資本家が土地を買入れた場合には、地方一般の經濟狀態に依つて、地價の大に騰貴した際に、其自然增價を收用し、座ながらにして、巨利を博すると云ふ大きな採算をすれば宜しいのである。都會の資本家は固より此點を考へて居るのであらうが、同時に平生に於ても、土地に放下した資本をして相當の利廻りに相當する收益を擧げしめようと期して已まない。是れが土地經營上に於ける商業主義の適用であつて、土地に放資した者は平生と賣却の際と、二重に利益を收めると云ふ兩天秤を掛けて已まない。而して平生の利益は小作料に外ならないから、斯る地主は機會さへあれば、小作料を引上げようとして已まない。隨つて此事が土着の地主にも影響を及ぼし、彼等をして擧つて小作料の引上に熱中するに至らしめるのは、當

然の勢である。

第三は米價の變動の急劇過度であることとである。殊に近年の如く米價の變動甚だ急劇であつて、時には天井知らずの騰貴をするかと云へば、時には殆ど底無しと思はれる下落をする。小作人が其間に處して、自家の經濟なり、生活なりを律し、然も大なる變動を蒙らないようにするには、米價騰貴時代に收めた利益を以つて、米價下落時代の損失に當るの外はないが、斯る長期間に亘る算盤は一般小作人の取ることの出來ない所である。啻に然るのみならず米價騰貴時代に生ずる利益と雖も、彼等の日常壓迫され來つた生活を慰める點から云へば、誠に些細のものであるし、殊に近年の如く作男や手傳人夫を雇入れるのに、以前よりも高い賃銀を支拂はなければならない以上は、利益の如き、米價騰貴の程度に比較して、必ずしも大なりとするを得ない一方に、米價下落に伴う損失は酷烈に彼等を襲い來る爲めに、之に對抗する必要上地主に向つて、小作料の低減を要求せざるを得ない仕儀に爲り、然も之を要求する態度に頑强を加へるに至るのである。然らば近年米價の變動の甚だしきことは、農村の社會運動を盛ならしめた導火線であると云ふことが認められるであらう。

第四に農村爭議の原因と爲るものは、農村に於ける社會狀態の變動の急劇であることとである。以前の社會狀態であれば、一地方に於ける小作人は生涯を通じて、其地方の小作人であり、作男も亦地方に生れて、其地方に果てることを常とした。然るに今日は勞働移動の自由が極端に認められ、農村の作男は續々工場勞働者と爲り、小作人の子弟亦他郷に出で丶、產を起さうとし、小作人自身も地主から借受けた土地を以つて、自家の生活を營む唯一の方便とは考へて居らない。農村勞働者の供給不足し、彼等に支拂う賃銀の既に不廉であることは、小作人の惱みとする所であるから、他に就く可き仕事があれば、何時でも一地方を去ることを辭しないし、又之を苦痛ともしない。固より今日の如く全國を擧げて、又總ての事業を通じて、不景氣を極める場合には、小作人の考も多少異つて來たかも知れないが、其代りに彼等は地方に於て小作人間の團結を鞏固にして、地主に當らうとする。孰れにしても小作人は一方に農業勞働者に對して高額の賃銀を支拂い、又小作人として自己の企業利得をも增加し、而して是等の負擔を地主と云ふ不勞利得の獲得者に移さうと期するものであつて、地主を不勞利得の獲得者と考へるようになつたのは、即ち小作人の自覺した半面を語るものと云ふ可きである。

農村爭議の憂ふ可き所以

右の如き次第である以上は、今や全國に蔓延しつゝある小作爭議は起る可くして起つたものであつて、何等異とす可き所を見ない。唯斯る爭議の結果として、小作人は小作地を地主に返還し、地主は小作人から土地を回收し、地主組合と小作組合と相對峙して、讓らざる結果、此土地が何人にも耕作されず、生產上の用途を離れるやうな狀態に爲ると云ふことは、一國經濟の大局から見て、惜む可き所であつて、恰も工業爭議の際、工場が閉鎖され、機械の運轉が中止され、富の生產の停廢する損害と擇ぶ所はない、否農業に於ては、天候の如何が仕事に密接の關係を持ち殊に或る季節に於て、成就せしめなければならぬ仕事もあるとすれば、斯る爭議を行はれるに任せた場合には、天物を暴殄するの嫌なきを得ない、玆に於てか國家は小作爭議に對して　仲裁機關を設ける必要を生ずるのである。

工業爭議を防止し、又爭議の起つた際に、之に對する公正なる解決を付ける爲めに、仲裁機關を設置することの必要は從來私の屢々主張した所であるに拘はらず、今日に至つて未だ實行されない。然しながら私は小作爭議に對しても、同樣の主張を繰返すことに躊躇しない。卽ち官吏と地主組合幷に小作人組合の各代表者若干數とを以つて、仲裁々判所を開設し、小作問題に關して、地主小作人の間に起つた爭議は必ず此裁判所の審判に付し、双方をして小作地返還とか、小作地回收とか云ふような形態に於て、他に壓迫を加へることなからしめ、爭議の如何に拘はらず、農業の繼續して、行はれることを期するのは、最も必要の處置である。固より地方に至つては、小作人組合の充分に組織されて居らない所があるであらうが、一方に仲裁制度の確立した以上は、藉すに時日を以つてしたならば、必ず小作人組合は組織されるであらうし、世間亦小作人を啓發して、組合運動を行はしめるだけの知識や、訓練を與へなければならぬ。賀川豐彥氏等が同志と共に、今夏農民教育運動を關西方面に起したと云ふことを過日新聞紙上に散見したが、誠に時機を得た計畫として、私の衷心贊成する所である。

政府は如何なる方針を持するか

政府は小作制度に關する法制を制定する意嚮であると云ふことであるが、果して如何なる法制が實際に出來上るであらうか。工業勞働に關する問題に於て、勞働組合が公認されなかつたり、治安警察法第十六條が依然として有効であり、前者を公認して、後者を廢止せよと云ふ民衆の要求は近年隨分熱烈であ

り、第一次國際勞働會議に於ては、外國の代表者から忠告を受けた所であるに拘はらず、政府は頑として之を容れないと云ふ狀態から考へると、同じ政府が同じ思想の下に、小作爭議法を制定する場合には、如何なる事が規定されるであらうか、小作人は幾個月以前に豫告をしなければ、小作地を地主に返還するを得ないとか、小作料は何年間を通じて、据置きにするとか云ふような小作人の利益を束縛する規定が設けられたり、又小作人組合には全然法律上の地位を認めなかつたりすることに爲りはしないであらうか。殊に農村に於ける地主の政治上に於ける勢力は甚だ強く、彼等の嚮背は衆議院議員選擧の大勢に重大なる關係を有する今日に於ては、小作爭議法の制定は表面上如何なる理由に基いたとした所で、歸する所は地主保護の一點に止まること、恰も都會に於て、資本家保護の法制は幾らあつても、勞働者保護法の殆ど顧みられないのと、同樣の趣きを呈するに至るのではあるまいか。

然しながら斯る狀態は何時まで續くことであらうか。農村に社會問題の唱へられる程農村其もの丶進んで來たことは誠に一葉落ちて、天下の秋を告げるものである。社會問題は都會から農村に移つたと稱し都會の社會問題は全然之を閑却し、一方に農村の同一問題に對しても、何等解決の方法を設けない、又は全然見當の違つた法制を以つて、取締をしようとして居る間に、我國は結局都會と農村との兩方面から起る勞働運動に依つて、挾撃されるに至りはしないであらうか、斯くて社會の基礎に大なる動搖を生ずるに至ることは、吾人の憂慮に堪へざる所である。

土地と自由とを與へよ

——小作爭議唯一の解決法——

永井柳太郎

(一)

勞働爭議が都會から農村にまで蔓延したと云ふ事は、勞資兩階級の衝突が愈々全國的になりつゝある事を實證するものである。何れの國に於ても農村に於ける勞働爭議は都會に於けるそれに比して其發達遲々たるものがある。それは何故かと云ふに、第一は資本家と勞働者との區別が農業にあつては工業に於ける程明瞭ならざるためである。工業に於ては一方に工場主あり、他方に職工ありて、兩者の區別は截然として居るが、農業に

於ては、地主にも著しき等級があり、又小作農にして自作農を兼ぬる者あり、兩者の區別が比較的不明瞭である。殊に我國の如きは大正八年末に於ける農總數五百四十八萬戶の中、自作農三割一分、小作農二割八分、殘餘の四割一分は自作兼小作となつて居るのであるから、彼等の間に於ける階級的感情の發生は勢ひ遲々たらざるを得ない。第二に、農村にあつては、原則として資本家も勞働者も共に土着の關係を有するから、工業に從事するものゝ如く自由に移動する事が出來ない。從つて資本家も勞働者も、假ひ不滿足な事があつても、出來得る限りその不滿足に耐え、爭議を生じたる場合にも、出來得る限り御互に讓步し、以てその土地に對する關係を持續せん事を努める。第三に、地主と小作人との關係は、工場主と職工とのそれよりも比較的親密である。工業に於ては資本家と勞働者とが終生顏を合さぬ事が多い。兩者は只資本家は勞力を買ふ者、勞働者は勞力を賣る者として、單純なる取引關係に立つて居るが、地主と小作人との間に於ては、彼の少數なる不在地主を除けば、多くは朝夕顏を合すのが普通であるから、恰も產業革命前に於ける主人と徒弟との如き情緒がないではない。第四に、農村に於ける勞働者は都會に於ける勞働者ほど文明の風潮に接觸しないから、その思想は一般に保守的であつて、都會の勞働者ほど銳敏なる權利義務の觀念を有たない。從つて假令地主のために壓迫を蒙つても、之れに對する反抗心は工業勞働者の場合に於けるほど迅速に勃興する事はない。之れらの理由に依つて、農村に於ける勞働者は其生活の困難なる事に於ては都會の勞働者に比して數倍するものあるに拘はらず、資本家に對して階級的反感を抱く危險は都會の勞働者より遙かに少いのが常である。然るにその農村に於て今や都會に於けるに劣らざる程度に勞働爭議の勃發を見る事になつたのは、我國に於ける階級衝突の病將に膏肓に入らんとする證據である。

(二)

地主對小作人の勞働爭議は、昨年五月一日より今年四月三十日に至る一箇年間に於て、其數實に千六百八十件を算し、之れに關係した地主は三萬四千八十人、小作人は十四萬五千八百九十八人と云ふ事である。勿論之れは表面に現れたもの丈けであるが、隱れたるものをも合算すれば猶ほ之れに二倍又は三倍するの多數であるかも知れぬ。全體農村に於ける勞働爭議の原因は地主から起すものと、小作人から起すものとの二種ある。地主から起すものは、小作料の引き上げとか、小作地返還の要求とか、又小作料の金納を物納に變更の要求とか云ふ事が主なる

ものであるが、小作人の方から起すものは、小作料引き下げの要求と、小作料の物納を金納に變更の要求とが其主なるものとなつて居る。併し近時農村に於ける勞働爭議の多くは小作人から起すものであつて、その大部分は小作料引下げの要求である。殊に其小作料引き下げても、單に凶作や、風水害に依る一時的のものでなく、永久的の小作料輕減を意味するものであつて、其要求が容れらざる場合に、屢々耕地返還を主張する。

何故に最近小作料引き下げ運動が俄然として勃興したかと云ふに、その原因は種々あると思ふ。社會教育の普及と共に、小作人の間にも權利義務の思想が發達し、從來の如く地主の命令に唯々諾々として服從しなくなつた事も其原因であるに相違ない。都會に接近したる農村に於ては都會の勞働者の賃金と小作人の受くる報酬とが、其金額に於て餘りに隔絶し、都會の勞働者の生活に比し小作人の生活が餘りに貧弱である事に刺戟せられた事も其原因であるに相違ない。或る地方に於ては最近西伯利より歸還したる在鄉兵が自己の農村に於て階級鬪爭の思想を宣傳したる事も其原因をなして居ると聞く。又近時我國の農村には所謂不在地主が增加しつゝある。而て其不在地主と小作人とは一面識もなく、而かも其地主の代表者が恰も會社の重役が其使傭人に臨むが如き苛酷と冷淡とを以て小作人を使役せんとする事に對する反動も亦其原因となるに相違ないが、併し之等の種々な原因の何れにも勝つて重大なる原因をなすものは、現在の小作料では物價騰貴の今日に於て到底生活が出來ないと云ふ事實に對する深刻なる自覺である。

試みに次の數字に就いて見れば、小作人の生活が如何に困難であるかを推察する事は容易である。農家の手取りとなる米價が一石四十圓の場合に、田一反歩からの米の收穫は平均二石二三斗であるから、其總所得は八九十圓となる。此中約半額は地主の利得となるのであつて、其餘の四五十圓が小作人の手に殘るに過ぎぬ。然るに此四五十圓の中から田平均一反歩の耕作に要する肥料代、籾種代、農具代、合計約二十圓を差引かなくてはならぬのであるから、殘餘は僅かに二三十圓となる。我國の小作人の大多數は五反乃至一町歩の耕地に於て生活して居るのであるが、田平均一反歩の純所得僅に二三十圓に過ぎぬとすれば、其全體に於ける純所得も亦知るべきである。假りに一町歩を耕作する者でも僅々二三百圓を出でぬ。況んや五反内外の耕作者をや。聞く所に依れば平均田一反歩の小作に要する勞働日數は、之れを延べ日數として、約三十日に當るさうであるが、これを以て其純所得を除すると一日の勞働に對する報酬は一圓

に滿たぬ。彼等小作人が如何に赤貧に甘んずるとしても、一日一圓未滿の賃銀は、實に殘酷と云はざるを得ぬ。假りに麥の耕作や、副業の收入に依つて多少の補ひを得るとしても、その生活の困難なる事は實に想像するに餘りある。

外國でも小作爭議は頗る重大なる問題であるが、それでも外國の小作人は幾多の點に於て我國の小作人よりも遙かに有利の地位に在る。外國の小作人は種から肥料まで地主の方で負擔し、小作人は只勞力のみ提供して、其得たるものを或は折半し、或は歩合で納入するのであるが、我國の小作人は、勞働者であると同時に、又企業家であるから、肥料も、籾種も、勞働も、一切自ら支辨し、且つ其危險までも負擔して、そして生産されたものを折半するのであるから、其苦痛に於ては同日の談ではない。又外國の小作人は、原則として、其小作料を金納として居るが、我國の小作人は今尚ほ其小作料を物納とする事が一般の慣習となつて居る。

全體物納制度は封建時代の遺物であつて、諸種の租税が金納となりたる今日に於て、獨り小作料をのみ封建時代其儘に物納とするは矛盾も亦甚しと云はねばならぬ。現に地租は明治七年に一圓二三十錢であつたものが大正九年に四圓四十錢になつただけで僅かに四倍したに過ぎぬ。然るに小作料はどうかと云ふに、同じ一石の米を納めるとしても、其價格が明治七年に三圓であつたものが、今日四十五圓にもなつたのであるから、小作料は事實に於て十倍乃至十五倍に騰貴したと同じである。此事實に依つて見ても地租のみを金納とし、小作料を物納とする事の不合理は明白であるが、猶ほ小作料を物納とする事のために小作人の蒙る重大なる損害は、資金融通の困難と云ふ事である。最近小農民を救濟する方法の一として農業倉庫の普及が問題となつて居るが、假令農業倉庫が出來ても、小作料の物納制度を改めざる限り、小作人が農業倉庫を利用する事は不可能であらう。何んとなれば小作料が金納であれば一時何物かを擔保として小作料を納め米は其儘倉庫に貯藏して、其價格の騰貴した時に初めてこれを賣却する事が出來るから、小作人と雖も農業倉庫を利用して十分の利益を收める事が出來る。故に、物納制度が廢止されなければ農業倉庫の如きもこれを利用し得るものは地主のみに限り、小作人は依然として資金融通の途なきに苦しまざるを得ないであらう。

之れ等の小作制度の根本に横はる諸種の弊害を一掃して小作人の生活安定を計りたいと云ふ事が近時小作爭議の勃興したる根本の原因であつて、此原因を解決せざる限り、小作爭議は愈々頻繁となり、且つ深刻となるに相違ない。

(三)

英國に於ては小作問題の根本的解決法として小作農を漸次自作農に轉ぜしめ、農村に於ける階級的分裂を消滅せしめる方針をとつて居る。それは所謂小持地法(スモールホールデングスアクト)の制定となつて現れた。小持地法とは郡自治體に對し、其必要とする土地を買上ぐるの權能を賦與し、郡自治體をして其買ひ上げたる土地を一エーカー乃至五十エーカーの小耕地に分割せしめ、之れに道路を通じ、家屋を建て、それを耕作せんとする小農民に年賦を以て賣下げるのである。農民は其賣下げの許可を得た時に、先づ地價總額の五分の一丈けを卽納し、其殘金は五十箇年を期し、半年毎に之れを分納すればよい。而て若し土地の所有者にして郡自治體の買ひ上げに應ぜざる場合は、郡自治體は政府の許可を得て自ら評價したる價格に依つて、其土地を强制收用する事が出來る。此法律は云ふまでもなく、大地主の激烈なる反對に遭遇したけれども、次第に其效を奏して、之れがために今日までに多數の小作人が自作農となり、農村に於ける勞働爭議の根本的解決に貢獻したる事頗る大きい。

我國の論者の內には農民の耕地面積を增加しそれに依つて彼等の收益を增加せしめる事の必要を說く者が少くない。けれども小作農にせよ、又自作農にせよ、生活の安定を得る程度に收益を收めんとすれば、少くとも二三町步を耕さざるを得ない。それには今日の如く狹隘なる國土では到底實現する事は出來ぬ、政府は種々なる奬勵の方法を設けて頻りに耕地の擴張に努めて居るけれども、我國の耕地は一箇年平均二萬町步餘しか擴張されて居ない。明治三十三年耕地整理施行以來今日に至るまで約二十二箇年中に於て、僅かに五十萬町步しか新たなる耕地を增加して居ないのであるから、耕地の急激なる增加を計らんと欲すれば、勢ひ海外に土地を求むるの外はないが、それは今日の外交關係に於て殆ど不可能の事である。假ひ可能であるとしても、旣に地主と小作人との階級的分裂の存する限り、これのみに依て小作爭議が根絕する筈はない。

惟ふに今日は姑息なる手段に依つて一時を彌縫すべきではなく、農村の繁榮と、其繁榮に總ての農民が均霑し得る徹底したる農業政策を確立すべき時期である。而て地主と小作人との間に發生したる階級的衝突を其根柢より解決せんと欲すれば結局は總ての小作農を自作農とするか、凡ての田畑を國有とし農民全部を國家の小作人とするか、孰れかの方針に出づるの外はないのであるが、此點に於て英國か小持地法の制定に依りて多數の獨立小農夫を作り、凡ての農民に土地と自由とを與ふる事

に依りて小作爭議發生の原因を根絶せんとしつゝあるは吾等に大なる教訓を與ふる。私は政府當局者が徹底したる大方針を確立して小作爭議發生の原因を除去するに努めん事を希望せざるを得ぬ。





あの頃の俺・この頃の俺

大泉黒石

「狼」の婆さんが到頭死んで了つた。大體兇猛なくせに臆病で、毛だらけの顔に眼ばかり光つてゐる年中空つ腹の俺を、世間では狼と云ふのだ。狼にだつてお婆さんはある。あるから死んだのだ。お婆さんの死顏をつくづく眺めてゐると何だか俺も死たくなつて來た。生れ落ちるから今日まで、このお婆さんの手一つで育つた俺は、一度だつて碌な目に遭はせたことがないのだ。故郷の中學を出るとすぐ、厭がるお婆さんを說き伏せて先祖代々の家や道具を賣り飛ばして、一生一代の運だめしに此東京へやつて來た姿は實に奮つてゐたが、學生になつたり、金を費つたり。勞働者になつたり、食へなかつたり。やることなすこと失敗つゞきで、散々苦勞をしぬいた揚句が、口入屋の番頭も知らないやうな商賣のありつたけをやり盡したドン詰りに來ると俺は考へた。この際俺に出來る仕事は泥棒か乞食か文學者だ。いくら資本いらずの商賣でも、空巢狙ひや紙幣の贋造は怖くて出來ないし、播州浪人の言ひ草ではないが、どんなに尾羽うち枯した旅烏にしろ、元を糺せば立派な家柄だ。先祖の位牌に泥を塗るやうな了見は滅多にないから乞食はいやだと來た。だがら俺は文學者になつたが、書くもの書くもの賣れないから悲觀した。しかし、今に金でも拾つたら又どうにかなるだらうと云ふ氣で、俺は着のみ着のまゝ、お婆さんは骨と皮だ。かうなりやもう下りつこなし、矢でも鐵砲でも來いと、痩せ我慢を張り乍ら、剛情に生きのびてゐると、監獄にだつて入る奴があるん

だから俺の家へ原稿を賴みに舞ひ込んで來る風變りの客があるのは當り前だが生活向きは相變らずの綱渡りで、いつになつたら少しは樂になるのか見當のつかないうちに空じ腹と根くらべをやつてゐたお婆さんは、金持ちになるのを諦めて死んだ。此鹽梅だとまづは首くゝる心配なしに食つて行けさうだと思つて安心したせいかも知れない。これでお婆さんが成佛するのは二度目だ。一度は酷く困つた時お婆さんを死んだ體にして、東京にゐる親類緣者から香奠を欺つたことがあるのだ。いゝ具合に俺たちの住居が場末の裏長屋なので佛を拜みに來るものがなかつた。親類共は揃つて景氣がいゝのだ。俺は奴等の不人情が有り難かつた。今度はいよく〱確實に死んだと、事情を打ち明けて見たところで、どうせ相手にして吳れないことが解り切つてゐるから弱つて了つた。傲慢でしみつたれで、ふところに入るものならマラリヤ熱でも厭はない代りに、出て行くものなら汽車でもいやがる手合ひだから始末が惡いのだ。生憎一文なしの俺は死人を抱へて途方にくれた。考へて見ると人間の一生なんて厄介な道樂だ。生れることが氣まぐれな冒險なら、死ぬのは迷惑な惡戲だらう。お婆さんが寂滅したのは味氣ないけれども、捲添へ食つた俺の身にはなかく〱の災難だ。俺は一體どうすれば埒があくのだ。考へたところで碌な智慧は浮ばない。只無暗と悲しくなつてお了ひには、むかつ腹が立つて來た。一層のこと放り出して逃げやうか？權兵衛の種だから烏がほじくるんだ。拜火教徒の死骸だから印度の烏も食べるんだ。可哀さうな話だが、八十に近い老婆の脫け殼なんさ、宿なしの蝨だつてとりつくまいとは思ふんだが、やつぱり俺のお婆さんだから、いくら常識のない狼にしろ、そんな無茶なことは出來ない。やらうつたつて行くまい。昔のナポレオンだから五十萬の亡者をモスクワの田甫にうつちやつて突つ走つたんだ。雜司ケ谷で一番の剛つく張りで通つてゐる裏口の百姓家主は滅多に俺を逃がすまい。情けなくて癪に障るとこんなことまで考へるが、世の中の妙なところは此處だ。俺が一人でやけ糞になつてゐると、運の惡い人間が二ツ連がつてやつて來た。一人は「野百合雜誌」で一人は「怪傑」だ。俺の急場を見ると金を貸して原稿を書いてくれと云ふから、こいつは大助かりだと云ふと、いやそのつもりで一つ傑作を願いたいとぬかした。傑作をあと廻しにしてお婆さんの骨を故鄕へ埋めに行かねばならぬ。佛の後始末がついて、溜つてゐた借金を拂つた殘りを勘定して見ると大坂までしか行けないから困つた。しかし大坂まで行けば圭吉がゐる。俺は京都の高等學校から追ひ出されたが圭吉は首尾よく卒業したと見えて、この間俺に手紙をくれたときに、法學士松原圭吉と云へば、大坂の口

動車倶樂部で知らぬものはないと書き添へてあつたから、お前の顔が黒すぎて目立つのだらうと返事をやつたことがある。この圭吉が京都の大學を出る時分に、古ぼけたバスケットを提げて雜司ケ谷の俺のうちへ突然やつて來た。圭吉が大學で有名になつたのは俺のお蔭なんだ。俺は彼奴のことを散々書いた。だから圭吉が大學青年會の理事になつたからつて驚くに當らない。一體その理事は何をするんだと聞いて見ると圭吉はお前も隨分わからず屋だ、寄宿所の賄ひ婆さんの監督をするんぢやないかと云つた。なるほど、その位のことならこの男にも出來るだらうと思つた。その賄ひ婆さんの資格が非常に六ケ敷いのださうだ。京都邊にはゐないから態々東京の新聞に廣告して置いて買ひ出しに來たんだと云つたが、東京がいくら廣くても賄ひ婆さんの出物はあるまいと思つてゐると、翌日になつて本郷の大學青年會館へ出掛けた圭吉が旨く見つかつたと云つて歸つて來た。そして、これで一と安心と、時にどうだい、久しぶりだから江ノ島鎌倉を二三日游らないかと云ひ出した。金がなければ少し位だと俺にもあると云ひ乍ら、古バスケットの中から風呂敷づゝみを持ち出して俺の前でほどいて見せた。昔から金のないことで有名な男が露西亞のルウブル紙幣を百枚も二百枚も持つてゐるから俺は膽を潰したが、江戸川橋際の兩替屋に出掛けて當つて見ると一枚三厘位ならお引き取りしませうと云ふことになると、流石に獰猛な圭吉も、馬のやうな齒をむいて悲しげに笑つたから俺はやつと安心した。それがほんたうだらう。圭吉の話をきくと、京都の新京極で前の月に同値で買つたんださうだ。相場つて奴はなか〱上らないもんだなと溜息をついた。こんな法學士だから自動車倶樂部でもてるんだらう。俺は今都合が悪いから江ノ島はこの次にして品川のお台場はどうだと云つた。すると圭吉は始めて東京へ來て大いによろこんでゐたので、泳げるところなら品川でもいゝと云つた。お台場とお台場との間を泳ぎ渡り乍ら、江ノ島だつてやつぱりこんなもんだらうと云ふ。多分こんなものさ。と俺は答へた。實は俺も知らないのだ。すると圭吉は單純な男で、名所なんかくだらんもんだよと斷言した。家へ戻ると圭吉の故郷から親爺が頓死したと云ふ電報がついてゐたのでひどく慌て出したものだ。考へて見ると俺が、品川のどぶの中につかつてゐる時刻に親父が寂滅しちまつたんだと、申しわけのない目つきで電報を見てゐたことがある。そのとき俺の家にあづけて行つた古バスケットのルウブル紙幣を掻き出してお婆さんの骨壺をおさめた。そして大坂の自動車倶樂部へ立ちよつて、故郷までの路銀の工面を命ずるつもりで汽車にのつた。圭吉の商賣は獨立自動車株式の秘書役だから俺よりは

樂だらう。ところが俺の汽車が京都へつくと窓際に腰かけてゐた俺を見つけて俺の名を呼びな乍ら飛んで來た奴がゐるのだ。一旦東京へ來てそれから京都の高等學校に入つた俺は物凄い貧乏で、學校を追つ拂はれて東京へ逃げ出すときは、家賃も米代も酒屋の勘定も永久に忘れるつもりで命から〲だつた。だから京都驛につくと内心ひや〱してゐるところへ共奴がパツと現はれたから驚いて見ると、家主でも米屋でもない高橋筑風なんだ。俺が淺草の貧民窟から本所の陸軍糧秣倉庫へ草擠ぎに通つてゐる頃、向ふ島の日活會社活動寫眞撮影場を見に行つたときに知り合つたあばた面の男だ。俺に松之助の脚本を見せて、この位のものだから自分の下受けをやりませんかと云つた。講談の書き直し見たいなものだから、御說の通りこの位のものなら雜作はありませんと答へると、それでは何か變り種をお願ひしませうかと云ふ。草擠ぎに行つて顏中傷だらけになるよりよつぽど割がよさゝうだから三日ばかりして「荒木又右衛門」の筋書きをつくつて向ふ島の撮影場に持つて行つた。ところが筋書の題を見ると俺を馬鹿にするやうな調子で、こいつあ駄目だよとぬかした。わけを聞くと荒木又右衛門はちやんと出來たのがあるから困ると云ふのだ。だから俺が云つてやつた「それぢや、表題を宮本武藏にとりかへちやつてはどうでせう？」「なるほど、こいつは名案だ」と筑風が賛成した。俺の方がよつぽど話せると思つて兎に角中を讀んでくれと云つた。その結果筑風は俺の天才を無茶苦茶にほめるのだ。さうだらう本人の俺だつてセルヷンテスの「ドンキホーテ」を燒き直し乍ら、これだと親分の松之助だつて見物の小僧だつてよろこぶだらうと思つたんだから。

「こう云ふ筋は見たことがないねえ。自分で考へたんですか？」

「いゝえ。セルヷンテスの傑作ですよ。」と俺は笑ひ乍ら云つた。

「セルヷンテスなんて小說がありますかね？道理で旨いと思つた。」と筑風が云つた。この男はセルヷンテスを知らないのだあとで話を聞くと筑風はもと緣日で英語の會話本を呼び賣りしてゐたんださうだ。松之助の乾兒になつたのは破天荒の出世らしい。だから西洋の知識は英語の會話本で澤山だと思つてゐたし拷問にかけたらトルストイの名前位は知つてゐると白狀するかも知れない。だから活動寫眞の宮本武藏が水車にひつかゝつて降參する場合はセルヷンテスの智慧なんだ。二つ三つ書いた脚本を買つてくれた筑風は俺に賴つて二割ばかりの頭をハネた。親切な男だ。京都驛でこの男に出會ふのは意外だから樣子を聞くと、向ふ島から京都の本店へ出世して、脚本主任になりましたと得意がつた。昔は隨分小汚ない風をして威張つてゐたが、大分あかぬけがしてゐるから偉がる筈だと感心してやると、大

淋しくなつたと見えて、いつも家内とあなたのお噂をして羨しがつてゐますよとお世辭を云ふのだ。こんな男にでも羨しがつて貰はなければやり切れるものか。講談よりゃセルヷンテスの方がずつと上等だ。するとあばたの筑風が追從笑ひをして、どこへ行くのかと尋ねるから、故郷へ歸る話をきかせたら、ちや私も神戸の方へ出掛けるんですからお供しませう。さう云ふわけでしたら、神戸の船會社に私の知人がゐますからロハの切符を貰つて上げませうと云ひ出した。頭をはねるものでなければ世話しない筑風だつたが、變つた心掛けだと思つて禮を云つた。お蔭で自動車倶樂部の名物男に無心を吹つかけないですみさうだ。俺の故郷は肥前の長崎だ。神戸から汽船で行けば一晝夜でつく。おまけに賄ひは向ふ持ちだから有り難かつた。松之助の乾兒だつて馬鹿にするな。船の會社に友達がゐないとも限らないのだ。筑風は神戸の六甲山の何とか溪に瀧の見分に出掛けるのださうだ。新らしい脚本の背景を物色してゐるんだが容易に見つからなくて困ると云つた。筑風の書く物は三百年の昔だ。電信柱のない土地でないと狂言が出來ないと云つた。「どこか格好な背景はないもんですかね」と筑風が尋ねるから「どうも格好な背景はないもんですかねえ」と云ふ風に相談に乗つてやるが、筑風の云ふことは俺の考へることゝ時代が違ふので相手の說に相槌うつて神戸につくのは苦しかつた。おまけに筑風が奔走してくれたロハの二等切符には「小兒」と云ふ大きなスタンプが黑々と捺してあるのだ。棧橋から、その日出る船に乗ると、事務長が切符を調べに來た。

「お部屋に御案內いたします」

と丁寧な事務長が云ふ。俺はこの金ピカの先生に導かれて暗いキャビンの廊下を上つたり下つたりして小さい二等寢室に放り込まれた。

「切符を頂きます。」

俺は恐縮しながら「小兒」の切符を出した。

「あゝ。あなたですか?」と事務長は何も彼も呑み込んでゐるらしい。「何卒よろしく」「神戸の——さんから電話で承知してゐます」。「何分よろしく」「御窮屈でせうが、こゝで御辛棒下さい」「何卒よろしく」「長崎までお越しになるのですか」「何分よろしく」。ロハの切符と俺の顏を見比べて事務長はしつこく饒舌るのだから憔れて了つた。俺は「何卒」と「何分」の使ひわけで何遍お辭儀をしたかわからない。かうなると「狼」の文學者もかたなしだ。寢室に入ると小さくなる。食堂に行くと頭をかく。事務長に出會すとお辭儀をする。船の居候はやつたことがないから勝手がわからない。夜になつたら落ちつくだら

うと思つてゐると、上海行きの商人や藝者がいつまでも騒ぐので寢られぬ。いつもなら怒鳴りつけるが、氣がひけて閉口した。こんな思ひをする位なら未吉に災難をかけた方がよかつたと思つた。船は瀬戸内海を過ぎて支那海に入るころ夜があけた。俺はこの上海航路のしやむ丸が五島沖にやつて來るのを待つて下甲板に飛び出した。そして船尾で働いてゐる火夫たちの仲間入りをした。波が横着で風が頑固だ。水夫がビール瓶を一ダースも抱へて來た。皆口があいてゐる。半分入つてゐるのもあれば空つぽのもある。月を見ながら上甲板の籐椅子にひつくり返つてゐた二等や一等の客が飲み棄てのビールなんだ。瓶の外側には露が下りてゐる。氣のぬけた酒を喇叭のみにしてゐた。俺は筑風に貰つた五十錢位のポツケツト・ウヰスキをちび〳〵呻り乍ら、ウインチの蔭に蹲んで海を見てゐると、貧乏も居候もお婆さんの佛様も忘れて、成吉思汗のやうな太つ肚になつて來た。支那の沖合から雲とも煙ともつかぬ波が走つて來る。南洋諸島のやうに可愛らしい小波が船に近づくとまるでボルネオ島のやうに大きく持ち上つて、濠洲のやうな帷幕で船の横つ腹に喰ひつくのだ。船の頭が東に向き直つて神ノ島と福田岬の間へやつて來る時分にはもう揺れなくなつた。かうして長崎の港に入るのだ。二等室のロハ客が、月並の嘘つきなら、そら涙を零してから云ふだらう「今、私を乗せた船は、俄かに悲しい汽笛をあげて、疲れ果てた港の桟橋についた。しづかに憂欝な春の宵は懶くゆれる波の上から町をめぐる林の丘にかけて、青白い夢の襞につゝまれてゐる。昔、私の家がそこにあつた林の蔭に、瞬いてゐる灯影を見ると、その頃の出來事が一どきに甦へり群がつて來た。私の心は波にうく白い鷗の首のやうに、襲ひかゝる悲哀のために顫ひ出した。兩親に死別れた私が、盲目の祖母に育てられたあの白薔薇の垣を繞らした土藏の家に殘つてゐるだらうか?、生墻の下を流れてゐる溪川や、美しい戀人の別莊はどうなつたらう? 少女の飼ひ犬はまだ生きてゐるだらうか? 私は忘れない、故郷を出て十幾年ぶりお前の側へ戻つて來た。しかし、今ついたかと尋ねてくれる人もない。人々は私を見て一體どこから來たのだらうと云ふやうな淋しい目つきをしてゐる。私は忘られてゐるのだと思ふと淋しい涙があふれて來る」こんなに哀れつぽくやつつけたら、田舍の娘には持てるかも知れない。生憎俺にはそんな生優しい思ひ出が見たくもないのだ。まわりの生垣が白薔薇だと乙だが、困つたことには囚人墓地だ。三圓位の家賃の家に土藏もおかしいし、戀人の少女と云ふのが近所の牛乳屋で、俺の顏を見るとすぐ乳代の催促をする膨れつ面だ。そこの飼犬が狂犬になつたとき俺が撲殺したことなら誰

かにおぼへがある位だから、涙の代りに冷汗なら出るだらう。何しろ俺は向ふ見ずの亂暴者で通つてゐた。町の者が俺を忘れてゐれば幸ひだが、おぼへてゐられると毆られるかも知れない。亂暴者と聖人は故郷に入れられぬと本に書いてあるが、浪花節ならよろこんで出迎へる俺の町に歡迎されてたまるものかと思ひ乍ら、事務長に挨拶に行くと「いや、決して御心配なく。お金はいたゞきません」とぬかした。事務長は俺が金でも拂ひに來たんだと感違ひしたんだらう。金があるならあんなに氣辛ひ思ひをするものか、左様ならと云つて舷門から棧橋へ渡ると、波止場の前の「大黒屋」と云ふ安宿にとまつた。港に面した二階の隅の六疊に陣をかまへて金の工面をしないうちはお婆さんの骨壺を片づけるわけにも行かないし、折角來たついでの追憶もゆるりと出來ない。故郷へ歸つて寢た晩も「大黒屋」の二階では雜司ケ谷と同じことで、眠る前に金の心配を一通りやるのだ。旅空で金の苦勞をする位面白くないものはなからう。俺は島田のところへ出掛けやうと考へた。島田と俺とはこの町の中學を同期に出た仲間なんだ。自動車會社の圭吉とこの島田と俺が社會主義者と名乘り乍ら木下尚江の小説ばかり讀んでゐた。圭吉の故郷は四國の松山だが島田は土地の者だ。港の場末に日見峠がある。峠の麓に小さい部落がある筈だ。麓の中川にそうて泝れば螢の茶屋。お鶴の塔。蘇鐵の寺に本河内の水車小屋と順に眺められたが、今は水車がなくなつて中川四景が三つになつてトント殺滅だと、名所案内記にも書いてあるだらう。水車の部落は「米搗き村」で通つてゐる。眼に入るものと云へば、くる〳〵廻る水車に、俵を背負ふて磧をのぼる牛の群ればかりだつた。溪のさゝやき。鞭の響。鈴の音が風の都合によると町まで傳つて來たものだ。すると俺が中學の五年生の時分だ。米搗き村に水力電氣の精米工場が出來て何とか式の素敵滅法な機械と技師がやつて來た。それまでこの邊一帶の村々で刈りとる米麥の搗き上げを一手に引受けてゐた水車小屋は仕事をとられて了つたのだ。工場の方だと搗き賃が安い上に仕事がテキパキしてゐるから村々の百姓がそつちへ搗かせるのは尤もな話だ。可哀さうな舊式の水車はあがつたりで、相當に生活してゐた部落の連中は忽ち食へなくならうと云ふ騷ぎだつた。はじめのうちこそ躍氣となつて工場に對してお得意の爭奪戰をやつたもんだが、勝負にならない。水車持ちは見切りをつけてポツ〳〵商賣がへを始めた。車挽きなつたり、駄菓子屋になつたり、精米工場の人夫になると云ふ調子で昔の名物は最期をとげた。天の逆鉾と俺の貧乏だけは先が見えぬけれども、あらゆるものには大詰めがあるとギボンのローマ史に書いてある通りだ。木代街

道は七十五次、忠臣藏は十段目だらう。大阪城だつて夏になると陷落するのに、孤壘落日、どこまでも諦めのわるい水車小屋の親爺がたつた一人ゐた。それが島田の父だつた。島田の親爺は頑固な男で、仲間がへこたれるのを見ると、すつかり憤慨しちまつた。工場で搗いた米麥を一粒でも食つて見ろ、中川の水神さまに罰をくらつて血を吐くぞと怒鳴り廻つたもんだが、伜の島田が親爺によく似た無法者だ。いつも男のだか女のだか性の知れないボロ靴を穿いて、毛剃九右衞門のやうな海賊づらをして學校へ通つて來た。學校に來て何をするかと云ふと、机の下に「火の柱」や「墓場」をひろげて讀むのが仕事だつた。俺とこの島田と圭吉が集ると、小説は木下尚江だ、人間は社會主義だ、氣に喰はない奴は教師だらうが生徒だらうが片つ端からやつつけろと云ふ調子だつたが、島田の腕つ節には俺も避易した。何しろ俺はこの學校へ中途から入れて貰つたので、古參の島田が、どんなたちの男だか知らなかつた、ところが五年になつたばかりのとき、ひどい寒さでたまらないから波止場の古着屋で五圓足らずのボロ〳〵のオバーコートを買つたのだ。俺はそれまで外套なしで押し通してゐた。それを着て見ると膝坊主の上まである。これだとそんなに見つともなくはなからうと思つて學校へ着込んで行くと、流石に異彩を放つたと見えて評判になつたのはよかつたが、島田の耳に入つたらしいのだ。二日目か三日目に教室の外の壁にかけてゐたオバー・コートが見えなかつたから血眼で探してゐると、島田がやつて來て、ちよいと運動場へ出ろと云つた。何の用だと尋ねると何でもいゝから出ろとまた云つた。だから行つて見た。すると俺のオバー・コートが木馬の上に置いてあるからおかしな惡戲をする奴があるもんだと思つて、やあどうも有り難うと禮を云ひ乍ら袖を通しかけた。すると島田が俺を睨まへて、貴樣は日本人かと怒鳴り出したから驚いた俺は日本人のつもりだが、お前にはさう見えないかと怒鳴り返すと日本人は規則を守る人種だ。貴樣は規則を守つてゐないだらうとぬかした。何の規則だか知らないが、守つてゐるつもりだ。ところが島田に云はせると。「お前の外套は校則に反したものだ。何故こんな高價なものを買つたんだ。」と來た。なるほど、俺のオバーはボロだが、襟裏には英吉利のマークがついてゐた。だからこの學校の制服になつてゐる巡査の外套とはちがつて、よつぽど酒落れてゐるが、日本だから着てゐられるんだ。西洋なら乞食も貰はない安物だ。汽車は三等に乘る、三等に乘るのは四等がないからだ。もつと安い品があるならそつちにするから安心しろと怒鳴り返してやると、口では迚も敵はぬと見えて、貴樣は生意氣だと云ひ乍ら、いきなり俺の横つ面

を毆りつけた、よつぽど跳びかゝらうとは思つたが、相手の腕つ節を見ると迚も寄りつけさうになかつたから、殘念ながら覺えてゐろ。月に一度は暗の晩があるんだと口惜しかつたが我慢をした。俺は何かして島田に仕返しがしたいのだ。へこます工夫をいろ／＼考へてゐるうちに修學旅行の日が來て、俺たちはこの町を出て福岡に行くのだが、小城羊羹の名所で有名な佐賀の小城までやつて來たら日がくれて宿屋に泊つた。夜の外出は禁じてあつたが、何分、始めて來た古風なところだから、監督敎師の目を盜んで飛び出した。暗い町の何處に何があるんだかわからないが、兎に角俺たちは酒を飮んで前途を祝福するつもりで、地酒の瓶をぶら下げながら小城の城あとへ道を聞いて出掛けた。石垣の上から遠浚を見下ろし乍ら、大いに浩然の氣を養つてゐたら、石垣の後ろの草徑を提灯つけて通りかゝつた土地の男と仲間の一人が喧嘩を始めたのだ。俺たちの先祖は大抵が船泥坊か海賊だから、俺たちは氣が太い。小城の人間は葉隱れ武士の子孫だから鼻つ柱が荒くて、喧嘩ならいつでも引き受けると云ふのだから剛存だと思つてゐるうちに、提灯つけた男は袋叩きにされて逃げ出した。わけを聞いて見ると、俺たちが腰かけてゐる石垣は城主の何とか公の墓だと云ふんだ。無禮だから下りろと云つた文句が大仰で氣に食はないから張り倒したらしかつた。なるほど俺たちは、勝手も知らない城址にやつて來て、わい／＼騷ぎ廻つたんだから、城主の墓位は踏みつけたかも知れない。そんなことはどうでもいゝのだ。俺は俺がやることがあつた。それは島田をやつつけることだ。酔はないときは島田に對する恨みを忘れてゐるが、酒をのむと思ひ出して、憎くなるから、いつもかうだ。島田が俺を運動場へ引つ張り出したやうに俺も彼奴をどこかへ引つ張り出してやつつけてやらうと考へてゐた矢先に、先刻袋叩きにされて逃げた男が十人ばかりの破戸漢をつれて仕返へしにやつて來た。恨みは誰しも同じことだ。俺たちは散々な目にあつた。石垣の端にゐた俺は、背中を斬られて悲鳴をあげ乍ら芝生へころげ落ちた島田が、蓮池の方へどん／＼逃げて行くのを見た。あいつをやつつけるのは今だ。あいつは手疵を負ふてゐるのだ。俺は石垣を跳び下りて島田を追つかけた。しかし、すぐ見はぐれて、妙な岐へ出た。頭の上では入亂れて毆り合ふ聲がする。ふと俺は足もとを見た。岐が七曲りになつてゐる路の折れ目に鉢卷をした男が隱れてゐたのだ俺はその男が兇器を持つてゐるのを見るとぎよつとした。引つ返さうとすると、迷ひ子になつた島田がひよろ／＼と出て來た。うつちやつとけば島田は殺されるかも知れないのだ。俺は隱れてゐる男の後ろから夢中で突き倒した。それから先はよく

わからないが、大分たつてから氣がつくと、俺は島田を背負つたまゝ、運河の水の中にぼんやり蹲んでゐた。島田はへと〱になつてゐた。これで水が深ければ俺も島田も土左衛門になつたらう。島田の背なかの斑を見た俺は顚へ上つた。それがために島田は暫く寢込んでゐたが、俺たちは港の町へ戻つてからも、授業時間に裁判所から折々呼び出しに來られて迷惑したものだ。喧嘩の相手は小城の博奕うちだつた。俺の仇打ちはこうしてお流れになり、骨を折つて馬鹿を見たが、その代り島田は俺に頭があがらぬ。素寒貧の圭吉はその時學僕をしてゐた。そして俺にありもしない金を借りるやうに、島田は俺にない智惠を借りに來る。俺が逃げ場に困つて小城の運河へ跳び込んだのをなか〱沈着な計略だと感違ひしてゐるから、俺もなか〱沈着な顏をしてゐた。俺たちが日見峠の精米工場に押しかけて行つて、工場の窓硝子を滅茶々々に打ち壞したのも俺の智慧なんだ。島田が教室の壇の上に立つて、一資本家が米搗き村の全生命を脅やかしてゐる事實を滔々と說いたことがある。そのとき同じ級の者で、少なくとも木下尙江の小說の一つも讀んだ奴は皆出て來い。水車小屋の貧民に代つて天誅を加へてやるんだと、卓を叩いて悲憤した。妙な天誅があるもんだ。多分親爺にけしかけられたのだらうと思つたが、打ち壞すことが痛快なもんだから、そいつは面白い。俺たちは無産階級の社會主義者だから。資本家どもの横暴を默つて見のがすわけには行かないのだ。俱り乍ら、あんな舊式な水車だつてこの港の名所の一つになつてゐるんだから、古跡保存の上から云つても、大いにやらうと賛成した奴の顏を見ると皆うす汚ない貧乏人の伜だから感心したが、どう云ふ風にやらうかと云ふ相談になると皆駄目な男ばかりで、資本家を毆るとか、工場に火をつけるとか出來もしない議論を持ち出した。そんな無茶な相談をくり返したつて始まるものか、要するにあの工場の硝子窓を叩つ壞せばいゝのだ。二百圓や三百圓はするだらうからやり甲斐があると俺が云ひ出すと皆敬服して舌を卷いたものだ。その晩、日見峠の工場に近い崖の上の水車小屋に圭吉と島田と俺と、もう二人で閉ぢ籠つた。誰もゐない毀つた空き家だ。六疊の一間に腐つたぶく〱の疊が敷きつぱなしになつてゐた。俺たちはそこで工場の職工たちが、ひけて歸る時刻を待つた。屋根の片側が剝げ落ちてとび出してゐるまつ黑な肋骨の間から水瓜のやうな初夏の月が、ぽかんと出た。そこで俺たちは中川の磧に下つて米の空き俵へ礫をうんと詰め込んだ。崩れかけた水車小屋と精米工場との間に若杉とハゼの入り亂れた小さい林がある。そこまで引きずつて來た。こつちは樹の蔭で眞つ暗だが、工場は電燈で白く明るい。

俺たちはそこから、ありつたけの石を投げ下ろして工場の硝子は窓でも天井でも叩き壊したのだ。何が痛快つたつて硝子窓に石をぶつける位面白くて響きの冴えたものはなからう。全くはじめのうちは恐ろしい罪でも犯すやうな心持ちだつたが、お了ひにはいゝ運動になつて了つた。番人は狼狽したに違ひないのだ。しかし、破れた窓から、チラと顔を出したきり、よつぽど怖かつたと見えて引つ込んで了つた。しかし、流石に工場の前を通つて町へ戻る勇氣はなかつた。姿を見せると捕まるかも知れないと云ふので一晩中蚊帳のない小屋の中に籠つてゐた。そして打ち壊したあとの心配をしたものだ。なぎなたのやうな大きい山蚊がぶん／＼唸つて來る、一匹づゝ叩き潰しては壁になすりつけた。大ぶん減つたなと思ふと壁一面血だらけで、夜があけた。仲間のものは俺の考へが有効に行つたのを深氣に感心してゐるが、俺は捕まるのが怖いから石を投げやうと云つたのだ。

俺の追憶は煙管のやうに頭と尻だけ光つてゐる。島田と俺の昔噺もぞつとしないが、一通りすまないうちは煙が立たぬからも少し書くとすれば、即ち三人の卒業期がやつて來たことだ。卒業證書にありつくと學校の裏にある東山神社の事務所に監督教師を訪ねて暇乞ひをする習慣があつた。俺は東京へ立つ日に島田と玉吉を誘ひ出して、菓子折を携へて行つた。監督教師の板倉は大酒のみの國學者で泡盛ばかり飲んでゐる。木村隈太郎の發見によると、ギリシヤにある筈の高天ヶ原は此處にありと板倉が云ふのだ。その六疊の高天ヶ原に、明治二十幾年伊勢大神宮卒業以來の古事記見たいな面相で乞食みたいなドロ／＼の紋付袴で大あぐらを搔きながら泡盛の德利を前に据へて正眼にかまへるところは、いかにも神州漂渺としたものだ。その日も學校が休みだから頻りにやつてゐた。三人が交る交る告別の辭を列べると、どう云ふ間違ひだか、「諸君お目出度う。サア。膝を崩して一獻どうです」と俺に盃を持つて來た。每度のことだが、つい試驗前にも卒業生の送別會で、俺が酒をのんだのを板倉に見つかつて毆られたことがあるので、「お前はどうしても酒をやめないんだな。今度見つけたら最後卒業まぎわでも叩き出すから左樣心得ろ！」と怒鳴つた聲がまだ耳にこびりついてゐるから實はその、すつかり廢めたと嘘をついて尻ごみした。すると板倉は俺を慰めるやうに、「いや在學中は矢ヶ間敷いが卒業すれば構はんから遠慮なくやり玉へ」と云ふのだ。ところが實は此處へ來る途中で學校の廊下にあるユダヤ人のピヤホールですましたので俺の袖の中にはそこで買つたキング・ジョウジ第四世陛下が入つてゐる。汽車の中でやるつもりなんだ。すると板

倉が、「あ、さうか！　いよ〳〵やめましたかね。そいつは近頃感心だね。實は俺もやめたいとは思ふんだが、ついやつぱり駄目だねえ」と云つた。

「先生のやうに召し上つて、よく害になりませんね」

「いや、君、好きなものは害にならんよ。生理的の要求だからね」と板倉が勝手な理屈をつけた。酒をのむのは生理的の要求なんだ。誰の蟲がすくのも同じことだから愚図らなきやいゝのだ。俺たちは言ふだけのことを云つて了へば、こんな高天ケ原に坐り込んでゐる暇はないのだから、立ち上つて棚に上げて置いた菓子折を取下さうとした。コナン・ドイルの筆法を借りて云ふなら、もろ手を上げて抱へた箱を下ろさうとする拍子に、袖の中からキング・ジョウジ・第四世陛下が疊の上にごろ〳〵と轉げ落ちたのだ。瞬間に目を奪はれた板倉がゲラ〳〵とよろこばしげに笑ひ出した。もう、菓子折りなんかどうでもいゝと云ふ風に「そいつを一口くれたまへ」と言つたものだ。俺は間がわるいから、「さあ〳〵。」とすゝめながら、しどろもどろの辯解をすると、聞くのか聞かないのか、板倉は目尻を下げて饒舌り出した。

「東京へお出になつて國學でも研究しますか」「いゝえ。理學をやらうと思ひます」と俺は答へた。「理科？あれは君、ヤドカリが冬籠りをする貝殻を探し廻る商賣だらう？面白くないね！同じ海岸の仕事なら船乘りか船頭の方が國家のためになる！」と妙なことを言ふから「しかし私には文才がないから國學をやつたところで飯が食へませんよ」そして年中腥い泡盛にしかありつけないことになると問題だ。貧乏はしても酒は灘かスカツチと行きたいもんだ。重盛や泡盛と來ると源平以來鼻もちがなりませんと云ひたかつた。すると板倉は俄かに憤然としてかう云ふのだ。

「そ、それが惡思想にかぶれた證據です。金錢や生活それ自身は無下に劣等なものです。我々はそんな危險思想を伴ふ生活を超越しなくつちや！」

さう云ふ惡思想に取憑かれてゐる俺なんかと口を利くのも不名譽だと見えて今度は、島田の方へ向き直つた。

「あなたの將來の志望は？　國學ではないのですか？」

「私は電氣工學を研究するつもりです」と島田が反對した。島田は電氣工學でもやつて米搗き村の精米工場と米搗きの喧嘩でもやり直す了見だらうが、大將いやな顔をして、どうも眞面目でないと云つた。次は圭吉の番だ。流石にあなたも國學はやりませんかと云はなかつた。圭吉の法律學なんか、往來にて放歌すべからず、强盜殺人は死刑に處すべしで、一向靈魂の修養に

もならなければ、日本文化の足しにもならない。君、どうでも法律をやる氣なら周の禮樂からやりたまへ、昔は笛を吹いて民を治め、銅鑼を叩いて政を行つたが、あれは治國統民の極致だと云つた。根が氣の小さい學俠の圭吉だから、申しわけがありませんとしきりに詫つた圖は今でも忘れない。法律なんかどうせ人間が拵へたもんだ。人間がつくつたものに滿足なものがあるものか。靈魂の修養や日本文化の足しにはなるまいが、圭吉の小遣の足しにはなるだらうと思つて御機嫌よろしく高天ケ原に暇を乞ふた。俺は島田と圭吉をつれて惡思想の世界へ遁々の體で飛び出した。

「あんな奴は、少しどうかしてやらないといかんな」と島田が慨嘆した。すると圭吉が、「うつちやつときやいゝんだよ」と云つた。俺はそれよりも第四世陛下を飮まれて忌々しかつたので、「そんなこたあどうでもいゝんだ。ビールを飮まう。」と嘯いた。

「うんビールビール！　國學の亡魂はそのうちにビールの泡になつて消えるよ。」と島田が勇み立つた。俺たちは崖の下のユダヤ人のブエツトでまた飮んだ。段々醉つてくると、專門學校の入學試驗なんか念頭から消え去つて、「思想」がどうだと云ふ議論になる、お了ひにはまた木下尙江の小說が引き合ひに出されて社會主義の世の中になるかならぬかの問題でケリがつくのだ。島田は熊本の高等工業に入るさうだ。社會主義の電氣屋にでもなつて貧乏人を助けるつもりだらう。圭吉は高等學校へ俺のお供をするさうだ。法律でもやつたら貧乏人の味方になる約束をして別れ別れになつた。それから十年あまりになる。圭吉は大阪の自動車倶樂部で有名になつて小金をためて社會主義を忘れて了つた。俺は食つたり食はなかつたりで、今だにこの通りだ。何をしても面白くない。俺は世の中を買ひ被つてゐた。人間の生活ほど出鱈目なものはなくなつた。社會主義も理學博士になるも馬鹿々々しくなつて來た。死ぬことが出來ないから原稿を書いて生きてゐるだけの分だ。この二人の居處は解つてゐるが、島田の消息は絕えてない。熊本から一度手紙が來て、社會主義のために大いに勉强してゐるやうなことを云つたきり音沙汰がない。あの男のことだから學校を出て故鄕で働いてゐるだらう。長崎の人は滅多に他國へ出稼ぎしない氣風だし、年寄の親爺もあるからと思つてゐると、俺の同期生で、精米工場の硝子窓を叩きやぶつた仲間の一人が、いろんな仕事に失敗して俺のところへやつて來た。今は滿洲の鐵道にゐるが、俺の商賣をよつぽど割のいゝ樂なもんだと感違ひして文士になるのだと云ふから、忠告して追ひ返したことがある。その男の話に、

島田が港に戻つてゐるが、何をしてゐるか知らないと云つた。だから、この町にゐることは確かだ。差し結め島田の家へ行つたら、少し位の金の都合や宿の心配位は引受けてくれるだらう。夜があけたら十幾年ぶりに島田を驚かしてやるつもりで寢た。ところが翌朝になつて面喰つたのは島田でなくて俺だつた。飯をしまつて新聞を見ると俺の肖像が「長崎夕陽」に麗々しく出てゐるのだ。その肖像の下へ持つて來て、日本文壇有數の社會主義作家と大仰にやつけてあるから亂暴だが、故郷へ歸ることは誰にも内證だから俺が此處にゐる一件がばれる筈がないと思ふと不思議でたまらないが、よく〳〵考へると、しやむ丸が門司港を通過するとき、土地の新聞記者が二三人油賣りに來て船客の名簿を調べてゐたから、電報でも打つたのだらう。それは構はないが日本有數の社會主義作家は脅かしたもんだ。俺は作家に違ひないが、日本有數でも社會主義者でもない。昔はさうだつたが、貧乏をやりぬいて年をとるとそんな面倒臭いことは眞つ平だ。俺は絶望主義者だ。何もかも絶望だ。いや、そんな主義があるものかと云ふだらう、俺のやうなケチ糞な男には几帳面な主義や窮屈な文壇なんかありやしない。その俺がこの町へ演説に下つて來たと、勝手なことが書いてあるから迷惑してゐると、「大黑屋」の娘が一枚の名刺を持つて上つて來た。

「旦那さん。このお方がお目にかゝりたいと云つてお越しになりましたが――」と云ひ乍ら迂散な目つきで、俺を見てゐる。名刺には××分署の高等係島田喜八とあつた。島田喜八と云へば、俺が金の相談に行かうとする相手の男だから膽を潰して物が云へない。

「よろしい。お上げなさい。」と俺はやがて云つた。入つて來た男は正に島田なのだ。俺の顏を見ると、いやに嬉しさうな微笑を湛えながら、木綿の袴の膝を揃へて「久しぶりであります。私は島田であります」と、尖つた五分刈りの頭をぺこんと下げた。おかしな島田になつたもんだ。俺はこの男に金の無心を云はねばならないのだが、これは少々考へなければならなくなつた。すると刑事になつた島田が云つた。

「あなたが當地へお出でになつたことを今朝の新聞で拜見しましたが寫眞を見ると大層變つてお出になるから惑ひましたよ、へゝ」「さうですか」と俺は始めて口を切つた。社會主義一點張りの島田が、監獄へぶち込まれる代りに刑事の喜八になつた話は三國志の作者も跣足で逃げ出すやうな白晝の一大事件だ。今ごろは江の島あたりの海岸でヤドカリの空き巣でも狙つてゐる理學者の俺が、九段の立ん坊だつて思ひつかぬ滊船の只のりを企てるよりはよつぽど奇抜だ。島田の様子を見ると、金でも

拵へてくれさうな昔の俤は藥にしたくもない。世界中の刑事が持つてゐるやうな疑り深い陰險千萬な目つきで部屋の中をじろじろ見廻しながら、

「今度はどう云ふ御要件でこちらへお出になつたのでありますか？　新聞には演說のためにと書いてありましたが――やはりさうでありますか」と云つた。亂暴な舊友が久濶の言葉とも思はれぬ。俺は當が外れてムカツ腹が立つた。金の都合はどうでもならあ。俺は何よりも、警察の高等係になつた俺の舊友を見たくないのだ。高等と名乘つて出る奴ほど下等なものはないだらう。現金な話だが、こんな下等動物には用がないと思ふと一刻も早く追ひ返したくなつた。

「あれは間違ひでさ。格別用はないが來たくなつたから來たのです。僕は氣に向いた處へ自由に出掛る權利がないだらうか？」

「いや、それはもう仰有るまでもないことであります。そこで御歸京の豫定は？」と島田の訊問は型の通りだ。俺は何でも惡く取る。「だからさ。今云つたやうな氣まぐれな僕が、町へ着くや否や、いつ歸らうなんて考へるものでせうか？」

「いや大きに御尤も。嘸お疲れでありませう」と、流石に極り惡くテレてゐる。無愛想な俺の劍突を一一もつともに聞くところから按ずるにこの男、まだ出來立ての刑事だ。俺はかう言へば此奴も少し位は恥しがつて逃げ出すだらうと考へたので

「僕は君から出しぬけにこんな可笑な訊問をうけやうとは思はなんだよ。久しぶりに遭つて話もたまつてゐるが、口から出ないね。僕は君の變りやうがあんまり突飛だから面喰つてるんだよ。全體どう云ふわけで警察なんぞに勤めてるんだい。」と云つた。今頃は然るべき技術者になつて相變らず社會主義か何かやつてゐるだらうから、實は金の相談に押しかけて行くところだつたと言ひかけてやめると、俺の文句の中へ飛び込んで來て、何よりもそれを聞いてくれ、まだ良心の脈はあるんだと云はぬばかりに岡辻々々しく落ちつき拂つて饒舌り出したから失敗つたと思つた。喜八の一代記から云へば俺と別れた際から始まるのだ。島田の喜八はその時分、熊本の高等工業にゐたから實際は知らないが、熊本から舞ひ戻つて聞いたと云ふのだ。つまり日見峠の米搗き村に精米工場が出來て以來、部落の寂れやうは物凄いものだと云ふのだ。俺が東京へ立つ頃はそれほどでもなかつたが、或はさうかも知れない。するとその大恐慌のまん中に、たつた一軒だけ旨く運轉してゐる水車小屋があつて、それが島田の親爺の家ださうだ。仲間の不甲斐なさを嘲つてゐた頑固な爺さんのやりさうなことだ。島田爺さんの水車は工場の鼻ツ先で勇ましく廻つてゐる。「そいつは豪氣だね」と云ひ乍ら

俺は微笑した。伜の喜八よりやよつぽど偉いと思つた。

「しかし、考へて見ると不思議であります。」と刑事が首を傾げた。何が不思議だと聞くと、村々の百姓で、水車小屋に賴んで米麥の搗き上げを賴んでゐるうちは一軒もなかつたから一體どこから持つて來る仕事をやつてるんだらうと部落中の大評判になつたと云ふのだ。島田の爺さんに尋ねて見るが、いつもセヽラ笑つて默つてゐる。あんまりおかしいから、水車小屋の中を覗いて見やうと思ふが、いつも嚴重に閉されてゐたと云ふのだ。ところが、或る日、爺さんの秘密が到頭ばれた。以前やつぱり水車をやつてゐた精米工場の荷車挽きが、中川の磧で島田の爺さんにポカリと出會つたさうだ。滅多に外へ出ない爺さんが、小牛に俵を背負はせて、どこかへ屆けに行く途中らしかつた。「相變らず精が出るね。お爺さん」と荷車挽きが言葉をかける、と「あゝ。さうだとも。お蔭で仕事に不自由はしないよ水神さまの御利益だ」と云ひ乍ら行つて了つた。荷車挽きは暫く島田の爺さんの後ろ姿を眺めてゐたが、ふと、爺さんの留守に水車小屋へ忍び込んで見たくなつたと云ふのだ。他人の秘密は誰しも知りたいものだ。小屋の中を見れば村々から運ばれた俵には印がついてゐるからすぐわかると思つて、木戸をコヂあけて入ると小屋は蜘蛛の巣だらけのがらんどうと來た。たつた一俵の米俵には枯れ草がつめかけてあつた。勇ましく廻つてゐる水車の杵柱は、まつ暗がりに石の空臼を、こな微塵に碎いてゐたと云ふのだ。空臼を搗けば壞れるのは當り前だらう。荷車挽きは物凄くなつて飛び出したさうだ。頑固な爺さんは米搗き村の名譽の爲めに、ため込んでゐた金を居食ひしながらも空臼をついて精米工場に對抗してゐたのだ。刑事の話によると、俺達が硝子窓を叩き破つたのが一つの動機となつたわけでもあるまいが、水車小屋の持ち主たちがいよ〳〵廢業することになると、工場側ではお情けで石臼を買ひ取つてやつたのださうだが、島田の爺さんの石臼は滅茶々々になつてゐるから一文にもならぬ。爺さんは自分の秘密があばかれると棄て鉢になつて不埒な闖入者を呪ひ出したさうだ。だから村の人々は驚いて伜の喜八を熊本から呼び寄せたが、喜八が戻つて來るまでに、この頑迷な名譽保存者は氣がふれて了つたと云ふのだ。器具だらうが着物だらうが、手あたり次第に火をつける。お了ひには燒くものがなくて雨戸まで引つ放すものだから部落の連中が物騷がつて、爺さんの始末を相談してゐる間に小屋へ火をつけて燒いたのださうで、その後も喜八と二人で他所の座敷を借りて監視してゐたが、間もなく死んだ。そして喜八は無一文なんだ。その日の生活にも困るわけだが、何分この狹い古風な港に

は喜八に都合のよい仕事がなくて、ぶら／＼してゐるうちに人の世話で巡査にまでなり下り、しばらく立つと高等係に出世して、お蔭さまで、どうやら釜の蓋があきますと云ふ次第だから、大いに同情すべきところだが、生ひ憎俺には出來ない藝當だ。お前の困るのはお前がやり損じたからだ。俺がどんなに困らうと俺の勝手に困るのだから、俺がどんな芝居を打つか見物をしてゐりや澤山だ。俺は俺が呻きながら血眼になつて藻掻きながらやつてゐる姿を、他人のやうに見物してゐる。死んだらそれまでの話で、食ひ物にありついて死ぬのが日のべになつたところで大して嬉しくもない。だが、俺も世間並の人間だから、曲つたことは大嫌ひだ。苦痛は道樂にやつてる狂言のやうな氣だから、お前の苦痛なんか屁のやうだ。お前が困つてゐるのを見ると、もつとやつて泥坊になるところまで漕ぎつけて見るがよからうと忠告するだらう。そして泥坊になつたらお前は俺よりも値打ちのない人間だと云ふ位の冷酷な男だから同情やお慈悲は以ての外だ。だから、いゝ加減食ふに困つて妙な眞似をする奴だと、開闢以來の知己だらうと自分の親だらうと嘲りたくなるのに不思議はあるまい。だから、俺のことを世間では狼だと云ふかも知れない。俺は同情して貰らひたくないから同情もしないのだ。だから、食ふに困つて泥坊よりも下等な商賣人になつた刑事の島田が、どんな哀れつぽい話をしやうと賛成は出來ない。たゞ島田と云ふ男は昔腕力家で今日俺よりも愚劣な人間の屑だと考へるより外に仕方がなからう。話はこれでお了ひだが、饒舌つてゐる間が實に面白い。水車小屋とか精米工場とか米搗き村の名譽とか社會主義者だつた俺たちの名前が舌に乘つてぺら／＼と飛び出すとき、刑事の島田は警察の役人だと云ふことも、世間から爪弾きされてゐる刑事だと云ふことも胴忘れして了ふのだ。話し手の態度は全く警察ばなれしてゐる。大日本社會主義者列傳に出て來る悲愴な男の面貌に髣つて來るのだ。そして妙な風に肩を怒らして亢奮してゐる。奴さんには、これほど尊い思ひ出が、ほかに一つもないのだな。精米工場の硝子窓を叩き壊した事件が唯一の誇るべき追憶なんだな。その他のことは恥しくて云へないことばかりだらう。その尊い思ひ出にすがりついて心を躍らせてゐるのだ。いつも忘れてゐることが俺を見て浮んで來たんだらう。恥知らずめ。俺に逢ひたさや昔の島田らしく辭職して來い。小說家の最も貴い道德は小說を書かないことだ。書かずにすむなら俺も書かない。刑事の最も貴い道德は舊友を訪問しないことだ。訪問せずにすむなら訪問いたしませんと云ふかどうだと、念のために門からと思つて島田の額を穴のあくほど睨まへると、

「何卒私をさうじつと見ないで下さい。兎に角私は只今の勤めを決してい丶とは思ひませんし、こんな仕事は全くつまらんものであります」と云ひ出した。

「そんな話はよさう！何のために君が訪ねて來たんだか、僕は實際のことを知りたいのだ」云ふまでもなく、新聞に日本文壇有數の社會主義作家が演說に來たとあるから、宣傳でもされては大變だと思つて演說の願ひ下げに出頭したのだらう。すると島田は辯解した。

「ヘア。それはその、新聞を拜見して昔のことを思ひ出すと急になつかしくなつたのであります。その後どんなにお變りなすつたか、それを知りたくなつたのであります。私はあなたのお書きになるものは、いつも讀んでゐますから、一日ゆつくりお目にか丶りたかつたのであります。決して誰の命令を受けて來たわけではないので、何卒、誤解なさらぬやうに。こう云ふ勤めはしてゐますが、私も、その、例の、その、主義には至つて贊成の方で、へ丶丶」と尻の方で胡麻化してゐる。

「それがほんたうだとすると僕は今までの冷淡な態度を後悔しなければならんかなア」

「いや、いや、決してそんなことは」と島田がうろたへて云つた「先生の御名聲は當地にまで轟いて居りまして、學校で每月やります校友謝恩會はいつも先生の噂で持ち切りであります、」私はもう先生のやうな名士にお會ひしただけでも非常に愉快であります。實際私どもは母校の誇りと考へて居りますので」

「あなた」が先生になつた。東京の車夫だつて俺には旦那と云はない。して見ると、昔に比べて借金や掛け取りに噓をついて追ひ返すのが俺も見違へるほど旨くなつたやうに、島田も大分修養を積んでゐる。俺の名聲が當地まで轟いてゐる位では心細いが、學校の校友謝恩會で俺の話をするなんざ島田の傑作だ。」俺も學校のことは夙の昔に忘れてゐるが、校友會の名簿を見ると、俺は十年前から職業なしで行衛不明になつてゐる筈だ。俺は刑事風情からお追從を云はれるのはこれが皮切りだから妙な氣がした。

「果して愉快かな？」

「全くであります」

「僕は不愉快だよ！」

「えへ丶丶。御冗談でせう」

「僕が不愉快だと云ふのに何が冗談だ、へ

「ハ、ア」と島田は呆けてゐる。

「僕は自分の舊友が刑事になつてるのを見るのが不愉快だと云ふのさ。僕にも君のやうな經驗がある。文學者を始めた頃、將

視廳から僕を傭ひに來たよ。こゝに百五十圓の金が遊んでゐる。それを提供するから僕に來て働いたらどうだと云つたよ。今云つたやうに、將來文學で飯が食へるかどうか解らないから百五十圓貰つて文學と緣を切つた方がよつぽど心强かつたが、きつぱり斷つたもんだ。考へて見たまへ。その時僕が承知してゐたら、今頃僕は世界中の人間が皆泥坊か叛逆者に見えて年中ビク／＼してゐなくちやならないんだからね。いやな商賣だぜ」

警視廳が百五十圓差し上げますと云ふ文句は、俺がどんな傑作を書いたつて、この位島田を敬服させる力はなかつたらうと思はれるほど、緊張して、かしこまつて大いに襟を正しうして俺に無上の敬意を拂つたから、度し難い奴だとは思つたが、この新派もどきの獨白がよつぽど利いたと見えて、俺が島田の變節や無自覺をどんなに痛罵しても一向に怒る樣子もなかつたから、少々可愛想になつて來た。考へて見ると、誰が何をしやうと銘々の好きずきだ。泥坊が金持ちの着物を一枚追ひ剝ぎするのも、この暑いのにいくら有り餘る着物だつて十枚も二十枚も重ねておいでなすつちや、體に毒だと心配して盜つてやるんだらう。その泥坊をふん捕まへた刑事の肚に立ち入つて見ると、何もさう苦心惨憺してひとの物をかつぱらはなくつたつて樂に食つて行ける處があると云ふ親切から、二つ三つ毆りつけて監獄へ叩つ込むのだらう。して見ると、何もかも意志の疏通を缺くから面倒なことになるんだと俺は決して考へたわけではないが、誰が何をしやうと銘々の御隨意だからよさゝうなもんだが、現在俺の動靜を探りに來てゐる筈の島田を見ると、舊友だけに悟れなくなつたのだ。親しみどころか、神佛に誓つて輕蔑と憐憫と憤怒だ。かうなると話も糸瓜もない。刑事は變な顏をそむけてこそ／＼と退散した。部屋を出るときにかう云つた。

「お疲れのところ此の上、お邪魔するのも何ですから、またそのうちお目にかゝるといたしまして今日はこれで失禮しますが、つきましては甚だ御迷惑でせうが、御歸京の時日がおきまりになりましたら、御見送りしたいのでありますから署の方まで一寸電話でもいただきたいのであります。また御逗留中に御講演でもなさる節は、さう仰有つて下さるとまたいろ／＼御手傳ひいたしますから、何卒惡しからず」

それ見ろ。演說の手傳ひは、打ち壞しと檢束のことだらう。御送りは護送の間違ひだらう。だから、舊友でも油斷が出來ない。相手になつてゐたら三日でも四日でも俺の側にくついてゐたんだ。この男に金の工面を賴まうと思つてゐたんだから世の中のことは御先まつ暗だと思つた。舊友だと云ふのをいゝ口實

に馴れ馴れしく近づいて失敗した島田は屹度俺を社會主義者だと思ひ込んでゐるに違ひない。平生は愚にもつかぬものばかり書きなぐつてゐるが、俺もなか／＼食へないぞ。社會主義の面を冠つて、差し支へなければダンをして見せらア。態ア見ろ。も一度やつて來たら、向ふ脛を叩き折つてやるから。――さう云つて力んで見たが、差し當り困るのは金だ。下手な眞似をすると無錢飲食で引つ張られるかも知れない。そんなことになると、お婆さんの佛に申しわけがない。自分の故郷に歸つて金の細工に行き詰るやうでは、名士も日本有數もお了ひだ。骨壺は片づけたい。酒はのみたい、蟇口には東京の電車の切符が一枚あるきりだから流石の狼も往生してゐると島田の名刺を持つて來た宿の娘が、またやつて來た。今度は七八枚も持つて來た。皆知らない人達だから用件はわからないが、旅行をするといつも若い文學者が押し寄せて來る多分その口だらうと思つて「よろしい、お上げなさい。伺ひませう」をくり返した。ところが案の掟さうだつた。知らない人たちの中には俺の伯父さん位の年配な顏も見える。知らない顏を揃へて狹い部屋の中へ、ぎつしり詰つた。俺は若い連中が好きだから、家に居る時でも旅の宿でも喜んで迎へる。面白くもない仲間の文士と仕事の話をするよりは氣が變つていゝ。第一、無邪氣で突飛でトンチンカンで遠慮がない。俺が眞實のことを言はうが間違つた議論を聞かせようが、相手は感心してゐる。さうかと思ふと中には俺をやつつけにかゝる猛者が現はれて來るから、金はなくつても賑やかで消化の助けになる。この連中の申込みは俺の歸省を機會に何か饒舌つてくれと云ふのだ。どこでもおきまりだが、俺はこつそりやつて來て、こつそり引返す考へだから一應斷らうと思つたが、俺の頭にふとアヴエルチエンコの「騷ぎ」が浮んだ。それは二人の泥坊がお互に疑り合つて警察に相手を密告する話だ。俺はこの小說から思ひついて、一人のスパイが味方の間諜をやる話を突差の間に考へた。すると島田の顏が俺の目先にちらつくのだ。

「やるとすると何處でやりますか」

と俺は聞いた。

「皓臺寺の座敷ではどうでせう」

と背廣の男が云つた。その寺に俺のお婆さんが行かねばならないから、少し具合が惡いと思つて

「こつちには公會堂はないのですか」

と云ふと、

「あるんですけど、活動や議員の選擧演說をやつてますので都合がつかないのです。」

と今度は一番年かさが發念がつた。この仲間の大將だらう。結局は、皓臺寺よりも幾分小綺い山の手の教會堂がよからうと云ふことになつた。するとこの頭どりが妙な念を押すのだ。

「甚だ失禮なことを申し上げるやうですが、最近この町では社會主義の取り締りが嚴しいので、お話を願ふことが出來ますのは大變有り難い仕合せですが、その方はちよつと――」と云ひ難くさうだから、多分この人たちも日本有數を讀んで心配してゐるのだらうと思つたから、俺は正直な話が、社會主義者でも何主義者でもないから安心して下さいと云ふとよろこんで引き上げた。匆々として來り、匆々として去り、肝腎な講演賃の問題を忘れてゐるから吞氣な話だが、そんなことはどうでもいゝのだらう。歸りがけに短冊と色紙だけは型の如く何か書いてくれと云つて置いて行くから正直だと思つた。これが俺の故郷だ。

俺が演說をすることになれば、日どりがはつきりしてゐるから島刑もやつて來るだらう。そこで俺の目的はまたやつつけてやるのだ。俺はお婆さんの骨壺を一先づ寺の坊へ預けて、埋葬の手續きや、人足の費用を當つて見るつもりで出掛ける仕度をしてゐるうちに、また金の問題が氣になる。どゝのつまり、自動車會社の圭吉に電報をうつて送つて貰ふより外に方法がないことに氣がついた。それから出掛けた。波止場の大通りから電車の線路に沿ふて寺町へ歩くのだ。十年まへには隨分古風な町々が、新らしく通じたボロ電車のために縱橫無盡に引つ掻き廻されて哀れに荒廢してゐる。こんな立ち腐れの町に電車なんて生意氣だらう。隅から隅まで歩いたつて三十分もかゝりやしない。だから俺は十分位で皓臺寺前についた。門前の葬儀屋で相談をすると五圓はたつぷりかゝりませうと云つた。お寺の坊主に伺ふと、お經料はお思召しだと云つた。お坊に出掛けて墓の樣子を聞きす糺と驚いた。

「そんげん墓はありまつせんばい」と來る騷ぎだ。自分のものなら時には良心まで賣り飛ばすが、俺はまだ先祖の石塔を賣つたおぼへはないから、たしかにある筈だと云つても、お坊の主人は、依然として、ありまつせんばいと云ひ張る。

「墓がないとすると、どうなつたのでせう」

「墓を買つた人があるからでせうたい」

「しかし賣つたおぼへがないとすれば」

「さうですなア。一體あゝたは何處の國からおいでなはつたのし?」

「十年ぶりに東京から來たのです」

「あゝ。十年も墓をかまひつけなかつたけん大方無緣になつて權利をとり上げられなはつたのぢやろたい」と云ひ乍ら新聞に

出來た墓のカタローグを見せたが、なるほど俺の先祖の名が消えてゐる。人の留守に大方無縁で賣り飛ばす法があるものか。愚闘々々云ふたらお婆さんの骨壺を叩きつけてやるから、そのつもりにしてゐろ。兎に角俺は一通り丘の墓地を見廻つて來るからと云ひのこしてお坊の裏から狹い石段をのぼり始めた。下から上まで五百段もあるだらう。兩側には大きな楠が骨の汁を吸つてもく／＼と太つた翼をひろげてゐる。三百段位のところから右へ入ると廢港が一目に見ゆる。俺の先祖はそこに、紅毛船の燒き打ちの夢でも見ながら眠つてゐるのだ。足もとには中庵の泉がゆれてゐる。目のとゞく限り、苔むした卵塔が俺たちの來る日を待つてゐる。中庵の前まで一氣に駈け上つた。ところが、堂の横にねてゐた乞食のお婆さんがムクリ起き上つて、何でもいゝから恵んでくれと云つた。そのお婆さんの姿が俺の佛によく似てゐるからぞつとした。やりたいけれども何にもないから勘辨してくれと云つて一目散に逃げた。するとその乞食のお婆さんがいかにも恨めしさうに俺を見た。俺の元氣はげつそり落ちて了つた。俺は骨になつたお婆さんのことを思ひ出したのだ。かれこれ五年まへ、顔は疵だらけ、手足や腰の骨迄ボリ／＼疼くから陸軍糧秣の草薙ぎを、四五日休んだことがあつた。すると三日目には食ひものがなくなつた。俺のお婆さんは盲目で癇癪もちだから、腹が空つて辛棒が出來ないと、お前が悪いと云ひながら、俺を毆るのだ。そのときも俺を箒でなぐるつもりで、寢床をポン／＼叩いた。ところが俺は體が焦げるやうに熱いから四斗樽に水を汲んで浸つてゐたのだ。お婆さんはそれを知らずに、いくら毆つても手應へがないのでお了ひには怒鳴り出した。

「清！　清！　どこにゐるか」

俺は四斗樽の中から、こゝにゐると云つた。するとお婆さんは今までの運動が無駄になつたので、白まなこをむき出して怒つた。

「わしがこんなに腹をへらしてゐるのがわからんか。親不孝め！」

だから俺も四斗樽から飛び出して怒鳴り返してやつた。

「俺だつて腹はへらい！」

「そんなら、どうかするがよかろ！」

「毆つたつて怒鳴つたつて始まるものか。どうもこうもなりやしないから弱つてゐるんだ。くたばり損ひめ」

しかし俺も我慢が出來ないから町内の救世軍に飛び込んで、もつと楽な仕事があるなら、いくらでも前貸をして世話してくれと云つた。門の柱には「困つた人はいつでもお出なさい。士事

をお世話します」と云ふ看板が出てゐるんだ。そしてまんざら知らない顔でもないのだ。ところが士官が出て來て、生ひ憎今仕事がないから、そのうち探しとくからまた來いと云ひ乍ら、俺の風采をじろ〳〵見てすぐ引つ込んだ。大嘘つきめ！　太鼓を叩いて讃美歌を唸つてゐりや役目はすむと考へて看板なんか出さなけりや、わざ〳〵恥掻きに行きやしないのだと思ふと無暗に腹が立つて門を出るとき看板を引つぱづして逃げた。家へ歸るとお婆さんがゐないから何處へ行つたのだらうとは思つたが一向氣にしないで四斗樽の中へ浸つてゐると、皺張りの顔を米粒だらけにして戻つて來た。お婆さんは懐ろから手拭に巻き込んだ握り飯をとり出して俺に食へと云ふのだ。お婆さんは俺に無斷で何處から握り飯を貰つ來たのか、死ぬまで隱してゐたが、俺の額からは冷汗がにじみ出た。いくら旅の空だらうがあんまり見つともないと詰つた。するとお婆さんは大きに悟つて、恥も外聞もあるものかと云つた。佛の恥をさらすやうだが、お婆さんは俺を可愛がつてゐたから恨みやしない。乞食を見ると、俺は何だか變になつて來た。息のある間はこんな具合にひどい目に合せて、骨になつてからまで行き場に困らせて孫の顔がたつかと思ふと、早く先祖の安息所を見たいのだ。そして見つかつた昔の墓は意外にもちやんと殘つてゐたから有り難かつた。たゞ周圍の墓所の芥捨場になつてゐるだけだつた。俺の手一つで三日かゝつて掃除をしても片づくまいと思はれるほど荒らされてゐた。水筒や花立てや爆竹の殻や卒塔婆や破れ提灯が推高く積んである。しかし、俺は安心して引返した。二三日のうちに手を入れたら、お婆さんだつて戸惑ひせずにすむわけだらう。俺はお坊の主人の顔を見たくないから丘を横つて高林寺の門前へ出た。そこから俺の生れた家まで一町たらずだから序に行つて見ると、家はなくなつて、八幡神社の庭園にくり込まれてゐた。昔の姿は一つもない。俺が詩人だと、この邊で哀れな述懐の一くさりは惜まないのだが、素人ではあまり映えない。俺は今晩山の手の教會堂で島田征伐大演説の火蓋を切らねばならなかつた。そこでまた波止場の「大黒屋」へ引つ返すのだ。宿の帳場へ入ると、まことに相すまないやうな蒼い顔をしたお神さんが、俺のバスケツトを下げて飛んで來た。

人間の顔も、うつちやつとけば法圖なく伸びるが、少々伸び過ぎたお神さんは、俺を見て不快なことを云ひ出した。

「あの、旦那さん。ほんにすまんばつてんかちつと都合のあつてですけん、宿ばお斷りしたかとですばい」

ですばいも糞もあるものか。九州の土人がいくら野蠻だつて、こんな得手勝手な相談はない筈だから、俺は面喰つて默つてゐ

ると、
「ほんにすまんばつてんか、わきの宿屋においでなはるこた出來まつてんかのし、」と云つた。
「どう云ふわけですか？」
「ちつと家内に取り込みが出來ましてのし。田舍から急に人が來ますたい。」
このお神さんが昨夜俺の部屋に宿帳を持つて來て、家内は自分と亭主と娘の三人ぐらしで無事息災にくらして居ります。宿は汚ないが呑氣だから何卒御ゆつくりと云つたのだ。
「藪から棒にそんなことを云つこなしにしやうぢやないか。お神さんは嘘をついてるんだらう」
俺は腹が立つから開き直つて詰りつけた。するとお神さんは困り切つて「いゝえ、あゝた、ほんとですばい。」と云ふのだ。察するところ俺の留守に警察あたりから俺をとめてはいけないとでも脅かしに來たんだらうと云ふとあり相な顔つきで、そんなことはありません、只うちの都合だと隱してゐる。いづれにしても、俺は此處を出ると行き場に困ることや、宿代を拂ふわけにも行かない事情や、電報を打てばどうにかなることまで、恥しいのを我慢して打ちあけた。するとお神さんは迷惑さうに、そんなら荷物のバスケツトだけ預るから直ぐ電報を打つて金をつくつてくれ。電報料は立て替へて置くと云つた。虫のいゝ女だ。大阪の圭吉に電報を打つて戻つて來ると、今朝來た講演會の主催者が新顔を加へてやつて來た。木綿の袴に垢じんだ羽織の男がくれた名刺を見ると、「長崎夕陽」文藝記者とあるから、俺を日本有數の社會主義作家にしたのは多分この男だらうと思つて尋ると自分ではない、あれは門司港の支局から原稿で送つて來たのだ、全くうつかりしてゐたのでお氣の毒でしたとすましてゐる。何だつてお氣の毒な手合ひばかり揃つてゐるんだ。その「長崎夕陽」が講演會のプロパガンダも仕度も出來たから、よろしければソロ〳〵教會堂へ出掛けませうと云つた。時計を見ると三時ちよつと過ぎで、三時半に始まるのだから、ゆつくり構へてゐられないが、講演會の騷ぎでもなからう、しかし約束として、止むを得ないときはこの連中に事を分けて便宜を計つて貰ふつもりにした。かうなると不思議に落ちつくものだ。俺はお婆さんの背嚢を抵當に大黑屋を出た。戰爭に勝つなら突喊だ、汽車で行くなら急行だ。俺の文章はこの邊で拔き手を切るから早くなる。早くなる前に電報のことを考へると、三時に打つたから六時にはつく。旨く運べば十時には金が來てお婆さんは浮ばれる、俺はのめる。のこりは馬面のお神に叩きつけても苦しくないのだ。俺の考へによると、お神はたしかに、その筋

にそゝのかされて俺を追ひ出したのだ。その筋は島田の報告を信用したのだらう。して見ると島田はほんたうに俺を社會主義の宣傳者と睨んだか、それとも俺の嘲弄に對する個人的の復讐にやるのか。どつちみち俺を迫害するやうな見當違ひなその筋もこの筋も木偶の坊にきまつてゐる。そんな警察なんざ今に免職だらう、大波止から支那町へ出て、昔その邊にユダヤ人のピヤホールのあつた崖下を通ると、左右の電柱に「西九州文藝講演會」と云ふ廣告ビラが張つてあつた。「凧揚げ大會」や「――立候補應援大演說會」のビラの中に割り込んで目につく。これが俺の話の集りなんだが、俺一人かと思ふと、俺の前座に「煩悶と禮拜」「勞働文學と貴族文學の價値批判」と銘を打つた二人の出演者がある。一人は女だから奇拔だ。一番最後に「ある諷刺」と俺の名が見えた。そのある「諷刺」の腹案がどうにか纏る頃、俺たちは大浦海岸の稅關の後ろから「ナガサキ・ホテル」の坂を登つた。俺のゐた中學校の石垣の下を右へ折れて山の手の眺望臺をよぎつた芝生の中に山手教會堂がある、昔からある。コリント風の石づくりに礎から屋根の上の避雷針まで青蔓にからみつかれた建物だ。ちよつと見ると倫敦塔の備前燒に苔の生えたやうな時代ものだからすぐわかる。この家がよく借れたもんだと感心すると、「なにあなた。私どもは毎週こゝで聖書文學の研究をやりますから堂主とは心安いのです」と連中の一人が說明した。すると例の仲間の大將らしいのが、「今ばんお話を願つた△△△女史が我々の同志で土地の新し婦人會の幹事をてゐられる堂主のお孃さんですから、氣やすく講堂を貸してくれますよ」とつけ足した。

「いくつ位の方ですか？」

「もう三十位でせうね」と大將は絕叫した。三十でお孃さんなら、よほど運の惡い宿命論者だらう。會はないうちから氣の毒な氣がした。「長崎夕陽」の註に從へば、△△△女史の後をうけて饒舌るのは、この町の吳服屋の若旦那らしい。そこへ俺が顏を出すと三題話の種になるだらう。而もこの三十歲の獨身女史と吳服屋の若旦那がこの町きつての天才で、俺の書いたものなら欠かさず讀んでゐるさうだ。俺の愛讀者だけに異彩を放つて違つたもんだと感心した。會場の入口に俺たちの到來を待つてゐた脊廣の紳士が、丁度胸に刺してゐる白薔薇のやうなにやけた格好で迎ひに出て來た。様子を覗ふと、あまり廣くない講堂は男や女で殆んど一杯になつてゐたから流石に有難かつた。

「一體何人ぐらい入れるのですか」と尋ねると白薔薇の紳士は儼然として「五百や六百はゆつくり入れます。さあ。何卒。この薔薇の花をおつけ下さい。私どものソサイテイの紋章です。」

と云ひ乍ら、自分の胸から一つ外してくれるから薔薇紋はいゝ。回々教も悪くないとお世辭を云ふと、さうですとも第一匂ひが高潔ですとぬかしたから凝つてゐる。丁度この薔薇紋をつけた獨身女史が仄暗い演壇に立つて何か饒舌つてゐた。いづれ後ほど俺に引き合せると云ひ乍ら一と先づ連中は扉の蔭に落ちついた。そして獨身女史の話しぶりに傾倒した。連中に聞くと、何でも戀愛の永久性について、彼女の身の上話をやつたところださうだ。更に追問すると、彼女はいかにすれば自分の失戀の度數を一一數へ上げて煩悶と悲哀とに堪え得るかと云ふ度量と能辯とを合せて聽衆の前に陳列してゐることになるので、醜婦失戀。敢て一向珍らしくないのだが、彼女の告白は此處でなければ、見られない圖だと思ふと、後で俺に彼女の苦悶について御垂敎にあづかりたい覺悟ださうだから、うかつに旅へは出られないことになつて了つた。秋風落莫として行人旅に愁ひは西行法師の文句だ。醜婦悄悴として愚人故郷に惱みさうなのは俺の胸中だ。俺の番がすんだら逃げ出すに限ると思つて謹聽してゐると、なるほど自分の戀物語を臆面もなくぶちまけるほど膽の据つた女だから圖迂々々しいのは當り前だが、お了ひぎわになつて、ヨハネ傳の第十四章をひいたりマタイ傳の六章を十九節から廿四節まで朗讀して悲しむ人々よ。こゝに神の智慧あり。悶ゆる人々よ。こゝに慰めの王法ありと結んで降壇するかと思ふと、暫くの間冥想に耽るのだ。手數のかゝる靈魂もあるもんだ。それがすむと大家の若旦那が演壇に登つて、勞働文學と貴族文學の優劣を論じた。結論はつまり勞働文學は眞劍だが面白くない、貴族文學は遊戲的だが面白い、文學は遊戲だ。だから値打ちは後者にあると云ふ風な三段論法で簡單にきめつけて貴族文學の肩を持つて引き退ると、俺の前に腰かけてゐた職工風の青年が俄かに立ち上つてやつて來た。そして俺が日本有數の社會作家かと聞くから手つとり早く左樣だと答へると

「私は三菱造船所の機械工山本です。私は今の辯士の演說に反對な意見を持つてゐるんですが、ちよつとでもいゝから饒舌らせてくれませんか？」と云つた。飛び入りだ。

「さあ。僕は構はんが、幹事の方に一應掛け合つて御覧なさい」

すると機械工の山本某は、たつた今降壇した呉服屋の若旦那をとりまきに行かうとする連中を捉えて頻りに談じ込んでゐたが話がついたかどうか兎に角、山あらしのやうな勢ひで說敎壇へ驅け上つた。そして中學校の辯論部長みたいに肩肘を突つ張り乍ら、古風な勞働神聖論から始めた。多分この男は三菱の造船所で始終稽古してゐるものと見えて、いかにも澱みなく滔々と啖呵を切るのは、あつぱれだが、だん／＼進行して行くうちに

今度は勞働者の生活が苦痛で悲慘で可哀さうだと妙な愚痴をならべた。しかしとどの詰りどんな結論になつたかと思ふと、だから勞働生活を取扱つた文學は面白くないかも知れないが、たゞ面白い面白くない底の批判で、遊戯以上の意味を持つてゐる藝術價値をきめて貰つちや迷惑だ。さうだ！（と機械工山本は叫び出した。）文學は遊戯ぢやないのだ！生活は遊戯ぢやないのだ。俺たちは女房の一人も飼つて置けないほどの極貧だ。纏ふ着物は破れ。寒風は骨を刺す。と云ひ出したときに、聽衆の中から法螺貝のやうな罵聲が飛び出した。

「戸町の肉蒲團はどうしたのだ！日本一の横着者め！」

戸町と云ふのは、船頭相手の遊廓なんだ。すると聽衆は崩れるやうに笑つた。婦人たちは顏を赤くした。一刹那に凝固した沈默がやつて來た。度膽をぬかれて突つ立つてゐた熱狂辯士が今の叫び聲がやつと聞えたやうな風をして、

「何が日本一だ！」と云ひかへした。「やれ〳〵！」と云ふ聲があちこちに起ると、白薔薇の紳士が躍氣になつて制するのだ。空氣は險惡になつて來た。さて、俺はこの三人の辯士の姿を髣髴させるために餘計な手間を喰つてゐるのではない。本尊の俺が何故一口も利くに及ばずして會堂を出なければならなかつたかと云ふ事柄を説明するための順序なのだ。

「默れ！何が肉蒲團だ」

と機械工の山本がまた怒鳴つた。

「おりろ！馬鹿野郎」

と聽衆の中から別の聲が飛び出した。罵倒の掛け合ひが一分間もつゞかぬうちに、同じやうな職工服の男が現はれて機械工の山本を引ずり下ろさうとした。會場は騷がしくなつた。そして今まで全く氣がつかずにゐた窓際から一人の警部が出て來たかと思ふと、辯士の降壇を命ずるのだ。

「あの警部は臨檢に來てるんですか」と俺は薔薇の紳士にきいた。

「どうもさうらしいのです。公開講演だから來たのでせう」と紳士は蒼くなつて教壇の方へ出掛ける。

「大きにお世話だ。俺れは云ふだけ云つちまや自然におりるんだ。」と機械工が反抗した。大きにお世話な警部だと思つて成り行きを見物してゐると、今度は警部と喧嘩を始めた。機械工に應援する奴もあれば、警部の味方をする奴もゐる。最後に來たのが「解散」だつた。「中止！」そして「解散！」。文句を云つたつて始まらぬ。下手に頑張ると一緒に來いと來る。いやだと云へば無理に引つ張つて行くだらう。そんな奴の相手になるものか。俺の演説はお蔭さまでお流れだ。怒つたり悲觀したり

出來るだけの不愉快な表情をつくつて會堂を出て行く折角の聽衆と一緒になつて、警部に引きずられて行く機械工山本某の悲憤慨嘆を眺めてゐるより以上に悧巧でないのが幹事の連中なんだ。しかし俺たちはこの尊敬すべき機械工が何だつたかと云ふことを間もなく發見した。一生懸命になつてると下手な役者が一番旨くやるが、あまり旨すぎると思ふと、事件は意外な解答を與へた。俺がクウプリンなら此處でかう書くだらう。「正直にして猶且つ多少間の抜けたる東京下りの平民文學者大泉黒石氏は、西暦一千九百二十年四月某日、山本某と名乘る職工服の一刑事の狼藉によつて、哀れむべき舊友島田青八の征伐演説の不幸より救ひ出されたのである」。何のことはない始めから仕組まれた狂言なんだ。刑事の島田は俺の講演會をぶち壞すことに於て成功したと云はねばなるまい。

「狼」は穽にかゝつた。

(この同情すべき私の歸郷記は、これでお了ひになるのではないが、この邊で一と先づ打ち切りたいのである。何故ならば、私はお婆さんにとつては二回目のお盆が巡り來たので思ひ出して書いてゐるうちに、お盆は過ぎ私の氣は遂に拔けた。暑さも寒さも彼岸までだ。ほとけの話は于蘭盆に限る。先を書くなら來年の夏だ。假象の別莊から實相の本宅へ引つ越して大日法界の色は無想三昧の堂に居眠りをしてゐる親愛なる盲目のお婆さんの遺骨は此處に永遠に私の側を離れて港の寺の土の下に葬られて了つたと云へば、尻切れ話に申しわけがつくだらう。その證據には私の家族が一人へつて助かつたとよろこんでゐる私に聞けば大低わかる。)【完】

生者、死者

木村莊八

上

一

×月×日、今日は妻の子供の時からの「友だち」、――光枝さんの葬式の日だ。が、葬式のことは書きたいと思はない。亡き光枝さんのことも書きたいと思はない。只、「書きたいと思はない」ととり分けて書いておきたい。と云ふのは、つまり實は光枝さんなり光枝さんの死なりに就ては、書きたいこと、否、思はせられることが、一方に澤山ありすぎる證據である。然し只それは今思ひたくも思はないし、書きたいとも思はない。それで特にそのことを斷つておきたい氣持になる。

……全くかう書き出してもあの光枝さんのことをそれだけ思ふと、たしかユーゴーかゞ云つたと思ふ、「世にミゼリーは無智と貧困とが」無くならない間ある、とか云つたあの言葉を思ひ出す。光枝さんはその兩方に實に氣の毒に、餘り當つてゐた。が、今は思ふのは止めやう。

光枝さんのことを思ふと只私情が辛く氣の毒なばかりでなく、一種公憤とも云へる思ひまで痛く、陰鬱に刺戟を受けるので、今後その刺戟なり思ひに堪へられる有り得る氣分ではないのである。何か他のことを思ひたい。早く云ふと氣を變へたい。

――今日寺の歸りには思へば變な經驗をした。指ケ谷町の電車通へ出る、あの横町の五六軒目に先から一軒古道具屋があるのだが、前から植物園などへ行くとよくのぞいたことがあり、はいつて見たこともある。只、一度も買つたことはなかつた。そこの主人がどう云ふ人かも知らなかつた。

今日はそれをつい立ち入つて見て了つた。

あの家は一體哀れな家だ。それに汚ない。あるものと云へば全く役に立たぬガラクタばかりで、店中すつかりほこりを浴びてゐる。いつも今迄フトのぞき込んでも、はいつたことがたまにあつても、手ブラで引返したのはその爲めだ。いつもろくなものは何にもなく、凡て汚ない。

何でも古ぼけた古錢の額にしたのが一つ店頭にいつ行つてもかゝつてゐるのが、あれがあの家の實にぴつたりとした象徵に思はれる。……

今日もまあ例の通りがゝりに何の氣なくあすこへはいつて見たのだが、はいつて突き當りの棚に口の長い、近頃の支那出來らしい――何に使ふのか――小さな德利（？）が一つ目に付いた。それは、丁度先月Aの家で見た、あれと殆ど同じものである。

「それはいくら?」と店の奥へ聲をかけて、同時に右の方を見るとそこに曲がつたくろい桐の箱にはいつて、同じく支那燒の繪のとつ手の付いた蓋物がおいてある。まるでゴミだらけである。然し一寸どうかすると、蓋物にはなる。

僕はまだひやかしを通り越さぬどうでもいゝ氣分で德利や蓋物を訊てゐると、奥からは老婆が出て來て、「その德利は小さいが品がいゝから六十錢だ」と私に云つた。

「ではこの蓋物の方はいくら?」

「そちらは一圓八十錢です」

「まあ之れは貰ふが」、と僕は小さい德利を手に持つて云つて――然し云ひ値より兎に角負けさせる氣があつた――それから、殆ど出來心に、

「ねえ、此の蓋物と德利とで二圓にしておかないか。」

さうすれば兩方買つて行く、と別に執着も何にもないことを、さう一寸思つたのですぐそのまゝ店の老婆に輕く云つた。

老婆がその時かう云つた。

「ハイ、今は何しろ一圓お金があれば一圓五十錢にも當る時ですから、さうお願ひしたいのですが……」

……わたしは初めから安く云つたからそよれり負けられない。それから、丁度今「ぢいさん」は留守でわたしだけだ、と云ふこと。ぢいさんなら一方をいくらに、こつちは××に云ふだらう……「どうも冷へてねてゐる」

そんなことを縷々と言つた。熱心に。その聲は低く、イヤに實感から出て來る。(くれの押しつまつた或る午後である。)

私は老婆を見た。――頭髮が白く、やせてゐる。殊にその膝へおいた手などはカサカサで(自分は何故こんな惡い連想をするのか! 然し)そのまゝ死骸に付いてゐる手の樣だ。

家の中も見える。六疊一間である。狹く、猶暗い色の荷物が憂欝につまつてゐる。眞中に長火鉢があつて湯氣が出てゐる。その奥にぼんやりと、クナクナに丸まつて何しろ「布團が敷ひて」ある。

老婆はそこから今出て來た?

私の聲をきいて――

――かうして、私はつい何時かあの家の「人」とつき合つて了つた。

二

私は只何の氣もないひやかしで此所へ通りすがりに寄つたのであつたが、でつい今しがたまでさうだつたが、縷々老婆の云ふのを聞き、その邊を見てゐる間に、例へば寫眞のピントがカ

チと對象へ合ふ時が來る樣に、私にありありと老婆や此の家、そのあり得る背景、生活、少くとも或る運——などがギシギシとよく見えて來る。見まいとしても向ふから見えて來る。私はかうなると、時に、此の老婆にとつて強ち路傍の人ではないのである。寧ろ、路傍の人ではゐられなくなる。

氣の毒な、變な、情けない感になる。「同情」である。只同情はいゝとして、だから僕が此の人にその思ひをどうすればいゝのか。

買ふのはやさしいが……

それより、今僕が此の人から物を買ふより先きに變に水の樣にしみ込まれた、此の思ひを一體どうすればいゝのだ？

私は——僕は無力で自己一個主義者かも知れぬ——何しろ、この二品を買つて兎に角此所を逃れやうと思つた。辛い情けない暗澹たる氣がして、此の場はやり切れない。

（實はさう云ふ感じは好んで私は感じたくないのだ。）

「之れを二つ買ひませう」と私は云つて、財布を出した。一圓八十錢に六十錢——見ると財布には細かい金がなく、十圓札しかない。

さあ。十圓でツリがあるかしら？「細かいのがないのだが之れで」兎に角、私はその札を老婆に渡した。

彼女は案の定弱つた顏をしてゐる。

三

私が「買ふ」のは、實のところ、早く此の場を去りたいからである。買つても老婆の運や生活に何のたしにならう。くらしのしのぎには一時なるだらうが、——そんな事も如何でもいゝ。私にはあなたの刺戟が、只辛すぎるのだ。「不人情」と云ふ樣な字に當るだらうか。さうしたら「許して」貰ひたい樣な氣がある。人情不人情より、私は此の老婆なりその背景が寧ろこはい。成る可く見たくない。それは私には全く「見る」は見てもそれ以上どうしても出來ないもの、只かくの如く辛く思へるだけである。

早く買ひものをして此の場をせめて逃れたい。私はさう云ふ「悲慘」を感じても、然し主觀客觀とも結局どうにもならないのだから。

老婆は私の札を見て困つた顏をしてゐた。

が——私にはわかるのだが——彼女は困りながらも二つ云ひ値で（？）賣れる「喜び」が見える。それを買ふ然し私の心持はどんなところから來たか、不幸な老人よ、私はあなたに無論同情もするしいろ〳〵お祭し出來る。然しそれ以上に私を刺戟

する陰鬱な影がどうもあなたのうしろに見えて、それが私を打撃するのだ。

あなたは知らない。

只どうか私が兎に角此の品を買つて、此所から逃げやうと思つてゐるのを、別にあなたに云ふのではない、然し世の何かよ、許して下さい。――

彼女は、「本當に細かいのがなうて」、なうてと云ふ樣な品のあるいぢらしい言葉で云つた。「細かいのがなうて困ります」。隣の人に頼んで代へて貰はう、と私に言つた。

「一寸此所にお待ち下さい、」何でも、茶がないから角の葉茶屋へ何とかを四半斤買ひに行つて貰はう。さうすればくずれると私に云つた。「くれで忙しいし私のところはこんなもの――（非實用品？）――ばかりなので、買ふ人がなく」小使ひもないのだ、と私に云つた。

私は「さうだらう」と――さすがから露骨に云はれるのに又目を伏せたく、然しいろ／＼困るだらうと本當に思つた。「何しろ此所で俺が買へばたしかに何かしらにはなるのだ」――と思ふ。

彼女は札を私から受取り、それに風呂敷を添へて、勝手口から隣りへ行くらしい。やがて、店の前――つまり往來――を、右隣りからチョコマカ十二三の女の子が今の風呂敷片手に、道具屋の店へはいつて來た。――そこは半分土間である。

「お婆さん。××を四半斤つて言ふの？」

「さうだよ。お世話さま」、今此のお客樣が買もので……といそ／＼、使ひの子に私のことを說明した。女の子は忽ち走つて出て行つた。

四

私は老婆と二人になつた。一寸手持無沙汰である。女の子の出て行つた往來を見ると、やんはり日が當つて、時々人が通るのどかに。――俺は變なところへ變な風に引かゝつて、あの平和なのび／＼とした往來へまだ自由には出られない。之れは思へば變な始末だ！　フツとおかしなとりとめのない氣がする。

老婆は相不變奥の上りがまちにゐるが、……何々樣の自働車が毎日前を通つて、こんなに砂ほこりを浴びせます、と笑ひながら云つた。何しろその品物、棚、凡て店のうちの汚なさ、むせる樣なほこりは、ひどいものだ。私はいゝかげんそこにあつた角椅子にそこにあるので別に氣にもせず、腰かけてゐるが、もし上等の身なりなら、どうかなるだらう。

老婆はツとかゞんでそこにおいた私の買もの――盗物を見て、「大變よごれてゐる」、洗はうと云つた。

俺は「それには及ばない」と斷つたがしきりに洗ふと云ふので、彼女に渡した。——彼女はそれを持つて奥の臺所（！）へ洗ひに行つたが、後ろから見ると腰に何か、感じられぬ色の小布團を吊つてゐる。

間もなくテカテカに洗つて持つて來たが、私に渡す時、とつ手の趾の下にまだ一かたまりほこりがくろく殘つてゐる。それを急いで袖口でふいた。

窮屈な二三分。

——彼女はそれから、「あなたに見せたいものがあるのです」と、私がずつと默つてゐるのを殆んどおしのける調子に、切口上に云ひ出した。ある皿があつて、それは極く古いものでいゝ品だと云ふことだ、それが前から家に一つあるが、さう云ふものはたまにしか出ないので他には今別に見せたいものもない。

「さう云ふ品——（私の買つた）——を好む方には向くかも知れない……」

「何です？　ゴスの皿ですか」

と私は受けこたへに只聞いて見た。え？　と彼女は云つたが、「お目にかけませう」と云つて、立ち上つた。——私は別に見たくもない。然し立ち上るのを止める氣にもなれない。

老婆は暗い奥の棚から皿を一枚とり出して、しきりに拭き、「何でも中々いゝ品だ相です」さう云つて私にそれを示した。

成程、品はいゝ皿だ。裏に「大明成化年製」と書いてある。が年號如何は第二として、兎に角生地もよく、ゴスもいゝ。ほたて貝になぞらへて作つた大形の皿で、細かく中に飛び模様が描いてある。——只その模様が全體の形ちとちぐはぐで、皿の「一美術品」とは殆ど氣に入らないが、私は左見右見それを見て、老婆に、「之れは賣りものですか。——いくら位ゐするのです？」

極く輕く話しの突差のつなぎに、聞いて見た。

「二圓だ相です」キズがないともつといゝ値に賣れるのだ相ですが——

そこへ、使ひの隣りの子が威勢よく外から返つて來た。

五

私は間もなく返るのだ。あゝ、變なつきあひ。然し老婆の影から見えたものはいつか私からさう際立つては見えなくなつて、私は安氣に感じ、彼女にある親しさも感じたのである。一度は私がタバコを出したのを見て、マッチをすつてくれたことがある。それは氣の毒な見知らぬ道具屋の老婆でも誰でもなく、樂に親しめる、或る年とつた「人」である。私に禮を云つ

て火をつけたが、それから、何かしらまとまつてゞはないが、彼女と話した。

屢々私も彼女も一つで、その時には賣手と買手、氣は樂でそれが自然だ……

私は品物をまとめてもう立ちかける用意をした。

彼女は隣りの子から風呂敷を受取つて、やさしく禮を云ひ、それから丁寧に包みを明けた。中からは細長い茶の紙包みと、キチンと重ねた五十錢札の「ツリ」が出た。――それをかゞんで一枚々々數へてゐる。茶はいくらだか、それだけ足りなくなつてゐるだらう。

「若しもあの札の數だけそつくりみんな今此の人のものだつたら、猶兎に角いゝだらう」とフツと思つた。

「これで七圓六十錢あります。お改めなすつて」――と、彼女が私にそこでツリを差出した。その方が彼女のとるより見るだけでカサが多い澤山のツリを。

「……」私は何だか此の金を持つて、その上に兎に角何かしら役に立つ品物を持つて、此所を出るのが虫がいゝ様な氣がする。と云つて僻か、常識か、金が入らない感じはしないし、突嗟に、「あの、その皿も買つて行きませう。」見たのだから、「それだけその中からとつて下さい」と彼女に云つた。

(まあさうすれば金は半々だ。尤も俺の方には代りに品物がいろ〳〵來るが、――之れは文字通り當り前のやうでもあり、まあ持つて行つていゝだらう。少し判斷がしどろもどろだ!)

彼女は喜んだらしかつた。で、又綿密に金を數へ直して、「ありがたう存じます、ありがたう存じます」と二度云つた樣だが、チラツと物好きに、人に禮を云はす樣な聞くに不本意な感じがした。「俺は何しろ少し變テコにこじれて來てゐる!」

彼女は「……十錢だけ御愛嬌におまけにしておきます」。でちやんと揃へた小札を俺に手渡しした。

「や、ありがたう」然しこのありがたうはとつて付けの出まかせな氣がして、それよりももうかうなつたら早く歸りたく、老婆は(多分)俺が急ぐので急いで器物を三つグナグナの新聞包みにしてくれた。猶ひもで結へやうか、と聞いたが俺はそれを斷つて、とう〳〵之れで變な要らない買ものを荷に背負ひ込み、あくせくその家を飛び出した。

＊＊

「何だ! 此の買ものは。」此の買ものは! 一體何がどう買つたのだ、變ァ! 私は道で度々さう思つて、さすが苦笑した。

老婆やその「影」のことはその時心から消へ失せて、無性にとぼけた、間の抜けた「滑稽なさぞそれは家へ返つたら笑はれ

ることだらう」あきれるだらう、體裁のわるい、弱つた感じがする。荷の持ちにくさ。「俺はどうかすると少しオカしいのだ、」が本氣だ。

それから「少し損をした」と思つた。――然しするとあの老婆や今迄眼前のこと、經過した氣持など、すうと寒く、通り魔の樣に私の心をかすめて、結局私はため息に似た醉した氣分で、午後おそく家へ歸つたのである。

後日記す。〔二階にて〕

下

一

所詮「金」が要る。私も要るし、道具屋の老婆も要る。光枝さんも要つたのである。然し要るだけなかつた。だが誰に要るだけ金があるだらう。どれだけあつたならば、金は「要る」と云ふそのたかなのだらう。

思へば空漠な只「金」だけのつまらぬことだ。私はさうだが、恐らく誰でもさうだらう。尤も例外の人もあるかも知れないが私は「金」はなにもいらないが、必要が入用だ。現身にはいろ〳〵なことがある。慾のほしがるものもあらうし、心の欲しがるものもある。その何一つとして、金なしにすむと云ふわけには行かず、金があれば、かなり無形の深いところへ迄手がとゞく、少くもとゞくようすがとなることが多い。彼に無形さへ見られゝば。

さう世が出來てゐて、その中に住んでゐる。

――私はかう（兎に角私事にせよ）思ふのだが、それは背窮で、所詮己れ一人に云ふことだ。まあ然し、この己れには、世に立つに精神の方は、その芽は用意があると思ふ。世のことは無論金などばかりでは、行くものではない。然し、――對何は云ふ迄もない。

何とか、この上にうまく、金の行る工夫はないものか。

呵々。他愛のないこと。

……それにせよ光枝さんにはもう少し、否、相當必要だけは兎に角金があるとまだよかつたのである。だが、それもどんなものか？ 寧ろ俺にもう少しいつもいるだけ動くと、よかつたかも知れぬ。光枝さんは病氣にならなかつたかもしれないし又病氣は或ひはなほつたかもしれない。それは難かしかつたが！ 然し癒らぬとしても、或る程度まで無ざんは、さうだ、少くも此の俺は、見ずにゐられたかもしれない。無ざんを見た！ 假令程度付きでも、何萬圓でも實に安いことだ。ところが實は、もつと安々と、買へるらしい。

「おい、エゴイスト。何を工合のよさ想な思案にふけつてゐるのだ?」と肩か、神經かを叩いて、云ふものがある。――エゴイスト? 俺がゝ? 違ふ〳〵。もし此の俺がエゴイストなら、世にエゴイスト程下らない、わりの合はぬ、貧乏くじはないな。エゴとはなんだ。自我だ。自我を統治するもの。君に云ふが俺はそんな輝はしい名には、まだ〳〵添はぬ世にあるか無いかの者である。早い話が、金錢にしても、だ。それのまつはる世をあり〳〵と見て、つまり肯定してゐてだね、――山へもかくれず、どうにもせずに。――自らその中に處してゐながら、エゴでは金錢にこつちから危ふくからめられやうとも、先方をからめる立場には、なか〳〵、出られない。さうさ、立派なエゴは泥中の蓮だ。泥の方が足下にひれ伏して如何か御吸ひ下さい、とも云ふだらう。さう云ふ、云はぬ、は兎もかくとしても、何しろ身は泥中にあつて然し天へ花をかざさなければ、仕方ない。

「俺の花は、どうもそれが變に咲きかゝつては、出來そくなひ易い様だ。いろ〳〵泥中に處する心得に落度があるのだ。と云つてゐる。まあ、近頃は一つ新規に心根をかためて、先づ差し當り――之れが緊急で、どうして中々うるさい。――泥の吸ひ方からでも、出直して成る可くカッチリと研究したいと思つてゐる。俺の一づの中々微妙な問題、材料だ。屢々胸にかき抱き、又はその前に倒されることもある。いろ〳〵、日常日々のかなり動く一つの鍵。中々うまくは行くまいが、何れは……」

二

その時二階への階段がミシミシと鳴つて、竹雄が上つて來た。「兄さん。土曜館婆アが死んだとさ」

えゝ? 私は驚いた。あの頑丈な土曜館の婆さんが? さうかねえ。「何時?」

「何時だかね」

「變だね」

竹雄は私に茶を持つて來たのである。――私は書架の前に座つて、その茶を吹きながら靜かにのみ、溫和な午後だ。窓からはぼかした光りが茶の湯氣へほつかりあたる。私は土曜館の「かみさん」のことを考へた。

……あれでも相當、もう長いつき合ひになつた。いつも決まつてあの隅の「梅」の部屋へ、早いものだ、五年前に先づ群馬の卓さんが厄介になつて、それからTが厄介になつて從弟の正が厄介になつて、それから、此度の光枝さんが厄介になつた。迷惑はかけなかつたが、こつちは迷惑を先づかけられたか

たちだ。「あの福田さんえ。卓さんが之れで三日、お返りになりませぬ。」「福田さんえ。Tさんのワイシャツが洗濯屋から來ないと云つてプンプン怒つてゐるのですよ。なにもあたしのせひではありやしない。もしやお宅に忘れてあるのではナイデスカ。シラベテクダサイ。」「福田さんえ。正さんが御腹痛ですと。來てみて上げて下さい。困ります。」福田さんえ。福田さんえ……閉口だ。その都度、眉のない、おはぐろの口をばつくりと開いてカラコロ路次の敷石をやつて來る。帶がぐた〱で、太つて前が合はず、何かその邊へ汗かあぶらでもたれ想な工合である。

しかしその初めのうちはまだよかつたが——

名うてな、土蠣館婆さん。

とぼけた婆さん。

私はしかし結句好きではなかつた。それが、死んだのか。

——もうどの人を例へあすこへ下宿に世話しや　とも、婆さんはやつて來ない。さう思ふとそれで、寂しい。なんと、人は境遇や現在あるまゝの諸相、それに知らず〱、善惡とも、なじんで享受してゐることだらう。お互ひになくなつて了へばあたりはどうせ知り合ひもなんにもなかつた、もとの寂漠な、虚空にかへる。しかし知り合つたおもひは消えない。有るものは何でも無くなる。その容赦ない定めは、いつか互ひに結ぶ、見えぬきづなとなるものだ。一朝無くなると、きづなが濃く見える。あゝ、あの婆さんも、汚なく、うるさく、下等で、厄介で不愉快でもあつたが、とう〱わかれか。矢張りゐないとなると、さすが寂しいものである。

——尤も、いゝ婆さんでは決してなかつた。

餘りと云へばくどく我利一點だ。結句は氣の毒に、光枝さんを、根津のドブつぱたへすんでに追ひこくらうとして、俺と（思ひ出してもイヤに）ぶつかつたが、あれが最後のつき合ひだつたとは、又むごい無慈悲なまはり合せだ。何しろ普通人ならあの不人情、極どうの仕うちは、出來ないところだ。相手は病人だ。それに俺とは、兎に角壊れぬ長年のつき合ひである。それを、下宿のたゝみのことゝ、——その方がついあの人の生活へは手ぢかにあり〱映るとは云へ、日やすを同じにおくとはなんと思ひ切つた人があつたものだらう。

だから——俺は云つた——たゝみ位のことは、うちでどうともしやう。あの光枝さんとは俺は無縁だけれど、縁よりは何かしらまつはる十年ばかりの互ひにあやがあつて、それが——恐らく私の性質へ——こんがらかり、難儀のときだとか、病氣とか、やれ子供の始末、借金、奉公、さう云ふ何かしら決ま

り日〳〵には、あの人には結句緣はかくれて、不緣が現はれる。丁度一生、光枝さんとは向ふが鬼で、目かくしのつき合ひをした樣なものである。だが俺は別段鬼のきめも約束もしたわけではなく、ついうかうかしてその邊に見てゐた。のんきな惡太郎や、三田の靑書生、會社の重役、記者のしくじり、さう云ふ手合ひがいゝ樣に光枝さんの眼をしばる。何と云ふことだ、痛々しい。子を產ます者もある。で、「さあいゝかい」わあ、とつつぱなして、退參した。殆んど雲をかすみだ。そこで俺が「にいさんの鬼よ」とうろ〳〵、つかまるわけである。

なにもつかまりたくはない。しかしつかまらずには所詮、すまないぢやないか。若い不仕合せな女が、眼をしばられて、うろうろさまよう姿をそのまゝ見逃すと云ふのは、之れは又つかまるより一段難かしいことである。さう云ふ場合に未然に出逢はぬ工夫の、或る生活の智恵があるか、又は不人情か、利害打算か、氣樂なエゴイズムか、何かさう云ふ「武器」がなしには出來ない。

私には恐らく、いつも〳〵「善玉」の小乘で大乘處世がなく、とは云へ惡人、不義理、非人情、冷酷、などゝ云ふ便利な武器は又なく、結句溜息をついて、時には善行の意識などけしつぶ程のをしながら、我れからあの人につかまつた。

だから、つかまつた上は、之れは私が何しろやるところまでは、所置しなければならぬとは思つてゐる。たゝみの四疊半や六疊、それは仕樣がない。換へるよ。初めからあなたに云ふ通り、家に室があれば、無理は御たのみしないのである。また金が充分にあれば、それは方法の方はすぐにもいくらもざらにあるだらう。ときまり切つたつまらない話だ。だから私は初めからそこを折り入つてたのんでゐる。君にかなり下手から、頭も下げて。

土曜館婆さんの云ふには、——光枝さんをとめてから五六日經つたか經たないかに、——それもまじまじと私の眼を見て、ソレハかうして下宿がかぎやうですから室を使つて下さるのはソレハ結構だけれど、御病人は容態がわるい樣で、よごれものが多く、くさい、と。

「ではどうすればいゝのか」

婆さんは「根津の藍染に永樂館と云ふ妹の下宿がある。そこへ引越して頂きませう」あたしからも云ふ、と云ふ。

「で、先方ないゝのかね」

「妹ですから、ヒヒヒヒ……」

その、かうなると行きどまりのあきれた露骨さ。又、さば〳〵としたものだ。如何な字の誇張も、醜怪なカリカテユアも及ば

ぬ。非常に、畜生！ と思ふ。このけだもの婆ア奴。

ところがその「露骨さ」があれから三度、四度位ひ、ぱつくり口をあいて「あのねえ、モシ福田さんえ」、家の格子を開けに來る。「もしかするとあなた、今夜にも變があるかも知れない。」あたしな心配で、心配で……

もう、御免被る。「心配」はよくわかる。え丶！ わるいからそんなにおかないと云ふのか。透つた理窟だ。明瞭な。（金をやればそれでもおかうけれど。たかゞ五倍にでも宿料を拂つたらな）、咄！ 何か不快よりも、焦燥を感じて來る。

さし當りどうしやう。俺は、もし病人はそれで又動かしたら、それが原因になつて死ぬかも知れぬ、と第一に思つたのである。どつちみち死ぬ。光枝さん。このかき方を許して下さい。さう思ひたくは無論なかつたが、思はない方がまた一つの間違ひの様である。世にはこんな場合まであるか。私はこはいが實際、あなたは「死ぬだらう」と思つたのだ。思はない方があぶない……

三

つい不幸に出逢ふと、現に生きてゐる人を「死ぬ」と思ふのが又、注意も、心使ひも、その方が本當な、そんなイヤなことを然し「教へ」られる。

私は同じ光枝さんとそつくりの腹膜の故人を三度、見たことがある。弟と、或る身よりの者と、妹と。――それが凡て同じだ。

私は殊に弟の時には、或る寒い日に、突然病氣の知らせが來たが、容態は腹膜で之れ〳〵、とかいてある。然しとても、どう重からうと、――理窟なしに――あの若い、長年よく識つてゐる、親しい、腹ちがひの弟が「死なう」とは思へぬ。ゐなくならうとは、けげんで、又イヤでもあつてどうも思へない。「ナニぢき癒る病氣だ」寧ろ、病氣は癒るものだ――（樂天家よ、「愛するもの」の病氣は！）――位ゐ、つい樂觀してゐた。

「まあ、明日あたり見舞に行つたらいゝだらう」

通知の來たのは、既でに日くれで、今迄行つたおぼへのない向島寺島村の伯母の家にねてゐると云ふのである。さがすのも大變だし、寒いし、日がくれる。私はちよつと、おつくうにもなつてゐた。

その時家に叔母がゐた。「福田さん。それは早く行つてやらなければいけない。この、腹膜と云ふ病氣は、よつぽど手當てがいゝか、運がないと、大てい助からない。あの人はいつもが丈夫らしいからそれでもよからうが、行つてやる方がいゝ。」

「それから？」私はかすかに、叔母の語調に可愛いゝ、あの弟を、今にも死にさうにすげなく云ふのが、不愉快であつた。

「行つてやつた方がいゝ。容態の知らせが來るなど、よく／＼だし、それに病氣になると、來る人の來ないのは何より、寂しいものだ。」

成程。それはさもあらう。――で、然しそれからも何とか彼とかぐず／＼した末、とう／＼「追ひ立てられて」寺島へ出かけた。

あの飾りもつやもない、木造りの簡素な、寂しい白鬚橋に、欄干にポツポツ裸かの電燈が光る頃合ひであつた。土手は寒い。ビユウ／＼風が川面から吹き上げて、川はさゞ波立つて鈍色に、あたりはほこりつぽく、カサカサしてゐる。やつと、もう日が全くおちてから、尋ね／＼、踏切りのそばの伯母の家へ着いて、で弟に逢つた。

彼は痩せ、目ばかり光らせて、亢奮してゐた。私は彼がかね／＼本好きなので、一番最近にかいた本を一冊、持つて行つたが、それを枕のわきへおくのに、見ない。(あとで聞くと、手足が動かなかつたと云ふことである。)

――私はやがて歸りに、之れは、何しろ今日來てよかつた、と思つた。弟のことをいろ／＼考へながら、暗い、すつかりもやの立ちこめた靜かな川を、竹屋の渡しをわたつたことを思ひ出す。水の氣に包まれた思ひである。何か遠くに青い、小さな灯が見えて、それが水々しい、寂寥な風情であつたことも思ひ出す。

ところが弟はそれから二日經つと、死んだ。

私は叔母のすゝめに從ひ、危ふく生前に行つて、からく、彼と永別の名殘りをのこしたのだ。もしあの時家に年とつた、頑固な、然し親身な叔母がゐ合せなかつたらどうだらう？自分はいきなりなきがらに逢つて、及ばぬ悔ひに攻められたことにちがひない。――さう云ふなげきが世の中には幾らもある。叔母は私より幾度も出逢つたらう。その經驗がいつか日々の生活に常備の智惠となつて、不測にそなへ、あの日出しぶる私にたつて行け、行け、とせがんだのだ。天使がせがんだのだ。それが叔母の貴い「年」の中にゐて、せがまずにはとても、ゐられなかつた。智惠以上にやさしい、いぢらしい、それが世を結び、いましめ合ふ、世渡りの手形同志。度々涙にまみれて、その度びに燒印が悲しく、濃くなる。

「あの日福田さんは行きた想もなかつたに、可哀想だつたが、強つて行け、行け、とせがんでやつた」

とあとで叔母は笑ひながら云つた。

あなたはさうして「笑み」を得る――

四

その日以來、私は病人、殊に腹膜は本當に、怖くなつてゐる。それでも、妹の時にも、まさかこのまゝ死なうとは、さうは思はなかつた。しかし死んだ。身よりの娘さんゃ「又お何さんが腹膜ですつて。」私は氣の毒だ。と思つた。然し死なうとは別段濃くは思はなかつたのに、そのお何さんも死んだ。

光枝さんで四度目だ。

同じ顏色で、容態で、段々にやつれ、もう今は世に跡形もなくなつた可愛いゝ――自〻は何とよゝお前のことを知つてゐるだらう。もう永遠に逢へないと云ふに、こんなによくあゝ〳〵と知つてゐるのは、或ひは又末に逢ふ爲めか、――妹、弟、郊外の何子、それ等の病氣の口が、云つたと同じことを云ふ。又もくり返す。恐ろしいことである。

「光枝さんは又死ぬ。」私はこはいが、さう思つたのだ。………

五

それにしてもどうして此の病人を施療院ではむざ〳〵僕に、つまり「保護者」に、すぐ引きとれと云ふのだらう。せめてあすこへおく方が、癒るに近からうに。――或ひは醫者の「智識」でどうせ、と、さじを投げられたのだらうか。それとも世間には澤山方々に、同じ無ざんな行路病者があつて、その收容に全く場所が足りないのか。施療院の醫者に、全く場所の不足で追はれる、と云つてゐたが。

「保護者のある患者はその保護者が、つまりこの施療院の立場のわけですから……」なんだか皮肉の樣な、變だ。イヤな云ひ方。

僕は××施療院から手紙の來た時、全く驚いた。あの光枝さんが行路病者に？　なにしろ之れはどつちみち行つて見なければ、仕樣がない。しかしどこで、一體どうしたと云ふのか。その後。去年高木にたのんで通信社へ入れて貰つた。それが、給料が少いとか忙しいとかでイヤで、何でも下谷の待合へ奉公がへしたと云ふことは、それは知つてゐる。僕は、困つたものだ、と思つてゐたのだ。さつぱりやつても來ないし、便りもなく、その間に時が過ぎた。

いきなり施療院から「行路病者」で知らせが來やうとは、之れは全く意外だ。

僕等は不取敢見舞ひ――引き取り？　どつちとも見當がつかない、兎に角病院へその午後おそく、行つて見た。成程、彼女

がゐる。「やせたねえ！」私は妻と顏を見合せた。

「病氣はなんですか」

係りの若い醫者が、「腹膜ですな。それに腎臓や腸も弱つてゐるらしい。」

腹膜。——私は彼女と話しをしたが、丁度、おとゝし弟の云つた樣なことを云ふ、去年妹の云つた樣なことを云ふ。一足先きに墓へ行つた彼等が、枕元か、寢臺の下で、光枝さんの口なり聲をかり、私に早死の辛さ、その成行きをかきくどくやう。その顏色と云ひ、髮の變つた生へぎわ、浮き出た眼、又、「あれ」に似てゐる。僕は殆んどぞつとした。

施療院はやかましい。いろ／＼規則がある。私は「正當な」保護者だ、などゝこつちは何も云はぬのに、どうしてつんけん云ふのだらう。「社會上有名の方だから……」、自分は冷汗が出る。「それは引取ります。引取らないとも何とも、まだ僕は第一何が、どうなつたのか、見當がつかないでゐるところだ。僕は只餘りだしぬけのことで、それで驚いてゐるのです。この人は無論、私の關係の者です。」——すると僕は何と云つてももう光枝さんが氣の毒で、氣の毒でたまらなくなる。

引取る、引取らぬよりはその方が上ア。

あくる日私は病院からあの人を本郷へ連れて來た。とは云へ、何處へどうするも差し當り目算は立たない。つい、さそくの土曜館へその夜から、たのんだわけである。

僕は何れ之れは大學へでも模樣を見て入れなければならない、と思つてゐた。然しすぐ今と云つて、どう手管を。——そこへ、いきなり婆アの事件だ。

光枝さんはフト見ると氣分などたしかなものである。歩くことも努めれば出來る。新聞もよむし、食事もする。たゞ病後悄衰の人の樣に見えるが、それが此の病氣ではいつも人を油斷させておいて、がつくり手の裏を返す樣な嘆きを與へる、實にイヤな、魔ものが又念入りにたくんだ一番重い容態。病後の樣なしかしそのまゝにぢわ／＼血も肉も食ひころす病中、——自分はかう云ふ不幸を人間に與へる天意がわからない。無論、天意ではないだらう。天はそんなことは知らない。只「人」の肉が、それ自身潰へることはいことである。どうかすると世の中ではこんな目にも出逢はないとはめつたに云へない。

ねてゐると、おゝ！　死んだのではないか、と驚愕する。しかし眼をひらく。まぶたのひろがつた眼を。そこに生命のかゝつてゐる、或るあぶなさ。「彼」が生きてゐると云ふよりは、人がかうしても生きてゐる、その力と云ふか、定めと云ふか、私は度々全く地上現象の上には、神もなんにもない。「もの」があ

るだけだとさむく思つた。

否！　この考へを誰が光枝さんの上に、及ぼした、と云ふものか。私は「考へ」たのだ。病氣について。全く光枝さんは考へさせるより、感じさせる、不運な人である。同胞だ。いろ〱思ひは複雑に、私一人の頭では背負ひ切れない。

六

何よりさし當り今動かすと云ふのは、之れはいけないことだ。たしかに。すると、あすこへ置くのか。土曜館婆さんは日にうるさからう。どうすればよからう？

それを近くの駒込にゐる正も一所に心配して、彼の下宿の主人が親切な人だ。實は話しても見たが承知し想である。そこへ移しては如何か、と或る日、私に云つた。「氣をつけて連れて行けば引越ししたからすぐどう、と云ふことはないと思ふ。僕が付き添つて行かう。」

「……さあ、さうでもするほか、」

私には考へがその時付かなかつた。

七

正の下宿の主人は偶々私の妻の父と、同縣の人。と云ふたとであつた。「あの方でしたか」。引いて光枝さんともゆかりは同縣になる。それよりも、極めて親切な涙もろい人らしい。「……それはお氣の毒なことだ。あの四番の室でもよし先方さへよければ、どうせ手はあるから、」世話して上げる、と云ふ。――私は知らない人だが、深く禮を云ひたい、と思つたのである。（今も思つてゐる）。

その正の下宿。小さな、くろい家である。室へはいると、疊がのめつてゐる。古い襖へ上下に生新らしい三角の添木が打ち付けてあるのを見た。四番の室？　それは布團の入れてあるところだと聞く。「土曜館では兎に角南窓の六疊へねてゐるのに……」。しかし此の際である。そこへたのむほかない。

で、引越しの日を決めた。――私はその日に、寢臺車をたのみ、附添は正に任して、朝早く土曜館へすぐ出してやつた。婆アののめ〱とした感じは、もう汚なくつて、見るさえたまらない。いきなり迎へに來たと云つていゝ。行く先きも云ふ必要たどないだらう。――不取敢私は家中にありつたけの金を正に持たせて、たゝみでも何でも足りたら買つてやるがいゝ。氣持わるい。拂ひをきつぱりとして、二度と婆さんの出迷はぬやう、手を切つて來てくれ、と念をおしてたのんだ。私は怒つて云つたたらう。

「かうまであの婆さんが非道とは、僕もあの人にはいろ〳〵困つたがでも然し、思はなかつた」と云ふ意味のことを正が云つた。

「今までは相手がピンピンしてゐる人間だつたから、まだ面をかぶつてゐやがつたのだ。此度は病人なので、强くなつた」だが、——私は出まかせにかう云ひながら、或ひは、そんな人間も本當にあるのかもしれない、と思ふ。氣味がわるい。——しかし此の考へは一寸ちがふ。土曜館婆さんは終始、我利一轍の土曜館婆さんである。只相手が普通人と、病人と、それだけちがつた。「普通人の時にはどうせ、こつちにも我がある。どうかするとあの婆さんの愚轍は、却つて又扱ひ易い場合もあるのである。然し病人にまで同じそのむちを振ふとは。保護者でもなかつたらどうする。全く、仕樣のない、出來そくない！」

その後のことである。婆さんは見舞を持つて、家へさすがケムさうに、やつてはきた……

正は横町を曲つて、出て行つた。その時チラと私は思つた。家には室がない。それは本當である。しかしそれより、なんなら、他へおきたいとあの人を引取る時、自分は思はなかつたか。——病院はすぐと云つて、駄目だ。それは豫めわかつてゐた。では、土曜館へ、と、家の室の有無よりもすぐにそつちのことを自分は、考へなかつたか「無論自分はさう考へた。」

「それが俺の結句わるいところか。それは、もし土曜館婆さんがいゝ人だつたら事は順調にそれでも運んだゞらう。あゝ云ひ出す相手と云ふことは、初めから大ていわかりさうなものだつた。それがよしわかつてゐないとしてもだ。人にはいゝ人間と、わるい人間が所詮ある「いゝ人間」にも「わるい？」ところがあり、いろ〳〵だ。その「人」相手に何とか事件の出來上りさうな道、つまり一時にもせよ下宿へ病人をおく、などゝふ、間に合はせをするより、全く凡て一か八かだな。一いゝのは。自分だけ困つてすますか、又は病人をちやんとおいていゝところへ、——世間にはそれが出來てゐるのだから、——さがすのが一寸おつくうでも、金のことがあつても、何しろ、おくのが本當だつた。まあ、何も彼も變によくない。が、かうなつたのが只之れが事實だ。仕樣がない。殘るのは之れからの何とか所置一つである」

その「やり方」よりは、自分の「動き方」とぼかして思ふ。

もう寢臺車へのせたかしらん。

正を送り出したまゝ玄關に立つて、私は、之れからやがて、よく晴れた今日の空の下を、しよんぼりと正に付き添はれた光枝さんの車が、多分、あの裏辿りはじめ〳〵空氣もわるひに遂

ひない、まがつた小さな下宿へ行くと思ふ。今さうなりつゝある。車の音も思はれる。一歩々々、何所かなんにも人も、神もゐない、愛も感情もない寂としたところへ、そのまゝ行き想な沈んだ空想が起る。しかし先方には親切な主人がゐると云ふのだが……

八

「何だか可哀想で、イヤになつて來た。」――どうかなるだらう。

「何所へ?」と妻が、私がそのまゝ――一寸あはてゝ――下駄をはいて外へ出かける様子を見て、聲をかけた。

「連れて來やう。家へ。その方がいゝ。無事だ。」

私は出かけたが、わけなく正と車とに出逢つた。そのまゝ近道を家へ引返したのであつた。

「正君。どうか下宿の主人へはよろしく云つてくれ玉へ。僕は之れがいけないくせだ。なんだか惡い氣がするが、すつかり可哀想になさけなくなつちまつたので。」

九

まあ、餘り動かさずにおきました。さうしたら[illegible]がなくなり、そこに病人がねて、私はその日から二階の仕事場の板じきへねることにした。しかし一寸初め寒かつただけで、それにはナニ布團をふやせば足りる。ねて見ればねられる。さすが、感行か、心持ちか、思はぬこともやつて見ればやれるもの、などゝ思ふ。

「明日、あそこへ何かもう一枚敷物を敷いておくれ。それから、もう草履で歩いてはいけないよ。」

妻はかねぐ「みいちやん」のことでは、いろんなことがあるのを、殊に此度のことでは重ねぐ、私よりも弱つて、元氣なくしてゐる。私の所置をハラハラして見てゐる。不服もあるだらうがとめない。自分の考へは云はない、――より無い。それが或る日、私に「すまない」様なことをフト云ひ出した。そしてあとでツと下を向いて、泣いてゐる。

「泣くことなんか何があるのだ。」――私は時ならず妻があの人を「自分の」友だち位ゐに思ひ初めたと思ふ、その區別の感じが、ぐつと胸へ來た。苦い不愉快の、殊にそのあとのつまらない錯淡さを感じる。胸へ掛が急にこびへる様な心地である。

妻は然ししきりに泣いてゐる。私を見てさも悲しげに、然しきまりでもわるいと云ふ様な――笑ひながら泣く様な顔付きもするのだ――しきりに矢張り、泣いてゐる。とうぐ突伏して

しく／＼啜り泣く。

「なにがさう悲しいのだ」

然し僕にもその時は既でになにが悲しいのか、妻のことが突嗟に、電氣の樣にわかつて來て、涙がこぼれ出した。

「みいちやんは可哀想だ。泣くまいと思つたのだけれど、みいちやんは可哀想だ。あゝ、あゝ、可哀想だ。可哀想だ。可哀想だ……」

妻は、おい／＼と泣き出して了つた。

あとで、「矢つぱりみいちやんはここへおくのがよかつたのね。」

と云つた。

「中途半パだよ。俺は。仕樣がない。」

十一

光枝さんは孤兒である。

妻の父が子供の頃から世話をして、私の妻、たき子とはずつと、一所に育つた。いろ／＼思ひ出は、つきないだらう。よく意地わるや、コスをされて「あん畜生奴！」と思つたと云ふ。「あの人が前に座つてるのがにくらしくて、にくらしくて、たもとをぎゆう／＼つねつてやつた……」それだけに又、つきないだらう。仲はよかつたり、わるかつたり、それは人の子供でも、犬やなにかの子どもでも、同じだ。大きい方がそれは如何しても強い。たき子は生れると、そのあくる年母に先き立たれた。その頃から光枝さんは三宅の家にもう、ゐたのである。

「たき子の生活が光枝の生活」のことが數限りなくある。夢や何かにもよく一所に出て來る。――そのうち、子供が半大人になり、女學生が此度は段々裁縫や、生け花だとか、琴も三味線もやつた想だ。いろんなことをする樣になり、家では臺所を司る。金の出入りが任される。立派な「女」になつて、イヤ、それよりももつと「獨立」した。子供が出來た。たゞ夫より先きに。

そこで、三宅の家から出たのである。

＊＊

彼女はかくて初めはたき子の「姉」であつた。それがいつか「いとこ」になつた。「親るい」になり「さう云ふ風のもの」になり――何所から段々に變つたらう。日のくれぎわの空の色と同じぼかしだ――いつか「あの困つた人」になり、結局此の頃では、たき子が光枝の「奥さん」になつた。「奥さん」と云ふのだ。「たあさん」とは云はない。この名は世の中からとう／＼たき子の目へ、なくなつたらしい。「みいちやん」はしまひまであ

つたのに。
悲しい筈だ。

十二

それを下宿の婆さんが云ふのか。――彼女が來てから、室にへんにその邊へ立てこもる或るにほひがある。「俺はそれも我慢してゐる。もしかすると、あの婆さんの樣に、我慢出來ないのが或ひは普通で、且本當かもしれない……」然し自分は、それでも一先づ氣はすんだ。それは、非常に。と云ふのは、光枝さんを氣の毒だ、可哀想だと思つても、又すぐ他の別のことへ素直に考へを向けることがそれからは出來る。「それは得をした。」或る夜は活動へ何だか、チヤプリンだつけか何か、見に行つた。僕と、妻と弟とで。「光枝さん、活動へ行つて來るけれどあとをたのむよ。」戸はしめておく。何を買つて來やう？

あの時などは、うちに病氣も不幸も心配もない樣だつた……

十三

只思ふ度びに氣分が暗く、所置のつかない考へは、「あの人は死ぬだらう」とどうも稍もすると思ふ、この寒い考へである。癒るかもしれないとは思ふが矢張り、どうも、死ぬだらう、と思ふ。これはあの人に附けては愛情の足りない、つまり病體を兎角餘り正視しすぎるせひかしら。さうばかりではない。毎日、かゝりつけの醫者がやつて來た。「何所かいゝ然し餘り大げさでない病院のお知り合ひなんかありませんか」、金は話してわかる家なら、少しあとでまとめてよければ、どうかなる。本を書いてもいゝと思つた。チラとその材料のあり〳〵浮んだこともある。尤も臨時で重荷だが。一氣に「十大畫家」でもかくか。――しかし醫者は「初めから海岸か何かだとよかつたのです。」それでも長くかゝる。それから、「もうかうなると」と付け足して、病院は癒すと云ふ點には、自宅と五十歩百歩かもしれぬ、と云つた、思ひ切つた、しかし恐らく本當、――さうとしか思へぬことを。全く誰も――弟も妹も――「海岸」ではなかつた。イヤな思ひ出……

十四

〔下の室にて〕

……私は久しく二階の仕事場でぐず〳〵してから、彼れ之れ二時頃になつたらう、仕事はよく手が付かずに、下の茶の間へおりて來た。休み場である。生活の。そこには例の通り長火鉢のその邊に妻と、竹雄とゐて、――成程氣が付くとそれはおか

しな家だ、又怪しい――猫がいろんなのが、ちらばつてねてゐる。殊におき時計と並んでチビの黒猫がゐる。

美しい不思議な、しかしと㤗けた、嚴粛な、へんなものである。キロリと私を見てゐる。ぢつと。そのとなりの時計のおかしさ。愛情を感じる。

しかしそれより氣になることがある。

「土曜館婆さんが死んだんだつてね。驚いた。」

私は座るとすぐに、さう云つた。

妻が――「ところが、」笑つて、「朝あすこからお葬式が出たのよ。おとなりのおばさんから聞いて、誰が死んだのだらうと思つてゐた。そこへ正さんが來て、來るとすぐに、土曜館婆さんが死んだ、と云ふから、まああの人？ それはわからないものだ、あの人が死ぬなんて、全く驚いてゐたの。」――しかし笑つてゐる。

「死なないのか。え？ どうしたんだ」

妻は益々笑つて「死ぬもんですか。あの人が。――お葬式は下宿人ですとさ。」

それから――この話しの間のグロテスクなおかしさ！ 妻は何しろ、下宿のかみさんが死んだものと信じて、すると何しろ長らくのつきあひ故、知らずにゐると云ふのもおかしなものである。様子を見に、土曜館の前へ行つた。するとばつたりそこで、葬式もなんい、眉のない、おはぐろの口を開いた、でく〳〵の土曜館婆アにあり〳〵ぶつかつた。生きてゐるにも、その健全なことは。「まあ奥さん〳〵。去年からツケが悪いのですよ。うちは。お宅の光枝さんでしよ。それからウチの流行風。此度はとう〳〵書生さんが心臓痲痺でいきなり、ゆんべ、逝つちまいました。」 お酒をのむ人はこはい、――と、その他いろ〳〵、かりのあるなし、荷もつのこと、散々ぐちをこぼされた。餘りのことに妻は、「がつかりして」歸つて來たと云ふ。

僕は何だか苦々しく感じた。

「出鱈目だね。それは。正は又何だつてそんな變なことを、云つたのだ。」

妻が、「今朝正さんがここへ來る時に、土曜館の前を通ると、ゴタゴタして、おとむらひの花などおいてある。暫く見てゐるのにおぢいさんだけ見えて、婆さんが見えない。その間に何だか、之れはてつきり、流感か何かで死んだのだ！ すると、光枝さんの罰だ、と云ふ氣もするんですとさ。なにしろ、それでここへ來ると、いきなり、あたしに土曜館婆さんが死んだ、つて云ふのよ。」

「正さんはだけどかう云つてゐたよ。土曜館婆さんが死んだ、

つて云ふと、姉さんがすぐ餘り顔色まで、變へて、驚いて眞面目な顔をして了つたので、それで却つて正さんの方が、之れはちやんとあの婆さんは「死んだ」のだ、と云ふ、ちつとも疑へない、見屆けた樣な氣になつたつて。」

弟がさう云つた。

何しろ、なんのことだ！「お前は又、それをすぐそのまゝ二階へ「報告」に來たのか。何だつて、餘計なことを。」

弟が、「だつてあんな變な婆ア、急に死んだつて云ふから、おかしいや。兄さんも驚かしてやらうと思つた。」

「バカ！」だが、私は非常におかしくなつて、腹をかゝえて笑つてしまつた。「ハハハハハ。バカばかり揃つてゐる」――生きてゐるのか、なんだつまらぬ、と云ふ、理窟なしの氣がした。が、つまらぬ、は無いだらう。益々おかしくなる。第一にパツと何か明るく、晴朗な感じを感じる。蓋のとれた樣な。成程、私の「考へ」へ外から來た、所詮は鬱陶しい「おもひ」がとれたのである……

十五

すると、「生きてゐるならなにも自分はあの人のことを特別におもひはしないのか」――（材料の林檎はとやかう思はない。思ふのはそれを描いた繪の方だからな）

之れで、あの土曜館婆さんが相不變頑健にピンピンしてゐる、となると、――先刻俺は二階で、一瞬にせよしみじみ、愛情で、寂しくあの人のことを思つたことがあつた。「死んだ」あの人のことを。しかしそれが實は生きて、ナニついそこにゐる。逢はうと思へば直ぐ逢へるのだ。この二つの姿。違ひはしなからうか。で、どつちが本當のあの人だ？

「今生きてゐる、あの婆さんの姿が云ふまでもなく、本當である。」――（描いた繪よりも材料の林檎の方が本當と云ふ意味で。）

でく／＼と太つて金をためてゐる。死ぬはおろか、生きてゐることも、その邊のことは更に思つてゐないだらう。恐らく世の何の爲めにもなる、とは思へず、彼女一身の爲めにも多分ならない。たゞ、生きてゐる。下宿屋をして、朝から晩までかせぎ、損はしない樣に得はする樣に、營々としてゐる……

自分は先刻あの婆さんが「死んだ」と思つた。すると愛情や、別離の思ひに、あの人を我が身にかけてさみしく、親しく、美くしく感じた筈である。それは私感かしらん。強ちさうとは思へない。で、世にゐないよりは、無論ゐた方がいゝ、と思つた。ところがその人は確として今、ゐる。

いゝか？

「さあ、成程さし當つては、いゝともわるいとも思はない」のが本音だ。之れも私感かしらん。寧ろ「あの人」に依つて感じさせられるもつともな「受感」、あの人の影、ではないだらうか。それは、只少くも、ゐない方がいゝ、とは決して思はないが。

たつた今「死んだ」と思つただけに、さすが婆さんの實は生きてゐることは、――生きてゐてくれた、とも云へ想だ――それはたしかにそれが一番いゝ。「ゐる」以上、人は「ゐる」のがいゝ様だ。どんな人でも。無論、指ケ谷町の貧しい道具屋のお婆さんも。――だが、あゝ、あの人が見える。どうして「ゐる」のだらう。しかし「ゐない」考へは更に々々辛い。それから光枝さん。あなたもゐた方がいゝ。私感か、私感か。不遇な弟も、妹も、ゐた方がいゝ。また、土曜館婆さんもゐた方がいゝのだ。

凡て、「ゐる」ものは。

十六

私はそれから彼女、土曜館婆さんの樽のやうな、おはぐろや、種々ものごし、動作、云ふこと、「あの人」を眼に近づけて思つて見たが、結句イヤである。氣に入らない。今は不取敢滑稽だが、所詮「滑稽」だけではすまない。影が濃すぎる。どうせあの「人」だ。自分には感情よりも批判で、――ここから又別の感情が起つて「氣に入らない」のである。

それは丁度、指ケ谷町の道具屋のお婆さんが「痛々しい」やうに。亡き光枝さんが「哀れな」やうに。――何故若くあんなに不遇を見るのだらう――弟や妹。思へばいろ／＼の人。それが、「好き」だつたり、「尊敬」出來たり、「愛し」たり、「いたは」つたり、……私はその中に一人で、しかし同時に澤山で、生活してゐる。この凡てのやうに。

つまり、神を通じての上で、である。

＊＊

私は思つた。

「あの人はあの人で仕方がない。誰がいゝわるいもない。「人」がさう「人」ばかりでは、仕方ないものである。そのまゝの姿では、神ではない。――この、現身。それは罪でも惡でもない。代りに、善でも惡でもない。只、現身、世に云ふ業。消えるもの。肉。

「世の中は一通り、或る云ひ方で云ふと殆どそればかりで、出來てゐるかたちがある。世の中はかなり出鱈目な、かきまはした壺だ。大ていがいゝかげんや、行き當りばつたりで出來てゐ

る。わるくもよくもない「在る」だけのものである。——神を對照にして批判が起らなければ、材料は容赦なく時の中へ潰へるだけだ。

「不幸な下宿の女主人。神なしに、肉身で辛く世を渡るもの。知らずに、如何に惡を生むだらう。所詮不義理もすれば、人情も缺くだらう。日夜、面白くなく、不平を云ふ。しかし「人」が云ふので、神は何ともそれには關知しないまでゞある。

「私は偶々その「人」を死の幕から、誤まつて然し眞面目に、見たのであつた。死は人を黯然とする。人が最も多く、謙虚に神の前に立つ時である。思ひには業が消え、私はいつもあの人をきらつたらう。その煩惱の者に、神に享けられた彼女の姿をありありと忍ばせる。業のかき消された無垢な彼女の姿を初めて見る。さう云ふ姿が彼女にあるのを見る。

「業はかき消される。消へるものだからである。消へないものがあつてそのことを數へる。——この、人の眼に瞬時にもせよ不滅に、業をかき消して「もの」を見せるもの、神は、人間の出來やその行ひはどうとも地上のもの、お前達のもの、爭はうと仲よくしようとどうでもいゝが、只「お前」は、我がものである。お前はお前ばかりではない。この、現身よりはずつと消へない。それをありありと見せてくれる。又、見ることが出來るのである。」

私はそれが見えると何と自分は自分ばかりではない、ずつと大きなものゝ氣がして、どうかこの生存の光榮を出來るだけ深く、その御惠みに浴したい、と心が勇むことだらう。業のことは我れながら、どうでもよくなる。神よ、お見すて下さいますな。不幸も悲慘もなくなる。「幸福を感じる」と云ふことが濃く來る。あの「人」にさへ、「しかしその自分、人間に又業が一杯あるのだが……

「此所が乘れ合ひだ」と私は謙虛に忠實に思ふことが出來た。たゞ何だかいそいそとすることには、希望がはるかに、はるかに、感じられて、その海の光る中に現在、今、かうして時間があると思ふことと……

十七

「いろいろと不思議だね」

「なにが?」と妻が聞いた。

「土曜館婆さんの樣な變てこな人が世間にゐるとか、いろんなことさ」

「えゝ、あゝ云ふ人は澤山ゐてよ」

妻は云つて、もしかするとあゝ云ふ人の方が、あゝでない人

より多いかもしれない、と云ふ。――そこで、私は氣が付いて、から云つた。

「その方が世渡りに利巧だからついその型が、世の中にふゑるのかも知れない……」

大智の者は、運命に――假りに此の字で――損の行く道は、未然に知つて、通らぬものである。エゴイズムが大乘になると、それが危險な世に處する、唯一無二の道だ。

「ねえ、おい。俺達はもう少し得の行くやり方をしないと、仕樣がないね」

「何で?」

「だから凡て、例へば光枝さんの場合のことでも、金のことでも、何でもだ。人とのつきあひ、日常、凡てだ。俺なんかしよつ中損ばかりしてゐる。」

「あなたは駄目よ。」

「何故?」

「いつも口ばかりだから」

成程。さうかも知れぬ。――本屋が來る。それはいくら〳〵の印税で、と云ふ。するとそれが多からうが少なからうが、「えゝ」と判斷より先きに、承知の返事をして了ふ。まあよからう。かけ合ふよりも損する方が早く、面倒でない、と。又人が來る。之れ〳〵のことをやつてくれ、と云ふ。するとみす〳〵その厄介や時に不可能がわかつてゐても、「うむ」と返事をしがちである。――仕事の最中に畫の學生が來る。自分は仕事をしてゐるのである。さう斷れば何でもなくすむ。それを、つい逢ふ。否、さう斷りに行くつもりで、逢ふ。ところが玄關で、そこに禮儀を厚くカタくなつて、立つてゐる、知らぬ學生の人の謙虛な、誠實な、顏を見ると、もう斷はる氣など、ヘナヘナになつて、どうぞ上つてくれ、とこつちからすゝめる。繪の批評なぞする。その人は恐らく滿足して、又不滿でも、用を達して、歸るのだ。自分は然し時を無くすのだ。

「よくないことだ。」――更に引いて心付くことがある。或る人のやうに。「之れはつまり、ナニ俺の性質なり、くせと云ふより、それはどうせ業で消へてなくなる。消へない、美の前に、自信が足りないのだ。肝心の自信が!」

「少し惡人になりにうんと自信を持つかな。いけない。生活が薄弱で。」

仕事をするのが何よりの近道だ、と思つた。私はもう一息、二階の仕事場へそれから上つて、日がくれる迄、よく畫く前に座ることが出來た。

「俺には此の道一つあれば、他には何にも、全くだ――人道も

へちまもなんの、無くつたつていゝ。善玉であらうと、惡玉であらうと!」

この「神」さへあればな!

十八

光枝さんは私の家へ移つてから、十日程すると、死んだのである。

彼女の死體を見て、私は全く驚いた。やせ衰へ、丸で骨と皮ばかりになつて、死んだと云ふより、いつそ死骸になつたと云ふ方が本當だ。死にゝ死んだ。――頭はさうでもなかつたが、湯かんに布團を明けたのをつい見て、驚いた。その無慘な手や足、胸。之れがかねゞゝあなたの「美貌」で忙しく世を過した、あなたのなきがらだ、と云つたら、もし光枝さんの靈があつて見たなら、死なぬと云ふ鑑さへ、死ぬだらう。

之れでは實際、字ゝまゝに、魂のゐ所がない、としか思へない。可哀想な、痛ましい、氣の毒な辛い氣がした。私はその爲めに泣かされた。無形より有形は一しほ直接で、哀れが深く、堪へ得なかつた。「こんなに?」と思ふともうこみ上げた。それまで泣けずに辭してゐた涙が。

――實は、然し泣ければまだいゝのである。死骸は簡單だ。それですむ。すまないのはいつまでもたゞよふ彼女の有形以上の方で、それには泣くなど、その無垢一瞬の情では受慾のつきない、複雜ないろゝゝの濃いパックがあつた。私は――(妻は初めから)――かなり度々その色合ひをわけたが……

――「しかし結句私はあの人の何だつたのだらう。かう云ふ私のいろゝゝ、性質故に、私はあなたとかなりつき合つた。思へば又緣の深い――思ひはいつ迄も消へぬ――關係である。しかし私は別段あなたをどう、とも思ひはしなかつた、路傍の者だのに。度々、困ると思つたことがある。うそをつくことや、虛榮心、何かしら出たら目を云つたりすること、あんまり我が身に無考へなこと、それ等には好意を持つてゐなかつたが、――あゝしかしこんなことを云ふと自分が寂しいのか、あなたが寂しいのか、どつちかわからない、只、神樣、すみませぬ、と云ふ氣がする。あなたは氣の毒な人だ。私はせめてこの自分だけは、どうか出來るだけ始末したいと思つてゐる者だ。」

大正十一年三月

木阿彌物語

村松梢風

人物

筒井順慶
家老島左近友之
同松倉右近勝重
近習の武士二見雅樂助
お小姓結城源三郎
醫師道庵
御臺所の腰元若葉
愛妾お絹の方
茶人木阿彌

第一場

天正十二年五月
勢州長島附近に屯せる、豊臣方の大將、大和國筒井の城主筒井順慶が陣屋の一部。
深夜の光景。上段に大將筒井順慶急病にて床に打ち臥し、劇しき苦悶の最中。枕頭にては醫師道庵病者の脈を執りてゐる。其の側らに、家老松倉右近勝重（六十位）同島左近友之（四十五六）近侍の武士二見雅樂助（廿二三）憂色を湛へ固唾を呑みて扣へてゐる。

道庵。（兩家老に眼配せする。）最早、御臨終で御坐りまする。

兩人。何、御臨終とな！

三名は愕然として床の側にすり寄る。

右近。殿、勝重でござる。

左近。友之も是れに居ります。

答へ無し。苦悶の聲糸の如く細り行く。
燭の光氣味悪くゆらめく。

道庵。（脈を執りてゐたる手をば放して）只今お脈が切れましてござります。

皆々暗然たるのみにて暫時聲無し。雅樂助一人耐え得ずして慟哭す。

左近。雅樂助、不覺であらう、靜かにせぬか。(と叱る。)
　雅樂助は手を口に覆ひて歔欷してゐる。
右近。(がつかりして氣拔けのした體) あゝあゝ。是れは一體どうしたといふ事だ!
道庵。此の御病氣は、俗に早打肩と申しまして、療治の致し樣はございません。病ひの中でも、特別恐ろしい病ひでござります。
右近。先刻迄我れ〳〵と御機嫌宜く話しをなされて居つた殿が、僅かの間に斯んなことになられやうとは、わしは夢でも見てゐるやうな氣がする――。
左近。まつたくぢや、病ひ程怖ろしいものはない。武勇勝れた御主君でも、病ひといふ敵には勝てなかつたのだ。
　兩人涙を呑み、茫然として顏を見合はせてゐる。雅樂助起つて屏風を持ち來り逆しまに立て廻す。屏風の內より香煙立ち昇る。
雅樂助。(少し離れた處に手を突き) 御家老方に伺ひます。此の由を、直ぐ樣陣中へ知らせますでござりませうか?
左近。あゝ否、それは暫く待て。敵を前にして、大將の御死去と聞いたならば、味方の陣中が必ず動亂するであらう。其の虛に乘じて、敵に攻め寄せられなば一大事ぢや。後々の事は、松倉殿と身どもとで相談の上取り極めるに依つて、それ迄は、此の事は誰にも口外しては成らんぞ。道安、其方にも確と申し付けたぞ。
道庵。畏りました。
左近。然らば、其方共は暫時遠慮致して居れ。
　兩人各々一禮して席を起つ。
左近。あゝこれ〳〵、雅樂助、其方には別に申し付ける事がある。一寸是れへ。
　雅樂助立ち戻り左近の側へ躙り寄る。左近其の耳に何か囁く。
左近。よいか?
雅樂助。委細承知仕りました。
　雅樂助も立ち去る。右近は扇子を膝に立て兩眼を閉ぢて默然たりしが、此の時漸く眼を開き左近と顏を見合はす。軈て兩名下段へ來りて對座す。
左近。松倉殿、互ひの愁傷はさる事ながら、我れ〳〵の役目として、不覺の涙に暮れて居る場合でない。目前の處置や、お家の後事を、貴殿と二人でよく相談し度いと思ふのぢやが。
右近。いかさまおん身の云ふ通りぢや。が、餘り不慮の一大事で、拙者は心も顚動して、分別も何も浮ばぬわ。

左近。それは尤もぢや、貴殿も拙者も殿が御幼少の砌りからお側に仕へて、とりわけ拙者などは、さしたる手柄も致さぬのに家中随一の高祿を食むで居る。せめては此の御恩返しに、本領の外に今一ケ國も殿の御手に附け參らせたいと明け暮れ心に念じて居つたが、斯く殿に先立たれてしまうては、それも水の泡となりました。

右近。誰の心も同じ事ぢや。是れといふのも、殿や我れ〳〵に運が無かつたのだ。

　兩人さめ〴〵と泣く。

左近。（氣を取り直したる體にて）偖松倉殿、斯樣に殿が御死去なされて見ると、お世嗣は立つて居らず、一體當家の行末はどう成り行くと思はれる？

　右近も愕然とした體で形を改める。

右近。いかさま、氣に掛るのは其の事ぢや、恁んな事なら、早く殿にお勸め申して、御養子を定めて置けば宜かつた。

左近。今更それを云つても詮無い事ぢや。つらつら秀吉公の胸中を忖度致して見るところ、彼の洞ケ峠の一件が根にあると見えて、未だに當家を眞から賴母しくは思つて居られぬ樣子、よい機會さへあれば取り潰してしまはふと睨んで居るかもわからない。だから餘程上手に立ち廻らぬと、お家を無事に立てる事は六か敷い。萬に一つも當家を滅亡さすやうな事があつては、亡くなられた殿へ對して申譯が無いばかりではなく、あれ見よ筒井家のざまを、一人の主人が死んだら直ぐにあの通りだ、戰さに出て驅け廻るばかりが武士の能でもあるまいに、老臣共は晝寢をして居るのかと、日本國中の人から笑はれるでござらう。

右近。それは必定ぢや。が我らには工夫が付かん。左近殿、おん身は筒井の島左近か　島左近の筒井かと言はれて居る程の器量人ではないか。何ぞよい智惠がありさうなものぢやが。

　左近腕を拱き思案してゐる。軈て靜かに顏を上げる。

左近。差し當つては、よい工夫も附きませんが、窮餘の一策とも云ふべき謀なら無いでもござらん。

右近。お家の安泰さへ得られる事だつたら、手段を擇ぶ場合ではござらん。先づ其の謀といふのを聞かせて下さらぬか。

左近。それは恁うでござる。先づ第一に、殿が御死去なされたといふ事は、何處迄も秘密にして置くのぢや。そして、差し當り御病氣の體にして御歸國といふ事に致す。猶其處で折を見て御一族中から御養子を迎へた上で、順慶事病氣全快覺束なく御奉公立ち兼ねるに依り隱居を致し度いと願ひ出る、是れならば關白とてもよもや故障は申されまい。で、首尾よく御

家督相續の儀が濟んだ上で、大殿御他界と振れ出すので御坐る。

右近。（不滿足の面持ち）ふうむ――。併し、貴殿の云はれるやうに左うすら〳〵と事が運べば論は無いが、それはちと六か敷いであらう。第一、殿の御死去を秘密にして置く事がすでに困難ぢや。一日や二日なら兎も角も、何時迄ともわからぬ此の先きを、御亡骸をあの儘にして御病氣の體では通されまいが。

左近。否々、左うではござらん、御亡骸は今宵密かに茶毘に附する考へ。

右近。それでは猶更六か敷い。居る人間を居らぬやうに見せ掛けて置くのは手易い事だが、死んでしまうて在りもせぬ人間を、在るやうに見せるといふ事は出來まい。假りに我々ばかり共のつもりにしてゐても、家臣共が得心しまい。中には必ず豊臣家の隱密も交つてゐる。それらの者までも欺き通す事は所詮覺束ない事ぢや。

左近。さればさ、謀はそれからでござる。打ち割つて申せば、殿の替へ玉をこしらへるのぢや、殿とちつとも異はぬ人間を伴れて來て、當分其奴を主君にして置くのでござる。

右近。成る程それで話が判つた。が、肝心の殿に生き寫しの人間が無くては駄目だ。それを探し出すのが容易ではあるまい。

左近。（莞爾として）其の心配は御無用ぢや。先づお聞きなされ、恁ういふ譯でござる。實は丁度三年程前の事、拙者が京都へ參つた砌、或所で知り合ひになつた木阿彌といふ茶坊主がござつた。處が、其の男を見るに、不思議な事には御主君順慶公と似たとは愚か瓜二つ、年頃でも顔形でも、音聲でも、よくも〳〵似たと思ふほどでござつた。拙者も一旦は呆れ果てましたが、ふと心付いた事は、當時斯かる亂世と云ひ、斯樣な人間をも召し抱へて置かば何かの用に立つ場合もあるかも知れぬと存じたに依つて、當人にはさりげなく申して其の場から引き伴れて參り、今日迄秘かに扶持して置きましたが、今度出陣の砌にも、茶の相手旁々其奴を召し伴れて參つたのでござる。此の男を殿の替りに致すならば、縱ひ殿の親同胞のお方が御覽になられやうと、決して見破られる心配は無いのぢや。

右近。（ほと〳〵感服して）偖々何時も乍ら貴殿の遠謀深慮には駭き入つた。其のやうな人間があるからには、無論唯今の謀に越した手段はござらん。では早速其の男を伴れて來て、首尾よく役目を果すやうに申し付けやうではござらぬか。

左近。實は先刻雅樂助に、木阿彌を私かに連れて來るやうに命じて置きましたから、最早追付け是れへ參る時刻でござる。

其の時二見雅樂助庭口より茶人木阿彌を伴なひ來る。木阿彌、年頃卅六七に見ゆ。頭は圓めたれど、脹ら顔にてよく肥つた男。おづ／＼して隨いて來る。

雅樂助。御家老殿、仰せの人物、是れへ召し伴れて參りました

左近。御苦勞であつた。其方は、暫く次へ退つて居れ。――木阿彌、夜中呼び出して氣の毒ぢやつたな。

木阿彌。いえ、どう仕りまして、そんな事は何でもござりません。が、夜中と云ひ、火急のお呼出しは何御用でござりまする？

左近。其の用事は追つて申し聞かせる。――時に右近殿、只今申した男が是れでござる。何んと、よう似て居るでありませうが。

右近は先き程から呆れ返つた體で、穴のあく程木阿彌の顔を見詰めてゐる。

右近。いや似たわ／＼。まるで生き寫しぢや。是れでは拙者と雖も到底見別けが付かぬわい。はて、不思議な事があればあるもの。

と猶も木阿彌の顔を眺める。木阿彌は仔細が判らねば只怪訝しげに扣へてゐる。

左近。木阿彌、夜中其方を呼び出したのは外でもないが、只今突然、當筒井家の浮沈にも關はる程の一大事が持ち上つたのぢや。それに就いて、此の度びは是非共其方に、或る大切な役目を務めて貰ひ度いと思ふのぢや。首尾よく其の仕事を務めたならば、多分の恩賞を取らせるであらうが、何と承知しては呉れまいか。

木阿彌。何御用かは存じませぬが、日頃御恩に預るあなた様のお頼み、私で出來ます事なら、否やは申さずお受け致すでござりませう。

左近。早速承知して呉れて忝ない。此役目は、其方ならでは勤まらぬ仕事なのだ。何を隠さう、あれを見い。（と屏風の方を指差し）御主人順慶公には、只今急病でおかくれ遊ばしたのだ。（木阿彌駭く。）併し、此の事は茲に居る我れ／＼のほかは、未だ誰にも知らせずにある――と云ふわけは、種々混み入つた事情もあるが、兎に角、只今殿に亡くなられたのでは、此の筒井家が立ち行かぬ事になるに依つて、當座のうち、殿のお身替りの人間をこしらへて置き、御存命の體で通さうといふ我れ／＼の魂膽なのぢや。處で、肝心なのは其の

お身持りの人物ぢやが、是れは其方を措いて外には無いのだ。實は今迄話さなんだが、其方は我君順慶公と宛ら生き寫しで、誰が見たとて見別けが付かぬ程似てゐるのだ。だに依つて其方に、今日から當家の御主君になつて貰ひ度いのだ。

木阿彌。何かと思ひましたら、是れはまた滅相もないお話し、殿樣に似て居るかどうかは存じませぬが、御承知の通り卑しい町人育ちの私、所詮大名の身替りは勤まりませぬ。其の儀ばかりは御免を蒙りますでござります。

右近。あゝこれ〳〵、木阿彌とやら、拙者は當家の老職松倉右近ぢや。唯今島殿が申された事、改めて拙者からも賴むに依つて、左う云はずに引き受けて呉れ。

木阿彌。他の事なら何なりとお言葉に從ひますが、そればかりは餘り恐ろしくて、お話しを承はつたばかりで、これ、此の通り體が慄えてまゐります。平に、平に、御免を蒙りますでござりまする。

右近。其の樣に恐ろしがる事はない、巨細の事は、我れ〳〵兩人が側にゐて取り計らふから、其方は只大名になつた了簡で居りさへしたらよい事だ。

木阿彌。其の大名になつた了簡といふのが、なれと云はれても、私ではなれませぬ。

右近。困つた事を云ふ奴だ、是れを其方が引き受けて呉れぬ時には、當家の存亡にも關はる事だと申して居るではないか。

木阿彌。それはよう解つて居ります、が、勤まらぬ事は、何と仰せられても勤まりませぬ。

左近。では、是れ程事をわけて賴んでも、其方承知せぬと申すのか。

木阿彌。(ドギマギしてゐる。)

左近。よし、不承知とあらば是非に及ばん、併し、是れ程の一大事を明かした奴を其の儘生かして置くわけにはいかんから、此の場で命を取つて遣る、覺悟致せ。

と大刀を取つて立ち上る。木阿彌仰天して腰を拔かさんとす。

木阿彌。ど、どうぞ御勘辨、命ばかりはお助け下さりませ。

左近。では賴みを聞くか?

木阿彌。さあそれは。

左近。命が惜しいか、惜しくないか。

木阿彌漸く決心する。

木阿彌。是非がござりませぬ。いかにもお言葉に從ひますでござります。

と汗を拭き〳〵答へる。左近右近互ひにほツと安堵の體。

右近。偖左近殿、かう話しがきまつた上は、人目に掛らぬうち、片時も早く事を運ぶに如くはない。就いては殿の御亡骸の始末ぢやが、是れは何うなされる御所存でござる？

左近。御亡骸は、幸ひ此の近くの寺で拙者が住持と懇意に致して居る處がありますから、今夜のうちそれへ參つて、火葬の儀を頼まうと存じて居る。

右近。それは至極好都合ぢや。處で、それにしてもおん身一人でも參られまい。二見雅樂助は、若年ながら忠義無類の侍でござるから、彼を召し伴れて參られたが宜からう。

左近。拙者も左樣に存じて居つた處。では、直樣彼を呼び出して申し聞かせることに致さう。（次の間の方へ向つて）雅樂助、雅樂助。

と密やかに呼ぶ。雅樂助靜かに入り來る。

左近。雅樂助、此の場の話しは、其方も次ぎに居て聽いたであらうな？

雅樂助。は、あらかた承知致して居ります。就いては私事、物の數には入りませぬが、此の後とも御兩所のお差圖を受け、お家の爲めに盡し度い所存でござります。

左近。よくぞ申した。其方の鐵石心は、我れ〳〵疾うより見拔いて居る。今後は猶更心を入れて働きめされ。

雅樂助。有難う存じまする。

左近。（右近に向ひ）雅樂助は一味同體なれば、安心でござるが、彼方に居る道庵めは、如何致したものでござらう？

右近。ふむ。彼も殿の御恩を受けた人間だが、元來が長袖、それにどうやら氣の許せぬ奴。萬一彼奴の口から事が露はれたら一大事ぢや。―― 不憫乍ら、いつその事。（と手で打つ眞似をする。）

左近默つて合點く、木阿彌不安氣なる面持にて人々の顔を見比べてゐる。

左近。雅樂助（と聲を掛け、眼で心を知らせる。）

雅樂助。はゝあ（と心得て勢よく立つ。）

雅樂助は障子を明けて道庵の居る方へ這入つて行く。と忽ち、バサリと手拭をはたくやうな音がして、續いてどたりと倒れる音。

木阿彌座つた儘腰を拔かす。雅樂助靜かな足どりにて出て來る。

左近。どうぢや、首尾宜う遣つたか。

雅樂助。（微笑み乍ら）はい、彼奴め、氣樂に居睡りをして居りましたから、起こして知らせるのも反つて罪だと思ひまして、居乍らで一打ちに、首を落して遣はしました。

左近。それは出來した。では道庵の奴、夢を見乍ら首を無くしたのぢやな、氣樂な男ぢや、はゝゝゝゝ。

右近。はゝゝゝゝ。

雅樂助。はゝゝゝゝゝゝ。

三名同時に、異樣に響く聲にて、淋しく笑ふ。

木阿彌腰を拔かした儘慄えてゐる。

第二場

第一場より約半歳經過す。

筒井家奥庭の一部、築山泉水等數奇を凝す。右手寄りに小高き四阿あり。晩秋の月蒼白く斜めに庭園を照す。

彼方より亂舞の聲賑やかに聞ゆ。

二見雅樂助右手の方より來る。

雅樂助。（邊りを透し見乍ら）はて、まだ來て居らぬやうだ。いつたい來るだらうか、來ないだらうか……？　併し、先刻の口ぶりでは確かに來さうな樣子だつたが……大方それではあの茶坊主めが促まへてゐて放さないのだらう。（と忌ま〱しさうに舌打ちする。ふと彼方を見て）あ、誰かこちらへ來るやうだ。見付けられると面倒だから、少しの間隱れてゐやう。と、繁みの蔭に隱れる。

同じ方より島左近來る。何か思案に暮れつゝ行き過ぎんとす。雅樂助徐かに出て後ろより聲を掛くる。

雅樂助。御家老殿――。

左近。誰ぢや。（後ろを振り向き）おゝ、雅樂助か、其方は今頃恁んな處へ何をしに參つたのぢや？

雅樂助。今宵は餘り月が冴えますので、そぞろ歩きをしてゐたのでござります、

左近。左樣か。（と莞爾り笑ふ。）わしも矢張り月に誘はれて出て來たのだが、年の若い其方にそれ程の風流氣があることは、ついぞ今迄知らなんだ。――時に、殿は何うしてあらせられる？

雅樂助。（不快氣な調子）殿には、不相の御酒宴でござります。

左近。さうか。よくお飽きなされぬものだな。併しまあよいわ、戰が休みの間は、女子衆を相手に御酒宴でもなされるのが、一番お身の藥であらう。

と、落ち付き拂つた樣子にて在りあふ牀机へ腰を卸ろす。

雅樂助は少し離れて立つてゐる。

雅樂助。（急き込んだ調子）御家老殿、いつたいわたくし共は、何時迄此の辛い役目を勤めなければならぬのでござりま

せう？

左近。何、辛い勤め？其方はどんな辛い事を勤めて居るのだ？

雅樂助。あの不貞腐れの茶坊主を、何時迄我れ〳〵の御主君にして置かなければならぬかと、それを伺ふので御坐ります。

左近。これ、靜かにせぬか、壁に耳の譬もある。迂潤に大事を口走つて、萬一人に聞かれたら何とする！

雅樂助。否え、誰も聞く者は居りませぬ。御家老殿のお差圖と云ひ、お家の爲めと思ふばかりに、今日迄我慢に我慢をしてまゐりましたが、此の節の彼奴の樣子を見るにつけ、わたくしは腹が立つて腹が立つて堪まりませぬ。最初のうちは彼奴も神妙にして居りましたが、それが何時の間にか崩れ始めて、近頃では全く傍若無人の振舞ひ、あれでは眞の御主君と少しも異る處はありませぬ。

左近。それでこそ、謀の甲斐もあるといふものぢや。お家の爲めを思はゞ、彼を褒めて遣らねばならぬ處ぢや。

雅樂助。併しわたくしは、餘り莫迦々々しいので、彼奴の頰げたを張りのめして遣り度い事がござります。

　左近は相變らずの調子で莞爾々々笑つてゐる。

左近。若い者はとかく氣が短かくて困る。併し、もう少しの間だから我慢せい。實はな、御連枝定次公の御養子の一件も、樣々手を廻した甲斐があつて、近々のうちに、御家督の相續と同時にお許しの沙汰が下る筈ぢや。是れさへ極まれば彼奴は用の無い人間、元の木阿彌に引き下ろして、何れかへ追ひ遣つてしまふばかりぢや。先づそれ迄は何事も辛抱が肝心、忠義の武士と云はれ度くば、必ず短氣を起しては相成らんぞ。

雅樂助。（今は餘程落ち付いてゐる。）よく解りました。それでは、縱ひどんな事がありませうとも、決して短慮は起しますまい。

左近。よく申した。それでこそ眞の武士ぢや。解つたら、早く向うへ歸るがよい。

雅樂助。では、御免蒙ります。

　雅樂助一禮して元來た方へ引き返して行く。左近は牀机から離れて、鋭い眼で其の後を見送つてゐる――。物凄き笑みが、次第に其の顏に露はれる。

左近。馬鹿者めが、叶はぬ戀に氣を狂はせて居るくせに、忠義々々と煽てゝ遣れば好い氣になつて踊りをつた。併し、彼奴も時には道具の一つぢや。女を餌にして働かせたなら、存外役に立つ人間かも知れぬて。（愉快氣なる面持にて歩き出す。）愈ゝ、已れの望みの叶ふ時節が近付いて來た。あのぐうたらの定次を立てゝ置けば、それから先きはこつちの思ふ儘ぢ

や。大和一箇國を己れの手のうちに入るのも、もう僅かの間になつて來たわい。

と獨り言を漏し、暫時佇んでゐたが、ふと月を仰ぎ何事か心に頷き乍ら、左手の方へ立ち去る。

暫時空隙。蟲の聲のみ微かに聞ゆ。

四阿の後ろより茶人木阿彌、當城の主らしき身なりにて出て來る。

木阿彌。（卑しい口葉の調子）あゝ醉いた醉いた。晝からの酒盛で呑み過ぎたから、一寸醉ひをますつもりで潛り技へ遣つて來て見ると、誰か先きに來て居るので何氣なく四阿の蔭で立ち聽きをしたところが、家老と若侍とが今の話し。どうやら己れの壽命も短かくなつて來たやうだ――。それは初から知れてゐた事だが、後で家老の左近が喋つた獨り言。筒井家の礎とも柱とも云はれてゐるあの左近が、あんな大それた工みを持つてゐやうとは、神も佛も御存じあるまい。人は見掛けに依らぬといふのは此の事だ。やれ〱、怖ろしい話しづくめで、お蔭で醉ひは醒めてしまつた。

（まだ少しヒヨロ付く足取りで左近が掛けた牀机へ行つて腰を卸ろす。）

併、人の事より吾身の上だが、併し、考へて見れば、世の中といふものは不思議なものだ。己れも子供の時分には、馬へ乘つて戰さをして、大名になり度いと思つた事もあつたが、年頃になると酒と女の味をおぼえ、たわけの數を盡した揚句、親兄弟にも見離されてしまつたが、藝が身を助ける不幸せで、どうにか斯うにか茶人で飯を食ふ始末、城は愚か藏を建てた夢さえ見た事はなかつたが、妙な廻り合せから一足飛びに大名になつてしまつた。けれども、一旦斯うして大名になつて見ると、何時迄も大名で居り度くなるから妙なものだ。最後迄頑張つて順慶で通して遣らうか？家來共でも、奥方まででがあの始末だから、疑はれる心配は無い。縱んば誰が何と云つたところで、順慶とちつとも異はないのがこつちの付け目だ――否々危ない〱、他の奴は兎も角も、あの左近の奴が恐ろしい、愚圖々々してゐると、己れは彼奴に殺されてしまふに違ひない、あゝ怖い怖い。（と、思はず身慄ひをする。）

だが待てよ。一體己れは、何んで大名になつてゐたいのだらう？大名なんて、思つた程有難いものぢやないぢやないか？有難いどころか、恁んな厄介な商賣はない。第一人に氣が許せない。あゝ澤山家來があると、誰が何んと思つてゐるかと、年中心配ばかりしてゐなければならない。手近い處があ

の左近だが、まだ他にもどんな悪工みをしてゐる奴が居ないとも限らない。其の上戰さでも始まつた日には、何時城を取られた上に曝し首に掛けられるかもわからない。さう思つた日には、一時だつて安心して居る時はない――うまい物を食つたり、贅澤をしたり、矢鱈にペコ／＼人にお辭儀ばかりされたつて、ちつとも面白い事はないぢやないか。あの上等の料理だつて、近頃ぢやあ俺は鼻に付いて來た。酒宴をしたつて、狂言を觀たつて、此の頃流行りの歌舞伎踊りを連れて來てやらして見たつて、毎日同じ事では飽き／＼してしまふ――。一番我慢のならないのは家來共のあのお辭儀だ。あれを見ると己れは人間を相手に物を云つてゐるのだといふ氣がしなくなる。――とは云ふものゝ、己れも最初はあのお辭儀が莫迦に嬉しかつたものだ。幾許か擽つたい氣もあつたが、何となく偉い者になつたやうな氣がして、莫迦に好い氣持だつた。處が近頃では、それが何ともなくなつて來たから妙だ。どれ程敬ひ奉られても、變哲もなくなつて來た。あいつらがさうするのは當り前の事をしてゐるので、謂はゞお辭儀をするからくりのやうに見えて來た。だから己れは今ではちつとも彼等に遠慮はしない、頭の下げ方が足りなければ叱り飛ばして遣るばかりだ。己れは本統に大名だといふ氣持になる、茶坊主の木阿彌ではなく、大和の國主筒井順慶といふ大將だと、確かにさう思ふ時もある。何だか己れは譯がわからなくなつてしまふ――。

（醉ひは全く醒めてしまふ。牀机から離れてそぞろ歩きをしながら、獨り言を續ける。）

ああ、何といふ好い月だらう。何處かで蟲も鳴いてゐる。恁んな晩には、氣の合つた友達と二三人で、茶でも飲み乍ら浮世咄しをしたらどんなに愉しい事だらう――。そんな事を考へると、貧乏暮しをしてゐた頃の自分が戀しくなる。矢つ張り茶人の方が氣樂でいい。大名なぞは、下らん／＼。

御台所に仕へてゐる腰元若葉（十六七）誰かを探してゐる樣子で左手の方から出て來る。軈て木阿彌の姿を見つける。

若葉。それにおいで遊ばすのは、お殿樣ではございませぬか。

木阿彌駭いて振り返る

木阿彌。（尊大な態度）おゝ、そちは若葉か。今頃こんな處へ何しに參つた？

若葉。わたしは、お殿樣をお探し申してゐたのでございます。先刻から、御殿の內やお庭中を、あちこち探して居りました。

木阿彌。何でそんなに探したのだ？

若葉。でもお殿様が、今宵は御寮様の所へお越しになられるお約束ゆゑ、早く探してお連れ申して來るやうにと、御寮様のお云ひ付けでござります。さあ〳〵少しも早う、わたしと一緒にお越し下さいまし。

木阿彌。（一寸顏を顰めて）うむ——。だがな、予は今夜は頭痛がしてならぬのだ。恁うして獨りで居る方が氣持が快いのぢや。

若葉。でも、其の樣な事を仰つしやるものではござりませぬ。今宵は久方ぶりの事ゆゑ、御寮樣がそれは〳〵お待ち兼ねでいらせられます。どうぞわたしと一緒にお越しなされて下さりませ。

木阿彌。これ若葉、そちはえらう忠義者ぢやな。（と云つて若葉の顏をまじまじと眺めてゐる。）

若葉。あれ、其の樣にわたしの顏を御覽なされては厭でござります。（と袂で顏を隱す。）

木阿彌。そちがそれほどに申すなら參つて遣らう。したが若葉、そちはよつぽど可愛い奴ぢやぞ。（と出し拔けに手を執つて引き寄せる。）

若葉。あれ、そんな事をなされて、御寮様に知れると大變でござります。

木阿彌。知れたら知れた迄の事ぢや、そんなに御寮を怖がらなくてもよい。己れは今日迄、そちが是れほど美しい女だといふ事に氣が付かずに居つたわい。是れからは、己れが可愛がつて遣はすがどうぢや。

若葉。お殿樣、どうぞ放して下さいませ。

木阿彌。返辭をせぬうちは放しはせぬ。

若葉。では…… 若しそれがほんまのお言葉なら、わたしや嬉しうございます。（と云つて、男の胸へ顏を埋める。）

木阿彌。（急に感興の醒めた顏付きになる。靜かに押し離して）よし、よし。では、其の場に到つて知らぬなぞとは云はせぬぞよ。さあ、そちは一足先きに行け、己れも直ぐ後から參るから。

若葉。（猶もじもじして立ち去らずにゐる。）

木阿彌。早う行かぬか。

若葉。はい——。

若葉漸く元來た方へ引き返して行く。

木阿彌。あれだ——。磁石に吸ひ付く鐵のやうに何の手應へもなく靡かれてしまふので、折角ムラ〳〵としかけた奴か、ぬるい白湯でも呑まされたやうなつまらない氣持になつてしま

ふ。唯の一度だつて、厭だと云つて頭を横に振つた女はない。大名といふものが、女の眼にはそれ程有難く見えるのかしら――。時に、厄介なのはあの御寮様だ。大名の奥方なんていふものは、床の間に飾つた雛人形のやうに何時も品よくしてゐるものかと思つたら、それこそ大違ひだつた。どうだ、あの焼餅の焼き方は。いい齢をして、色氣違ひのやうにさわぎ廻つてさ、それで側へ行つた日には、しつこくて、舌たるくて、どうにもかうにも我慢がならない。一體上つ方の女になるほど、物の不自由がなくて、體の閑があり過ぎるから、年百年中男の事より外は考へないのだ。女房には矢つ張り苦勞をした女がいいな。大名や公卿のお姫様は眞つ平だ。御寮に引きかへて、あのお絹の方の程のよさはどうだ。己れも随分女の數は知つてをるが、今迄にあんな氣持のいい女には出會つたことがない。あれは以前は京都で白拍子で名を賣つた女だといふはなしだが、さう云へば何處となく灰汁抜けがしてゐる。第一女がよくて、温和しくて、情が濃やかで、それで何處かにぴんとした處があつて、先づ申し分の無い女といふものだ。

處がどうだ、あの青侍の二見雅樂助がお絹の方に思ひを掛けてゐるから可笑しい、全く左近が云つた通り、あれで忠義面が聞いて呆れるわい、おまけに女の方では嫌ひ抜いてゐるのだもの、どう思つたところで物にならう道理はないが、そこに氣が付かぬとは餘つ程馬鹿な侍だ。併し、彼奴は己れにとつては油斷のならない相手だ。戀の叶はぬやけ腹から萬一此の身の秘密を喋り立てられては一大事と思ふから、それとなく女に言ひ含めて柳に風と受け流させてゐれば好い氣になり、獨り合點の色男氣取りでゐるから罪は無い。今夜も此處でお絹の方と會ふ約束をしたとかしないとか云つてゐたが、夜露に打たれてどれ程待つて見たところで、何で女が出て來るものか、あはゝゝゝ(と愉快らしく笑ふ。)お絹の方の事を思ひ出すと、己れは自分を幸せ者だと思つてくる。さうだ、己れが何時までも此處に居たくなつたのは、お絹の方といふものがあるからだ。もしあの女が無かつたなら、己れは明日からでも惜し氣なく大名を止めて見せる。そして乞食になつたつて、己れは其の方がよつぽど増しなくらゐだ。けれども、お絹の方を此處へ殘して、己ればかりが追ひ出されてしまふのはいかにも情無い、それくらゐならいつそ死んでしまふ方がいい――。あゝ、己れはあの女と別れては生きて居られない――。己れは此齢になつて初めて今度眞實の戀をおぼえたのだ。己れが現在恁うしてしてゐる事は何も彼も嘘な

かりだが、併し、此の戀だけは眞實だ。どうかしてあの女と別れずに濟む法はないかしら――？

だが待てよ、あの樣子では、女の方でも十分己れを思つてゐて呉れるのに違ひない、あれが嘘僞りや手くだだらうとは思はれない、屹度心底から、此の己れを好いてゐるのだ。して見るとそんなに氣を揉む事はないかも知れん。己れが化けの皮を剝がれて此の城から追ひ出されて行く時になつても、あの女は己れに愛想を盡かすやうなことはないだらう、大名だらうが乞食だらうが人間に變りはない、一旦思ひ込んだ男となら何處へでも一緒に行くと云ふに違ひない。さうなつたら己はあの女を連れて京都へ行つて、二人で愉しく暮すことにしやう、其の事だ、其の事だ。（稍暫し空想的な思案）お絹の方の事を思ひ出したら、御臺のところへ行くのが厭になつた。えゝまゝよ、今夜もお絹のところへ行つてやれ。

（と急に思ひ立つたやうに步き掛ける。と、何者かの姿を認めて立ち止る。）

あ、又誰かこつちへ來るやうだ、確かに女の姿だから、大方御臺の迎へ催促だらう。見付けられると煩いから、一寸茲らで隱れてゐることにしやう。（と、立ち戻つて邊りを見廻し、やがて木の繁みの中へ姿を隱す。）

頼燮の愛妾お絹の方（二十二三）右手から一人でやつて來る。濃艶なる風情。

お絹の方。（落ち付かぬ體であちこち見廻す。）先刻源三郎樣と、四ツを合圖に此處で出會ふ約束をしてあるが、まだお見えなさらぬ樣子、いつものやうに、あの四阿で待つことにしませう

お絹の方四阿の內に入り、牀机に掛つて恍惚とした體で泉水の方を眺めてゐる。間もなく左手から小姓結城源三郎（十六七位に見える、女のやうな美しき顏立ち）出て來る。立ち止り、四阿の內にお絹の方の姿を認めて、忍びやかに聲を掛ける。

源三郎。お絹殿――。

お絹の方。（無言。依然として池の面を見詰めてゐる。）

源三郎。（四阿の內に入り、女の背後から肩に手を掛け）もし、お絹殿。

お絹の方。（初めて氣が付き駭きたる體）あゝ吃驚したこと、あなたは茲へ何時おいでなさいました？

源三郎。只今來たばかりでございます、したがあなた樣は、餘つ程お待ちなされましたか？

お絹の方。（慣つたやうな調子）待ちましたとも、四ツを合圖とあれ程固い約束ゆへ、わたしや馬鹿正直に、疾うから茲へ

來て居りました。

源三郎。（莞爾りと笑み、側へすり寄つて腰を掛ける。）それならば、只今が丁度四ツを打つたばかり、まだ格別お待ちなされる間はございますまい。

お絹の方。まあ來る早々憎い物の云ひ樣、あなたも偶には待つ身になつて御覽なされませ、縱ひ一時の萬分の一でも、それがどんなに永いものかと云ふ事がおわかりになるでございませう。あなたは、わたし一人に氣を揉ませるのが、それほど面白いのでございますかへ？

源三郎。是れはしたり何を仰しやいます。私の言ひ方がお氣に障つたのなら、どうぞ御勘辨なされませ。したがお絹殿、氣を揉むのはあなた樣ばかりではありませぬ。大それた、家來の身として御主人のお部屋樣と戀をするからには、どうせ命まで投げ出してゐる仕事。それを來やうが早いの遲いのと、些細な事をお腹立では、私の方にも、少しは云ひ度い事がございます。（と顏色を變へて傍を向く。）

お絹の方。（慌てゝ男の側へすり寄り、其の手を取つて無理に自分の方へ向かせやうとする。）あれまあ、あなたは本たうに憤つたのでございますかへ？ほほほほほ今のはつい冗談に云つたまでの事、さあ、機嫌を直して、一寸こちらを向いて下さい

さませえなあ。

右手より二見雅樂助忍び足にて近寄り、物蔭より兩人の話しを立ち聽く。二人は少しも心付かず。

源三郎。時にお絹殿、今宵會つて相談したい事と仰しやつたのは、一體何事でございます？

お絹の方。それは追ひ〳〵申しませう。が、其の前に、あなたに聞いて置き度い事がございます。

源三郎。改まつて、何事でございます？

お絹の方。（稍羞恥の表情）外でもないが、源三郎樣、あなたはわたしをどう思つておいでございます？

源三郎。藪から棒の妙なお尋ね、さあ、何と御返辭をしたらよいか――とにかく、あなた樣は、御主君樣の寵ひ者――

お絹の方。あれ、そんな事を聞いてゐるのではございませぬ。わたしとあなたとは、ふとしたわけから恁うした仲になつたものの、あなたのお心がわたしは氣掛りでなりませぬ。一時のなぐさみになされてゐるのか、それともわたしと末永く添ひ遂げる御了簡か、それを聞かせて下さいませ。

源三郎。其の樣な事なら、今更改まつて云ふまでもないこと、一時のなぐさみなら、恁んな恐しい、命がけの戀は致しませ[illegible]

疾うから極めて居りまする。

お絹の方。それを聞いてわたしや安心致しました。では、相談といふのは外の事でもござんせぬ、わたしを伴れて、此處から遁げて下さいませ。

源三郎。えツ、あなた樣と遁げる？

お絹の方。其の樣に駭いて、あなたは厭でござんすかへ？

源三郎。（迷惑さうな顏をする。）厭だとは申しませぬ。だが何故急に其の樣な事を仰しやるのでござります？

お絹の方。わたしはもう一日も此處に居るのが厭になつたのでござんす。もと／＼金で買はれて來たも同然のわたしの體、勤めの辛さは豫てから覺悟の上でござんすが、あなたといふものが出來てからは、つくづく今の身の上が情無くなりました。それに、どういふものか、殿樣が今度伊勢からお戻りなされてからといふものは、御病氣だと仰しやりながらちつともそんな樣子はなく、わたしを側へ寄せづめなので、戀しいあなたとも碌々話しも出來ぬ有樣、此んな事ならわたしや生きてゐる甲斐がありませぬ。（泪を拭く。）其の上近頃御近習の二見雅樂助が、わたしを捉へて無體の戀慕、餘り腹が立つてならぬゆへ、殿樣へ申し上げてきつい仕置をして遣らうと思つたところ、あの憤りつぽい殿樣が、どうしたわけか是ればかりはお聞きなく、仔細があるから當分のうち雅樂助を好い樣にあしらつて置けといふ無理なお云ひ付け、でも仕方なく、程よくして居れば好い氣になり、何の彼のと付け廻すので、蒼蠅くて／＼なりません。それや是れやで、わたしや御殿勤めがふつふつ厭になりました。

源三郎。したが此處を駈落して、何處へ行くのでござります？

お絹の方。差し當り京都にでも落ち着いて、あなたと二人で愉しく暮すのがわたしの望み。さうなればどんなに嬉しい事でせう――（と空想的の眼付をする。）

源三郎。（冷淡な調子）でも私は、此處の殿樣のお扶持を離れたらどうすることも出來ぬ人間でござります。まだ武藝は未熟なり、働く業は知らず、あなた樣と夫婦になつても、終ひは乞食をするより外はありませぬ。

お絹の方。ほゝゝゝ、莫迦らしい、何を仰しやるのでござんす、此の絹は、今でこそ大名のお部屋樣で、お米の値段も知りませんが、子供の時分から、骨が碎ける程世間の波に揉まれて來た女、可愛い男にそんな苦勞をさせるくらゐなら、夫婦にならうとは申しませぬ。あなたのお世話にならずとも、二人が生涯氣樂に暮らせるだけのお金をわたしが持つて行きますから、そんな御心配には及びません。それでもあなた

は、まだ何かお氣に入らぬ事がござんすかへ？

源三郎。（默してゐる。）

お絹の方。もし源三郎樣、何とか御返事なされませぬかいなあ。

雅樂助。其の返事は身共が聞かして遣らう。

　兩人愕然として立ち上る

雅樂助。（憎惡に燃ゆるまなざし）不義者見付けた、一寸も其處を動くまい。

　と云ひ乍ら四阿の中に入り、猿臂を伸して源三郎の襟髮をムヅと摑み、外へ引きずり出さうとする。

お絹の方。（慄え聲）雅樂助殿、此の子を何處へ連れて行くのぢや——。

雅樂助。（憎々しく笑ふ。）何處へ行かふと身共の勝手ぢや。併し、主君の寵ひ者と不義密通した極惡者の源三郎、いづれは縛り首の上曝し者にされるのだ。あはゝゝゝ。

　お絹の方、相手の油斷を見すまし、懐劍を拔いて雅樂助に斬り掛ける。雅樂助ヒラリと體を替して、一當て當てる。お絹の方「うん」と云つて其場へ倒れる。源三郎最早是れ迄と刀を拔いて斬つて掛かゝる。

雅樂助。猪口才な小童めが。（同じく刀を拔く。）

　兩人二三合劇しく打合ふ。源三郎は忽ち肩先深く斬り下げられてどうと倒れる。雅樂助血刀を提げた儘心地よげにそれを眺めてゐる。兇暴な表情——。

雅樂助。態を見ろ。（お絹の方が倒れてゐる側へ寄り）此の女めも憎い奴だ、よくも人を嬲り者にしたな、是れで思ひ知つたか。（と、脊中から刀を突き通す。低き悲鳴——）はゝゝゝ（狂人の如き目付。軈て刀を鞘に納め、暫し茫然としてゐる。）かうなればもう破れかぶれだ、所詮此處で奉公の望みは無い。さうだ、今夜のうちに伏見へ驅けつけ、何も彼もぶちまけて秀吉公へ訴人をして遣らう、それが一番上分別だ、さうだ／＼。

　と獨り頷き後前見廻して驅け出さんとする一刹那、何處よりか手裡劍飛び來り、雅樂助の首筋へグザと立つ。「あツ」と叫んで倒れる。

　左手より島左近出で來る。徐かに、倒れてゐる雅樂助の側へ寄り、刀を拔いて止どめをさす。其の後で手裡劍を拔き取つて紙にくるんで袂へ入れ、悠然とした足どりで右手の方へ立ち去る。

　木阿彌、繁みの中からそツと顏を出し、ヒヨロ／＼とよろめき乍ら出て來る。土色の顏色。死骸の一個に躓き、ガタ／＼慄え出して尻餅を突く。

——終　局——

再び日本を去るに臨みて

佐々木指月

書いたインキの乾かないうちに、書いたことは、もう變つてしまつてゐるのが今日の日本だ。今朝新しかつたものは、もう晩には古くなつてしまつてゐる。それは全く昔から、日本のまんなかの、然もお江戸のまんなかに、それがあつたことをもつて誇りとされてゐた魚河岸氣分だ。

魚をたべる日本人の文明も、やはり魚の一種だ。鯛であらうが比目魚であらうが古くつてはしかたがない。海外から新しい文明が一と船ごとにやつてくると、思想の魚河岸は忙がしい。初鰹のやうに、鮊子のやうに、その文明は景氣よく飛ぶ。えい、べらぼうめ、まごまごしてゐれば腐らい！

そのはげしい新と舊との變遷の渦卷きの日本へ、鮹の如く、烏賊の如く、船に積まれて、ぐにやり、ぽうと歸つて來たのは、三年前の私だつた。何か然るべき仕事を見つけて吸ひつかうと思つたが、歸つて一晩たゝないうちに腐つてしまつて、そのまゝ掃き溜へ捨てられるところを、拾ひあげてくれたのが、文壇と云ふ魚屋さんだつた。

その後の二十四ケ月。私の住んだ日本は氣忙しかつた。目まぐるしかつた。きたなかつた。私の眉間の皺はだんだんに深くなつて、今ではそれは刻みつけられてしまつてゐる。私の心は蝕まれた。四つにも五つにも。さうして私の體は、早稲田町の五十五番地の、お寺の裏にちぢこめられて、鯣の如くにひからびてしまつた。

夏は三度過ぎた。冬は二度過ぎた。夏の間に建てられた近所の家は、冬の間に焼けてしまつた家の數と殆ど同じだつた。さうして新らしく建つた家は、また焼ける材料と、また焼ける條件とのもとに置かれてゐる。私の印象に殘つた早稲田町は、詩家の描く下繪の如く、消されては畫かれ、畫かれてはまた消されるものに過ぎない。明日の事を考へる人たちは、この町には住んでゐられない。テーク、ノー、ソート、フォア、ゼー、モロー。今日のことは、今日だけでいいと思つてゐる人だけが、

この町に住んでゐる。そのくせ、キリスト教會は一軒もないが、尤も、そんなものはこの人たちには用はあるまい。

だが、私はさう思ふ。かうした人たちは、或は日本ぢうに住んでゐるのではあるまいか？と。つまり、かうした町のあつまりが日本の國であるやうに私の目には見えてくる。昨日のものが今日は古くなつて、今日のものが明日は古くなる。それは全く、すうつと通つて行く旅人が、顔を見せて、また、うしろを見せるやうなものだ。踏みとどまつて、眤と考へて永續して行く何ものもない。そんなことをしてゐれば腐つてしまう。

ラツセルは行つてしまつた。アインシユタインが來るさうな。えゝ、かう！魚河岸の兄いもいそがしいや。

○

變る、變る、變る、何でも變る。私がはじめて、右の手を父にとられて、左の手を母にとられて、足に草履を結ばれて、連れ歩かれた東京を、今になつて考へると、それは全く夢に見た街を尋ねて、はてな、あれはどこだつけ？と、思ふやうなものである。思ひ出して、今のそれとを比べると、昔のいいところだけが胸に殘つて、なんだかそれがなつかしい。

鐵道馬車は、新橋から上野まはりと淺草まはりが往き來して、あとは歩いた東京は、何となく今よりはゆつたりとした空氣のなかに包まれてゐたやうだつた。根津の女郎屋は洲崎へひけて、私たちは上野へ行くのに、向ケ岡をだらだらと下りつくすと、そこには一面の原があつて、天王寺の五重の塔の頂きが、遠景に見えたものだつた。

その頃、原はまだたくさんあつた。水道橋向ふの三崎ツ原は、草蓬々として小川町の街燈が、その草の穗かげに見えたものだつた。白鬼が出ると云ふので、女、子供は日の暮れ方から通らなかつた。薩摩ツ原では追ひ剝ぎが出た。私の今、住んでゐる早稻田田圃は狐が出た。

なにしろ不便は不便だつた。その頃早稻田から洲崎まで行かうと思へば、先づ神樂坂を下りて、どんどん橋の袂から川舟にのつて、お茶の水から、めがね橋へかゝつて、柳原の土手を歩いて、兩國から永代まで一錢蒸汽へ乘つて、蛤町の河岸からまた小舟へのり換えて、深川のまッ青な川を通つて行つたものだ。尤もそれは私の十六七の頃だつたが、朝立つて日のあるうちに歸れたためしは先づなかつた。

それが今では電車に乘つて一時間。東京も開けたと云へば云へる。その變りどこもこゝもとの風致は滅茶滅茶だ。丸髷のおかみさんが、自轉車にのつて驅け出したといふありさま。殺風景になつてしまつた。

名所で鳴らした隅田川も、もう駄目だ。水神の杜のあたりには工場の烟突が立ち並び都鳥は行くへに迷つた。待乳山は肥たご桶にとりかこまれ、三圍稲荷の蓮の田圃は埋められて借家が並び、堤の櫻はみんな枯れて、竹屋の渡しも、牛の御前も、おせつ徳三郎の昔噺とともに忘られかゝつてゐる。

何でもハイカラ、かんでもハイカラ。文明はハイカラでなければ夜も日も明けない。文武、文武と夜もねられずと歌つた蜀山人の狂歌は昔のこと、今では、文化！文化！どんどんどん。文化！文化！どんどんどん。まるで樂隊が囃したてるやうで、とても、やかましくッてたまらない。だが所謂その日本のハイカラ文明、所謂その文化生活とはどんなものか？

一言にして評すれば、それは柳原の土手で西洋の古着を見てまはるやうなものだ。全部和製の洋服だ。それも仕入れものだ。たまに舶來があつても、それは生憎からだに合はない。

○

さて、そこで、日本のハイカラ文明、並びに文化生活の中心は、どこであらうかと考へて見る。丸の内か？銀座か？

江戸城の跡の石垣のなかは知らない、何しろあのお濠のなかへ、帝劇の便所の水の流れ込むあたりから、彷彿として漂ひきたるものと思へば間違ひない。

東京驛を中心として建ち並ぶ、へんてこらいな建築の數。さつと見て廻つたところではお寺のやうで役所のやうで、ホテルのやうでお堂のやうで、さうかと思ふと事務所があつて、さうかと思ふと圖書館の入口のやうで、劇場のやうな建物だと思ふと、お墓の門のやうなものがついてゐる。どこの國の建築家が設計したか知らないが、建物だつて人間のやうに身分相應のつらがまへと云ふものがあるものだ。

市我古あたりにありさうな、舊式なアパートメント、ハウスのうしろから、汽車や電車が飛び出したり、ガーデンをめぐらした別荘のなかに、暑休ぬきの腰辨の巣があつたりした日にはやりきれない。よく郵便局のかはりに、スカイスクレーパアを建てないのが感心だ。この春の地震にはあの長い東京驛が、蛭のやうに動いたと云つて、腰をぬかした外國の建築技師があつたさうだが、若しも、紐育あたりの眞似でもして、スカイスクレーパアなどを建てやうものなら、あたり近所は災難だ。ぽつきりと飴ん棒のやうに折れるだらう。さうなると、日本の地震には、スカイスクレーパアキラ——摩天閣殺し——と云ふ名稱がつくね。

それは兎も角、今の話のハイカラ文明の震源地は、この茶々滅茶苦茶ふやらふやらの建築地帶のみならず、あのアメリカの

支那人街にさてもよく似た所謂オフィス町の山勘横丁——但し飯をたく臭ひもするが。それから、紐育の猶太町、イーストサイドのグランド街にそつくりな銀座通り——露店もそこには毎晩出るが——その邊からゆるぎ出すものと思へば、先づ當分さしつかへあるまい。

或は、三ツ越、白木屋の、百貨商店がその中心となつてゐるかも知れないが、幸か不幸か私はまだ一度もあのあがり口で、靴にぢやが諸の袋のやうな、ものをかぶせたことがない。それ故、なかの事は江戸城のなかと同様、私の知つてゐる限りでない。何しろ恐ろしくつて、所謂日本のデパートメント、ストアと云ふものへ入つて見る氣がしない。さはらぬ神に祟りなしと云ふこともあるからな。

目尻のつるしあがつた純日本式の美人人形が、冬瓜の凍つたやうにかたくなつて、あたまには、オーストリッチの飾のついた美人帽子をいただきながら、からだには、看護婦の着るやうな、白のユニオンスーツなんか着たりして。そんなものを見せつけられると、至つて氣の小さい私だもの、目をまはさないとも限らない。これから長の旅行をしやうと云ふ大切の體だから、先づ上つて見るだけはよして置かう。

しかし外から見たところでは、私の行く山下の米久のあがり口と變らない。入口に下足番が札をそろへて立つてゐる。たゞそれが雜貨店と、牛鍋屋との違ひがあるだけで、どちらも日本現代の文明を代表してゐる點は同じだ。

西洋の文物をとり入れて、日本のソースでクックすると云ふ點に至ると牛鍋は理想に近い。次は女學生のスタイルで、あたまは七三に角ピン、デークリーム、ナイトクリームをお顔の皮に塗り分けて、その上に御園お白粉、クラブお白粉。長い袂は日本風で、袴は西洋のマルーンスカートをそのまゝ、脛にはスタッキング、足には靴。なんの事はない、男が洋服に足駄をはいて、縮緬のネクタイを結び、蛇の目の傘をさした寸法。和洋折衷、牛鍋式だ。次が銀座のギユウ、ゴオウ、タウン。ギユウ、ゴオウと云ふのは見かけ倒しの安物と云ふ意味だ。次が丸の内のビルデング、セクション。但し汚穢屋の牛車は、洋食に醬油をつけて出したと同じ洒落か？

○

だが、私は何も行きがけの駄賃に口から出まかせの惡口をいつたり、船へ乘つて逃げ出す間際に、あかんべろりんをするわけではない。いくら他家へかたづいても自分の里を惡しかれと願ふ嫁はない。こゝが自分の產れた國だと思へば、少しでもいいところを見つけ出して、故鄕には金の茶釜が据はつてゐるや

うに云ひふらすのが人情だ。

けれども、その金の茶釜が實際は土釜だつたり何かすると、里歸りの嫁の心は現實にうらぎられて、愚痴の一つも云ひたくなる。兄弟のだらしなさをけなしたくもなつてくる。歸つてくる早々、何んだいこのざまは！また出てゆく時には、もう少しどうかなりさうなものだね！と、遂ひ皆の氣にさはる捨臺詞をも殘す氣になるのだ。

實は私はさう思つてゐた。西洋の文明は物質の文明で、東洋の文明は精神の文明だと。

ところが、一度日本へ歸つて見ると、物質の文明の西洋に及ばないのはこれは致し方がないとして、然し私が十五年來、自己の誇としてゐたその精神の文明すらも、どうやらなつてゐないではないか。

東京の往來を見て、どこかに精神の文明があらはれてゐるかい？家に置くべき、ワイフに股引をはかせて、えんやらほいと汗みづくで車のあと押しをさせてゐる。西洋のワイフなら早速離縁を申し込むところだが、日本のワイフは感心だ。高い坂を上りきつて、亭主野郎は樹の蔭にふんぞりかへつて烟草をふかしてゐる間にも、自分はそこらの井戸を尋ねて、手拭を洗ひにゆく。夫婦ともかせぎ。なる程、精神の文明と云へば云へる。だが待つてくれ。動物虐待だと、他國の人は思ふだらう。

また家庭での、日本の精神文明とはどんなものだ。一つの屋根の下に、二た夫婦も三夫婦も住んでゐて、禮讓とか云ふものを重んじてゐる。一寸、夜分に厠の前で、人の細君に出合つても、まあ御先へと云はなければならない。それが面倒なら、寢床のなかで、もぐもぐやつて朝になる迄我慢をしてしまう。何しろ人間は動物ではないと云ふ考をもたないと、かうした家庭の共同生活は出來ない。さうして、さう考へることが、東洋人の持つべき正しい心がけらしい。

錢湯で、三助が、ふんどし一つで、人妻の脊中を洗つても東洋の精神文明には牴觸しない。然し電車のなかで、美人に席を讓ると、まはりの人が、小鼻をぴくりと動かす。或は東洋の精神文明には悖るものと見える。なにがなんだか、さつぱり分らない。

一體、東洋の精神文明とは何んだ。日本のどこに、この國民の誇とし、西洋の物質文明とコンペーヤ、ウイズすべき所謂東洋の精神文明の發露があるか。山にか、町にか、芝居のなかにか、旗亭にか？なる程、武士道は浪花節のなかにある。神田あたりのカフエへ入つて、和製の葡萄酒をひつかけると、あたまががんぐり返つてブシドウとなる。但しそれは二十五錢でこと

が足りる

○

考へて見ると、いや考へなくつても、日本には誇るべき物質文明はもとよりない。さうして、その祖先傳來の精神文明と云ふものも今ではもうなくなつたも同樣だ。たとへそれがあるにしても、今の時勢には役立たない代物だし、またそれをもつて西洋に對して誇ると云ふわけには行かない。

中岡艮一の名を呼んで東洋精神の表現となすなかれだ。松本訓導、小野訓導の名を呼んで東洋文明のシンボールとするなかれだ。東洋文明のシンボールも、その後少し流行の氣味がある、或は四角なカードボールド一枚の爲に、火のなかへ飛び込んで死んだ××××や、或は××××××××に恐れ入つて命をおとした××××や、それが東洋文明だつたら活きてゐる我々はきまりがわるくつてたまらない。咲く櫻より散る櫻を無上の光榮だと思つた、敷島の大和心の後繼者は流石に違つたものだ。

丸の内を讃嘆し、銀座通りの銀ぶらを文化生活だと思ふ人々よ。眞の日本人の生活はそこにはない。眞の東京の空氣はそこにはない。先づ試みに銀座通りの横丁を一寸まがつてごらん。タバコ屋のおかみさんが見世先に立て膝して、團扇をばたつかせて、黃染ためやうな腰卷の裏へ、夜の風を送り込んでゐる。あすこに日本今日のほんとうの文明がある。また試みに、そのタバコ屋の路地を一寸這入つてごらん。君たちの白づくめの洋服が黃色く染りはしないかと思はれる程な、うんこの臭ひがぷんとする。あれが東京のほんとうの空氣なんだ。

この間、神田明神境內の開花樓で、私のための送別會がひらかれた時、その樓上から眺め渡した一望の東京は、なるほど、下町の方に、ぽちやぽちやとしたハイカラ文明のおしるしのやうなものが立つてはゐた。然し如何せんその餘はたゞの瓦屋根の原つぱだ。淺草、本所、深川は、たゞ一面に灰色の繪の具を塗つたキアンバスに過ぎなかつた。若しも一人の巨人がゐて、その大きな足をあげて歩くとしたら、千住邊から日本橋あたりまでは爪先にひつかゝる小石ほどの凸凹すら感じない事であらうと思はれた。日本の首府東京の文化が何だい！

○

それから、あの電車だ。八幡不知は藪ではない。現在の東京の電車の線路が卽ちそれだ。そのわけのわからぬ道筋を、ボールトのゆるんだ電車がぐらぐらと、おたまじやくしを呑み過ぎた蛇のやうに、黑いかたまりを口から吞んで、おしりからこぼしながら走つて行く。なかにゐるものは、もまれて垢まで落ちる

から錢湯へ行く必要がなくなる。ことにこの頃の暑さでは、まるで蒸風呂のなかも同じだからね。湯錢も一緒に拂つたと思へば、往復の十五錢はあんまり高くもなささうだ。

さうしてたまには停電で、なかで懇親會がはじまる。無論會費も含んでゐる。藝者をあげたつもりで美的のまはりにみんなしてぶらさがる。尤も外にあいたところはたくさんあるが、どうせ同じ會費なら少しでも女のわきへよらないのは損だからね。さうして皆は心もちよささうに、ぐうぐう寝る。おいおい、十五錢でホテルの代もかねたのでは、少し安すぎはしないか？

のみならず、車掌さんの掛け聲を聞いてゐると面白い。『お早く願ひます』とくる。チンチン、『へい電車は動きます』とくる。日本の電車も動くから不思議だ。『どなたもしつかりと吊り革につかまつて下さい。』なんの事はない赤ん坊を乘せた乳母車が動き出すやうなものだ。それもそのはず、乘り卸りをする人々ののろさ加減と云つたらない。たゞ先を爭ふだけでいつまでたつてもはかどらない。こんな緩慢な民衆が、もしも紐育あたりの地下鐵道のエツキスプレスにでも乘らうとしたら、一日待つたつて乘れツこない。

向ふでは、誰が何んとも云はなくとも民衆はすぐ一列に列を組んで、五十人でも百人でも見てゐるうちに乘つてしまう。電車にのるのは無論のこと、切符を買ふにも改札口を通るにも、みな順ぐりだ。そんな公衆のあつまる處で、先を爭ふと云ふやうなことは決してない。

何しろ日本の人たちの大部分は、まだ近世の都市生活の試練を經てゐないいはゆる山だしだから始末に了へない。あの電車に乘らうとして爭ふところの顔と云ふものは、如何にも貧弱國の貧弱市民の境涯があらはれて、もう、もう、こんな國へは二度と再び歸つて來まいと云ふ心を私に起させる。

十本入り一と箱の卷烟草を、一本二本と小買ひする紐育のイーストサイドの貧民でも、もう少しは秩序と云ふものを保つて、公德心なるものをわきまへてゐる。何んだい、あの喰ひ醉つて、電車の中で喧嘩をしたり、へどを吐いたりするさまは、お乘り合はせの文化生活のハイカラさんには、ちと、お氣の毒でございやす。

○

それから今度は洋服だ。男の洋服と女の洋服と、子供の洋服だ。

由來日本人の洋服ほど、日本人の模倣した西洋文明と云ふものを明かに語り得てゐるものはない。

日本人は、洋服を實用よりは虚榮のために着ると云ふ心もちをもつてゐたのは事實だ。今ではさう云ふものは大部減つたらうけれどもたしかに昔はさうだつた。洋服を着ると、それを着た御當人は何だか豪くなつたやうな氣がしたし、それを見るはたの人も、その洋服さんを豪い人のやうに思つた。

なぜだらう？なぜでもない。洋服は西洋の模倣だからである。それぐらゐ西洋の模倣と云ふものは尊かつた。日本人は豪がらんがために、きそつて西洋の模倣をやつた。

さうして日本人は他人に對してはその模倣し得た西洋をふりまはし、自分だけでゐる時には昔のまゝの日本人をさらけ出してゐた。ゐたぢやアない。今でもさうである

朝、外出する時には洋服を着て出かけるが、晩に宅へ歸つてくると、すぐにそれを脱いでしまう。これを見ても日本人のやつてゐる西洋文明と云ふものは、帽子のやうにあたまへのつけ、靴のやうに足へはき、身のまはりにとりつけた一種の飾りに過ぎないと云ふことがわかる。

尤も、近頃では、洋服を着た脊中へ、六尺ふんどしの結びツこぶをふくらまして歩く人が多少減じたゞけ、それだけ西洋文明の模倣も深入りして來たと云へば云へる

晝間見たフロックコートの紳士を、夕方から訪問すると、浴衣がけの大胡坐で、一ぱいやりながら、ハイカラに結んだ若奥様に團扇で蚊を追はしてゐる。

その奥様も、髮だけは西洋風だが、御結婚の儀式は純日本風の三々九度で、遂ひ二三年まへにおすませになつたさうである。それでもこゝは東京のお住ひだから萬事文化生活とあつて、蓄音器に、扇風機。尤も蓄音器は御食事の時には氣ぜはしいし、扇風機は奥さんのお髮が亂れるとあつてたゞ飾つて置くだけで御使ひにならない。たまに蓄音器が鳴るかと思ふと鴨緑江節。たまに扇風機がまはつてゐるかと思ふと、お風呂上りの奥様が、お湯巻一つで、汗をお乾しなすつてゐらつしやるさうである。

然し、御郷里のお邸は、竹の垣根をめぐらして、文化の空氣も入り込むに隙間なく、御隱居様への御對面には、奥様のハイカラではおゆるしがなく、丸髷にお結びになる。旦那様も、洋服の膝がのびるとかで、停車場側の旅館に一時お小憩みののち、西洋の臭みはすつかり羽織袴にお召し換え。近頃流行の水力電氣のうす蒼く朦朧とした光さへ、御門のなかへはまだ引かれてゐない。尤もなかは御隱居の御威光で光り耀いてゐると云ふことだ。

日本の西洋模倣は先づこんなもの、一體日本人は西洋を模倣

するのか、やめるのか、どつちにするのだい？模倣するときめたのなら、洋服の着こなしぐらゐは心得て置くがよい。着るものなら着るやうにして着ないと、第一不經濟だ。

物は模倣するにも順序があるし、皆それぞれプリンシパルと云ふものがあるものだ。無茶苦茶に眞似すれば、それでいいと云ふわけではない。

○

日本の所謂ヒルデングスが、ふやらふやら式なのは前にも述べた通りであるが、日本人の着てゐる洋服も、また、ふやらふやら式である。

洋服にだつて、羽織もあれば、絆纏もある。裃もあれば、鎧もある。浴衣がけの時もあるし、前垂がけの時もある。英國の皇太子が、印絆纏を着て、腹掛、股引で舞踏會にのぞまれたと云ふ話をきいて、愛嬌としか思へない。しかし、日本人は、それと同じ事をやつて、頗る眞面目なのだから吹き出さずにはゐられない。

スモーキングジヤケツトと云へば先づ日本の浴衣がけと云ふところだ。浴衣がけで、大學の教室で、博士が物理の講義をやつたらどんなものだ。胸に騎兵の制服のやうな飾のついた服を着て、講義をやつてゐる寫眞を私は見たことがある。恐らくはスモーキングジヤケツトを着てゐたものであらう。

軍服は鎧だ。鎧を着て藝者をあげる軍隊を私は知つてゐる。戰時ならともかくも世は泰平の今日だからやりきれない。

だがまだそれは我慢が出來る。ボジヤマを着て、電車に乘つてゐる青年を見たことがあつた。ボジヤマは寢卷だからねエ。

燕尾服は裃で、フロツクは羽織だ。脊廣は絆纏の類と思へば間違ひない。そのうちでも脊廣や、外套類には、その人々の人柄によつて、色々なスタイルがある。商人むき、學者むき、會社員むき、藝人むき。若い人のや、年寄りのや、色々あつて、仕立ても、柄も、ちがふのであるが、日本は滅茶苦茶だ。誰も知らないからいいやうなもの丶、莫迦々々しくつて、とても見てはゐられない。西洋料理の注文の仕方を覺えやうとする人はあつても自分の着る洋服の注文のしかたを知つてゐる連中は少ない。怒ツたつて駄目だよ。論より證據洋服屋へ行つてスタイルブツクを出されて、これがたしかに自分にふさはしいスタイルだと、選定し得る人が何人あるかねエ洋服屋に聞いたつて同じことだ――これはロンドン最新流行ですとくらア。

まあ日本人は、當分例のだぶだぶの袋を着てゐるより外に道はない。

女の洋服と來た日には、全く頭痛だね。男の服にくらべると

西洋の女の服はまたその種類が大變だ。さうして女帽子の選定は、これがまた容易でない。またその纏つた服によつて、一々動作を換えて行かなければならないし、言葉までもちがへてゆかなければならないと云ふことになると、日本の女連が、これから百年研究しても追ひつかない。若し知らうと思ふのなら、まあ向ふのドラマチックスクールへでも入學して、藝術として習得するより外に道はない。

やかましく云つても仕方がない。何んでもいいから、奥樣方は、下女や子守女の着るものを着よいやうにして貰ひたい。臺所で着る服で往來を練られては、全く國辱だからね。

子供の洋服となると、日本では、何んでも絹をつかはうとする。子供の服は、いつでも洗濯がきくやうな材料でないと實用にならない。絹の洋服を着せて、ころぶとお尻をスパンクする。『こんど轉ぶと承知しませんよ。』と、ママさんいくら怒つても、子供と、おきあがりこぼしとは、ころぶのが商賣だ。

○

洋服に似た滑稽はまだまだある。それは店頭の羅馬字の看板だ。なかには英語のもある、佛語のもある、漢字、片假名、平假名なんでもある。即ちそのまゝで日本の文明なるものを代表してゐる。然もその羅馬字の看板は、御丁寧にも花文字づくめで書いてある。テーエーケーエービーエーワイ、エーエスエッチアイエスエッチワイ、オーケーエーアイエムアイヱッチ、オーエヌビーヱーエスエッチアイ、エスエッチワイオーケーエーアイ。

いつちやうぎ、にちやうぎ、ちやうたかべつたん、長十郎。やあきち、もうきち、茂十郎の長い長い名前よりも、もつと長く、三十尺か四十尺ぐゐもある。一たいあれは誰れに讀ませるつもりなんだい。西洋人に讀ませるつもりか、日本人に讀ませるつもりか、それとも犬か馬に讀ませるつもりか、人間社會にはあれを讀む程の忍耐力のあるものは先づあるまい。私が半日がゝりで讀んで見たが、それは高林商會日本橋支店と書いてあつたのだ。

西洋人に用のない理髪店に、バーバーショップと書いてあり、日本人しか行かない西洋料理屋にレストランと書いてある。それは丁度、ヱービーシーをやつと覺えた子供たちが、へつたやたらに自分の名を羅馬綴りで書き散らすのと全く同じわけなんだ。何んと云ふ幼劣な市民がこの都會には住んでゐることだらう。

然しそれは市民に限つたことではない。所謂お上の仕事にも、この種の幼劣さ加減は發揮されてゐる。あのパブリックオ

ートマテック、テレフォンと云ふ英字が、自働電話の入口の上の方にこれも花文字ばかりの行列で書いてあるのは誰でも知つてゐることだらう。なる程、英語で書いてはあるが、西洋人は、交換手の出てくる迄に、三時間も手間のかゝるあんな電話なんかかけに、あのなかへ這入りはしない。と云つて英語は日本人には必要ないし、多分飾りのつもりだらう。

西洋のものでさへあれば、花文字一つ書いても飾りになる。飾りに英書を携へ、飾りに英語を習ひ、飾りに西洋の文明の模倣をし、飾りに西洋の思想を取り入れて、飾りに西洋の屬國となれば日本も世話はないや。

私が電車のなかで日本語の本を讀んでゐると誰ものぞきこむものはないが、英語の本を讀んでゐると、學生風の若いものは大抵のぞき込む。なかには私が何を讀んでゐるかそこの頁を讀んで見るやつがある。はゝア、飾りだなと私は思つて、そいつの顔を見るとなる程、飾りらしいつらをしてゐる。尤も向ふでも私が飾りに讀んでゐると思ふだらう。飾りと飾りだ。實のところはどちらも英語が讀めなかつたつてな。日本人の西洋模倣は先づさうしたものだ。

南洋の土人が、あたまの毛を石灰で焼いて赤くして、西洋人になつたと思つてよろこんでゐるやうなものだ。模倣が悪いと云ふのでは決してない。その模倣の態度の卑屈さ加減がいかにも私を憤慨させる。

○

全く日本人の西洋模倣はその内心の切なる要求から出發したと云ふよりも、寧ろ虚榮のため虚飾のために、その流行を追ふて來たと云ふに過ぎない。それは物質的にも精神的にもさうであつた。だから上ッ調子で根柢がない。根柢がないから、ごまかし笑ひをする。

日本人のにやにや笑ひと云ふものは世界中で有名なものだ。どんな西洋人だつて、日本人と交際して、このにやにや笑を見せられない西洋人は一人もあるまい。西洋人にはそのにやにや笑ひの意味が何んだかわからない、薄氣味わるい笑である。日本人にもいつ自分がそんな、にやにや笑をしたか、何んの爲にそんな事をしたか氣がつかない。誰もその笑の何んであるかと云ふ事は知らぬと云ふ。

譃をつけ！私に云はせれば、そんなことはなんでもなくわかつてゐる。それは會話をする時に、向ふで云つたことが、何んだかわからないものだから、にやにや笑つてごまかすのだ。このごまかすと云ふ精神が日本人の特長らしいぜ。

白狀すれば、私もその、にやにや笑ひをしばしばやつた。西

洋人の云つてゐる事が途中でわからなくなつて、そのあげくに向ふの語尾がぽんと上つて、疑問の形で結ばれたとする。さあ返事はこちらの番だ。一語か二語なら聞き直すことも出來るが、五分十分喋られて、語尾がぽんと上つたのでは何んぼ何んでも聞き直ほせない。そこで三十六計笑ふにしかずだ。その時の心持ちと云つたらない。何んだかから痰が咽へからまつてゐるやうで、目はくらんでしまつてゐるし、次の會話を、どうつながらうと云ふ恐怖心は起つてくるし、こちらを無智と思はれるのはくやしいし、自己を僞つてゐるのだから良心には責められるし。あたまのなかがこんがらかつて、居ても立つてもゐられなくなる。然し、それを我慢して、にやにやと笑ひながら、別な話でさぐりを入れて、以前の問をたしかめる。それにはなかなか技巧が入る。言葉がほんとに通じなくつて、向ふの意味をキアツチしやうと云ふのだから智慧がなければ出來ない仕事だ。

けれども、私は、しまひには自ら恥ぢて、とうとう、にやにや笑ひはしないことにしてしまつた。向ふの云ふことがわからなくなるとすぐそこで聞き返す。それでもわからなければわかりませんと云ふだけの話だ。にやにや笑ひもへちまもありはしない。

向ふが頗る眞面目な問題を持ち出してゐるのに、それがわからなくつて、にやにや笑ひで通さうとすると、しまひにはなぐられる事がある。

ある日本の老紳士が、外國で旅行して、汽車に乘つて、丁度そこに明いてゐたシーツへおさまつた。しばらくすると一人の若い金髪の將校が出て來て、佛蘭西語で、そこは私のシーツでございますから、どうか他のシーツをお擇びになつて下さいと云つた。ところが日本の老紳士、ちんぷんかんぷんわからない。それにもかゝわらず、大ひに自己のデグニテーでも保たうと思つたか、例のにやにや笑ひをやつた。若い將校はますます言葉をひくくして賴むのであるが、こちらはいよいよにやにや笑ふ。將校はしまひには怒つてどなりはじめたが、老紳士は相變らず泰然自若としてにやにややつてゐる。脇にゐるものが見るに見かねて注意をしたと云ふ珍談がある。

これは實話で、その老紳士はある大銀行の重役で、名前も知れてゐるが、赤毛布の旅には縮尻はあることだから、名までこゝに披露するには及ばぬ。日本にゐては押しも押されもしない第一流の紳士でも、外國へ出て、時にのぞむと、この國民性のごまかさうと云ふ、さもしい性根を露出する。

日本人は頓智はあるが、淺薄で、さうして少しの事で滿足し

て、若しも、ものごとが自分の思ふまゝにならないとすぐ悲觀する。さうしてすぐ年寄つてへたばつてしまうとは、外國人のひとしく認めるところである。

○

何しろ日本人は、ひねくれてゐる

西洋人の男の帽子を見ると、シルクハツトでも、山高帽子でも、ソフトハツトでも、あたまへのせるものは大抵シメトリーをなしてゐるが、日本人のかぶつてゐる帽子を見ると山高帽子と、麥藁帽子とをのぞくの外は、大抵ちよいと、片方のふちをまげるとか、前をこごめてうしろを上げるとか、うしろをこゞめて前をあげるとか、曲げてかぶるとか、あみだにかぶるとか、何んとか少しひねくらないと、承知をしない。きちんとおとなしくかぶると云ふことは大禁物らしく見える。山高帽子なぞをかぶつてゐるものは殆んど見うけない。皆、ソフトハツトとか、キアツプとか、正帽をかぶるにしても、出來たてのきちんとしてゐるのは嫌ひで、古く、くたくたになつてゐるのを、とぼけた風にかぶるのを好むやうだ。つまり、ちよいと、おつだね！と云ふところをねらつてゐるのだ。

あの料理屋や、待合の看板を見ると、如何にも日本の男が、帽子をひねくつてかぶる心持が出てゐる。都とか、千鳥とか、舟板や、自然木なぞへ、へんてこな字を書いて、何んとか、かう、樣子をして見せないと、氣がすまない

床の間の違ひ棚。唐紙の模樣。お庭には松の古木に石燈籠、さしみの作りかたから、お酌のしかた。年增藝者は申すに及ばず、手拭を肩にかけて、つツかけ草履で『御免ねい』と出てくる兄いに至るまで、これが日本人固有の趣味なんだ。

帽子の次に目につくのは、日本の男の腕輪時計だ。女や、子供ぢやあるまいし、一日中、大手を振つて活動しなければならない男が、こはれ易い時計なぞ腕につけてゐて一體どうするつもりなんだ。しかも、それが外國の女持ちの金時計と來てゐるから助からない。云はないことではない。日本の男は外國の女によく似てゐると。

實際、西洋の女の趣味と、日本の男の趣味との間には、妙な共通點がある。日本の男の持つてゐた煙草入れは外國へ渡ると女のものになつてしまう。さうして西洋の女のスポートハツトは、日本へ渡つて男のあたまにのつてゐる。兜から圖案を取つて西洋の女帽子に珍型を出し、西洋女のスカーツに似た行燈袴を日本の男がはく。いやに我まゝで、いやにプラウドで、いやにテンペラメンタルなところは、兩方ともよく似てゐる。

なんぼ地球の裏表に住んでゐるとは云ふものゝ、その陰陽の

コントラストが實に面白い。

さうして西洋の男と、日本の女との間には、その柔順なところ、その忍耐強いところ、さうして割合にだまされ易いところなぞ、よく似てゐる。しかもどちらも異性に對してあたまがあがらぬ、世界は不思議な仕組みになつてゐるものだ。

○

日本人の特長は、まだこの外にもたくさんある。

指先の器用なことは、世界中のどの人種も恐らく日本人に及ぶものはあるまい。日本人はまさに世界の手工家である。

世界の市場に出てゆく日本の輸出品を見ると、茶であらうが絹糸であらうが、皆、日本人の指先から、つまみあげられたものばかりで、日本人の指先の觸覺は、たしかに彼等の頭腦よりも國家のためになつてゐる

ことに工藝品を作らしては、その、きちんとした作り方、小器用に氣がきいて、角がぴんと立つて、隅々にまで注意がとどいたありさまは、とぼけた、間のぬけた仕事しか出來ない支那人なぞの及ぶところではない。

そのかはり、日本人の仕事には、餘裕もなければ餘韻もない。大體に亙つて含蓄された味ひなぞと云ふものは見出すことが出來ない。そこは支那の工藝品とは大いにちがつてゐる。支那の工藝品が、腕でつくられた仕事ならば、日本のそれはまさに指さきでつくられたものである。支那の工藝品は離して見てよく、日本のは手にとつて見てよい。

私自身は米國にゐて、ひよつとしたことから支那の美術品と親しむことになつたが、その味ひに打込んで、しまひには日本の美術なぞは、ふりむいても見やうとはしなくなつた。

なる程、昔の日本の美術には、所謂、生粋なところがあり、また捨て難い趣きがそこにあり、さうしてそれは世界のどこにもないものであつたが、近代の西洋かぶれのした日本の美術と來た日には、見てゐて腹が立つてくる。

實は私も美術は好きで、以前はこれでも大美術家にならうなぞと思つたものだが、然し西洋かぶれのした美術をやらなければ、流行おくれとされてしまう日本なぞで、美術家の看板をあげやうなぞとは、この十五年來　夢にも思はない。

尤も日本の美術家に、西洋を模倣するなと云ふてもそれは無理である。子供に活動寫眞を見るなと云ふのと同じで、見ないで承知の出來るものではない。まあ一と通り見るがいい。見てしまつたら、自分のうちへ歸つて來て　自家の長所、自己の特長の上に、自分の藝術を立てるがいい。

子供のやうな連中だ。早く奥山を一とまはりして來い。もう

[illegible]すぎだぞ。

元來この國民は、自國のものに云はれたのでは信じない。外國人に云はれると始めて信ずる。米國人が來て狩野芳崖は豪いと云ふと、なる程と思ふ。巴里の展覽會に出して、日本畫に限ると云はれると、尤もとうなづく。歌麿、豊國、廣重、北斎、西洋人が大美術家だと云はなければ、彼等の作品をもつて尻もふきかねまい。

今に見ろ、清元、常盤津は世界の大音樂と褒める西洋人が出來ると、熊公、八公までが藝術家とあがめられる時代がくる。

なんでもかでも、西洋人がいいと云はなければ、いゝものではないと思ふ日本人よ。おい、おい、國は亡びないものだといいけれどもなア！

○

話が途中でそれてしまつたが、日本人の指先が、如何によく働くかと云ふことを知らうと思へば、先づお互ひの毎日の生活を見るがいい。

例を考へたら限りがないが、あの煙管を見たまへ。西洋のでも、支那のでも、亞米利加印甸人のでも、朝鮮のでも、日本の煙管ほどに雁首の小さい煙管は先づあるまい。

日本人は、あの小さい雁首へ氣ぜはしさうに、指先で刻み烟草をつめては叩きつめてはたゝく。烟草の好きな人になると一日に何百回と云ふ數にのぼるだらうが一向に苦にしない。指先の器用なものでなければ、とてもあんな烟管は使へない。

それから今度は引き出しのつまみだ。長火鉢にも、烟草の函にも、茶簞笥にも、凡そ、引つぱり出すものならば大抵つまみがついてゐる。西洋の引き出しにもつまみはついてゐないとは云はない。しかし多くは指先に引ッかけるやうに出來てゐる。それなのに日本のは拇指と人さし指との爪の先きで、ちよつとつまんで引き出すやうになつてゐる。

箸函の蓋には、殆んど手のつけやうがない。それを日本人は、拇指の先で押して、爪のさきで猫のやうに引ッかけて明ける。さうしてなかゝら箸を出して天下無類の曲藝を一日に三度やる。さはれば崩れる豆腐だらうが、つまめばすべる納豆だらうが、落とせばころがる黒豆だらうが、箸の先で自由にする。

支那人も箸はつかふが、支那の箸はもつと長くてもつと太い。日本人の箸と來ると、細くて小さく廿日鼠のしつぽのやうだ。とても西洋人なぞの太い指では箸そのものを持つことすら出來やしない。

それから今度は、唐紙の引き手だ。西洋のドーアにはハンドルがついてゐて握つて明けたりしめたりする。日本のはこれも

指先の仕事だ。然もそれが淺くつて唐紙そのものは輕いと來てゐる。それを指先で引ツかけて呼吸で明ける。なんとした器用なドーアの明け方だらう。

足袋のこはぜに、羽織の紐。帶に袴。髷に元結。女は男の鼻毛をかぞへ、彌次郎兵衞は、せめて二本の指先の爪をはさんだ。皆、指先の器用に待たなければならない事なのだから驚く。

だがこれは手の指先の働きである。日本人の足の指の器用さに至つては、とても人間わざではない。と云つて神わざでもない。先づ猿わざだ。

雨の道を電車が走ると、大きな包を肩から脊負つた商人風の男が、雨傘をいい工合にすぼめて片手にもつて、四寸齒の足駄をはいて、かたかたと馳け出す。左の手が電車の上り口の眞鍮の棒にかゝつたかと思ふと、ぽんと身輕るに飛び上つて　然も帽子も落さなければ、足駄も足からぬげはしない。

このはなれわざは、全く足の拇指とその次の指との間にあることを思へば、樹から樹へ飛びうつる尾長猿でもあきれずにはゐられまい。

足の指が器用でなければ、下駄の上の文明はなりたゝない。然も日本人はその爪先の器用さに引きかへて、鈍感な踵の皮をもつてゐる。

○

たゞ指先の觸覺だけで、三味線の勘所を間違へない下町邊の娘でも、踵では、砂を踏まうが小石を踏まうが馬の糞を踏みつけやうが一向に感ぜぬらしい

私は米國から歸りたてに、ある晩、下駄をはいて外へ出た。ところが大變、歩くたびに下駄の上へ色々なものが飛び上つて、それを踵で踏むものだから、とても痛くてやりきれない。そのうちに足ぢうが塵だらけになつて、ぽつぽつとほてつてくる。空氣のなかに洒してゐるのだから、ほてりさうもなささうなものだがさうでない。おまけに指の間が水ぶくれになつて、いやひどい目に合つた。その後二年間私は下駄は、はいたことがない。

一度雨降りの時に、錢湯へ行かうと思つて足駄を買つてはいて出たが、向ふから來た自働車をよけやうとして往來のわきへよると、道はせまし、軒は低し、何しろ私は五尺八寸もあるのだからたまらない。そこにあつた煙草屋のタバコの看板とはち合はせをして、溝のなかへ片足を踏みこんだ。それ以來、錢湯へも行かず、足駄もはかない

よく往來で、ハイカラな女學生風の女を見るが、顔にはお白

粉をぬりくつて、白地に藍の流行のチエッカボールドの單衣を着て、赤い模様のモスリンの帶なぞをしめて、コケテッシュに作りながら、男の顔を寫眞機のスナップシヤットのやうに、ちよいと見て通る。

　けれどもその足を見ると、爪は長くはへてゐて、その先には黒い三日月がづらりとならび、踝から甲にかけて泥だらけ。足も色氣の一部分と云ふことを彼の女は御存知ないらしい。自分の足は東京市で敷いた砂利を埋める道具だとでも思つてゐるのだらう。

　その足を膝から疊んで坐ると丁度、足のうらが、お尻のところへ當る。だから白地の單衣のお尻は、どこより先に泥になる。

　西洋の女は、お尻そのものを女性美のうちの最も美なものとして、これを美化して、身體全部のポーズをきめる。婦人の洋服は、お尻を美しく見せるやうに出來てゐる。

　然るに、日本の女は、お尻そのものに對して、へんな道徳的觀念をつけ加へた。お尻は醜なもの、悪なものとした。故にこれを無視しやうと企てた。華美な帶をしめて、それで人の視線を奪つて、お尻をその下へ無意味に置いた。然しそのトリックは成功しなかつた。

却つてその華美な帶のために、お尻本來の面目は曝露した。ことにそれが泥まみれになつてゐたりなぞすると、お尻だけが女のからだから抽象されて、特別な印象を人に與へる。だが、考へて見ると、それは日本の悪道路の罪である。

　水が多くつて地のしめりがちな日本は、昔から人を洗足で歩かせた。革類は、穢多の仕事ときまつてゐたから、靴などの發達しやう道理がない。支那のやうに布をつかへばすぐ濡れる。草履が出來て、草履が變じて下駄となつた。指先がきいたから自然鼻緒が用ひられたものと見える。

　木をはいて歩く分には道の悪いのは苦にならない。足の皮のよごれたのは洗へばもとの通りになる。そこへもつて來て踵は千枚張りだ。道路の善悪が問題にならなかつたのはむしろ自然である。

　なるほど、丸の内には近代の文明の叫び聲が、それらのビルデングを組みたてる鐵槌の亂打となつて我れ／＼の耳を聾するか知れないが、東京市民は、相變らず、伊邪那岐、伊邪那美の昔から土の道を踏んでゐる。

　お白粉を塗つた女の子が、自分のからだの一部である足を忘れてゐるのは無理もない。日本の文化生活は、都會のエレメンツの一つである往來を忘れてゐる。

○

人力車に乗つて東京の道を馳けると、私はいつでも乳母車にのせられて、方々を曳きあるかれる子供の心になつてしまう。面白くつてたまらない。

汚穢車の臭さも遠くは追つて來ない。ぬかるみのなかを白靴で泳ぎまはるハイカラさんを鼻毛で笑つて、自働車や電車の通らない道を選んで馳けてゆくと、燐寸箱のやうな家並は三尺さがつて、私の心を人間以上のものにする。

兎を入れるやうな巡査箱のなかには、猿のお喋りの相手をなくした巡査がぼんやりと控えてゐる。

立ち小便をする男。大きな盥を股一ぱいにはさみ込んで洗濯をする女。ダンスでもするやうに片手を高くつき出して、手桶の水をはこぶ小娘。

自轉車のりの小僧連は、鼠のやうに、あつちの路地から、こつちの路地から、出たり入つたりまはつたり。

犬は吠えるし、赤子はなくし、豆腐屋の喇叭の聲は、かゝる町にも活きんための糞の茶漬をうながして、その油揚の耳のやうに薄ツぺらに鳴りわたる。

赤い稻荷も殘つてゐれば、石の地藏に縫ひ立ての襟卷もかゝつてゐる。飴屋の老爺がたゝく太鼓もこんな町ではまだ聞かれる。

私を見て子供たちが『あれ異人さんが人力にのつてきたよ』と云ふ。

東京も廣いや、かうした町はまだまだ數へきれない程あるだらう。

文化生活が、どうしたと云ふのだい！

私の人力は電車通りへ出た。風のために女の着物の前がまくれて、女は獨樂のやうにくるくるまはつてゐる。あの文化腰卷とか云ふものをしめてゐれば、かう云ふ時にはまはらずにすむのだな。元來日本の女の着物は家のなかで着るもので、外へ着て出るためのものではないらしい。それにしても腰卷に文化は少し恐れ入つたな。妙なところへ文化が飛火したものだ。

なる程こゝは燒跡だな。かうして貧民を立ちのかせないと、家主は立ち退き料を拂はなければならないし、立ち退いて貰はないと、改築が出來ないと云ふのだから、風の神と、火の神と、金の神と相談をして、貧乏神の燒打ちをする。いゝところへ氣がついたものだ。だがその燒け出された貧乏神は、どこへおみこしを据えるだらう。

紐育あたりの貧民部落の家は、大抵はラックフェラーとか、カーネギーとか云ふ富豪が慈善のために作つたもので、萬事近代

式の設備のもとに建てられてゐて、それは完全したものだが、日本には、さうした貧民の樂園もない。同じ貧民になるとも貧國の貧民たるなかれだ。

人力車を乘り捨てゝ淺草の觀音樣の裏へ出た。觀音は三十二應身。こちらの願ひによつて何んとでも身を現ずる。千手觀音は千の手に千の寶を持つてゐる。こちらが欲しければそのうちのどれでもくれる。

違ひない。その境内の周圍には何んでも人の望むものが用意されて、女にも男にも子供にも年寄にも、善でも惡でも、新いのでも古いのでも、西洋のでも日本のでも、こちらから手を出しさへすれば取れるところにそれがある。

なるほど觀音樣は有り難い。有り難い筈だ、このくらゐ、さばけた、人間らしいディテーは世界のどこにもゐやしない。たゞ日本の東京の淺草にばかりゐる。

これが日本人の本心本性から望んでゐる神樣なのだ。本尊は一寸八分しかないが、日本のほんとうの宗教はこゝにある。どこ迄も現世的で、どこ迄も、ふやらふやら式である。淺草――それは日本の宗教の名前だ。

日本の娘たちは、昔のまゝの祈禱の文句をこのディテーに捧げて、今日の樂しみを得ようとする。

觀音樣の御聲がした。「おまへの願ひは叶ふた。チヤーレー、チヤプリンの映畫を見に行け。お賽錢は、こゝであげるに及ばぬぞ。お賽錢は向ふへ行つてあげろ。」

なんと、いやちこな靈驗ではないか。かう云ふ神樣をもつた國民は幸ひだ。

○

それから日本人ぐらゐ禮儀の正しい國民も實は世界に珍しい。

この禮儀のためには日本人は隨分無駄な苦勞をしてゐる。

天は上にあつて地は下にある。山は高く聳えて、水は低く流れる。鳥に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり。石鹸の泡があつまつても、しばらくは、なかに遠慮と云ふものを置いて、お互ひにその勢力範圍を冒さない。猫にさかりがつくと、お互ひに頭をひくゝたれて、ウウ……とか、ふウ……とか、挨拶を述べてゐて、とどのつまりの無禮講を演ずるまでには、なか〳〵時間がかゝる。

本質の上から見て取れば、それはなんでもないことなのだが、人間と云ふ奴が、これにくだらない名をつけて、これは禮儀であるとした。

さうして、日本に於ては江戸時代に作られた禮儀がいまだに

行はれて、もう氣のきいた石鹼玉は、とツくに破裂してしまつてゐるのに、人間だけがまだしきりに遠慮をしてゐる。

その遠慮が今日の日本を世界から別ものにしてゐるのである。

大皿や、見榮に殘りし詩句一つ――その一つの詩句には誰れも手を出してがない。

馬道を人力車が飛ぶ。いくらか酒手にありつかうと云ふのだから、人力車夫も景氣をつけてゐる。

さう云ふ時に、あとの車が、先の車を追ひ越さうものならば、それこそお互ひは死にもの狂ひで競爭する。だが、あとの車夫が、『にやん！』とか『すん！』とか聲をかけると、先の車も『よツ！』とか『おツ』とか云つて、あとの車を前へ出す。これが所謂、日本人の禮儀なるものだ。

日本では車夫にさへ禮儀がある。紐育の第五街の辻馬車屋の間には、そんな禮儀はありやしない。急ぐものも、ゆつくりするものも、自分の勝手だ。足の早いものは早いのだし、足の遲いものは遲いのだ。一々他人に顧慮してゐてはたまらない。

會社に勤めてゐるものが、先輩よりも月給があがると、非常に後悔して、菓子折をもつて、先輩の自宅を訪問して頭を疊へすりつけてあやまる。

『實は餘儀ない次第で、社長が深切に申してくれるもので御座りまするで、本來ならば私はその器に堪えませんから辭職しなければならないのですが』なぞと當惑の態を見せる。月給が上るたびに辭職してたまるものではない。

なんの事はない。これは、車夫が、うしろから『にやん！』と聲をかけて、先の車を追ひ越すのと同じ寸法だ。

それが面倒臭ければ、横丁へ曲つて一二丁馳けぬけて、またもとの通りへ出る迄の話だ。轉任また轉任で、ぐるりと一と廻りした頃には、先輩をぬく事、凡そ三千里。

その時こそは、先輩が折をもつてやつてくる。『君の榮進を祝す』とか何んとか云つてね。

考へて見てもひやりとする。こんなくだらない感情の上にたてられた道德にしばられて、お辭儀しながら齒を見せて、お互に暢びんとする力を殺し合つてゐる。こんな狹い社會がどこにあるか？

よくそら、土方や、破落戶が、手拭を鷲掴みにして、『おひけえなせいまし、おひけえなせいまし。』と云ひながら、渡りをつけてゐるのを見ることがある。何を控へるのだかわからないが、あれも一種の禮式だ。さうかと思ふと、直ぐそのあとで喧嘩をやる。

引き越して來て、向ふ三軒兩隣りへ蕎麥をくばつて、二三日たつと、水道栓の向ふとこツちで、そろ〳〵感情を害し合ふ。そのくらゐなら始めつから交際はないがいゝではないか？

外國では、同じ事務所で毎日顔を見あはしてゐるもの同志でも、容易にパーソナルな交際ははじめない。お互ひに、いくらの月給をとつてゐるかと云ふやうなことは口に出さないやうにしてゐる。

また、同じアパートメントの上と下とに住んでゐて、朝晩、顔を合はしてゐても、お互ひのファミリーの樣子なぞは、知らうともしない。プライヴエト、アフエーアは、聞いても、聞かせられても、迷惑だとしてある

日本人は直に『實はね！』とくる。して見ると平生は譃でかためてゐると云ふことがわかる。人間と云ふものは、自分の生活の眞相を告白しきれるものではない。それを告白したやうに見せかけやうとするから嘘をつかなければならない。云はざるにしかず、聞かざるにしかずだ。インパアソナルな交際といふものは、日本人の最も不得手とするところである。なんでもかでも直きに心中立てをする。こちらの腹のどん底をうちあけて、向ふの腹のどん底を聞かうとする。ところがどつこい、それが兩方とも嘘だからたまらない。

それをどうしても、眞實と云ふ型に入れやうとすれば、お互ひに死ぬより外にしかたがない。男女の心中もそこから起る。

日本人はよく心中をする。至るところで差し向ひで心中をする。牛屋へ行けば一つの鍋で心中をし、お酒を呑めば一つの猪口で心中をし、藝者を上げれば、しん猫の爪びきで心中をし、凡てから陰氣だ。水入らずの差し向ひと云ふところでやらうとする。役所へ行けば同じ事務で心中をし、會社へ行けば同じ月給で心中をしやうと、それが卽ち日本の禮儀である。

日本人も丁髷を切つてから、もうこれ七十年はたつ。いつ迄『御同役如何で御座る』式の挨拶をやつてゐられるものではない。

前垂れの代用にもならない舊來の袴をぬいで、そんな窮屈な虛僞な禮式はさらりと捨てゝ、第二の丁髷を切つたらどう云ふものだらう。

○

インパアソナルな交際と云ふことは、本當に人間が人間としての長所と短所に目醒めてはじめて行はれる事である。

誰しも自分の心の底を直視して、この妙に慢心した動物の現在の虛僞を冷笑しないものがあるか？

然しそれは萬人ともに同じである。こゝにお互ひの憐憫を持

ち、同情を持ち、忍耐を持つ。

廣い食堂のなかで、この町の人も、あの町の人も、他の都會から來た人も、外國人も、同じ人間と人間との親しみを交へ合つて、一人の男の歌ふのにも耳を傾け、一人の女の舞踏するにも讃嘆の拍手を與へると云ふことは、これは全くインパアソナルな愛の賜である。

東京廣しと雖も、そんな光景を私たちの目の前に見せるやうなところがどこにある。みんな一つのテーブルに、ちぢこまつて、公衆をうしろにして心中の相談をしてゐるではないか。

淺草のお壽司横丁の壽司屋へ這入つてすら、向き合つた人たちは一言も言葉をかはさず、百年の仇敵のやうな顏をして睨み合つてゐる。

活動寫眞を見に行けば、男の席と女の席と、家族の席と同伴席と、ありや一體なんのつもりだい？ 尤もインパアソナルな交際を知らない民衆は、男と女を一緒にすれば、すぐそこにプライヴエート、アフエーアが持ち上る。故に近頃流行のダンスホールも、當分は警官の監視のもとに、インパアソナルな交際の稽古を餘儀なくさせられる。子供ぢやあるまいし、お廻りさんに番をして貰はなければ、男と女は遊べないとは、あんまり情なさ過ぎるぢやないか？

男同志が集まれば睨み合ひ、女同志が集まれば澄まし合ひ、男と女が集まれば惚れ合ふと云ふのでは全く手がつけられない。

なる程、昔は武士と武士とが集まれば、刀の鞘が當つても命のとりやり。これでは睨み合ひもせずばなるまい。下手な事を云はうものならばつさりやられた。どこで殺されるか知れないのだから、赤の他人との交際は全く危險千萬だつた。料理屋なぞで少し女中にでも、もてやうものならば、早速ほかの岡焼連から決鬪を申し込まれた。實にあぶない世の中だつた。

女同志は尙更の事。知らぬ處で咳をしても、はした女とさげすまれた。ぺちやぺちや喋つたり何んぞすれば、早速に首が飛ぶ。

ことに若い同志となると、不義はお家の御法度。見つけられたら百年目、重ねて置いて四つにされた。だから滅多に息子と娘は顏を見ることすら出來ない。然し一旦出逢つたら最後。ぶスツ！すぐに感電してしまう。相手を選んでゐる間もなにもなかつた。

たが、帶刀御廢しになつてから何十年たつと思ふ。さういつ迄も日本刀の祟りをうけた文明を繼續してゐなくともよささうなものだ。

どうだいその胴中で人間と云ふものを上と下とにくびり分けた帶なんかよしてしまつて、第二の丸腰の時代を早く實現しては。

錢湯で男も女も素ツ裸になるのばかりが、インパアソナルな交際と思はれてゐたのではたまらない。心の上へ纏つた皮膚をお互ひにさらけ出して、それでデモクラシーはすさまじい。若しそんなものがデモクラシーなら、牛や馬は皆デモクラシーを體現してゐる。

人間と云ふものは、心にも體にも、お互ひに色々な着物を着なければならないのだ。赤裸々なんかになられてはお互ひに迷惑する。

但しその着物も、もう在來のでは間に合はない。柳原の土手へ行つて、ありとあらゆる舶來ものをすつかり一度はひやかして見ろ。さうするとしまひには、どれが一番自分に合ふかと云ふことがわかる。

西洋の模倣をするなら徹底的にやつてしまへだ。さうして後に、日本人の應になすべき生活に目醒めろ。左樣なら！

芥川龍之介稱讚

藤森淳三

はしがき

芥川龍之介氏はよくも惡くも、隨分世評——否、文壇評——に上る作家である。而もその文壇評なるものが之亦、隨分見當外れなのが多いやうである。思ふに、餘り芥川氏を理解してゐないせゐでは無いか、と思ふ。では、お前は彼を理解してゐるつもりなのか、……先づそのつもりである。そのつもりの上に立つて、私は彼を「稱讚」しようとするのである。

ではどれ位理解してゐるか、と云へば、以下私の述べる所を讀んで頂くの外は無い。が、考へて見ると、彼を惡く云ふ人の

大抵は、彼に反撥してゐる爲では無からうか。如何に彼を惡く云ふ人でも、彼を才人とする點では異議は無いらしい。而も彼等は、先づ彼の才人である點に頭から反撥してしまつて、それ以上彼を理解しようとする深切を持たないらしい。今假りにさうとすれば、芥川氏にも氣の毒な事は勿論、又反撥する側から云つても、反撥のしつぱなしで、直ちにその對象を振向きもしないやうでは、その人自身餘り呑氣過ぎやしまいか。趣味好惡は暫く措き、私は、さう云ふ生きかたの人に敬意を持つ事が出來ない。

恐らく斯う云へば、いつか私が芥川氏に反撥したことも想像がつくと思ふ。事實、私は嘗て彼に反撥した。が、私はそれを經へた。さうして彼を見た。……と云つて私は敢然、芥川龍之介を斯く見るべきだ、と人に云ひ得る程の自信も無い。謂はゞ、まあ芥川氏を斯う見る人間もゐると云ふ位の所で、それが果して正當であるか否かは、自ら公平なる讀者の見解に俟つの外は無いのである。

一、彼は才人以上である

さて、……芥川氏は才人ださうである。ださうであると云ふのは、私の見る所が、聊か世間のそれと違ふらしいからだ。芥川氏は才人であるに違ひない。が、多くの人は、それを誤解してはゐないか。早い話が、彼は座談なぞでもよく皮肉や警句を吐く。而も多くの人は、それをよく受入れると否とを問はず、未だ正當に理解してゐないやうである。例へば、彼の作『秋』を見ると、俊吉と云ふ人物が「冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた」と云ふ文句に出會すが、恰度あれである。人は謂はゞ、彼の才氣を「宮本武藏が使ふ武器」のやうに、否中には、その「武器」ほどにも價値を認めない、と云ふよりも、全然彼の才氣を單なる彼の頭腦乃至小手先だけのものと見る人が多い

が、恐らくそれは誤りである。私から見れば、芥川氏の才氣の如きは、彼の本質に根差す、もつと根本的のものだと思ふ。謂ふならば、彼の透徹した觀照、都會人の持つ敏感等が、その本來の聰明と結び附いて生れるものだと思ふ。而して、それは中々得難く、且つ珍重さるべき類ひのものだとさへ思ふ。かの偶々、人をして反撥せしむるが如き彼の皮肉や警句に至つては、鳥渡したその場の彼の惡戲氣に過ぎぬことは餘りに明瞭である。何故人は、二六時中ムキになつてゐなければならぬのか！反撥する方こそ無理と云はねばならぬ。

一體に最近我が文壇は、露西亞文學に影響される所、甚だ多

かつた。従つてそれが悪影響を齎した事も亦少くは無い。かの無暗に「眞面目」を歡迎するのなども、その一つであらう。「眞面目」がいゝもので、「不眞面目」なのは悪いと云ふだけの事なら文句は無い譯であるが、さうした觀念はやがて延長され、穿き違へられて、表面の「眞面目」らしさのみを問題にするに到つては論外である。强がつて見たり、敬虔らしく裝つたり、又非常に深酷さうな容子をしたり、……餘りにマヤカシものゝ多過ぎる現代である。何事にあれ、正面から押す事のみが尊ばれて、少しでも變つてゐると、變つてゐる事だけで攻撃されさうな現代である。宇野浩二氏の如きも頭から巫山戯てゐるものと反感を持たれる（尤も私の同氏に慊厭たる所以は別に在る）現代である。更に又、嘗て雜誌新潮が主流傍流に對する諸家の意見を徴して見ると、二三流どころの拙い作家のみを主流だと主張する批評家が現はれる現代である。

既に斯くの如く出鱈目な現代である以上、芥川氏の如きが誤られるのは、蓋し當然なのかも知れない。彼等に從へば、芥川氏の藝術は主流で無いと云ふであらう。小手先の才氣だけのものと貶すであらう。而して中には、芥川と云ふ名を聞いただけで、その敬虔らしい顔を顰めて首を左右に振るやうな人さへゐさうに思はれる。然し、……私はこの「然し」を述べる爲に、以下芥川氏の作『きりしとほろ上人傳』に就て語るの便宜を得して頂きたい。

二、『きりしとほろ上人傳』其他

『きりしとほろ上人傳』は常に私の愛讀する作品である。愛讀と云ふよりも、愛誦と云つた方が、より私の心持に近い。それは洵に優しい、氣持のいゝ物語である。——

昔、シリアの山奥にレプロボスと云ふ山男がゐた。彼は大男で、力も何人力と云ふ位强く、その頭の髮の中には四十雀が何羽と無く巣喰ふてゐたが、性來心根の優しい彼は、決して人に害を加へたりしないばかりか、よく獵夫などを助けて獸を取つてやつたりした。間も無く彼は大名になりたいと思つて、天下で一番强い王様に仕へて功名を立てた。そして思ひ通り大名に取立てられたが、戰捷祝宴の席で王様が悪魔に祈りを捧げてゐるのを見ると、彼は世界には王様よりもまだえらい悪魔のあることを知つて、恰かも欺されたかのやうに憤る。そこで王様は彼を謀叛人として牢屋に入れたが、レプロボスは悪魔に救はれ、その弟子となり、悪魔と共に遠くエヂプトの砂漠へ舞ひ上る。悪魔はやがて砂漠の中の或一軒家に舞ひ下りて、其處の隱者を誘惑しようとした。が、悪魔は失敗した。隱者は朝になつて、そ

の戸口に大男を見出した。大男が云ふには、世界では悪魔が一番强いと聞いてゐたが、その悪魔もあなたには負けた、だからあなたこそ一番强い人に違ひない、どうか私をあなたの弟子にして下さい、と賴み込んだ。

隱者もそれには困つたが、やがて「おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう理」を說いて、遂に彼に流沙河の渡し守になれと敎へた。レプロボスはそこで隱者から御水を授けて貰ふことになつた。すると、不思議にも嘗て彼が山を下つて王樣に仕へようとした時、髮から飛去つたあの四十雀の群が、折から日輪の爛々と輝いた中から、彼の叢ほどな頭へ舞ひ下つた

レプロボスは又、名もキリシトホロと更められ、いよ〳〵流沙河の渡し守になつた。そして、その後三年間風雨も厭はず渡し守をしてゐたが、嘗て隱者が云つた御主の姿は一度も見えなかつた。或風雨の烈しい眞夜中、いたいけな聲がして小供が一人、川を渡してくれと賴んだ。キリシトホロは不審に思つたけれども、直ぐに小供を肩へ載せて雨の中を川を渡りはじめた。ところが、初めはそれほどでも無かつたものが、次第に川の中程まで來ると、肩が重くなつた。彼は懸命に堪へた。そして最早や一步も前に踏み出せなくなつた時、不思議にもこの雨の中に例の聞き慣れた四十雀の聲がしたと思ふと、肩の小供の頭は三日月ほどの金光が輝いてゐた。キリシトホロは急に力が出て向ふ岸へ辿り着いた。そして、その小供と云ふのは實は天主だつた。……

これが『きりしとほろ上人傳』一篇の梗概である。其處に盛られた作者の思想は暫く措き、これ位の完成を持つた作品は、作者の作中でも稀らしい。殊に、この豐富な空想と、構圖の妙味に至つてはどうであらう。これが凡庸の手に成つた作品であらうか。否この空想が、構圖が、これが單なる頭腦や、小手先きの才氣と云へるであらうか。どうしてこの才氣を(この作品が才氣のみによつて作られてゐない事は無論である。それに就ては以下說く所を參照して頂きたい)作者の人間から切り離して考へる事が出來よう!

啻に『きりしとほろ上人傳』のみでは無い。又、『奉敎人の死』の、例へばあの作の筋の展開の仕方を見ても、それは十分わかる事である。――奉敎人達が拾つた美少年は信心が篤いので伴天連も彼を愛してゐたところが、此頃になつて信者である村の傘張の娘との浮名が立つた。しかし、初めは誰もその噂を本當にしなかつたが、噂はます〳〵高くなり、遂に娘が孕みその親は寺院へ怒りに來たので、今は疑ふ餘地も無く、その美少

年は寺院から放逐された。　讀者は此處まで讀んで來て、作中の人々同樣、何の疑ひも無くその美少年が娘と通じてゐた、と思ひ込むに違ひない。ところが、……

　ところが、寺院を放逐された美少年は、何の云ひ譯をするでもなく、世間からは耶蘇教徒だと云ふので迫害を受け、乞食同樣な暮しをしながらも勤行を怠らなかつた。或時、長崎に大火事があつて、かの傘張の家も燒けた。その家は父親も娘も逃れたが、嬰兒がまだ火中にゐる。しかし火が烈しいので救ひにも行けない。その時である、かの美少年が何處から現はれたのか、いきなり火中に飛込んで、嬰兒を救ひ出す。が、恰度その時美少年は燒け落ちた梁の下敷きになつた。そして、嬰兒は彼の手から人々の方へ投げ出されたので、危ふく助かつた。人々は彼が嬰兒を救つたのを流石親子の情だと云ひ合つた。……此處へ來ると讀者は一層、美少年が娘と關係があつた、その嬰兒は彼の子だ、と思ひ込む。ところが、……

　ところが、その時唐突に傘張の娘が伴天連の前へ出て、泣きながら懺悔したのでは、あの嬰兒は美少年の子では無い、私は彼に幾度と無く云ひ寄つたが、何時も素氣無くされるので、遂に腹癒せに自分から關係があるやうに云ひ觸らしたのだ、嬰兒は實は隣家の男との間に出來た子だ、と云つた。恰度その時、今にも息を引取らうとしてゐたかの美少年の燒けた胸からは、ふくよかな女の乳房が表はれてゐた。――と云ふのだ。

　何と云ふ筋の展開の仕方であらう！奇想天外より落つとは正に此事では無からうか。作者は讀者に、散々いろんな理由から、かの美少年が娘と通じてゐたやうに思ひ込ませた揚句、終りへ行つてコロリ寢返りを打つて、「さうでもない」と本當の所を明す。讀者は其處で稍呆氣に取られてゐると、もう一つ加之に、美少年は實は女なのだ、と底を割る。洵に端睨すべからざる展開の仕方では無いか。而もそれが少しも不自然で無いのみならず、その點非常に巧く行つてゐる。而して亦この作に於ても、芥川氏が才氣縱橫、到底凡庸の作家で無い事を證據立てるばかりで無く、それが小手先き乃至頭腦(あたま)だけのもので無い事にも氣附くのである。否此等の二作のみでは無い。當時批評家からよく云はれなかつた『南京の基督』の如きも、私はかなりいゝ作として認めると共に、この場合の適例として上ぐべきものだと思ふ。

　が、或は斯くの如き事は、芥川氏に於て大して重要な點では無いかも知れぬ。私は更に彼の他の特質に就て語らねばならぬ。

三、英雄人を欺くの類か

既に芥川氏の才人以上である事を認める人はあつても、彼がセンチメンタルな情の人間である事を知る人に至つては殆ど稀である。否、それどころか世間は往々彼を以て、人間味の無い男、人間的な感情の濕ひが無い男、なぞと云ふ。のみならず、それを以て彼を難ずる好題目にしてゐるのだから、芥川氏も災難だ！

元來芥川氏は、その本來に於てセンチメンタリストなのだ、――と云へば、唐突に聞えるかも知れぬ。が、それが實際なのだから、仕方が無い。では、その本來に於てセンチメンタリストの彼が、一見何故さうで無いやうに見えるか、と云へば、第一には彼が極端にその性癖を嫌ふ所から來てゐる。而して、第二には飽迄理智的に己を支配しようとする所から來る。畢竟、センチメントの涙によつて理智の眼を曇らされる時、彼自身、己が何かルーズにでもなるような氣がするのに違ひない。又一面、世間的な第二義的な必要から來てゐるのかも知れぬ。……兎に角彼は、さうした理由から、センチメントを除いて、理智的にならうとした。而も彼の努力はそれを成し遂げさせたのである。

その邊の消息は、矢張り芥川氏の人間に接して見ると、よく分るやうである。三人以上同座した場合には、ホラテユースの所謂「一の機智を失はんより寧ろ一人の友を失はん」とも云ふべき趣を示す彼（何故彼がさうなるか、分る人には分ると思ふ。そしてそれが分る人は強ちさうした彼を責めないであらう。）ではあるが、一旦それが二人きりになれば、打つて變つてしみ〴〵と話し込む。而して友人にも中々思ひ遣りのある方である。

それは對人關係の場合のみでは無い。人は何故、彼の作品から彼の情味を見ようとはしないか？『きりしとほろ上人傳』を見給へ。『蜜柑』を見給へ。又、最近好評であつた『トロッコ』を見給へ。此等の作品が吾々を動かす所以のものは何か。畢竟悉くそれは、作者のセンチメンタリズムでは無かつたか！『きりしとほろ上人傳』に流れるあの何とも云ひやうの無い優しい氣持、『蜜柑』のあの主人公の感動、而して『トロッコ』に描かれた少年とその少年を懐しんでゐる作者の氣持、――恐く之れ、作者芥川氏の人間にあるセンチメンタリズムの流露で無いものは無い。謂はゞ、作者は泣き面を見せない迄の事であらう。英雄人を欺くの類か、その點世間は餘りに甘く芥川氏に欺かれたとも云へよう。

が、英雄芥川氏は斯く「人を欺く」事には成功したけれども、否それは必ずしも「成功」では無かつたかも知れない。……

……彼の作に『或日の大石内藏之助』と云ふのがある。その中で、内藏之助が皆の話してゐる題目を嫌つて、話題の轉換を試みる所がある。そこで會話は「彼の意圖通り方向を轉換したが、その轉換した方向が、果して内藏之助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である」。そして話題は又別な内藏之助にとつて不愉快な方向へ進んだ、といふ所がある。恰度、その内藏之助の心理が芥川氏の場合に似てはゐまいか。芥川氏はセンチメンタリズムを捨てゝ理智に就いた。而して世間からは「彼の意圖通り」理智的な人間と思はれたけれども、さて「その方向が、果して内藏之助（芥川氏）にとつて、愉快なものだつたかどうか」。芥川氏は其處に、己を人間味が無いなどと亂暴な事を云ふ「新しい事實（世間）を發見」しなければならなかつた。……

果してその「新しい事實」は、芥川氏にとつて「愉快なものだつたかどうかは」別として、然うだ、確かにそれは亂暴な言ひ草には違ひない。芥川氏は實際は情の人だつたのである。それに今では彼も人の親である。彼の感想集『點心』中「お降り」の一項を見ても、彼がしみ〴〵した情の人である事がよく窺はれるのである。

四、彼は竟に詩人であつた

芥川氏のセンチメンタリズムを認める人が少ない以上に、彼が詩人である事を知る人に至つては、最早や皆無と云つていゝ。否、芥川氏を詩人だなぞと云へば、中には頭から嗤つてしまふ人がゐないにも限らぬ。それ程彼は、詩の分子など持ち合せない人間に見られてゐる。

が、その實芥川氏は中々詩人なのだ。では、彼は如何なる詩人であるか。固よりセンチメンタリズムを嫌ふ彼は、生田春月氏の如き抒情詩人ではない。又、追懷的な氣持を樂しむより寧ろ壯心に燃えてゐる彼は、佐藤春夫氏の如き愛戀の詩情にも他人である。否、本當を云ふと彼も多分にさうした詩情を持つてゐる方なのである。然し、彼はその底の詩を自身好まないらしい。從つて、よしそんな詩情を持つてゐようとも、彼はそれを捨てるか、或は又強いて蔽ひ隱すか、兎に角それを表はさない事は事實である。

では、彼は如何なる詩人であるか。……芥川氏はよく夢の話をする。こんな夢を見た、あんな夢を見たなどと、時々私は、彼から夢物語を聞かせられる。ところが不思議な事には、その夢に大抵花が出て來る。「誰々が薔薇の前に立つてゐた」とか、

「菊の花が、それが白いやつでね、一面に咲いてゐるんだ」とか、私は屢々出て來る彼の花の話に、今更人間にだけしか興味の向かない私自身を顧みて、彼が中々詩人である事を感じさせられる。さう云へば、夢の話だけでは無い。彼の小説のどれを見ても、乾度一つや二つは花が出て來る事を讀者は氣附かれるに違ひない。又、「百日紅」と題する感想の一項では、いろんな草花に就て、よくそれを観察した人で無ければ、而して興味を持つ人で無ければ、氣の附かぬことを語つてゐるではないか。

更に又、誤つて世間から人間味がないと云はれる彼の小説に就て見よう。彼はよく昔物を扱ふ。歴史小説とは稍趣を異にするあの昔小説は、背て或る人から、芥川氏は昔を描いてもその中の人物は現代だ、とか非難された。成程その非難は中つてゐた。彼の昔小説に出て來る人物は、現在其處らにもゐさうな人物である。が、あの「時代」はどうであらう。私は成程人物は「現代」かも知れぬが、「時代」は「時代」としてはつきり出てゐると思ふ。例へば初期の作『羅生門』にしても、作品としては無理があつて私もこれを大して佳作とするに躊躇するものだが、確かにあれには平安朝の「時代」の空氣が出てゐる。又、『鼻』、『運』更に最近の『六の宮の姫』にしても、すべて「時代」ははつきり浮び上つてゐる。而して『奉教人の死』、『きりしとほろ上人傳』の一篇にはあの當時の「時代」が、又『開化の殺人』の如き私の好まぬ作にも、「時代」と云ふ點では何だか明治十年頃の「時代」は斯くもあらんと想像される。その他終始一貫、芥川氏の作品は悉くそれ〲の「時代」の空氣が髣髴されてゐないものは無い。

芥川氏の小説は、「時代」を表はし得たのみならず、又、よく見ると他の作家の歴史小説とは、かなり趣を異にする所がありはしまいか。と云つて、巧い拙いを云ふのでは無い。謂はゞ、芥川氏のものは、それ〲の「時代」へ息吹が掛つてゐるやうな所が無いか。語を換へて云へば、昔の「時代」を懐しみ憧れる氣持が流れてはゐまいか。畢竟私は、その「時代」が作者にとつて寧ろ「現代」よりも一層美を感じさせる爲では無いか、と思ふ。私をして牽強附會の譏を成すものと思ふ者に恥あれ！實際私はさう思ふのである。

試みに讀者よ、謙虚な心もて彼の昔小説を味ひ給へ。それは決して理智一遍のものでも無ければ、又才氣だけのものでも無い。若し其處に讀者には不滿を感じさせるものありとすれば、それは表現の或る固さであらう。が、讀者はそれに堪へなければならぬ。されば其處には、少しく誇張して云へば「古へを偲び咽ぶ」作者の心を見出すであらうから。……「古へを偲び咽

ぶ」一心！然うだ。芥川氏自身も「昔」と題する感想の一項で、何故「昔」を描くのかと問はれて、「異常なる事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし悪い。もし強いて書けば、多くの場合不自然な感を讀者に起させ」るからと云ひ、又、「さう云ふ必要以外に昔其ものの美しさが可成影響を與へてゐる」ことも語つてゐる。

私はこの上、芥川氏の詩人である事を立證する爲に、彼の芭蕉や一茶に對する一家見を紹介して、私自身の短見を暴露するま の必要を感じない。從つて又、彼の南畫に對する見識ある鑑賞眼を紹介しようともしない。唯一事、彼は嘗て或る婦人雜誌から、女を如何なる點から好むかと問はれて、「ほの〴〵とさせる點で」とか答へたそうである。私はそれを聞いた時、如何にも彼らしい、彼の詩情を適確に云ひ表はした言葉だ、と深く感じたことを云ひたい。

猶彼は「不朽」と云ふ感想の一項で、文章論をした中で、彼自身メリメに私淑するかの如き口吻を洩してゐる。が、彼はメリメでは無い。メリメにはなれさうも無い。メリメには西洋人でなくては見られないやうな冷酷さ、獰猛さ、極言すれば或る野蕃ささへある。東洋人の彼にはそれが無い。が、それが無い代りには、彼には東洋人特有の詩情がある。最近の傑作『庭』を見給へ。庭を表面に描いて人物や事件を裏にしたあの手法の成功は云はずもがな、一字一句を苟もしないあの簡素な南畫(?)を見給へ。作中人物の如き、一人に就て凡そ一言か二言の言葉だけで、それで或程度までそれ〴〵の性格を髣髴し得たあの効果を見給へ！ 我が芥川氏は竟に東洋詩人であつた。

五、表現——完成——冒険

私は前章に於て、芥川氏の小說にある表現の固さと云ふ事を一言した。事實、彼の小說の表現には、多くの場合一種固い感じが附き纒つてゐる。而してそれは、世の批評家をして、往々彼を誤らせる基となつてゐるものである。

私は態と「技巧」といふ語を避けて、「表現」と云ひたい。技巧といふ言葉が誤られ易いからである。「表現」を云ふとなれば、それは必然文章に就て語る事になる。芥川氏は名文家として聞えてゐる。實際彼の文章は、今更私が贅する迄も無く、一字一句を苟もせざる、隙の無い、一種精嚴なる名文である。而も精嚴ではあつても、毫も型に嵌つてはゐない。のみならず又、その云ひ廻しに至つては頗る自由自在である。それは里見弴氏の文章が自由だと云ふ意味とは違つて、自由なのだ。大抵の人には、その人に決つた云ひ廻しと云ふものがある。が、芥

川氏にはそれが無い。凡そ如何なる人の云ひ廻しでも、總べて彼の中に含まれてゐない型は無い、と云つても恐らく差支へ無いと思はれる位、多岐多端自由自在、その點想像もつかぬばかりの苦心と用意とが拂はれてゐるのが彼の文章であらう。

彼は又、嚮に擧げた「不朽」と云ふ感想の中で文章の苦心の程を示して、彼自身は華麗なる文體を嫌つて、簡潔なるそれを希望してゐる。又、尤もな意見だと思ふ。が、意見は尤もであるが、その點彼は未だ實際に於ては、その心掛を滿し得てゐないのでは無いかと疑はれる。固より彼の文體は冗漫では無い。否より寧ろ簡潔に近い。然し、簡潔は簡潔であるが、未だ華麗な氣味がないでは無い。以前、支那を扱つた『南京の基督』、『秋山圖』なぞ、その點作者の意に背くものでは無いかと思ふ。

が、大體に於て、芥川氏が華を去り簡に就かうとする心掛けは窺ふに難くない。而して啻に文體の簡潔を心掛けるのみならず、彼は彌が上にも作品の「完成」を氣にする。彼の作品は悉く作品の締まりが最も注意せられてゐる。而もその意味に於ては、作品を完全に支配し切つてゐる事、彼如き作家は稀であらう。恰かもそれは、作品の「完成」は先づ措き、飽迄深く突込む事を以て第一と心掛ける里見弴氏と、その行き方に於て好對照を成すものと見られる。畢竟、彼の作品が一種或る固さを感じさせるのも、さうした理由に基くのではあるまいか。餘りに精緻に過ぎる文章、餘りに締まり過ぎる表現、其處から來る或る窮屈な感じではあるまいか。かの人間味が無いとか、人間的な感情の漲ひが無いとか云ふ非難は、強ち根據の無い譯でも無く、實はその「表現」の固い感じを、大雜把に然う云つたのでは無からうかと思ふ。

私は又、一面詮索を逞しくして、彼の「完成」は時にその作品に妨げを成すものでは無いかと杞れてゐる。作者は餘り「完成」を心掛ける所から、彼自身その裡にある出るべきものも出さないで終るやうな事は無いであらうか。蓋しそれは想像に難くない事である。

試みに今之れを『秋』に就て見れば、成程この作品はこれだけのものとして申分無く「完成」もされてをれば、又佳作とするに躊躇もしないけれども、慾を云へば、作者はまだ突込むべき所をも態と控へたらしく思はれる點で、聊か私には不滿である。尤も作者は、この作に於ては心理的に剔抉する方法を採らずに、出來るだけ暗示的に描かうとしたらしい。從つて例へば、あの自分の戀人を妹に讓つた姉が久し振で上京して、夜、今は妹の夫である以前の戀人と庭を默つて歩く邊など、恐らく

作者のこの意圖が十分の効果を上げた箇所であらう。而してこの作品はその意圖通りには成功したものと云つていゝ。と、斯う云つて來ると、私の所謂不滿と云ふのが分らなくなつてしまふが、謂はゞそれだけに私は不滿なのだ、と云ふより仕方が無い。詰りあれ以上に突込めば、あの『秋』と云ふ全體の調子が破れて來るかも知れないとは思ひながらも、……然うだ、私は更に別な方から之れを云はう。

唐突な事を云ふやうではあるが、私は芥川氏と會つて面白く思ふのは、彼の顏である。時によつて色々に變るあの顏である。或時は澄み渡つた秋の朝の感じ、又或時は小供みたいな無邪氣さも見られる。ところが、どうかすると――大抵それは稍疲れた時らしい――あの顏の眼から頬へかけて、非常に病的な感じを見出す事がある。それは一種不氣味な感があると云つても必ずしも誇張では無い。その點、例へば久米正雄氏の、如何に憂欝が漂つてはゐても飽迄健全な顏と較べれば、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがある。

既に表てに病的な感じを漂はせてゐる彼は、その裡にもそれが無ければならぬ。彼はよく凄氣と云ふ事に就て語る。私は彼ほどそれを口にする人を見た事が無い。口にするばかりで無く、例へば池西言水の俳句の凄氣を認めたのは彼である。又、作者自身は餘り好まないらしい『奇怪なる再會』にも凄氣が出てゐる。この作は新聞の續き物として書かれた爲に、其處に幾らか續き物の約束に縛られた點は見逃せないが、最初二三章の或るルーズな感じから、次第に陰氣な空氣に變り、引續いて凄いなと思ふと忽ち、それに引入れられて有無を云ふ餘裕も無く最後まで連れて行かれる。鳥渡讀者は、凄さのために作品の出來榮を忘れてゐる位である。

斯く見來つて私は、卒直に、彼が「完成」のみを心掛けるのに強ち賛成し得ない。と云つてしまはうか。例へば、私が今云つた病的な特質の如きも、作者はもつと大膽に表はしてはどうだらう？多少「完成」と云ふ點に難はあつても、それは一時の事だ、もつと勇敢に突込んではどうだらう？尤も聰明な芥川氏の事である。よくそれに氣附いてゐられる事も、私は知つてゐるのだ。いや、何のかのと云つて見るものゝ、蓋し藝術上の冒險は最も難問題、難事業に屬する。

六、結語

私は如上、屢々芥川氏の感想を引用した。それは他でも無い、彼の近著感想集『點心』の中から拔いたのである。私は此頃、この『點心』と共に、佐藤春夫氏の感想集『藝術家の喜

びにをも併せ讀む機會を得た。すると、讀みながらいつか私は、この兩者を比べて見るやうな心持になつてゐた。

『點心』も『藝術家の喜び』も、共に如何にも藝術家らしい感想集である點では疑ひが無い。藝術に沒し切つてゐると云ふ點では、他に鳥渡比を見ない位で、恐らくその意味に於てこの兩著者は藝術主義者と云つていゝ。が、素質に至つて云はふまでも無く各々異つてゐる。その最も大きな特色は、前者は動もすると久米氏の所謂「衒學(ペダントリイ)がしたくて堪らない」趣の見える中に、殊にこの著者が女に就て云つた所謂「ほの／＼」たる詩藻を湛へてゐる點であらう。而して後者はと云へば、それは佐藤氏のあの「詩」の表はれが濃い。更に又、深切な讀者なら、前者の中に尋常一樣で無い藝術家の心掛け、苦心の氣持を讀み取るであらう。而もその氣持が、更に尋常ならざる壯心に滿ちてゐる事に氣附くに違ひない。而して後者はと云へば、その點何處か己の「詩」を樂しみ、それに安心してゐる氣持が見えやしないかと思ふ。……いや、然しこんな比較印象は結局どうでもいゝ事なのだ。玆では、兩者の比較が重要な問題では無くて、偶々それらを並べ語る事によつて、前者芥川氏の「生きかた」をより明瞭させる便宜としたに過ぎない。

恐らく芥川氏には、未だ私の見得ない長所があるかも知れないと同じく、又私の見得ない短所もあるかも知れない。が、然う云ふ意味では、私は十分彼に信用もし、安心もしてよからうと思つてゐる。彼が負けず嫌ひである事は、屢々菊池寛氏の云ふ所である。又、芥川氏自身も嘗て「僕に若し長所があるとすれば、それは、僕の轉んでもたゞは起きぬ性質だらう」と云つた。全く彼は藝術上に於て緊張した「生きかた」をしてゐるのみならず、又實生活の方でも、出來るだけ無駄の無い「生きかた」をしようとしてゐる。その點彼は、必要不必要の限界を明確に心得てゐる男である。而して一意、その必要の「生きかた」に邁進しようとする男である。既に彼には、如上私の述べた豊富なる天分があつた。而も「生きかた」は斯くの如くである。何の不足があらう！　正に彼は祝福さるべく、又稱讚さるべきでは無いか！

恐らく芥川氏は行詰る事を知らない人であらう。否、彼は屢々行詰つて、屢々悟る人であらう。彼は元來都會人であつた。從つて彼には、都會人通有の或る危險なる「生きかた」に墮す憂へがあるべきだつた。が、彼は疾くそれに氣附いて、自身その點を警戒した。而して今日の斯うした「生きかた」を樹てたのでは無かつたか！

芥川氏は常に小說に於て、新しくなく、と云つて勿論古くも

ない。「不[illegible]」の境地を心掛けてゐる。然り、彼の數年來の名聲の如きも亦、今や流行の域を越えて、定評と成りつゝある！

拙論『芥川龍之介稱讃』、「稱讃」反つて芥川氏を傷けた事多い。謝して筆を擱く。（八月八日）

夏爐冬扇

井上啞々

書齋自嘲

日高うして起ぐるは、敢て長夜の宴を張りしに非ずして、疎懶の然らしむる也。忽々朝飯を喫し去つて書齋に入る。書齋と云ふも、書庫なく、書籍なく、空然、孑然、蕭然、闃然として破帽弊衫の亂れ、故篋敗几の横はるのみ。陰暗なる一室は北に開いて障子を以て蔽ふ、障子、紙破れて繕はず、棧に埃堆くして拂ふなし。隣室を劃する襖、處々裂けて汚點斑々たるは惡童の徒書せるなり、觸目悉く殺風景たらざるなし。

名士の日常を聞くに、信書机上に山を成し、一々開封して讀了するの煩に堪へず、人を傭ふてその任に當つるあり。訪客早曉より雲集して寸時も絕えず、應接して舌爛れ唇爛れんとすと。予交際狹く、貧窮にして而も名聲なきが故に、一片の書簡來ること稀に、一人の訪客至ること稀なり、開いて讀み、之に答ふるの煩なく、門に迎へ、招じて茶菓を勸め、世辭愛嬌を撒くの勞なし。益者なきが故に開發する所なく、損者なきが故に迷惑する所なし。

予資質手工に拙にして、補綴修繕意の如くならず、常に人に倚賴して袖手傍觀するのみ。花卉栽培の法を知らず、禽鳥飼育の術を解せず、圍碁將棋を始め、音曲歌舞等一切の遊戯に通ぜざるが故に、閑人更に閑にして、欠伸續出し、終日昏濛として癡呆の如し。日沒して燈火點じ、始めて我に還るは何ぞや、晩酌の機到るが爲め也。晩酌の量に限度あり、醉を買ふに足らず、肴盡きて酒亦盡き、酒盡きて興亦盡く、乃ち爲さず、語らず。

大道は車馬の喧あり、路地は人糞の臭あり、共に漫歩に便ならず。寄席に名人を聽く能はず、芝居に名優を看る能はず。旗亭に庖丁の妙手なくして、山婢の粗野甚だ厭ふ可し。雜誌の論文晦澁にして釋く能はず、小說は淫靡にして精讀に堪へず。好んで作る文章は時好と背馳するが爲めに半文錢に値せず、乃ち擱かずして止み、筆を執らずして止む。

反古整理

先考沒して中陰を過ぎ、身心漸く舊に復せんとす。乃ち閑を偷んで椽の棚、戶の隅、倉の奧に一括せられて、風呂敷に、葛籠に、革鞄に、鼠の糞と、蝶と、蜘蛛の巣とに塗れたる書類を解縛して其整理に從ふ。先考素より保存を好んで斷簡零墨と雖も苟くもせず、而も七十有八年の長生涯一身に關し、家族に關し、公私の生活に關する一切の書類なるが故に、積まゝ正に山を爲さんとす。予は此期を劃して簡易の生活に入らんと欲し、先考の陰德を證する、功勳を表する、或は自筆の記錄、詩歌俳句の短冊色紙を除くの外、悉く廢棄して反古と爲し、予が過去の風流罪を摹す書牘も共に破却せんと決す、乃ち風呂敷を解き、革鞄を開き、葛籠の蓋を取り、絡げたる紐を切り、匆々として類別し、著々として撰擇す。地所家屋の賣買に關する一札あり、婚姻死亡に關する一件あり、官廳の辭令あり、貸金の證文あり、親戚交友の書簡、名所舊蹟の繪葉書、年頭狀、引札の類に至るまで殆ど應接に遑あらざらんとす、若し精密に取捨せんには數日を費すも猶足らず。此に於てか先づ軟紙を留め、硬紙は悉く屑籠に葬る。軟紙は手拭と爲す可く、落紙と爲す可く、之を壁隅に積んで、每朝上厠に際し亂抽して携ふ。これ書簡の筆者に對して敬意を失するの所業にして陳辯の辭無きに苦しむ。

一括の書類を解いて數通の證文を得たり。額面百圓を筆頭とし、最底を十圓とす。孰も保證人連署にして、記に何年何月何日元利合計取揃へ堅く支拂ふ可く、萬一本人支拂ひ難き場合は保證人に於て屹度義務を履行すとあり。烏兎匆々二十餘年を經て、證文の債主の家に儼然として存するは、これ債務者並に保證人の義務を履行せざりし證左に非ずや、呵々。債務者の中には早く既に死し、家族の行方不明なるあり。現に生存して鉅萬の富を成せる某は當時參拾金に窮し、その先輩を連署せしめ差入れたる一札の証文あるを知つてか、忘れてか、額面の元金も入れねば、利子も拂はず、恬然たり、洒然たり、今若し面前に之を示して、その不信を詰責せんか、高慢の鼻柱を挫くこと盖し容易なりと雖も、反古を再び活用するは先考の遺志に戻るを慮りて止む。續いて一冊の郵便貯金通帳現はる。受入高金五十

圓と五十錢、表記は高橋某、奥書は本多某にして實印を捺し、別に先考を以て受取人と爲す委任狀を添ふ、明治廿一年より大正十一年に至る卅五年間、未だ一回も拂出高なきが故に元利を合して優に二百何圓に上る。妻は之を見て狂喜し、若しこの通帳にして有効ならしめば、多年質屋の土藏に呻吟せる丸帯を落籍し、再び天日を仰がしめんと言ひ、予は親戚朋友を招いて大盤振舞を爲さんと豪語す。これを甲に訊くに有望なりと答ふ。乙に計るに亦手を拍つて意外の收入を祝福す。而も心中窃に先考の有價証劵を反古と爲して顧みざるに疑ひ無き能はず、遂に爲替貯金局に就いて効力の有無を訊す。その反辭に曰く、十圓以上の預金は十年毎に書留郵便を發して利子記入の爲めの提出を預金者に通ず、此の通帳既に三十餘年を經て三回の通知に一回の提出なきが爲め、預入の一家斷絶せしものと認め、既に台帳より抹消して金額は國庫に沒收せりと、先考の反古と爲せし理由正に分明、疑念釋然たり。妻之を聞いて啞然たり、茫然たり。

雪隱善用

雪隱は臭き所なれども、人間とは切らんとして切る能はざる宿縁あり。自ら雪隱へ行く能はず、溲瓶、虎子を借りて用を辨ずるは、病の重きを證し、垂れ流しは更にその篤きによる。されば宜しく雪隱へ日参し得る健康を祝福せずんばある可からず。魚市に在つては其腥を知らざる如く、我家の便所は左程に臭く感ぜざるは妙なり、更に脫糞一塊の後に至つては他臭を消して餘りあり。悠々乎として讀書し空想し、時の移るを忘れんとす。他家の後架に至つては追ひ立てらるゝが如く、臭きことも亦一層なり。義厠に至つては不意に扉を開けらるゝ、危惧あり、常に咳拂ひに先取權を示さゞる可からざるが故に、不安焦慮に堪へざるなり。

永井荷風その昔紐育の銀行に勤務し、その事に倦むや、雪隱を以て唯一の逃場と爲し、讀書三昧に入つて出づるを忘るゝこと日に幾回なるを知らず、重役雪隱行の頻用を知るも之を咎むる能はず、偶々咎むれば乃ち答ふるに腸の疾患を以てせりと。予が亡弟幼時讀書習字を嫌ひ、机に向へば輙ち小便に立つを常とす、監督の祖母遂にこの癖を矯むる能はず。一は讀書を欲して雪隱に行き、一は讀書を嫌ふて雪隱に逃る。一對の好話柄也。和尙小僧の眼を逃れんとして雪隱に甘酒を飮む、小僧も亦甘酒を飮まんと欲し、扉を排けば和尙既に在り、小僧乃ち更に一杯を勸む、機智賞す可し。讀書飮食を以て雪隱の善用と言ふ可くんば、雪隱に抑留するは之を惡用と稱せざる可けんや。

予幼時夜半の雪隱を恐れ、人をして灯を挑げて戸外に立たしむ。祖母笑謔して曰く成長して妻を娶るも、妻をして猶雪隱の番人たらしむる乎と。蒲生君平厠を出でて座に歸るや、異臭紛々滿座鼻を掩ふ、豈に圖らんや、携ふる團扇に黃色點々たらんとは。三奇士の一人たる所以。

安居四敵

歐陽修に憎蒼蠅賦あり、蠅の暴狀を說盡して餘すなく、以て小人の跳梁を諷する也。予漢籍涉獵淺きの故を以て未だ漢士に南京虫を憎むの文あるを知らず。日本人にして南京虫に螫さるゝもの少なからざるを聞く。蓋し該虫の渡來の近代に係るものなるは、邦書に之が記載を缺くが爲め也。蠅を以て小人に比すべくんば、南京虫はそれ過激派か。滿室の蒼蠅拂へども去り難しとは細川賴之の長大息する處にして、蠅族の兇暴人間をして避易せしむる、今日より酷しきなし。石油乳劑に溝掃除に、蠅捕器に、蠅叩に徒に人間の迂愚を證するに止まる。蚊は昏暗を喜んで跳躍し、蚤は陰濕を好んで活動し、虱は不潔を選んで繁殖す、夏時の生活蠻は蠅に苦しみ、夕は蚊に惱まされ、夜は蚤に攻められざるなし。虱の攻擊は洗濯に依つて僅に免るゝを得べしと雖も、錢湯に電車に、妓樓に戒愼せざる可けんや。毛虱に至つてはその素行の修まらざるを證す。蜀山人に虱の道行の妙文あり、西行、芭蕉を始めとし諸國行脚、武者修行を志すもの虱を恐れて此に風流武藝を捨てざる可からず。王猛は虱を捻つて天下を談ず、乞食は虱を潰して半日の閑を樂しみ、或は之を賭博の具に供す、卽ち大小を較して勝負を爭ふ也。或は虱を以て緋鯉金魚を養ふ者ありと、虱も亦捨て難き哉。蚤に飛躍の術あり、追跡に遑あらず、蚊は逃竄の妙あり。打たんと欲して掌と脛と空響を放つのみ。蠅は多く厠に生ず、蠅を撲滅せんとせば厠を淨めざる可からず。厠の神は最も不淨を忌む。都下の辻便所は糞尿溢流して不潔眼を掩ふ可く、節穴を覗く痴漢絕えずして不安極りなし。此に於てか街路に、溝渠に放尿し脫糞する、獨り小兒と醉漢に止まらず、此處小便無用の禁札は空文に過ぎずして關東の連小便蓋し故なきに非ず。工場、劇場、學校等凡て人の群る處最も厠を注意す可くして却つて放擲す。生活改善を叫ぶ者先づ雪隱改善に手を染むべく、糞尿汲取の市營虛聲のみにして實行なし。自覺を叫ぶ婦人何ぞ家庭の厠を淸めざる。厠の掃除を閑却せる家は厨も亦不潔にして蛆這ひ蠅群るや必せり。

和装讃美

日本の服裝は始め唐風を模し、漸く土俗に順應し、氣候に適從して新様を按出し、異彩を發揮し、特色を顯揚せり。衣冠束帶の威儀堂々たる、甲冑の光彩陸離たる、肩衣の端正なる、裲襠の華麗なる、孰れも完成せる美術として渾然たり、粋然たり。今や、風俗統一調和を缺き、支離滅裂、貴賤を分ち難く、老少を辨じ難し。洋服に下駄を穿き、和服に靴を履き、その昔盲縞の腹掛に股引は川並を貴び、藤掛草履に豆絞の手拭に鯔背を誇りたる氣風失せて、莫大小のシャツを肌に着け、護謨の半靴を穿ち、タオルの手巾を携へたる棟梁を見る。浴衣に足袋を穿き、板草履を履く女を見るも、藍小辨慶の袷に焦茶の献上と黒繻子の腹合せを引掛けに結びたる鬪者を見ず。改良服の研究漸く盛にして住宅との權衡を顧みず。文身の美を誇らんとするも裸の道中成り難きが故に、寶の持腐れとなり、巴里の美人雲鬢を曝して腰に無花果の葉を纏ふのみの流行は、遂に南洋熱帶の蠻人をして後に瞠若たらしむ。若しそれ簡便無比を貴び單に寒暑を防ぐに止まらば、獸皮を纏ふも可なり、風呂敷に穴を穿ちて冠るも可なり。女の帶に繻子あり、縮緬あり、絢爛眼を奪ひ、清濃掬す可し。お太鼓と言ひ、引掛と言ひ、立矢の字と言ひ、結び方に多様あるも、その臀部の尨大を蔽ひ、胴と脚の長短を調節して、姿勢を整正ならしむるに於て、女帶は和裝に最も缺く可からず。これを精神の上より見て、緊縛して解き難きは貞操を保つ所以也。淸玄の櫻姫を挑むや、先づその帶を解かんとす、帶容易に解けずして相爭ふ、遂に免れて事なきを得たるはこれ帶の德なり。

爪哇芝居物語

▲▲ワヤン劇の事▼▼

加藤朝鳥

■ 此の頃ワヤン劇の事は方々の雜誌に見えだした。爪哇のワヤン劇は一度爪哇に遊むだものの永久に忘れることの出來ない歡樂の記憶である。爪哇人自身またワヤン劇の爲めには全く浮身

を愛して居る。他の何物の歡樂よりもワヤン劇を好むで居る。

爪哇人は天成の藝術的根性を持つて居るとは、よく云はれて居ることであるが、眞に爪哇人は甘やかな音樂を好み、優雅な動作を愛し、艶麗華美な色彩の調和を夢みて居る。そして是れ等音樂と動作と色彩との綜合的なものとしてはワヤン劇が最高潮に達して居るものだ。

ワヤン劇に云ふワヤンとは一ったい何を意味して居るのであるか。ワヤンの嚴密な説明は區々まちまちで、爪哇土人に就いて聞いて見ても一定した觀念を與へて呉れない。爪哇更紗の模樣などにもワヤン模樣などと云つて、極めて幻怪味のある妙な人形が用ゐてある。此のワヤン人形は全く爪哇特有のもので、爪哇の象徴になつて居ると見てもいゝ。ワヤンとは何かと爪哇の土人に訊いて見ると『人間のあらゆる特長を聚めて居る人間で無いもの』と云ふやうな妙な答へをする。とにかくワヤンと云ふものは、日本でなら、七福神の特長を聚めて一つの人形にした樣なもので、非常に幻想的な、半神格(アミゴット)式な、親むべき人間の友達であると云ふ樣な氣持ちがする。爪哇は回々教國であつて、回々教の教儀から云へば神を體現することを絶對に許さず、したがつて人間の姿をも之れを描いたり彫刻にしたりすることを嚴禁し、此の嚴掟が傳習的に代々傳はつて居る。しかるに爪哇人の一班思想は元來が回々教の樣な極端な唯一神教的なものではなくて、萬有神教的であるから、宗教に對しても頗る呑氣で大平樂であり、芝居や舞踏などもやらないでは居られず、人體の再現をしてはならぬと云ふ嚴掟も、何處かに罅隙を見つけ出して、その再現慾を滿足させやうと云ふところから、遂に此のワヤンと云ふ、人間でない人間らしく見える或るものを創造して、之れを弄ぶ樣になつた。でワヤンなるものは人間ではないが、人間のあらゆる特長を漏れなく具有してある。歷史的にも各時代の特色を持つて居る。日本で云ふならば、奈良朝時代、平安朝時代、源平時代等の服裝上の特色を聚めて一つのものにしたと云ふ樣な意味で、昔爪哇が佛教時代であつた頃即ちマジョパイと云ふ時代に至るまでの各朝廷時代(ダイナスティ)の特色をとりあつめて一つの人形につくりあげて、之れに半神格的な地置を與へ、もつて爪哇人の汎神論的傾向を遺憾なく發揮して居る。かう云ふ出發點から出て居るのであるから、ワヤン劇でもワヤン踊でも、第一歩からして頗る幻怪味のあるものだとは想像に難くないであらうと思ふ。爪哇が回教國になつてから千年以上になるが、そのずつと以前の佛教時代にワヤン劇が出來、それから今日まで回教の嚴掟に壓迫されながらも、印度古典を題材とした純粹に非回教的な此のワヤン劇が殘つて居ると云ふ事實は、

如何に爪哇土人が天成の芝居愛好家であるかと云ふことを語らないで何と他に解釋がつかう。

それ程ワヤン劇は爪哇人にどつて根深い。爪哇人の歡樂の結晶である。色彩美と、音樂美と動作美との綜合がこれ程に調和して居るものは他にない。劇の場面と場面との間には爪哇特有の牧歌パントンスが古怪なガムラン樂の音につれられて歌はれ、そこに靜に現れて出る爪哇特有の舞姫の群れは、縫ふが如き蓮歩の魔魅と、漣の如くに微妙な顫動を續ける手の動作とを持つて居る。

ワヤン劇にも四五種の類別がある。だがその最も特色のあるのは人形芝居(パントマイム)の部類にはひるべきワヤンプルワ Wayang Poerwa と云ふ種類のものである。此のワヤンプルワが一番昔からある最も古典味に富むだもので、また同時に最も廣く通俗に行はれるものだ。演ぜられる題材は印度神話で、印度のマハバラタ傳說などに名をあげてある英雄、女王隱仙などがその冒險的な生活や武勇の有樣やを夢幻味たつぷりの動作で見せる。その人形は水牛の皮に金銀朱綠さまざまの色彩をほどこしたもの、此のワヤン人形を使ふ役目をダランと云つて、長い長い劇の科白を全部暗記して居り、爪哇人の職業中、最も神聖視される職業のうちに數えられて居る。

椰子の幹と幹との間に白い幕を張つて、その幕の前に淡路源之丞よろしくの體でダランが陣取り、バナナの幹に串し込んだ幾十のワヤン人形を控えさせて居る。全く文字通りの野天夜劇で、同時に此の位元始的のものは一寸他に例が見あたらない、その白幕に映出さすべき光線もまた決してアークライト式な燦然としたものではなくて、たゞ底明るい様な夢の世界を創るに相應しい支那式幻燈機である。此のワヤンプルワ劇の見物席は古式にしたがへば頗る嚴めしい男女の區別をつくつたものだ。卽ち男子はワヤン人形のある方の幕の前の方の側に陣取り、婦人連は、幕の後に居て、たゞその映影だけを見ることになつて居る。ワヤン劇を完全に演ずるには凡そ二百種と云ふ多數にのぼるワヤン人形が必要であつて、それぞれ性格が別になつて居る。その服裝も表情も手足の恰好も一々區別がある筈なのだが、僕等の樣な異邦人にはその微妙な差別を認めることが困難だ。

だが大體の見當はつけ得られないことも無い。

■

全種類は二百の多きにのぼるにしても、大體に性格の顯著なものは約三十種ばかりであつて、隨分誇張的に露骨にその性格の道德的傾向が見せつけてある。譬へば、前額のところからそ

のまゝ兩斜線をまつすぐに引つぱつて、長く細く鼻の先きが尖り、半開の眼で、穏和な口元を結むで居るものは智慧と品位とを見せたものであり、それと反對に前額が瘤の様に突出して眼れあがり、鼻が短かく厚く、眼を丸く見開き、口を開いて居るのは狼藉者の無作法な性格の持ち主である。ワヤン人形には大體に神に屬するものと、人間格のものとに、二大別を樹てることが出來るが、しかし、その間には人相や服裝の上では別に區別を樹てゝは居ない。たゞ巨人と見做すべき性格は、ずつと人形の型を大きくし、胴體に如何にも頑强な氣分を漾はし、眼光を輝かし、時々象の牙にも似たらむと思はれる程な巨きな齒を沿えて居る。顏や手足やの肉の色は、黒、青、白、肉色、或は金色であるが、顏の色と胴や手やの色とは變つて居るのが多い。白の顏に黄金の胴のもあれば、青の胴に黒の顏のもある。そしてどれも水牛の皮だから平面のものばかりだ。

舞臺面の構造は前にも一寸云つた樣に白いサロンを垂直に垂れ、上から幻燈をつるして居り、芭蕉の柔軟な幹が幕の前に横たへてあつて、それにづらりと人形の軸がならべて串し込んである。幕の中央部にあたる處に、爪哇語で『グヌンガン』と稱されて居る森林の茂つた山を象徴した樣なものが置かれるのが普通の樣式になつて居る。此の『グヌンガン』は森林の山の意味ではあるが、決して森林ばかりを象徴して居るのではなく、たゞ劇場面によつて、或る時は都市を意味することもあるし、また或る時は、宮殿ともなり、湖水ともなり、泉ともなり、天國へ入るの門をも意味することがある。また時としては悪鬼官が築く砦城ともなる。その場合々々に人形師のダランが告げるのであつて、その觀念は實に爪哇式に融通無礙でもあり、朦朧でもある。尙ほワヤン人形以外此の劇で用ゐられる小道具としては、劍、弓、槍、楯、投槍等があるが、特に劍は土語でクリスと呼び恰も日本人が日本刀に大なる自慢と矜持とを有するが如く、爪哇人は爪哇のクリスの爲めに無限の氣焰をあげて居るのであつて、特に芝居には古式の複雜した型のを持ち出して來る。特に劇中の神や英雄やが佩くべき劍は頗る立派なもので、古代の名匠の手になつたもの、或はその模造品を用ゐ、數多の小道具中頭角を拔いて輝いて居る。その他馬とか馬車とか云ふ樣なものも出て來る。いつたいに人形は小さく、その巨人を表すものと雖も、人間よりはずつと小さく出來て居り、かつ數が多數であるから、何となく小人島の樣な感じがする。所謂小劇場なるものは、かう云ふ意味で又別な工夫もある樣な氣持ちがする。凡そ夢幻化の効果は實物を擴大するか、縮圖化するかが一つの手段であつて、僕はお噺芝居は草の花や鳥などを擴大して見せて

効果があり、ロスタンのシャントクレル劇の如きは、此の擴大味に大効果があるなど、僕流なドラマツルギーを持つて居るが、ジヤワのワヤン劇から、若し一暗示を獲得するとすると縮圖化である。望遠鏡を逆にして歌舞伎劇でも見るとしたら、その小人島的趣味において、ワヤン劇の或る味ひを彷彿させることが出來はしまいかなどと、途徹もない事を考へた。たゞし之は識者の一笑か一興か僕の介意するところでは無い。とにかくワヤン劇は偉い奇蹟的なものだ。此の小人島的な大多數の矮族の性格や澤山の小道具やを一つ一つ辨へ之れをうまく指揮して行くダランと云ふ役目は、文明國の驅け出しの所謂舞臺監督者流の想像を懸絶した偉大なる能力であると驚嘆せざるを得ない。

實に此の爪哇芝居のダランこそラインハルトも洗足で逃げださねばならない絶妙な能力のある舞臺指揮者である。布哇のダラン師は一々爪哇の古典劇の格式を忠實に守つて、その筋書きに出て來る神や、英雄や、やんごとなき美しい姫君やを人形に演ぜしめねばならないばかりか、あの複雜な繁文縟禮な布哇貴族の作法と節度とを一々細かに心得て居らねばならぬ。あの長い長い古印度の叙詩事を暗記して居ることだけでも、僕は大安曆を連想せざる得ない。半間人の記憶力と云ふものは奇蹟以上だ。その筋書きの長さは五夜六夜に亙ることは決して珍しくなく、時に彼また劇作者の位置に立たねばならない場合さへある。

ダラン師が劇作家となる場合は、長い古典劇の筋書のあい間あい間に、現代に起つた大きな事件を諷刺的に織り込んで行くことであつて、古典の形を嚴守しながら、さながら聖書でも書き足す樣に、その古典味のなかに、現代事件を風格化することは、眞にダラン師の天才にまつところである。被征服者たる彼等爪哇人はその征服者である和蘭人に對し、時に思ひがけなくワヤン劇のなかで五百年來傳統の恨みを返報することがある。かくしてワヤン劇はダラン師の才によつて新挿話を加へられ、年々歳々その長さをさながら蟲の如くに長くするのである。爪哇で出來る毎年のマライ語の年鑑には、此の改作のワヤン劇の筋書が掲載され、いやしくも爪哇人であるものは此れを耽讀する。その古來の精神を飽くまで風格化して行くところは、爪哇人の聖書は正しく此のワヤン劇の筋書きではないかとさへ思はせる。回教國の爪哇にマライ語譯の回教聖典（コーラン）は無いが、印度教的ワヤン劇は殘るなく民衆に親炙されて居ると云ふことは、爪哇精神を知らむとする人達に、まさに解けよとばかり投げだされた大きな意味深い謎であると思ふ。話はそれたがダラン師が如何に多藝多能であらねばならないかと云ふことは、單に之れだけに

とゞまらず、又一面には極めて富裕な即興詩人たるの素質を具えて居なければならない。そして一つの筋書と他の筋書との間にたつて自由自在に組みあはせる必要がある。之れも爪哇劇特有なことであるが、爪哇劇に現はれる性格はどの筋書にも共通であつて、たゞその混合法によつて、異つた筋書が出來るのであるから、どの筋書をも共通した登場人物の性格の連絡がある。此の連絡から場合々々に人形を持ちだして來て、新味ある混合なり結合なりを行ふことはダラン師の特技として尊重されて居るのである。彼はまた音樂に對してよき耳と朗かな聲量とを有せねばならず、且つ爪哇の古語であるところのカヰに精通した古典學者としての素養も要求されて居る。場面に重要なる人物が現はれる度にダランは此のカヰと稱する醇雅な古典語でもつてそれを觀衆に告げねばならない。その上彼はまた爪哇のオーゲスツラとも云ふべきガムラン樂の指揮者となつて複雜な多數な樂器との調和をはからねばならず、また同時に舞踏の音頭取となつて、劇のあい間に催す舞爪を指揮せねばならぬ。華やかなタレダク舞踏が此のワヤン劇に缺けてはならない一つのものである以上、ダランの履歴としては一度必ず舞踏の師匠たることを要求されて居ると見做さねばならぬ。即ちダランは一人で、舞楽監督者であり、役者であり、音樂家であり、聲樂家であり、朗讀者であり、改作者であらねばならぬ。俗に八人藝の持主とは此事である。

ダラン師は之れほど多藝多能の天才でなければならぬのであるが、其の天才はまた實によく酬ゐられて居ると云つていゝ。彼は彼自身及びその藝術に對して、眞に迷信以上の尊敬を一班から受けつゝある。如何なる人と雖もダラン師のなす事に對して批評を試みるものなく、ダラン師を神聖視するのあまり、彼に對して批評がましい事を云ふのは一種の冒瀆であると一班に心得られて居る。彼が旅行をする場合、到る處の町でも村でも無上の歡迎をする。又その家庭にあつても、全く王侯の如き生活をして居る、彼は總ての税金から免除されて居る。彼の郷黨は彼が藝の天才を以つて快樂を與へるを德として、彼の税金を代つて支拂ふのである。爪哇人の他の事は云はずとするも、すくなくとも此の一事だけでも、如何に爪哇の民俗が藝と云ふものを尊重するかと云ふことを語る證左になると思ふ。すくなくも爪哇人は藝術に對して眞に恍惚となり得る情熱的民族であると云へる。いくら割引して考へて見たところで、その人生觀には優に藝術的解脫の諧和的な素質があることを見のがすわけには行かない。藝術家は民衆に快樂を與ふるのであるから、その税を免ぜよと云つた希臘人の藝術觀念と此の爪哇人の現狀とは何

僅かに共通なところがある。

かう云ふ意味から云つても、爪哇のワヤン劇は爪哇の最も大切な國技であると見做し得る。同時にまた爪哇民族は、一面此のワヤン劇を宗教劇の如くに神聖視するのである。爪哇人はワヤン劇を演じて神を讃美する心持ちをもあらはし、祝福の爲めに念じ、また時には悪魔を除く聖祭としても之れを演ずる。爪哇人が大きな計劃を實行しやうとする際には、先づ此のワヤン劇を演じてその道途を祝福し、且つ悪魔の害を除かうとする。

■

子供が産れた時とか、その子供が青年になつて割禮をやると云ふ様な場合には有福なものは必ずワヤン劇を催すことになつて居る。また新夫婦が結婚式をあげる際にも必ず目出度いワヤン劇を催すことになつて居る。結婚式の場合のワヤン劇では、その登場人物として、プラマとインドラと、そして婦人連の崇拜の的になつて居るアルジョエナと云ふ美しい人物が現れない場合には、その結婚は既に悪い運命に纒はれて居ると云はれる。

今日は某村の某大家でワヤン劇が催される。そのダラン師は評判のダラン師だと云ふ様な噂がぱつと立つと、四方數哩にわたるあちらこちらからワヤン見物の爲めに民衆が陸續として集まつて來る。みんな洗足（はだし）のまゝで徒歩だ。熱い太陽に照らされながら、何時間もあるきどほしでやつて來る。道は塵埃がたつて居るがそんな變ことを何んで土人が介意しやう。頭に巨大な菱形の茶褐色な竹帽子を冠り、腰には辨當の爲めの飯——飯は日本の飯と同じ焚きかたゞが、ちまきの様に芭蕉の葉で卷いたコトツパと云ふのを多く携えて居る。——をぶらさげて居る、まさに善男善女の集ひだ。

また舞臺面の近くには、丁度緣日の夜店商人の様に澤山の一時的な小店が出來る。大抵はバナナか、珈琲湯などを賣つて居る。珈琲湯と云ふのは銀座のカフェーにある様な珈琲ではない。あつい湯に珈琲の木の青葉をいれて匂をつけ、それに黑砂糖を小量いれて甘くしたものに過ぎない。聚まつた觀衆はかう云ふ珈琲湯を呑んで元氣をつけながら、どつかり悠々と腰を地上におろして劇のはじまるのを待つ。前にも云つた様に男は幕の前に人形が見える様に座をとり、女は幕の後ろに、人形の影繪を見るべく席をとるのである。

黄昏の短い熱帶地の夕暮れがせまり、西空が卵色になり褪て夜の暗があたりを領する。空たかく茂りに茂つたタマリンドの樹の葉が夕風にそよいで、眠りかゝつた懶げな鳥の夢をさます。その鳥の一聲が夕暮れの靜寂を破つたが、再びあたりは森

と靜かになる。空には一つ二つ鮮かな南國の星がその輝きは今にも墜ちやうとする露の雫の樣に瑞々しい。さう云ふ情景のもとに、古怪な地の底から泡立つて出る樣な空ろな調子でガムラン樂が始まり、ワヤン劇が愈々演ぜられると云ふ段取りになり、觀衆は片圖を嚥む。

軈てダランは立ちあがつて、一段高くしつらえた壇に身をあらはす。此の高くしつらへた壇は神に犧牲を捧げる段であつて、それには南洋の珍果、稻の穗、草花を並べその間に惡魔を追ひ拂ふ爲めに燻す香のたかい煙がたち迷つて居る。その煙の末々が空に充ちはたると、今まで低調だつたガムラン樂が急に雷鳴の如くに響き出して、それが靜まるとともに踊り手が現れて出る。

踊り手は大低は四人の女、手を繋いで、足をかへて歩むと云ふよりは、むしろ滑ると云ふが當つて居る位靜かに動いて出るのであつて、銀のピジョ金で腰にとめて、長く後に曳いた華な布哇更紗の下衣(サロン)や、肩からかけた薄羅のスレンダンに折りめ一つ立つのさへ心配して居ると云ふ風情である。その肩は露出のまゝで、ボレと云ふ香り高い黄色の膏を塗つて居り、胸に止めたスレンダンの黄金の飾りが燦然と輝いて居る。スレンダンの色は紫が多く、頸に卷いた紅色(ルビー)の環が濃ゆく見え、耳には黄金の瓔珞を思はせて腕と手首との輪もやつぱり山吹色の黄金を誇つて居る。是れらが、頭に置いたチアラの寶冠とともに眩いばかりに夜の灯りを映發する。

彼等舞手はかくして靜かに白い垂幕の中央のところまで來て止まり、一樣に指の尖で、その長い肩巾の先を揭げ、いざ音樂が始まれば舞はうと云ふ身構えをする。するとガムラン樂の音は愁へて訴へる樣な調で鳴り出す。そのメロヂーは鉦に似た音と笛と鈴とをラバブと云ふ大型のバイオリン樣な弄で統べる。その旋律に連れて、肩巾を揭げた舞手の腕は伸ばされて、薄羅を靜かに浪うたせながら、ひと廻り舞つて動くが、それが濟むと、足先をすこし内側にむけて、水のごとく靜かに立ちとゞまる。そして腰のあたりから胴體にかけて、丁度蛭が游ぐ樣な、到底異邦人に眞似の出來ぬ顫動的な動作をつゞける。動くが如く動かぬが如く、たゞ時々全身をあちらこちらとしなやかに撓はめる。恰も柔かな樹木が微風にその若い葉を微動させながら風に幹をまかせて居ると云ふ感じだ。此の顫動的な身振りが暫く續いた後、肘を張り手をそらにかゝげて短い歌を長い聲で唱ふ。それはワヤン劇の序歌とも云ふべきもの、大低は印度古詩の一節で、回教の世界に此の印度色彩を濃ゆく見るのはなつかしい。

■ワヤン劇の題材が印度の古典文學であることは、何よりも第一に注目せねばならぬことであつて、

一、マハバラタ傳說 Maha-Bharata

二、マニエク・マヤ傳說 Manik-maja

三、ラマヤナ傳說 Ramayana

の三大敍事詩は眞に現代の爪哇ワヤン劇に於いて尙ほ生彩を陸離として放ちつゝありと云ふ事が出來る、特にマニク、マヤの傳說は例の婆羅吸摩（ブラーアマ）、毗瑟拏（ビシュヌ）、濕婆（シバ）など云ふ人物が活躍する傳說であつてワヤン劇には最も多く出て來る。正統な古典的なワヤン劇である以上必ず此の三史詩のうちから材をとつて居る。

今爪哇で最もありふれて居る一つのワヤン劇の筋書は何かと云へば、例の惡魔軍が天神に對して反抗を試み失敗すると云ふもので、それには澤山の格鬪があつて男側の方によろこばれ、また女がはの人氣ものとして眉目秀麗なアルヂユエナと云ふ人物が出て來る。

此の劇の第一の場面は、例の幕の中央にあるグヌンガンの兩側にインドラとブラアマとが現れて、今、惡魔が猛襲して來つゝあるのであるが、どう云ふ手段をとつたらいゝであらうかと云ふことを相談する、惡魔軍は今まさに天國の延を乘つ取らうとして居る形勢である。天の神々は非常な恐怖に戰慄して居る。特に惡魔の總大將であるところの暴慢なるラクササは、如何なる神の劍も神の矢も槍も傷つけることが出來ない强靱な皮膚を持つて居る、たゞ一ケ所だけ此の惡魔王を傷け得るところがあるとのことだが、その傷け得る箇所がわからない。又此の惡魔を仆し得るものは神ではなくて、人間のもつとも純潔なもの、すこしもその身が情慾に汚されて居らず、また何の罪をも犯して居ない淸淨潔白なもののみが此の惡魔に打ち克ち得るのである、

悲しいことには神の軍にはそれがない。ブラアマは手をあげながら。

『森羅萬象を隈なく探さうとも、さやうのものは見當るまい』

と嘆くと、インドラがアルヂユエナならその資格があるだらうと云ふ。アルヂユエナはデウイ、コエンチの第三子で人間のうちで最も純潔な男性である。彼は夙くより神の味方となつて惡魔軍を大破せむものとの希望を抱いて居り、その地位も皇子であるからいたつて高く、あらゆる女性の讃美の的となつて居るが加之も何等情慾に身を汚して居ない。今その名をサンブルタと名のつて、身をインドラキラの山の洞穴に隱して誰にも姿

分を明かさず、たゞ一介の苦行僧となつて、一心不亂に忍辱の生活に堪えながら祈念し、その肉體を神聖化し、日夜濕婆の神に心をよせて神の勝利を念じて居るところである。インドラは此の一苦行僧を頻りにブラアマに推賞し、

『此の男なら立派に惡魔軍を打ち破ることも出來やう』

と云ふと、ブラアマはしばらく半信半疑の有樣で『とにかく一應その苦行僧の德がどんなに研かれて居るか、それを試して見やう。さうした上で惡魔に向はせるがよい』と云ふ。そこでキダワリと云ふ七人の美女の群れが此の苦行僧を試しに行くと云ふ段取になつた。

キダワリは宇宙で最も魔魅に富むだ女性である。今まで多くの聖者もその笑顏にあつて德を汚してしまつた。キダワリの誘惑にかゝらない聖者こそはほんとうの聖者であるが、しかもキダワリの一笑はあらゆる人間の誓ひを破らないでは置かぬ。此のキダワリが愈々嬌態を凝らして苦行僧になつたアルジユーナを試むべく、インドラキラの山洞へと天降つて來た。山の樹々も野に遊ぶ鹿も、キダワリが露に濡く野道を蓮歩さやかに辿つて來る美しい姿を見て恍惚となつてしまつた。ワヤン人形に現してあるキダワリは舞態で中形、眼は半開で靜溫の色を湛え、型髮に兩脚短く、肩までも花冠をかむり、耳飾を垂らし、頸に鎖及び紐を裝ひ、腕、手頸、足頸に輪を嵌め、顏と手とが白い。此の美女達が近づいたために半ば枯れかゝつた肉桂樹はにはかに若芽を麗はしく四方に伸ばした。その若葉の卷いた色さへ美女達の唇に似て柔かな紅ゐである。

さて、此の美女達は、苦行僧サンブルタが苦行をやつて居る洞穴を覗いて頻りと嬌態を演ずる。代りがはりに媚をたゞえた笑顏で苦行僧を招き出さうとするのであるけれど、此の隱者はたゞひたすらに祈禱信樂の裡に冥想を續けて居るばかりである。美女たちが歌ふ甘い歌に耳も傾けない。そこで七人の美女達はすつかり失望してしまつて、恥しさにその顏をかくしながら、拒けられたる戀の苦に悶絕えながらブラアマの許に歸つて來た。

その美女達の悲しみにひきかへて、神々は此の有樣を見て非常に歡び、特に濕婆の神は苦行僧サンブルタの勇氣を皷舞する目的で、人間の姿となり、インドラキラの山洞に降つてきて、わざと此の隱者と喧嘩を始めた。ところがその戰ひに隱者の方が勝つたので、濕婆は直ちに本來の姿を現し、その隱者の信仰と勇氣とを大に褒め讃え、且つ賞與として、必勝の槍を彼に讓つてやつた。そして濕婆はすぐと神々の居る會議の席に歸り、神々よ心配する勿れ、サンブルタは必ずあの狂暴なる惡魔ラク

ラクササを打ち仆すべしと云つた。

かう云ふ次第で聖者サンブルタ事實は太陽女神の第三子である美男のアルヂエルナは愈々神々の前に呼びだされて、惡魔ラクササを殺す命令をうける。此の時のアルヂユエナのワヤン人形は靜姿で體格よく、眼半開で型美、兩脚近く體は金色、顏は黑色で、耳飾を嵌め禮服を着して居る。

軈て素神讃觀のなかにサンブルタは一人の女神から武裝をされる。その間にまた一人の仙女がやつて來て、惡魔王ラクササを傷ける場所はその舌の尖であると、彼の耳もとで重大な秘密を私語いた。そこでアルジユエナは自分の來歷を公言して愈々降魔の出陣に出かける、かくしてアルジユエナは幾多の漂泊、幾多の冒險をやる。その間にもかの聖婆から讓つてもらつた必勝の術は如何にも奇蹟的な効を奏する。かくして漸くのことで目ざす惡魔軍と相對する樣になり、彼はラクササに對し一騎打ちの勝負を申込むだ。その一騎打ちの勝負がなかなか長い、勝つたかと思へば負け、負けたかと思へば勝つと云ふ、はらはらさせる場面が續いた後、アルジユエナは致命傷をうけたやうに倖つて仆れてしまふ。するとラクササは候ち勝利の觀念に有頂天になつてしまつて、仆れたアルジユエナを足蹴にかけて亂舞しながら狂喜の情を表はしい、前後をわすれて大口を開いたそてみを、すばやくアルジユエナは淨婆の必勝術で敵の舌先を突き込むだから、流石の惡魔もその場に仆れてしまつた。他の惡魔の部下達は、首領が仆れたのを見て蜘蛛の子を散らす樣に四方に逃げ失せる。かくしてアルジユエナは此の功績の酬ゐとして、一つの王國と七人の美女イダワリとそして奇績を行ふ力とを與へられるのである。

此のワヤン劇は『アルジユエナの結婚』と題されて、爪哇で一番多く演ぜられるものであるが、ワヤン劇としては尤も筋の簡單な短いものである。之の劇ならば一夜で演了されてしまふ。が多くは三夜乃至四夜、或は一週間、甚だしいのは半月以上も續くのがある。その場面も十四五回或はもつと多數に變じ、その登場人物の如きは全く制限もなく多數であると云つてゐる。新しい主人公女主人公が續々として登場して來、複雜は愈々複雜となり、そのだらしのない脈絡と無溢滅な點で、どれもこれも「大菩薩峠」以上だ。時間の觀念などは全く沒却されてしまつて、劇中で奇績的作用で一つの途徹もない出産の場面があるかと思ふと、其嬰兒がその同じ場面で成人して居る位は何んでもない。一場面中に幾時代さへも滔々と經過してしまひ、例の劇の三一致論などは遺憾なく蹂躙しつくしてしまつて居る。全體の構想はまとまりと云ふものは摑めない。むしろそんな纒まりの無い

のが當然だと云ふ感じが湧いて來る。事件につぐ事件の絡繹、しかも葛藤と葛藤とが、無秩序に連結され、場面毎に新たな劇的動機が飛び出して來る。だからワヤン劇には大團圓や大破綻やで結末がつくと云ふのではなくて、寧ろ役者も觀者も觀樂に觀樂を重ねて疲れていつしかやめになつてしまふと云ふ概がある。

之れはまさしく爪哇劇が近代のドラマツルギーで律せられぬ最も雄大な最も深刻なる一點で、僕は玆に爪哇人の眞骨頂を見出し得るやうな心持がする。その登場人物の如きも今までの經過にまつたく緣のないものが、平然と飛び出して來て、俄かに戰爭を宣言したり、或は全く無關係な事件をこんがらがせたり、全く沒脈絡なところが、此の上なく朦朧として雄大である。

ところで爪哇人にとつては此長たらしい劇も一向長いとは思はれない。是れ等魔王、女神、勇者、その他無限的に且つ夢幻的にかぎりもなく出て來る登場人物に對し、一々吸はれる樣に興味を奪はれ、甚大な歡樂に醉つて居る。しかも是れ等のワヤン劇は彼等爪哇人が生れおちるとから何遍くりかへして見て居るかわからない程度々見るのであるが一向飽きた樣な顏付もしない。殆んどダラン師何樣暗誦してしまつて居る位であらう。その劇中に現はれる事件の矛盾に對しても何等抗議の感を抱くことなく、その不可能性も不必然性もことごとく平然としてとり入れて享樂して居る。かうして爪哇人は夜毎々々に此のワヤン劇を見て、その神仙や英雄や女神や惡魔やの一大綜合的交涉に接しながら、時々笑ひに崩れたり、また繁々しい役者のケレンに嘆美したりして、その單調な常夏の國の生活を續けて居る。

昔浦島の爺さんは之の樣なワヤン國に行つて來たのでもあるまいか。あゝ、夜のワヤンの爪哇の國、此の國での芝居は夜の十二時になつてもはねることはない。やうやく東が白むで、紅ゐの朝日が顏をだしかけるころになつて、ワヤンの夢幻的な色彩がしだいにおぼろげ、英雄や女神や惡魔やがそろ／＼と消える。かくして爪哇の乙女等はそれぞれ可憐な胸に各自の美男神アルジユエナの姿を描きながら、ぼんやり立つてその眠むたげの足どりをレモンの花さく森の方に運んで行くと、葉漏の影さへ暗いその茂みの下に、之れも葛色のアルジユエナらしい爪哇の色男が芝居づかれの身をねそべつてワヤンよろしくの半開のねむたげな眸み、花羞しさうなど云ふのは醒めた國での言葉、玆は何時までも幻影のおぼろな國らしく、ワヤンが爪哇か、爪哇がワヤンか、昏々として癡夢ばかりつゞいて居る領土が、此の二十世紀を二十年以上も過ぎた現代、神戸から三週間の航路のかなたの南溟にあると思ふとなつかしい。——あゝも一度行つて見たい爪哇よ。

新聞記事錯誤の研究

岡田純夫

(一)

吾々の新らしい刺戟を欲する心は、頗る制度の發達して居ると云ふ人間社會から、常に社交的に新事實を提供されて、その好奇本能を充しつゝあるが、特に最も迅速に廣汎に亘つて、未知の國を求める欲望を、その日その日緩和してくれるのは新聞紙である。

現代人は毎朝夕、生命の糧の一部として好んで新聞紙に眼を通すであらう、そしてそのインキの香の高い紙面からは、最近の時間までの出來事を、政治經濟社會の夫々の部面に見出して、或る時にはその日一日何事もなかつたといふ一種の安易さを覺え、また時に期待に反かれたやうな物足らなさを感じたり、更にじつとしては居られない焦慮感に惱まされる經驗を持つて居るだらう、それは諸種の內容のある事件が、特異の形式で表現された所謂ニユースとして讀者の視覺を通して心理圖內に深く喰ひ入り、その時々に於ける感情の移動のまにまに心象を刺戟するからであるが、一般的に之を觀れば、讀者の生活に觸れた記事は力強い衝動を與へ、さうでないものはそれ程な衝動を與へない。

生活に觸れた記事と云へば、讀者が實際に見聞した事件とか、その人に直接か間接か關係あるものの場合で、單に記事が眼を通して心象には入つて來るのみでなく、却つて內部に既存するものを再び引き出さうとするが爲めに、力強い刺戟となり、それに對する反應作用が起るのであつて、自然に深い注意が、自己の體驗を中心として內から湧き出でる、そして次いではどの記事は果して事實が報道されてあるか否かの疑念が想起し來つて、異狀な心的緊張に依り自分の記憶と認識とに基づく、現代人特有の主我的立場から、記事の批判を行ふに到り、若し其の記事に多少でも相違點を見出すならば、主觀的に直ぐにそれが虛構の報道であるとか誤報であるとか信ずるやうにな

る。

近頃新聞記事虛報の聲が高いのも、さうしたことが原因である。殊に今日の如くに新聞の發達が著しく、各地に各社相競つて通信網を張り、總ゆる事象を漏れなく、網羅して報道しやうと努力するに及んでは、社交範圍の廣い人や、多趣味の人は勿論のこと、周圍の限られた生活環境にある者等も、その關係のある記事に出合ふ度を增した、斯うして讀者の心域に接觸する記事は逐日多くなる――事情にあるから、新聞記事そのものと讀者の心とが切實に交渉するやうになつた譯で、また誤報を發見したり、云爲したりする者が增して來るのも當然である。

即ち中には實例をさへ引用して「新聞紙と云ふものは事實を報道するものかどうか、と云ふことは、殆んど問題にならぬ――中略――或る場合には新聞記事と恰度正反對の事實を豫想する方が、却つて事實に近いことさへ知つて居る」(心理研究六月號彙報四五二頁)など、批難する人もある程だ、これは言辭が極端に過ぎて居るやうだが、全然新聞記事に斯樣な甚だしい誤報がないとは云へぬ、而も些少な誤報は常習であるのも事實である、然らばその樣に誤報の多い新聞は信用するに足らぬものであらうかと云へば、さう思はれぬこともないが、吾々は假令虛報と認められるものを前に置いてあつても、新聞を全く信用しないといふことは出來ない、或物に囚はれて居る。これは新聞紙が迅速な新事實の報道機關として、人間の好奇愛新、知欲などの本能の鍵を握つて居るからである。

併しながら此處には新聞の信用に就ては暫く措いて、ただ新聞記事の誤報、その錯誤の原因に就て、諸方面から特に心理的方面から少しく研究して見たい。

(二)

新聞記事の誤報は確かに常習的であると云つても一概に、讀者が自己の記憶や認識や觀察などから推察して、其記事を誤報であり虛報であると斷定することは妥當でない、何故ならば記者の見聞、記憶、認識、觀察と、讀者のそれとには主觀の上に相違のあるのは免れ難い處である、之加職業柄理性に勝つた公平な見地に立つ記者にも誤りがあれば、讀者は感情の波動が大きいだけ、より以上の間違ひがあり易い、そして兩者を對照して見たとて、何れも絕對ではないのであるから、其の孰れが如何に錯誤を爲して居るかは相當詳細に調査し、嚴密に考察した後でなくては具體的に判斷することは出來ない、單に何れが事實に近いかは、數種の新聞を對比して、多くの記事に現れた一致點から察して大體に定めるより外に方法がないのである、處

がまた數種の新聞に眼を通すと、AとB、BとC、AとCなど各紙同一の記事であつても、夫々相異つた報道を往々爲して居る。さう云ふ場合に遭遇すると誤報の本態を摑むことが困難となり、此處に各々の記事に悉く多少づゝの誤報があると觀念せねばならぬことになる。併し人間そのものが常に錯誤を敢てしながら、それを意識せず、此世の存在を色々に見聞し感じ思惟して眞であると信じて居る以上、新聞記事の誤報は、外面的にも内面的にも複雜な人間生活の錯誤の反映として、或は人間生活上では眞であるのかも知れないが然しそれは別問題として外部から齎す誤報のみならず、心理的に幾多の錯誤が生ずるを覺れば、如何に專門的に手腕のある記者が、正確を期して報道した記事にも、どうすることも出來ぬ誤報の在ることを是認せねばならぬ。

勿論誤報の程度は、記者その人の才能手腕に依つて差違がある、結局誤報の多少は、記者個人の能力に依る人の問題に歸着するであらうが、現在に於て新聞記事誤報の原因と認められるものを擧げるならば、左の諸點である。

一、新聞が一つの資本的事業として或は機關としての經營上より起る虛報
二、興味中心としての誤報
三、秘密な事件の材料蒐集難から起る誤報
四、記者の專門的智識の不足に因る誤報
五、迅速に報道せんとした際の錯誤
六、感覺の錯誤に因る誤報
七、認識上から起る誤報
八、觀察上から起る誤報
九、記憶の錯倒と忘却に因る誤報
十、疲勞から起る誤報
十一、言語文字の不完全から起る誤報
十二、誤植及び組違ひの過誤

而して記事報道者が意識して誤報を敢てするものは(一)(二)で他は多く無意識のうちに起るものである、が半ば意識して誤報ではあるまいかと疑問を抱いて居る場合もあるのは(三)(四)(五)(十一)(十二)などで純無意識のうちに起るものは(六)(七)(八)(九)(十)等である、右の外に誤報とは云へないであらうが「見出し」に依る誤報感の起ることは看過することが出來ないものである。

以上誤報の原因と認められるものを個別的に擧げたが、決してこれが一つ一つ獨立して誤報因を爲すのでなく、何れも相關聯交錯して居るものであるは云ふまでもない。

(三)

近頃、新聞は一つの商品であると新聞事業經營者から憚りもなく、唱へられるやうになつたが、實際に於て新聞紙が資本主義下の一事業として、一部資本家の利益の爲め經營せられ、遺憾なく利用され隨つて其の記事も經營者の意のまゝに統制されつゝあるのは世間公知の事實である。顯著な其の一例は、其社の催し物の記事であらう、寧ろそれに關した記事は事實の報道が目的でなく、宣傳が第一義であるから、殆んど誤報などは問題でなく常に讀者の注意を惹き得るやうな記事でさへあればよいのである、だから新聞社の主催である運動競技や演劇會、講演會などのやうに多數の人を集めた記事は、他社が職業心理上から、僅か數行の記事さへ惜み時に全然默殺するに對比して、頗る華々しく全紙面を擧げて誇大に、入場者の如き數倍に計上せられ、凡ゆる形容詞はその大成功を吹聽する。說くまでもなく斯樣な宣傳の目的は、讀者を得ん爲め、自社發行の新聞紙を一部でも多く賣らんが爲めである、多くを賣ることが出來れば大量生産の關係から、利益が多くなり、廣告依賴者が增加し、廣告料金が高められ、そして最後にそれ等の結果は利潤を增し經營者の營利心を滿足せしめる、尙その副作用としては資本が豐富になることと共に勢力を增大して、何れの方面から見ても利益が湧いて來る、即ちその點は他の營利事業と少しも異る處はないのであつて、同じ目的の記事である、興味中心の讀物の誤報と響應して、只管營利的に効果をあらしめやうとして居る。

一つの機關紙として經營される場合は營利とは異る多少の物質上の損害は見込んで、經營者である主體の擁護を爲し、不利益な記事は必ず、避け、或は利益のあるやうに虛報して、辯護や宣傳に努めるのは勿論のことである。(機關新聞と云へば多く政黨や富豪の持つ一般的なもの及び團體の內報的な特殊のものなどあるが此處には一般新聞に就てのみ述べる)

然るに近來讀者の新聞に對する批判力が高まつて來るに從つて、機關新聞としての色彩が濃厚に紙面に現れるものには却つて反感を持ち、之を排斥するやうな傾向になつて、此種の新聞は漸次讀者を減少し、勢ひ發行紙數を激減して勢力を失墜する虞れがあるから、讀者本位としての經營方針に變移せねば經營が至難な事情に立ち到つた感があるので、此頃では折紙付の機關紙以外のものは露骨な偏重記事は、特別な事件の生ぜない限り書かねやうになつたやうである、併しながら機關紙が敢て誤報することは人の知り過ぎて居る處であつて特に例を擧げる必要もあるまい。

興味中心の記事は、讀者の感情に訴へ情緒に觸れると同時に、其新聞には面白い記事があることを認めさせて讀者を一人でも増さうとするにあつて、隨分だと思はれるやうな虚構のそれが現れることがある、最も資本主義的な米國では如何にして虚構の記事を事實らしく書かうかと苦心することが、新聞記者としての要件であると云ふから、米國では斯うした意味の誤報はかなり多いやうである、或はその虚構な記事は事實報道と云ふよりも、單なる讀み物として發表される故、潤色や誇張は許さるべきものかも知れぬ、東京日々が六月十五日の社會面で前田利定子（遞相就任の當時）を赤坂の妾宅の前に立たせた寫眞とその記事の如き最も注意を惹ひたもので好例の一つである。

倘ほ新聞事業が資本主義下の一企業であり、又は機關紙として存在する以上は、自社經營者の利益の爲めに誤報を敢てするのは右の如くであるが、柄のよくない新聞が從來爲めにせんとして、積極的に行動し虚報の甚だしいものを掲載して居たこともあつたけれど、新時代の新聞及び新聞記者の間には斯樣な惡德の記事は殆んど見られないやうであるから、誤報研究の本文からは此種の虚報は特に省いた。

（四）

一事件が起つた時、新聞記者はその眞相を摑む爲めに活動を開始し、記事の正確な材料を蒐集しやうと、該事件の關係者から、それに關する談話なり意見なりを詳しく聽取することに努力する、その時この當事者か何事も秘密裡に運ばうとする秘密主義の人でその上斯うした人にあり勝ちな新聞を理解しない者であつたら、事件の眞相は語られないのみか、寧ろ隱匿しやうとせられるから、記者は記事の材料を得ることが出來ないこととなる、實際その樣な人物は現在でも官僚系の政治家とか、舊思想に培はれた國民の間に屢々見受けるが、それ等の人々は善惡に拘らず新聞に發表されることを嫌忌するのである、と云ふのは新聞は常に社會の裏面に存在する惡を材料とするものであるとの先入觀念を持つからであらう。

秘密にされた爲めに其處で材料が蒐集出來ない場合、記者は感情の上にまた秘密を探ると云ふ探偵的興味も加はつて、知らせねばすつぱ抜いてやらうと反抗的に活躍し苦心する、併しながら、それは勞のみ多く直接の關係者から材料を得るやうに容易でなく、假令得られても事實とは相當距離があることを免れぬ、隨つて紙面に現れた記事は、不確實な材料に記者の想像も雜るから誤報とならざるを得ないのである。

然るに之と正反對に、求めて記事材料を提供しやうとする者

がある、これは新聞を利用して、己れが利益せん爲めに殊更に虚構でなくとも、自己の利のあるやうなことを語る者で、現今ではその樣な言辭に耳を傾ける記者は少いが、時にさうした記事を見受ける、特に專門的のものであると、記者に其の方面の智識が不足して居るだけ、乘ぜられ易く、また記者もそれを信ずるやうになる。

實例として最も多いのは、商況記事である、株式や綿糸や期米や生糸などの如く、特定の市場があつて、其の相場が一節一節公表せられるものには少いのであるが、公定の取引所の設置されてない商品の相場や氣配の新聞記事は、大手筋の商人から材料を得るより外に便宜がないので、毎日のやうに商況記者は商人の處へ出入する、商人は別に惡意があるのではあるまいが、商人心理の常として、自分のストックが多い時には、實際の相場は下落して居ても、保合つて居るとか、强含みだとか唱へ、或は買入れんとする矢先などであると、下落したとか、氣配は頗る軟調だとか、自己の都合のよいやうに告げたがる、で往々新聞記事が市況に影響することがあるので、商人の中には利益關係から新聞記者に接しやうとしさうした記事を掲載せしめることを商略の一つの如く考へて居る者もあるらしい。

記者の專門的な智識が不足であることが右のやうな不純な動機から乘ぜられて利用せられる虚報があるのみでなく、科學や建築等專門の記者が居ないものの記事は記者が理解を缺ぐだけ屢々誤報があつて、其の率も一般的のものよりは遙かに多數である。

（五）

前述のやうに新聞經營が資本主義的であつて、他の同業と競爭して一部でも多くを賣らんとするためには、記事の迅速を尊ばねばならぬ、正確な記事でも遲れては價値がなくなる、さう云ふ理論の下に我國では所謂大新聞が續々夕刊の發行を實施しだした、從來正確を第一義とした新聞も斯うなつては迅速第一で進まねば、正確などを考へて居ては時代に取り殘される、然し正確にそして迅速に記事の報道をするのが各社等しく理想として居るのは瞭かな處であるが、此の兩者は正比例しない、迅速は單に記事を書くことのみでなく、材料を獲るのにも急速で敏捷でなくてはならぬから、余程記者的訓練を經た人でも、内容を把持する時、その心象には落ちつきがなくて、其處に幾多の錯誤を生ぜずには居ない、卽ち次項に說く感覺、認識、觀察に錯誤を生じ、記憶は不正確にて聯合の固まる間もなく忘却するなど、人間活動の内部に動搖を起して、重大な記事誤報の原因を爲

して居るのは、これ迅速である。

實例は、毎日の夕刊新聞の數種を比較すれば、到る處に發見出來るが、左に東京朝日と時事の六月二十日の夕刊記事『高輪の養火事』を調べて見やう。(圏點は相違點)

東京朝日新聞

廿日午前十一時二十分芝高輪北町五三アスフアルト製造販賣所小田切義雄方煙突から發火忽ち同家を燒き盡した後左右に燃擴がり全燒九戸半燒二戸を出し十二時十分鎭火した附近に在る高輪小學校では折柄授業中であつたが出火と聞くや直ちに授業を中止し全校兒童を教員引卒の下に庚申堂境内其他の廣場に避難させた尚山の手上下線はこれが爲め正午過ぎより一時迄運轉を中止した

時事新報

今午前十一時半芝區高輪北町五十三東京アスフアルト商會高輪出張所小田切某方から發火しアスフアルトに燃え移り忽ち燃え擴つた爲め第二消防署始め警視廳消防本部其他の自動車喞筒が駈けつけ消火に努めたが正午に至り向側の同町廿一柴濱一郎方に飛火し遂に全半燒十五戸を出して午后一時鎭火した原因はアスフアルトに瓦斯の火が飛込んで大事に到つたものであると尚高輪小學校生徒一同は教員に引卒されて泉岳寺へ退散十一時四十分から省線市電共一時運轉を中止した

これは實に些細な事件の極く短い記事に過ぎない、それでこれ位の相違がある先づ火事の原因が異り、時間、燒失家屋數、場所が夫々違ひ、且朝日では左右へのみ燒けたと思はれるが時事では向側へも燒けて行つて居る、斯樣な誤報は心理的な原因も多く殊に數字が悉く違つて居るなどは我國人の共通な數に對する觀念の薄弱な爲めであらうけれど、主因は夕刊締切に切迫した午后一時頃の出來事であつたのに依る、若しこれが朝刊に載るとしたら斯うまでの誤りはなかつたと思はれる、一般に朝刊は夕刊に比して誤報が少いとは日常讀者の認める處である。

(六)

吾々が無條件で自己を信ずるの念は、自分の見聞したもの、觸れたものは間違ひはないとして居り、その認識に基く觀察なども同樣正鵠を得たものだと信じつゝあるが、少しく生物學か心理學の初歩の書物に眼を通せば、自分等人間を爾かく信ずることの余りに僭越で、一人よがりであるに氣付いて耻かしくなるであらう。

眞實に人間の精神活動を構成する諸感覺は皮膚覺、味覺、聽

覺、視覺及び運動感覺)は適當な刺戟に依つて生ずるものであるけれども、先づそれが不正確である、醫學上人の感覺器官の完全なものは頗る少いと云ふことであつて、何處かに故障がある、また假令健全であつても、その感覺的印象に對して、知覺的反應を精査して見ると、外界の事象と一致しない、知覺の錯誤が往々發見される、簡單な例を擧げるならば、人間の感覺器官の中で最も發達して居る視覺さへも、大きいものと小さいものとを並べると、大は尚大きく見え小は實際より小さく見える、脊の高い人が横縞の着物を着ると割合に高く見えない、正方形の中に縦の線を澤山描いて見ると、その正方形は横擴がりに見え、また黒色と並べた灰色は鼠色と並べたよりも白色に見えるなど所謂『眼の嘘』は吾々が親しく經驗して居る處で、この様な例を各感覺から數え擧げたら限りがない、斯く外界に對する人間の感覺意識の錯覺や、精神的な經驗の聯合から生ずる幻覺等の錯誤は何人も免れることの出來ないものである、そして吾々は知覺に依つて事物が外界に存在するを認識することを意識しやう、此場合には普遍的な概念が構成されるのは勿論であるけれど、認識に對する思惟の經驗的な對照世界の構成は、各自個々の主觀に依つて異り、特殊の觀察が其の間に起る、隨つて聯想の形式も習識や趣味の程度に添ふものである、斯うして外界の事物が幾度かの聯合の末、觀念となり記憶となるのであるから、自分の觀念や記憶が正しいとは何人も云ひ得ない處である。

而も記憶の作用は新らしい刺戟を受けて再生し、觀察の一基礎となるが、それには忘却を伴ふ、一度記憶の圏内には入つたものでも聯合が固まつて居ないと、直ぐに忘れて行く、また全然忘却しないまでも、切れ切れになつたり、錯倒したり、以前の記憶とごつちやになつたりして、決して正確に再生しない。

即ちこの心理現象の經過を新聞記者の精神活動に當て嵌めて見ると、其の記錄が信用の薄いものであるを知らう、即ち一つの事件を中心として動く記者の心は常人よりも職業的に明晰で、注意深い、同じ知覺でも範圍が非常に廣く憶起と複合し、認識も確實であり、從つて廣汎な經驗と智識で觀察する、觀察も素人のやうに單に表面のみでなく、各方面から疑ひの眼と心を以て接するので、常に普通人よりは眞相〃摑むことに慣れて居る。併しながら新聞記者の眼や耳や心が特種のものでない限りは、同樣知覺に錯誤もあれば、記憶にあやふやな點も多く、判斷の結果も正確を得て居ると、肯定することは出來ない、その上それを不完全な文字を以て表現するのだから、一事件の事實は記事となるまでの間に、必然的な錯誤を幾つも重ね重ねし

て來る。また嚴密な意味に於て誤報を爲さないものが一つとしてあらう道理がない。

例へば六月二十二日の東京朝日新聞に次の様な記事が載つてあつた。

「內相と『專制政治』」

水野內相が西下の途中で記者に語つた談話中『善政さへ布けば專制政治でも構はぬ』とあるのは隨分思ひ切つた議論で非難の聲が高いが夫れは『官僚內閣でも多數黨の諒解を得て善政を行へば可い』と云つた言葉を更に記者が强めて書いたので內相自身は決して『專制政治でも構はぬ』と云つた覺えはないと秘書官から苦情があつたから一應訂正して置く

これは文面の通り、水野內相の談話が十九日の同新聞に掲載された文中の『善政さへ布けば專制政治でも構はぬ』との取消である。想ふに此の誤報は、その記者が水野內相は專制政治を是認する思想の持主であるとの觀念を前提として、內相の談話を聞いたものであらう、處へ丁度それに類似した感じのする『官僚內閣でも』云々の言があつたから、此言葉は聽覺からは入つて知覺を刺戟し觀念聯合の上で『善政を布けば』を中心として、專制政治を聯想せしめ、これと結びついて、遂に『善政を布けば專制政治でも構はぬ』と認識し、斯う記憶したらしい。實際官僚內閣の一員が『善政を布けばよからう』と云へば語呂合せではないが『專制政治でも』と云つた方が『政黨を背景にすれば』と云ふより强く印象もされ、またさう聯想し易い。

斯樣の前の觀念や記憶に、新らしい刺戟が加はつて、事實とは違つた認識を生じ、觀察を生むことは珍らしくないことで、そのやうな誤報も非常に多くを見受ける。

（七）

疲勞の錯誤に就ては、實驗心理學上より說明されつゝあつて殊に科學的工場管理の能率關係からその研究は世人を肯定させて居る、またこの心理現象を移し、此處に疲勞が誤報を爲す原因としても差支ない、心理學では實驗上から仕事の能力が低下した狀態を疲勞と云つて居る、新聞記者の仕事は、工場の仕事のやうに機械で一定の時間に一定の物を作り出すのではないから、能力が或る速度を以て減退はしないけれど、若く記事が杜撰となり拙劣となり誤報を增加することは爭はれない、それは午前中と午后或は夜との精神活動の緊張感、倦怠感からも察知することが出來る。

次に誤植及び組違ひは工場に於ける仕事の過誤であつて、職工の熟練さに依つて程度の差があるけれど疲勞の如きは就中影響する處が甚だしいものである。

我國の文字言語が不完全であることは、既に識者の認める處で、文字改良の說なども高く、漢字制限を實施した新聞社も二三ある、實際不備な言語で交換された思想が、不完全な文字で綴られるのであるから、如何に新聞記者が文章を綴る專門家であつても、誤りなきを期することは出來ない、殊に物の描寫に用ひやうとする文字や、複雜な思想を說明しやうとする言葉や外國語に對する譯語などは、適當なものが見出されない場合が屢々あり、稍適當かと思はれるやうな文字を使用すれば、意味の徹底味を缺くのみならず、誤解を生ずるやうなことが多い、特に迅速に記事を書かねばならぬ締切前など、一枚づゝ原稿を工場に運び去られては、つくづく文字の不完全さを感ぜずには居られないであらう。

最後に純粹の誤報とは云へないかも知れないが、誤報感を與へることの著しい『見出し』は最近米國式の編輯法に依つて、異狀に大活字を使用するやうになり、頗る挑發的である、されば吾々は大見出、小見出し、側見出しを讀めば、最早本文を讀まなくてもよい、**隨つて此澤山な見出しには編輯者の主觀が多く**現れその心的錯誤や疲勞や文字の不完全さの爲めに、誤りも生じ勝ちである、而も見出しは讀者の注意を惹くやうに出來て居るだけ、少しの誤りも非常な誤報感を與へ、誤りでなくとも文字の使ひ方、配列のし方で、著しい印象の差違が生じて誤報感を生むやうだ。

六月三十日早川雪洲が歸朝した時の、朝日と報知の見出しを比較して見ると殆んど同樣の點に眼をつけたものでありながら、受ける感じは左に示す如く甚だしく違つて居る。

東京朝日新聞（六月三十日夕刊）

表情たつぷりで（活字一號）

雪洲夫妻歸る（初號）

けさ十五年振りに（二號）

今更ながらチート劇の不覺（四號）

鶴子はキネマを退く（二號）

報知新聞（六月三十日夕刊）

蒼白な顏して（一號）

雪洲夫妻歸る（初號）

排日劇は彼の出世劇（二號）

何も知らぬと辯解しながら（四號）

（八）

簡單であるが大體に於て新聞記事錯誤の事情を瞭かにした積りである、そして誤報は、新聞經營者及び記者職工等新聞製作從事員の自覺才能智識手腕熟練等で免れ得られるものと、必然的に人間としては免れ難いものとの二つに別ける、が出來る、これを類別すると、其の前者と認むべきものは（一）新聞が一事業とし或は一つの機關として經營せられる爲めの誤報（二）興味中心の記事に依る誤報（三）秘密にする事件の材料蒐集から起る誤報（四）記者の專門的智識の不足から起る誤報（五）迅速に報道せんとして起る誤報（六）誤植及び組違ひの過誤等で、後者に屬するものは（一）感覺の錯誤（二）認識上から起る誤報（三）觀察上から起る誤報（四）記憶の錯倒と忘却（五）疲勞から起る誤報（六）言語文字の不完全などで、個人の心的狀態が人間の進化と相俟つて向上すれば、理論上からは自然にその錯誤は減ずる筈であるが、意識的にはどうする事も出來難い。

隨つて斯樣に多い新聞の誤報からは、迷惑を受けた人も少數ではなく、しかも新聞紙法に依る取消が、六號活字で新聞の隅の方にあるか無きかに載せられるやうでは、實に迷惑の捨て場がないと云へる。併しながら爲めにせんとするが如き私心を挿んだ記事は追々姿を消す傾向にあるから、社會惡を意味する誤報は次第に消滅するであらう、そして人間心理は時代に順應する性質を持つから、現代では資本主義下に、資本主義的な新聞經營を行つて居るけれど、社會聯帶の構成に自覺する處があつて、人間は自我的に活動すべきものでなく、社會的にあるべきものと云ふ最近の發見が權威を持つやうな、社會狀態の時代になれば、社會的な民衆の新聞が生れて現今のやうな經營者に依つて起る誤報は無くなる、またさうした時代に移れば新聞を理解しない人は居なくなり、記者も專門的になるであらうから、前述の免れ得べき誤報は殆んど見られなくなる日も遠くあるまい、現に自由を叫び常に民衆の味方であらうとし、囚はれることを欲せず、而も現在の新聞紙及び經營者に不滿を抱き、專門的智識の豐富な若い記者が何事に依らず筆を曲げることを好まない、理想と抱負を以つて進みつゝあるから遠からず、さうした誤報は過去のものとなるであらう。

が併し誤報と云ふも、一概に排斥するのはどうであらうか、現在に於て吾々は社會普の新聞誤報は嘘の効用の一部として新聞紙が社會的中心勢力となればなる程道德觀の上から、考察せねばならぬ要があり、價値があるのではあるまいか、此點の上と共に更に此點は深く檢討したいものである。

維新當時に於ける國際協調主義者

法學博士 吉野作造

斯う云ふ題目の下に纏つた研究を試みることは甚だ面白い仕事だと思ふ。が、今僕に之を成し遂ぐるの遑はない。茲にはたゞ手近に在る二三の書物に依て、當時如何に國際交通に關する殺伐な考が行はれ、又當時の識者が如何に之を開導するに苦心されたかを聊か髣髴たらしめんとするのである。

○

福澤全集の緒言の中に斯んな話がある。文久年間の事、その頃まだ獨身の學友神田孝平氏が、老年の婆を雇うて賄をさせて居つたが、此の婆は律義一遍の正直者ではあるが生來の唐人（外國人のこと）嫌ひにて、『朝夕何事に付けても外國人を憎むこと甚しく、小買物して魚類の價が高し、野菜が高し、米が高し、酒が高し、豆腐の代が同じことゝ思へば形を小さくしたり、薪炭の蒸籠も小形になれば鰻の丼も正味甚だ輕少なり、其くせ紙屑を賣れば屑やは見倒し、灰を賣れば灰買はたゞ之を持て行かんとす。諸色高直諸人難澁是れも唐人の御蔭なり其れも唐人の所爲なり』と口矢釜しいこと夥しい。主人公の神田氏少しも叱らず却て面白きことに思ひ、『是式の老耄を說き伏せる位の伎倆なくて、迚も天下に開國論を唱ふることは叶はず。婆の頑固なるこそ幸なれ、先づ之を試みん』とて、手を代へ品を更えて丁寧反覆說き諭すこと半年あまりにも及んだ。が、彼女の剛情鐵石の如くにして遂に解くべくもなかつた。福澤先生は一日箕作秋坪氏と此事を話し合つて『共に時運の非なるを歎息して相分れた』が、其跡にて自分も亦一つ神田氏の能辯を以て婆に試みた所を筆にて天下に試みんとて、匆々一文を書き綴りて色々の人に見せた。之が即ち唐人往來の一篇だとある。

福澤先生の云ふ所によると、『其頃は所謂攘夷論の最中にして、浮浪の徒と稱する輩が諸方に亂暴を逞うし、外國人を暗殺する者あり、洋學者を脅迫要撃する者あり、御殿山の公使館を燒き、市中の唐物店に亂入する等、實に物凄き世の中』であつ

たと云ふ。一時さかんであつた支那のボイコット騒ぎも之れ程ではなかつたらうと察せらるゝ。此間に處して堂々と開國論を唱ふるの苦心は蓋し尋常一様の事ではなかつたらう。此邊の苦心談は福翁自傳の中にもある。この本も維新史研究の一資料として、先輩の經歷に學ぶ所あるべき一修養書として、又先生が自分をむき出しに出してゐる虚飾なき典型的な自叙傳として、敢て江湖に推奬するの十分なる價値があるものとかねぐ考へて居る。

餘談はさて措き、唐人往來は右の如く非常の勇氣を以て書かれたのではあるが、時勢が時勢とて公然出版する譯にも往かなかつたのであらう、版木に上しては居ない。先生自筆の原本は、慶應義塾大學附屬圖書館に秘藏してあると傳聞して居るが、未だ確めてない。前記福澤全集緒言中には幸に其の全文を載してある。あの本で十八頁ある。試みに類別すると（一）外國交際論、（二）外國交易論及び（三）海防論の三部になるやうだ。以下其所論の大要を紹介しやう。

○

第一の外國交際論の立言の主意は、斯うだ。亞米利加合衆國の船大將ペルリ渡來以後、米國は固より、英吉利や佛蘭西などゝも條約を取り結び、之等の國より江戸へは一人づゝの留守居を、又横濱長崎函館等へは、コンシユルと云ふ役人一人づゝを勤番致させる事になつた。然る所『日本國中の學者達は勿論、餘り物知りでもなき人までも、何か外國人は日本國を取りにでも來たやうに、鎖國の、攘夷の、異國船は日本海へ寄附けぬ、唐人へは日本の地を踏ませぬなど、仰山に唱へ觸らし、間には外國人を暗打にする者など出來』て、大變な騒動になつた。併し考へて見ると『元來何の惡意もなくて一筋に異人を嫌ひ異人が來ては日本の爲にならぬと思込みたる輩は、自分には知らぬ事ながら、我生國の耻辱を世間一般に吹聽する同様にて、氣の毒千萬』の話だ。依て此等の人々の爲に聊か辯解する所あらんと云ふので此の一篇を書いたとある。

先づ最初に五大洲の説明がある。亞弗利加と濠太利とは未開にて日本の蝦夷位のもの、亞米利加では合衆國を獨り上國とすべく、歐羅巴洲は諸國皆擧げて開明に赴けりと説いてある。さて亞細亞に就ては『兎角改革の下手なる國にて、千年も二千年も古の人の云ひたることを一生懸命に守りて少しも臨機應變を知らず、むやみに己惚の強き風なり』と警め支那が最近外國と事を構へて敗れたるをば『是れ皆世間知らずにて己が國を上もなく貴き物の様に心得て更に他國の風に見習ひ改革することを知らざる己惚の病より起りたる禍なり』ときめつけ、更に一轉

して『言語道斷風土にも置かれぬ惡風俗、苟めにも其眞似をすべからず』と痛論して居る。

斯く己惚を責むるの一方、外國を漫りに夷狄視するの非實に違へるをも教へて居る。『尤も世界中廣きことなれば、飲食、衣服、住宅等は土地の寒暖又舊來の風習にて國々異なることもある可けれども、人情は古今萬國一樣にて、言葉の唱へこそ違へ、仁義五常の教なき國はなし』『然るを日本一國に限り、神國などゝ唱へて世間の交を避け、外國人を追拂はんとするは如何にも不都合ではないか。』『謂れもなく自國許りを別段貴きものゝ樣に思込み、世間の事に頓着せずして我意を言募らば、遂には人の嘲弄を受け、唐土同樣の始末に陷り、我國を貴ぶ心より實は却て我國を賤むるの場合に成行べきやと深く心配する處なり』と歎息して居る。

世界中の人數は十億あり、其の中日本人は凡そ三千萬程とすれば、丁度九十七人と三人との割合となる。何れの國にもせよ、百人の中九十七が睦しく附合ひ往來するに、三人だけが「天から降りたる者のやうに氣高く構ひ、別に仲間を結で三人の外は一切交を絕ち……九十七人の者を畜生同樣に取扱はんとせば』『世間は夫で濟むだらうか、と云つた風の計數的說明は、當時の單純な頭には却てよく響いたことだらうと察せらるゝ。

要するに先生は、開口一番ペルリの言をかりて、『斯く國を鎖して世間と交らざるは天理人情に戻る』とは云つて居るものゝ、其の天理人情の如何は深く究明するに及ばず、たゞ開明の西洋を夷狄扱ひにして、至らぬ自分を獨り良がりするのは見つともなおいやないかと云ふ底の所謂外開論に專ら力を注いで說明して居らるゝ。此所に例ながら先生の實際的立場の特色が現れて頗る面白いと思ふ。

○

第二の外國交易論に於て先生の主として闘はんとするは、『外國と交易始りてより、彼國無用の品を持來りて我國有用の物と引替るゆゑ、國內の品物追々少くなり、就ては諸色高直諸人難澁する』といふ思想である。先生は之を『物の道理を辨へざる人の妄りに觸流す空言』なりと排し、能く〳〵其の本を糺しに見ると、彼國より積來る品は羅紗、呉絽服、更紗、金巾、天鵞絨、唐綫、鐵、錫、ブリキ、藥種の類、又日本から積出す品物は絹糸、茶、煙草、蠟、油、樟腦、昆布、推茸、煎海鼠、鮑、鱶の鰭等で『何れが有用何れが無用と云ふ差別もなし』。而して上等下等と云ふが如きも、畢竟『品物の多きと少なきとに付き、人の氣前の違ひたるに過ぎず』、先年上等なりしものも今年は普通の並品といふ事もなり、之等は町人同志の掛引にて中々素人

には分らない事なるを、『青表紙の學者達が物知り顔にて、何は無用何は有用、之を賣ては國の損、之を買ては國の害など彼是言ふは』甚だ可笑しいと云つて居る。且又無用の物が這入つて來たとて夫は御互の事でもあり、品に依ては害にならぬ事もあらうし、加之舶來の醫法藥品などに至ると、『人命にも拘はる必用の品』も少くはない。之が何うして交易は國の禍なりなどゝ云へやうかと述べて居る。

更に諸色高直の非難については、『實は品物の直上りにあらず、金の位の下りたる』にて、其結果『日雇賃も高くなり、武家の拂米も同樣の割合にて、何れも困る譯はなき筈なり。實は交易始りてより以來、日本國中金銀の融通よく、難澁するもの却て少くなりたる』證據にこそ富めとて、奉公人の少くなつたこと、道中の雲助までも減じたことなどを擧げて居る。總じて全國一般金廻りもよくなり『交易始りて世間一般の潤となりたるを譬へんに、江戸に火事ありて鳶の者の喜ぶと同樣の譯なり……況して交易には火事もなくして仕事の多くなりたるなれば、目出度き事ならずや』、夫れにも拘らず諸色高直諸人難澁と口癖のやうに云ふのは、『皆人情の自分勝手より起りたる話』で、『物を賣るにも、金を借るにも、借金の催促をするにも、催促の斷を言ふにても、『恰度よき言ひ草になるからの口實に外ならぬ

と述べて居る。

○

第三の海防論は固陋なる儒者輩の僻見を打破するを目的とするものであらう。先生曰ふ『外國と附合始りてより、日本國中の學者先生と云ふ先生は、大概下破海防策と云ふものを書き、種々樣々の理窟を述立て、何でも唐人共へは油斷が出來ぬ、之を防がねばならぬ、其趣向はか樣〳〵……其有樣を見るに、何か外國と散々師でもした跡でまだ仲なほりも濟まずに睨み合て居る樣なり。成程火を見たら火事と思へ、人を見たら盜人と思へと云ふ諺もあれば、初對面の外國人何をするやら分らぬゆえ、若しや賊ではあるまいかと、我本國を大切に思ひ、用心の餘り一旦の騷ぎは尤なれど、今になりては最早月日も經たる事なれば、能々心を落付けて考ふべし　と。斯くて當時の所謂海防策の如何なる類ひのものかを三つ四つ標本として示して居る。曰く、濱邊に臺場を築き、大筒を並べ、木陰から小筒を打つべし。曰く、唐人は海戰に長ずるも、陸に上れば河童も同樣いくぢはなし。唐人來らば先づ相手にならずして陸上に誘ひ、そこで我方より兼て得道具の槍劍を以て之を鏖にすべし。曰く、夫よりも彼軍艦來らば此方より小船に乘て本船に漕ぎ付け、船中へ飛乘て大筒も小筒も打たさぬ間に唐人共を不殘切殺

し船も奪取るがよし。曰く、異船の來るを待たず、日本でも軍艦を作り、此方から出掛けて先方を攻め、序に地面も奪取つて仕舞はう。曰くなに。曰くかに。

之に對して先生は、『何でもかでも外國人は無法なるものと思ひ込み、伊勢參宮の田舍者が宿引を疑ふやうに、深切にさるれば底氣味惡く思ひ、理窟を云ふて聞かすれば無理を云ふと思ひ、一から十まで疑心許りに凝り固まり』ては、互の實情は少しも通ぜず、支那の樣に世界の物笑の種になると戒めて居る。元來外國人の日本に來れる趣意は、侵略の野心に出づるに非ず、普通の禮義を以て隔意なく交通せんと欲するに外ならないから、『此方よりも世界普通の道理に從て益々信實を盡す』べきである。此方から信實を盡しても内實不埒の振舞を爲す國あらば、道理を押し立てゝ之を責め又は攻むるとも我國の隨意で、かくてこそ世界の同情も自ら我に向くに相違ない。決して我から『先見ずの短氣にて、前後を顧みず是非を辨へず、無理なる師』をすべきではない。『唯一つの道理を守て動かざれば、敵は大國にても恐るゝに足らず。兵力弱くとも妄りに他人の侮りを受くることもなし』とて、世の所謂學者先生達に對つては『今少し勘辨して氣を廣く持ち、治にも亂にも守るべきは世界普通の道理なりと腹を据えて、妄りに短氣を起さぬやう謹むがよし』と所謂頂門の一針を與へて居る。

終りに先生は、日本は地圖で見るが如く小國ではない、人も衆く産物も富有にて、一生懸命に備を立てれば、假令外國の無法の侵略に遭ふとも、恐るゝに足らず、但し夫には『一番思立ち、漢學や和學などは先づ次のことにして置き、歐羅巴風に見習ひて蒸氣船も澤山に拵へ、大小砲も造立て、『海陸共に備をかたむるが必要だと說いてあるが、之は軍備充實の必要を說くといふよりも、寧ろ在來固陋の習學法を改めて、西洋實學の研究を唱道する意味のものと觀るが適當であらう。

○

之で福澤先生の話はおはり、次に加藤弘之先生の話に移らう。此頃先生は弘藏と云つて居られたが、後年の稱呼に從て一概に弘之と書いておく。

○

老先輩の話に依ると、外國交際に關する誤解を一掃する上に最も大なる影響を與へたものは、加藤弘之先生の交易問答ださうだ。此の書一度世に出づるや、都鄙の青年爭て之を讀み、始めて多年の蒙を啓いたといふ。明治二年の出版で、和裝四形二冊各三十餘枚の小本である。晩年の加藤先生といへば、謹嚴剛直の士を聯想するが、この交易問答はまた思ひ切つてくだけ

た書き方をしたものだ。頑六才助二人の問答に擬し、外國貿易の利害を説いたものだが、一寸こんな文體である。『……先ヅ壹つ僕の愚論を述ませう。ダガ併何時迄もベラ〳〵としやべりつゞけにして居ては、看官諸君が御怠屈なさつて、才助といふ奴は名前にも似合ん氣のきかない野郎だと御叱りなさるでござらうから、先ヅ此邊で一服やらかして、跡は下の卷で話すでござろう。』之は云ふまでもなく上卷の終の結句である。

交易問答一篇の立言の趣旨は、開卷第一頑六をして喝破せしめて居る。『今度御公儀（幕府）と申す者がなくなつて、天下の御政事は天子様でなさる様になつたから、是迄御公儀で御可愛がりなさつた醜夷等は、直に御拂攘になるだろうと思て樂で居ましたら、矢張以前の御公儀と同じことで、加之大阪や兵庫にも交易場が御開きになり、又東京でも交易を御開きなさるといふは何たることでござろう。どうも此頑六抔には一向合點が參り申さん』と。斯くて先生は頑六をして順次に次の五ケ條の疑問を發せしめ、一々之に答辨を與へて居る。

（一）日本は神國である。天惠裕に民生の生活に何一つ足らはぬ物はない。故に今更外國と交易するの必要はない。

（二）交易盛になれば商賣繁榮し、たらでも商賣の利得多きに惑ひ易き農民をして、益々動搖せしむる恐がある。農民の惑ふは取も直さず國の本の衰微を意味するから、交易は即ち國本の衰頽を導くものと謂はねばならぬ。

（三）西洋人は無益の物を我に與へて我が有要の物産を奪ひ去る。斯かる交易は絶對に止めなければならぬ。

（四）我國の物産日に〳〵外國に流れ去るを以て、物資漸く缺乏し、爲に諸色高直（物價騰貴）となりて民生の苦み遂に堪へ難からんとする。

（五）斯くして國民の困苦せるに乘じ、彼等は遂に本來の毒牙をあらはし、我國を奪はんと企らむ。是れ我國は頗る天惠に富み彼等の垂涎して措かざる所だからである。

交易問答の原文には右の様な言葉で右の様な順序に論ぜられて居るのではない。漫然たる兩人の會話の中に後と先き混同して織り込まれて居るのであるが、試みに之に順序をつけて見ると右の様なものになると思ふのである。

○

之より才助の口を藉りて答へてゐる加藤先生の議論を一つ一つ吟味して見やう。

第一の交易不用論に對しては、單純な分業論を以て答へて居

る。普通の經濟學の教科書にある樣な分業の起りから、商人の發生したこと、之に依て益々分業の促進されたこと、交易の媒介たる通用金（通貨）の發生したることなどを說き、交易の範圍擴まりてやがて國際貿易の發達を見るに至れる所以を述べて居る。更に進んで直接當該第一問の答としてであらう、特に（一）交易は必需品が足らぬからとて起つたものではないこと、（二）物が足りても起るのは、色々知らぬ物を交換し合ふことに依て文明が開けるからであることを說き、交易と文明の進歩との關係を力說して居る。今から觀れば淺薄なる抽象論に過ぎぬけれども、當時の人には甚だ新奇の學說と見へたものだらうな。但し『神樣の眼から御覽なされば、土佐や筑前から東京や大阪に國產を持出のも、英吉利や和蘭から日本に國產を持て來るのも、唯遠いと近い斗で何も變つたことはござらん』といふ邊は當時の先生の天賦人權論と共に、可なり極端なコスモポリタン的色彩に富むものと謂はなければならぬ。日本を以て天惠に富む神國なりとする見解に就ては何も述べて居らぬ。當時の事だから先生も亦或はしか信ぜられて居つたのかも知れぬ。

第二の交易有害論は、當時の經濟學が農業を偏重したといふことから當然起る議論である。此點についての先生の辯駁は少しく薄弱なやうだ。先生は農が國の本だといふことは認めるが、昔は知らず今日は百姓ばかりでは世の中が治らぬと云つて居る。又商人は仕事が樂で利得が多いと云ふが、必しもさうばかりでもないと云つて居る。但し商人はからだが樂だが氣骨の折れるもの丈けに、自然と知慧が開け、從て德實な風が薄くなる傾きはある。併し之は已むを得ない。之が悪いといへば、人間は知慧をみがくな永久馬鹿になつて居れと云ふことになる。さうかと云つて人が悪くなり世の風俗が亂れてもいゝといふ譯には行かぬから、そこで御上では學問の開ける樣に御世話がある。夫れ故交易が開け商人が繁昌しても、必しも世の風儀が悪くなると限らぬと、先生は頗る樂天的である。更に一層樂天的なるは、交易の發達は農民を驅りて商に走らしむべしといふ非難に對して、商に走るの結果商に多過ぎてやがて其の利得著しく小くなり、從て再びまた農に還るものを生ずるに至るべく、一時の現象としては兎も角、かくて結局は農工商各うまく釣合が取れるだらうと述べて居る點である。

第三に西洋から輸入する物品は全部無益だとする感情論に對しては、必しもさうではない、現に鐵砲は如何、船艦は如何、時計は如何と輕くあしらつて居る。

第四の物價騰貴論に對しては可なり詳しい說明を與へて居る。今日から觀れば是亦頗る淺薄なる議論に相違ないが、あの

當時之れ丈の議論の出來たことは、非常な明敏の頭腦であつたことを證明するものと謂へやう。先生は先づ所謂諸色高直の原因を專ら交易の一事に歸するを誤つて居ると說いて居る。物價騰貴は第一には社會の不安動搖の結果生産が阻止せられる所からくることあり、第二には通貨の疎悪になる所から來ることがある。之等の原因より來る物價騰貴は成程悪い。併し乍ら交易から來るものは必しも呪ふべきではないと云ふのである。交易は何故に高直の現象を來すか。物資が捌けるからである。而して物資が捌ければ仕出し(生産)が多くなる。生産の增加は卽ち夫れ丈け國富の增加ではないか。玆に何の憂ふべきことがあらう。且つ之に依て物價の騰貴するは、實は一時の現象であつて、結局に於てはやがて復た下る筈のものだといふて居る。『畢竟諸色のはけ方が澤山になるから、高直にしても買人が幾らもある。買人が幾らもあるから、品物を仕出す人がふへて來る。品物を仕出す人がふえて來るから、品物が段々と多くなる。品物が段々と多くなつて來ると、成丈手輕にこしらへて少でも下直に賣るやうに競て來る。そこで追々に居合が付て諸色が下るのは、自然の道理に相違ござらん』。加之我よりの輸出に對し、彼より蒸氣機關等の如き種々便利なる生産用具を輸入する時は更に一層生産費を節し得て物價の引下を結果する事とならうと說いて居る。議論が抽象的に過ぐるの嫌はあるも、中々鋭い論鋒で辯じ立てゝ居るのである。

第五の侵略論に至つては、先生は敢て深く此の杞憂と爭はない。而して假令外國に我國を覬覦するの野望ありとしても、交易する方が寧ろ得策だと、巧妙なる功利的說明を與へて居る。其故は、(一)外國に果して我を攻略するの野心ありとせば、交易を斷つたからとて押し掛けて來るに相違なく、(二)寧ろ交易する事に因て敵情を精知し、彼等の發明せる武器を修習穫得するを利とすべしといふに在る。併し現今の世の中は『何の道理もなく人の國をとらうといふ事はできない』と云つて居らるゝから、幾らか正義の世界的支配といふ考も有つて居られたかとも察せらるゝが、かうした思想は外の何處にも散見しないのは惜しい。

終に先生の耶蘇教論をも一寸して置かう。之は交易問答の附錄と云ふ形になつて居る。頓六と才助との問答が前者の承服に依て最後の幕を閉ぢんとせる際、突如横合から杞憂堂先生といふが口出しをし、外國との交際はいゝが之に伴ふ邪教の一件はどうすると詰問し來るのである。當時杞憂道人と云ふ名に隱れ、京都邊の名僧でさかんに耶蘇教排斥の書を出せるものがあ

つたが、之に因んで杞憂堂先生の名を作つたものであらう。之に對しての才助の答は斯うである。

耶蘇教の憎むべく我が皇國に害あることは世上の說の通り疑を容れぬ。併し之は條約面に傳道の禁と云ふ事があるから心配は入らぬ。若し萬々一『彼奴等が姦知を以て勸込樣な事をいたしますれば、其時こそ信義を破るの大罪を責め『貴賤上下となく身命を拋て彼奴等を鏖にし』やう。併し『此頃は皇學とか申て神代の尊い道が追々御盛になるそうでございますから、假令彼奴等が如何樣に骨を折つて耶蘇教を擴めやふといたしましたとて、迚も及ぶ事ではございますまい』云々。

斯うなつて來ると、加藤先生の開國論も餘りアテにはならなくなる。而かも先生の耶蘇教に對する憎惡の猛烈なる、才助をしては、イザといふ場合には『彼奴等が喉笛に喰付ても五人や十人の醜夷は喰殺す積りでございます』と云はしめ更に頑六をしては『拾人や二十人の醜夷は此叟一人でも喰殺てやる』と放言せしむるに至つて居る。

○

此點につき加藤先生と好個の對照を爲すものは中村敬宇先生であらう。先生が篤信なる基督教徒たるは隱れもないが、先生が明治五年「新聞雜誌」を通して發表せる「泰西人ノ上書ニ擬ス」るの一編は、極めて大膽な宣言と謂はねばならぬ。假令匿名であつたとは云へ、其が先生の筆なることは直ぐに分つた先生に於て敢てかくしもしない。殺伐なる排外思想のさかんな當時、外人の上奏に擬して正々堂々耶蘇教歸依の急要を說くは、蓋し非常の確信と燃ゆるが如き熱情とある人にして始めて能くし得る所であらう。而かも文辭菲靡を極め、事を說くに情理兩つ乍ら委曲を盡せるものがある。僕は今でも時々之を誦讀して深く先生の高識に敬服して措かざるものである。

○

先づ冒頭『某頓首再拜謹テ皇帝陛下に稟ス』との一句で振り出し、夫より明治の新政を各綱目に亘りて讃歎し、次で突如『獨リ曉ラサル者アリ。何ヲ以テ異教ノ禁ヲ今ニ至テ未タ除カサルヤ』と喝破して居る。世間動もすれば國禁を以て其の答と爲すも、曾て國禁たりしもの、西教の外に通商互市あり、西書飜譯あり。而して之等は今日皆禁を解くに至りしに、獨り西教のみ『頑然尚ホ二百年前陳腐ノ國禁ヲ株守シ、目スルニ邪教ヲ以テシ、冥然覺ラズ。牢フシテ破ル可ラサル者ハ抑何ゾヤ』とて、漫然西教を邪視するの蒙を詰責して居る。

耶蘇教を目して邪教と爲すは附性的迷信の結果に過ぎぬ。『凡ソ物試ミサレバ則ハチ知ルヿ能ハズ。』試みて始めて傳說の誤を

覺ることが多い。今や日本は、嘗て夷狄視せし西洋に幾多の文物を學んで其の便益を蒙ること頗る多いではないか。『凡ソ此レ皆貴國ノ試ミテ而シテ其善ヲ知リ、善ヲ知テ而シテ能ク選ル所ノ者。』併し乍ら斯の如きは畢竟西洋の精粕に過ぎない。『顧テ其精神ニ至テハ則チ殆ンド胡越ノ相知ヲサルガ如シ』とて、段々西洋の精神文明に着眼すべきの必要に說明の歩を進めて來る。

○

次で曰ふ。『陛下其レ亦西國ノ富强ナル所以ヲ知ル乎。夫レ富强ノ原ハ國ニ仁人勇士ノ多キニ由ル。仁人勇士ノ多ク出ル所以ノ者ハ敎法ノ信心望心愛心ニ由ルニ非ル者ナシ。』即ち敎法は西國文明の精神にして、『今日西國ノ景象ハ敎法ノ華葉外茂スル者』に外ならぬのである。而して『ソノ枝葉ノ美ヲ喜ビ、盡ク之ヲ己レニ得ント欲シ、』而かも顧みて『其由ル所ノ本根ヲ遺ル。其レ亦惑ヘリ』と謂はねばならぬ。『他國ノ精粕ヲ好ミテ而シテ其精神ヲ惡ミ、首鼠兩端ニシテ進退據ル所無シ。』臣甚だ陛下の爲めに取らぬとて、切に『當ニ斯ニ臻ル所以ノ本根ヲ探ル』の急を力說して居る。

更に翻て昔時西葡兩國が法敎を以て國力發展の具に供せし歷史に遡り、日本が一時西敎を憎むに至りしも故ある旨を明にし、一轉して即今時勢の變を說いて『昔者ノ法敎ハ國王ノ器具タリ。今ハ法敎家々人々ノ精神タリ』とて西洋今日の文化に學ばんとせば、須らく敎法の本源に敎を汲まざる可らずとし、西敎の禁を除かざる以上、到底歐洲治化技藝の眞髓に達することが出來ぬと懇ろに說き敎へて居るのである。

而して最後の次の宣明の如きは、溫厚なる先生の言としては最も大膽なる言葉と謂はなければならぬ。曰く、『陛下如シ果シテ西敎ヲ立テント欲セハ、則チ宜シク先ツ自ラ洗禮ヲ受ケ、自ラ敎會ノ主ト爲リテ而シテ億兆ノ倡率トナルベシ』」と。是れが即ち一篇立言の大綱目なのだ。今から觀れば、文字の非嚴に比して內容が貧弱だといふ非難もあらう。併しあの時代斯くまで西洋文明の眞諦に根深く眼光を放射したものは、先生の外にあまりない。此點に於て先生の如きは、明治初年の文化開發の先達中最も優れた一人と謂はなければならぬ。

○

以上福澤加藤中村三先生に就て少しく語る所あつた譯だが、此外明六雜誌に現れた西周先生の內地旅行（七年十二月發行二十三號所載）津田直道先生の內地旅行論（七年十二月發行二十四號所載）福澤諭吉先生の內地旅行西先生ノ說ヲ駁す（八年一月二十六號所載）西村茂樹先生の自由交易論（八年二月發行二十九號所載）等も全然看逃すことは出來ぬ。が、之等は他日別

に明治の文化に寄與した明六雜誌の史的貢獻を研究したいと考へて居るので、之に讓つて今は說かぬ。大體以上の紹介で明治初年の思想界の一部の狀況は明にし得ただらうと考へて筆を擱く。

追記

中村敬宇先生の前揭一文を「新聞雜誌」に就て見たるに、明治五年八月發行第五十六號附錄に載つて居る。後には隔日發行になつたが當時は週刊であつたらしい。原文は漢文で擬泰西人上書と題してある。緒言には『或日本人洋人ノ上書ニ擬シテ耶蘇教ノ奉行アラン事ヲ勸奬シタル文ナリ』と紹介してある。而して當時の形勢として斯かる文章のみを掲載しては異常の物議を釀すこともあらんかと怖れた爲めであらう、之にすぐ續いて「人ノ癸文ヲ駁シテ日本新報（ジアパンヘラルド）刊行主人ニ示スノ書」といふを採錄してある。緒言の紹介に依ると、之は『或洋人前書ヲ見テ辨駁シタルモノニテ、其原文ジヤパンヘラルドノ中ニ在ルモノヲ或人片假名文ニ飜譯シタルモノナリ』といふ。中村先生の一篇は英文に飜譯され、この年『五月十八日出版ノウヰーキリージヤパンメールト云ヘル新聞紙ニアリ』といふことだが、其の辨駁書なるものは果して洋人の筆に成るものかどうか疑しい。當時の事情に通ずる人から教を請ひたいと思つて居る。猶ほ辨駁書の要旨は、他日また改めて紹介評論することにしやう。

秋の美術期の前に

小杉未醒

○子爵黒田清輝氏が、新たに帝國美術院長となつた事は、我々を微笑せしめる、福原氏の呼び聲のあつた時、我々は此の繰り返しを怠屈に思ひ、從つて好き期待を持ち得ず、風馬牛の冷

淡に歸らざるを得ない、黒田氏の就任は一應官府の人々の、理解の進歩を思はしめ、又別様に黒田氏の重量の浸徹を感ずる、いつまで美術界の事は、御役人の肝煎りを必要とするのか、美術界の事は、美術家の取り捌きに依るわけに行かぬものか、然う不平に思つた人々もあるにはあつたが、又頭から無批判に御役人を受け入れ、又結句御役人が主判者となつて居る事を、便とする人々もあるにはあつた、是等の人々に於ては、或は新美術院長の重量を不便なものに思はるゝ向きもあるかも知れず、更に又、向後招來すべき會員の顏觸れを、チト狹まく範圍づけた事になつたでもあらう、我々は、此の官業の美術集團に緣のない我々に於ては、貴族院の政黨を背景に持つた新院長が、其の積年の重量を以て、在來の役人の院長とは大分異つた力に依つて壓しかゝつて來べき、此の秋からの帝國美術院及帝國美術院展覽會を想望して、再び微笑を禁じ得ない、氣輕な第三者の役徳である。

○

子爵家の若様であつた此の清輝氏の青年時代には、政治を學ぶつもりで佛蘭西國へ行つた、政治は學ばで遂ひ繪を習つた、と私は聞いて居る、凡そ明治大正に亘る洋畫家の間に、黒田子爵程の功績力量を現はしたものは多くないと思ふ、政治は學ばで繪を習つて、久うして日本に歸つて、忽ち日本の洋畫界を半分し、紫派の異名の下に、平明快適な巴里の色彩を以て、伊太利古風の晦澁な舊派を震蕩した、其頃美術學校の生徒の風景寫生を見ると、風景を見ぬうちに、先以て紫の繪の具を溶いたとさへ云ふ、佛國將來の作品、歸朝後數年間の作品を、今に於て見ても、拔群に優れて居ると思ふ、師匠のコランに比べては、字の如き出藍であつたらうと思ふ、其内作品は餘り現はれずなり、いつの間にか一種の美術行政者の如くに、我々の目には映じて來た、白馬會を解散した彼の人の辣手は、果斷なるが故に人をして爽然たらしめる、國民美術協會は、彼の人の大同團結の大組であるらしかつたけれども、是は日本畫家の習慣やら自尊心やらについて、勘定違ひがあつた爲に、意の如くには行はれなかつた、文展に於ては、乃至美術學校に於ては、殆んど子爵の意を衡く一人をも見出さぬであらう、それ等も今迄は洋畫部に或は限られて居たが、新に院長を拜して、此の大御所は先づつくづくと掌裡の快刀を檢て、徐ろにその新たな料理物に對するであらう。

○

此間中所謂政變の際、研究會の御使者番と自ら號した子爵の奔走を、我々は屢々新聞で散見した、物其類を悲しむとか云

ふ、我々は此の美術界の老宿の、氣輕な自嘲的命名を不愉快に思つた、政治の表裏に皆目理解のない我々は、何が故に自ら下して説客となるのであるかと訝る、（一體新聞の讀める程のものが理解し得ぬと云ふ表裏を認めらるゝ政治の狀態は良くないとは思ふ）すると或る消息通が黑田氏は文部大臣の椅子に就て、カナリな可能性を持つて居られた、と云ふ事を話して聞かす、此の消息通が、ホントの消息通やら、又は好い加減のものやら、どちらにもあれ、黑田氏の文部大臣は面白いと思ふ、日本も、官省の主腦者を土偶にせず、創見の觸きものを以て充つる時代を早めたい、併し今の場合、黑田氏と雖も、それが子爵であり、子爵なるが故に貴族院議員たり、それ等の爲の御使者であり、大臣の椅子である、平の美術家の老宿では斯うは行かぬ、子爵が世間の認識以上の實力を持つと思ふが故に、余計に此の官場習慣の批評を複雜にする。

○

少しでも美術に興味を持つものは、官設の展覽會のみ必ずしも第一等ならず、院展も、はた二科も、國展も或、は未だ展覽會の第一會をも擧げさる春陽會にも、各々相當の價値を認めるであらう、國民の多數は、美術の權威として專ら帝展を見る、見物の頭數の多さから、又美術家の間からも、帝展の出品者を尤も多く出す、其處には又、大佐小佐軍曹伍長の如き階級の細別あり、會員審査役特選推選出品者何回出品者落第者を算える、斯樣に繁昌なる帝展について、親切に考へて見る人々の間には、いろいろの改正意見をも藏して居るであらう、各團體から何人づゝかの委員を集め、之に現在の審査員の何人を加え、何年に一度の重々しい會を開くとする、それを以て帝國美術院の事業とし、今の帝展は、院から獨立したる普通の會となす、是も尤も面白い意見かも知れぬ、勿論また其處に、或一派の拒否が生じ、少しの年月の間に、或一派の分離が生ずるであらうが、先づ當坐の妙案かと思ふ、和田三造氏が、曾て文展改良案を長文の意見書と作して、時の文部大臣に送つたものは、どう云ふ仕掛けを考へてあつたか、或は、其の意見の半ば行はれたものが、帝國美術院の出生となり、半ば行はれざるものが、和田氏の辭職となつたとも云はれて居る。

○

日本美術院が米國へ繪を送つて、巡回展覽をなさしめた、帝國美術院の人々が主となつて、佛蘭西へ繪を送つて、サロンの一部に陳列した、佛國から繪が來て、農商務省で展觀した、支那の諸家の會も東京で開かれた、近來日本の美術と、外國との交渉が、急に頻繁になつた事を喜ばしいとする、外國では日本

を知らんとし、日本では日本を示さんとする、機會の到來である、日本美術院の米國行は、割合に良くない結果でちつたと云ふ、私が日本美術院に居た頃、一昨年頃、在巴里の日本の畫家など〻手筈をきめて、院が主催者として繪を集めて、佛國のサロンの一部に日本の作品を並べて見せやう、と云ふ計畫があつた、其時はたしか、繪を集めるに、繪其物を指示せず、人を選んで、選んだ人に自作の中の好めるものを出して貰はふ、と話し合つたかと覺えて居る、帝國美術院の人々主催の場合は、繪を集めるのに、何某の何の繪と指示して出品を勸誘した、中にはその選び方が、自己の意と反した爲に、出品を拒んだなど〻云ふ人もあつた、日本美術院の、佛國出陳の企ては、其儘に流れて、再び催されて米國行となつた、私の見る處では、あの時の繪は、先方の希望のま〻に、皆同じ大きさ、同じ寸法の新作を送つた、それが展覽會としては、何分にも單調に過ぎたかと思ふ、各々得意の大きさや形ちに依り、又新作舊作を論じなかつた方が、好かつたのではないかと思ふ、次には、最初の企てなるにも係らず繪ばかり行つて、人が行かなかつたのも、氣合ひを弱めたかと思ふ。

○

佛蘭西のサロンでは、西洋畫は餘り評判されず、日本畫に人氣かあつたと云ふ、彼等は、遠い東洋の國の者に、かけ離れた異國情調を喜んで見出したがるであらう、反對に、巴里で容易に眺め得る。印象派から後期印象派にか〻つた間の、若干の様式共を期待しては居なかつたらう、千里も遠い處から來た荷物の箱の中より、巴里の美術商の、硝子窓の裡にあるものが、現はれ出でやうとは思はなかつたらう、日本畫家の數氏が、會員の推擧を受けた事は、是は藝術の批判からも、讃歎からも來らず、國賓接待の役人が受けた、外國の勳章と同じやうなものである、栖鳳氏の日本畫に人氣があつたと云ふ、彼れの技巧が外人に稀有の感を抱かせたであらう、人に依つては、努めて避けたいと思ふ滑かな絹の上の淡い色彩と水との舞踏は、故國の素人鑑賞家と共に、外國の初見の人を喜ばすに十分である、さるにても此頃殊に多くなつた處の、日本畫の材料を以て油繪の表現を期圖した作品共が、佛蘭西の畫家達の前に出る場合も、共內到來する事であらう、あちらでも失望するであらう。それを聞いてこちらでも失望するであらう、ともかく、佛國には新舊數個のサロンがある。日本にも同じやうにいくつもの會がある、各々相手をきめて、年々交換的な展覽をなす事は愉快にして又必要である。大使を三人同時に送るよりも。

○

日本の油繪が、佛國で好評でなかつた事は、然しながら拙劣の爲ではない、彼等が異國物に對する好奇心を滿足しなかつたのは、彼等の不用意である。只日本の繪油が、大いに傑出したものであつた時に、彼等とてもそれを認めざるを得ないであらう、拙劣ではなかつたが、傑出的良作ではなかつた、巴里のすべてのサロンの出品物は、其の程度に於て、概して日本の帝展の出品物を中段に置く、つまり帝展の落選畫も出品し得ると同時に、帝展の優良以上の優良をも包含する、是は七八年前、私の目で見た時以來、最近歸朝者の友人の報告まで、ズツト同じやうな狀態を續けて居ると思ふ、寂びしい中位者である、或は油繪の年齡が、日本はまだ若いからと云ふ、しかし乍ら日本人は、由來然樣に物分りの遲い性質ではない、幕府の丁髷の外國奉行時代から、米國の軍縮會議の立役者まで、何年を數ふるであらうか、油繪の年齡と似たものでは無からうか、私は年齡論よりも、より多く體質論などの方に耳を傾ける、洋畫家の現在四十五十の年配にある人に、大低疲勞と停滯との影を見出し易いのは何故か、一方に需要の多少を云ふ人がある、求めらるゝ處にしか生産はない、油繪の眞の要求はまだ社會に行き互つて居ない、求められざるに作つて居る疲れる。のも無理はない、大に求めらるゝ鐵齋翁の如き、九十にして尚青春の氣を保つて居る、體質ではなくして需求關係だと云ふ、此の如くいろいろの說を聞く、そして私は古い昔を回顧する、日本にも、又兄弟國の支那にも、千年も其の上の昔からも、繪を描く事を好む人が生れ、繪の上手も次々に出た、舊殼を脫せんとし、新樣を創めんとする努力は、絕えず行はれて來た、それにも係らず、只の一人も人の顏を燈下に見て、なぜ其の判然と視得すべき陰影を畫にはしなかつたらうか、何故に秋の夕日の、山を染めて半面は黃に半面は紫なるを寫さうとは爲さなかつたらうか、此處に私は絕えざる疑を持つ、本質的に、グリーキ正統の西洋畫術と、東洋人の表現心理とは合致せざるものを存するではないかと。

○

私は此の疑ひを愼重に保留する、民族も大きな個人と見られる、個人の事業の可能範圍を、輕々しくは速斷し得ない、況んや大いなる個人をや、又藝術は科學と異なる、一の定則を發見すれば、其一に二を重ね三を重ねて、馬車より汽車に、汽車より飛行器と云ふやうに科學は進む、藝術の定則は、若し有りとすれば一人の定則で、他の一人に及ぼさない、一人の進步はある、藝術全般の進步はない、一人の手の中に生れて而して死して終る、進步を遂げた一人の多く輩出する時が、藝術の盛時

で、此の少ない時が藝術の不振時代である、藝術史には、盛衰轉換はある、進歩は斷じてない、今の人に奈良朝の乾漆は、鑄立ちしても作り得ず、ルネサンスの名家も、ルノアルの外光や物質描寫を難しとするであらう、藝術の境地が廣いから、人は勝手に新らに發見を遂げて行く、横に開いて行き得る、竪に積み重ね得ない、東洋人の横に開いて行く足が、正統的油繪の畫術にまで能く及び得るか、はた又世界は大きく廣いけれども、人間の感じ知り行ふ範圍は存外に狹まいと云ふ宿命的な限りでもあるか、現代の佛國、セザンヌやルノワルまでが故人となり果てた佛國を、美術の極盛時代とは思つて居ない、之と現代の日本の洋畫界を比較して、某々、某々と數える事は私にさしたる興味を喚ばぬ、只彼のループル宮に集められた大作と名品と、又は彼のフロランスの畫堂に集められた大作と名品と、それ等の强大さ豐滿さ、富裕さを思ひやれば、彼等の民族的本質を手痛く頭重く感得する事を如何とも爲し得ない。

○

私の知人のなにがしなる日本畫家も、亦た力を極めて手弱い絹の上に、精良緻工なる岩繪具を酷使して、是でもか、是でもかと油繪との競爭に沒頭して居る、或は調子の强からぬ油繪よりは、事によればより强い色調などを見出す事もある、（そんな時に、どうかすると、大部に生のまゝの絹地があつて、そぐはぬランドスケープを形作るが、）一方佛國にマチスなど云ふ奇拔な人も現はれて、謎のやうな簡單化を見せたりする、東西呼應の形ちもある、西洋の簡化表現には、勿論東洋畫の影響がある、是を又正統的油繪の一種の墮落と見る人もある、ともかく私は其の知人をして、一たびはループルの大畫廊に立たしめたい、伊太利の未來派は、頭の上に積んである古藝術の、重量から逃げやうとて、口を極めて過去を罵る、血肉は草木より生ぜず、血肉には血肉の先祖のある以上、過去の殘存物は善惡ともに我々を範圍づけて居る、ループルの大積集を見る事は一種の苦痛でもある、絹と岩繪具とを以て、是に當るは無理であらうか、如實迫眞は、元より造形美術の一方の要諦である、油繪具ほど如實迫眞に適するものはない、私は此の油繪具の持すぎて居る力から避けんとして居る、反對に岩繪具を以て是と拮抗せんとする人は、なぜ速かに轉じてパレットとチューブとに赴かないか。

○

現代の支那の畫家達の展覽會があつた、私は是を見なかつたが、美術學校に於ける大村氏の將來品の展觀で其の一端を覗き得たと思ふ、現代の支那に、藝術家はない、一室に蹐處して、

或は山水の間に佇んで、充ち溢るゝほどの歡喜を以て、物の形物の色を、愛し、尊び、撫して居るのが、支那造形美術の製作の態ではなからうか、今の支那では六ケしい、造形美術は、清末以來支那を見捨てた、文學に於ける、胡適氏の口語詩の如き、勇敢な輕快な働きは、造形美術に見出し難い、吳昌碩位の人にしても他に一人二人あるかなしかも知れぬ、隣りの家で、撲たれて泣く子の聲にも、繪筆の調子は紊される、何年も何年も、笛太鼓大筒小筒の內亂ばかり續く支那では、とても佳い製作の生れやうはなからうと思ふ、吳昌碩の繪は騷がしい、由來東洋畫、殊に支那畫は、筆力を重んじ骨氣を貴ぶ、塗る繪でなくて、描く繪である、濃淡の調子を摑む前に、先づ氣合の充實を要する、スーウツと一本の線を引く、一本の線に其人の全人格が、滴も殘らず出てしまふ、達人は內から是を修めて行く、然らざるものは形から攻めて見ねばならぬ、故に師傳と古格とを、分外に嚴かにした事に、一面の理は存して居る、一本の線に全人格、そこで望む處深くして手の之に伴はざるものは、得てして怯懦な筆路を殘す、手ばかり利いて、省察の乏しきものは、遺憾なく凡下の性格を全線全畫面に暴露して行く、吳昌碩を初めとして、今の支那の畫家は、概ね後者たるを免れない。

人は善く鐵齋翁と吳昌碩とを比較する、鐵齋翁の繪も隨分騷がしい、しかし又一面に或る厚味を持つて居る、九十尙青春を存する彼の翁の、血の未だ紅に、物に對して倦まざる精力の、根底に横はるが爲に此の厚味を持つと思ふ、仔細に彼の一線一點を檢すれば、一種の癖の中に、甚だ潔淨ならざる埃氣を漂はす、彼の翁は大なる素人畫家である、吳昌碩は之に對して、專門的な熟練を持つ、畫格は下る事數等である、其他の支那畫家は、大抵田舍の宿屋の張り交ぜ以上に出て居らぬ、昔は支那は日本の兄分であつたに相違ない、今は日本宜しく近處の弟として見て遣るべきである、荻生徂徠であつたか、高輪へ移轉して、もろこしへチト近くなり申候と云つて喜んだ、英國を、わが英國と二言目には云ふ日本の一紳士と同じやうに、日本には昔から事大思想家がある、朝鮮の同胞ばかりを笑つて居られない、天童の禪が、如何ばかり當時の權威であつたか知らぬ、落款にまで一々天童首座を冠らせた、雪舟にも此の悪癖を認める、昔は中華を宗とし、今は歐洲乃至米國までを特別に忝きものにする、人間世界には、思想の隔離を比べて、百年二百年の差あるが人、同時代に棲息して居る、支那に對しての事大思想家も、今以て殘存して居る。

支那に對しての事大思想家は、所謂支那通なるものに中々多い、吾家の稻荷をありがたがらせうとて、伏見の稻荷を先づ第一の神にする、我が佛貴しとて、他家の佛の利益をくさす、自身の唯一の持ち物たる支那に就ての知識、半ば當世に要なき智識を、ひけらせん爲に支那を持てあつかふ、是等の爲に呉昌碩が梅蘭芳が、一かどの藝術家となりてすますをおかしき事に思ふ、又一方、近來文學家美術家が、支那の古文學古美術に、新たな注意を向け、興味を持つて見初めた、歐洲の文藝なり美術なりを、隨分細かに味つてからの、乃至日本のそれ等をも吟味してからの支那研究は、着實にして新らしき意義を持つ、今は、日本ばかりに引込んで居られず、歐洲ばかりを讃嘆して居られない、一國の藝術の價値、一人の藝術の價値を定める爲には、世界中を其の試驗臺にせねばならぬ、一國の優秀も、時として他國の平凡とならぬとも限らない、たとへばセザンヌが大に世に重んぜられんとする際に、巴里の留學生が送つた處の、セザンヌ張りの風景畫は、一躍して其人を一時の新人にしてしまふ、巴里へ行つて見れば、大きな展覧會の三分の一までは同じやうなセザンヌ張りであつた、是は巴里の平凡が東京の新人となる例である、此のやうな點が、昔は長く識破されずに、濟んだらう、各國の古名家の中にも、かゝる世界的比較校量に出合つて、或は坐位を失ひ、或は埋もれた光を顯はすであらう、支那は國古く人も多かつたから、所謂徂徠黨の尊崇以外に、新たな發見物も少ない事ではあるまいと思ふ、只、支那の文學藝術に、新人の目が向く、いろいろな報告が提供される、それに乘つて徂徠黨が古い持ち物を擔ぎ出すのは恐ろしい。

〇

今少し支那が落付いたならば、日本の美術の一集團を支那の二三の都市に於て展覧せしむるも良いかと思ふ、それに日本の舊來の南畫家は交えたくない、舊來の南畫家の多くは、あれは繪の方の徂徠黨である、彼等はそれを見て安心するに過ぎない、私は兩方の舊思想家の懇親を計る必要は當分無いと思ふ、刺擊する事がモット深い懇親の原因となるだらうと思ふ、刺擊する意味、宣明する意味の展覧會の支那行をすゝめたい、支那人は見榮坊で、折角背を折つて繪事に努めながら、他人には素知らぬ顏で、畫は士大夫の餘技などゝ云つて居た、昔の名家、今に於て尊敬に値する名家も云つて居た、是は一面、宮廷畫家や市巷の畫工などの、專門臭味工人臭味から、區別されうや爲に、特に逃げて見たと云ふ邊もあるかも知れぬ、結句良からぬ態度に相違ない、それを眞似た末流、日本の南畫家が、精進を缺き、進展を忌むに到つたのは、下根の者として無理もない、詩

に苦んで揮せた事を、自慢にもしながら、又は賞めものにもしながら、繪事の苦勞を何故に恥づるが如き形あつたらう、昔の支那の制作を見る、骨を削るやうな勉強の後でなくては、どうしても出來まいと思ふものが、比々として存して居る、現代の支那畫家は、燈臺のもと暗しで氣がつかぬか、隣の糠餅と云ふ、日本の藝術を見せる事はいろいろの意味で面白いと思ふ。

○

支那に美術學校を建てる事は、日本の支那に志ある、支那に關係ある富豪の大功徳でなければならぬ、私は前から、朝鮮に小さな美術工藝學校が欲しかつた、是は鮮人が古來手藝に巧みであり、又音樂にいゝ天分を持つ事から、彼等の良き進出路を作る爲に必要であり、又一知半解の考ながら、治鮮政策などゝ云ふ事からも都合のいゝ物ではないかと思つたのである、今は更に、支那に大規模なものを作りたいと思ふ、全部日本の資金で、全部日本の教員で、老人でなく、無學でなく、眞の支那趣味東洋思想の了解者を送りたい、彼の美術院の創立者、岡倉天心居士の如き人があつたなら、實に恰好の校長ではないかと思ふ、或は今にしては、彼れの如き支配慾の旺盛なる英雄は、却つて妥當でないか、モット共和的の紳士を要するか、ともあれ二千年の古美術國に、新形式の畫院の起る事は、平和博覽會で百萬圓捨てるよりも、モット平和的永久的の快事業ではあるまいか。

○

岡倉天心の美術院は、然樣に長年月に亘つたものではなかつたが、異數と思はるゝ程の人材を輩出した、彼れは少年時から語學に天才を持ち、彼れの東洋藝術についての英語演說筆記は、今以て多くの米國人に讀まれて居る、そして彼れは大の排外者であり大の東洋美術唯一論者であつた、後から見れば不合理な排外と思はれる、當時に在つては此の強調を必要とするものがあつたらうと思ふ、藝術の傳習所は、大小を論ぜず、或る一貫せる規模の存するを善しとする、甲殼の堅きは、又之を破るものゝ力を增長せしめる、上野の美術學校にも、昔は一種の校風があつた、今は專門學校の劃一に制せられて、只月謝と教授との交換に過ぎずなつた、學校の卒業者が云ふを聞けば、面白い藝術家は昔の方が多く出たと云ふ、教師も固定に過ぎる、モット多方面から、交代に出て行つて教へては如何かと思ふ、支那に美術學校を建てやうならば、今の東京の美術學校の容態を延長したものではいけない。

○

佛國美術の展覽會は、農商務省の陳列所で催された、フラン

スの美術も知れたもんだと、鬼の頭を取つて安心したやうなことを云ふ人もあつた、元より、日本から行つた美術の集團ほどにも、所謂精鋭を盡したものではなかつた、隨分粗末な間に合せの集め方でもあつた、モツト少なく　モツト吟味して持て來て貰ひたかつたが、先方は、賣ると云ふ目的もカナリ多きを占めて居たらうし、又、賣れた繪の中にも、低級なものが多かつたから、先方では却つて、日本の鑑賞力も知れたもんだと云つて居るかも知れない、但し、あれだけの物で見ても、現時の佛蘭西を何處までも買被つて居た人には失望かも知れぬが振り向つて自國の現在を見れば、巴里の繪師の冴えた明るさ、ともかく文明人の藝術と云ふ事を感じ得ると思ふ、たとへ俗氣があつても、嫌や味はない、凝つた仕事をしても暗くはならず、汚なく塗り散らした筆の跡にも、何處かにスツキリときまつた處を見せて居る、老舗の品物だと云ふ心意氣がある、願くは此後は、買約をする人も、特に其道の者に聽いて、なるべく質の良い格の高いものを選び、自然と今後の將來品を吟味せしめるやうにしたいものである、私はルドンの繪を珍らしく思ひ、それがよしルドン其人を、完く示すほどの出來ではないとしても日本に先づ一枚を留めたいと希ふ心から、去る人にすゝめて買ふやうに頼んだ、後數日にして去る人に出會つたら「ルドンの繪を買つたよ、僕はポケツトの都合があるので、妻の小遣で買はした、實は僕も妻もルドンの彼の繪を、然樣に好んでは居ないのだが、君が折角云はれるから」、と云つて居た、私は此の無邪氣な美術品の買入れ方を面白く思つて居る、美術に向つて財を投ずる側の人々は、ともすれば自己の鑑賞力を余りに頼みすぎる、鑑賞と云ふ事も、作家が製作に就ての苦勞の、半分なり三分の一なりの勉強を必要とし、絕えざる向上を計るべきであるのだが。

○

日本人と佛國人とは、共通の點が少くないなど〻云ふ人がある、或は獨逸人より、ロシヤ人より、より多く似たものがあるかも知れぬ、それであるならば、何故に日本人の油繪には、あ〻も汚ない暗い鈍いものが多いのであらうか、七八年前の獨逸の旅を思ひ起せば、當時戰前の獨逸の美術界には、佛國の後期印象派や、フチリズム、キユビズムが渦の如く捲いて居た、佛國は割合保守の國で、輕くは動かぬ自重を持つ、獨逸は新店の氣輕さに、恰んど舊派の描は跡を絕つかとさへ思はれた、其の新派の作共を比較するに、佛國の新人は明るい青い瞳を、一ぱいに見開いて、樂んで描いて居る、近代生活の苦惱を筆に塗り交ぜつゝも、何處かに朗らかなチヤームを失はない、獨逸の新人

は、眉を顰めて描いて居る、無理にも眉間に八の字を寄せて、暗く欝陶しく作つて行く、と云ふやうな概念であつた、此の强調されたる深酷さと云ふやうな流行は、今の日本の若い洋畫家の中に少からず彌漫して居る、私は其心裡を尤も青年畫家の自畫像に看取する、その不自然さを、愛らしく明るかるべき日本の風景畫に認める、あの脂つこく、どす黒く、空氣に臭氣を含みさうな、小山と茅屋と雜木林とは、何の國の風景であらう。

○

日本も割合保守的の處もあるが、さしも歐洲に流行した、キユビズム、フチリズムも、碌々東京の畫壇に現はれぬ間に、ダヾイズムとか表現派とか、本場の評論の種を作つて居る、此の數年間、歐洲に起つた新畫派と云ふものも、最初の提唱者は、相當眞面目の態度であつたらう、腐るほどある作家の間から、ヅンとパンとを心安く穫取せん爲には、素早く人の耳目を刺戟する爲の新手を用ふる苦策に依る、活潑な、そして側見なき追從者の數を增す所以である、何時の世にも新樣式は、主唱者に在つての新樣式で、追從者には、追從それ自身から、即座に舊樣式と變化する、現時の日本では、新樣式の注意者は、或は洋畫の青年よりも、日本畫の青年の方に多いかも知れぬ、歐洲に在つては、古日本畫が直ちに新樣式の要素を持ち、日本に在つては、逆輸入の競爭となる、變形されたる逆輸入品は、概して質が善くない、其の間にマチスとピカソとが還俗したと傳ふる者がある。

○

マチスとピカソの還俗は、何を意味するか、私は、首を囘らして故郷に歸つたと云ふ、たよりを聞いて面白がつて居るのみで、其實蹟を見得ないから、其上に考ひやうはない、マチスは何が故に彼の謎のやうな簡化に飽いて、クラシツクを再びするか、簡化運動前のマチスの畫の記臆では、彼は自體無双の色彩家であつたと思ふ、それが、單一調子の婦人像の、胸のあたりに、ちとばかり寒い青色を點じ、双の目はたゞまつくろな穴となつて居る、と云ふやうな種類を、次次に描き出しては、自身にも他人にも、絕えざる問題を提供して居た、ピカソのキユビズムは、同じ品の連中の中心では、さすがに立優つた力を示して居た、局外者から然う見えるだけ、同主義者の間にしては、却つて穩健に過ぎたものであつたかも知れぬ、此頃僅かに見た彼れの近業は、何やらアンリルソーの風景畫を思はしむる邊もあつた、何處の美術界も、一人の先導者が、多數の崇拜追隨を作つて居る事がある、或は崇拜の醒め、追隨を離散せらるゝに終る、或は要なき崇拜、凡下の追隨に倦んで、自ら其の圈より脫

出するに到るもある、彼等二人者にも、斯様ないづれかの現象を認め得るかも知れぬ。

○

ゴークを擧げんが爲に、一時ゴガンは貶された、私は寧ろゴガンを喜ぶものであるが、佛國でゴガンの名聲が寂びれたのは、彼の血肉に、蠻族の統が混じて居た爲だとも傳へられる、ゴークの靜物は、その風景よりも、東洋的であつた、風景は、筆も繪の具も燃えるほどの情熱を持つて寫した、輝く太陽生ひ茂る樹木の存在などを、目に餘るほどに認識して苦描した、靜物はモ少し餘裕のある態度で寫したらしい、セザンヌの立體的の花や果物に比べては、大きな色の塊りを摑む爲に、時として平面的な東洋的な結果を殘した、ゴガンはゴークに比べて、ズツト畫家であつた、彼れのコムポジションの力は、好き參謀將校の策戰計畫を思はしむる、モーリスドニなどの及ばぬ構圖の面白さを理解して居た、日本でゴガンに疎くし、ゴークに親んだのは、一種の反射作用かも知れぬ、ゴガンは東洋人に喜ばれぬと若し聞いたら怪訝に思ふであらう、相並ぶ二人は、倶にどちらかの一方を欠損する、マチスと並んだドンゲンも亦、マチスに比して東洋的である、マチスは理智的であり、ドンゲンは情的乃至官能的であつた、勿論日本にドンゲンの影響のあることは、少許の危險を覺える、彼自身が少し甘いから。

○

獨逸は今藝術どころではないか、切りつめられた暮し向きや、積り積つた借金に追はれて、繪かきも彫り物師も靜心なく立迷つて居るか、或は彼の不屈不撓の執着を以て、それこそ本氣の眉間に八の字を刻んで、世界を驚かすやうな新藝術を建立せんとしつゝあるか、何事にも世界第一を望んで、或程度まで世界第一を實現し得る、彼の米國の藝術が、一向に世界的に働かず、世界を刺戟せさるはどう云ふものであらう、其點に民族的歴史、古き纏つた民族の藝術と云ふやうな事を思はしめる、解放の聲は、制度に對して叫ばれる、藝術については、民族の過去に深き省察を要すると思ふ、又、過去の重さを脊負ひ切れぬ國もある、伊太利で未來派の悲鳴を聞く、ギリシヤも印度も、支那も、只默して過去の下積みになつて居る、米國が後來、藝術の首都となる時を期待し得るかも知れぬ、物質の功利のみの國だと云ふものもあるが、支那も昔から物質的な國であつた、又、物質慾と藝術が、然樣に極端に兩立せさるものでもない、日本は是から、其分外に價値ある過去を巧みに利用し得るだらうか。

○

日本の美術界は、近來やゝ沈滯の氣を帶びて居る、明治大正の藝術と云ふものを、過去として振り返つて見たならば、中々に波瀾あり興味の多い時代でもあらうけれども、他の時代と比較して、凡そどれほど位と云ふ位置づけは六ケしい、渦中にあつては全體を見難い、日本美術史上、盛の部にあるか、又は衰の部にあるか、盛の部にあるかも知れぬ、只概して云へば纖巧な美術の多く作られた時代ではなからうか、太ッ腹の大作の出來ず、神經の細かに刻んだものを産し易いのは、近代世界一般の風潮と思へば是非もない、一時代にも亦、小波瀾あつて、今のやうな沈滯もあり、やゝ活氣ある時期もある、活氣ある時に必ずしも其時代の代表作が出來るとも限らない、又、日本畫の方には殊に、過度期の大家が輩出して居る、生前の大家、死後の忘却、と云ふやうな作家も、カナリ澤山に見受けられる、それ等は次第に區別さるべくして、然様にも渉どらない、歐洲の如く、人多く言説繁く、比較の容易な處と異なり、狹まい極東の島國に、人々面々相識つて、細やかな人事交渉が、利害をからんで、行き渡つて居る爲ではなからうか、日本畫家が、努めて自家思想の發表を避けんとする傾向も、半ばそれらに根ざして居る。

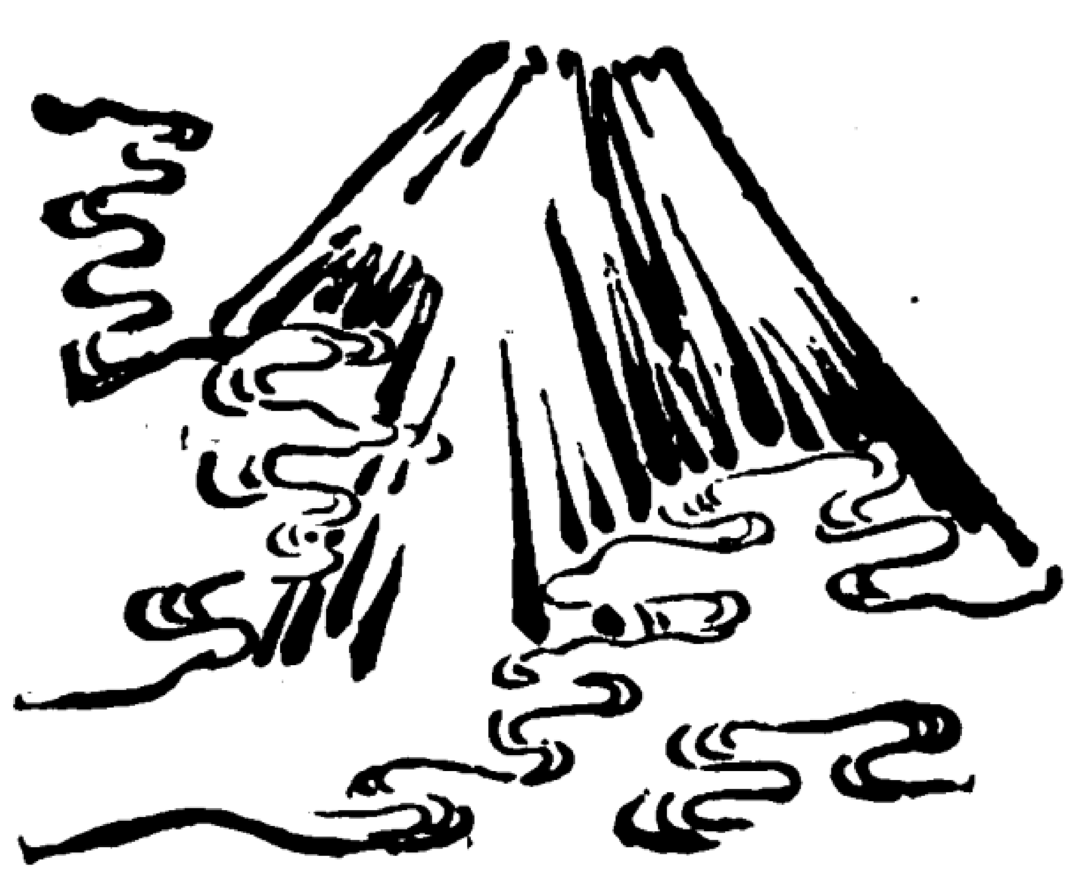
○

今の世は一人一主義である、ロセチ等のプレラフワイリストの如き、集團の步調を等うする、都合のいゝマーチのやうな主義は見出されない、或は藝術上の主義と云はず、藝術家としての主義と詮索し來ればそれは在る、然様な見方を以て、日本畫界を分類し、色づけて行く事も必要であらう　國畫創作協會の如きは、態度に於て一致するものを認める、共同生活の可能を肯定し得る、金鈴社の解散した事は何が原因をなしたらうか、製作上の主義の一致は元より之れ無かつた、態度の一致がやゝありはあつたが、國畫創作協會ほどに、一種の假想敵國のやうなものがないから、集團として存外に淡泊な結合であつたと思はれる、淡泊な結合なるが故に、淡泊に離れ得たかも知れない、敵國外寇なきのは、其國亡ぶなどゝ云ふ、古い文句も、變形せしめて考へ見れば、あてのない集團は、集團の意味をなさぬとも思はれる、舊金鈴社の人々の內、又は國展の二三者、院展の數氏などに、舊傳統をも相當に研究し、新思想も了解せざるに非ず、徐ろに自己の完成に力を入れやうと云ふ境地に在るを認める　表面活氣なき時期と見えて、實は其間に落ち付く處に落ち付くべき或る醸造、或る萌芽を含むことは、今迄多忙なりし日本の美術界に、珍らしい事ではないかと思はれる、其の微候が、洋畫の方にも亦無いわけではない、普通將來の望みは青年

にかけられる、當生、今の處の日本では、中年の人の默想と作業とか、割合に期待されるのではないかと感ずる。

○

今の日本の美術の評論は、餘りに否定にのみ傾く性癖を持つて居る、誰れも彼れも、自己の信ずる、或は自己の信ぜんとする第一義を、眞向にして他を貶する、藝術家は、政治家でもないから、手酷き攻撃を牛の角の蚊のやうには過ごされない、眞向に振りかざした第一義が、果して天下古今に通ずるものやら、又は其の民族、其の時の傾向にピタリと中るものやら、或は歐洲で云はれたものゝ飜案やら、實は分らない、第一義が時々變化し、時々的を外す事がある、美術は育てるもので、打つものではない、缺點を除き去るよりは、長處を助成する方がいゝ、今の日本に賞む可き作品が無いと云ふが、嚴かに他を貶する自信も亦有りはせぬ、さりとて又賞めすごせば怠け者となり、くさしすごせば縮んで行く、只政治家は主義を以て主義と戰ひ得る、藝術家の作品に蒙る非難は、自身所生の赤子の受くる鞭である事を思ひたい、今の日本に金錢のパトロンは有るであらう、精神のパトロン、彼のラスキンの如き良きコンダクターは生れぬものか、眞情を云はすれば、タアナアに在つては、ラスキンも亦少しく有らずもがなであつたかも知れぬ。



陶壺雜話

工學博士　佐藤功一

蛸壺やはかなきゆめを夏の月、名句だ。然し蛸壺其のものは鑑賞に値せぬ、つまらぬ形だ。古い農家には何時の頃のものか黃瀬戸やうの種壺をよく見掛けるが、よい形のものはない、色も惡い、お歯黑壺にはよいのがある、竪長の如何にも上品な姿だ、釉には伊羅保風のものと黃瀬戸風のものとある。殊に黃瀬戸風のものによいのがある。心を引かれるものは無名の陶工の虛心に作つた雜器に多い。仁淸の洗練はまた別だ、轆轤の精巧は他人の追從を許さぬ、確かに名作がある、同時にまた凡作も多い、色繪の茶壺の如きは總て不徹底のものだ、伊萬里や九谷の沈香壺の方が遙かに上位だ。

陶壺のよいものは支那に多い、就中、磁州窯の天目釉釘刻りの壺がよい。支那の商賈は此種のものを悉く宋瓷と呼ぶ。天目釉とは鐵を主成分とする黑釉で、古く支那から將來した其出所にちなんで名付けた日本名だ。釘刻りといふは器地即ち胚胎に此の釉藥を施して後、鐵片を以て其上を傷け削つて模樣を表はしたものだ。或る日本の陶師の話に、これは先づ胎土を低溫にて少しく燒飲め、釉を掛け釘刻りをして更に强く燒き上げるものだと。胎土に二種ある、一は赭色を呈し他は恰も蕎麥粉の如き淡灰色をなす。敢て赭胎を惡いとはいはぬが灰色胎の方が黑釉との對照がよい。黑の傍にあつては暖色は益々暖に表現させらるゝが故に赭胎は自ら上は付き易い。黑釉にも二種ある、即ち一は所謂枇杷實色に似て然も濃き紫黑を呈し落付きあるものと、他は眞黑にして滑澤あるものがこれだ。後者は釉際に赭色を浮ばし前者に比して稍劣れる感を與ふ。

ブラック・エンド・ホワイト、强くして然も上はつかず、滋味あつて然も癈頽的ならず、誠に色の對照の極致ともいふ可しだ。

第一圖に示せるは安田靫彦氏所藏の此種の壺だ。

黑宋瓷

刻花の壺
蕎麥粉のやうな淡い灰色の胎土と
對照して釉水の何といふよい黒さ
滋潤にして渾厚に
黒曜石のつやも及ばぬ
人間の作れる最も神韻な色



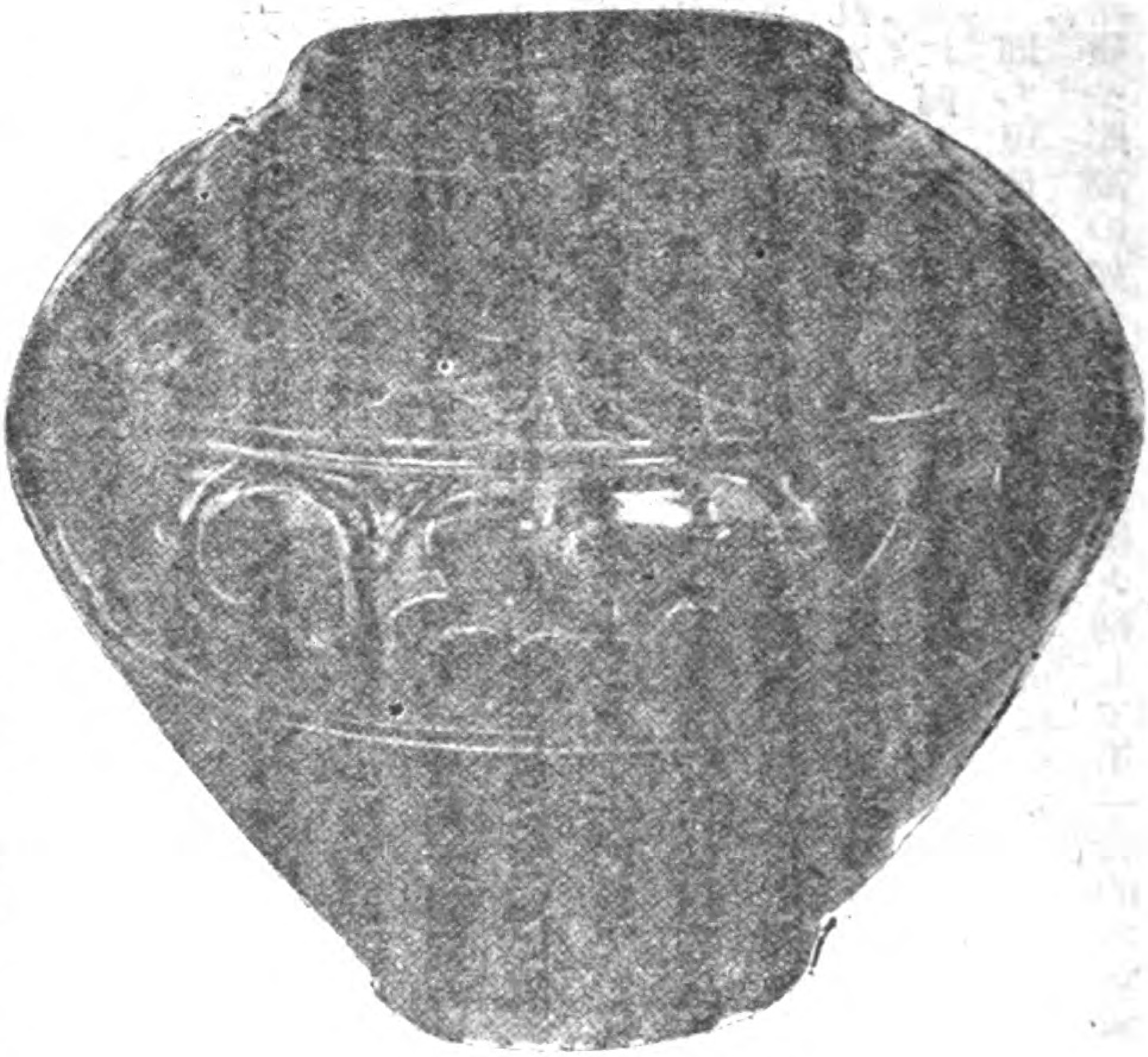
第一圖

引き斂まつた口作り
肩から胴へふつくりと
豊かにうつり行く曲率は
例へば大太鼓のばちのひとうち
渾然として天地の精を宿す
支那人のみ知る形の神秘
人間の作れる最も玄妙な姿

帶模様の
線雕のおゝやうな捲葉は
壺に水平な旋律を與へる
色と形と模様の合致
むくろは靜止しながらも
息づきながら何事をかつぶやき
何事をか物語る

斯んな事をいつて見たくなるほども此種の壺中で勝れたものだ。寧ろ今迄見たうちの總ての壺中での優秀だ。此種の壺は日用品の上等のもので官窯などのやうに故意に企てられた部分が少いから純眞でよいのだ。

第二圖に示したものは赭色の胎に滑澤の眞黑釉（釉際に赭色を生ずる）を施した釘刻の壺だ。胎と釉との對照の前者に比して劣れるは寫眞によつて明瞭だ。形も肩から胴に轉ずる曲率が



第二圖

急で少し鋭どすぎる。然しこれとても壺のうちではそんなに劣つたものではない。

兩者は孰れも帶と模樣との間の空所を刳取つてあるが、刳取りのなく單に線刻りのものもある、美しさに於て前者に劣るは無理のない事だ。火度の弱かつた爲めに釉色が充分に出ず光澤の惡いものは此種の壺の最も主要なる生命を失て居るわけで如何ともし難い。

是等黑釉刻花の壺は出土品もあるが多くは傳世品だ。永く支那にあつた友人S君の語るところに依れば、今日是等の壺は決して日用器として使用せられつゝあるものではなく、昔用ゐた品として大切に藏されてあるのだ。從て出土品と異て寧ろ各地に多く存すると。壺のうちで現代人の心に最もぴたりとあうのは恐らくは此の黑釉刻花のものだらう。それは一つは現代藝術の理想とする所の民衆的傾向にあるからだ。

＊　＊　＊　＊　＊

繪畫彫刻のやうな所謂「ビルドクンスト」は對象物たる自然なるものがあつて其れを描寫して作つた形だ。建築物や壺のやうな所謂「テヒニツシエクンスト」は反之眞乎に人間の頭腦から絞出した形だ。不純な拙劣なものも多いが其純眞なるものにあつては神これを作れりといつてもよい程圓滿具足の形を有するものがある。學問や職業に起因する特種な體驗から來るのかは知れぬが私に取つては前者より後者の方が意味深く感じられるのだ。自分では本來此種の藝術を好む事が自分の學問や職業を

撰ばしむるに至つたとは考へて居るが。

原人に近い狀態にあるものは別として、文化の初期の或階程にある人類に就て見ると、彼等の作物で最も藝術的價値を有するものは恐らく壺と編物だらう。これを考古學的に見ても石器時代の藝術品は獨り壺丈けといつてよい。勿論編物の如きは腐朽して遺物を止めぬからであらうが。

尤も今日考古學の語る所に依れば、壺の發生は磨製石器使用の新石器時代で、其以前に打製石器使用の舊石器時代あり。歐州の舊石器時代にありては藝術品としては角牙彫刻の見る可きものと洞窟の壁面に描かれたる動物畫の眞に驚嘆に價すべきものがある。不思議な事は「ビルドクンスト」に於てこれだけの發達をなし乍ら「テヒニツシエクンスト」には何等見る可き遺物がない。しかも是等の驚く可き藝術の進歩は歐洲の一部に限られた特種のもので、殊に是等の文化は或種の原因に依て其儘絕滅に歸し現世界文化とは殆ど連絡のないものといはれて居る。即ち現世界に於ける最初の藝術品は壺だ。

繪畫や彫刻の如きを純正美術と稱して第一義的の藝術とし、壺や織物の如きを第二義的のとした事は、文藝復興以後の事で、美術が貴族や藝術家なりとの自己意識を持つた藝術家達に依つて取扱はれて民衆と分離してからの事だ。近代文化のもとにありては斯かる差別は當然次第に取去らる可きものだ。

新石器時代に於て既に、壺には今日の一般藝術品と比較して遜色なきものがある。私の知れる限りに於ては獨逸地方の出土品に殊によいものがある。尤も銅器時代に至て壺の製作は各地に於て驚嘆す可き發達を見るが、日本には特に銅器時代と稱す可きものがない。所謂先史時代なる石器時代の壺は東北地方より出土する或種のものに心をひくものがある。勿論原史時代に及で陶壺は所謂齋瓮(いはひべ)として漸次に格段の進歩を見るに至る。

石器時代の陶器に付ては德川時代の文書に二三掲げられたるものはあるが、眞に其研究の始められたるは明治初年英人「モールス」氏以后の事だ。然し齋瓮の研究は德川時代には相當になされて居つた。文化十四年に錄された大槻磐水翁の齋瓮考證といふのがある、多くの挿繪を有する立派な書物だ。文中に「淡海木內重曉曲玉問答」といふのを引いて、

或問。此頃目利講(メキヽコウ)と號する會ありし中に弄石家にて玩ふ曲玉壺と云ふ物を出せる者あり。其來會中に茶道の宗匠これを見て其弟子に示していふ。是は行基壺といふ者にて行基菩薩始て陶器を製作す。此器は人骨を納め葬りたる器にて至て不淨なる物なり。見覺居るべしとなり。又骨董舖の一老爺いふに

は。是は渡り物なり。即ち島物と呼んで蠻夷より來る者にて形は一樣ならず種々異形あり。折々見かくるなりと云ふ。又傍に在りし總髮の人の同伴せし人に語るを聞けば。是は上代酒を入れて砂中に居る。天神地祇を祭りたる物なり。即ち萬葉集の歌の中にミワホリスヱと讀みたる品なり。實に千古の珍物なりと賞美せり。三人の說雲泥相違ふ事なり何れか是なるべきや云々。

とあるのを見ると當時の物識りの間に種々の議論があり、中には失笑を禁じ得ぬ事も多かつたらう。今日に於ては研究も進み說も一定したが、此の問答はうつして以て今日の支那陶器觀や波斯陶器觀の上に持て來る事が出來る。

太古陶壺の製作は、所謂手づくねで形を作り、地を円形に穿つて中に土器を置き、上に薪を積みて點火し、火度の充分なるに及んで薪火を去り土を以て覆ひ、冷ゆるを待つて取出したもので、出來損ねは比較的多かつたものに相違なく、斯くの如くして得られた陶壺は、我々が機械力と化學との應用に依つて容易に製作し得る今日の雜器を見るとは大なる相違を以て考へられたもので、喜びと愛の心とを以ていたはり乍ら大切に使用されたものに相違ない。

朝鮮のやうに製陶術が比較的早く發達し、家庭日用の雜器が悉くこれよりなれる所は別とし、日本のやうに陶製の食器すら全國に行き渡つたのが德川末期であつたやうな所では壺類の如きは日用のものと雖ども重視せられたものだ。

伊豆國東南の海岸に谷津といふ所がある、河津三郎祐泰の領地であつたそうだが、最近新道路の開鑿されるまでは一方は海他方は山を以て圍まれた不便な地であつた。村の一方に河津川といふが流れて居り、川の近くに栖足寺といふ寺がある。寺の寶物に河童（かつぱ）の甕といふがある。其甕の由來は、昔、寺の大門外の此川邊で村人が馬に水を使はせて居つた、馬が何に驚いてか急に跳ね上つた。見ると其尻尾に河童が取ついて居る、不思議の事に村人が集り來つて、捕へて殺そうとした。其所へ寺の住持が出て來て不憫なりと村人をなだめて、河童には以後此の川に居るな他處へ行けと云ひ聞かして放ちやつた。其夜寺の戶を叩くものがある、住持が出て見ると白い鬚を長くたれた上品な老人が立つて居た。そしていふには自分は今日助けられた河童だ、仰せに從て此の川を立去るつもりだ、去るに臨んで御禮のしるしに此甕を献じたく罷り出た、どうぞ納めくださるやうに、といふかと見ればもう姿は見えなかつた。その甕が今日まで大切に保存されてあるのだ。そしてこういふ因縁のある甕ゆえ、其口邊に耳を當てるといつも川の音が聞えると。今猶此地

に遊んで其實物を見たが、高さ一尺三寸、胴の太い口徑四寸の黒褐釉の古拙な壺だ。底に祖母懐と釘刻りがあり、其脇に……工門と同様に刻まれてあるが讀めなかつた。

祖母懐は尾張國東春日井郡にある、初代藤四郎が今から丁度七百年前、貞應二年に入宋して五年間天目山に居り、製陶術を習得して歸朝し、先づ此地の土を以て燒いたものだ。藤四郎歸朝後諸方で窯を開いたが成功しない、尾張の瀬戸に來て、老婆の懐に陶土を持てるものに出遇ひ、其の良土なるを見て土の産地に案内を乞ふて其所に窯を開いて初めて成功した、故に祖母懐といふのだといふ傳說がある。此傳說を以てしても、此時代に於てなほ製陶術が魔術的意味を持て居たかが知られるではないか。

柄足寺の壺は此の祖母懐燒だ。此壺の此寺に入つたのはいつの時代かは知らぬが、如何にこれが珍らしいものであつたかは河童の傳說（此の河童と馬との話は日本國に廣く行き渡て居るものである）と結付けられたのでもわかる。如何なる壺でも相當の大さあるものならば、口邊に耳を當つれば內部より一種の連續した騒音を聞き得る。これは單に耳では聞き能はぬやうな小雜音が壺の周邊に當て、周邊は一の振動版の如き作用をなし、音を擴大して此の不思儀な騒音を聞かせるのだ。これを河童の壺だからとて河の音にしたのは面白い。或は逆に此の音から河童を連想し壺を河童に結付けたのかも知れぬ。これを以て見ても此の壺が如何に神秘的の意味を以て珍藏せられたかゞ想像される。

＊　＊　＊　＊　＊

壺が貴重品視されて居つた事を知るには、そんなに古く遡らずともそんなに田舎を深し廻らずともよい。桃山時代の智識階級の間では、戰功に依て廣大なる領土を與ふる代りに珍らしい壺を與へる事が往々あつた。與えられる人もそんなに不滿足をもたなかつた。一寸見ると壺が今日の勳章のやうであるが大に異る、勳章はこれを胸につけて年功褒狀や感狀のやうなものを人に知らせるための職能を持つものだが、其等の壺は人をして愛藏せしめて茶を容れたり花をさしたりさせる職能を持つものだ。しかも其等の壺は南支那や呂宋あたりから輸入せられた雜品だつた。最も小さい壺なるあの茶入は南支那地方で古く山椒や胡椒などを容れた恰度日本の七味唐辛子入れのやうなものだつた。其れの形の良い釉の面白い所謂景色の整つたものを撰んで象牙の蓋を付け金襴の布に包んだりして喜んだものだ。また油壺が花入となつて珍重され、口の大きた手頃なものは水差しに、も少し大きなものは水屋甕に、口の小さい大きな壺は茶壺

になつた。こういふやうにして壺が喜ばれた。恐らくは是等の雜器から藝術眼に依て名器を選擇する事は科學者が科學上の發見の大なる歡びに似てまた自ら異るものがあつたに相違ない。世に無言の詩人といふがある。此の意味を擴張して無作の藝術家といふ、生れ乍らにして豊かな藝術心を持つては居るが境遇が製作の修養をなす機會を與へなかつた人を指すのだ。桃山朝の智識階級――彼等の智識の中心は茶儀だ――は孰れも戰功に依て其地位を占た連中だ。彼等の中には無作の藝術家の多かつた事だらう。彼等が如何に佳い壺の發見に依て其の藝術心を滿足せしめたか、彼等の此の行爲は製作と同じ價値を以て自ら考へた彼等の誇りであつたらう。

「君と添はふか五千石取らうか何の五千石君と添はふ」とい歌もある程だ。此の歌に付ては種々の議論もあらうが、此歌を見ても昔の武人とて、單に戰功や知行や鯱子張つた義理合など許りを考へて居たものでない事がわかる。きつと壺一つのために喜んで所領を投出す意氣を持つたものもあつた筈だ。

斯ういふ話を聞いた事がある。たぶん十九世紀時代の事だつた、佛蘭西にアルベル・グラチニーといふ高踏派の詩人があつた、二十七歳で死んだのだが、全く貧乏して餓死したのだ、所が彼の死んで横はつて居つた其枕頭には、黄金や寶石や象牙を以て立派に裝幀された何とかいふ小詩集が殘つてあつた。彼は此の詩集を愛する事甚だ切なるものがあつて餓死に瀕しても遂にこれを金に替ゆる事が出來なかつたのだ。今の世にグラチニーのやうにこんなに純な心を以て藝術を愛する人が何人あるだろう。壺を愛する同志の多くなるを喜ぶと同時に不純な心でこれが購入を企つる人の多くなるを悲しむものだ。

昨年のことだ、或る骨董店へ支那から荷がついて丁度荷解をして居る時、青年畫家の某氏が通り掛つてそれを見た。中から出たものは見事な三彩の壺だ。實に立派な今迄將來した事のないものだつた。價も從て高價だつた。此の壺に對して畫家の所有慾が強く動いた。然し餘りの高價に躊躇して逡巡決しなかつた。それで結局友人に相談す可く隣家の電話を借りた。折惡しく其所に最も打算に鋭い商人が居つた。聞くともなしに電話器に向てする某氏の言葉を聞いた。彼は自己にはそういふ物を見る眼も趣味もないのだが著名な此畫家のこんなに賞讃するものならば買て置いても損はないと感じた。そして畫家が骨董店と明日を約して歸つたあとで壺を買取つてしまつた。壺にして若し靈あらばどんなに悲しんだ事だらう。然し壺は或理由でまもなく別の畫の大家で壺の鑑賞家なる某氏の手に歸したといふ事だ。壺はきつと大喜びに喜んだ事だらう。

＊　＊　＊　＊　＊

茶人は壺を愛した、然し彼の壺を愛したのは單に壺のために壺を愛したのではない、必ず功利的の目的を有した、即ち、茶入にするとか、香煎入にするとか、振出し菓子器にするとか、水差しにするとか、水屋甕にするとか、茶壺にするとか必ず目的を考へたものだ。茶儀上に於ける何等の目的にも添はぬものは、如何に形がよくとも釉がよくとも捨てゝ顧みなかつた。こゝが吾々の壺を愛する所と違ふのだ。吾々のは敢て用途を否定するものではないが、單に鑑賞の對象物としてもまた、といふよりは寧ろこれを主要の條件として壺を愛するものだ。

吾々の今日愛する種類の支那壺が何故に最近に至るまで輸入せられなかつたかの理由はこれで明瞭だ。吾々の愛する壺は全く茶儀の用途に叶はなかつたものなのだ。

少し大形の壺は多くは呂宋あたりより輸入せられたものらしい。甫庵太閤記に、呂尊より渡る壺の事といふ條下に、

泉州堺津菜屋助右衛門と云し町人小球琉呂尊へ去年の夏相渡（文祿甲午）七月二十日歸朝せしが其比堺之代官石田杢助にて有し故奏者として唐の傘蠟燭千挺生きたる麝香二疋上奉り御禮申上即眞壺五十懸御目しかば事外御機嫌にて西之丸の廣間に並べつゝ千宗易などにも御相談有て上中下段々に代を付させられ札を押所望の面々たれ〳〵によらず執候へと被仰出なり依之望の人々西丸に祇候いたし代付にまかせ五六日之内に悉く取候て三つ殘りしを取て歸り侍らんと代官の杢助に菜屋申ければ秀吉公其旨聞召其代をつかはし取て置候へと被仰しかば金子請取奉りぬ助右衛門五六日之内に徳人と成にけり。

當時如何なる狀態に於て壺が輸入せられ人々の手に渡つたかゞ想像される。得たる壺を自邸に持歸り、蓋を作り口包みの金襴と打紐とを捜求め、茶壺に仕立てゝ室に飾り、近侍のものを集めて銘をつく可く首かしぐる武將の樣が彷彿するではないか。

呂宋の大壺は元來水を容るゝ壺とか聞いた。輕くて口の大さが頃合で口邊に紐をかける取手があつて、茶壺にするには最も適當したものだ。

＊　＊　＊　＊　＊

壺の形態と文樣に付ては、古代埃及・古代希臘・歐洲各地の石器銅器時代のものは既に考古學的或は民族學的の種々の研究行はれ、是等に關する著書も亦少くない。古代土器に付て形態の分類をなすに便宜ならしむる研究が大山柏氏に依つて大正十年十二月發行の人類學雑誌に長い論文として發表されて居る。これは土器を口・胴・底の三部分に別ち、各部に於て起り得可き幾

何學的形態を假定し、これに依て一々三部分の組合せを行ひ、得たるものを悉く表に掲げて分類し、實際上如何なる形の土器なりとも必ず此表中に顯はれざるものなきやうに表の番號を以て其形態に名けんとするものである。從てこの研究によれば如何なる形の壺と雖も直ちに何號表の何番といつて抽象的に形を指示する事が出來るわけである。此の如き研究の價値如何に付ては別に議論の存するものがあるが、今日の學界に於て眞摯な努力的のものとして敬意するものだ。

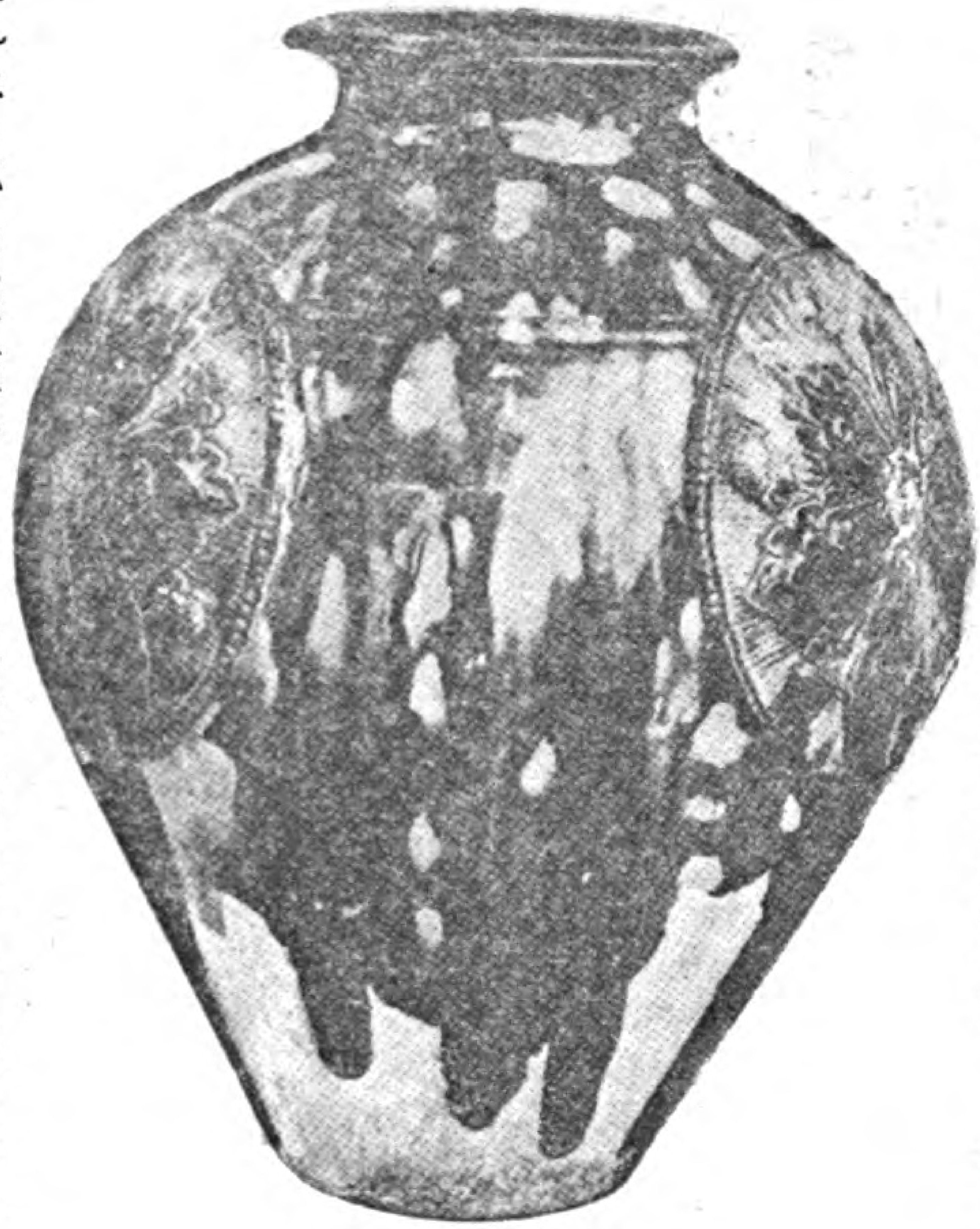
壺の如何なる形態が人をして快感を起さしむるやといふ美學上の問題に付ては、壺の各部の比例とか變化と統一と曲線の轉換に關する方則とかを論ずる形式美學的批判、流動物を入るる壺の實利的使用に對する役立ち能力と形との關係を論ずる機能主義的批判、壺の曲線を人體の曲線美に比較して論ずる象徵的批判等種々あるが、玆では是等の問題に觸れやうとは思はぬ。たゞ在來茶人の間に稱へられた方則に付て少しく述べて見やう。方則とは茶入に對する方則で、これは移して以て水差し其他の總ての壺に用ゐられたものである。

茶入に五ケ所の見所があり、其見所を具備するものを名器とする。然し如何なる名物茶入でも是等を悉く具備するものは少ない、四つもあれば所謂名物の部に入れらるのだ。五ケ所とは口・肩・胴・疊附・糸切をいふ。これは形と釉と兩方を意味するのだ。口の最も大切なのは申す迄もない。口邊の小疵は大醜を掩ひ易しで如何に全體の形も釉もよくつても、口が拙くては一見直に不快の感を喚起さしむるものである。兩手を以て膝に抱き上ぐる程度の壺に於ては殊に其の然る所謂を覺える。此種の大さの壺にあつては轆轤から取去る際に用ゐた糸切りのあとの存するものは少いから糸切といふ條項は問題としなくともよい。また疊附きも左程の事はないが此の部分が砥で磨られて奇麗になつて居るやうなのはいけない。然し概して此種の壺に於ては疊付と糸切とは考の外に置いてよい、即ち二箇所減ずるわけだ。その代り別に裾（脚といつた方がよいかも知れぬ）を一條件として入れたい。例へば第一圖に於て底に近く胎を露出して居る部分を裾といふのだ、これなどは裾のあがりも見事に行つて居るが、釉を施すとき此の部分を手にして倒に釉水の中に入れて引き上げるので、往々にして釉際に醜い指のあとや、美しい胎上に釉水を指でなすつたやうな汚點がつき易い、これが甚だ美觀を妨げる。裾は口に次いで大事な場所だ。肩と胴に付ては別に說明を要すまい。

＊　＊　＊　＊　＊

第三圖に示したものは裾の所が所謂流れ釉になつて居る。肩

の整つた胎の上へ程よく釉の流れたものは壺によいリズムを與へる。何等の躊躇なく延び々々と流れる事を要し、そして其の



第三圖

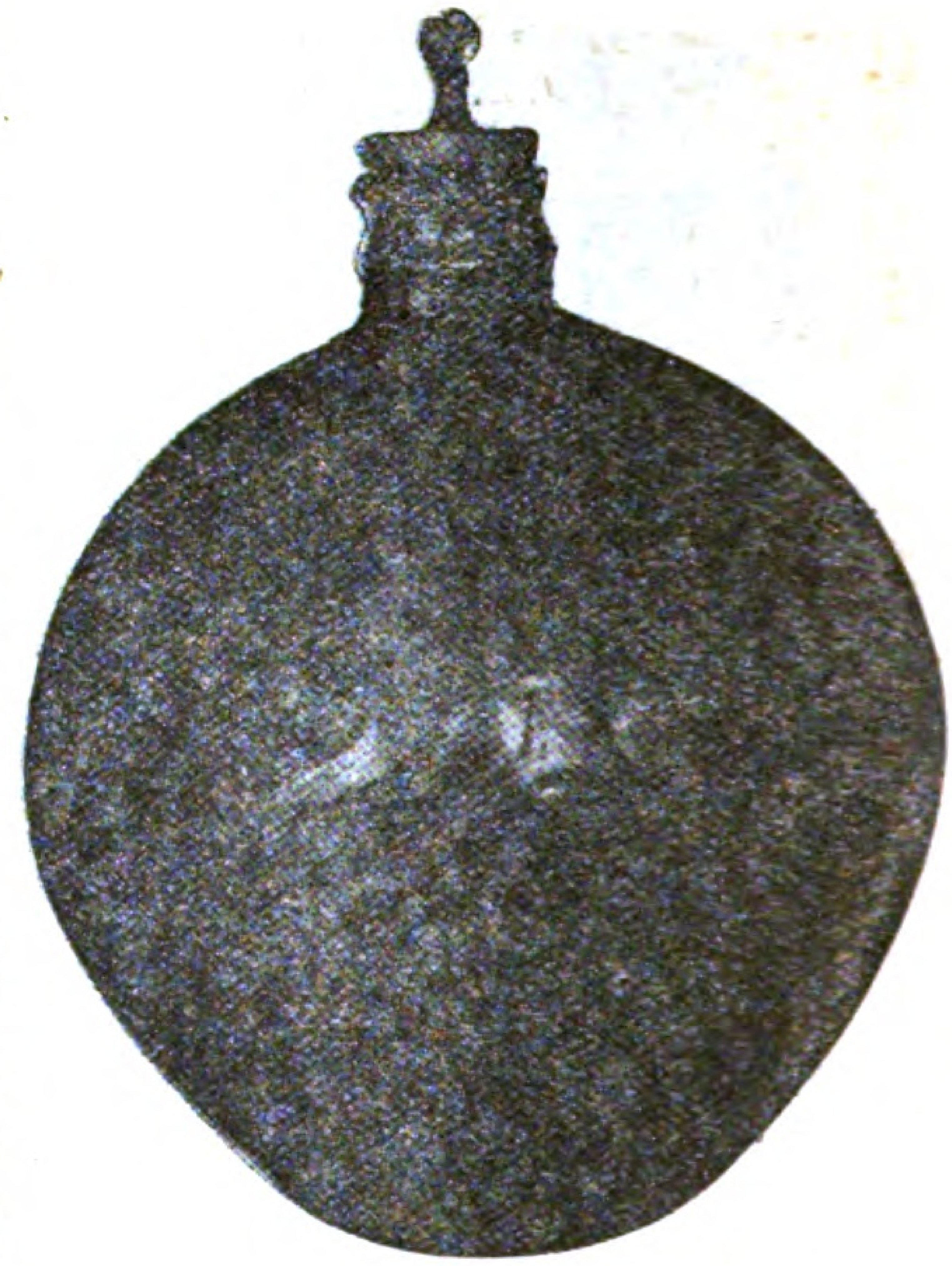
流れ止りがまた重要である。流れて底に至り出窯に際して此の部分を缺いて取出したものなどは最も拙なものだ。流れが重力の示す通りに鉛直に行かず、斜に走つたものなども又快感をそぐ。日本の拙い陶工などのやる刷毛を以て殊更に釉流れを作つたもの丶如きは應に唾棄す可しだ。

此の圖に示したものは三彩の壺だ。三彩とは青赤黃の流れ釉をかけた陶器をいふ。胎は概して白色で極めて微細粒の粘土を以て燒たものだ。商人は此種のものを總て唐窯とよび、胎の赤色なるを後期のものとしてこれを宋窯三彩とよぶ。圖に示した壺は明かに唐代の藝術たる事を示す美事な三彩壺だ。陶器研究家某氏はこれを官窯なりといつた これは下村觀山氏の所藏品だ。私には謎のやうでよく其の筋道がわからぬが、一度び利に敏き人の手に移りて悲しみ次に豊かな心の持主の手に歸して喜んだといふ壺自身がどうもこれらしい。三方に「メダリオン」がついて色も形もよい。唐から渡來の三彩壺は正倉院の御物の中にもあり、觀山氏は別に御物と同形式のものを所藏して居る。然し珍らしいのは寧ろ此の「メダリオン」附きの方だ、これと全く同じものを中澤彥吉氏が一つ、其の上部の龍頭壺の形式をなせるすばらしく見事なものを橫河民輔氏が所藏して居る。東京帝室博物館には三彩にて寶珠樣の文樣を表はせる逸品がある。是等は孰れも出土品で前述の黑瓷とは異り容易に得難いものに屬する。所謂宋窯三彩とよばれる赤胎のよい壺を山村耕花氏が珍藏して居る。

* * * * *

唐窯三彩の壺は洗練せられた立派さを持つて居る。然し私自身の觀照上からは寧ろ民衆藝術に近いものを好む。第四圖に示したものは黑瓷で、模樣を黑釉の上へ赭色であらはして居る。恐くは黑の釉水を施して其の上に他の藥品を以て模樣を描き、

のち窯に入れたものであらう。寫眞が甚だ拙ないから印刷が明瞭に行くや否やを疑ふ。



第四圖



第五圖

壺を單に壺其のものとして鑑賞するには寧ろ口の小さいものゝ方がよいやうに感じられる。これは壺の職能が流動物を藏するにあつて、口の小さいものゝ方が完全に此の目的を達し得らるゝといふ考が無意識に心を支配して居るからかも知れぬ。然し圖に示したものは形がそれほどのものでないからこれを標準として論ずるわけには行かぬ。

第五圖に示したものは全體の主色が白色を呈するものである



第六圖

が、これもまた寫眞の描いため其意味が出て居ぬのを遺憾とする。製作の「テクニック」は、先づ胎を淡褐色のものにて作り、上に白土を掛け、釘刻りをなして白土と胎色の對照に依つて模樣を表はし、上に透明な璃玻釉を掛けて燒上げるものだ。知人なる某陶師のいふには、白土を掛けて一度輕度の燒歛めを行ふて後釘刻をするのだらうと。どういふわけか日本に輸入せられた此の種の陶器は甚だ稀である。

第六圖は所謂繪高麗の壺だ、褐色の胎に白土を掛け、燒歛め



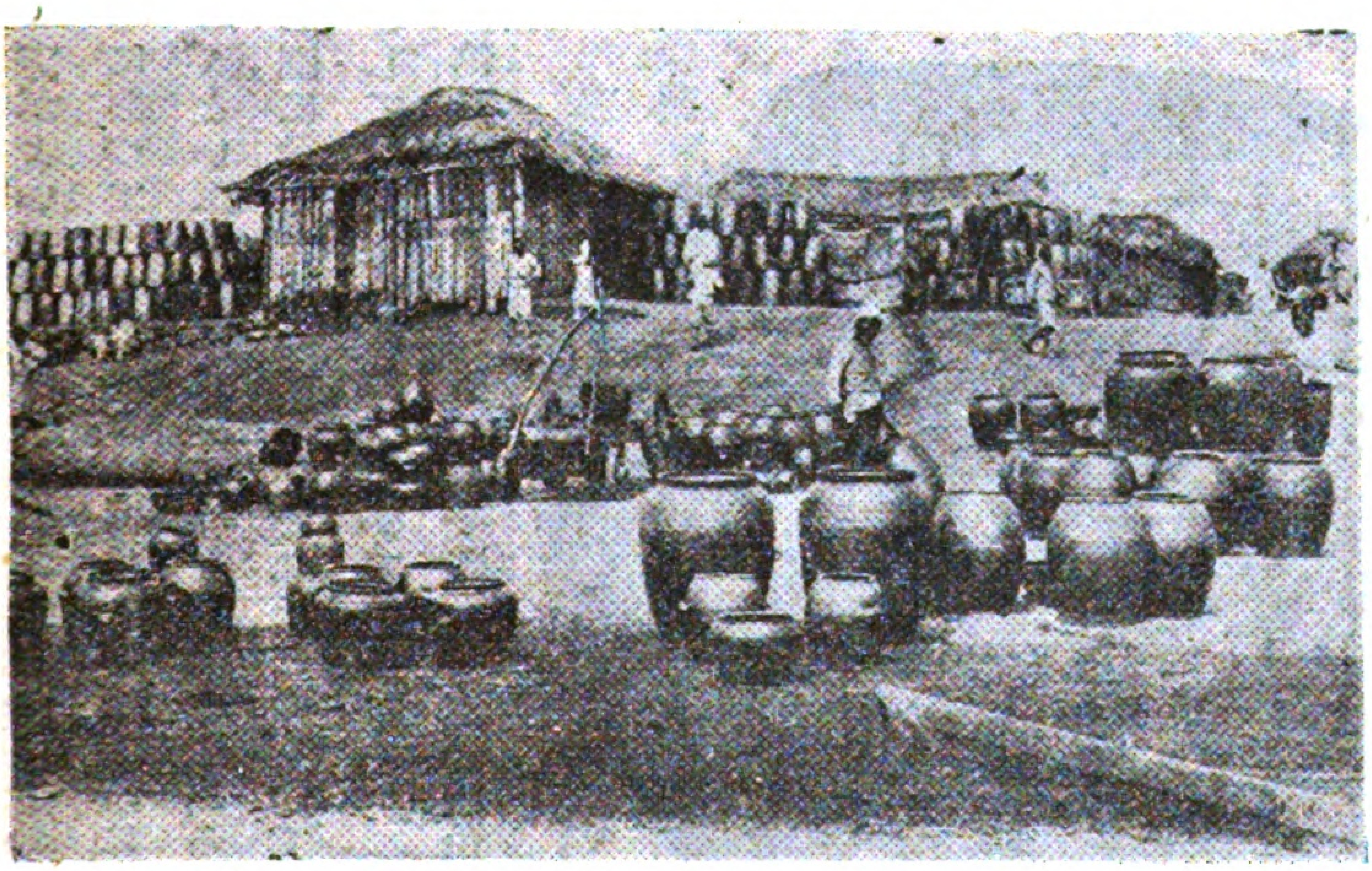
第七圖

をなし、其上へ黑釉にて模樣を描き、透明の玻璃釉を掛けて燒き上げたものだ。此種のものに黑釉の他に褐釉を用ゐて二色にて模樣を出したものもある。又第七圖の如き細線を以て畫いたものもある。

＊　＊　＊

支那の壺には形に於ても色に於てもまだ種々のものが澤山あるが、玆には私の好めるものだけを擧げたのだ。

日本では雜器としての壺は發達したかつた。壺の發達した國はうらやましい。私が朝鮮の好きな原因の一つはこゝにある。第八



第八圖

圖は朝鮮の壺屋の寫眞だ。第九圖は朝鮮で日常用ゐて居る雜器の壺に類するものを旅行のスケツチ帖より集めたものだ。

第九圖



琉球那覇の壺屋町に至れば壺許り作つて居り總ての容器は何でも壺から出來て居ると。小さなものは轆轤で作り（日本と同じく右廻し支那のは左廻し）大きなものは土を紐にしてこれを重ねて作つて行く、棺桶もまた壺形のもので、上等なものは四角の筒形にして蓋には龍の彫刻を施しこれに綠白の釉を施すと。

話は遂に桶棺迄來た。もう終りに近づいたと見てよい。されば玆にフイツジエラルド飜案のルバイヤットの次の一節を引いて此の話の局を結ばう。

Then to the Lip of this poor earthern Urn
　I lean'd, the Secret of my Life to lean:
　And Lip to Lip it murmur'd—"Will you live,
Drink!—for, once dead, you never shall return."

波斯の壺だから批難もなからうが、現今の時勢に於て日本にある壺がこんな事をいふと、きつと問題を起す事だらう。

（大正十一年八月十三日）

目で見て來たエポックメーキングな事件

生方敏郎

私もまだ昔話をする年でもないが、子供の時から見たり聞いたりした數多くの事件の記憶の中から、明治大正二代にかけて、可也世間の注意を惹いたエポックメーキングな出來事を、一つは自分の記憶の整理の爲めにもと、之から筆に任せて、ラクな心持で記してみようと思ふ。若し歴史を編む人の爲めに、少しでも役に立つところが有るならば、それこそ寔にこぼれ幸ひといふものだ。

稚い時の記憶から初めるから、月日の前後するものもあり、又エポックメーキングな大事件の他に、筆序でに市井の小事件でも世の評判と成つたものや、時とすると流行風俗等で目に付いたものなどまで脫線して書き込むかも分らない。故に、明治大正脫線史と呼ばれても著者は決して不滿ではない。たゞ成る可く私事に亙る事は避けたいと考へてゐるが、併し場合に依ると、私事も澤山出て來るかも知れぬが、私といふ人間が明治大正に生きてゐた人間である限りは、私の私事も亦た此時代に幾分の關係を持たぬ筈はないから、私事を書くは却つてまた明治大正の側面圖を供給することに成る場合があるかも知れぬ。讀者これを咎め玉ひそ。

一

私が物心づくやうに成つて、最初に出會つたエポックメーキングな事件は、憲法發布であつたらう。だが、漸くその春から小學一年へ入學す可き筈の子供であつた私が、何で憲法發布の意義を知らう。私はまだ小學校の一隅に置かれた幼稚園の生徒であつたのだから。

北國に近い私の國では、その日は（若し私の記憶に錯誤が無ければ）雪が降つた。そんなに澤山ではなかつたが、四五寸雪が降つた。道も屋根も眞白だつた。私の山國の小さい町でも、それ〴〵辻々に飾り物などして祝つた。私の家から一二丁上の繭市場の角に何か飾り物が出來たといふから、私は近所の友達

と見に行つた。醬油樽のやうなものを高く積み上げてあつた。たゞそれだけの物で、子供の目を驚かすやうな物は何も無かつた。いろ〳〵催しもあつたのだ相だけれど、降雪の爲めに妨げられてオジヤンに成つたものらしい。家ではこわ飯をふかしなどして祝つた。だが、たゞ之だけの物なら、毎年の夏祭の十分の一ほどの歡樂も無い。けれども、この日の事は、私の幼な心によく記憶されてゐる。それは何故かといふに、私の父はその憲法といふ事なぞに中々熱心であつたので、その日は東京へ行つてゐた。兄も一緒について行つたので、家は淋しかつた。父は私を愛してゐたから、さういふ時には私をも一緒に連れて上京する筈だつたが、私はそれより二年前六歲の春に一度父が東京見物に連れて行つたことがあるから、今度は兄を伴つたものだらうと思はれた。二三日すると父と兄は歸宅したが、その時、土產に小形の手品の本と玩具とを持つて來て與れた。玩具の方は何んな玩具だつたか全く忘れてしまつたが、手品の本は今でもよく覺えてゐる。火渡りの法といふのがある。それはポツタシユームに點火してその上を渡るのだ。ポツタシユームだから燃えても熱くない。又頭を叩いて噴水を起す法といふのもあつた。頭から水を噴き出してる繪が描いてあつた。私が憲法發布に對する唯一つの悅ばしい追憶は、いつも此手品の繪本である。

だが、この頃の大人はよほどこの憲法發布といふ事を話題にしてゐたらしく思はれる。私の町の人々なぞは、今よりも昔政治に熱中してゐた。私の地方は古くから自由黨の根據地であつた。今は引つゞき政友會の地盤に成つてゐる。私の伯父なぞよほど政治狂の方だつた。私は子供の時から伯父が屢ば大岡育造や星亨の名を語つたのを記憶してゐる。又片岡健吉だの嶋田三郎などいふ名前も度々聞いた。その他、地方の政治家の名前が父や父の友達から語られるのを度々聞いた。晩年色情狂のやうに成つて死んだB町のS屋の主人喜佐さんといふ有志が、或時父と政治問題を語つてゐた。喜佐さんはニコ〳〵しながら手に四頁ほどの印刷物を持つてゐた。そして

「剩へ、この「新沼田」といふものは、です」

と、その時、第一號が發行された地方政治雜誌「新沼田」の宣傳をしてゐたのだ。父に寄附金でも出させるつもりだつたのだらう。

私と兄とはこの「あまつさへ」といふ言葉を面白がつて、それから二人でよく「あまつさへ、この新沼田といふものは、です」といふ演說口調の口眞似をしたものだ。

私の子供らしい心に映つたところで見ると、憲法發布は左ま

で地方民の心に革新の刺戟を與へないでしまつた。皆な豫期を裏切られたといふ心持ちを持つたらしかつた。根本的に地方民の心を動かして、明治の新政府に服從し中央政府を信賴するやうに成つたのは、日清戰爭以後のことのやうに思はれる。

憲法發布前は勿論、その後兩三年位までも、私の地方民は明治政府に心から服從してはゐなかつた。他の地方のやうに、叛亂なぞを起した事は一度も無いが、決して政府を信賴してはゐなかつたらしく思はれる。素よりこれは私の尋常小學時代に於ける觀測なのだから、或はこの通りでないかも知れぬ。たゞ子供心にかう映じた事は事實だ。

私の地方民はその頃まだ明治新政府に反感を持つてゐた。そして西鄕隆盛に同情し、西鄕はまだ何處かの山の中に生きてゐる。と人々は屡ば語つてゐた。私達、子供は夕暮なぞ多勢よると、よくいろ〳〵の唄を唄つて囃し立てたものだが、その中には

いつちこ、たつちこ、高崎の、黄色いチヤツポの兵隊が、西鄕に追はれて、トツテチテー

と云ふ唄があつた。子供同志戰ごつてをするには、是非二タ組に分れるのだが、その分け方はちいりこ（東京のジヤンケン）できめ、

ちいりこさいよ。合こでさいよ。

と手を振り鋏や石や風呂敷（東京の兒童のいふ紙）の形を出して決める。そして勝つた方が源平の時なら源氏に成り、官軍と賊軍の時なら賊軍に成るのだ。私の地方の子供は平家と官軍とにされる事を、大變屈辱と考へてゐた。

子供の斯うした心持は、皆親の心を受け續いたものであらう。況して西南戰爭の最中には、地方民は皆西鄕方へ同情し、大聲ではいはれぬので指なぞで「レコは負けたか」とか「勝つたか」とか談し合つたものだ相だ。

日清戰爭に成るまでの私の周圍は、悉く反（アンチ）明治新政府の空氣に滿たされてゐた。

私は父母が年老ひてからの子なので、從つて父母は德川末期からのことをよく知つてゐて、私達に時々談した。井伊掃部守の殺された日の話や、武田耕雲齋の話、明治御一新の話なぞも聞いた。

母は武田耕雲齋なぞには可也敬意を表してゐた。耕雲齋の一隊が中仙道を通る時、高崎藩の若武者が數人斬り殺された話などもした。

「何處の藩でも、耕雲齋に手向へば家來を損するに極つてゐるから、耕雲齋が南を通ると云へば、北へ出て見張り北を通る

といへば南へ出て見張る筈なのに、高崎さまの家老は御階まつすぐに耕雲齋の來る道へ御家來衆を出して妨げたから、斬り殺されたのだ。氣の利かないことをしたものサ」などと言つた。

文部省教育を受けた我々と、徳川時代の遺物たる母やお向ふのお婆さんとは、考へ方にいろ〳〵違つたところもあつたが、御一新に對する考へ方なぞ、ずいぶん違つてゐた。母やお婆さんもきんりん様は此上なく尊いものと考へてゐた。だが公方さまは非常な横威者だと考へ、黑船が來てからだん〳〵公方さまの力が衰へた爲めに薩長の武士に天下を覆へされた、と考へてゐた。私が、中學校へ行くやうに成つてから、それを王政復古といふ意義に話しても、老人連は「さうかねえ」と云ふやうな腑に落ちぬといふ顏をしてゐた。老人連は御一新をたゞ薩長武士の企てた革命とのみ考へてゐた。尤も老人達は東照大權現と唱へて毎朝神棚に向ひ徳川家康を拜んでゐたのだ。恰度ロシヤのムジツクが廢帝ニコラスのアイノコを禮拜したやうに拜んだ。八幡大菩薩と天照皇大神豊受大神と並べて東照大權現の御符は、神棚に永く飾られてあつた。思へば徳川政府のプロパガンダもよく行き屆いたものである。

話はいつの間にやら大脱線をしてしまつた。前に御約束した以上に脫線してしまつた。さてこれから又本筋へ立歸つて書きつゞけよう。

文部大臣森有禮が殺されたのは憲法發布式の日であつたらうか。六月養蠶のたけの眠みからふなの眠みの頃に、手拭を吹き流しに冠つた中年増が十六七の小娘を連れて、手に薄い本を持ちクドキ（口說）といふ唄を流して歩いた。「一つとせーえ」から初まつて二十とせ三十とせ迄も唄がつゞく。エニシダの花が黃に咲いてゐる庭の方へ呼び入れて、蹴鞠手傳の男女がそれを聽いた。そのクドキは森大臣を暗殺した西野文太郎のことを歌つたものであつた。誠に憐れな節廻しで、今も尙ほ私の耳底に留つてゐるやうに思はれる。母は

「森有禮はステツキで伊勢の大神さまの帳を上げて中をのぞいた相だ。それで西野文太郎が殺す氣に成つたのだとさ。いくらヤソ宗だからつて、よくまあ、そんな勿體ねえ眞似が出來たものだ」

と語つた。後で聞けば、之は當時の保守派が森氏を誹らう爲めに作つた話だ相であるが、一般の人々はこの森氏の非禮を憤つてゐたから、西野文太郎の方に同情した。

明治二十年に私の町にも初めて小學校内に幼稚科が出來、私も第一回の幼稚園生徒としてそこへ入れられた。つまり今日の幼稚園と變りはなく、遊戲と唱歌と手工のやうなものを教へら

れた。これも森大臣のやつた施設だつたのだが、さういふ事に全く理解の無い地方民の間には、この幼稚園は甚だ評判が悪く、毎日學校へやつても字を一つ教へやしない。子守をしてくれるだけで、全く無駄つことだ」と云はれ、森氏の沒後間も無く廢せられた。

その年四月、私は小學に進んだ時に用ひた教科書が小學入門と云ふので全部假名ばかりであつた。第一課ハト第二課ハナ、トリ第三課キリ、カンナ第四課ナシ、クリ、ミカンといふやうな事で、丁度今日の教科書に近い。あれ以前の小學教科書は尋常一年の物でも今日の中學生には讀めない位むづかしかつた。兄や姉の用ひた教科書は大人の讀む本のやうに、四角な字が多かつた。開卷第一に「神は天地の主宰にして、人は萬物の靈なり」などとあつた。それが急に平易に成りハト、ハナ、トリとなつたので、之も地方民の間にずゐぶん評判が悪かつた。又、全く我々生徒も平易すぎて有りがたくなかつた。

けれども此教科書は永くつゞいて用ひられた。又森有禮の殘した教育的施設もそのまゝに傳へられ、數年後多少の變革はあつても大體の形式は、そのまゝに殘されたやうに見える。つまり、あの頃、小學教育に目鼻がついたと云へる。

だが、憲法發布以後の日本の社會は、一般に前の鹿鳴館時代の反動として、固守的に傾いた。そして、この保守的反動は非常に永く大正の初年までも續いた。そして、文化的に見れば、世界各國から後に取り殘される結果に成つたのだ。

この鹿鳴館時代こそ私達が搖籃に在つた頃だ。と云つたところで、いくら世間がハイカラに成つたとて、まだその頃田舎に搖籃が有つた譯ではなく、籐製幌掛の乳母車さへなく、相當の家の子供でもいざり膝五郎の乘るやうな箱車に乘せられて、守の女中や小僧にがら〳〵凸凹道を引き廻されたものだ。併し都の眞中では、歐化熱が極めて旺んで、近頃流行るダンスをやつてゐた。中江兆民が婦人は英語で日常の會話をす可しとか騎馬に乘る可しとか主唱したのも此頃だ。併し、一般民衆の中からはこの歐化熱には反對の叫びが擧つた。非難の聲も高かつたのだ。しかもダンスを大に奬勵したのは時の政府なのだから、今日と比較して見ると面白い。上流婦人の洋裝も流行した。

田舎では、まさか婦人が洋裝したりダンスしたりする迄には至らなかつたけれども、田舎紳士は競つて洋服を拵へた。私の叔父や父などもこしらへた。村長や學務員や町村會議員などを勤める者は、皆我れ後れじと洋服をこしらへた。切地の品質も、その頃のは仲々上等で價も仲々高かつたが、それにも拘らず洋服をこしらへた。女子も子供は洋裝した。男の子供が洋服

をこしらへたのは無論のことだ。女の子供は、髪をグル〳〵と頭の頂邊でとぐろを卷かせ、その上へ網を被せて短かい細いピンで止めた。網には小さい赤い玉の飾りが澤山着いてゐた。兄や姉は洋服を着靴をはいて學校へ通つた。私も一着洋服をこしらへて貰つた。兄や姉の通ふ小學校へ私も一度か二度遊びに連れて行つてもらつた事があるが、洋服を着た子供は幾人もゐた。小學校では英語を教へてゐた。兄の本箱にはウイルソンリーダーが這入つてゐたのを、私は自分が中學へ通ふ時分に發見した。兄――その頃八九歳位の兄は「イツト、イズ、ホツト、ツーデー」などいふ會話を姉と交換してゐた。

私の町ではキリスト教も榮えた。私の親族は大部分バプテズマを受けた。町の青年の多くが教會へ出入した。店の番頭までが讃美歌を唄ひ英語を喋つたりした。

片田舍の町ですら此通りだつた。都の歐化熱の度合や推して知るべしである。

然るに、憲法發布以後、即ち私が小學校へ登る頃には、その反動が急激に極めて著しく田舍までやつて來た。束髮の女子を見れば馬糞を頭へ載せてゐると嘲弄した。女子の洋裝は影さへ見せず、大人は洋服を着る者もあつたが、子供の洋服は全く廢れ、私は洋服を着て二三度登校したが、誰一人他に洋服の子供が無いので、極りがわるく、母が何とすゝめても私は洋服を着なく成つた。教科書だけは文部省のハト、ハナ、トリ式の新しいところを用ひたが、英語を教へることは廢された。

その後、數年、日清戰役後頃には、田舍町には英語の分る人は一人も無く、光照寺といふ眞宗の寺の住職一人が英學者の名を此田舍に恣まにした。

東京の政界は憲法發布に依つて、何の樣に時代を劃されたか、又國會開設に依り何の樣な波瀾を起されたか知らぬが、田舍地方の人民の生活も思想も、憲法發布と國會開設から、何の變化も受けず、一と足も前へは進まなかつた「憲法と國會さへ得られたら」と、大きな期待をしただけそれだけ地方は狐につまゝれた樣なものであつた。地方民の政治熱は、日本が代議政體の國に成つてから、頓に醒めてしまつた。一寸考へると、誠に不思議な現象と云ふべし。

此春、明治學院の校友會が芝の三緑亭に開かれた時、その席上で先輩の一人が在學當時の追憶談の中に、その頃寄宿舍で流行つたといふ

國會開けて、學校が燒けて
マグネヤ　虎列良で死ねばよい

といふ唄のことを語られた。但しマグネヤとは極めて嚴格な

寄宿の舎監の名だ。

何にせよ國會の呼び聲は全國に高かつた。何ぞ知らん、それが今日のやうな有名無實な衆議院に於ける茶番狂言の店開きであらうとは！

學生までも、國會開設までは政治熱を持つてゐたが、それも國會が出來た頃から次第に冷却して、大正七年頃普選の問題が初まるまで全く涸渇してゐた。

けれど憲法發布も國會開設も、今にして思へば、矢張兄の東京土産の素人手品の小綺本に過ぎなかつた。日本の上も下も、素人手品の綺本を貰つたのだ。嬉しかつたらう。併し、それつ切りだ。

國會開設の機運を進めた民間の運動も、決して日本國民全體の運動ではなかつた。それは薩長政府に擯斥たる不平士族と、大隈板垣を初め廟堂を追はれた失脚政治家等が、ブルジョア階級――富裕なる商人と地方の豪農中の有志家を煽動したる運動に過ぎなかつた。不平士族と失脚政治家等は、幕末時代から擡頭し來つたブルジョア階級と結んで、薩長氏に挑戰したのだつた。之は斷じて一般民の爲めの人民の運動ではなかつたのだ、聖書に『誰か荊棘より葡萄を採り蒺藜より無花果をとることをせん。凡て善樹は善果を結び惡樹は惡果を結べり、この故に其果に依りて之を知る可し』と有るが、今日の議會が如何に惡果であるかを視るならば、當年の民選議院運動の、又如何に惡樹であつたかも、略想像し得られるであらう。自由黨の首領板垣退助氏が岐阜に於ける一幕も、必竟鳴物入りの手品興行に過ぎず、あんな事が無かつたとても、日本國民は今日の程度の自由と幸福とを享樂し、政黨内閣以上の善政を敷かれてゐた事であらう。品川彌二郎が内務大臣の時過激なクーデターを行つて議會を全然骨抜きにしたと云はれ、又議長河野磐洲の痛快淋漓と謳はれし決議文の朗讀も必竟するに軍閥への盲目的忠勤に過ぎぬものであつて、議會は終始一貫飾り物か玩具の大砲に他ならなかつたけれども、バカにする勿れ、この間にブルジョア階級は議會をいゝ踏臺にしてその勢力を伸長し、飽く無きの慾望を飽かせんとして明中暗中蠢動もし飛躍もした。そして今日の黄金萬能政治の時代を演出するに到つた。國利民福を表看板にして客を呼んだ民選座は、終ひまでブルジョア階級の私腹を肥やす手品のみ演じつづけて來た

二

私が數へ年十三歲の夏から翌年に亘り日清戰爭があつた。

明治の外交史を繙けば、我國と淸國との戰は偶然のことでな

く、來る可くして來た凶變であつたのだけれど、政府の事情も何も知らぬ地方民は、だん〲後に成つて悉しい話を新聞で讀むまでは、何うしてこの戰爭が起つたかは、容易に腑に落ちなかつたであらう。私達子供は學校の先生からいろ〲聞かされてからでも、まだこの戰の初まりはよく分らなかつた。

何故かと云へば、私達はこの戰の初まる其日まで支那人を惡い國民とは思つてゐなかつたし、まして支那に對する憎惡といふものを少しも我々の心の中に抱いてはゐなかつたのだから。

私の家には、父の愛する六枚双の屛風が二つあつた。それには冠を被り鬚の長い着物を着た背の高い品のいゝ人、數人の繪が描かれてゐつた。それには可愛らしい子供も多勢ゐて組の子なぞを弄んでゐるのだ。母に訊くとこれは唐人と唐子の遊戯の圖だ、といふのだ。この唐人と云ひ唐子と云ひ、丼も私の田舎でなんか何所を何う探しても見出すことの出來ない、立派な上品なものである。これが支那人だといふのだ。

家には綵色の小皿が數枚有つた。庚申待の時の膳にはそれを付けたが、子供の目で見てさへもきは立つて美しく見えた。父の言ふところに依ると、これは南京皿だといふのだ。何うも支那でなくては恁うい ふ良い品は出來ない。墨でも硯でも、何うも彼地の物でなくつては、と書の好きな父は言ひ〲した。

私は父から毎夜漢文を教へられた。九歳の歳から十一の冬までに大學と中庸とを上げて論語へ進んだ。その時、父は死んだ。孟子の話も孟母三遷の話も、父母からも聞き先生からも聞いてゐた。孫叔敖が兩頭の蛇を殺した話は姉の用ひた讀本にあり、宿瘤といふ烈女の話は私の教はつた讀本にあつて、まだ記憶に新らしい。それが皆支那の人々だ。

學校で毎日教はる文字も支那の文字だ。それから三十年も經過した今日の樣に西洋の文明が澤山這入つて來てゐないその頃の日本の文明の九分九厘は、出來をたづねると皆支那から渡來したものだ。

夏祭には各町から立派な山車が引き出されたが、その高い二の勾欄の上の岩の上に置かれる大きい人形の多くは、支那の英雄だつた。現に去年の夏の町内の人形は白蛇を斬るところの漢の高祖で、仲の惡い下の町の人形は楚の項羽だつた。その故か、夏の二日目に町内の若い衆と下の町の若い衆と大喧嘩をした。他の町には髯の長い關羽の人形を引き出したところもあつた。祭の日に囃子方をつとめる町内の子供達の着るちりめんの肉襦袢にも、九紋龍史進や花和尙魯知深やら青黑い怕い顏の燕人張飛やらが描かれてあつた。

私等子供の頭に、日清戰爭以前に映じた支那は、實にこの位立派な、ロマンチックな、それしてヒロイックなものであつた。

その時まで、私達が見た物聞いた物で、支那に敵意を持つか支那を輕んじたものは、唯の一つも無く、支那は東洋の一大帝國として見られてゐた。一つだけ私が見た物の中で、支那と日本の敵對心を現はしたものといへば、和藤内の紅流しいふ幕があつた。いとよし座と呼ぶ町内の芝居小屋へ東京の役者（澤村納子?）が來て演じた。又三國妖婦傳の中の吉備大臣が暦書を得る爲めに唐の揚國忠?と圍碁を爭つて勝つ件、及び耶馬臺の詩を讀ませられる幕を見た。役者は忘れた。田舍廻りの役者であつたらう。併し吉備大臣は成功して支那人を驚かせる筋に成つてはゐるが、それは自分一個の實力ではなく、安倍の仲麿の亡靈が援助してゐるのだ。斯ういふ芝居を人々が滿足して見てゐたところから考へても、日本人は當時支那人以上とは誰しも自負してはゐなかつた。たゞその以下でさへなければよい、と考へてゐたに違ひない。

明治廿七年の春、私はその時高等二年生（今の尋常六年）に成つたばかりの時であつた。長顏の鼻の傍にほくろの一つ有る先生から、教室で目下東學黨といふ賊徒が朝鮮に蜂起し勢ひ頗る猖獗であるといふ話を聞かされた。しばらくすると、大鳥公使（圭助）が支那の朝鮮公使袁世凱と京城に於いて談判中だとの話も先生から聞いた。

さうしてゐる中に、夏の初めの養蠶休みも果てて、又學校へ行き、もうぢき更に暑中休みが初まらうといふ頃、風雲俄に急にして、お向ふの小父さんが夕方澁團扇でかたびらの袖をバサ〳〵煽ぎ乍ら、丁度その時刻に着いた東京新聞を見て

「この分ぢや、いよ〳〵戰に成るかな」

と云つた、その翌々日には、豊島沖で、日本の軍艦がいきなり敵の軍艦二艘を沈沒させてしまつた。陸では成歡に牙山にドカン〳〵擊ちつくらが初つた。その頃の唱歌に

鷄の林に風立ちて　行來の舟の足早し
吉野浪速秋津洲　過ぐる牙山の道すがら
七月二十有五日　曉深く立つ霧の
仄に見ゆる敵艦は　名に負ふ西遠甲乙號
打出す無禮の彈丸に　怒るは人と神のみか
浪さへ荒ぶる豊島海　我軍いかでかためらはん

とあるところを見ると、之は七月二十五日の出來事で、我軍の大捷に歸した。この時、先づ敵に發砲したものは、東郷大佐（後の平八郎大將）であつた相だが、何うしたものか、東郷さ

んは日清戰爭の時代には、左まで人氣役者ではなかつた。

海軍でこの戰に尤も人氣のあつたのは、時の海軍中將樺山さんで、又伊東祐亨（海軍少將？）氏は黄海に鎭遠を沈め定遠を捕獲し北洋艦隊司令長官丁汝昌を降參させたので、その人望は實にすばらしかつた。私の仲よし帳の筆頭第一に宮澤範治といふ少年の名が記されてあるが、その範ちやんはもう熱心な樺山さん崇拜で、如何なる時も――たとへば戰ごつこをして勝つた時でも、又は幻燈會の終つて散會する時でも、常に萬歲を唱へる場合には、天皇陛下萬歲、大日本帝國萬歲、陸海軍萬歲に次いで樺宮君萬歲を唱へることを忘れなかつた。樺宮君とは樺山中將と宮澤自身のイニシアルを合併したものであることは勿論だ。黄海々戰後の伊東少將は日露の時の東郷大將といふ格で樺山中將以上の人氣者と成つた。

何人も運がある。幾つ傑作を出しても永く評判されずにゐる人もあれば、唯一つ中位の作で大評判を取る文人もある。その樣に軍人は多く戰死したけれども、矢張花やかな場所で花やかな時に死ぬ者は、世にその名を喧傳され同情が集る。日清戰爭に於ける名譽の戰死の魁は、牙山に於ける松崎大尉といふ人であつた。それに次いでは安城の渡しで斃れた喇叭卒白神源次郞であつたらう。松崎大尉と白神源次郞との名は新聞にも雜誌にも繪草紙にも芝居にも、あらゆる事の中に織り込まれた。そしてこれは平壤城の陷るまでその名を專らにした。

平壤は難攻不落と云ふ評判であつた。イギリスが支那に精銳な武器を貸すといふ噂だつた。海の方でもイギリスの軍艦が探照燈を照らして、日本の水雷艇の活動を妨げるといふ評判だつた。平壤にはイギリスから持つて來た大きな大砲が据ゑ付けてあるから、日本軍は仲々之を陷せまいといふ話だつた。ところが、その年の八月幾日かに、我軍は一蹴して平壤を屠つてしまつたので、寧ろあつけない位だつたが、その時の國民の悅びは全く有頂天といふ言葉に相當してゐた。私の地方の町では、まだその頃電話は無くわづかに郵便局と警察署とへ電信の線が傳はつてゐるので、捷報は新聞より先きに先づ警察へ來た。警察ではそれを門前の揭示板へ書き出すので、私達子供は一日の中に何度も警察の門前まで見に行つた。地圖を擴げて見れば日本よりも三十倍も大きく、人口は我が三千餘萬といふに對して二億に餘ると云はれてゐる大帝國で、李鴻章といふ大政治家が采配を振つてゐる支那、それと戰ふといふのだから、そして初めての外國戰爭であり、向ふにはイギリスが尻押をしてゐるといふのだから、國民の興奮は非常なものだつた。大人も子供も老人も、女も、明けても暮れても戰爭のことばかり談し合つ

た。町内のバカ者、天保錢といふ名で通るやうな男でさへも、マジメな顔で戰爭の話をした。私は母に言ひ付けられて、一日に何度も警察前の掲示板を見に行つたのだ。そして見て來る毎に捷利なのだから、實に嬉しくつて堪らなかつた。だが、この平壤の陷落した捷報を得た時くらゐ人々の悅んだ時は無からう。仕事をしてゐた男は仕事を止めて悅んだ。掃除してゐた女は箒を投げ出して悅んだ。子供は絕叫した。女や老人は涙をこぼした。家の店に自らドクトル街合博士と呼んでゐた年頃二十七八の通ひ番頭がゐたが、彼は捷報を聞くと狂氣のやうに家を飛び出して、何處を何う步いてゐたのやら、暫く家へ歸らなかつた。

平壤の戰ひの人氣者の兵卒は原田重吉だつた。彼は牡丹臺に先登して樓門を乘り越えたのだ。將校では大島大迫立見の三少將と佐藤鬼大佐だつた。この人々の寫眞は何處にも見られた。博文館からは、今度の戰爭の爲めに新たに日清戰爭實記といふのが出て、詳細の戰爭記事や寫眞が載せてあつた。だが、この時分、戰爭を書いたものの中で、私は「平壤包圍攻擊」といふ本が尤も面白いと思つた。上下二册の可也厚みのある本だつたが、それこそ息もつかせず讀ませられた。松崎大尉や白神源次郞は日露戰爭でいへば、陸軍と海軍の差こそあれ、廣瀨中佐と杉野兵曹長といふところで、大島立見大迫佐藤の諸將は日露の黑木乃木兒玉の諸將のやうな大人氣者だつた。若し後に日露の大戰を迎へなかつたならば、日本國民はもつと永くそれら諸將の名を記憶し、その功蹟を喧傳したであらうに、後に來つた大役の爲めに健忘性の國民は凡て日清戰役の殊勳者のことは綺麗に忘れてしまつた。これだもの況して廢兵の憐れな身の上なぞ、盡く忘れ果てゝ鼻汁(はな)もひつかけない筈である。

平壤の陷落を以て戰は八分通りすんだやうな氣がした。それ迄は、日本は勝つか亡びるか、國の獨立を賭けての勝負のやうに思はれたが、平壤から先きは、實際戰へば捷ち攻むれば取り、捷報櫛の齒を引く如く、義州錦州鳳凰城牛莊旅順威海衞といふやうに、敵の城は將棋倒しにバタ／＼と倒れて行つた。

戰爭の初めに持つたやうな不安の念が人々からとれると共に勝に乘じて益々勇む心と、敵を輕蔑する心が、誰の胸にも湧いて來た。

戰爭が初まると間も無く、繪にも唄にも支那人に對する憎惡が反映して來た。私が學校で敎へられた最初の日清戰爭の唄は

　討や膺せや淸國を、淸は皇國(みくに)の仇なるぞ、東洋平和の仇なるぞ、討ちて正しき國とせよ。

といふので、又、俗謠には滅茶メチヤ節「支那の李鴻章はよつ

ほどバカな奴ウ」といふのが大流行だつた。同じ節で「日本の大鳥公使はよつぽど豪いもの」といふのもあつた。何とやらしてメツチヤ滅茶、オヤ、スチヤラカチヤンのう、チヤカラカチヤンといふのだが、一度もおさらひをせずに三十年を經過したから、空では一寸文句が出て來ない。

又、俗謠に踊りの影まで付けて流行したのは

日清談判破壞せば、品川乘り出すあづま艦、つゞいて八重山浪速かん、(中略)西郷死するも彼が爲め、大久保殺すも彼奴が爲め、怨み重なるチヤン〳〵坊主

といふのだ。

そして實際、この戰爭の初めから、大西郷に對する公然の同情が高まり、やがて上野に銅像迄も造られるやうに成つた。私等尋常科の時分、先生から敎へられた「我は官軍、我敵は天地容れざる朝敵ぞ、之に從ふ强者は、古今無雙の英雄で」といふやうな大久保政府のプロパガンダは、この戰爭を一期として、全く絕滅してしまつた。そして、こんどの戰爭を西郷大久保兩人の追弔合戰としてやらうといふのだ。恁くて西郷贔屓の人民と大久保の乾兒たる伊藤系統の官僚とは、玆に握手して共同の敵に當らうといふ趣向だ。これは藝者などの唄つた俗謠的軍歌だけれども、この意味で國民に敵愾心を鼓舞したことは少くなからう。又、いまだ薩長氏の新政府にまつろはなかつた東北の民草を統一するには、この戰爭ほど好機會は無く、又この位效果の擧つたものは無からう。

俗謠では、さま〴〵に罵つたけれども、初めの中、內心では誰しも支那を恐れてゐたのだ。ところが皇軍の向ふところ敵なく、實に破竹の勢と成つたから、俗謠も繪も新聞雜誌も芝居も、支那人嘲弄嘲笑の趣向で、人々を笑はせるものが多かつた。

この頃から三枚續きの美しい錦繪と成つて、戰爭の光景が次ぎ〳〵に私達の前に展開して來た。それで見ると、日本軍は勇ましく突喊してゐる。一人も敵に背ろを見せるものはない。支那兵は皆逃げてゐる。後ろを向き乍ら逃げるもあり、豚尾を日本軍に摑まれて逃げるにも逃げられず、掌を合せて拜んでゐるもある。服裝も私が家の座敷の屛風で見た唐人のやうに上品でもなければ、和藤內の芝居で見た支那兵のやうに勇ましくもない、又顏付も夏祭の山車人形の張飛や關羽や項羽のやうに、又は肉襦袢の九紋龍史進のやうな豪傑らしいのは、一人も見えない。何れも袖の長い鈍間相な服を着、その服の腹部には圓が描かれ中に「聚」とか「左」とかいふ字が書いてあり、服は大きく重た相で、おまけに片足は逃げる拍子に脱げてしまつてるのも有る、日本の地雷火に罹けられた支那兵は多勢高い空中に大

口を擴げて仰向きにはね上げられて描いてある。

又戰時中、芝居小屋では戰爭の際物を演じて客を呼んだ。以前に田舍でやる芝居は千本櫻とか安達原とか太閤記とか、大低相場が極つてゐたのだ。上野の戰爭で彰義隊の天野八郎討死の場なぞ壯士芝居が一二度かゝつた事は有るが、日清戰爭芝居ほど面白くはなかつた。筋も何も無い物で、たゞ多勢の支那兵と少數の日本兵との戰ひで、必ず支那兵が負け、あやまつたり泣いたり

「日本人たいへん〳〵强いあります」

といふやうな事を言つて、終ひは日本兵の註文に應じ樣々の藝をしたり滑稽な唄を唄つて、見物人を哄笑させる、それは〳〵餘裕綽々たる芝居であつた。下方の彈く三味線もとぼけたものだつた。

夏祭に下（東京前橋等すべて川しもの開化した地方を指す言葉）の方から來た射的の的は、支那兵だつた。それを狙擊して倒せばサンライスやピンヘット等が取れるのだ。

又、年末賣出しの景品に支那人の人形の首を進呈した商店もあつた。人形屋でも首を賣つてゐた。丁度豚尾が附いてゐるので吊して步くに便利だつた。

何を見ても、軍國の物だつた。子供の持つ名古屋扇の繪は、武者繪と極つてゐたのに、それはすつかり日清戰爭の繪に變つた。繪本も義經記や曾我兄弟や加藤淸正一代記ではなく成り、日淸戰爭物に成り、和綴が洋綴に變つた。

繪さがし、といふ物が流行つた。

博文館の幼年雜誌は每號一頁づゝ「螢狩」とか「潮干」とか「櫻」とか從來新體詩が乘つてゐたのが、軍歌と成り、かの「渡るにやすき安城の名は徒のものなるか」といふラッパ卒の歌や、「煙も見えず雲も無く」といふ黃海の歌、又は「大同江は廣くとも」といふ平壤の歌なぞ譜を添へて載せた。作者は佐々木信綱さんと記憶する。越えて二十八年の正月から改題して少年世界と成り、表紙の繪も陸海の軍旗と海軍帽を冠つた少年の繪であつた。巖谷小波さんのお伽話も、戰爭を中て込んだ作が多かつた。

正月の遊びに行軍將棋といふものが流行つた。

このやうに國民は櫛の齒を引く捷報に有頂天に成つたけれども、まだ海軍に就いては安心しなかつた。丁汝昌の統率する北洋艦隊といふものは、日本の海軍力より遙かに優勢だと認められてゐたからだ。日本の最大戰鬪艦松島は當時六千噸くらゐのもので、之を今年廢艦にした陸奥に比べると十分一の力にも足らない。そして敵の定遠や鎭遠はズット大艦だつた。

前橋から果して軍國の爲めの寄附金募集のプロパガンダが私の地方の町へも廻つて來た。義勇艦隊の爲めか赤十字の爲めか軍事公債募集の爲めか知らないが、とにかくやつて來た。月日は忘れた。或晩、水下の機械（製糸工場）の二階で幻燈會がある。唯見せる。といふ事で、町内の人々、子供も女も誘ひ合せて見に行つた。

廣い製糸工場の二階は、はや蟻の這ひ出る隙間も無いほど大勢詰めかけてゐた。室は眞暗だつた。前に白く丸い影が映し出されてゐた。幻燈機械の整理に可也手間取つた。汗は出るし、板敷の上なので足も痛かつた。押すなと云つて怒るもの、黄色い聲を出す女、くす／＼笑ふ者。

「しツ。しツ」

と制する聲がした。

やがて、二重橋の繪が寫し出された。人々は狂喜して萬歳を叫んだ。

次のはうまく映らない。又機械を整理するのに手間取つた。そして赤十字の看護婦が負傷兵を世話してゐる圖が現はれた。戰爭や軍艦の圖が次ぎ／＼に現はれた。

說明の辯士が實に巧かつた。その場の空氣にはまつた事を言つて、人々を感激させた。圖の說明を一通りしてから「諸君、今日は如何なる時である」と切り出した。その中で、今でも「今日は月琴をピコツかせ、尺八をプウツかせる時ではない」と云つた片言が今尙ほ最も私の記憶に殘つてゐる。時々滑稽を交へて、慷慨悲憤した。兎に角、海軍の方は人々が可也心配した。神社でも時々軍捷の祈りをした。

ところが、意外にも、黄海の一戰は我軍の勝利と成り、定遠は沈み、總司令官、丁汝昌は自殺して投降したので、もう全く勝敗は決した。これからは北京へ押し寄せて城下の盟をしろ、といふ勢ひに成つた。

だから國民から多大の望をかけられてゐた山路獨眼龍少將や大寺猫少將が討死したころは、國民は最早、いゝ氣持に成つてゐたので、恁うした犧牲者にも眞面目に淚を濺ぎ國家の損失を深く悲しむといふ色はなかつた。威海衛の陷る頃は、北京まで押せ／＼といふ彌次馬氣分が横溢してゐた。

城下の盟。それは普佛戰爭のお手本通りに行くつもりだつたのだ。モルトケ將軍がパリを繞んだやうに、野津大將大山大將は北京をかこみ、ビスマルク氣取りで伊藤博文が乘り込むものと、人々は皆考へてゐたらしかつた。

が、そこ迄行かぬ中に媾和が初まつた。李鴻章——東洋一の大政治家と許されてゐた李鴻章が廣島へやつて來た。昔から延

史の本にある通りに、戰勝者は占領地の地圖の色を染め變へることが出來るものとのみ思つてゐた。

この時、一人の大バカ者が舞臺に現はれた。彼は媾和使李鴻章を狙擊して創を負はせた。之には社會一般がずゐぶん心配させられた。

「何うも飛んだことに成つた」

と學校の先生も言はれた。私達は子供心にその結果を心配したが、もう此時、清國は我軍隊に咽喉玉を扼ぢ伏せられてゐた時だから、何でもハイ／＼と大よそ此地の言ふ事は承諾してしまつた。そして國民は狂喜した。伊藤伯萬歲陸奧宗光大臣萬々歲を叫ばうとした。

と、その時、突然ドイツとフランスとロシヤと三國連袂で干渉して來た。

「オイ、日本(ジャップ)。幾ら何んでも、それぢやあ餘まり虫が好すぎようぜ。隣り近所てえものがあらあ。大げえにしねえな。と尻をまくつて苦情を持ち込んで來やがつたやうなものさ」

と店のドクトル街合博士は、自分の尻をまくり上り框に毛脛を出して腰かけて云つた。

如何に外交家の陸奧伯も、これには何うする事も出來なかつた。

國民は甘い夢から覺めた。二週間の講習で絞り染めを稽古した素人上りの俄か紺屋のやうに、地圖の色を染め違ひしてガツカリしてしまつた。

臥薪嘗膽！といふ事に成つた。

誠にこましやくれた話だが、私達小學生徒でも先生やお父さんと一緒に成つて、泣くほどまでに遼東還附を口惜しがつた。何處のお母さんや娘さんも皆大に口惜しがつたものだ。

けれども少しの償金と臺灣嶋とを受け取つたから、私達は

「これからお砂糖が安く成るだらう」

と自ら慰めた。

冗談でなく、學校の先生は臺灣ではお砂糖が澤山とれる。と語つた。澤山とれる臺灣が此地のものに成るのだから、砂糖は安く成るだらうと空想したのは、地方民の心得ちがひだつたらうか？

いよ／＼明治二十八の秋には、凱旋した兵士がポツ／＼歸郷した。誰の胸にも勳章みたいなものが一つ二つ宛は閃いてゐた。日に燒けて顏は黑く成り、帽子の中に這入る額だけが際立つて白かつた。兵士は軍服を着、劍を吊つたまま、懇意な家々を挨拶して廻つた。聯隊旗を大きく金で描いた大きな盃、彈丸のはじけた缺けら。歸途參詣したといふ嚴嶋みやげ若しくは伊

勢みやげ神路山の箸など持つて來てくれた。

「何れ、坊や、これを吊つてやらう」

とサーベルを私の腰の周圍に付けてくれた。之を引きづつて坐敷の中を少し歩いただけでも、私は嬉しくてその晩寢られぬ位だつた。兵士は言葉までも「けれども」と普通いふところを「けれどもが」とがの字を餘分に付け、「しなきやならない」といふ場合に「せにやならぬ」と云ひ、「何々と云つて」といふ可きところを「云ふて」といふやうに、私達の地方で聞いたこともない言葉に變り、漢語を非常に多く交ぜて語つた。それが又何となく豪さうに、地方民の耳に響いたのだつた。

私達も、早速一錢銅貨を砥石で磨いて兩面を平らにし、苦心して小い孔を明け、それで勳章を拵へて胸に付け、學校へ行くにも家にゐるにも付けてゐた。

歸郷兵だつたか人夫で滿洲へ行つて來た男だつたか、誰か分捕品を陳列して見せてくれた人があつた。それは個人の家であつたか學校のやうな公設建築物に於いてであつたか、全く忘れた。たゞ、支那人の着服や團扇や、煙が水を潜つて來る仕懸のパイプその他珍らしいエクゾチイクな香の高い物品が澤山列べられてあつた。

町に「泣き舟」と綽名を付けられた人が出來た。兵隊に成つて戰に行く時泣いたといふので、舟さんにその町内の若い衆が與へた名だつた。かつぷくの好い大男だつた。

南方の村に、子供が無事に凱旋したのでチョン髷を切つたお爺さんがあつた。頑固の爲めか、それとも人の剪る時に剪らないで剪りそびれてしまつたのか、兎に角その年まで髷つぶしを頭に載せてゐたお爺さんがあつたが、遂に剪つた。これは鎭守さまへの祈願ほどきであつたのだらう。それでもまだチョン髷に未練があると見えて、一つべつつひにしてゐた。人が

「一つ竈二た心、つていふよ」

と冷かすと、

「なあに、そんな心はねえ」

と笑つてゐた。

北の村に、兄が出征してゐる間に弟と嫂と妙な噂を立てられたのがあつた。村の人々は兄が歸つて來たら何んなことが始まるかと心配してゐたが、兄は錦州かで戰死したので、皆が胸を撫で下ろした。女は少し拔け作の方だつた。美人だつたけれども。

戰時中、戰死した兵士のお葬式に、町長さんや郡長さん有志諸氏と共に、私達小學生徒も參列するの光榮を得た。その兵士は場末の貧乏町の貧乏人の子だつたので、人々は「あんな者の

葬式に」と云ふやうな顔をした。併し、遺骨の前で郡長はじめ多くの人の漢文句調の弔詞が型の如くに讀み上げられた。暑い〳〵日だつた。私はその兵士の名は今では忘れてしまつた。

玉よけの守（まもり）、といふ怪しからぬ札を、賣り出した寺があるとか聞いた。

兵隊よけの神様、といふ一層けしからぬ神様が出來たのは、この戰時中だつたらうか？日露役までも參詣する人があるやうに聞いた。

三

戰爭の後の地方民は實に慘めなくらゐ惱ませられた。戰時中、一家の壯丁、働き人を取られ、その留守中畠に雜草を茂らせて人から笑はれぬ樣にしようといふには、家族は一と通りの骨折りではなかつた。併し、周圍の人々の同情は厚かつた。出征兵士を出した家族に對しては、誰しも同情するのが人情の自然であつたらう。

だが、出征したきり終に歸らなかつた兵士も可也有つた。子を失ふもあり兄弟を失ふもあり、父を失ふもあり良人を失ふもあり、要するに一家の働き盛りの男を失つた彼等の中には、途方に暮れた家族も有つた。幸ひ無事に凱旋した兵士の中には、二年間の軍隊生活に馴れ鋤鍬取ることを忘れるまでに百姓の仕事に遠ざかつてゐた爲めに、歸郷して再び農事に從事するのを厭ふ者も出來た。歸郷して餘りの歡迎を受け振舞酒に醉ひ浸り村人には持ち上げられ女にはモテるところから、酒色に身を持ち崩すに至つた者も有り、氣位が高く成り粗暴に成つて妙に成つてしまふ者も出來た。併し、恁樣な不幸な家族は少數で、決して一般が恁ういふのではない。だが、一般の地方民も大に〳〵に苦しんだ。

戰時中、國民はずゐぶんの重税を負擔した。私はまだ子供の時で、税金の事まではよく知らなかつたが、世に所謂三惡税なるものは、此戰爭及び日露の役中の所産ではなかつたか？少くとも通行税は此時であつたと記憶する。人々は無理さんだん迄して軍事公債にも應募した。愛國婦人會、赤十字、義勇艦隊、軍人後援會などいふものの勸誘は、主に知事から郡長へ郡長から町村長へと天降りで來たので、ロシヤのムジクの樣にまで從順なる地方農民は、それこそ無け無しの財布の底を叩いて義捐した。

昔のローマ帝國の樣に、外國を征して凱旋すれば、携へ歸つた分捕品は悉く市民の間に頒たれるといふわけではなく、地方民の財布から一旦出た金は、たとへ百戰百勝の後とても、未來

永恆、決して再び歸る金ではなかつた。

「此所いらから出て行く金は、こと〴〵く東京や廣嶋宇品あたりへ落ちるんですから、彼地の者は大儲けですが、田舍の者は詰りませんや」

と前橋から來た問屋の番頭が店先で語つた。傍で買物をしてゐた村の人は

「こちとらは、何が有つても損しるばかりだ。田舍漢は詰らねえ、む。土ん百姓は智慧無しに生れ付いてるだから」

と風呂敷包みを背負ひ乍ら言つた。

實際、大都會には、この戰爭の爲めに大金持に成つた人々も有つたのだ。金持に成つた上に爵位まで得た人々も有つたのだ。大正日本のブルジョア階級の基礎は大抵この戰爭の際に出來たのだ。

だが、地方には戰爭で財布の底を叩いた人々こそあれ、一文だつて金儲けをした人々は無かつた。

それもいゝ。だが、戰後間も無く、前橋の方から怕ろしい流行病が這入つて來て、村から村へと火事の火の移るやうに延蔓して行つた。

明治十五年とかに猖獗を極めたといふコレラのことは、早や人々が忘れかけた十三年後の今に成つて、新たな痢病が流行つて來た。ヂフテリヤの血精注射が發明されて、子を持つ親達は

「馬皮風がなほるなんて、今の醫學はよくこんなに進んだものだ」

と悦び合つたのは僅か二三年前からの事だ。然るに、この春からボツ〳〵流行はじめた痢病の爲めに、愛兒を失つた人々は如何に多かつたらう。いや、子供ばかりぢやない。老人も死んだ。血氣盛んな若者も一週間から十日の間に斃れた。而かもそれが戰爭の爲めに亡びた數よりも、何百層倍多かつたことだらう。そしてその痢病は初め白い便を下し後は赤い血のやうな便を下して、忽ち衰弱するといふのだ。聞いただけでも、人々を戰慄させるに十分だつた。

最初場末の町の運送引(東京にて馬力の馬方)の女房が妙な痢病に罹つて血を下して四日ばかり病んで死んだちう。などと人々は單に奇異な珍聞として噂し合つてゐたのに、それは忽ち八方へひろがり、流れを傳ひ谷に添うて村から村へと片押しに押し擴がり、郡中、一町十二ケ村、患者を出さない土地は殆んど無くなつた。郡役所の注意で、町も村も夫れ〳〵隔離所を人家から四五町はなれた畠中に立てた。建てる暇が無く、學校を直に隔離所にあてるもあつた。そして病人は晝夜の別ち無く擔荷でそこへ運ばれた。昨日堰で水汲みをしてゐたと思つた近所の

女が、今日は朝から姿が見えないと氣がつくと、それは昨夜々中から下痢し始めて今日はもう隔離所へ運ばれたと云ふやうなことだつた。

村々に衞生委員と云ふ人々が出來た。役所の小使は石炭酸やら脱脂綿やら生石灰やらの買ひ込みのお使ひで忙殺された。遠い村々からは當番のお百姓さんが畑仕事を休んで馬を引き、まだ暗い中から村を出て十里も十二里も夜道をして町の藥舖まで藥買ひに來た。

歸途、峻しい坂道を下る時、鞍に付けた生石灰の（石油一斗入のブリキ鑵に詰めてあつた故に）ガチヤン／＼烈しい音が起つたのに馬が驚いて躍ね上り、引いてた人が谷へ落されたといふやうな悲慘なエピーソートもあつた。

學校の門は無論閉ぢられた。人々は煮沸した水より外の飲料を飲むことは禁ぜられ、夏が來ても氷水屋は初まらなかつた。私達河童の子は、夏に成れば川へ漁に行くか泳ぎに行くか、兎に角水へ入つて遊ぶのが常であつたのに、今年はそれさへ同く止められた。瓜は成れども水瓜は熟すれども、腐るまで捨てゝ置かれた。

一年一度の町の夏祭さへも、見に來る人は稀で、たゞ型ばかりの祭をした。八幡さまの祭りもお諏訪さまの祭りも淋しかつた。七夕の習日の祈禱垢離（きとぼりと人々は云つた）にも川へ行く人は少く、川まで行つても水へ入ることは止められた。食物にも飲み物にも祭にも何にも、一郡中嘆きの聲ばかりに滿ちて、快樂といふものは一つも無かつた。

醫者は目の廻る忙しさで、中には感染して斃れるものも出來た。人夫や看護婦は一日一圓といふ破格な給料で（當時は金一圓で米一斗位か？）あつたが、慾につられて高級を取り病を授かつて死んだものもあつた。尤も恁うした中から、看護婦と患者又は巡査との艶種も現はれた。赤痢が取り持つ緣かいな といふ珍結婚も出て來て人々を苦笑させた。

新盆の家ばかりが多かつた。盆ばかりが時を得顏に人々の人證公證で賑つた。

盆を過ぎて間も無くのことだ。母は

「岡山のがMが嫁を連れて今日一現に來るちゆが、こんな場合で何も御馳走も出來ねえから、饂飩でもぶつぺえ」

といふので私は手傳はせられた。捏ねたうどん粉の塊の上にあんぺらを乘せて、私は上から踏んでゐた。Mさんは母の甥で、その時岡山で牧師をしてゐた。新婚の披露の爲めに遙々この東北の田舍まで來たのだ。昨日着いて利根川添の村のMの兄の家に泊つてゐるのだ。

そこへMさんは一人で、嫁も連れずにヒヨツクラ來た。お嫁さんの里なる名古屋の名産鳴海絞などを手土産にして來た。

「何うしたい。嫁は」

母が訊くと、Mは

「なあに、昨日着くと、昨夜々半から姆さんが急に發病したのですが、様子が何うも赤痢らしいんで、私一人こつそりやつて來ましたが、もう之で歸ります。上へは上りません」

と云つて、土間に立つてゐた。母が

「ではまた二人で悠り來るさ」

といふとMは

「なあに、今度はグズ〳〵してゐると足止めを喰ひますから、今日直ぐ東京の方へ發たうと思ひます。」

といふ。そりやあ、あんまり、あつけねえね。と母はボンヤりした顏をした。それからMは本家の嫁、即ちMの姆の病狀を手短かに話して茶一杯飲まずに歸つた。十幾年ぶりで叔母に合ひに來たのに。

本家の嫁のHさんは、義弟夫婦を待ち受ける爲めに朝早くから人々を指揮して掃除をした。その時、井戸の水を使つたが、その水に赤痢菌が棲んでゐたか、といふ醫師の話だつた。

翌日は村の八幡神社の森の先生の畠の中の隔離所へ送られ、數日そこで病んで死んだ。その乳房にすがつて泣く赤ン坊を殘して死んだ。つゞいて男の兒とその妹と共に發病し母の右と左に寢せられてゐたが、妹は母と前後して死に、男の兒は快方に向いた。すると又長男も發病した。

まづ、一例を近きに取ればこんな次第である。何處の家も大よそ此程度だつた。

翌年もその又翌年も、夏の初めから赤痢が流行して秋の末まで續いた。そして前年に災厄を免れた家々を殆んど故意に探すかの樣に見舞つて、人々を墓へと引き入れた。

天は、これでもまだ地方を惱ますのに十分でないと思つたのか？　この年から引續き大雨が來ては河水を氾濫させた。東京の方から鐵道敷設のスリツパア（スリーパの訛）にする爲めに材木を買ひに來たので土地の資本家等が、山の奧の深林を濫伐した結果の出水だと、物識りらしい人々は語つた。兎に角、昔からこんな大洪水は無いと老人達は話し合つてゐた。

利根川の急流は、郡中の水を悉く合せて、堤をくづし田畠を犯し橋梁を流し民家を漂はせて、綾戸の峽へ向ひ岩の根も押し崩せと突進した。郵便はおくれ交通は杜絶し新聞は一日二日おくれて來た。田畑を全然流してしまつた農夫も有つた。

或日、大雨の霽れた後、友達と一緒に利根の大洪水を見に行

つた。村々の消防夫は甲斐がひしく働いてゐたが、鷲石橋を押し流した濁流が一刻々々増水して來て、橋の前後に在る茅葺の民家をだん／＼取り巻いて行くのを、何うする事も出來なかつた。屋根の半ばまで浸されてゐた農家の一つが浮き上つた。そして悠々と流れ去つた。思はず人々は拍手喝采した。暫く待つ中に又第二の家が浮び上つて流れた。母家と別に立ててある小屋も浮いた。そして何かの暗礁に觸れたらしく見る間にメチヤ／＼に摧けて流れ去つた。第三の家も浮いた。

いろ／＼の物が川上から流れて來た。水車も流れて來た。屋根の上に小猫が乘つたまゝ流れて行くのもあつた。此日は溺死した人々もあつた。

秋は巽の風が赤城山から吹き下ろして、民家の屋根板をめくつて行つた。町の店の屋根に立てられたペンキ塗りの招牌などはこと／＼く道の中へ吹き落された。仲には數丁先きまで吹き飛ばされたものもあつた。屋根の上の石はゴロ／＼落ちた。垣根は倒された。この野分の後はひどかつた。きびやもろこしや、豆類にくれた手などは皆吹き倒された。果樹は根こげにされて投げ出された。

翌年の春は、桑畑に霜が下りて葉を焦し、既に掃き下ろした蠶をさへ捨てさせた。桑の相場はメチヤクチヤで蠶を持つ者は、には休み過ぎてからさへ止むを得ず河へ捨てゝ流した。そして忽ち桑の價が下がると、今度は桑を持つ人々は買ひ手もなく、刈つ乾した。繭の相場もメチヤ苦茶だつた。正直な人々が損をし、不正な奴等が儲けた。

夕立の有る毎に、よく雷が落ちた。或時は私の小さな町だけで、一夕に二十四箇所落ちた。天桂寺といふ宗眞の寺へは、水雷（みづかみなり）といふ奇拔な雷さへも落ちた。

私の家に奉公してゐた女の弟が雷に撃たれて死んだ。戸外にあつた車を軒下へ入れやうとして表へ出た時に落ちたのだ。家から數丁しかないので、私も見に行つたが、跡には何も止まつてはゐなかつた。

地方民がこの様に天災に責められ病氣にいぢめられ、經濟的の恐怖に襲はれてゐた時に、都會の人々は戰勝祝の催しに有頂天に成てゐた。

都會には光榮赫々たる軍人達が金モールを光らせてゐた。都會には成金が殖えてゐた。企業は勃興し經濟界は活氣立ち、新しい文明は横濱の波止場から上陸しつゝあつた。私達は田舍にゐても新聞（時事と國民）や博文館の雜誌を通して、戰後の新氣運新文明の記事を讀み、都會の繁榮に眩惑されて、都の空を憧憬した。

若い人達は皆都に憧れた。小僧や番頭が主家を逃げて的度も無しに東京へ飛び出した者が、彼地にも此地にも現はれた。百姓の息子が若い嫁と一緒に東京へ逃げたのもあつた。打つゞく災難に家産を蕩盡した老夫婦が、國を賣つて都へ去つたのもあつた。東京へ出て、何に取り付く島も無く、鐵道馬車の別當に成つたり、砲兵工廠の職工に成つたり、道路工事の土工に成つたりしてゐるといふ噂も聞いた。私の近所の織子夫婦も逃げたが、前橋の停車場で警官に押さへられ保護されて歸つて來た。

私の店のドクトル街合博士も講和後間も無く國を飛び出してしまつた。彼は十一歳の春私の家へ奉公に來て二十八歳までゐたのだが、東京への憧憬は彼を誘惑してしまつた。彼は目黒の乘馬學校へ入つて陸軍の馬丁などしたが、その僅かな報酬と苦役とに幻滅して他へ轉業した。けれども再び國へは歸らないで萍の様な生活をして果てた。私の氣に入りであつた小僧も一人、或朝明けて見ると店にゐなかつた。彼も都を憧憬して走つたのだつた。

友達が下へ奉公に行くのを見ても羨ましかつた。それこそ本當に、南の空に歸る雁を見ては都を戀ひ、南に流れる川水を見ては私は都を慕つてゐた。秋雨の侘しく降る午後だの、虫の音の絶え〴〵に山の氣の肌に寒い晩秋の夜更けなど、讀みさしの本を伏せてボンヤリして都の榮華を胸に描いた。仕事など手には付かない様な氣がした。

淋しい、疲憊した田舍町のダルなモノトナスな氣を破るものは、南の下の方から來る物賣や乞食生活の藝人だつた。斯ういふものも、世の遷り變りに伴ひ、くさ〴〵の變遷があつた。

先年私が幼稚園へ通う頃は私の町から五里ほど先きの、東京へ行く道にあたる或小さい町までガタ馬車が毎日何度か出た。トテ、テテ、トテトーと別當の吹くラッパがガタゴトといふ車輪の音と共に毎日聞かれ　私達子供はその馬車の後を追ひかけた。又繩で皆の體をつなぎ、日暮れにはよく馬車ごつこをして遊んだ。しかし、歐化熱の反動期に入ると、その馬車も廢された。子供は馬車のことを忘れ馬車ごつこも止めてしまつた。歐化熱のころは、表の通りを洋服を着て赤いズボンを穿いた男が、大きなブリキの太皷を腹の前に肩から掛けて、兩手の撥でドドンガドン〳〵と叩き「フランスぱんにはイタリヤぱん、ふわりとおいしいアメリカパン」などと呼び乍ら、子供がぞろ〳〵跟いて行くと旗を描いた小切紙を空へパラ〳〵と播き散らした。東京の方から來てゐたこのパン屋もいつしか姿を見せなくなつてしまつた。その端が黒くて形の三角なパンの美味かつた事！　その播き散らす綺紙を拾ふの嬉しかつた事！　また來

る秋にはこのパン屋の姿を見るだらうと、私達子供は幾年かを空しく待つた。

おがらの先きに飴をからみ付けて文久一文か二厘くらゐで賣るギリ〳〵飴屋は、小さい時から、馴れてゐるので、何の刺戟も與へなかつた。人形みたいなものを澤山背ろ向きに背負つて鉦を叩いて來る淡島さまは、たゞ弱い柔い稚な心を脅すだけだつた。唐人笛を吹いて來る飴屋は、白い飴に繪具を塗り吹いて膨ませて狸や兎などを拵へるから、少しは珍らしかつた。春の初めは風鈴賣りが廻つて來た。黄金や赤や青く塗りたてた風鈴の色と搖れる度に起る凉しい音色とは、子供の注意を惹き付けるに十分だつた。大きいお鉢の蓋のやうな形の笠を冠り腰の前に突き出した小鉦を叩いて廻る六部も時々來た。深編笠に顔を隱し白裝束に白の手甲脚半を付けて人の門口でボロ〳〵と尺八を吹く虚無僧は、絶え間なく來たが、子供心に何となく怕ろしかつた。虚無僧には、奉還金を費ひ果した士族の落ぶれが多いので、物貰ひとは云ひ乍ら仲々氣位高く、何かといふと激しく恐るからだつた。

倭らい中（日清戰爭の半ば頃から突然現はれて來て滑稽な尻振りダンスをやり、大きな團扇太鼓に合せて小唄を唄ふよか〳〵飴屋は、無論子供の注意を引いた。生活の單調に飽き果てゝゐる田舍では、子供ばかりでなく大人も之に惹き付けられた。そして、村の娘や内儀さん達には、このよか〳〵飴屋の後に付いて驅け落ちしたものさへ時々有つた。よか〳〵飴屋と前後して、月琴を彈いて廻る男女が現はれて來た。尺八と月琴と合奏のこともあつたが、もうその尺八を吹く男達は武士の落ぶれらしくなく、深編笠の白裝束でなしに　鳥打帽を冠り天竺木綿の兵兒帶をしめた墮落書生であつた。

わしぢやとて好きで虚無僧するではないが
親の勘當、ぜひがない、ササほうかい

といふ彼等の唄は明白にそれを語つてゐた。中にもその代表的の歌は

一日も、早く年明けぬしのそば
縞の着物に繻子の帶、ササほうかい

といふのだ。男は墮落書生であると同時に、女は男を墮落させた花柳界の者であることを語つてゐる。併し、その顔付などから判斷すると、それは花柳界でも極く下積みの白首酌婦といふ程度のものだつた。

彼等の用ひた月琴は支那の樂器であり、彼等の唄ふほうかい節の節廻しは支那の九連環といふ節と略同樣であつた。そして更にまた清笛や明笛や、その他私が形だけ覺えてゐるが名を忘

れてしまつた樂器もあつたが、何れも皆支那風だつた。

別けても清笛は青年の間に大に流行した。押さへる孔六つと他に竹紙又は蘆紙を貼つて音を高める補けとする響孔を有する清笛は、都鄙に洽く流行した。それは丁度今日の青年がマンドリンやハーモニカを弄ぶのと似てゐた。上、尺、工、六といふ樣な四角な字で書かれた九連環や算命曲の譜は、日清戰後の少年に親しまれた。

臺灣パナマといふ褐色の夏帽子も流行した。

戰爭で清國と接觸した結果、少しは支那文明が輸入されたが、あまりに脆く敗北したといふ事實が、日本國民をしてすつかり支那を安く値踏みさせた。爪の長いこと、足の少さいこと、臭い事、滑稽な豚尾等が、すつかり漢人や唐人の繪を見て胸に描いてゐた我々のイリウジョンを打ち破してしまつた。私達は日本人の價値を知つた。否、前の反動で餘りに日本人を高く買ひすぎたであらう。これに乘じて一方には前から在つた保守的風潮が益々煽ぎ上げられて排外的感情を强めると同時に、又他方には西洋を畏敬するの觀念を種蒔きした。支那なんぞ地圖の上にばかり大きくても、實力がない。怖くはあるがこれからの若い者は西洋から物を學ばなければならない。漢文よりも英語を。といふ考へが、自分の將來ばかり見つめてゐる神經質な少年達の頭へ來た。

だが、その頃は今と違ひ西洋文明はほとんど田舍になぞ知られてはゐなかつた。東京にさへ電車すらも無かつた時代なのだ。今でこそビスケツトやキヤンデーを知らない者はあるまいが、私達が田舍の中學で英語を習ひ初めた時分には、さういふ菓子さへも田舍へは來てゐなかつたので、何とも想像がつかなかつた。先生はビスケツトを乾菓と譯し、海軍の軍人なぞが遠洋航海中に喰べる物だと敎へた。キヤンデーは唯砂糖菓子と譯しただけだつた。何しろどんな頭の好い先生でも實物を見たことも喰べたこともない我々に、キヤンデーの何物なるかを會得させるの困難さは、臺灣の兒童に雪を說くのと同樣な困難であつたらう。Apron を前だれと譯した。だが商人の掛ける前掛けとは違ひ、胸まである物で子供の掛ける前掛けだと云ふから、私達が五つ六つまで掛けた「油屋さん」と類似の物だらうと私達は想像した。今日エプロンを知らぬ者が東京にあるか、何うか？ずゐぶんの田舍でもエプロン位は知つてゐるのに、我々の時代には字引を引つくり返して何れ程エプロンの飜譯に苦心したか知れない。

が、それから滿三年の間に東京の製菓會社で出來る安ビスケツトが田舍まで來るやうになり、又乾いた安パン菓子も來て、

舶來の金米糖や花がけや役者の紋章——三升だの長者守りだのの紋の付いた集花糖などを市場から追々驅逐した。コーヒー入角砂糖も下から來たが、無論名ばかりのコーヒーで、實は豆の黒焼だつた。尋常小學時代に雜記帳といへば駿河半紙を折り四分で綴ぢて作つてゐたのに、一冊二三錢の洋紙のノートブックが下から來た、だが勿論極めて粗悪な和製の洋紙から出來てゐた。

この様に西洋の文化は私達の田舎までは這入つて來ず、たま〳〵西洋風の假面を冠つて入つて來る品は、こと〴〵く粗悪な和製品だつた。私達が中學分校で用ひた教科書のナショナルリーダーすら日本で翻刻した粗悪品だつた。恁ういふ物ばかり見せつけられて、何うして西洋の文化を理解する事が出來やう。ミルクホールでバタで候と云つてパンにひいて出す厭な臭ひのするマアガリンに胡麻化されてゐては、何うしてバタが好きに成れやう。

日清戰爭前後は勿論、つい最近まで、若しくは今日も尚ほ、マアガリンをバタと僞られ、豆の黒焼をコーヒーと思つて飲ませられてゐる人々は、恐らく西洋の文化に敬意を拂ひ得ないであらう。それは兎に角も、あの頃の地方民の生活の程度、智識の程度では到底西洋の文物典章を全く理解す可くもなかつた。

既に支那の實力を侮り又西洋の良い點が分らないでは、勢ひ極東の新進國を己惚れるに至るのは數の自然だつた。明治十九年の歐化時代に對する反動時代以來、進み來つた國粋保存や已惚的愛國心や排外的帝國主義やの保守的迷妄が、戰勝と共に氣勢を揚げるに至つたことは、恐らく日本全國を通じての事だつたらう。此際に乘じ、軍閥は戰勝の餘光を藉りて、思ふ存分にミリタリズムの宣傳に勗めた。

四

是より先き、明治二十四年頃、畏き邊りから全國の小學校に御眞影を教育勅語と共に下賜された。そして三大節の祝日の式を開く初めに、校長は恭しく勅書を朗讀するのが例に成つた。その時の校長は師範立身の眉目清秀の青年で新に赴任して來たのだつた。若い校長は勅語を讀むのがお上手だつた。恁ういふ場合に上手といつては聊か語弊がある様だが、兎に角、勅語を如何にも勅語らしく讀んで、聽衆に多大の感動を與へた。

廣い式場の正面には御眞影を飾り、兩側には郡長判事稅務署長警察署長町長學務員町會議員等が威儀を正して押し並ぶ。その中に、町會議員や學務委員には、いくらも町内で顔馴染の小父さんがあるのだが、普段の角帯前掛けの時とは違ひ、黒な

なこの紋付羽織に赤茶縞の平袴といふいでたちで爽さうに澄ましてゐるところは、稍滑稽でもあつた。

かゝるところへ校長は黒のフロツクコートを着て、靜々と正面の中央に進み忝しく御眞影に一禮した後、やおら卷いてある勅語を少しづゝ開き乍ら讀む。校長の眉目清秀なる上、所謂威ありて猛からず、皮膚の白皙とフロツクの黒色とが誠によくコントラストした。彼は「朕惟ふに」と冒頭まづ音無きが如く靜かに起し來る。聽衆は水を打つたる如く靜まり返り、たゞ咳きする音のみ聞こえる。勅語の半ばに入るや音吐朗々或は白玉の盤上をまろぶが如く、或は滔々として大河の奔流する如く、或は平らなる湖水に春風のたいとうたるが如く、櫻花のらんまんたるが如く、而して最後に白刄一閃下るが如くして止むのだ。

私達はいつしか教育勅語を暗記し何處でも暗誦出來るやうに成つた。おぼろげ乍らその意味も分つた。

忠君愛國の標語が、學校で叫ばれた抑の初めは此頃即ち明治二十四五年頃であつたらう。だから、初めそれは學校兒童のみの標語だつた。それが家庭にまで入り來り、町内の何んな者に迄も行き亘つたのは、日清戰爭中のことであり、戰爭が人々の心髓にまで打ち込んだのだつた。

軍人に賜はりし勅諭、といふ金で菊の紋章を表紙に刷てあるパンフレツトが、小學校から生徒一同に贈られたのは、戰時中の事と思ふ。長いものだが、美しい力の籠つた良い文章なので、私は何度も繰り返して讀んだ。

民間でも總てが尙武的に成つた。縣だか郡だかの催しで、學校の廣庭に擊劍の競技大會が行はれ、縣下の劍士が多勢集つて來た。圓い板を面の上へ結び付けて紅白二組入り亂れて叩き合ひをした。又一人々々の勝負もした。

競馬が町の郊外の横塚といふ村で行はれた、私も見に行つたが、騎士の中には知つてる青年もあつた。勇ましく面白かつた。見物は郡中の町村から集まり、かこひの外に堵を築いてゐた。

消防が悉く軍隊風に組織された。町に組頭が一人、小頭が多勢任命され、神明の森の北に畠をつぶして素張しく廣い運動場を新に造り、そこで消防手の調練をした。組頭は私達の馴染の本屋の小父さんで、頭の頂邊が少し禿げかゝつてゐた。人々は列を成し、この組頭の號令で「右へオイ」でも「廻れ右」でもやつた。「中隊縱隊オイ」のやうな六ケしいことさへもやつた。時々お茶番的失策もあつた。軍隊式のラツパを以て人々は朝早くから招集され、進行も休憩も驅足も皆このラツパで號令された。

チテ、チテ、タ、トタ、タツタチ、タツテタ

私達子供はラツパ手の小父さんから借りて眞似て吹いた。頬を痛めはするが、鳴らないことはなかつた。子供達はいつしか澤山ラツパを買ひ込んだので、町々辻々から子供の吹くラツパの音が聞かれた。

この廣い運動場には、時々郡中一町十二ヶ村の消防手をことごとく集めて、調練した。その時は縣廳からも警察部長などやつて來た。盛んな光景だつた。

恁る間に、戰亂の年は暮れて、明治二十九年平和の春を迎へた。が、こゝに又新らしい現象が地方の教育界に現はれて來た。

國力が膨脹した結果か、臥薪嘗膽の第一歩か、兎に角、明治三十年頃から全國に亘り中等教育の大擴張が圖られた。一縣一中學位だつた地方に、五つも六つも中學が新設された。初め分校を作り追々それを獨立させた。

中學校は出來たが入學志願者が無いので、私の郡などでは郡長さんが厄鬼と成り、町村長を督勵し入學志望者を得べく中産階級の父兄に向つて勸誘せしめた。一年級二年級三年級、何の級へでも志す通りに、簡單なる入學試驗に依つて入ることが出來た。私は二年の試驗を受けていきなり二年へ入學した。おまけに一ヶ月二十錢づゝの奬學金（スカラシップ）が郡役所から出た。私達は打揃つて毎月二十錢宛受取る爲めに、郡役所の門を潜つた。全く大正の今日に及んで中學入學難など、來らんとは當時何人も夢想した者はなかつた。

恁樣にして俄に驅り集めたことであるから生徒の行丈が揃はず、年少者はまだ小學生の如くであるのに、年長者は既に成人の域に入つてゐた。二十一の青年も居れば二十の青年もあり、最年長者は驚く勿れ年甫めて二十六歳で、最年少の教師よりは五歳年上だつた。私達は何うしても彼に「お父さん」の尊稱を奉らぬわけには行かなかつた。

加ふるにこの生徒らの不格好さと云つたらなかつた。如何せん、總て俄かの事であるのに、町には若い時、千萬長者大倉喜八郎と一つ店に共に奉公してゐたのを唯一の自慢談とする老ぼれた洋服屋が一軒しか無く、制服は二百組も至急入用といふのだから間に合はない。そこで或受負師が聯隊から拂ひ下げの古服をウンと仕入れて來て、ヅボンが長ければヅボンの先きを切り袖が長ければ袖を切つて、三四日の中に拵へ上げた。代價は各服一組が二圓といふのだ。靴も兵隊靴で靴下を二三枚履いてもまだ大きく、驅け足をすると靴だけぬけて後ろへ遠くけし飛んだ。

教師も矢張この類だつたが、ずゐぶん面白い人がゐた。だが何れも深切で生徒を愛し、まるで友達のやうだつた。老校長は立派な人物で、學問も深く、何うした運命のすさびでこんな田舍町へ流れて來たかを疑はれるほど、この中學としては分に過ぎた良校長だつたが、思想は忠君愛國の權化と云はうか、著しい尊王攘夷論者だつた。

それ故、まづ道場を作り生徒は朝つぱらから竹刀で、やつとうくと叩き合はせられた。その中に下士官として日清戰役に出征したことのある退職軍人が、體操教師として赴任して來た。これなら本物の體操教師で、從來作文や地理の先生が體操教授を兼任してゐたのとは違ひ、萬事が軍隊式だつた。この先生は金鵄勳章ではないが、何かメダルを二つ三つ式の日などには胸間にぶら下げて來た。いつもニコくしてゐる人で、訊きさへすれば直に從軍中の話をした。言葉も無論漢語交りの兵隊言葉だつた。たとへば簡單明瞭といふ可きところも、その倒さまに「たんかんめいりよう」と云つた。

「今教官が模範を示す」

と云つて體操の型を教へ

「要領よくやれ」

と付け加へた。

チヤンコロの首をポコく軍刀で斬つた話など、細かく面白く話した。

西南戰爭の際に用ひられたといふスナイドルといふ舊式の鐵砲が何百挺か購入せられた。私達は初めて鐵砲といふものを持つことが出來るので、見た時には悅んでゐたが、イザ持つて見ると重いの重くないのつて、そりや大變な代物だつた。立て筒から擔へ筒、捧げ筒など兵隊のやる通りのことを教へられ、去年まで消防手からラツパを借りてマネをしたとはちがひ、此地が本家本元のやうな氣がして嬉しく、鐵砲の重いのを問題にはしなかつた。鐵砲の手入れ、それも冬の日など指が冷たくて閉口したが、好奇心が手傳つてそれを私達に厭がらせなかつた。

だが、この重い銃——然り先生は軍隊語で鐵砲の事を銃とばかり言つた——は行軍の時には悩まされた。驅け足をすると肩で踊り、肩が痛んで、後から腫れた。一時間も夏の炎天を水も呑まずにこの銃をかついで行軍した時のことだ。學校へ歸ると直ぐに、榛名山の山裾の村から來てゐた美少年が眞青になつて倒れた。腦貧血だつたので、程なく正氣づいたが、私達はその日からこの巨大なるスナイドルが怖ろしい物に見え出した。

發火演習と云つて、畠やら林やら道も無い山坂を驅け廻ること

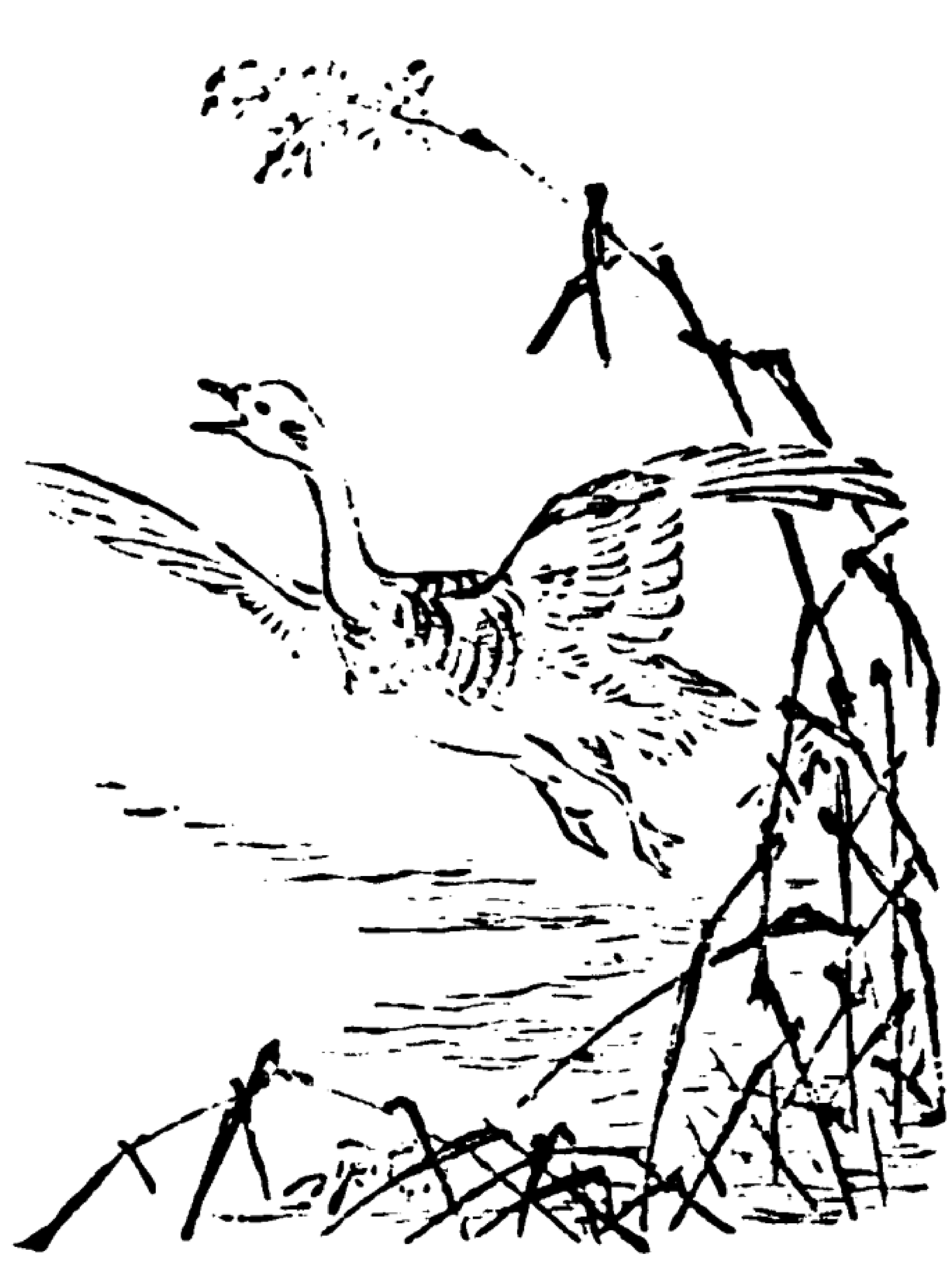
ともした。そして私はその發火演習の翌日から發病して三ケ月に亙る重病を患つた。

軍人は到るところでモテた。娘を持つ者は皆軍人の將校に婚せやうと志望した。

私のゐた中學分校の同級生の中には、軍人志願の者が一番多かつた、成績の良い生徒は、皆軍人を志望した。そして體格試驗ではねられた一人を除いて、二人は成城中學を經て士官學校に入り、日露戰爭迄には二人とも既に少尉に成つてゐた。

十一人の同級生の中から二人の少尉と一人の一年志願の少尉を出して、私達は次に來る日露戰爭を迎へた。又私の次のクラスからは二人の海軍士官を出した。

軍人崇拜熱軍人志願熱は、少年の胸を焦した。誰か想はん、二十年後の今日、軍備縮少の大波を被つて、青息吐息退命將校の堵を築かうとは！



想華

海

初航海

水野廣德

古い諺には世は塞翁が馬と云ふのがあり、誰かの處世訓には運鈍根とか云ふのがある。人間一生畢竟運命の翻弄兒である。生れ出つる時、運命の半分が決定せられ、小學校を卒業する時更に其半分が決定せられ、中學校を卒業する時又々其の半分が決定せられる。素より複雜多變なる人間社會には、小學校も卒業せぬ無學者が博士學士の番頭を抱へ、軍人志願の落伍者が將官閣下を顋で追ひ使ふ如き脱線變態も有るには有るが、一般論として世間通俗の出世とか成功とかは、肩書尊重、閥念旺盛なる日本に於ては、受けた教育の程度に正比例する樣である。

私立とは云へ郷里に中學校のありし仕合せに、小學校を卒業すると何の考もなく入學した。寄宿舍費が食料油炭一切合切を込めて一個月僅に一圓五十錢とは、今から考へると嘘のやうに廉かつた。二年三年は無自省無頓着に過ごすが、四年になると貧乏人の子は卒業後の事が氣に懸り始める。高等の學校に入るには資力が無し、縣廳のお雇では靑年の糊

氣が承知しない。幸か不幸か、體だけは人並以上に頑強じや。徴兵檢査は甲種合格に極まつてゐる。愚圖〳〵すれば兵隊に取られる。國民の義務とは云へ、ブラ兵三年はチト負擔が重過ぎる。殊に其頃の軍隊と來たら脈制亂綮を極めたもので、「新兵シク〳〵便所の中で」勤務の辛さに泣いたものである。自分の如き我儘者は二枚の皷膜を叩き破ぶられるどころか、鐵砲の臺尻で擲り殺されるかも知れない。學資が要らず、兵隊に取られず、早く出世するには士官になるに限る。併し自分達の學校へ、聯隊から兵式體操を教へに來る老大尉の如く「桃栗三年柿八年〇〇大尉が十三年」などゝ生徒に冷やかされながら、白髪蒔生やして若い兵隊と一緒に、砂埃食つて駈けづり廻はるのも餘まり感心した仕事ではない。外に何か甘い仕事は無いものか、其の頃の田舍の生徒は近眼鏡を掛けて人工近視眼になる程の知惠はなかつた。

中學校の三年ぐらいの時郷里の港に軍艦が入港した。排水量三千幾百噸、速力十海里、時の日本一の甲鐵戰艦扶桑である。東西屋が態々「日本一の大軍艦……拜艦無料……」と太皷を叩いて布令歩いた程である。節約デーではないが往復七錢の汽車賃を倹約し、一里半の道をテクつて見物否な拜觀に出掛けた。海岸は人で黒くなつて居る。三丁も沖に三本檣に桁（マストヤード）を澤山備へた灰色の軍艦が儼然として碇つて居る。瀬戸内通ひの小つぽけな船ばかり見狎れた眼には、三千餘噸の扶桑が城の如く大きく見へた。自分は此時まで海軍とは何をするのやら、軍艦とはどんなものやらさへ知らなかつたのである。

傳馬船に乘つて軍艦に向つたが、拜觀人滿員で、先着の船が十隻ばかりも扶桑の艦尾に繋いで待つて居る。其の又後へ自分等の乘れる船を繋いだ。ユラリ〳〵と波に揺られながら待つたが中々順番が廻つて來ない。舟に醉つて吐く人もある。觀覧人同志が思ひ〳〵に勝手な話をして居る。

商人らしいのが

「ラッシもないフトいもんぢやないかな。アノ大砲を一つヅドンとやつたら、お蚊ぐらい徴塵になるそうじやがな。
「正にな、こんなフトい軍艦に乘つとりや、なんぼ時化でも醉はんじやろな。
學生連が
「アノ檣のドタマ（頭）は何間ぐらいあるかやねや。御園（水練場）の櫓よりやチト高いぞよ。
「二十間はあるねや、お前アノ上からショーピン（櫓の飛び方）が出來るかい。
「出來らいでから、お茶漬じやがや。
「螺吹け！　椋の木へ登つてさへピク〳〵振うて居る癖に。
女生徒が
「お前エツぽど顏色が惡いぞな。
「ウチヤ氣持が惡うてイカンのよ、早よ上げてお呉れりやエーのにな。
老人同志が
「海軍は矢つ張り勇ましうて宜う御坐いますなもし、ウチの親戚の息子が海軍になつて居るが、そりやア贅澤なもんで、水夫でも毎日洋食じやと云ふがなもし。
「軍人になりやア、どしても海軍のことじやなもし、外國まで見物が出來るんぢやけんエーなもし。御互にモット若けりやなもし、アハ……。
見ると水練場で知り合のオジさんじや
「お前も來たかい、よう來たの。お前海軍におなりよ、體はエーし、泳ぎは出來るし、海軍には持つて來いじや。〇

○は昔から水練の盛んな處じやけんの、薩摩なんかに威張らして置いちやイカンぞい。

此の時代の人は水泳が海軍第一の要件じやと考へて居たらしい。之が自分に海軍出身を勸めて呉れた最初の人である。

軍艦を見ると、金筋に大きな徽章を付けた帽子を被つた士官らしいのが二三人、卷煙草を吹かしながら甲板を往つたり來たりして觀覽船を見卸して居る。一段高い橋の様な處には同じ服裝に短劍を吊つたのと、涎掛けの服に望遠鏡を脇挾んだ水兵とが立つてゐる。ピーツと笛が鳴つて何かド鳴つた聲がしたと思ふと、十人ばかりの水兵が前檣の兩舷から索梯を登つて行つた。

「うまいもんじやなもし、

「丸で猿の様じやねや、

「まア早いことな、

様々の口から様々の感歎詞が様々の句調を以て發せられた。自分達の船の後には更に數隻の觀覽船が繋がれた。小一時間も待つて、後二三隻で乘船の順番が廻つて來る時、時刻が過ぎたからとて觀覽謝絶となつた。軍艦ではパイプが頻りに鳴つて居る。多くの水兵が忙がしそうに甲板を驅けてゐる。軍艦相手には喧嘩も出來ず、觀覽料を戻せとか戻さぬとか、客と船頭との間でゴタ／＼しながら、軍艦のお尻を拜んだ位で歸つた。之が軍艦なるものを見た始めである。海軍と云ふものも一寸變つて面白そうじやとの印象が胸に殘つた。

共後友人からの勸誘に動かされ、夏冬の休暇に歸る先輩の、七つ釦のジヤケツトに短劍チヤラ／＼の勇ましい姿に魅せられ、遂に海軍出身と決心した。共の頃の海軍兵學校の入學試驗と云へば中學卒業程度とは稱しながら、問題なるも

のが素敵滅法むつかしいもので、全國各種學校の入學試驗中に於ける最難關門との評判であつた。千に近き全國の志願者中、合格者僅に五名と云ふ如き空前絶後の入學試驗レコードさへある程じや。加之、三千餘噸の木艦扶桑を日本一の軍艦とせる日清戰爭前の日本の海軍は全排水量僅に五六萬噸で、毎年募集する兵學校の生徒は多くて二三十人に過ぎなかつた。現在の如く軍縮の聲もなく、生活難の不安もなく、全國中學校の比較的優秀兒が集まつて來たので、餘程の秀才でなければ一度や二度の受驗では入學が出來なかつた。凡骨の御多分に洩れず、自分の如き幾たびか受けては失敗り、失敗つては又受け、ヤツとの事で入學を僥倖したのは明治二十九年の春であつた。

時正に日清戰爭の直後である。眠れる大象として歐米人が密かに恐を抱きたる人口四億、四百餘州の大淸帝國をば唯一擊に叩き付け、海に、陸に、連戰連勝したることゝて、軍人の羽振りの良きこと誠に素張らしきものであつた。さらでだにサーベルを以て「大小」の相續者と信ずる田舍の人間は軍人即ち武士と心得、軍人に對しては官階の高下を問はず、最高度の敬意を表したものである。今の大臣博士がヤツト角帽を脫いだか脫がぬかの時代のことゝて、田舍の町には博士は勿論學士すら稀であつた。實業家、會社員などは町人と呼ばれて世人から餘り重きを置かれなかつた。軍人ばかりが鳥無き里の蝙蝠然と大に羽を擴げたものである。殊に戰爭の論功行賞で勳章が軍人の胸を飾り、年金が軍人の懐を暖めてよりは、靑年の間にも、娘さんの間にも軍人熱がイヤガ上に高まつた。今でこそ金鵄勳章の年金と云へば猿の鼻糞ほどじやが、米一石五圓以下の當時に在つては、功五級年金三百圓を持てば何時首になつても飯が食へたのである。今では「學士さんなら娘をやろか」と云ふ書物さへあるが、其の頃は「娘やるなら軍人さんよ」で、軍人全盛、サーベル萬歲の世の中であつた。非戰主義の哲學者某君すらも一度は軍人を志望したと聞けば、如何に鄉里の靑年間に軍人熱が旺盛であつたかゞ想像出來る。

歳月匆々、時は移つて二十幾年、金の有るまゝに高等の學校に行きたる者は學士となり、博士となり、知事となり、局長となり、實業家となり、富豪となり、今を盛りと時めける者多きに反し、郷黨青年羨望の的となりてサーベル黨に入りたる連中は、其の三分の一は日露戰爭に敵彈の露と消へて遺族陋巷に窮せるものもある。殘りの大部分も既に隱居仰せ付けられて恩給生活に世路難を難き、僅に殘れるものも今亦軍縮の叫びに兢々として退職涙金の多少に思を煩はして居る。天下は廻り持ち、人生は運なり、日露戰爭に死んだ者に比すれば、生き永らへて移り行く世態を見る丈けでも仕合せである。

○

淡き誇と大なる希望とを以て、同時に採用せられたHと共に兵學校の校門を潜つた。衣服其の他一切の日用品が給付せられる。新入生の大部分は山家育ちの野人揃である。生れて初めて使用するヅボン釣の付け方が判らない。シャツの割れ目は前にあるものと盲信し、ワイシャツを後前に着て上級生から笑はれる。ネクタイの結び方がどうしても覺へられないので叱られる。光澤豊かな軍艦羅紗の七ツ釦のジャケットは、今迄着たる小倉の破服よりは大分着心地が良い。指先でソット撫てゝ見ると中々滑べつこい。靴も兵隊靴の古よりは餘程足さわりが軟らかじや。唯仕馴れぬ固いカラーが咽首を締めるのが少々苦しい。恰かも貧民窟の子供が一躍華族樣の養子になつた樣な早變りじや。服の着せ付け終つて最後に、金色燦たる短劍を腰にぶら下げると唯もう嬉しくて溜まらない。此の儘逃げ出して同郷の仲間に意張つてやり度い樣な氣がしたのは恐らく自分一人ではあるまい。今頃東京の電車の中で、毛が擦り切れて半褪色に灼けた引廻しを纒ひ、潮水に青錆した徽章の帽子を被り、鞄抱へて大學校に通ふ若い海軍士官を見ると、貧乏と襤褸との象徴の如くて思はれるが、此の時代の兵學校生徒ほど綺麗でハイカラな學生は無かつたのである。

服裝こそ質渾であれ、ハイカラであれ、江田島兵學校の三年は流罪の生活、奈良の道場に過ぎなかつた。呉と厳島との中間に横はる小さき江田島には夢の外何の産物もない。後には巌々たる古鷹の岩山が聳へ、前には池の様な小さき入江が線を湛へて居る。景色としては多少の趣こそあれ、そこには世界に濶歩する海の子を薫養するに足るべき何等雄渾の氣も無ければ、何等文化の影も無い。校門一歩を踏み出せば唯穢ない部落と薯畑ばかりである。獨り堂々たる赤煉化の生徒舘のみは當時日本に於ける最大建築物の一つと云ふことであつた。春夏秋冬雨の降らぬ限り、毎日夕食後一定の構内をば三々五々組を作つて、ダル〳〵と幾回となく散歩する自分達の境遇を、生徒自ら動物園の虎と呼んだ。毎日〳〵機械の如く起き、機械の如く學び、機械の如く食ひ、機械の如く寢るばかりで、日曜の外出以外何の娯樂もなく、慰安もなく、修養もなく、省察もなく、あたら青春三年を仙人の如く、世捨人の如く過したのである。學者肌で窮理的なHが非科學的な軍隊生活を帰ては、我儘にして放縦生活に馴れた自分は軍隊式育從をこばした。されば夏冬の休暇が溜らなく待ち遠ふしかつた。何の必要と目的とを以て海軍兵學校を斯かる寒島僻地に移したるかは、自分に取りては今以て難解の疑問である。陸軍士官の固陋は教育の結果である。海軍士官の世間知らずは校舎の位置の罪である。とは云へ自分は江田島三年の嚴格なる生活が今尚ほ自分を利することの尠なからざるを感謝する。

ひだるい〳〵で皿まで甜めつゝ、許されたる範圍に於ける自由を貪ぼつて三年を送つた。三年間の課程を悉く試驗すると云ふ四十日間ブツ通しの卒業試驗は、平素ツボラの我等に取りては生涯に於ける最も苦痛なるものゝ一であつた。机を嚙つて糞勉強の卒業成績なるものが、是れ程切實に一生の運命を左右しようとは其時まだ知らなかつた。其の辨學校で習つた課程の十分の一すらもが、乘艦後の實地勤務に役立たないのじや。斯くて大砲を打ち、水雷を放ち、帆を操つることは覺へたが、生きた世間は全く忘れて仕舞つた。どうにか、こうにか、卒業試驗をパツスして「少尉候補生ヲ

命ズ」との厚い紙の辭令を手にした時には、流石に悪るい氣持はしなかつた。併し自分の此の歡びは帽子の徽章が大きくなる爲めでもなく、腕に小さな金筋が入る爲めでもなく、又日給八十錢が貰へる爲めでもなく、寧ろ動物園の檻より出づる身體意志の自由と、好きな食物を滿喫し得る爲めとであつた。

卒業の翌日實地練習の爲め比叡（第一世）乘組を命ぜられ、三年住み馴れたる校舍に淡き名殘りを惜しみつゝ動物園を出でゝ廣き大海の人と爲つた。比叡は二千二百余噸、鐵骨木皮、汽帆兩裝の三檣艦であつた。前檣と大檣とには各四本の桁（ヤード）を横へ、恰かも花魁（オイラン）の笄に似て居たので、此の種の軍艦を船乘間で花魁船と呼んで居た。卒業後三個月ばかり内地沿岸を航海して、海上生活に腹と頭とを馴らしたる後、遠洋航海準備の爲め横須賀に入港した。池の如き瀬戸内海の外、海と云ふものを見たことなき自分は、太平洋に浮んで初めて海の大と波の豪とを知つた。實地にやつて見れば海上生活も側で見る程に呑氣で樂なものではなかつた。唯麥飯とは云へ腹一杯食へる點に於て感謝した。

横須賀碇泊中初めて東京を見物した。電燈さへ無き當時の東京の町は甚だ暗かつた。東京初見物の第一印象として今尙ほ頭に殘るものは、銀座通りの馬車鐵道の馬糞と宮城附近の草茫々たる原つ場ばかりである。日比谷から丸の内に掛けての空地には、草原の中で兵隊が調馬や練兵をやつて居た。當時を追想すると東京も開けたものである。

艦體の修理、索具の締め直し、糧食炭水の積載等、遠航の準備全く整ひ横須賀を出帆したのは、梅に遲く櫻に早き三月の十九日であつた。生來始めて故國を離れ半年の外國航海も、係累の無き身には別に離愁の歎とては起らなかつた。扨て愈出港の當日となると、誰も彼も、親戚知人に遺す暇乞の手紙に忙がしく「切手を持たぬか」「葉書を吳れぬか」と、狹き候補生室は朝から郵便局の如き騷ぎである。陸上諸官衙や碇泊諸艦よりの訪問者、乘組員の家族知人の告別者、洋服屋洗濯屋の掛け取り、扨ては又あだつぽい料理屋の借金取り女に至る迄、艦門の出入織るが如く、艦の周圍は

是等の人を乘せ來つたランチや、ボートや、傳船を以て埋められて居る。やがて出港時刻は近づき來艦者は殘り惜し氣に悉く退出した。

定刻になると艦は徐ろに繫留浮標から離れた。スクリユーが鈍く波を搔き、大きな舵輪が四人の水兵に依つて、廻はされる。在泊各艦は登桁登舷の禮を以て我を送り、檣頭には「汝の安全なる航海を祈る」とのお極り信號が揭げられる。奉賀々々の聲が互に叫び交はされ、見送り人の船からは頻りに帽子やハンカチが動く。鎭守府から送られた軍樂隊のランチが勇壯な行進曲を奏しつゝ、舷側に並んで送つて來る。船は諸艦の間を縫ふて徐ろに港外に出た。横須賀の波頭場も、見送りの船も次第に遠くなり、いつしか岩蔭に隱れた。樂隊が「今度此度」とロングサインの別れの樂を奏して返へり去る時には、坐ろに征旅に就くの感がした。向ふ處は北米加奈太のバンクバー、此の航程四千四百海里、航海日數五十日の豫定である。

○

早春の空は淸く晴れて海は綠に澄み亘り、左には總房の山淡霞にけぶりて鋸山近く峙ち、右には雪の富士山高く雲を拔いて聳へて居る。東京灣の入口觀音崎を過ぐると、海は風無くして波漸く高く、船は緩く動搖を始めた。灣口は何處でも波が高いに極まつて居るが、東京灣の入口は特にうねりが大きい。三箇月の沿岸航海に、船には相當馴れた筈なるに、横須賀碇泊一ケ月の暴飮暴食に胃腸を弱めた爲めか頭が頗る重い。痩我慢の强い連中ばかりのことゝて、醉つたなどゝは誰もまだ口にはせぬが、何れも皆色靑ざめて菜つ葉の樣な顏をして居る。プープ、デッキに立つて霞に薄れ行く相模の山を眺めし同僚の姿は、一人消え、二人減り、次第に少なくなつた。自分も胸がムカ〳〵して眠くなつたので室内に降ると、此處には早や吐物處々に狼藉として惡臭鼻を衝ひて居る。卓にもたれて俯伏せるもの、靑い顏して頭を押

へて居るものなど、恰かも病院の控室の様じや。平素は食ふか饒舌るか、口の忙がしき連中も、今日は青菜に鹽と閉口垂れて「ボーイ菓子呉れ」の元氣な聲も聞へない。

少時くすると「候補生總員プープ」の號令が掛つた。痛む頭を抱へて足許ヒョロ〱、プープに整列する。何れも色眞青で幽靈の行列じや。波は益高く、船は益動揺する。檣の高い帆前船は頭が重い丈け、普通の船よりも動揺の度が烈しい。空を仰ぐと高い檣の頭が白い雲を掃くが如く、右に左に大角度を以て緩く大きく揺れて居る。柱や手摺に倚つて漸く體を支へつゝ前方を見ると、右に四隻、左に三隻の小さき水雷艇が雪の如き飛沫を蹴上げ、墨の如き煤煙を漲らし、本艦に向つて突進し來りつゝある。艇身の半ば殆んど怒濤の中に沒し、潮は瀧の如く甲板に溢れて居る。誠に勇壯活潑じや。あんなにガブつても醉はないのだらうかとは、時の我身に比べて第一に起る疑問であつた。教官から水雷艇襲撃の説明を聞ける間に、一人の候補生が怺へ切れずしてゲツとやると、心理傳染で他の二三人が之に倣ふ。教官から「此の位の波で醉つぱらふ様なことで水雷艇に乘れるか、意氣地無し！」とド鳴られる。解散の令を聞くや否や一同室内に駈け降り、我れ先きにと………。

船は今房州館山の沖を南に向つて航しつゝある。動揺はまだ止まない。頭は愈重痛く、胸は愈苦しく、迚ても起きては居られない。と云つて寢ることは許されない。一同卓にもたれてウン〱呻りながら、入り代はり立ち代はりヘド桶に首を突き込みに行く。

「ア、辛らい、ア、苦しい。頭が割れそうだ。

「何だつて海軍なんかに入つたんだらう。

「こんな事と知つたら船乘なんかに爲るんじやなかつたのに。

「こんなに醉つぱらふ筈じやないのに、今度治つたらモウ菓子は食はない。

など丶頻りに愚痴や泣言が洩れる。最初は吐くことを恥ぢた者も、今は「之で何度目じや、モウ吐くものが無くて喉が裂けそうじや」など丶平氣で白狀して居る。通風の惡るい天井の低い、狹い候補生室の空氣は人の息とヘドの臭とで次第に腐つて來る。忍びに忍び、怺へに怺へたる自分も、一つ大きく搖れた機みにムカ／＼と込み上げた。口からキ水が無限に泉んで來る。寶丹や清心丹ではモウ間に合はない。齒を食ひしばると鼻の穴からボツ／＼と垂れる。涙が出る。兩手で口を抑へてヘド桶に馳せ付けた。臟腑までも一思ひに吐き出して仕舞へと、口を閉ゐて腹を絞ると勢正に大河を決するが如しじや。胸がセイ／＼して氣持が餘程良くなつた。併し顏も手もヘド塗れじや。洗ふにも水は無し、ハンケチで拭ひ取ると、イヤな臭が鼻の先にコビリ付き、指の股が何時までも／＼ニチヤ／＼して居る。心地の惡るいこと夥しい。吐きも吐ひたり、出しも出したり、正午より夕刻までに六十人の候補生が、行水盥よりも尚ほ大きな二つの洗濯桶に溢る丶ばかり。甲板も洗面處も、便所も、到る處ヘドの海。候補生室掛りのボーイこぼすまいことか。

軍艦に於て最も貴重なるものは淡水である。殊に蒸餾器もなく貯水タンクも小さく、而かも長途の航海を爲す帆前船に於て然りである。此度の航海横須賀を出て丶より目的港に達する迄五十日の間、途中淡水を補充すべき唯一の寄港地も無い。水の節約は航海第一の要件である。候補生一人一日の使用量を、飲用を除きて僅に五合と規定せられた。此の五合の水を以て口を漱き、手を洗ひ、顏を洗ひ、時に體も拭はねばならぬ。少しく不用意に使へば、口を漱ひで顏を洗ふ水が無くなる。目糞鼻糞の掃除すらも出來ない。殊に總員起床に寢過して釣床の縛り方遲れたる時などは、先きの者に使ひ果たされてコップ一杯の水さへなく、終日顏も洗はず口も漱がぬことがある。初めの中こそ氣持も惡いが馴るれば性となるで、幾日か經つ間には、靴墨の付いた手でパンもむしれば、便所から出た手で箸も持つ。無精者には却つて

簡單輕便じや。

夕食の卓に就く者は少なかつた。日頃健啖を誇る自分も今日ばかりは流石に一杯の飯も喉を越さなかつた。醉つた時には目をつぶつても飲み込めと教へられたものゝ、イザとなると目をつぶつたつて、鼻を摘んだつて、迚も食へるものじやない。一人の候補生が食事中、西洋皿の中へゲツとやつて、其を又ペロ〳〵と平げたなどは、慥に船暈武勇談に値するもので、今尚ほ同僚の談の種子になつて居る。「釣床卸せー」の號令を待ち兼ねて一同ハンモツクの中に潜り込んだ。後甲板では、剿夫の名儀で乘艦せしめた今の伯爵當時の小伯爵君が、之も醉つぱらつて苦しそうな聲を張り扇に絞り出して居るが、聞く者は少なかつた。

ハンモツクに入つて先づ一安心と思ふ間もなく八時から正午までの當直に立たされた。航海中軍艦の當直は四時間交代である。但し午後四時より八時迄はドグウオツチ（半直）と稱へて二時間で交代する。水兵は右舷左舷で交代し、士官は一人づゝ順番に大尉以上のワードルーム士官が本直に、中尉以下のガンルーム士官が副直に立つことになつて居る。日は既にとつぷりと暮れて、海には房州の突端野島崎の燈臺が遠く明滅の光を放ち、空には一片の弦月が清く檣頭に踊つて居る。船は今房州の南方を僅に六海里の緩速力を以てノロリ〳〵と東に向ひ走つて居る。風は強くはないがうねりは依然として高く、船の動搖は止まない。割れる様な頭の痛みを忍んでコンパス臺の上に立番をして居る。船首が波を打つ毎に颯と砕ける飛沫が月を浴びて青燐の光を放つ。波が船尾を持ち上ぐる度にスクリユーが急回轉をしてビリ〳〵と船體を震はし、胃腸を引つ掻き廻はす。胸がムカ〳〵して氣分が惡るい。初夜巡検が濟むと非番直の水兵はハンモツクに入り、當直の水兵が甲板の隅に轉つて居る。波の音と風の聲との外、艦内は森として人の談聲も聞へない。時鐘の鳴るたびに「燈當番の若い水兵が節おかしく「右舷よーろしい」「左舷よーろしい」と叫ぶ聲も何となく苦しそうじや。

四人の當直候補生が交代して二時間に一回づゝ下甲板を點檢する。上甲板に在つて冷たい風に吹かれてさへ氣持が惡きに、況して息の臭、屁の臭、油の臭、ヘドの臭が混合して、イヤな臭のする生暖き下甲板を、腰を屈めて水兵達のハンモックの下を潜つて歩るく苦しさと云つたら何とも云へない。船に醉ふのは我々候補生ばかりでない。兵員とても御多分に洩れず、甲板の隅には臭いヤツが吐いてある。

船暈に苦しみながら四時間の當直は、平素の十時間にも優して長かつた。船の動搖に連れ右左の足で釣合を取りながら、體を支へることは平地を歩むよりも一層の疲勞を感ずる。漸く當直を交代して室に歸ると卓の上には夜食のビスケットが出て居たが見向く者もなく、母親の懷を慕ふ赤ん坊の如く服も着換へずに、ハンモックの中に潜り込んだ。

夜が明けたが船の動搖はまだ止まない。ハンモックより降りると忽ち頭ツン〳〵、胸ムカ〳〵、苦しさは昨日とあまり變はらない。今日も亦終日苦しむことかと思ふと夜の明けたのが恨めしい。五合の水で目糞を洗ひ落し甲板に出て見ると、風は颯々として檣に激し、白波逆卷いて舷側に珠と散つて居る。動搖は昨日よりも尚ほ烈しい。眞紅の太陽が今正に東海の波に上つて、錦雲搖曳空に漂ふて居る。雄大壯美なる大海の朝の氣は船暈に惱む身にも流石に心地が良い。西方を望めば雲か山か、一抹の陸影低く水平に浮んで僅に故國の名殘りを留めて居る。朝の食卓に就いたが、菜つ葉汁の臭に僻易し、僅に一杯のミルクを吸つて逃げ出した。

暫くすると航海長から「非番直候補生はセキスタントを持つて整列」との號令が下つた。サア大變じや、此の頭の痛いのに航海の計算などが出來るものか、「航海長殘忍」などと蔭口叩きながら、仕方なく六分儀や甲板時計などを携へて、プープに整列した。體の小さい、目玉の大きい、熱心で、親切で、元氣で、疳癪持の航海長が皮肉の微笑を洩らしながら、色青ざめて顔をしかめた候補生一同をギロリと見廻はし、

「皆勝心に元氣の良い顔をしちよるの、お前達が碇泊中、夜遅くまで酒など飲んでオレを苦しめた返禮に、今日はお前達に醉の早く治る方法を敎へてやる。今から天測をやるんじや。

と來た。航海長の室は候補生室の入口に在つて、横須賀碇泊中は消燈時刻後までも騷いで屢ド鳴られたとがあるのじや。

軍隊に在つては上官の命令は綸言の如しである。一同揃つて天測に取り掛つたが、頭は痛し、船はカブるし、足はヒョロつく、お負けに波の爲め水線がデコボコして居る。太陽が容易にセキスタントの小さい鏡の中に映らない。ヤツと捕へたかと思ふと、カブる拍子に又逃がして仕舞ふ。何遍やつても太陽の高度が測れない。中にはセキスタント持つた儘レールにもたれてゲーをやつて居る者もある。愚圖〱して居る中、太陽は遠慮なく昇つて適當の高度を逸して仕舞ひそうじや。エ、面倒臭い、大概でやつ付けろ。

波浪の浸入を防ぐ爲め室の窓は悉く密閉されて居る。臭い、薄暗い、陰氣な室に歸つて計算に取り掛つた。頭は益痛い。一同卓の上に俯伏して、誰一人計算に着手するものとてはない。ウン〱の呻き聲と、ゲー、ドブ〱の音ばかり聞へて居る。斯くと見た航海長が疳癪玉を破裂さして大喝一聲、

「何をしちよるか、意氣地無しめが。

淨瑠璃の文句じやないが、仕方なく〱漸く鉛筆取つてノートに向つたものゝ、小數點六位までのやゝこしき計算とて、對數表一つ引いては頭を押へ、二つ引いては卓にもたれ、果ては罪なきアルマナックを卓の上に叩き付ける者さへある。苦しいこと〱、恰かも腦天を針で剔らるゝ樣じや。嘔吐の音愈繁く、室内の臭氣益烈しい。

正午の天測が終ると又計算じや。死ぬる思で漸く出來上がる　檢閲を受けると一言の下にダメと跳ね付けらる。百日の說法屁一つよりも尙ほ悔やしい。やり直して持つて行く、又跳ねられる。三回四回やり直す。頭は益混亂する。離れ

も彼れも、片手に鉛筆、片手に頭を押へ、青息吐息の泣きそうな顔をして居る。漸く合格すると早や夕刻じや。是から更に清書をして二度目の検閲を受けねばならぬ。船の動揺は益烈しい。インキ壺が辷べる。ペンが轉げる。揺れる度に卓が高くなり低くなり、容易にペンを走らすことが出來ない。航海長からは清書の濟まない間は室外に出ること一切相成らぬと宣告が下された。其のうち日が暮れた。釣床が卸される。後甲板では講談が始まる。面白そうな笑ひ聲が頻りに聞へる。運好く早く検閲を經た連中はハンモックの中に寢轉んで、豆など咬ぢりながら勝手な熱を吹いて居る。中には頭の直上で變な音をさす不埒者もある。

「オイ出來たかい。

「まだ半分も書けない。困つたなア、頭が痛くて目が眩みそうだ。

「オレや斯んなに苦しい事は生れて初めてじや。昨日からモウ十五六遍も出したので、ペンを持つ力が無くなつた。

「こんな事なら毎日當直でブリッヂに立つ方が餘つ程樂じや、オイ、もう甲板掃除じやよ、どうするかい。

「仕方がない、一旦片付けて巡検が濟んだら又起きてやるさ。どうしても今晩中にやつて仕舞はないと、明日また叱言があまるよ。

「貴様、巡検が濟んだら起して呉れ。

軍艦では季節と航泊とに依つて多少時刻の相違はあるが、毎日午後八時から九時迄の間に、艦内を整頓掃除して、副長が各甲板は勿論艙底の火の用心から便所の奥まで検査する規定である。之を初夜巡見と云つて、當直勤務以外の者はイヤでもオーでも、必ずハンモックに就かねばならぬことになつて居る。

タッタ一題の航海計算に一日かかつてまだ出來上らず、巡検に追はれて服も脱がずハンモックに就いた。終日の疲勞

にグッスリ寝込んで巡檢の終るも知らず、目の覺めた時には早や翌朝の總員起床のパイプが鳴つて居る。「コイツ仕舞つた、失敗つた」と釣床を收むや否や顏も洗はず淸書の殘りを書いたが、吾人の連中も大分居る。幸に今日は波も靜まり、船の動揺も輕く、頭は餘程爽やかじや。昨夜航海長激怒の狀を聞き、ビク／＼焉として淸書を持つて行くと「不埒な奴じや、貴樣等には點は一點もやらぬ、捺印もしてやらぬ」と御機嫌頗る斜めの體じや。

船乘も樂な仕事ではないとシミ／＼思つた。

○

昨日の朝白分逹が航海の計算に泣ける間に、總帆を展じて汽機の運轉を中止し全く帆走に移つた。毎時の豫定速力はタツタ三海里じや。人間の歩速と略ぼ同樣であるから、太平洋をテクつて渡るに異ならないのである。今度の航海が日本海軍に於ける最後の帆走遠洋航海であつた。元來海軍將校課程の正科と云へば通信術の尙ほ發達せざりし此の時代に在つては、砲術、水雷、航海、運用の四科目であつた。而して砲術も水雷も共に極めて幼稚なもので、砲術は速射砲なるものが初めて發明せられたばかりで、比叡の大砲の如きは旋廻出入共に綱で引き廻はし、挺子で捏ね廻はす樽盤砲なるものであつた。水雷も亦射距離僅に六百米突の眞鍮色シュワスコープ式なるものであつた。今時こんな大砲や水雷は九段の遊就館か、築地の參考館にでも行かねば見られはしない。正科中最も面倒なものが航海術の天測計算で、最も厄介なものが運用術の帆前操法であつた。比叡の帆裝はバーク式と稱へ比較的簡單なものであつたが、夫でも尙ほ前檣及大檣は各下檣、高檣、上檣の三本より成り、之に下桁、高桁、上桁、最上桁の四本の横桁と、他に一本の縱桁とを備へ、艦首の斜檣と後檣とを合すれば十六七枚の帆を張ることが出來る。フール、リグ式なるものに至ると三十枚の帆が張られるのである。

此等の各帆には展開紋疊に要する多数の索條を備へ、全部を合すれば約百本の索條が檣上から甲板に導かれてある。此の索條が一本〳〵其の用途と名稱とを異にし、其の導き方と留め場所とが一定して居る。留め場所を一つ誤つても檣を折り帆を裂くことがあるのみでなく、時としては全艦の運命に關することもある。又導く元が一つ間違つても帆の操運や桁の揚降を不可能ならしめる。左れば此の百本もある索條の名稱、用途、導き方、留め場所を悉く暗記して、暗夜突嗟の際にも一令の下に適當の索を適當に處理することが帆の運用に必要なる根本知識である。然るに此等索條の導き方なるものが實に複雜紛鎖を極めたもので、何の索は

「モンキイピットのアウターシープを通り、ツレスルツリーの何とかに取り付けたるシスターブロックのアッパーシープを經て……」

とか、何の索は

「トップクロスツリーのネッキレースのアイに取り付けたるダブルブロックのインナーシープを通り……」

とか、御經の文句と等しく、同じ様で違つて居る。コイツを絶對無條件を以て棒暗記するのだから遣り切れない。陸軍の新兵が獨立家屋や三叉路を覺へるよりも困難である。之には兵學校生徒の悉くが頗る非常に實に最も弱らされたもので、少くも腦力の半分を紋ぼられた感がする。斯くの如く帆と索とが多いだけ、帆前運用の號令にも隨分長い奇抜なのがある。「クリューガーネット、クリューライン、ゲルン、ロヤル、フライングジブ、ヘリヤート取れー」などに至つては、如何に肺の強き者でも迚も一息では言ひ切れない。海軍の戰爭に帆前操法の不必要なることは日清戰爭の實驗に徴するも已に明かであつたのである。而かも總ての改革を危險視し、害悪視する因循なる當局者は、之を廢止するの斷と明とを缺き、生徒の腦力を無意義に無効果に徒消せしめたのである。

船は帆委せ、帆は風委せ、風は帆走船の命である。風向惡しければ右に開き、左に開き、終日勞苦して一海里も前進せぬのみか、時には却つて後に押し戻さるることもある。併しながら適風に總帆を展張して靜かな海を滑かに走る時の淸快は、煤煙雨下して、機音喧擾なる汽走船の到底味ふ能はざる處である。波平かに風爽やかなる碧の海に、餌を求めて舷側に群がる鰹魚や鱶や馬鹿鳥を釣る無邪氣な愉樂や、月淸く波明らかなる夏の海に、帆裾を洩る凉風に吹かれつゝマストの軋る微妙の響に耳を澄ます超俗的な情趣は、帆前船ならでは遂に求むることが出來ない。

出港後三日目に至つて海全く平らぎ心身共に回復した。四顧淼洋として陸を見ず又船を見ず、唯水滿々雲漠々たるばかりである。巨鯨頻りに潮を噴き、海鳥群を爲して艦を追うて居る。日と共に艦に馴れて最早や航海の計算に泣くこともなく、食事は日每に美味くなり飯櫃は何時も底を叩いて居る。出港以來絕へて姿を見せざりし便乘の佛敎布敎師も、靑い顏をボツ〳〵甲板に現はす樣になつた。每夜後甲板で催ふす講談も次第に油が乘つて來て、小伯鶴君ギア箱（掃除道具箱）の上からパチリ〳〵と、

「持つたる薙刀クル〳〵〳〵とドンキーポンプを廻はすが如く」

とか、

「斯くと見るよりケツプスタンバーおつ取りて大上段に振り翳し」

とか、

「明けても暮れてもジヤガタラ薯に鮭の鑵詰、麥澤山のメンコ飯」

とか、連りに軍艦仕込みの新語を捻り出して水兵達を悅ばす。候補生室では出港當時の苦しみを早や打ち忘れて、閑さへあれば豆じや、羊羹じや、おこしじやと多食の競爭、係りのボーイ帳面の記入に忙殺せられて居る。はては異臭の泉

源地の穿鑿騒ぎ、宛然小學校の生徒の如しじや。夜は冷酒の德利も林立して居る。

○

三日四日は天氣快晴、海上平穩、晝は日麗かに甲板を乾し、夜は月明らかに波を照らし、總帆風を孕んで黑潮の暖流に乘つた。六日目の夕刻に至りて天候漸く一變し、密雲天を蔽して海色暗澹、氣壓急降して荒天の狀を呈した。夜に入りてよりは風次第に強く、雨亦烈しく、蕭颯聲々舷に鳴つて居る。翌朝未明釣床の夢尙ほ覺めぬに、笛聲銳く

「總員上へー」

不時の總員起し、唯事ならずと釣床より飛び降りると、艦は狂人の如く大搖れに搖れて居る。服の釦を嵌め〳〵靴も穿かず跣足の儘甲板に駈け出した。滿天の雲は墨の如く、篠衝く猛雨は斜めに甲板を打つて、パチ〳〵と音を發して居る。海は恰かも鼎の湧き返へるが如く、山大の怒濤が白浪を卷いて猛り狂ひ、怒り叫び、激浪屢々甲板を越へて艦內に打ち込んで來る。風は檣桁に激して轟々雷鳴を發し、帆は大鼓の如く膨らんで檣を撓まし、索を震はし、今にも裂けんばかりである。事甚だ急！。船に弱き副長が艦橋から

「トップスル二段縮め方」

荒天に對する處置である。傳令のパイプが風雨の甲板に響き亘ると、二百の水兵は雨に滑べり波に搖動する薄暗き甲板を匍ひつ轉びつ、各其の持ち場に就いた。索を守るもの、檣上に登るもの、水夫の中の水夫なる帆前船員の敏捷と勇敢と機智と大膽とが其の眞價を發揮する時が來た。

風は刻々に力を增し、緊滿の帆はパリ〳〵と聲を發して震ふてゐる。雨は愈々烈しく礫さへ交つて小石の如く面を打つ。寒いことと、痛いことと、船の動搖に連れて甲板は急坂の如く峙ち、物に倚らずしては立つて居ることも步むことも出

來ない。檣は前後左右に傾倒して索梯はマイナスの角度を爲し、登り行く水兵は今にも振り落されはせぬかと危ぶまれる。

檣上の水兵は悉く桁に渡つた。足に一條の索を踏みて身を桁に托し、兩手を放つて帆の作業に從事するは、平穩の海に於てさへ常人に出來る仕事ではない。況して甲板に在つて柱に身を支へられてさへ倚ほ揺り倒されんとする此の荒海に、水上數十尺、鞦韆の如く、轉動するヤードに出てゝ暴風寒雨を物ともせず働く水兵達の勇氣と豪膽とは驚歎の外はない。中にもヤードの外端に在る者の如きは、船傾く毎に怒濤に洗はれはせぬかと、下で見て居てさへ冷や〳〵する。

風速三十何米突の力を以て壓さるゝ帆は雨に濡れて革の如く硬ばつて居る。帆の膨みの上に人間が五人十人乘つて躍つたとてビクともしない。寒さに凍へた手で之を手繰り縮むるは至大の難事業である。索の張り方綾め方、檣上と檣下と互に作業の呼吸と氣合が合はねばならぬ。而かも百雷の轟く如き風浪の響の爲め、上と下と言語は達せず、命令は通ぜず、動搖混亂の甲板には怒聲罵聲喧雜として慘殺の氣を帶びて居る。

顏も洗はず、食事もせず、雨に打たれ、波に揺られ、漸く縮帆の作業を終れば早や九時を過ぎて居る。風雨は毫しも力を弛めず、波は益荒れ狂ひ、船は愈翻轉する。乘艦以來初めて食卓に框を用ゐた。茶碗轉げ飯櫃躍り、梅干ラツキヨは卓上で競走をやつて居る。茶瓶がヒツ繰り返つて膝を燒くものもある。他人の頭に味噌汁をこぼして睨め合ひをするものもある。西洋皿が框を飛び越して一間の先きで砕ける。茶碗と皿とが框の中で衝突して割れる。自分の側が上がつた時には向ふ側の者が目の下に見へ、下がつた時には目の上に見へる。恰かも遊動木に乘つて食事をする樣である。狼藉混亂實に名狀することが出來ない。併し最早や船に醉ふものは極めて尠なく、遲れて來た者は飯櫃の底をこさげて居る。

食事が済むと再び甲板に出た。風は益吹き募つて今は力十に達した。檣桁に激しては狂濤の怒號する如く、帆に孕んではブル／＼と物凄き魔神の呻きを發して居る。山と聳ゆる激浪は澎湃として舷側に溢れ、岩を碎く怒濤は轟然として艦底を打ち、余艦ピリ／＼と震動して碎けはせぬかと疑はれる。空は灰黑の密雲に鎖され、電光閃めき、雷鳴轟き、投錨の如き雨は横しぶきに降り注いで居る。波の轟き、風の叫び、帆の呻り、雨の音、雷の響など轟々蕭々又囂々、天色晦冥として海氣暗憺、悲壯の裡に凄慘の氣を帶びて居る。天候益不良、風下の艦側波を掬ひ、更に一段の縮帆を行ふた。雨は恰かも盆を覆へすが如く、風は服をも吹き飛ばす。水兵は何れも襦袢一枚に手拭の頰冠り、艦内さながら戰爭の如しである。

晝飯の時が來た。艦の動搖は朝よりも一層烈しい。朝食の經驗に鑑み、茶瓶や汁鍋などの流動物は、綱にて天井より吊り下げることを發明した。轉覆の虞こそ無くなれ、艦の傾く毎に頭と茶瓶と衝突して熱湯の洗禮を受くるものもあれば、汁鍋顏に打つ付かつて瘤を出すものもある。ワイ／＼囃やすやら、プリ／＼怒るやら、自然の喜劇である。動搖烈しく今は坐席に腰掛けて食事することさへ出來なくなつた。一同茶碗と箸とを携へ、甲板に立ちはだかつて足で調子を取りながら立食をやる。誰か、舞踏食事と呼んだ。

正午から四時迄は當直の番じや、裏までもビショ濡れになつた雨合羽を着、跣足で當直に立つた。最初の一時間は後艦橋のコンパス番じや。兩足を大の字なりに踏み廣げ、兩手に羅鍼儀の鐵球を擁し、コンパスを見詰めて立つて居る。艦橋から眺めると、海はさながら雪山の起伏する如く、怒濤洶湧天を浸し、二千餘噸の軍艦は搖り上げ、搖り下げ、搖り倒し、搖り起されて、縱横動搖木の葉の如く翻弄せられて居る。海の眞威を知れよとばかりに逆卷く激浪は連りに舷側を越へて艦内に打ち込み、甲板に溢れて滔々下甲板までも浸入する。見上ぐるばかりの巨濤が凄まじき音して崩れ倒

れる有様は坐ろに物凄い。アノ波一つ掬へば木造の本艦の如きは一溜りもなく砕けて仕舞ふと思へばゾツとする。船が波の頂に乗つた時には波は遥かの底にある。船が波の底に下つた時には波は遥かの上に見へる。漢詩人の所謂九天に昇り九地に落つるとは、斯かる場合の形容であらうと思はれた。

風は少しも衰へず、波は愈高く、艦の動揺は四十度を越へた。甲板には命綱を張り、人は之に縋つて漸く往来をして居る。而かも尚ほ油断をすれば足を辷べらし、甲板の上に叩き付けられる。綱渡りの如く、酔つぱらいの如く、蹌踉蹣跚として甲板を歩む姿は荒天の餘興である。若し生意氣に綱にも依らず駈け出して倒れたが最後コロ〱と手鞠の如く轉げ、ズル〱とスキイの如く辷べり、甲板の凸起物に衝突して、彌次の喝采を受けつゝ向ふ脛を擦り剝ぎ、頭に瘤を造くる位はまだしも、時としては手足を挫き或は氣絶することさへある。候補生の便所は前甲板にある。小便すらも楽ではひれない。

航海中は艦の動揺に依る轉動を防ぐ爲め、大砲端艇を始め、艦内一切の移動物を甲板若くは舷側等に緊止し、殊に荒天の場合には一層厳重に固縛する。之が陸上の人間が外出の際戸締りをすると同じ程度に、航海準備の重大なる一作業である。上甲板と云はず、下甲板と云はず、到る處に頑丈なる綱が二重三重に張り廻はされてある。而かも長き航海や或は動揺の烈しき時には、如何に固く縛つても次第に弛みを生ずる。今しも上甲板賄室の屋根に格納せる野菜箱の縛り索が緩んで蓋が少しく開いた。締め直し方を命ずる暇もなく、船が大きく一揺れすると共に数十の馬鈴薯が甲板に轉げ落ちた。一揺れ二揺れする間に二三百の薯がコロ〱〱と甲板を轉げ廻はり、愚圖〱すれば湖に流されて吐水口から艦外に流出して仕舞ふ。冷蔵庫の設備なき舊式艦にては航海五日續けば、生糧品として殘るものは唯薯と玉葱ばかりである。青い菜つ葉などは酔つぱらいの顔以外、藥にしたくも見ることは出來ない。三度の食事は悉く罐詰と干物ばかり

である。遠洋航海中、牛鑵と馬鈴薯、鮭鑵と玉葱とに苦しめられて以來、今に至つても此の四つのものは嫌ひた食物のブラツクリストに載つて居る。牛鑵の煮たのを雜布と呼び、鮭鑵の煮たのをヘドと呼び、候補生一同の最も避易したる食事であつた。航海中、日本へ歸つたら何を一番最初に食ふかとの問題に對し、十中の七八人迄は鰻飯にあらず、鯛の刺身にあらず、菜つ葉の漬物で茶漬と云ふことであつた。鑵詰とは云へ毎日牛肉を食ひながら「アヽ菜つ葉が食ひ度い」と云へば「そんな贅澤なことを云ふな」と叱られる。物の價値は質の良否よりも生産の多少に比例すると云ふ經濟學の原理が實地に證明せられる。

生糧食物が缺乏すると壞血病とかに罹り、手足が腐り落ちると云ふことである。昔の純帆前船時代に於て海員の最も苦しみ、最も恐れたるものは此の壞血であつた。世界一周に三年を費やし、歐洲より印度への往返に二年を要したる時代に在つては、半歳以上も海上に浮んで一度も錨を港に投ぜぬことは珍らしくなかつた。從つて生糧食缺乏の爲め乘員の過半は此の病氣に犯され、甚だしきは全員全滅して無人の容船が洋上に漂流したことさへあると云ふことである。旅順の戰役に於ても「ステツセル」將軍の最も苦しみたるものは乃木軍の突撃よりも寧ろ壞血病の猖獗であつたと云ふことである。左れば遠航の艦船に於て水と共に最も必要なるものは生糧品である。今後尚ほ四十餘日の航海を續ける本艦に取りては、好きと嫌ひとに拘はらず、馬鈴薯は命の親である。一個と雖ども無駄にすべきでない。主厨が二三人で拾つて居るが間に合はない。「當直候補生薯が逃げるよ」と當直將校から注意される。用鮮目に

「當直薯拾ひ方」

と云ふ珍號令を降すと、當直艦の水兵が四五十人甲板に飛び出して薯拾ひを始めた。動搖の爲め歩行さへ困難な甲板に大の男が四ツ匐ひに這ひながら、左右前後に轉がり廻はる薯を追つ掛くる様は眞に珍無類、候補生迄が彌次りに飛び出

す。活動寫眞の好材料じや。滅多に笑はぬ航海長までが腹を抱へて居る。之も荒天が生む一喜劇である。

日沒に至つて密雲の間に時々寸隙の青空を現はした。風と波とは尙ほ少しも衰へない。引き斷ぎつた樣な黑雲の裂目から吐き出される月の光が氷の如く銳い。毒々しい惡魔の如き雲が矢よりも早く月の面を掠めて飛ぶ。月が走くか、雲が走くか、天上の雲紋は刻々に變化する。墨の樣な眞つ黑い雲に樣々の形をした大白銀の縫緣が物凄く彩られる。右に在るかと思へば左に移り、左に在るかと思へば右に移る。坐して兩舷に月を見ると言へば頗る詩的であるが、舷動搖の爲め右舷の月を左舷の舷側を越へて見るなどは決して樂な月見ではない。月の風情は見る人の心に從ひ、悲しくもなり、嬉しくもなり、面白くも見え、寂しくも見へるが、荒海の月ほど凄にして怕なるものはあるまい。波は薄白く輝いて暗き月影が一段の凄味を加へる。

○

地球の中心を過ぎる平面と、地球の表面との交はる線を大圈と云ふ。某地より某地に到る最近距離は兩地を通ずる大圈の弧上である。航海術上に於ては之を大圈航法と呼んで居る。此の航法に依つて東京灣よりバンクーバー或はシヤトルに赴くには、北緯六十度以上のアリユーシヤン群島附近までも北上し、寒氣の苦と流氷の險とを冒さねばならぬ。故に普通の船舶は兩地の中間に在る北緯四十五度乃至五十度位の地點を撰び、東京灣より該地點迄と、該地點より目的地迄との二個の大圈航法を執るのである。之を聯成航法と稱へて居る。

抑も太平洋とは平穩なる大海の意である。此の名の起源に就きては世上二個の異說がある。卽ち其の一說に從へば初めて世界を一周して南米の南端にマガリエン海峽の名を遺したる有名なる西班牙の大航海家マガリエンが、寒潮激する南米の南を繞り其の西岸に出でて若波平らかなる大洋を望み、之に太平洋と命名したとある。他の一說に依れば、コ

ロンブスの亞米利加發見後幾千もなく、之も西班牙の探險家バルボアがパナマ地峽を横切つて初めて西方に大海の湛ゆるを發見し、風波の靜穩に因んで太平洋と名づけたとある。マガリエンが風浪險惡なる南米南方の難海を過ぎて初めて碧波浩蕩たる大海に出て、太平洋と名づけたのも理由がある。バルボアが熱帶無風、波油の如き海を眺めて太平洋と呼んだのも理由がある。何れにしても太平洋は其の名に照らせば海波平穩なるべき筈である。併しながら事實に於て太平洋の波は其の名の如く太平なるものではない。殊に北東風の季節に於ける北太平洋は世界に有名なる荒海である。

此の度の航海、北東の信風季節に過ぎて南西の季風期に入つて居たにも拘はらず、五十日の航海中に前後三回の大暴風に遭遇した。其の他荒天の爲め帆を縮め甲板に索を張りたることは數回の多きに達した。三回の暴風中、第二回目は初回よりも烈しく風力十一を稱へ、第三回は第二回よりも更に猛烈にして暴風三晝夜に亘り、兩回とも汽機の助を借るに至つた程である。第二回の暴風は横須賀出港後三週間を過ぎた四月十一日であつた。前日の夕刻來晴雨計急降を始め、風力漸く增加して天候險惡の兆を現はした。

「バロメーターが大分下がるよ、今夜は乾度「總員上へー」が有るぞ。

「下がれ〳〵明日も天測は休みじや。少々ガブつても構はん天測の無い方が樂じや。

「總員上へー」もなく、翌朝起き出づると風浪果して狂暴を極め、上檣は夜の間に卸してある。晴雨計は猶降る。荒天の徴歴然じや。副長が心配そうな顏して頻りに空を眺めて居る。朝食後荒天準備の爲め「總員上へー」の號令が下つた。候補生も最早や御客樣扱を許されず、各自の受持部署に從ひ兵員と共に檣上に登れと云ふ命令じや。之には一同少なからず面食つた。自分の部署は前檣樓である。「登り方用意」の號令で水兵諸共舷側の索梯に就いた。が、づる〳〵仰向けにふるひ落されそうじや。

四月の十一日と云へば東京あたりでは春風駘蕩正に櫻の好時節であるが、北緯四十五度の北太平洋は寒雨氷の如く冷氣骨に徹する極寒の世界である。雨と飛沫とに凍ふる梯索に掛けたる手足は、寒氣に痺れて殆んど感覺を失せんばかりである。「登れー」の令にて勢鋭く水兵に續いて駈け登りたるものゝ、動搖烈しき共の上に狎れぬ業とて體の釣合取れず、凍へる手と震ふ足とに、索梯を一段〳〵握り締め踏み締めつゝ危ふき腰付にてノソリ〳〵登つて行く。船が傾く毎に體が仰向きになつて海中に落ちそうじや。親索にシガミ付きて傾の直るのを待つて居る。沈着なる候補生がヤツと索梯の半分位を登りたる時、敏捷なる水兵は早や檣樓の上に立つて居る。口の惡るい士官が下から「〇〇候補生辨當は要らないか」などゝ皮肉を言ふ。

幸に落ちもせず、辨當も要らず、どうにか、こうにか檣樓の上に登り付けば、手も足も凍へて指先は切れるばかりに痛む。凛冽たる北海の寒風が雨に濡れた服を吹き捲つて、寒さが骨の髓まで浸み透ふる。霰交りの雨が横様に顔を打つて鼻も耳も斷ぎれそうである。殊に動搖は甲板よりも遙かに烈しく、恰かも鞦韆共の儘で迚ても立つては居られない。兩腕の間に索を抱へ込んで纔かに體を支へて居る。仕事どころか我が身一の始末にさへ困つて居る。自分ながら意氣地の無きに愛想が盡きる。

一同部署に就き縮帆の作業に取り掛つた。風浪怒號の爲め檣上と甲板とは例の如く言語不通じや。どうした機みか、前檣下帆の揚索が少しく緩み過ぎた。全力を以て帆を壓せる強風は此の寸隙の虚に乘じて忽ち帆を煽つた。三度四度煽ふる間に帆に取り付けられた一握りもある大きな麻索が、朽繩の如くプツ〳〵と切れた。今は一絲の帆を拘束するものもなく、雨に濡れて硬わばつた十間に五間の廣帆が風にひらめく國旗の如く、パタン〳〵と煽ふる響と勢とは檣諸共吹き飛ばされるかと疑はれる。恰かも轡を離れたる悍馬の如く、檻を脫したる猛虎の如く、暴れに暴れ、狂ひに狂

ひ、流石に老練なる副長も勇敢なる水兵も、唯アレ／＼と云ふばかりで手の下し樣がない。暫らく間、風と浪の為す儘に委かす中、革の如き帆布は遂に眞ん中からパチンと裂けた。

船は益ガブる。寒さは愈嚴しい。雨は襦にまで徹し、歯の根振いて言葉も碌々出ない。風は尚ほも吹き募つて裂けた帆を猛烈に煽つて居る。ビリ／＼ブル／＼檣までも震動して、何うなることかと餘りの物凄さに身振ひがする。艦橋からは副長が頻りに手を振り動かして、何事かド鳴つて居るがチツとも聞へない。甲板を見下ろすと、前檣の周圍は人を以て埋められ、何れも茫然として帆の煽ふりを仰ぎ見て居る。巨濤が舷を打つて船が大きく揺れる毎に、バタ／＼と將棊倒しとなり、コロ／＼と芋の如く轉げる。艦内に打ち込んだ波がザブリと其の上に注ぎ懸かる。起き上がる。又轉げる。寒苦の中の奇觀である。更に海面を見渡すと、雨雲低く罩めて眼界廣からざるも、白波逆巻く狂瀾は長城の連亘する如く、雪山の起伏する如く、千波聳へて萬波倒れ、轟々鏗々萬雷の叫びを發して居る。中にも激浪艦首に砕けては飛沫奔騰數十尺、白龍の白煙を吐いて天に冲するの狀、豪宏壯美譬ふるに物がない。今日始めて海の眞の豪と、波の眞の美とを観た。之が風一たび收まれば千里一碧、輕舟を滑らすかと思へば、海の變化の大なるに驚かざるを得ない

副長が遂に老練の下士を率ゐて自ら檣樓上に登つて來た。豪膽敢勇の水兵はハネ釣瓶の桅木の如く上下するヤードに渡つた。手足は凍へて指の屈伸さへ不自由である。帆の煽りに連れてヤードはグラ／＼と動いて居る。兩腕にシツカと索を擁して居てさへ、尚ほ吹き飛ばされそうな此の強風に、尚ほ揺り落されそうな此の激動に、索一本を命の支へとしてグラ付くヤードの端に出て、荒れ狂ふ帆と戰ふは眞に決死の事業である。十字火の下に突撃すると、危険の度に於て大差はない。水兵は偉いと心から思つた。權力を背景とする候補生なる肩書を笠に着て、何にも出來ぬ自分達が、釣床の縛り方が緩いと云つて、甲板の拭ひ方が惡いと云つて此の勇敢なる水兵をコヅき廻はすことが氣耻かしくなつた。千

辛萬苦二時間を費やして辛やく帆をヤードに縛り付けた。ヤードより歸り來る水兵の手は赤く膨れて唇の色は褪せて居る。

風は終日力を緩めず、船は鞠の如く輾轉して居る。今は次第に動搖に狎れて、前甲板に在る便所に通ふ甲板の綱渡りも餘程上達した。食事の時天井からブラ下げた茶瓶に頭を叩かるゝことも稀となつた。夜に入つて風は一層力を增し、遂に風力の絶頂なる十二に達した。船は衝突せぬ限り決して破壞せぬもの、破壞せぬ限り決して轉覆せぬものとの自信を得ながら、尙ほ檣に叫ぶ風の凄さよ、船底を叩く波の恐ろしさよ。ハンモックに響く船體の軋る音も心地が惡るい。

終日の烈しき動搖に手も足も綿の如くなえて、風の怒號も、波の猛擊も打ち忘れ、ハンモック內の夢は深かつた。何時頃であつたか夜中不意に「總員上へ｜」の號笛が響いた。荒天の時は何時不意に起されるかも知れぬので、服のまゝ床に就いて居る。外套引つ掛け甲板に飛び出すと、空は墨を流すが如く甲板咫尺を辨ぜない。唯山の樣な大波が目よりも高く、薄白く光つて居るばかりである。ガブるわ〳〵、船は恰かも祭禮の獅子舞の如く、右に左に前に後に滅茶〳〵に搖れ動いて、立つても坐つても居られない。檣桁と索條とに激する風は百の猛虎の嘯くが如く、舷側と船底を打つ激浪は萬雷の吼へるに似て居る。張り裂けそうな帆がドロ〳〵ビリ〳〵と呻なる。切る樣な寒風が霙を横に吹き飛ばす。是等の音が雜然として暗中に鳴り轟いて居る。地獄に音樂と云ふものがあるならば斯んなものかと思はれる。眞に天裂け海覆へると云ふ光景である。斯かる間に士官の怒號する聲と、傳令のパイプとがト切れ〳〵に聞へる。副長以下各士官は昨日より連續の號令に聲が嗄れて仕舞つた。傳令役を仰せ付かつた候補生は前後艦橋の間に引き切りなしに往返して居る。暗さは暗し、船はガブる。索に跌き、足を滑べらし、一往復中轉び倒ること二度三度、生爪蹴剝いで淚ホロ〳〵、危險にして物凄きは荒天の暗の仕事である。此日も終日暴風怒濤と戰つた。時化はモウ懲り〳〵した。

翌日に至つて風は漸く凪いだ。二晝夜に亘つて吹き荒んだ暴風の名殘とて、波は尚ほ甚だ高いが最早や飛沫散る白波は見へない。紺碧に澄んだ大きなうねりが岡の様に連つて居る。船は總帆を展じてユラリ〳〵と靜かに之を乗り越へて行く。滿天の雲は霽れて麗かな太陽がキラ〳〵と心地よく輝き、帆の面からも甲板からも、白い蒸氣が淡く夢の様に立ち昇つて居る。帆を洩れる風は冷や〳〵として氣持が良い。荒しの後の爽快は、荒しの前の陰欝と荒しの中の苦惱とを償ふて餘りがある。昨日の顰め面と憂ひ顔とに引き代へ、今日は人々の面が喜悦に輝いて居る。荒天中姿を見せざりし馬鹿鳥が何處からともなく船尾に集つて來た。餌を求てクヮ〳〵と鳴く無器用な聲も何となく懐かしい。

中二日距てゝ三度目の暴風に遭つた。今度は三晝夜續いた。暴風期の長い丈け波も亦一層高かつた。併し最早や怒濤澎湃の形容詞を繰り返へすの勇氣がない。

○

帆前艦にては夜間天候の急變に備ふる爲め、風に對して抵抗力弱き最上の二枚の帆は天候の如何に拘はらず、毎夕畳んで桁と共に甲板に降すことになつて居る。此の作業をエボリユーションと呼んだ。帆前艦に於ける兵員の配置は各檣と各桁とに分れて居る。例へば前檣に屬するもの、大檣に屬するもの、或は下桁を受持つもの、上桁を受持つもの等の如きである。斯かる横斷的配置に加ふるに更に右舷直と左舷直とに縱斷せられてある。此の前檣對大檣、右舷對左舷と云ふ如き部署配置の對抗が自ら兩者の競爭心を誘起するは、名譽心の強き人間界に於ける自然の結果である。

小兒の遊戯と雖ども勝てば歡び、敗くればショげる。勝利を愛するは人間の本能である。毎夕艦内に於て行ふエボリユーションが、前檣と大檣との競爭を誘起するのも亦自然である。併しながら内地に在る間は他に幾多の慰藉もあれば娯樂もあり、加ふるに人間の獸的競爭心を緩和する道もある。從ふてエボリユーションの競爭にも何等の緊張味を見ざ

るのみならず、長き碇泊中の如きは勝つも敗くるも不關心の狀態で、受持士官をして兵員の怠慢に切齒憤慨せしむることもあつた。然るに一たび本國を去つて波濤萬里の遠航の途に上ると、最早や飲食以外に人間慾を滿たすの途が無いそこでエボリユーションの競爭が日毎に烈しくなつて來る。

夕刻の軍事點檢後副長がエボリユーションの號令を下す。橫須賀出港の當時は擧動不活潑の爲め兵員は屢副長から叱られた。其の後十日と過ぎ、十五日と經つ間に、前檣と大檣との競爭は次第に激烈となり、遂に分秒の遲速を爭ふ樣になる。軍事點檢解散の令が降ると、まだエボリユーションの號令なきに兵員は早や持場〳〵に就いて索など繰つて居る。副長が以前と反對に「號令の掛らぬ前から勝手に索に觸れてはイケない」と叱かる。

「總員上へー」

水兵達はソレとばかり、次の號令の下るを待たず先を爭ふて舷側の索梯に駈け登る。氣の早い者はスタコラ〳〵檣樓迄も登つて行く。每度のことゝて副長も意地が惡るく、默つて見て居る。檣樓に登り切つた處で「當直殘れー」(「總員上へー」取消の意)の號令を下す。水兵達はイヤな顏もせずノコ〳〵と降りて來る。時には一人ぐらい檣樓の蔭に潜んで居て見付けられる滑稽もある。一回のエボリユーションに二度も三度も「總員上へー」をやり直すことがある。夫れ程水兵達の競爭心は熱して來る。中にも競爭の最も激烈なるは甲板に於ける索の張り合である。狹き甲板に多くの索を導くことゝて、前檣の索は後方に、大檣の索は前方に導びき、互に甲板上に交叉するものがある。出港後三日四日は兩者互に讓り合ひ、毫も混雜を來さない。七日十日と經つ中に受持の索を一刻も早く張らんが爲め、互に他に道を讓らない。甲板上に衝突が起る。二十日と經つと擲り合が始まり、取つ組み合が始まり、大混亂を生ずる樣になる。

單に作業の競爭が烈しくなるのみならず、若き兵員は一般に短氣となり、怒りつぽくなり、氣が荒くなり、拳固が飛

び易くなる。或人は此の現象を以て異性に遠ざかる結果であると云つた。或はそうかも知れぬ。血氣旺盛、精力の强烈なる若い水兵をば、一月も二月も狹き艦内に閉ぢ籠めて、信號旗と梅干以外に赤い色を見せぬとすれば、自ら殺伐の氣を帶びて來るのも無理は無い。凡そ戰場に尙ぶ處は殺伐なる野獸性である。然るに異性との觸接は此の殺伐の氣を緩和し銷滅せしむるものである。是れ古來戰場に婦人を忌む所以であらう。昔の婦人が夫の出陣の鎧櫃の底に春畫を入れたる如きも、此の間の消息を語るものである。攻擊前成るべく異性に飢へしめて、戰勝後異性の劫掠を許せば、軍士は虎の如く勇猛となるであらう。之が戰爭道德尙ほ低かりし時代に於ける軍氣振興の唯一の良法であつた。亞歷山も、成吉汗も、シーザーも、那翁も、近くは歐洲戰爭に於てさへ、敵にも味方にも此の法が用ゐられた形跡がある。帆走時代の海員が氣の荒らかりしは、其の不自然なる生活狀態に因る自然の結果である。罪は人にあらずして境遇にあるのじや。

○

斯かる單調にして無聊、殺伐にして勞苦なる帆走生活中にも尙ほ幾分の愉快と情趣とはある。時としては數十乃至數百の海豚が群を爲して船を追うて來る。風順にして艦速適度なる時には、後になり先になり三日も四日も船を離れない。數百の海豚が浮きつ沈みつ、小波走る紺碧の海面に黑き鰭と尾とを交互に出沒せしめて群游せる有樣は壯快なる奇觀である。船を泳ぎ越しては返へり來り、右舷に在るかと思へば艦底を潛つて左舷に現はれる。海豚に逐はれた飛魚が銀の鰭を日に輝やかしつゝ、水面をかすめて彼方此方に飛ぶのも面白い。

海豚の在る處には馬鹿鳥の之に伴ふのが普通である。茶色の大きな翼を廣げた數十羽の鳥が、海豚の背鰭群立つ水面を掠めて飛び廻はる光景は、恰かも魚群と鳥群とが水空の境で戰へるかの如き觀がある。馬鹿鳥が海豚を慕ふは、海豚に追はれて水面に浮び出てたる小魚を側から御馳走にならんが爲めである。馬鹿鳥案外馬鹿ではない。己の胃汁を絞ぼら

れ、生血を吸はれて尙ほ氣付かず、或種階級の懷に奉仕する人間の方が餘程馬鹿じや。

或日不味い鮭罐で晝飯をやつて居ると、誰かゞ馬鹿鳥を釣つたと注進して來た。晝飯を掻き込んで室外に出て見ると、二人の水兵が大きな鳥を抱へてプープデツキから降りて來た。羽は茶褐色で嘴は鷲の如く曲つてゐる。翼は三つに折れて廣げると一間以上もある。流石は太平洋を跨に掛けて飛び廻はるだけありて體に比して翼が非常に大きい。甲板に放つと兩翼を張つて頻りに飛躍を試むるが、翼が甲板に支へられてどうしても飛べない。怒濤を家とし、狂風に戯る馬鹿鳥も甲板に立つては水を離れし河童同樣、唯徒に藻掻くばかりである。其の恰好の面白さに周圍からワイ〱囃やし立てると、目を瞋らし、嘴を開き長翼を廣げて、グウ〱呻りながら人を目懸けて追つ掛けて來る。由良サン此處よと前後から相手にすると、馬鹿鳥先生畢生の知慧を絞り、尻を持ち上げると共に後方に向つて糞を飛ばすこと一間あまり、狙ひ違はず一人の候補生のヅボンに命中した。拍手喝采がドツと起る。烏賊は黑血を吐き、蟬は小便を掛けて敵を防ぐが、糞便に依つて敵を惱ますは楠公の赤阪城以外、馬鹿鳥に於て初めて之を見た馬鹿鳥君頻りに此の戰術を用ゐて縱横に甲板を驅け廻はりながら處嫌はず糞彈を發射するばかりか、ヘドまで吐き始めた。甲板到る處糞吐狼藉の景じや。

プープに出て鳥釣を見た。數十の鳥が遠近列を作つて波に浮び、船から流す殘パンを待つて居る。鰻鈎ほどの針にハムの切れ端などを刺し、針に近く小木片のウキを取り付けて海中に流す。船の速力に依りウキが波を切つて恰かも小魚の泳ぐが如く見へる。鳥は忽ち其の周圍に集まつて來る。食はふか、食ふまいかと、小首を傾けて考へて居る。一寸啄いては飛び去り、空を一周り飛んでは又やつて來る。其の用心深き處まんさら馬鹿では無い樣じや。

忽ち一羽引つ懸つた。頸を延ばし、兩翼を擴げ、バタ〱と足掻き苦しむ樣可哀想な程じや。三十分ばかりの間に五

羽かゝつたが、三羽は索が切れて逃げた。今の今までも死物狂ひに暴れて居た鳥も釣糸が切れると逃げもせず、ケロリカンとして仲間と共に再び餌を漁つて居る。豪膽か無神經か、此のあたり人間の臘味噌では判斷が出來ない。一羽の鳥が今しも針に懸つてバタ〳〵と猛烈に苦しみ暴れて居る。數羽の鳥が飛んで來て、苦しめる鳥を圍んで共にバタ〳〵やつて居る。仲間の危難を救ふ爲めか、仲間の餌を奪ふ爲めか判らない。其の中どうした摑みか、一羽の鳥が釣糸に翼を掃まれた。二羽の鳥が大暴れに暴れた爲め糸は忽ち切れたが、摑んだ糸と引つ懸つた針とは外づれない。二羽の鳥が互に暴れて互に引き合ひ、船から見へなくなるまで狂ひ廻つて居た。他の鳥は平然として船の後にクツ付いて來る。人間が己を詐り瞞ますことを全然知らぬらしい。馬鹿鳥でなく純無垢の正直鳥である。併し正直即ち馬鹿と云ふ現代の人間の言葉を以てすれば、馬鹿鳥の名も或は適當かも知れぬが、夫は決して不名譽ではないであらう。

釣つた三羽の鳥はサン〴〵嬲つた揚句、麻醉劑で殺した。皮は剝製となし、肉は水兵逹の腹に入つたが餘まり美味くは無いと云ふことであつた。

今日は朝から見馴れぬ形をした大きな魚が五六匹艦尾に蹤いて離れない。漁師出身の水兵が鱶じやと言つた。幸ひ日曜じや、午後から鱶釣をやることになつた。指ほどの大サある牛肉釣に鑵詰肉を縛り付け、二寸周り位の索を付けて艦尾から流して置いた。一人づゝ交代で番に付いて居る。一時間も經たぬうち番人から「懸つた〳〵」と報告がある。ドヤ〳〵とプープに驅け上つて見ると、大きな索がピンと緊張してピク〳〵と搖れて居る。試みに引いて見ると中々重い。一人や二人では迚も張れない。七八人で索を引つ張ると、海中で暴れて居る樣がアリ〳〵と手に響いて氣持が惡い程じや。次第に引き寄せるに從ひ二間以上もある大きな怪物が、黑い背と白い腹とを現はして苦しみ悶へて居るのが見へる。時には大きな尾で海水を跳ね飛ばす勢が凄まじい。慥かに鱶じや。水際までは引き寄せたが、鱶は必死の力を振

ふて抵抗し容易に上らない。愚圖〳〵すれば索が切れそうじや。テークルの助けに依つて漸く引き揚げたが、掉尾の一撃と云ふか水際を切る時の最後の猛擊には飛沫が三間も高く飛び上がつた。其の如何に力强きかゞ察せられる。甲板に引き揚げたる後も尙大きな尾と鰭とをバタ〳〵動かして暴れて居る。誰も近寄る者がない。一人の水兵が大きな棍棒で「コン畜生、人間を何人食ふたか白狀しろ」と、罪人を拷問するかの如く、頭を滅茶苦茶に擲り付けると、キユーと云ふ樣な氣味惡るき聲を名殘りに動かなくなつた。長い青黑い背がピカ〳〵と日に輝いて居る。頭は一寸蛇に似て見るからに憎らしい。

腹を仰向けにして見ると鼻の先よりは大分奥の方に大きな口がある。鐵の鈎をも咬み切らんばかりにガツシリと齒を食ひ締めて居る。金棒を銜き込んで捏ねあけると、南洋の土人が矢の根に使ふと云ふ三角形の鋭い齒が二重に密生して居る。コイツでガブリとやられたら、人間の腕などは一溜りもあるまいと思はれた。コンナ獰猛な奴が跋扈して居ては海も中々險呑じや、臍のあたりの小鰭の下に五寸位の小さな魚が一匹しつかりとクツ付いて居るのを發見した。パイロツトフイツシユと稱へて、一匹の鱶には必ず一二匹のパイロツトフイツシユが寄生して居ると云ふことである。此の寄生魚は常に鱶の腮に附着し、鱶のおこぼれを頂戴して生きて居ると云ふ横着者怠惰者で、鱶を離れては自活の出來ぬ意氣地なしである。人間社會にも主人の威光に依りて身の安全と生活とを保證せらるゝパイロツトフイツシユが澤山居る。併し彼等に鱶のパイロツト、フイツシユの如く主人と生死を共にするの覺悟ありや否や疑問である。此の點に於て鱶のパイロツト、フイツシユは人間のパイロツトフイツシユよりも遙かに忠節である。

○

風輕く帆裾はダラリと垂れて居る。海はドロンコに和ぎて小さき漣がペチヤ〳〵と舷側を舐める。艦速僅に一二海

里、熱帶圏内の帆前航海ほど悠長なるものはない。無線電信など云ふ文明の利器も未だ無ければ、一つの港を出てゝより次の港に着くまでは、人間社會と絶縁して全く仙人の生活である。親が死なふと家が焼けよと知つたことじやない。明けても暮れても眼に入るは唯雲と波、寝ても覺めても言葉を交はすは同じ顔。時々襲ひ來るスコールが船の單調を破ぶるばかりである。

晴れ渡りたる青空に一沫の浮雲が現はれたかと思ふと、見る／＼廣がつて天の一方が灰色に變る。スコールの襲來！。上帆を絞る。甲板には雨水を溜める爲め洗濯桶やバケツが並べられる。一日五合の水で辛棒せる水兵達は天水浴をやる爲め素つ裸になつて待つて居る。鼠色の雲は次第に檣頭にまで廣がつて來た。紺碧の海には小さい白波がチロ／＼と立ち初める。ソヨ／＼と冷つこい風が帆に孕んで帆縁が輕くビビる。大粒の雨がポツリ／＼と白く乾いた甲板に飴色の圓い紋を畫く。裸の水兵が甲板に飛び出して來る。雨も風も波も次第に烈しく強く高くなる。海には白馬が駈つて藍地に波の絣を染める。帆は太鼓の如く膨んでパリ／＼と鳴る。箭の如き雨が降りしぶきて檣頭が霧にかすむ、電光ピカ／＼、雷鳴ゴロ／＼、水兵達は臍の危險も忘れて體にシヤボンを塗り付け／＼積日の垢を洗ひ落して居る。

風が意外に强過ぎる。上檣が危險となつた。驟雨の眞つ最中「總員上へ！」「上桁降し方」の號令が懸る。雨水浴半ばの兵員は褌を締める暇もなく、手拭一筋腰に卷き付け檣上に駈け登る。聊か風俗壞亂の嫌ひがある。時には斯んな活劇も演ぜられる。併し是れなどは未だ仕合せじや。折角準備して待つて居ると、知らぬ顔して隣を過ぎ去る薄情なスコールもあれば、塗つたシヤボンを未だ洗ひ落さぬうち、ケロリと霽れる意地の惡いスコールもある。シヤボンの仕末か大變じや。幾ら湖水で洗ひ落しても、後がギチ／＼とクツ付いたり、ピリ／＼と引き釣つたり、不愉快此の上もない。安シヤボンのイヤな臭が鼻に着く。

大きなスコールの去つた後は何とも云へぬ爽快さである。空が再び綠りに霽れる。海が再び藍色に澄む。雨に濡れた帆からは涼しい風が湧いて來る。塵一つ留めぬ水々した冷たい甲板を跣足で歩く氣持は一歩千金じや。

○

科學の進歩は自然を征服するのか、自然を利用するのか知らぬが、二十餘年前自然の風を友ともし敵ともして、横須賀より晩古波まで五十日を費やしたる帆前航海の如きは、軍艦の進歩せる今日より見れば全く過去の夢物語に過ぎない。當時二千餘噸の比叡を手鞠の如く掀飜したる北太平洋の風浪も、四萬噸の現代戰艦に對しては其の猛烈の威を逞しふすることは出來ぬであらう。生死を賭して風と爭ひ波と闘ひ、千辛萬苦の裡に自分達が學び得たる帆前操法の經驗も、現代の海軍に在つては半分の價値も無いことになつた。自分が今斯んな記事を綴るのは、汽車開通し橋梁架設せられたる今日、大井川の川渡を語る雲助の苦心談と何の異なる處はない。閑人の閑事業を通り越して愚人の愚擧である。約束の「海」の記事を滿たす爲めとは云へ、書きながら氣耻かしい。

汽車の開通と橋梁の架設とは自然に大井川から雲助の紋々姿を驅逐した。船舶汽械の發達は世界の海洋から帆船の影を殆んど一掃した。然るに世間には尙ほ目に見へぬ無價値の經驗なるものが案外尊重せられて居る。否な非常に幅を利して居る。此等經驗の所有者は或は時勢に盲なるが爲め、或は自家の利益を擁護せんが爲め、時代錯誤の舊き經驗をば唯一の金科玉條として、汽車の走る世に尙ほ雲助の要を說き、汽船の浮ぶ世に尙ほ帆前の利を稱へて居る。今の老人の多くは斯かる無價値なる經驗者であると共に、其の随喜者である。老人は過去の功勞者たる點に於て國家的優遇を與へ社會的尊敬を拂ふは人間としての道であらう。併しながら其の無知と利己とを問はず、彼等老人達が其の現代に無價値なる骨董的經驗を基礎にして權力を振ふに於ては、國家社會の進歩を妨ぐること大なると共に、國民の迷惑之に過ぐるも

のはない。吾人は自己辛酸の結晶たる操帆經驗の無價値となりしことを悲しむよりも、之を無價値とならしめる世の進歩を祝するものである。世界五大國の一とか、三大國の一とか己惚るゝ日本國民たるもの、一日も早く政治上思想上の雲助や帆前船を驅逐して汽車汽船の世と爲すべきであらう。

危險海

のるか、そるか、乾坤一擲、獨逸が米國を敵に廻はして迄もと、最後取つて置きの作戰たる無制限潜水艇戰を開始したるは大正六年二月の初めであつた。獨逸の此の大膽なる作戰の成否は、當時最も重大なる又最も興味ある問題として世界の視聽を峙たしめた。本氣か政略かは知らぬが、獨逸は六個月以内に必ず聯合國を屈伏せしむべき旨を絶叫し、聯合國は潜水艇戰恐るゝに足らずと高唱し、互に其の宣傳に力めて居た。何れにしても獨逸としては自國を勝利に導く爲めに殘されたる最後唯一の作戰たりしことゝ、之を口實として、米國が必ず聯合國に加擔して參戰すること丈けは疑ふべからざる事實であつた。獨逸の潜水艇戰は遂に不成功に終りしとは云へ、自分は海軍々人の見地に於て獨逸の作戰を是認するものである。

獨逸の潜水艇戰開始に對し、聯合國は口でこそ强がれ、心中に於ては至大の不安と恐怖を抱き、米國を味方に引き入れる爲めに有ゆる手段と策略とを運らした。英國の戰時宣傳大臣たるノースクリッフが先づ大西洋を西に渡り、得意の雄舌を振つてヤンキイの正義人道を唆り立てた。次に佛國のジョッフル元帥がニューヨークに顯はれ、米國獨立戰爭以來の米佛關係を說いて歐洲の救世主と米國民を煽て上げた。伊太利も白耳義も我れ後れじと使節を米國に差遣し、米國起たずんば世界の平和と正義とを如何せんと、己惚强き星條國民の自尊心をイヤが上に焚き付けた。華府ホワイトハウス

の正門には英佛伊白の國旗が恰かも朝貢國を示すかの如く、使節の來るに從ひ順次に揭げられたと云ふことである。巧妙なる言論の宣傳と、峻烈なる官權の威力とに依り、單純にして野次性に富むヤンーキーの反獨輿論は遙かに高まつた。僅に三個月以前に於て、聯合國も、中歐同盟も米國より見れば一視同仁と稱へたる大統領ウイルソンさへ、今は獨逸を以て平和の敵、人道の賊、民主の仇と罵倒するに至つた。シカゴ市長はジョッフル元帥を歡迎せざりしとの理由を以て獨探の誘を受け、遂に其の職を去つたと云ふ報さへある。斯して同年三月米國は果して獨逸に對し宣戰した。蓋し米國は聯合國の勝利よりも獨逸の勝利を恐れたからである。

人を見たら泥棒と思へとは君子國と誇る日本の諺であるが、戰爭中外國人は何れの國に於ても敵探として嫌疑視せられる。公務出張の旅券を持てる日本の一官吏が、某國官憲の爲めに携帶品の嚴査は勿論、褌までも解かされたる憤慨談も耳にした。婦人尊重の歐洲に於て裸體美人の秘密檢査さへ行はれるとの噂も聞いた。花の美人が靴のカカトの內部に秘密通信文を隱して居たのを發見されたとか、雪の膚に藥品を以て暗號を認めて居たのを見付けられたとか、其の他種々巧妙なる間諜の談を聞くと檢査の嚴なるのも無理はないと思はれる。斯くも嚴重なる檢査の行はるゝ中に、獨り軍人ばかりは治外法權の特典を受けて居た。自分達も聯合國の軍隊に籍を置くの故を以て、旅券のビゼー、荷物の檢査などは極めて寬大であつた。殊に軍服を着用すれば、佛蘭西に在つては汽車賃金は四分の一、伊太利に於ては無料の特典にさへ浴した。二十餘年の軍人生活中、此の時ほど痛烈に切實に軍服の御利益と、軍服の御光りとを感じたことはなかつた。之じや軍人が戰爭を歡迎するのも無理は無い。

潜水艇戰の猛威は月と共に激烈となつた。二月には四十六萬噸の商船が潜水艇の餌となつて海底に葬むられ、三月には六十五萬噸、四月には更に增して八十二萬噸と云ふ最大レコードをさへ作つた。遭難に關する悲譚哀話が頻々として

櫂の歯を引くが如く傳へられる。一週間も食はず飲まずで、小さきボートに乘つて太洋中を漂流したとか、飢死者を以て滿たされたボートを洋上で發見したとか、氣味の惡るい話ばかりである。其の他一度港を出た儘、二月も三月も全然消息を絶つた船も尠くない。獨逸の得意に引き代へ聯合國は青くなつた。就中食料の殆んど全部を海外よりの輸入に仰ぐ英國に於ては、次第に食料の缺乏をさへ感じ始めた。流石に沈着靜冷なる英國人も狼て出した。宿屋料理屋に於ける皿數や分量の制限が行はれた。麥酒やウイスキイの製造高を減じ、飲酒時間が短縮せられた。泥縄の嫌いはあるが新に耕地開拓の政策も行はれた。「パンを惜しめよ」「パン國を救ふ」などの大きな宣傳ビラが、バスと云はず、トラムと云はず、壁にも、塀にも、到る處に貼り付けられてある。パンの色が黒くなり味が惡るくなつた。倫敦日本人俱樂部の牛鍋までも制限を受くるに至つた。由來戰報を公表して國民と喜憂を分つを主義とせる英國政府も、人心の動搖を防ぐ爲め沈沒船舶の發表を停止した。多知多策なるロイドジョージをして英國を救ふものは一にも船、二にも船、三にも船と絶叫せしめ、剛愎なる彼が辭を卑しふして米のウイルソンに泣き付いたのも此時である。獨逸潜水艇の名は英國民に取りては、惡魔の如く恐ろしく、蛇蝎の如く憎くかつたのである。

此時露國には既に革命起りて、歐亞の北半に君臨したる專政數百年のロマノフ家は腐木の如く倒れ、不運なる善人ニコラス二世は冬宮に幽閉せられて、あはれ樵夫に浮身を窶して居る。白面のケレンスキー政を執つて纔に班を聯合國に列するも、國帑既に枯渇して國民には最早や戰意がない。米國新に參戰したるも戰備未だ整はず、歐洲の戰場に威力を發揮するは尚ほ多日の後である。一方獨逸潜水艇の跳梁活躍は意表の外に目覺ましく、聯合國は日に月に窮迫の淵に追ひ詰められつゝある。若し獨逸の成績にして此の勢を持續せば、戰爭の終結も最早や遠くはあるまいとさへ思はれた。大廈の倒潰するは情に於て悲慘なるも觀に於て壯快である。全世界陸地の五分の一を占有せる大英帝國の破滅は情話に

於て忍びさるも、歷史としては羅馬帝國の瓦解以上に觀物である。四月大陸より倫敦に歸りたる自分は、歐洲に於ける戰時物價暴騰の爲め懐勘定に違算を生じ、豫定を早めて倫敦を引き揚ぐべく據なくされた。併しながら歷史上空前の大舞臺が今將に目の前に展開せんとしつゝあるを他所に、此儘空しく歐洲を去るは、美人の情けを振り切るよりも尚ほ心殘りである。今一月、今一月と荏苒停滯、ピカディリーの支那飯屋と「都」の鰻飯とに繁げ／＼足を運んだ。

聯合國に取りては幸福にも、獨逸潜水艇の活動は四月を絶頂として五月六月と次第に其の威力を減ずると共に聯合國の持久力も亦增大し、戰爭の前途は茫邈として再び迷宮に入つた。財布が最早や猶豫を許さない、愈倫敦引揚げの時が來た。然るに此時英國は獨逸潜水艇の爲め事實的に海の周圍を包圍せられて居る。精鋭强大なる英國の艦隊も出沒極りなき此の海中の魔敵に對しては如何ともすることが出來ず、艦隊自身の安全を保つ爲め北海の軍港深く姿を潜めて居る。百年持續したる英國の世界制海權は、あはれ此の時自國の沿岸にすら及ばなかつたのである。されば海外一歩を踏み出すには決死の覺悟を要した。海に依つて生存を保つ英國民が國家存亡の危機と悲鳴を擧げたのも當然である

當時英國より日本に歸るの途は、英國ニユーカツスルより北海を横つて諾威に渡り、露都を經て西比利亞鐵道に依るか、倫敦より英海峽、ビスケーを過ぎて喜望峰を迂回するか、リバプールにより大西洋を横斷して米國を經由するかの三つであつた。地中海航路は危險の爲め杜絶して居つた。此等の三航路中、第一の北海線は英國政府の直營航路で、危險區域も短く、使用船舶も優良なる上、往返共に驅逐艦が護衞し呉れるから先づ安全である。萬一やられても生命には別條はない。併し之に便乘し得るものは公務旅行者に限るので、在英日本海軍官憲の證明と紹介とを要する。第二の喜望峰航路は英海峽とビスケーの危險海あるも、日本郵船が通つて居るので幾分心丈夫ではあるが、自分としては既に一度通航したことがあるから面白くない。第三の經米航路は獨潜の最も跳梁する海面で、危險率が最も高い。且つ此の航

路には日本の客船は一隻も通つて居ない。遭難の場合、外國船の乘員が非基督教國民に對する種々忌むべき風評などを耳にすると、ヨモヤと思へど尙ほ何となく氣持が惡るい。陸軍などでは大西洋の危險を慮り、經米航路は命令に依つて渡航を禁止したとのことも聞ゐた。倫敦に在る會社員の如きは他國に轉勤若くは歸國の命を受けながら、海上危險の爲め出發を延期して倫敦にぶら付いて居る人も尠くなかつた。一方米國方面に在つても亦、渡歐の目的を以て折角紐育まで來ながら、海上の危險を恐れて渡歐を斷念し、空しく日本に引き返へした邦人も多かつた。中には特に中立國たる西班牙の船を撰んで乘船し、マドリツド、巴里を經て英國に乘り込む如き不便極まる旅程を取る人もあつた。甚だしきは君子は危ふきに近づかずとかで、一葦帶水の英海峽をさへ渡り兼ね、佛蘭西にも行き得ずして引揚げた人もあると云ふことじや。何にしても當時英國への出入は命懸けの冒險であつた。

倫敦名物の瓦斯も消へて、メーフラワーの花紅く、チエスナツトの葉青き五月となつた。今や倫敦最好の季節である。空は稼りに澄んで風は暖い。冬尙ほ青き倫敦芝が一層色を增し、公園の羊の穢ない毛も刈り取られた。大戰の眞つ最中とは云へ、美しきキニー・ガーデンや、廣きリツチモンド・パークの日曜の午後は盛裝美粧の人を以て滿されて居る。緩きテームスの流には青年男女がボートを浮べて柳の木蔭に戀を語つて居る。春は矢張り春である。海一つ距てた北佛の砲聲も砲煙も此處までは聞へない。此處までは臭はない。天上の怪魔ツエツペリンも連續の失敗に懲りてか久しく姿を現はさない。暗きピカデイリーの夜の街は性慾賣買の人を以て埋められて居る。唯毎日毎時停車場に降乘する無數のカーキー服と、食卓のパンの黑きと肉の薄きと、夜の闇の町とが、戰爭氣分を現はして居る。

五月も過ぎた。氣候の暖くなるに從ひ懐は次第に凉しくなる。最早や何時までもブラ〳〵して居る譯には行かない。潜水艇の跳梁は幾分衰へたとは云へ、五月中の沈沒船舶は尙ほ六十萬噸を越へて居る。海上は依然として危險で、大西

洋は旅客と海員との墓場である。被害船舶の慘話は日々の新聞を賑はして居る。戰場に命を捨つるは國民の義務、軍人の職責として少しも憫むに足らない。併し無責任の一船客として鱶の餌となるには尙ほ聊か未練がある。國には妻もあれば子も待つて居る。貧乏者の自分が死ねば彼等は餓へねばならぬ。國家より見れば一介の寄生蟲に過ぎぬ自分も、一家の爲めには千金の身である。不必要な冒險を許さない。請願すれば北海航路を執れぬことも無いが、自分の希望は米國へ渡り度いのである。安全なる北海航路を取ろか、冒險なる大西洋航路を取ろか心は大に迷ふた。自分ながら意志の薄弱と躊躇不斷とに呆きれた。「潜水艇何するものぞ、運は天なり」と、勇氣が米國行きを勸めると、「お前が死んだら遺族が飢へるよ」と、係累が北海航路を勸める。自分は考へた。安全なる北海航路を取り得ると云ふ心の隙が、自分の決心を亂す第一の因子である。危險なる米國航路を撰ぶ必要がないと云ふ心の弛みが、自分の決心を鈍らす第二の因子である。若し北海航路に依るの見込が絕對に無かつたならば、或は米國に渡らねばならぬ的確の理由が存したならば、自分は縱令不安と憂惧とよりは脫し得ざりしにもせよ、少くも迷はなかつたであらうと思ふ。拔け道のある間は凡人は大決斷を爲すことが出來ない。他力に依らなければ凡人は大勇猛心を振ふことが出來ない。大に苦しむは大に樂しむの基、大に窮するは大に通ずるの途とは、此處のことを云ふのであらう。人間の心の迷と、心の弱さとを痛切に感知した。

逡巡遲疑の間に六月も早や半となつた。久しく中絕したる、倫敦に對する獨逸の空中攻擊が再開せられた。今度は夜間に於けるツエツペリンでなく、白晝に於ける飛行機の襲擊である。六月十四日に其の第一回が行はれ、倫敦經濟界の中心たるバンク附近に十餘の爆彈を投下した。某日本人の住宅にも落ちた。郵船會社の裏庭にも落ちた。幸に日本人には死傷者は無つたが恐慌は非常である。晴れ渡りたる靑空より何の豫報もなく、不意に爆彈が落下する、家が壞はれる、人

が死ぬる、火災が起る。是こそ眞に青天の霹靂、「ボルト、フロム、ブリユー」である。假りに東京の様なマッチ箱を並べた町が斯んな攻撃を受けたならと思ふと戰慄を感ぜざるを得ない。障害保險が俄かに殖へたと云ふことである。世の中は何が誰の幸福となるか知れたものじやない。歸國するには海上の危險がある。滯在すれば空中の危險がある。倫敦滯留の風浪子たるもの身を措くに處なく、進退正に谷まると云ふ狀態である。

たま〳〵Y商會のO君が米國を經て歸國すると云ふことを聞いたので、意を決して同行を約し、船室のレザーブをクツク社に申込んだ。此の時米國は既に獨逸に對して宣戰し居たるも、獨逸は尙ほも米國民の意を迎へんが爲め、其の潛水艦をして米國船舶に對しては攻擊を遠慮せしめて居ると云ふ取り止めも無き風評から、米國船が最も安全であるとの評判が高かつた。溺るゝ者は藁をも摑むとかで、斯かる便りなき風評も幾分の氣休めとなり、六月三十日リバプール出港の豫定なる米船セントポール號に乘ることに決定した。時節柄とて乘客尠なく、船室は望み次第じや。大割引の聲に釣られて最上室をO君と共に占領した。愈經米航路に決定し、船室まで買つたものゝ心中の不安は尙ほ收まらない。新聞紙のUボートと云ふ文章が特に神經を刺戟する。小供への土産物を買ふさへ、途中若しヅドンとやられたらと思ふと張り合がない。當時の日誌を見ると、六月廿日には

大西洋橫斷尙ほ不安の念去らず、神經時々亢奮す。

二十三日には

無事亞米利加に達し得るや否やを思ふ時、家族に對する愛情最も切なるものあり。

二十四日には

精神尙ほ動搖す、萬一の場合遺族の悲歎と困窮とを思ふの時心緒斷絶す。狂か、愚か、意地か、物好か、何を苦しん

で敢て自ら此の危險を冐す。

など書いてある。今より考ふれば滑稽至極であるが、恐らく當時の僞らさる告白であつたであらう。唯倫敦出發の前日たる六月二十九日に「精神安定、最早や迷はず、天命に安んず」とあるが、或は本心にあらずして負け惜しみであつたかも知れぬ。

愈出發の當日となつた。セントポールに乘客の爲め特に發するボート、ツレーンに乘る爲め、朝早く停車場に驅け付けた。荷物の依托などするうち、同じ乘客らしいのが驛の役人とヒソヒソ何か話して居る。何でも、昨日は大分やられたから、今日は出發が難かしいだらう、と云ふ樣なことらしい。やがて汽車は高い廣い硝子の大天井を張つた大きな停車場を離れた。地は平坦で汽車は速い。沿道は唯美しき綠の牧場と土の色新らしき耕地ばかりで、山も無ければトンネルもない。果てしも見へぬ廣い牧場には牛が寢轉んで居る。馬が駈つて居る。羊が汽車を眺めて居る。三十分も走る間に一戸の人家も見へぬ野つ原もある。英國農村の稀薄と食料の不足とが一見して判る。部落に近き處には獨逸の俘虜を使役せる新開墾地がボツボツ見へる。今から麥を蒔いて獨逸潜水艇戰に對抗するのじやと云ふ。悠長の至りじや。モツト呑氣なのは、今から支那の勞働者を輸入して土地を開拓し、二年後の收獲を待つのじやと云ふ。流石に大國民である。せつかちな日本人などには迚も眞似の出來る藝當ではない。汽車の窓から管見した日英の地勢を海に譬ふると、日本の土地は怒濤澎湃として嶮波亂峙する峭峻の氣を呈して居る。英國の土地は緩波悠裕として長濤起伏する寬廣の情を現はして居る。之が兩國々民性に似た點がある樣にも思はれる。

汽車は途中の驛をブツ飛ばしてリバプールの海岸に着いた。岸壁には戰時色に塗つた衙式ながらも、排水量二萬噸、速力十七海里のセントポール號が繋がれて居る。旅券や荷物の檢査も極めて簡略に通過し、英國の地を離れて米國旗の

下に入つた。乗客は總數僅に百名で、中には婦人もあれば小兒もある。此の危險を冒して航海するは、よく〳〵の事由があることであらう。今にも出港することゝ待てど暮せど一向に出そうな形勢もない。其のうち外海危險との報が何處からとも乗員の間に傳へられた。此の二三日間に愛爾蘭沖でやられた船が五六艘もあるなどの噂を聞くと成るべく出て貰ひたくない様な氣持がする。夕刻に至つて岸壁を離れたので愈出港かと觀念の臍を固めると、少しばかり沖合に出てドブンと錨を抛り込んだ。船員以外は陸上との交通を全然謝斷せられた。夕食の卓に就くと廣い食堂には乗客が僅に三分の一位しかない。唯二人の東洋の珍客は最も末席に配せらるゝの光榮を得て、人種的反抗心が頭を擡げる。食事の模様が英國式から、米國法に變つた。パンが雪の様に白い。ビステキが煉化の様に厚い。皿數にも制限が無い。倫敦では最も缺乏して居た果物が豐富に供せられる。戰禍に苦しむ英國と、戰爭で儲けた米國との氣分が明瞭に示される。氷で冷やしたメロンは美味かつた。禁酒令も未だ布かれては居なかつた。

翌日も、其の翌日も出港しない。狭長いリバプールの港の眞ん中にブラリと投錨して、高緯度の夏の永き日を無爲と無聊と不安とに過した。陸上との交通は一切禁止せられて居る。甲板に立つて眺めると流石に世界一の海運國たる英國第一の商港リバプールである。開戰以來既に五百萬噸の商船を撃沈せられ、軍用船としては數百萬噸の船舶を各方面に分散せるにも拘はらず、數海里に連なる港岸には大船巨舶の高き檣が密林の如く峙ち、煤煙濛々空を罩めて居る。出船こそ一隻も見ないが入船は百杯二百杯、南より北より集つて來る。リバプールの繁榮こそ羨ましい。

乗船したる以上、運命は全く船長任せじや。出港期日に關しては一切判らない。明日は愈出港すると云ふものもあれば、まだ二三日は碇泊すると傳ふるものもある。新聞以外、外界の事情は一切不明で、恰かも濃霧に閉ぢ籠められた如く、何となく陰欝で自烈たい。早く出て早く安心したい様な氣もすれば、因循苟安を貪ぼりたい様な思ひもする。

一昨日出港して居れば、今頃は既に危險界を航過して居るのに

とか、

此處が若し紐育の港なら、どんなに嬉しかろ

とか、乘客も、船員も、言ふと言はざるとで、何人も航海の不安と云ふ一種の暗雲が心の奥に蟠まつて居るらしい。U

ボート〳〵と云ふ聲が甲板の處々に聞へる。

何が何だかチツとも判らず、唯ボンヤリと薄泥に濁れるリバプールの沖合に停船すること既に三晝夜、生活の單調と無聊と、不斷の不安とに耐へ兼ねたる乘客は、少し位危險でも構はない、早く出港して早く安心したいと云ふ氣にもなつた。七月の三日の朝漸く錨を拔いた。風較や強く海面には淺き白波さへ立つて居るのに、濃氣深く籠めて陸影は判明しない。船は北方に向つて針路を定めた。愛爾蘭海峽と云へば地圖で見て池の樣に思つて居たが、來て見ると中々廣い。之では潛水艇の活動するのも尤もじやと思はれた。そこら中に敵艇が潜んで居て、今にも船底をヅドンとやられはせぬかと云ふ感じがする。世に無智の勇と云ふことがある以上、有智の怯と云ふことも有る筈である。盲目蛇に恐れざるが眞であるならば、目明は蛇に恐れると云ふことも亦眞であらねばならぬ。孔子の所謂智者は勇を缺くとは此事であらう。生じつか潛水艇なるものが如何なるものであると云ふことを知れる自分は、之に對して無智者よりも一層神經過敏とならざるを得ない。

終日甲板に立つて海陸の風景を眺めたが、特に奇勝壯景の賞すべきものもない。夕刻、水道の最狹部を過ぎて愈大西洋に乘り出した。倫敦での話では、安全海區までは驅逐艦が護送して呉れるとのことであつたので、今に來るか、今に見へるかと心待ちに待つたが遂に一隻も來なかつた。乘客の失望は大である。愈單船虎穴に乘り入れることゝなつた。

風は全く凪ぎて海は油の如く平かである。愛爾蘭の北岸に接して、ジクザクと電光形航路を執りつゝ十七海里の高速を以て航走した。ジクザク航法は敵艇をして照準を困難ならしめ、併せて魚雷の命中を避くる最良の法である。船は米西戰爭の當時假裝巡洋艦として活動したるもので、六吋砲三門と三吋砲二門とを備へ、商船と云ふよりも寧ろ巡洋艦に近き方である。米國の海軍中尉が一人と水兵が二十人ばかり乘つて居る。砲側には彈藥が備へられ、砲員が配せられ、警戒嚴重である。避難の急に應ぜんが爲め端舟は甲板の線まで半下せられてある。偶一隻の救難船が滿船飾の如く數級の信號旗を飜へしながら沖合から歸つて來た。一昨日とかに、やられた船を救助に行つて今歸るのじや、と船員が敎へて呉れた。甲板には遭難者らしい人が黑く群がつて居る。一昨日の救難船が今頃歸るとせば、大分沖合でやられたのであらうが、何としても愉快な話ではない。愛爾蘭の低い山影が次第〳〵に薄れて、前には悪魔の潜むと云ふ廣い大西洋が碧く湛へて居る。

緯度は北緯五十五度を越へて居る。時は夏至を去ること僅に十日である。日の永いこと、永いこと。午後九時半に至つて遲々たる太陽が漸く西の水線の下に沒した。朱の樣に眞つ赤な併し光の鈍い太陽が、どう云ふ作用か、或は長細き楕圓形となり、或は平べつたき饅頭形となり、其の他瓢箪の如くなるかと思へば供へ餅の如くなる。見て居る間に刻々其の形が變はる。奇觀美觀實に言ん方ない。潜水艇のことも頭を離れて見取れて仕舞つた。日が沒して後も容易に暗くならない。北海のツアイライトが何時までも〳〵西天を彩つて、薄き雲を樣々に染めて居る。ホンノリと樺色にぼかされた空に、鬱金色や、黄金色や、蛋白色や、薄藍色やの雲が錦の縞を織り成して居る。靜かな紺地の海には錦波が搖らぎ、金波が碎け、迚も船を沈め人を呑む海とは思はれない。北海名物アウローラでも現はるればと思つたが、殘念ながら遂に見へなかつた。十一時を過ぎて後、海面漸く暗くなり、初めて夜らしき感じがした。

間は、どちらかと言へば潜水艇の行動を妨げる天然の防衛である。故に危險海の航過には夜の長きを利とする。併し人情としては潜水艇を恐れながらも、尙ほ晝の永くして夜の短かゝらんことを望んで居る。明かに理性と感情との齟齬である。晝の永きことゝ、滿月と云ふことが、自分をして此の航海を心强く思はしめた。日本的頭を以て滿月は夕六時に出るものと輕信したる自分は、太陽が沒した時には月は既に中天に昇れるものと思ひ、東の半天を仰ひで月や何處と搜がし廻はつたが、どうしても發見しない。或はツアイライトの爲めに月が光を奪はれて居るのかと思つた。十時過ぎになると、東の空には淡い星の光さへ見へ初めたが、月は尙ほ見へない。雲隱れかと思へば空は淸く晴れて居る。考へ違ひかと暦を繰れば、今日は慥に十五夜である。不思議〳〵、自分の目を疑ひ、意識を疑ひ、遂にO君を引つ張り出して共に搜がしたが、月は矢張り見ない。潜水艇が如何に暴れたとて、天上の月までが逃げ隱れする筈は無いと尙ほも東の空を眺めて居ると、十一時頃になつて南方水線の濛氣の裡に、赤味を帶びた眞ん圓い月がボンヤリと初めて姿を現はした。日本の月の倍も大きく、半分位に淡い。高緯度の夏の月の出は遲いと云ふことを忘れて居たのである。

船は何れの方向に駛つて居るのか、針路は一に船長の胸にある。唯星の位置に依つて推測すれば北方アイスランド方面に向つて居るらしい。極星が見上ぐるばかりに高く輝いて居る。薄暗い靜かな海に、船は長き青燐の尾を曳き、黑き煤煙の雲を漂かし、機音騷がしく全速力を以て喘ぎ進んで居る。七月とは云へ、夜寒の風がヒシ〳〵と身に逼る。一切の窓を密閉して一點の火光だに洩らさぬ。甲板の人影は次第に減つて、二本の大きな煙突が巨木の如く暗空に衝つ立つて居る。浮袋付の胴衣を着し小筒に亢奮劑を充たし、重要物を一括し、外套に合羽を重ね合はし、着服の儘ベツトの上に横つた。此の航海乘客は何れも種々の護身用浮袋を携帶して居た。自分のは胴衣に澎縮自在なゴム鐶を附着したものであつたが、O君は潜水夫まがひの頭の先きから手足の先まで總ゴムの浮着物を持つて居た。之も戰爭の副産物である。

一睡の後何かの響に目が覺めた。夜は既に明けて居る。時計を見ると未だ三時前である。海は靜かで船は微搖だにせず、無事に航海を續けて居る。甲板に出て見ると朝の風が寒い程冷たい。餘程高緯度に上つたものと思はれる、東北の空には早や大きな〳〵紅の様な太陽が、水線に横はる青黒き土手雲の上に半身を現はし、中天の卷雲が淡紅色に染まつて居る。西南の空にはレースの如き薄い滿月が、既に水線の下に淡い光を沈めんとして居る。日の命の長きに反し、月の命の短きことよ、世界の夜を照らすこと僅に四時間に過ぎない。偶々前方の海面に黒い物影が見へた。砲員は直に砲に就き、砲口は之に向つた。姿の見へる敵に對しては本船の武裝を以てすれば毫も恐るゝに足らない。唯恐るゝ處は不意の襲撃である。「來れ敵艇！」と興味を以て見て居るうち、次第に近づくに及び汽船であることを發見した。斯くて此の日の正午には愛爾蘭の北端より三百海里を距り、既に危險界の大部分を脱した、甲板はデツキビリヤードや輪投で賑はしい。翌日に至ると最早や全く危險界を脱したので、砲側の哨兵を撤し彈藥を收め、端舟を釣り上げ、船長の姿が初めて食堂に現はるゝ様になつた。乘員の浮袋も影を潜めた。大枚二磅を氣張つて買ひ求めたる浮胴衣も幸に不用に歸し、今はビクツキの紀念として徒に行李の底を塞いで居るが、夏になると小供が海水浴に持ち出すので當時の記憶を新にする。

愈危險海も無事に通過したので、乘員一同の元氣も加はり、甲板は常に歡聲笑聲に賑つて居る。何時の航海にも、何の航路にも、必ず一人二人は有ると云ふ周旋好きの乘客が發起人となり、船員に對する感謝の爲め、潜水艇に殪れたる海員救護金を募る目的を以て、或夜乘客の間にコンサートが催ふされた。幹事からO君を通じて加入を申込んで來たので快よく承諾した。相當の金員を義捐すれば義務は濟む位に思つて居たところ、プログラムを見ると豈に圖らん、ジヤパニース、ゼントルマンが何か藝當をやると書いてある。O君も自分も大食以外に何の藝も持たないので、之には大に

閉口した。取消を申込んだが、既に番付まで印刷したる後とて、今更變更しては幹事として顔が潰ぶれる、誠に相濟まぬが何でもよい、日本の國歌でも宜いから是非やつて貰ひたいと、夫こそ哀訴歎願する。餘り頑强に拒絶するのも無禮と思ひ、O君と相談の上、年寄役に自分が何かやることを引受けた。西洋の紳士淑女を前にして一生一代の晴れの舞臺、何をやつたかは言はぬが花じやろ。併し拍手喝采、再度の呼び出しを受けたこと丈けは茲に明記して讀者に傳ふるの光榮を有する。

雜記

理學博士 吉村冬彦

(一) 切符の鋏穴

日比谷止まりの電車が帝劇の前で止まつた。前の方の線路を見るとそこから日比谷迄十數臺も續いて停車して居る。乘客はゾロ〳〵下り始めたが、私はゆつくり腰をかけて居た。すると私の眼の前で車掌が乘客の一人と何かしら押問答を始めた。切符の鋏穴がちがつて居るといふのである。

此の乘客は三十前後の色の白い立派な男である。パナマらしい帽子にアルパカの上衣を着て細身のステツキをさげて居る。小さな聲で穩に何か云つて居たが、結局又別に新しい切符を出して車掌に渡さうとした。

二人の車掌が詰め寄るやうな勢を示して聲高にものを云つて居た。『胡魔化さうと思つたんですか、さうぢやないですか。サア、どつちですか、ハツキリ云つて下さい』

若い男は存外顔色も變へないで、靜に伏目勝に何か云ひながら、新しい切符を差し出して居た。車掌はそれを受取らうともしないで

『サア、どつちです。……車掌は馬鹿ぢやありませんよ』と罵しつた。

私は何だか不愉快であつたからすぐに立つて車を下りた。

あの若い立派な男が僅に一枚の切符の爲に自分の魂を賣らうとは私には思ひにくかつた。しかしそれはどうだか分らない事である。

それにしても私は此の場面に於ける車掌の態度を甚しく不愉快に感じた。假令相手の乘客が不正行爲を敢てしたといふ證據らしいものが餘程迄に具備して居たとしても、人の弱點を捕へて勝ち誇つたやうな驕慢な獰悪な態度は醜い厭な感じしか傍觀して居る私には與へなかつた。ましてそれが萬一不正でなくて何かの誤謬か過失から起つた事であつたら果してどうであらう。若しも時代と場所がちがつて居て、人が自分の生命に賭けても Honour を守るやうな場合であつたら此れは唯ではすみさうもない。

こんな事を考へて暑い日の暑苦しい心持を更に增したのであつた。

それから四五日經つての事である。私はZ町迄用があつて日盛りの時刻に出掛けて行つた。H町で乘つた電車は殆んどがら明きのやうに空いて居た。五十錢札を出して往復を二枚買つた。そしてパンチを入れた分を割き取つて左手の指先でつまんだ儘で乘つて行つた。乘つて行くうちに、其朝やりかけて居た仕事のつゞきを考へはじめて、頭の中はやがてそれで一杯になつた。さういふ時に私の悪い癖で、何かしら手に持つて居るものを無意識にいじる、此時は左の手の指先で切符の鋏穴の處を矢張無意識にいじつて居たのである。此れはどういふ譯だか分らないが、例へば盲人が暗算をやる時に無意識に指先をふるはして居るといくらか似た事かも知れない。

Z町の停留場で下りやうとして切符を渡すと、其れをあらためた車掌が、更にもう一つパンチを入れそれと見較べて「此れはちがいます私のよりは穴が大きい」と云つた。私は當惑した。「でも、さつき君が自分で切つたばかりではない

かし、こんな證據にもならない事を云つて見た。

切り立ての鋏穴は圓形から直角の房形を取りのけた恰好をして居る。私の指先でもみ揚げられた穴にも其形の痕跡だけはちやんと殘つて居るが、穴の直徑が二三割位は大きくなつて、穴の周邊が毛ば立ち汚れて居る。

もう一人の車掌もやつて來て、同じ切符にもう一つの穴をあけた。「私のはこれですからね」と云つて私の眼の前にそれを突きつけた。三つの穴が私を脅かすやうに見えた。

代りの切符をもう一枚出して下ろして貰つた方が簡單だとは思つた。が、其時の私の腹の蟲の居所が餘程惡かつたと見えて、どうもさういふあつさりした氣になれなかつた。別の切符を出すのはつまり自分の無實の罪を承認する事になるやうな氣がしたので、私は其儘默つて車を下りてしまつた。車掌は踏臺から乘り出すやうにして、一寸首をかしげて右の手でものを捧げるやうな手つきをしながら『もう一枚頂きましやう』と云つてニヤ〳〵した。

下り立つた街路からの暑い反射光の影響もあつたらうし、朝からの胃や頭の工合の効果もあつたかも知れないが、兎に角此車掌の特殊な笑顏を見た時に私の全身の血が一時に頭の方へ驅け上るやうな氣がした。そして思ひ返す間のないうちに

「それぢやあ、交番へ來てくれ玉へ」とついこんな事を云つてしまつた。交番はすぐ眼の前にあつた。公平な第三者をかりなければ御互の水掛論ではとても始末が着かないと思つたのである。車掌は「エヽ、參りますよ、參りますとも、いくらでも參りますよ」とさう云つて私について着た。

警官は私等二人の簡單な陳述を聞いて居る內に、交番に電話がかゝつて來た。警官はそれを聞きながら白墨で腰掛のやうな處へ何か書き止めて居た。中々忙がしさうである。私は少し氣の毒になつて來た。

警官は電車を待たさない爲に車掌の姓名を自署さしてすぐに歸へした。それから私に「貴方御いそぎですか」と問いた。私は此の警官に對して何となくいゝ感じを懐くと同時に自分の輕卒な行爲を恥ぢる心が可也に强く起つた。

此處で自白しなければならない事は、私等が交番へはひると同時に、私は蟇口の中から自分の公用の名刺を出して警官に差出した事である。事柄の落着を出來るだけ速にするには其方がいゝと思つてした事ではあるが、後で考へて見ると、此れは愚なそして卑怯な事に相違なかつた。そして此上もない恥曝しな所行であつたが、それだけ私の頭が均衡を失つて居たといふ證據にはなる。

警官の話によると此頃電車では鋏穴の檢査を特に嚴重にして居るらしいといふ事である。そして車掌の方では鋏穴ばかりを注目するのだから止むを得ないといふのである。さう云はれて見ると私は一言もない。

其内に電車監督らしい人が來た。かういふ事に馴れ切つて居るらしい監督は極めて愛想よく事件を處理した。「決して御客樣方の人格を疑ふやうな譯ではありませんが、此れも職務で御座いますからどうか惡しからず御勘辨を願ひます」と云ふ。かう云はれて見ると私はます／＼弱つてしまふのであつた。私は恐縮して監督と警官とに丁寧に挨拶して急いで其處を立去つた。別の切符は結局渡さなかつた。

仕合せな事には、かういふ場合に必然な人だかりは少しもしなかつた。それで私が今こんな事を書かなければ、私の此の過失は關係者の外には傳はらないで濟むかも知れない。

私は其日宅へ歸つてから、私には珍らしい此の經驗を家族に話した。すると家族の一人は次のやうな類例を持ち出して更に空談に花を咲かせた。

此間子供等大勢で電車に乘つた時に回數切符を出して六枚とか七枚とかに鋏を入れさせた。そして下車する時にうつ

かり間違へて鋏を入れないのを二三枚交ぜて切つて渡したらしい。それで手許にはそれだけ鋏の入つたのが殘つて居た譯である。さうとも知らず次に乘車した時にうつかり切符を渡すと此れは鋏が入つて居ますよと注意されて甚だきまりの惡い想をしたさうである。其時の車掌は事柄を全くビジネスとして取扱つたからまだよかつたが、隣に座つて居た人が妙にニヤ〳〵して居たといふ事である。

此場合も全然乘客の方の不注意であつて車掌に對しては一言の云ひ分もない。

電氣局から鋏穴の檢査を勵行するやうに命令し奬勵するとすれば、車掌が此れを遂行するのは當然の事である。そして車掌の人柄により乘客の種類により其處に色々の場面が出現するのは當然の事である。

私は自分の落度を度外視して忠實な車掌を責めるやうな氣もなければ、電氣局に不平を持ち込まうといふやうな考も固よりない。

併し此の自身のつまらぬ失敗は他人の參考になるかも知れない、少くも私のやうに切符の鋏穴をいじつて擴げるやうな惡い癖のある人には參考になる。同時に又電氣局や車掌達にとつても、さういふ厄介な癖を持つた乘客が存在するといふ事實を知らせるだけの役には立つと思ふ。

序ながら、切り立ての鋏穴の縁邊は截然として角立つて居るが、揉んで擴がつた穴の周圍は毛端立つてぼやけ或は捲くれて、多少の手垢や脂汗に汚れて居る。それでも多くの場合に原形の痕形だけは止めて居る。それでもし此のやうに捻んだ痕跡があつて、しかも穴の大きさが新しい穴と同じであつたら、それは却つてもとの穴がちがつた鋏によつて穿たれたものだといふ證據になる。

私はさういふ變形した鋏穴の「標本」を電氣局で蒐集して、何かの機會に車掌達の參考に見せるのもいゝかも知れな

いと思ふ。何なら蟲眼鏡で一邊づゝ覗かせるのもいゝかも知れない。序にもう一歩を進めるならば、電車の切符について起り得る錯誤のあらゆる場合を調査して置くのもいゝかと思ふ。不正な動機から起るもの〻外に、どれだけ色々の場合があるかを研究し列擧して車掌達の參考に敎へておくのも惡くない。事柄が人の「顏」にかゝる事であるから、此位の手を足すのも惡くはあるまい。

車掌も乘客も全く事柄を物質的に考へる事が出來れば簡單であるが、其處に人間としての感情がはひるからどうも事が六かしくなる。

物質だけを取扱ふ官衙とちがつて、單なる物質でない市民乘客と云つたやうなものを相手にする電氣局は、乘客の感情迄考へなければならず、そして局の仕事が市民に及ぼす精神的効果迄も問題にしなければならないから難義であらう。

併し此れは止むを得ない事である。事柄は小さなやうでも電車切符の穴調べも遣り方によつては市民の頭の中に或るものをつぎ込み、其中から或るものを取り去るやうな効果がないとは限らない

例へば吾々が毎日電車に乘る度に、私が日比谷で見たやうな場面を見せられるとしたらどうだらう。恐らく吾々の「感情美」に對する感覺は日に日に痲痺して行きさうである。

百千年の後に輕卒な史家が春秋の筆法を眞似て、東京市民をニヒリストの思想に導いた責任者の一つとして電氣局を數へるやうな事が全くないとは限らないやうな氣もする。

十幾年前に芬蘭の都ヘルジングフオルスへ遊びに行つた時に私を案内して歩いたあちらの人が、財布から白銅貨のやうな形をした切符を出して、車掌といふものの居ない車掌臺の箱に投げ込むのを見た。つまらない事だが、私が今でも此の國此都を想ひ出す時に起る何となく美しい快い感じには、此の些細な事もいくらかを寄與して居るやうに思ふ。

諸國を旅して見ても一旦賣つた電車切符を又取り戻すやうな國は稀であつた。それで私は國々で乘つた電車切符を記念に集めて持ち歸る事が出來た。此の妙な機會に私は此れで張り交ぜの屏風でも作つて『人を盜賊と思はない國々』の美しい想ひ出にしやうかと思つて居る。

(二) 善行日と惡行日

　或る新聞を見て居ると妙な廣告が眼についた。「サーモンデー」と大きな字で印刷してある。何かの說教でもあるのかと思つてよく見ると、それは Sermon でなくて Salmon day であつた。鮭の鑵詰を食ふ日で、卽ち其の鑵詰の廣告のやうなものと判斷された。さうしてそれが當日行はれた所謂「節約デー」に因んだものだといふ事に氣が付いた。鮭と節約との關係は別問題として、私には此の「節約デー」といふ文字自身が何となく妙な感じを與へた。其感じは一寸簡單に說明し難い種類のものである。其れはつまり此れから以下に私が書かうとする事を煎じつめたやうな妙なものであつた。

　歲の中の或る特定の日を限つて「節約デー」を設けるといふ事は、從來の多くの日には節約をして居ないか、若しくは濫費をして居たといふ事である。同じやうな例を擧げると、年中怠けてばかり居る學生が、一年に一日「勉強デー」を設けるのや、或は平生惡い事ばかりして居る男が、稀に「善行デー」を設けるのと同じやうな事で、それも一應は誠にいゝ事だと思はれる。

　併し一日の善行で百日の惡行を償つてまだ其上に釣錢を取るやうな心持が万一でもあつては却つて困る。一體さういふ心配は全然ないものだらうか。一般には云はれない迄もさういふ了簡の人も丸でないとは云はれないやうである。

さういふ事のないやうに、その特別な一日を起點として其後引續いて善い事をする習慣をつけるといふ目的で、少くも今度の「節約日」は宣傳されたものであらうと思はれる。さうでなければ宣傳ビラの印刷費用だけでも却つて濫費になる勘定である。此度の節約日の効果は日が經つて見なければ分るまいが、私はかういふ「日」の必要自身が旣に結果の失敗を保證するやうに思はれて仕方がない。

それは兎に角此種の色々の「善行デー」はどうもつい近頃西洋から輸入されたものらしく私には思はれる。よく調べて見なければどうだか分らないが、何となくアメリカあたりからでも來たらしいやうな感じのするものである。少くともさういふ匂ひがある。

昔の事はよくは知らないが、唯自分の狹い經驗から考へても、以前にはかういふ特別な「善行デー」などより寧ろ「惡行デー」とでも名づくべきものが多かつたやうな氣がする。

田舍の農夫等が年中大人しく眞面目に働いて居るのが、鎭守の祭とか、蟲送りとか、盆踊りとか、さういふ機會に平生の箍をはづして、はしやいだり怠け遊んだりした。近年は村々に靑年會などゝいふ文化的なものがあるから恐らく昔のやうな事は見られまい。又私の郷里では昔天長節の日に市の公園で「お化」と稱する假裝行列が行はれた。此れも眞面目な勤勉な市民が羽目をはづして怠け巫山戯る日であつた。此れは警察の方で疾に制限を加へたやうである。

どんな勤儉な四民も年に一度のお花見には特定の「濫費デー」を設けた。或る地方の儉約な商家では平日雇人のみならず主人達も粗食をして居て、時々「贅澤デー」を設けて御馳走を食つたといふ話もある。尤も此れは全く算盤から割り出した方法だそうではあるが。

「無禮講」といふ言葉が殘つて居り。西洋でも「エプリルフール」といふ事がある。

あれ程常識的な英國にでも吾々に了解の出來ない程馬鹿氣た儀式が殘つて居るやうであるが、それが今日では單に因粹保存といふやうな意味ばかりでなくつまり常に常識的である爲の「非常識デー」として存在の價値を保つて居るらしく私には思はれる。

「濫費日」や「嘘つき日」や「怠け日」は餘り聞こえはよくないかも知れないが、實は此等の特定日の存在は平日の節約勤勉眞面目を表白するとすれば目出度事である。そしてさういふ場合に行はれる此等の「デー」の效果は必しも惡いばかりとは思はれない。假令今日のやうな世の中でも場合によつては却つて此頃のいろ〳〵の人聞きのいゝデーに勝る事がないとも限らない。今の人でも恐らく年中惡い事ばかりはして居まい。

危險な崖の上に立つて居る人を急に引止めやうとすると却つて危險だといふ話がある。此れと似た事がもし適用するとすると、濫費に偏して居るものを一日だけ引き戻すのは却つて危險な場合があるかも知れない。後に引いた弓を放てば矢は前に飛ぶ。此の類推はあてはまるかどうだか分らない。

それにしても「節約デー」といふ言葉が私には矢張不思議な感じを與へる。もし此れが反對に「濫費デー」であつたら其意味は私には却つて飲み込み易く、其の效果も見當がつくやうな氣がする。

世の中の人の心は緊張と弛緩の波の上に泛よつて居る。正と負の兩極の間に振動して居る。

「善行日」ばかりを奬勵するのも考へ物ではあるまいか。少くも「惡行日」を此れと並行錯雜させて設けて見るのも一つの案ではあるまいか。昔の爲政家は實際さういふ事をしたもの〻やうに見える。

併し私の此の案は矢張贊成してくれる人はなさ〻うである。私のいふやうな「惡行日」は段々に廢止される。最近には又勉强の活勢力を得る爲の潜勢力を養ふべき「怠け日」であつた暑中休暇も廢止された位であるから。（十一、八、四）

時論

主觀的眞理の強說か
客觀的眞理の尊重か

法學博士 吉野作造

○

獨逸で、外相ラテナウの暗殺に刺撃されて共和制擁護法とやらを作ると、南の方巴威政府では、所謂聯邦法律の拘束に依て自家自主權の傷けらるゝを肯とせず其の形式的遵奉を拒んだと云ふ。中央と地方との權限範圍に關する憲法論上の問題として、係爭兩者の孰れの立場が正しいかは之を別個の研究に讓る。僕は戰爭前より持ち越しの分離的傾向（Partikularismus）が彼國に於て今日猶强く主張さるゝのを觀て、轉た、長い歷史を背景とする傳來的思想の容易に拔き難きものあるの事實に驚かざるを得ないのである。

戰前に於て、獨逸は强烈な國家觀念に依て統一された珍らしい程牢い結束を有する民族だと一部の人々から讚美されて居つた。併し乍ら、普露西の武力に由つて無理に統一を早められた獨逸帝國には、其實統制阻害の色々の因子が内部の素質として潜んで居つたのであつた。歷史家は前記の分離的傾向の外、天主教（Klerikalismus）、社會黨（Sozialismus）被壓迫諸民族（Regionalismus）を算ふるが、之等の一々の說明は玆に略する。只こゝには、過去に於て分離的傾向の最も有力なる支持者たりし巴威が、今日なほ動もすれば事毎にこの同じ態度を中央に對して繰り返したがるの事實に、讀者の注意を促したい。而して僕が特に此の點に讀者の注意を促さんと欲する所以は、或る民族の一度取つた態度は、其の必要が消滅しても容易に之を改め難いものだ、と云ふ事をよく納得して貰ひたいからである。

巴威が何故に分離的傾向を執つたかの歷史的說明や、今日之を執るの必要は果して消滅したか否かの判斷も、他日の考究に讓る。兎に角明白疑なき一事は、普露西の下風に立つを肯とせ

ずして一度分離的傾向を取つた巴威は、やがて乘ずべき間隙ある限り中央政府に楯つくことを傳統的政策とするに至り、而して此の政策は遂に當初の必要乃至理由とは獨立して特殊の地位を政界に占め、以て今日に至つた事である。獨り巴威に限らず、政界に於ける所謂傳統的政策なるものには斯うした種類のものは何處の國にも可なりに多い。

○

眼を轉じて各列强の所謂傳統的政策を見よ。米のモンロー主義は如何。英の自由貿易主義は如何。孰れか夫れ若干の程度に於て所謂告朔の餼羊たらざるものがあるか。而して此種のもの、能く考へて見ると、我國に於て亦頗る多いやうだ。

否、之ればかりではない。我國の政界につき各政治團體の所謂傳統的政策なるものを觀ると、更に質の惡いのが尠くないのに驚く。告朔の餼羊でも、其の起源に於て何等かの合理的根據あるものはまだ恕すべしだが、始めから醜惡な少くとも公正ならざる動機に基くものあるに至ては沙汰の限りである。例へば夫の政友會の普選反對の黨議の如き、憲政會が一時固執して譲らなかつた獨立生計論の如き是である。

何れにしても、政界に在ては、善意にしろ惡意にしろ、一旦言ひ出した事は容易に改めにくいもののやうだ。吾々は先づ此明白なる事實を看過してはいけない。其處からして政界には、普通の人間交際に於けるとは違つた一つの特別原則の行はるゝ必要が生ずる。何ぞや。曰く、主觀的眞理の强説よりも客觀的眞理の尊重を第一とせよと。云ふ言葉は固より生硬の譏を免れぬが、傳へんとするところは簡單だ。即ち次の通りである。

○

普通の人間の交際に於ては、自説の謬なるを覺れば何時でも之を悛めて他の新しい立場に遷ることが出來る。(夫れでも世間には飽くまで横車を押さんとする頑拗の人も多いが)其間に本質的の障害といふものはない筈だ。所が政治上の問題になるとさうは往かぬ。一人の意思で左右し得ないといふ心理的理由の外に、一つの立場から他の立場に移るといふは、前の立場に基いて固定した外界の事情を破壞せずには出來ぬといふ社會的理由もあつて、一度宣明された立場は、之が宣明を促した内面的理由と離れてやがて獨立の支持を受くる政治的運命に置かるゝものだ。故に之を個人の生活に對比して云ふなら、正確な言ひ方ではないが、政治上の意見といふものは過を識つても容易に悛め難いものだと謂つても可い。其處から自ら斯ういふ原則が生れざるを得ぬ。曰く、政界に於て所信を貫くといふは必しも推奨すべき事ではないと。

尤も斯く云ふは、政治家は水上の浮草の樣に風のまに〳〵に動搖していゝと謂ふ意味ではない。政治家たる個人の道徳意識として又その責任感念として、彼は飽くまで所信に忠實でなければならぬ。所信の貫徹に極度の勇氣を伴はしめなければならぬは言ふまでもないことだ。此點に僕は一點の異議もない。只一の制度として、特定の政治家階級に供するに、所信貫徹の無條件的便宜を以てする樣な仕組みは、政治的目的の達成の上に決して喜ぶべきではないと云ふのである。

政治家はドン〳〵確信を斷行していゝ。けれども前述の如く政治家の所信には謬りに陷り易い素因がある。そこで或る一方の意見に其實行の便宜を極度に提供するは大なる危險だといふ事になる。客觀的の制度としては、一つの意見に對する反對的立場をも極度に跳梁せしめて共牽制作用を最も自由ならしむべきであらう。斯く各種の立場を自由に競爭せしむることが、實に結局に於て本當の正しい意見を行はれしむる所以になる。故に客觀的の制度としては、正しい意見を行はれしむるのが良いのではなくして最も正しかるべき意見が結局に於て行はれる樣に仕組まるゝのが良いのである。主觀的眞理の强說よりも客觀的眞理の尊重と云つたは、つまり此の意味を現さんが爲に使つたのである。而して此の意味に於て專制政治――所謂善政主義といふ形に於けるものでも――の排斥せられざる可らざるは亦明白であらう。

○

個人の道徳生活に於ても、一方には飽くまで所信に忠實なれとの保守的要求あると共に、他方には戰々兢々自ら反省し又他の批判に聽き常により正しからんと努めよとの進步的要求があるが如く、政界に於ても、所信に猪突すべしとする對政治家の要求あると共に、各種の意見に生存競爭を恣にせしむべしとする制度上の要求がある。而してこの制度上の要求が圓滿に行はるゝ爲には、吾人は實際政治家に對して一方所信に忠實なると共に他方反對意見にも相當の敬意と雅量とを示すべきを求めなければならない。然らざれば各種意見の生存競爭が公明正大に行はれないからである。

斯んな理窟は僕の諄々しく說くまでもなく疾うの昔に分つて居る筈だ。然るにも拘らず今更之を絮說する所以は、昨今社會の一部に一種の專制思想が裝を變へて盛に頭を擡げ掛けて居るからである。政治上の專制思想はとうの昔に摧かれた。之を摧くべしとする主たる理由は、蓋し固定した定型的意見の社會に强行せらるゝを避けたいからである。思想の進步を信ずる者は、强い確信の裏に謙虛なる反省に敏くなければならぬ。而し

て眞の謙抑の徳を缺き、反意對見に些の雅量なく、從て眞理に對する本當の情熱を示さゞるもの、特に世の爲人の爲に獻身奉仕すると稱する者の間に頗る多いのはどう云ふ譯だらう。正義が正義の名によつて傷はるゝは誠に痛ましき限りである。

新政黨に對する吾人の態度

○

國民黨の解黨や後藤男の外交調査會委員の辭任などの目立つた事件の頻發に依て、昨今の政界はこの暑さにも拘らず若干動揺を感じて居る樣だ。新に組織さるべく期待さるゝ新政黨に、噂の如く伊東平田後藤等の諸氏が果して關係するや否やは今の所不明だが、斯の如きは我國政界の近狀に照して全く有り得べからざる事ではないと思ふ。假りに之が實現したとして之が國民の慶福に幾何の交渉ありやは然し乍ら全然未知數である。

所謂民主々義（デモクラシー）の緩慢なる發達――曲りなりではあるが――はともかくも我國に於ても純粹なる超然内閣を維持し難きものたらしめ、徐々に政黨なるものゝ發展を促した。が、之とて獨力を以ては政權を確實に掌握し難く、其結果暫くは官僚と政黨との慣れ合を以て政局の一時的收拾を見ると云ふ變態的現象を呈したのが、最近までの我國の狀態である。併し乍ら、官僚と政黨とは本來政界の分野に在て互に兩立せざる敵味方であるから、彼等の慣れ合は畢竟一時の便宜に基く休戰であつて、固より内面的に連結さるゝ諧調ではない。從つてあわよくば他方を出し拔いて獨自の地位を堅めんと互に陰險なる策略を廻らし合ふのは怪むに足りない。寺内々閣と原内閣とは此點に於て最も適切なる好例を示す者だが、さて昨今の形勢は如何と云ふに、政友會は多數黨たるの事實に變りがなくて而かも失脚を餘儀なくされ、官僚の一味はまた山縣公の逝去――とも一つには時勢の壓迫――に由て其の有力な據り所を喪ひ、詰り政界の中心點が大に動揺した形になる。こゝに野心に燃ゆる政治家の暗中飛躍を見るのは何等怪むべき事はないではないか。

尤も昨今の政界を中心點が動揺したと觀るのは誤りで、實は落ち着くべき處に安定しつゝあるのだ、と謂つた方が正當の見解かも知れない。政友會は、下院に於ける多數を以て民意の最高代表者を以て居り、玆に政權掌握の道徳的權利を掲けて居つた。併し彼の多數は、民衆信頼の結果として獲たものでなくて、有らゆる不正手段を弄して刧取したものである。故に夫の政權掌握の權利の主張の如きは要するに鬼面人を欺くものに外

ならない。從つて、事實に於て其の多數の力を押し及ぼし能はざる貴族院に向つては、密に研究會邊の表裏兩面の援助を乞はざるを得なかつた。是れ少しく政界の實狀に通ずるものには疑のない事實である。次に官僚の一味が撰て以て政黨者流と抗爭し得るとせる地盤は上院であつた。上院は斯くして其の始め官僚――又は元老――の走狗に過ぎなかつたのだが、一寸の虫にも五分の魂とやら、思ひの外に有力なる自家の地位に目覺めた彼は、何時までも官僚の傀儡たるに甘んぜざる樣になる。斯くして彼は漸く獨立の勢力たらんとして來るのであるが、此趨勢は所謂元老の凋落と共に更に益々甚しくなる。官僚の走狗たりし研究會が却つて官僚を牽制し監督する樣になつたのは、蓋し亦當然の順序である。

斯くして最近は、何人にあれ上下兩院に事實上多數の味方を有するものでなければ政權を掌握し得ぬ事になつた。但斯くても猶、民衆多數の信賴を以て政權掌握を要求する道德的根據たりとするの假說が、民間に於て若干の神秘的威力を有して居つたので、何とはなしに上院の多數よりも下院の多數の方が重いと云ふ樣な考が潜在して居つた。固より今日の我國に於て民衆の良心と現實の連絡ある政團があるかといへば無い。民衆と實質的の連絡を缺く點に於ては、政友會も憲政會も、上院の研究會や公正會と何等擇む所がないのだが、併し俗間の感情としては、上院の夫れよりも下院の政團の方がヨリ多く民衆的なるが如く考へて居る。そこで、實際問題として政權を掌握するには、上下兩院に於ける多數を合縱せねばならぬのであるが、上院に於ける多數を主として下院の多數を味方にするは、下院の多數が主となりて上院の多數を味方とするよりも遙に困難なのである。現加藤內閣の如きは、政友會の醜態暴露に依て不思議に出來上つた僥倖內閣であつて、二度と出現を期待せらるべき現象ではない。從つて又彼は、現に頗る險吞な基礎の上に立つて居ると謂はなければならぬ。現內閣の基礎斯の如く弱く、政友會の信望恢復亦容易に待つ可らずとせば、上下兩院の策士が、相連繫して一新政團を組織し、以て近く來るべき次期の政運を待たんとするは、怪むを須ゐぬではないか。

故に曰く、我が國則今の狀勢の下に於て新政黨の組織は極めて自然であると。況んや其渦中にたゞよふ顏觸を見るに於てをや。

而してこの新政團は、國民の利福發達の上に何をもたらすかは、彼が在來の政黨者流と其遣り口を全く別にするか否かに是れ繫る。是れ僕の先きに此點を未知數と稱せる所以。若し思ふ所を忌憚なく云はしむれば、僕は之に由て政界に何等の新生面

をも期待し得ない様に考へてゐる。

○

新政黨の成立を豫期して、或る新聞には、この政黨は從來黨界に籍を置かなかつた有力なる人士を網羅するにつとめ、殊に學界の政論家には辭を低うして入黨を請ふ積りである、と云ふ樣な事が出て居つた。中には白羽の矢を立てられた學界の人のうち現に僕の名も出て居つたといふので、之に關する僕の態度を質問さるゝ友が少くない。依て僕はこの機會を利用して、新政黨に對する僕の態度を明にすると共に、併せて一般世人の政黨に對して執るべき態度をも論じて見たいと思ふ。

僕自身の問題として、僕は自ら現在の職を抛つて政治家に鞍替せざる限り、絶對に新政黨に參加しない、又參加すべきものでないと考へて居る。之は例へば新政黨の成立や又は主義政策やが氣に喰はぬからといふのではない。凡そ政黨は元來政治家の集團であつて、市民は單純な一市民としてある限り、絶對に之に加入すべきものでないと信ずるからである。此の道理は、僕をして啻に新政黨に加入するを許さざるばかりでなく、他の有らゆる政黨に加入するを許さない。加之僕のみが獨り斯の態度を執つて動くまいとするのみならず、他のすべての市民に對つてもこの同じ立場を執ることを要求して熄まざらしむる。凡そ市民は、單純なる市民としてある限り、其本來の義務として、有らゆる政黨に對して絶對に超然的態度を維持すべき義務がある。夫の有象無象が自ら政友會員たり憲政會員たるを誇るが如きは、言語道斷の沙汰だと思ふ。況んや之に依つて無用の爭に耽るが如きをや。斯は正に道徳的罪惡として責むるに値するものである。若し夫れ政黨の幹部が都鄙の良民を驅りて自黨に入らしむるが如きは、群羊を欺いて豺狼の餌たらしむるに等しく、自ら侮り人を謬る之より甚しきはない。況んや之を欺き導くに各種の利權を以てするに於てをや。此點に於て僕は今日の政黨に向つて骨髓に徹する底の怨恨を懷くものである。

政治と云ふ仕事を職業的政治家に托するの可なりや否やは、大に考ふべき重大問題だ。專門家排斥の思想は、昨今政界にも浸潤し來り、露のソヴイエツト制に於て我々は大に反省させられて居るのであるが、之等の議論は他の機會に讓ることにする。今の所、政界に所謂職業的政治家の跋扈は甚だ根強いことは事實として認めない譯には行かない。尤も段々本當の市民出の代議士も出て來ては居るが、大體に於て政治は、例へば昔の伊藤とか山縣とか、近くは西園寺桂原加藤といつた樣な、外に定職のない專門的政治家に委されて居るのである。而して之等の人々は其協同の目的を達する爲めに各々集つて特種の團體を

作る。之が即ち政黨なのである。

さて斯う云ふ組織の下に政治が行はれるといふ事を前提とすると、玆に疑のない點は、政治と云ふ仕事は全然之等の專門階級に一任し放しでは不可ぬと云ふことである。專制政治や藩閥政治の排斥せらるゝ所以は實にこゝにある。於是國民多數の監督と云ふ問題が起る。是れ實に一つには政治の腐敗を避くる所以であり、又一には本當の方針を誤る事なからしむる爲である。所謂立憲政治なる方式の起つたのは之が爲めだ。即ち今日吾人には政治運用の方式として立憲制が與へられて居るのである。果して然らば、吾人市民は、自ら進んで專門的政治家たらんとせざる限り、飽くまで彼等の監督者としての地位を固守せなければならぬ。監督するとは、外でもない、公平なる第三者として、何等の因緣を何れの一派にも結はず、常に國家的見地より觀てより善き立場を取る者に味方することである。只少しでも善き方に與みする外、絕對に自由なる超然的態度を持することである。斯くする事に由てのみ、吾人は市民的義務を十分に完了することが出來る。吾人が斯かる態度を固守する時に始めて政黨は良善を競うて以て國家に貢獻することが出來るのである。

翻つて今日の我國政黨の遣口を見よ。政黨は利權の提供に依り地方の良民を騙つて續々自黨に加入せしめて居るではないか。之を稱して彼等が我黨の地盤と云ふ。地盤とは即ち、地方良民に對する政黨の横暴なる奴隷的驅使の別名に外ならぬではないか。地盤なるが故に、中央幹部の意の儘に動く。所謂公認候補の制に依て、選擧投票の自由は地方民より奪はるゝ。政黨の誇る所謂「多數」は斯くして人爲的に作らるゝ。果して然らば何處に民意の自由なる發動があるか。何處に民衆の道義的判斷の發動はあるか。私に聞く、惡辣なる御用商人はよく役所の會計吏を買收し、粗末な不正品を高價に賣りつけて暴利を貪るとか。河川改修・學校の新設等公共の假面を被れる國帑の濫費は、謂はゞ贈賄である。政黨幹部の指定する公認候補は、取りも直さず、粗末な不正品の提供である。之に貴重なる一票を投じて怪まざるは、賄賂に眼のくらめる官吏が不正品に高價を拂うて悔ゐざると同じである。識らずして之を爲すのであるとはいへ、今日我國の市民が各種の政黨に加入して平然たるは、御用商人と結托して惡錢に身をあやまるを怪まざると同一ではないか。考へて見れば怖しい事の限りである。

斯くて僕は、此の數年來機會ある每に政黨の地盤政策を攻擊し、地方の市民に向つては、政黨員たる事は取りも直さず國家の公器を弄ぶ重大なる罪惡たる所以に反省を迫り、一日も早く

脱黨して身を公平なる第三者の地位に置かんことを警告して居る。是れ政黨を傷くるが如くにして、實は眞に政黨を活かす途でもある。之等の點は他の機會に於て詳しく述べた事もあるから餘り諄々しく繰り返さぬが、要するに、吾々は單純なる市民としては飽くまで政黨の上に超然たるべきである。而して何方にても善い方へ加擔するといふ自由なる立場を守るべきである。斯くして始めて政黨をして眞に國家の利福に實質的貢獻を爲さしめ得るのである。此必要は、日本今日の政黨の如く、寧ろ惡い事を互に競爭してやつて居る樣な處に特に最も痛切に感ぜらるゝ。然らずとするも、吾々が超然的態度を固守するは、政黨をして動もすれば陷り易き過誤より安全ならしむる途であるといふ點に積極的意義があるのだ。且又どの點から云つても、吾人が進んで政黨に參加するは、政治の運用の上に必要とせらるる毫末の理由もない。

斯う云ふ理由で、僕は斷じて新政黨に參加しないのみならず、凡ての市民に對つても之に參加せざる事が却つて諸君の重要な義務であることを切に警告したい。但し參加せざるの理由が必しもこの新政黨を非とするが爲めでないことは言ふまでもない。具體的の事實問題として、例へば總選擧のやうな場合に、與へられた一票を孰れの黨派に投ずべきやは、全然別個の問題である。

小題小言數則

○

禁酒運動の熱心家があつた。自分の居村を禁酒村にしたいと狂奔して居る。之が自分の生存の唯一の目的だとまでに生命をぶち込んで掛つて居る。然るに村の重立つた二三の者に酒屋を商賣にするがあつて、極力此運動に反對する。說いても諭しても廢業すると云はないので、爲に折角の運動も際どい所で鋒先をへし折られる。熱心家は逐々業を煮やし、直接行動で酒屋を叩き毀して仕舞ふと決心するに至つた。夫を聞いて酒屋は聯合して防禦策を講じ、金に飽かして却て逆襲の勢をさへ張る。斯うなると、攻擊どころか防衛の爲めにも民衆團結の急要に骨折らなければならない。斯くて對抗戰が烈しくなると、少しでも勢を張るに役立つ者は、誰も來い彼も來いと云ふ事になる。所謂玉石を分つに遑なしと云ふ譯だ。

すると中に、ひとつ一杯引つかけて景氣を附けて押し出さうではないかと云ふ者がある。夫れ宜からうと、我も彼も盃を擧

げる。酒屋さへ無くなれば酒は自ら飲まなくなる。酒屋を叩き毀す目的の爲に役立つなら、差當り一杯位飲んでも構ふまいと云ふのである。斯くて禁酒運動は酒氣紛々の連中に依つて行はるゝことになる。

勞働運動は文化運動であると云ふ。その文化運動が非文化的手段に依つて行はるゝが如きことあらば、そは文化運動の爲めに極めて痛ましき事である。勞働運動は飽くまで文化運動として徹底する時に始めて最後の勝利は酬へられるのである。目前の勝利に急ぐは、勝負に汚い相撲の樣に、勝つても世間の同情が向いて來ない。

○

戰時費に因む國際間の債權債務の決濟を如何に附けるかは、現時歐米の——否世界の——重大問題である。借りた金は返さねばならぬ。返せねば少くとも將來に對して債務の責任丈けは承認せねばならぬ、この理窟に正面より異議を唱ふる者はない。が、之等關係諸國の財政の現狀は、この一見疑ないらしい原則の少しでもの實現を許さない。乞食に大金の償却を迫つても埒が明かないのである。而かも埒が明かないで放任して置けぬところに困難がある。是れ成功の目途極めて薄弱なるに拘らず、屢々之に關する國際會議の開かるゝ所以である。

理論に依て事實を整理することがいよ〳〵困難だとなると逆に事實に基いて新しい理論を生み出さうと考ふるに至るは自然の順序である。斯くして最近の歐米政界には、二つの新しい理論が生れんとしつゝある。一つは、所謂戰時債務の中には、債權國が自國の目的を達する爲めに債務國を仲間に引き入れ、其爲に金を貸したものから、詰り其の借りた金の使途は債權國の爲にする仕事に向けられた譯だ、故に之は返すに及ばないといふのである。勞農露西亞の主張は之である。も一つは、戰時債務は、要するに世界の平和幸福といふ共同目的の事業に協力する爲に起されたものであるから、共働各國が連帶して債務の道德的責任を負ふべきものである。甲が主として使つたからとて之を其の獨自の負擔と觀る可らざるは、英の軍艦で占領した島だから之を英國の占領に歸せよと云ふ能はざると同一であると。之は聯合側諸小國の言ひ分である。

共に苦しまぎれの言ひ分ではあらう。併し之を單に責任逃れの口實とのみ觀ては不可い。探せば外にも幾らもあらうが、中に就きこの特殊の口實を採んで、現實の苦痛を之に由つて最も有效に免れ得べしと考へた所に、何等か時代の象徵を見ることが出來ないだらうか。詳しい事は他日別に論ずるの機會があらう。僕は讀者と共に刮目して這般の問題の今後の發展に注意し

たい。

○

久しく紹介を怠つて居たが、玆にまた少しく最近寄附の二三書に就て語らう。

第一に擧げたきは兩雄會心錄と題する山岡鐵舟居士自筆稿本の寫眞版である。記事は維新の際徳川家の處分に關し居士と西郷翁との間になされた談合の顚末にかゝる。官軍東征の陣江戸に迫るに連れて、幕臣の動搖抑へ難く、兩者の意思全く疏通を缺いて無類の不祥事を見んとせるの際、山岡鐵舟は先づ將軍慶喜に謁して恭順謹愼の誠意に二心なきをたしかめ、挺身敵陣の中を走て晝夜兼行駿府なる大總督府本營に西郷吉之助を訪ねる。玆に兩雄相會して天下の大事を論ずるのだが、或は論し或は怒り、激論數次の後、西郷提案する所の五ケ條の實行に對し、山岡乃ち其四を確約して分れた。其間天下の大局に對して公明正大の見識に兩者相通ずる所あるを想はしむる。要するに之が基となりて後江戸薩州邸に於ける西郷對勝山岡の會見となり、やがてまた平穩無事の間に江戸城を明け渡すことも出來たのである。明治十五年、鐵舟居士は三條相公の命に依り當時を追懐して自ら其顚末を筆錄した。之が卽ち本書である。維新史研究の資料としても頗る有益なものだが、そが又居士自筆の原本を其儘寫眞版にした所に特別の面白味があるのである。

この原本は、居士が其師事せる天龍寺派管長滴水老師に呈せるを後現臺灣花蓮港東臺寺住職たる天田業堂氏の手に傳はり、同氏が東臺寺改築の資を得んが爲に一兩年前刊行したものである。實費を寄附すれば殘本を頒つさうだが、とにかく誠に珍らしいものである。大阪日本紙刷二十五枚、印刷頗る鮮明で裝釘も美しく、立派な帙入になつて居る。

○

近頃讀んだ物の中で頗る快心を覺へたのは、阿部次郎君の「人格主義」と林久男君の「藝術より生活へ」の二書である。前者に就ては文化生活の本月號に少しく書いたから玆には述べぬ。後者についてこゝに少しく感想を語らして貰ひたい。

著者林久男君を僕が始めて知つたのは、去年の春頃であつたと思ふが、君が大阪毎日新聞に出した「人類生活の革新―價値の轉換を基底として――」と云ふ論文（此論文も本書の中に收められてある）に依てゞあつた。夫れまでは僕は林君の名さへも知らなかつた。一度此の論文を讀むに至つて、其の思想的教養の深き、其の社會的事象に對する理解の親切なる、且つは態度の飽くまで眞面目で溫味に富める、又文を行るその技巧のうまさなどに魅せられたのであつた。そこで僕は肩書の三高教授とあ

るをたよりにして一書を呈し敬意を表したのであつた。其後いさゝか交りを重ね、夫となく其の人柄も見聞し、就中書かれたものは絶えず目を通して益々敬慕の念を深うしたのである。その近業「藝術より生活へ」中に收めたものは、多く既に一度讀んだことのあるものだが、かう纏つた形に於て接すると、更にまた再び清新の味をあぢはふことが出來るやうに思ふ。

内容については一々紹介せぬ。只僕は平素敬慕して措かざる友人の作物の公刊に接し、喜びのあまり一言推薦の辭を列ぬる次第である。併し僕の特に讀者に紹介したく思ふのは、著者に取つては其の思索のホンの片鱗に過ぎざる本書ではなくて、寧ろ最も優れたる社會指導家としての林君其人なのである。

○

外に僕の机上に横はる最近寄贈の書物の中、目下讀んで益を受けつゝあるのは、土田杏村君の「自由教育論」である。共鳴する所も甚だ多い。同君の現代思想界に占むる立場に就ては、近く少し詳しい意見を述べて見たいと思つて居る。故に今くど〳〵しくは說かないが、田中王堂氏が本誌前號に於て批難したに拘らず、僕は寧ろ同君の立場に多大の同感を有するものなることを一言して置く。

學友中島重君の「多元的國家論」は、高田保馬氏の「社會と國家」と共に、僕の最も興味を以て讀んだものだが、之は僕の專門にも關すること故、近き機會に於て詳細に教を乞ひたいと考へて居る。要するにこの二書は、殊に前者は、西洋に於ける最新の學說を親切に傳へたる點に於て、今日我國の國家思想の整理に一道の先明を與へたる點に於て、又少くとも混亂裡にある斯學の思想戰に一個の大問題を提供したる點に於て、着目を逸す可らざるものであると信ずる。

遠藤無水君の「無政府主義の根本批評」も亦面白く讀んだものゝ一つである。其の學術的價値に就ては多少の疑なきを得ないが、平易暢達なる文字の中に、飽かずこの復雜なる問題を了解せしむる老手には敬服せざるを得なかつた。

世界思想研究會の發行に係る「世界パンフレット通信」も亦吾人の智識慾を充すこと著しきものがある。中には著譯編纂物もあるが、大部分は西洋殊に英米の新刊雜誌の論文の抄譯であるやうだ。問題は現代人の興味を注ぎ得べき凡ゆる方面に亙つて居り、文字は頗る平易簡明である。之に學術的正確な智識を期待するは或は無理かも知れないが、之に由つて研究的興味に刺戟を受け、無意識の間に自ら活きた現代と接觸を保つて往けること丈は疑を入れないと思ふ。

Virginia（ヴァージニア）の野に立ちて

伊藤寒水（寄）

一

糸より細き雨のけぶるといひたいやうな
大陸の眞唯中に立ちて
私の命はこのヴァージンランドが吐き出すいぶきの中に
動もすれば
あの空とぶ鳥のかげと共に
吸ひ込まれようとして居る

二

限りなくもうつろひ行く世の中に
今より後のあらゆるものをも
生ましむべき
自然の大なる力よ
あのハドソンの川べりに
今しも萠え出でんとする綠の草を敷いて
私は今人の心の
創造といふことを思ひめぐらして居る

三

物質文明の榮華を超越して
あめつちの不朽なる藝術に思ひを致すとき
吾等のあこがれはあの古き殿堂の
アクロポリスのあたりをさ迷うて
グリーク文明の古に
たまさかなる理想のかわきを
慰せんとして居るではないか

四

アジアの小さい島の中に
咲きさかれる櫻の春をのみ
誇ることをやめよ
御身等の思を轉じて
いつかは
人間の使命に企て得べき
永劫の花園に一歩を進めようではないか

五

天地(あめつち)の間にかりそめの一旅客である
といふやうな
果敢ない足どりに
首をあげて大西洋の彼方

君行く方に思をはせながら
私の心はあのかもめの群を追うて
幾度か古の歌人の心を慕ふ

六

一片の清き心は
萬のものにも打勝ち得たる
汝ピューリタンの祖先よ
やるせない青春の胸に
一管の筆を抱いて
其の處女航海に
約束の陸に志したるワシントン　アーヴイングよ

七

歐と米と二つの陸の間に

脊ては仇なす波を浮べ
又かつてはなさけの糸の
うるはしき文化の綾を織り成し得たる
あはれこの水よ海よ

八

なれはしもさすらひの胸に
人の世の遠き岸邊をあこがれながら
さすが
祖國を思ひ離れがたき
この流轉の男の心をのせて
今はた何處にか
其の白波を打ちよせんとすることであらうぞ

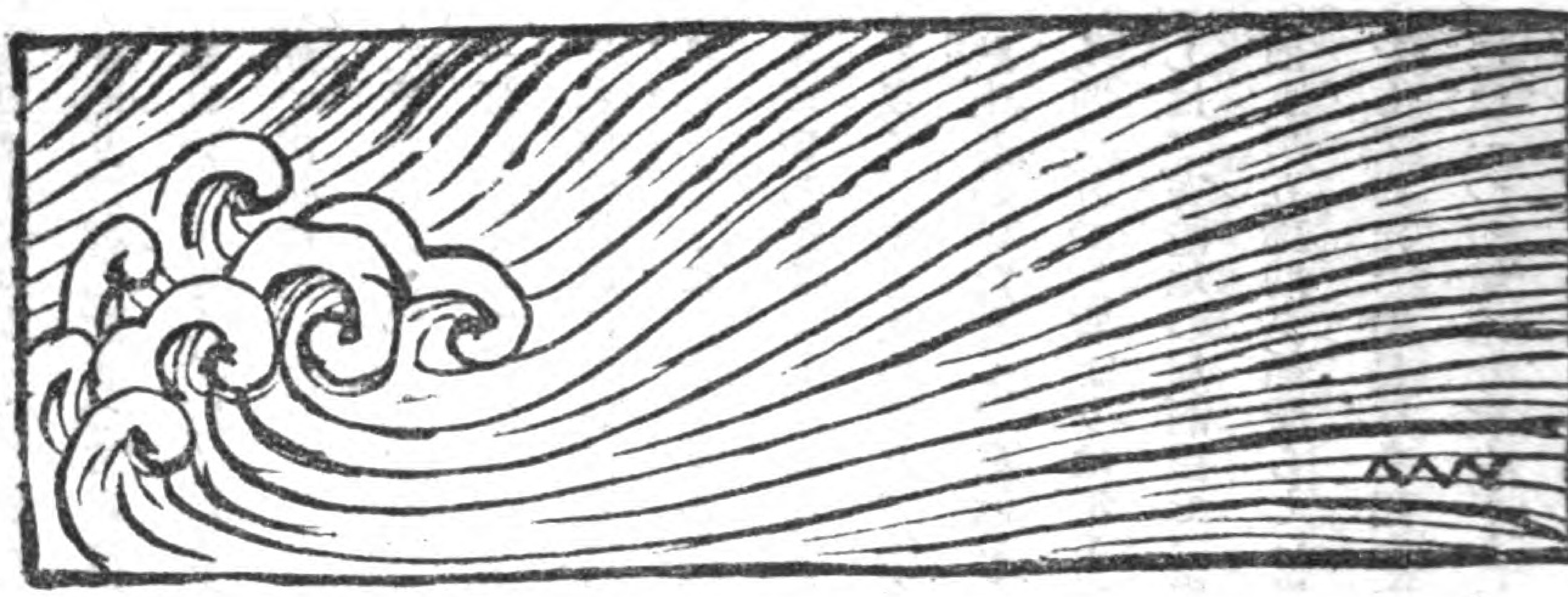
大正十一年初春

右の一篇は東京府立第五中學校長伊藤長七氏が仝校教諭橋純一氏の手を通じて本社長麻田駒之助氏に寄せられたるもの一也。錄して以て仝校長の若々しき氣分を窺ふの資となす。（編者しるす）



中央公論第卅七年秋季大附録號創作

小説 海神丸……野上彌生子
小説 續山戀ひ……宇野浩二
狂言 人間萬歳……武者小路實篤
小説 おぎん……芥川龍之介
戯曲 火のついた踵……中條百合子
小説 馬……長谷川如是閑
戯曲 酌……大森眠歩
小説 直輔の夢……里見弴
戯曲 玄宗の心持……菊池寛



海神丸

野上彌生子

十二月二十五日の午前五時、メーン・トップ・スクーナー型六十五噸の海神丸は、東九州の海岸に臨むK港を出帆した。目的地は其處から約九十海里の、日向寄りの海に散在してゐる二三の島々であつた。島からは木炭と木材と、それから黑人仲間には五島以上だと云はれる非常に見事な鰑が出た。その他、何か知ら海產物は一年ぢう絕えない上に、往復に日數がとられないから、割のよい點ではこれ位割のよい航海はなかつた。海神丸の若い船長はそれをよく知つてゐた。彼は阪神方面や中國筋を一と廻りして來た後では、屹度この島の方へ舵を向けた。――島で丁度な積荷がなければ、進んで大隅あたりへのすまでゞあつた。

今度の航海は、町の問屋筋の大豆を門司から積んで戻つたばかりの後であつた。併しその儘故鄕の濱へ歸つて疊の上で正月を待つのは勿體なかつた。まだ四五日は殘されてゐる。島ならば、その間に一と仕事出來る筈であつた。木炭でも材木でもよい。

晦日までに何か一と船積んで歸つて、正月錢を餘分に取つてやらう。これが彼の計畫であつた。たゞ殘念なことは、日が餘りに押し詰まつてゐたので、島の家々の正月の用意は既に誰かの早い船で整へられてゐるに相違なかつた。それで彼はいつも積んで行く酒とか、米とか醤油とか、またその他のちよつとした雜貨類とかを、今度はすべて積まないで空船で出掛けた。

寒さは强かつたが、空はよく晴れ、風は追手で、門出の船には申分のない朝であつた。海神丸は六枚の帆を六枚とも一杯にふくらませて、漸く明るくなつて來た海の路を、大きな鳥のやうに輕く飛んだ。船の内では四人の乘組員がそれぞれ朝の仕事についてゐた。船長の甥だと云ふ、船乘らしくもなく華奢な身體つきをした十七の三吉は、大阪風な黑いあつしの上に三尺を締めて、後甲板の船長室に隣つた小さな炊事場で、朝飯の支度をしてゐた。彼は頭の上の小窓の向ふにぴちや／＼してゐる浪をば知らない者の如く、丁度娘が朝の台所で働いてゐると何んにも變らぬ、平氣な、物馴れた風で、米を炊いだり、味噌をすつたりしてゐた。五郎助はメーン・マストの根元で、同じ服裝で、捻ぢ鉢卷をして、大趺坐をかいたまゝ、鼻歌をうたひながら、船具の繕ひ物をしてゐた。八藏は舵を取つてゐた。この二人の若者はどちらも四つ五つ三吉よりは年上で、身體も大きく、頑丈であつた。殊に八藏は毛深い大男で、舵を掴んだ太いまつ黑な腕ぶしは、寄港地の居酒屋で、幾らか醉狂のある彼が醉つて相手かまはず振り廻はす時の强い拳を忍ばすに十分であつた。而して五郎助が船乘らしい亂暴さと共に、何處か拔けたやうなところの見えるのと反對に、彼は一癖ありげな利かぬ顏をしてゐた。船長は今起きたばかりで、自分の部屋にゐた。それは入口が板敷になつた長四疊の細長い小部屋で、正面には一つの粗末な寢台がおいてあり、その下は布團入と小さい箪笥になつてゐた。それつきりで、部屋の中には何んにもなく、きちんと清潔に片附いてゐたが、たゞ隣りの船員室に面した板壁の上に、大事な二つの小さい棚が吊られてあ

つた。一つの棚は海圖や、コンパスや、バロメエトルや、磁石や、航海日誌や、その他一かどの船員の部屋になら誰の部屋にも乾度ある筈の品々が、安物ながら皆揃つて並べられてあつた。またその棚のすぐ左手の壁には丙種運轉手としての町の水上警察署の認可證の木札が、小谷龜五郎と云ふ彼の名前と、本籍と生年月日――それに依ると彼はまだ四十になつてゐなかつた――を記した面を裏にして釘で打ちつけられてゐた。

今一つの、寢臺に近い方の棚は彼等の仲間が守護神として崇めてゐる金比羅樣の神棚であつた。それにはもう御燈明がともつてゐた。而してその灯は昨日出帆前に供へたばかりの青々した榊や、小さい御酒徳利や、紅白のお幣の間で瞬いてゐた。頓て船長はその棚の下に坐つて、潮風に染まつた大きな荒い掌でぱち／＼と柏手を打ちながら、彼の毎朝の拜みをあげ初めた。彼は今度の航海の無事を祈つた。島々の積荷が計畫通りに行つて、よい正月錢の取れるやうにとも祈つた。また陸に殘してある家に就いて――家には年取つた兩親と、數年前に結婚してまだ子供のない妻があつた――祈ることも忘れなかつた。彼は彼等の仲間の傳統的な強い信仰を持つてゐた。氣紛れなあの風と、一寸としたことにも直ぐ恐つて狂ひ立つ波を相手に暮らす自分等の渡世で、神樣の力より外に何が頼みになるものがあらう。この決定的な信頼は、一枚のお札の前にも彼等を子供のやうに手を合はさせるに十分なのであつた。船長はいつまでも熱心に祈り續けた。而してその眞率な祈禱の態度は、頭の上の燈明のほのかな光と共に、彼の海員らしい粗つぽい姿や服裝につき纏ふ平常の感じとは別な、愼ましい、宗教的な空氣でその小部屋を充たした。

どちらかと云ふと彼は小男であつたが、四角な打ち堅めたやうな身體と、ぎよろつとした大きな黑瞳と、短い角張つた顎とは、精悍な野獸の或者を聯想させた。が、利巧さうな廣い額と、締つた下品でない口許は、彼が決して猛々しいばかりの若者でないことを證據立ててゐた。鼻も卑しくはなつた。而して髮毛がまつ黑で幾らか縮れてゐるのや、日に

焼けた耳から頬へかけての輪廓は何處となく三吉と似てゐた。着物は三吉やその他の若者と同じあつしを着てゐたが、三尺は彼だけは紺金紗の大巾物を締めてゐた。

『五郎助、おい、昨夜棕櫚縄アどきイ積んだんか。』

船長は頓て部屋を出ると、マストの下の五郎助を目がけて行きなり呼んだ。

『わしや知らん、八が知つちよる。』

五郎助も負けずに怒鳴り返した。

『八、棕櫚縄アどきイ置いたんか。』

船長は身體を動かさずに顔だけ艫の方へ向けて怒鳴つた。

『表ん下へ入れちやる。』

八蔵の太い、どすの利いた聲が舵の場所から怒つたやうに返事をした。が、彼等は本統に怒つてゐるのでも、喧嘩をしてゐるのでもなかつた。それは、平常波の音に打ち消されまいとして話すに馴れた、船乗特有の聲の調子に過ぎなかつた。船長はその棕櫚縄を見るために船首の方へ歩いて行つた。彼は丁度家の廊下をでも散歩するやうにのつそり〳〵歩いた。而して下が船具の置場になつてゐる、船首の艙口に達した時、その四角な穴に身をかがめる前に、彼は足をジップ帆の前に留めて、沖のぼうつと霞立つた水平線の上にぢつと目を据えてゐた。

『今日も西風が強いわい。』

彼はひとり言を云つた。

その内に三吉の手で出來上つた朝飯が、船での唯一の廣間である、船長室の隣りの船員室に運び込まれると、三吉は

甲板に飛び出して、一人一人に怒鳴つて觸れ廻つた。

「おつさん、飯が出來たぜ。——五郎助、飯食はんか。」

併し彼は二人を待たないで、自分だけ先にはじめた。而して船乘仲間の自慢である、沖の潮で炊いた味のよい飯を——彼等は陸の上の飯は水臭くて食へないと云ふ——大きな飯茶碗に山盛りによそつて、さも甘さうに、手ばしこく搔き込んだ。彼は八藏に代つてやらなければならないのであつた。それ故、船長と五郎助が入つて來て、やつと一杯の茶碗を空にするかしない内に、彼は食ひ度いだけの飯を食ひ、吸ひ度いだけの味噌汁を吸つて、もう立ち上つてゐた。而して戸の中から叫びながら甲板に飛び出た。

「八、さあ代るぞ。飯食つて來い。」

海にはもうあらゆる種類の船が朝日に輝らめいて浮んでゐた。夜釣の船は一晩ぢう釣りためた獲物を町の朝市にかけるために、大急ぎで沖から漕ぎ戻つてゐた。反對に今からぼつ〳〵漕ぎ出して、遠くの漁場で大物をねらはふとする漁船もあつた。その他年寄や、かみさんや、子供や、取り分け大勢の娘たちを船一杯盛り上るほど積んで——實際娘たちは大きな粉袋や海草類の束の上にまで、ピラミッド形に乘つてゐた——漕いで來る大傳馬が幾艘もあつた。これは、その海の左右の岸に並んでゐる漁村の部落々々から、町をさして出掛けて行く正月用の買物船であつた。——町は丁度沖を斜に受けて、海が圓く挾まつた奥に開けてゐた。——彼等の船は見るからに陽氣でにぎやかであつた。殊に娘たちは買物の話や、正月の遊びの樂しい計畫を夢中にぺちやくちや喋り立てゝは、絶えずかけ構ひのない高笑ひを波に響かしてゐた。船は大抵誰かの夫か息子が漕いでゐた。中には女ばかりで交る〳〵立派に漕ぐ船もあつた。

三吉はもう若い女の聲が耳につかぬ年頃ではなかつたので、これ等のにぎやかな笑ひ聲が聞こえる度に、舵を掴みな

がらその方の船に目を注いだ。何浦、何村の船だと云ふことがすぐ見分けられた。
一二の見知り越しの船ともすれ違つた。
『海神丸、何處へ行くんか。』
『島ぢや。』
『早う戻つて來い。正月だぞ。』
彼等は人々が町の往來で行き逢つた時と同じやうに、自由に海の上でも挨拶を投げ合つた。が、三吉は向ふの船の娘たちが一齊に此方を見てゐたので、常よりも一層大きく、不自然に怒鳴り返した。而して舵をきゆつと握り締めた。
同じ濱の友達の釣り船にも出逢つた。
『漁はどうぢや。』
『ちつとは釣つた。』
『一こん投げんか。』
『よつしや。』
船に廻つてゐた一人の若者が船を漕ぎ寄せると、胴の間にゐた今一人の若者は生洲から二匹の魚を掴み出して抛り投げた。三吉が舵機から駈け出した時には、海神丸の甲板には、青い大鯖が銀色の腹を返してぴち〳〵跳つてゐた。一尾は、丁度飯をすまして部屋から首を出した五郎助が、飛びついて捕へた。
『こいつが二匹ありや、晝は御馳走が食へるぞ。』
彼は魚を掴んだまゝ、大きな馬鈴をにた〳〵させて笑つた。

が、四五時間たつて船が外海に出きつてしまふと、斯んな人間臭ひ光景は悉く彼等の周圍から消え失せてしまつた。見渡す限り今はもう太陽と大空と海とより外にはなかつた。それと共に、これまでは單に船の横腹でぴちやぴちや舌打をしたり、舳にぶつ突かつてふざけたり、艫を持ちあげて騒いで見たり、いたづらつ兒らしい惡戯を續けてゐたに過ぎなかつた波が、急に裏切り者のやうに態度を變へて、狂暴な姿で襲ひかゝつた。高さは五六十米突のタンク以下ではなかつた。そのタンクが幾百と繋がつて、非常な長さになつて、一齊に轉がつて來る。而して船に近づくに從つて、背伸びをして、膨れて、膨張の頂點で、一瞬間、蛇が鎌首をもたげたやうな姿勢で、きつと身構へをしたかと思ふと、どどど——つと叫んでは、船を目がけて雪崩れ落ちた。色も朝の落ちついた群青は全然失はれて、赤黑くよどみ、濁つて來た。——日向灘に近づいたのであつた。

その時分から風も變つた。今までの北西が眞西になつた。而してそれが非常な勢で吹き募つて、波と競爭で船を弄び出した。

『ちえつ、とんだお客樣ぢや。』

海神丸の若者たちは舌打ちをして忌々しがつた。彼等は波なら大抵までは平氣であつた。どんなに狂ひ廻つても、甲板の下まで怒鳴り込んでも、結局波は根のない空騒ぎ屋で、船員たちの胃の腑を早く空にする位が落ちだと高はくくつてゐるが、風だけはさうは行かなかつた。而してこの海の暴君に仕へる方法は、悧巧な家來が人間の暴君に仕へる態度をその儘學ぶより外に仕方のないことを知つてゐた。決して抵抗せぬことであつた。怒るだけ怒らせておくことであつた。而して幾らでもその怒りをよい方に利用することであつた。海神丸は六枚の帆をそれ〲巧みに加減することに依つてなるたけ輕くその暴威を受けようとした。けれども風は終日力を弱めなかつた。夜に入つて少し落着いたかと思ふ

時分には、船は航路から遠く東の海に流されてゐた。

『えらい目に逢うたなあ。本統ならもう今時分は島についてゐる頃ぢやに。』

『さうとも。この調子ぢや明日もどんなもんかな。』

『吹きたけれや吹けぢや。』

晩飯をすました後の船室で、かすかなカンテラの光に照らされながら、三人の若者はのんきに寝ころんでゐた。追手が續けば十時間で辿りつける島も、運が悪ければ六日や七日かゝることは珍しくなかつたので、一日流された位、彼等は氣にもかけなかつた。而して丁度陸の家で爐を圍んで話すやうな調子で話し込んだ。五郎助が、一番多く馬鹿話をした。八藏はむつちりして、おかしくもないと云ふ風をしてゐながら、猥らな話になると達磨のやうな鬚面をにやりとさせて、目をぎよろつかせた。島のお婆んとこの椿餅の話も出た。が、主に島の女の話が多かつた。そのことだけは三吉にはすべて未知の世界であつた。それだけ初な好奇心のそゝられるのを、彼はまだ汚れぬ若者の氣恥かしさで押へて、わざと船側の方へ顔を向けて聞かぬふりをしてゐた。五郎助がそれを冷やかすと、三吉は急に小犬のやうに飛び起きて、顔をまつ赤にしながら五郎助の胸にむしやぶりついた。

その間、舵機の前には船長が坐つてゐた。彼はすぐれた調馬師が馬の手綱を取る時の熟練でしつかり舵を掴み、實驗室の科學者の冷靜で注意深く空と海を見守つてゐた。月はないが星の美しい夜で、空はその光で一面白い粉を吹いたやうな影を漂はせてゐた。そのためにまだ晝の怒りを收めない膨れた海は、一層もの凄く眞つ黑に見えた。時々、寒い木枯が、二本の帆柱と三枚の帆布の間を縫つて、鋭い、悲しげな叫び聲をあげる度に、星は黑い海の上で一齊にきら〱して、或る怖ろしい意味を暗示するかの如く瞬いた。船長は船乗だけが持つ、獨特な、遠見の利く目で、遙かに水平線

と思はれるあたりを熱心に探つた。而してその線の上の西に面した一點に、ぼうつと慧星の尾を引いたやうな靄の現はれてゐるのを見つけた時、彼は明日もまた西風の強いことを覺悟した。

彼の觀測は誤らなかつた。夜が明けると風は昨日と同じ進路で、しかも昨日に倍する激しい勢で吹き出した。同時に船は夜の間に幾らか取り戻しかけてゐた航路から、瞬く間に押し返されて、再び東へ〳〵と流され初めた。どうすることも出來なかつた。怖ろしい風力は船員からすべての帆に對する操縱の技巧を奪つてしまつた。而して六枚の帆は、丁度恐い者に脅かされた子供の群のやうに、てんでにあはてたり、騷いだり、身悶えして叫んだりした。彼等は何度も危くなつた。それを皆んなで固まつたり、ほぐれたりして逃げ廻つた。けれども終に大きな手は彼等に屆いた。船首のジツブ帆がまつ先に吹き飛ばされた。帆柱からちぎり取られて、まつ黑な太洋に散つて行つた時、それは一片のかんな屑ほど上には見えなかつた。二時間の後にはメーン・マストに張つた一番大きな帆が飛んだ。夕方には再び船首のステー帆がなくなつた。而して暴風は夜に入つても止まなかつた。

この時分から船長はひそかに最初の計畫を變へてゐた。彼はこの後風が凪いだとしても、島へ後戻りをするよりは、土佐へ着けた方が得だと思つた。鰹節にしろ、木材にしろ、其處まで行けば、積荷に不足する筈はない。明日にも風が變つたら、一二日の内に土佐灣の東の半島に辿り着くことはむつかしくなからうと信じられた。たゞ正月の雜煮餅を食ひ損なふ若者たちの失望を思ふと、可哀想でもあつたので、彼は不斷よりは氣輕く、餘計な冗談口を利いたりした。

『五郎助、今度歸んぢ見い。道頓堀のをなごかん手紙が來ちよるぞ。おれん天眼通ぢ當てたんぢやけん、間違ひはねえわい。』

「八もこれで中々口聞きぢや、今度は一つ村會議員に出るがいゝ。おれが五郎助と一緒にうんと運動しちやろうのう。」

『おい、三吉、珊瑚樹ぅお土産い持つち歸のうと思ふなん、明日かん海ん底ぅ見張つちよれ。此處ん近所は一面珊瑚林ぞ。』

斯んな調子であつた。一體に無口で、それが自然の眞目になつてゐる彼も、場合で砕けると誰も及ばぬ愛嬌と頓智を表はした。

幾らか賑ぎ氣味になつてゐた三吉も、彼の斯んな言葉を聞くと、平常の笑ひ顔をとり返した。五郎助も馬鹿のやうににや〳〵した。たゞ八藏だけは佛頂面をしたまゝにこりともしなかつた。而して絶えず忌々しさうに、吹きめくる風と、果てしない暴れた海と、物凄いちぎれ雲の飛ぶ大空を交る〳〵眺めてゐた。

四日目の朝になると、風は北に變つてしまつた。これは土佐方面にかけた船長の希望を全然打ち挫いたものであつた。而してひどく寒くなつて、一面灰色にかき曇つた空からは時々霰が降つて來た。

『何んちう天氣ぢや、こりや、霰まぢ降り臭つち。』

八藏は舵を掴みながら、人でも怒りつけるやうに、聲に出してぶり〳〵怒つた。彼はこの三四日の忌ま〳〵しい天氣に對する無しや苦しやを、飛んでもないその霰に丁度おつかぶせたのであつた。夜は船長の好みで、ほんの少しばかりあつた安メリケン粉をこねて、熱い團子汁が出來た。

『この鹽梅ぢやうちの方は雪ぢやのう。』

彼等は茶碗をふう〳〵吹きながら、二言三言故郷の噂をした。三日たてば元日だとも思つたけれども誰も長くその話題に留まるものはなかつた。船に乗つた以上、船より外に家はない。――船乘仲間のこの信條をちつとでも亂す話は、殊に斯う云ふ場合には避けなければならない、と云ふことは、彼等は殆んど本能的に知つて居た。八藏さへ幾ら不平顔

はしてもそれだけは破らなかつた。明けの日は寒さは幾分和らいだが、その代り空は一層險惡になり、波が氣狂ひじみて高くなつて來た。海はもう海ではなかつた。長い連峯と、底のない谷と、鋭い頂上と、山の背と、鞍部とが入り亂れた、而かも怖ろしく尨大な山嶽帶に一變して見えた。その峯の一つに攀ぢ登る時、船は殆んど四十度に近い角度に傾いて踊り、落ちる時は辷り板から辷る子供のやうに、まつ逆樣に深い谷に轉げ込んだ。それを見ると厚い眞つ青な水の壁は、四方八方から崩れ落ちて、その船を卷き込まうとする。船は卷き込まれまいとして身をもがいて爭ふ。途端に噴煙のやうな潮の柱が、舷の眞つ下から湧き立つて、船は危く救はれたと思ふと、それはたゞ第二の峯の鞍部に乘りつけたゞけのことであつた。船は新たに絶頂まで突き上げられる。また辷り落ちる。この轉落と昇騰は、目まぐるしい速度で繰り返された。而してその度に彼等の目の前には二つの相異なる水平線が現はれて、まつ白い水沫の外で相交錯した。一つは頭の上にあつた。今一つは足の下にあつた。

五郎助と八藏は舵にしがみついてゐた。而して波に浚はれないやうに、お互ひの身體をつないで、その綱をまた側の碇に縛りつけてゐた。彼等は雨天用の合羽を着てゐたにも拘はらず、それでも全身づぶ濡れになつてゐた。波は何度も彼等の頭の上を飛び越えた。しかも彼等はしよげてはゐなかつた。寧ろこの三四日にない位に活氣づいてゐた。八藏も決して今は不滿らしい澁面はしてゐなかつた。彼の鬚面は引きしまつて明るく、目は男らしい勇氣に輝いてゐた。捉へどころもなければ、目にも見えないで、それで彼等を好き自由に翻弄する風に比べれば、波ははつきり正體を現はして挑みかゝるだけ愉快に戰へるのであつた。五郎助の顏さへ一人前の戰士らしく凜々しく見えた。

船長と三吉は流れぬやうに船具を固めたり、船に水の浸入を防いだりするのに忙しかつた。波をくゞつて身を動かすだけ、たゞ舵にとりついてゐるよりは危險が多かつた。けれども彼等は八藏や五郎助の組に劣らず上機嫌に働いた。危

險が多ければ多いだけ沈着になり、また素ばしこくなるやうにさへ見えた。餘り傾斜の甚だしくなつた船の安定を保つためと、今一つは三枚の帆を失つて、半分以上奪はれた航行力を償ふために、船首に錨綱を曳かせて潮流の中を流さうとした時には、船長は殆んど怒濤の間に身を逆にして働いた。三吉は船長の腰に結びつけた今一つの綱を、舷側の太い鐵の環に縛りつけて、それをしつかり掴んでゐた。

『そら來た。どつこいしよ。』

波が全身におつかぶさる度に船長は囃した。三吉も龍のやうな水しぶきを浴びながら白い齒を見せて笑つた。綱は終に結びつけられた。今海神丸はその長い角を持つて不思議な鳥のやうに見えた。而してその鳥が彼女の胸の下から湧き上る怖ろしい潮の塊まりに突かれて、身を空に反らしてもだえる度に、角は蛇のやうにくねつて躍り上り、腹立たしげに海を叩いた。

波だけならそれでもまだどうにかなつた。けれども、夜明け方からその波に西南の强風が加はつて、殘つてゐた前部の廣い帆と船首の最後の三角帆を吹き飛ばした時には、船長は今度の航海がいよ〳〵困難に陷つたことを考へさせられた。けれども船がこの儘どうにかしてこの境遇に浮んでゐさへすれば、その内には天氣も恢復するだらうし、たとへ不運な風と波が續いて、船は打ち碎かれ、たゞ板子一枚きりになつたとしても、小笠原島通ひの船か、または自分と同じやうに航路を迷ひ出た何處かの船に見出されないとも限らない。——否、決してこの船がそれまで淺ましく潰れる筈はない。やつと一昨年船下ろしをしたばかりの新造だ。その上金物でも、材料でも此の等級の船としては贅澤過ぎる位金をかけてあるのだ。——船長はこの點に强い自信をかけてゐた。それ故たゞ警戒を要するのはこれ以上遠く行かないことであつた。決して日本の領海を離れないやうにすることであつた。それに就いても最も怖ろしいのは、今吹き出した

風であつた。若しこの風がこの位の勢で二三日も續いて、船がそれに乘つて走つたとしたならば、彼等はどこの海の果へ吹きやられてしまふか分らない。でなければ、顚覆してしまふに極まつてゐる。——

『三吉、鋸う持つち來い。五郎助も來い。』

この心配が船長に最後の決心をさせたのであつた。船員室の中でやつと一と息入れてゐた二人の若者は、彼の叫聲でまた立ち上つた。彼等は船長と一緒に身體を結びつけた。而して三人で甲板に出ると、船長は三吉の渡した鋸で、メーン・マストのつけ根を甲板とすれ〳〵のところから挽きはじめた。彼はこれ等の不幸な作業をちつとも悲しむ風もなければ、周章てた樣子もなく、丁度木挽が小屋で木を挽くやうな態度で行つた。倒れかけた帆柱は三吉と五郎助で受留めた。而して頂上に接いであつたトツプ・マストをば、三角の小さいトツプ帆と共に取り外づして大事に仕舞ひ込んだ。本統を云ふと、船長は今一本の前部の帆柱をも切りたかつたのであつたが、それだけは思ひ留まつた。若し天氣が直つて、遠くに汽船の煙でも見えた場合には、その柱を信號台として使ふ必要があつたから。

夜が明けると珍しく南風になつて、波の高い割に風は凪いで來た。それ故船長は昨日大事に取りはづしておいたトツプ帆を前部の帆柱の上につけると共に、船首に曳かせてあつた錨綱を引きあげて、北に向つて幾分でも正しい進路を極めようとした。けれどもどこまでも運が惡かつた。午後になると風は西北の暴風に變じて、その上凄まじい雨が土砂降りに降つて來た。これは三種類の敵が一時に襲ひかかつたやうなものであつた。風の荒らし殘した物は波が荒らした。波の手の屆かぬところは雨が引受けた。色んなものが洗ひ流された。船首に置いてあつて、今日までどうにか無事であつた一樽の澤庵漬もその日の波に浚はれた。が何よりの打撃は前檣の頂にとり付けたトツプ帆が終に吹き飛ばされたことであつた。これで船には一枚の帆もないことになつた。斯うして海神丸はただ一本の帆柱を持つのみで、船名板一枚

を水に浮べたと何にも變らぬ無能な純然たる漂流船となつてただよひ初めた。

その夜、三吉は米櫃の米がもう後一斗とは殘されてゐないことを叔父に報告した。

『よし、そんなン明日かん粥にしよ。』

けれども船長のこの命令は八藏の激しい反對を買つた。

『今えなつち、そげん物う食ふちたまるか。』

彼は斯う罵つた。今一度しけに逢へば到底助かる見込みはない。その上この天氣模樣ではいつ何時救れ出さないとも限らないのに、米を食延ばして何を待たうと云ふのか。どうせ死ぬものなら出來るだけ旨い飯を食つて死なう。今の場合それがせめてもの樂しみだ。人間の樂しみと云ふ樂しみから隔離された、而していつ死ぬか分らない自分たちの、たつた一つの救ひはそれのみだ。

『のう、五郎助、さうちやねえか。』

『さうともよ。粥とにんじんはおれの一番好かんもんぢや。』

その好かぬものを食はさうと云ふ人より、好きなものを食はうと誘ふ人に同意するのは、この馬鹿に取つては寧ろ當然すぎることであつた。

『五郎助、われまで何んちうこつちや、そげん極道口をきいち濟むと思ふのか。』

船長から斯う睨みつけられると、五郎助は女の子が叱られたやうに顔を赤くして、それで憫みを乞ふやうににやにやした。が、八藏はどこまでも腰が強かつた。

『何がなんでも、死ぬ時いお粥腹ぢや死にたうねえけんな。』

彼は昂然として云ひ放つた。

『たつた七八日海の上をぶらついたつち、八、われやもう死ぬ時のことまぢ考へちよるのか。けた糞ン悪りい。何ちう馬鹿たんぢや。それで船乗面が出來た話か。』

船長は若者の氣先をへし折る積りで、わざと嚴めしく罵倒した。最後の一句は八藏に取つても一番痛いところを衝かれた筈であつた。けれども彼は默りはしなかつた。

『痩我慢を張つたち何イなるか。こげんしけィ出逢うち、帆ぢやん、マストぢやんまぢ切つちしまうち、その上何處とも分らん外海まぢ流れて來ち、何んぼ船乘でん生きちよられる道理はねえ。わしにやもうちやんと胸のりがしちよる。』

『それが臆病神の取つ附いちよる證據ぢや、八、胸に手を當てちよう考へち見い。おれなざ、どんな目に逢うたち死にやせんぞ、金比羅樣がついちござるぞ、と云ふ氣ぢをるけん心丈夫なもんぢや。粥をすゝらうが、水を飲まうが、よしんばこの船が叩きこわされて板子一枚にならうが、ぢつと辛抱しち待つちよらにやならん。短氣を起しち無茶うすりや、何んぼう金比羅樣が助けうと思つたち、助かる前に自分たちぢ身を滅ぼししまうばかりぢや。助かる命も助からんわけになる。そげん馬鹿〲しいこた、おれにや出來ん。』

船長の言葉には強い信仰と、飽くまで生きようとする人の烈しい願望が燃えてゐた。その話に一番打たれたのは、一番年の若い三吉であつた。彼の、ともすれば怯えようとした心は明るくなり、自分の叔父に對する新たな信頼と、一種の英雄崇拜に似た感激で、愉快にさへなつた。同時にその甥である自分が決して弱音を吹いたり、自暴自棄の心を起したりしてはならないと云ふ自尊心が、彼を雄々しく、また事實以上に落着いて振舞はせた。五郎助でさへも船長の言葉を成る程とは聞いてゐるらしかつた。たゞ八藏だけは最後まで主張を枉げなかつた。

『理屈を並べりや限りやねえ。わしやただ粥は食はんと云ふだけぢや。』

彼等は夕飯をすましたばかりで、皆船室に集まつてゐた。平常の航海なら、その部屋は毎晩彼等の娛樂室になつて、のんきな笑話をしたり、船乘仲間の流行歌をうたつたり、時にはまた五郎助の下手な義太夫がはじまつて、皆んなに腹を抱へさしたりするのが常であつた。今度でも初めの一二日は同じ狀態が續いてゐた。けれども不運な天候が長引くに從つて、その部屋の夜はだん〳〵淋しく、陰鬱なものに變つて行つた。船長は今はもう食後三十分とは落着いてはゐないで、直ぐ後の自分の部屋へ引き上げた。後に殘つた若者たちにも歌ふ餘裕はなかつた。話しも多くはしなかつた。天井から吊された角燈の暗い光の下で横になつたり、船具に凭つかかつたり、また一人ぽつんと趺坐をかいたりしたまま、三人が三人とも默り込んで、めい〳〵の思ひに耽つてゐた。三吉や五郎助は、それでも頓て普通の建全な眠に入ることが出來たが、八藏はいつまでも目をぎよろつかせてゐた。或るいら立たしい悔恨と、癒やされぬ不平がその眠を邪魔してゐた。

『馬鹿々々しい。彼奴の辯口に引つかかつち飛んだ目を見ちよる。』

彼は家畜のやうに鼻を鳴らして怒つた。――彼奴と云ふのは船長のことであつた。

一切の原因は、八藏が本來海神丸の乘組員ではなく、臨時雇の船乘だと云ふことにあつた。彼は隣村の者で、海神丸に乘り込んだのも、船がこの前門司に大豆を積みに行つた時からであつた。彼は今年はもうそれつきりで船を下りて、家で年越酒を飮み、搗き立ての正月餅をたらふく食ふのを樂しんでゐた。それを船長が無理に引つ張り出したのであつた。

『年寄や女子供ぢやあるめえし、今かん嬶ばたち正月う待づちうこつがあるか。人から笑はりうぞ。さあ、もう一遍行ち來う。島なんぼほんの二三日ぢや。大阪船でも朝鮮船でもまだ一艘も戾つちよりやせんぢやねえか。あんなんが戾るま

でにや、こつちも戻られる。正月錢は半文でも多い方がよからうが。』

八藏は一旦坐つた家の爐傍を不承無精に立ち上つた。あの時何故頑張つて陸に留まらなかつたか。――それを思ふと彼は腹立たしくてならないのであつた。

『ふん、飛んだ正月錢ぢや。冥途の渡し賃にもなりやせん。』

彼の荒らく執念深い心には、死の恐怖よりも寧ろこの忌々しさの方が先立つて働いた。而してそれが彼の態度をだんだん依故地に、圖太くして行つた。船長にも憚らず突つかかつた。――粥の問題はその一例に過ぎなかつた。

船長は彼の心持の變化を十分知つてゐたので、子飼の若者なら頬桁の一つもひつぱたかないではおかぬところを、彼には我慢した。この騒の内で醜い内輪喧嘩でもあるまい、と思ふのであつた。ただ今夜の態度だけには腹を据えかねた。それで、彼は部屋を出る時嚴しい聲で三吉に命令した。

『三吉、八が食はんなら食はんで遠慮は要らんぞ。明日ん朝かん屹度粥を炊けや。分つたか。』

ドアを開けて自分の部屋へ入らうとした時、彼はふと或る事に思ひついた。餘つ程引き返して、三吉を呼んで注意を與へようかと思つた。けれども自分ながら餘り卑しい想像に恥ぢてその儘にした。

夜が明けた。彼は矢張り手を盡さなかつたのを後悔することになつた。八藏はその朝に限つて一人で先に起きて、自分で飯炊をした。而して三吉や五郎助が目を覺ました時には、針のやうな堅い飯が三升釜に一杯、盛り上がるほど炊かれてあつた。

併し粥を炊かうが飯を炊かうが、どちらにしても數日の後には彼等は何處を探しても一粒の米をも見ることは出來なかつた。鹿んの島まで行く積りであつたので、初めから多くも用意はしてゐなかつた。それでも米は一俵近くあり、他

には味噌が八貫ばかりと、里芋や大根や、菜つけ類が一と叺と、門司の食ひ殘しの澤庵が一樽、――波に浚はれたもの――その他に金比羅樣のお神酒と云ふ名でいつも少しづゝ持ち込むことになつてゐる彼等の晩の樂しみ酒が二升足らずあつた。彼等は米の盡きた後は三度々々味噌汁に里芋を入れて啜つた。

けれども今度は水が乏しくなつて來た。雨は最後の暴風雨以後はもう一度も降らなかつた。而して出來るだけ節約したに拘はらず終に斷水の日が來た。もう半分飢餓狀態になつた彼等の咽喉には湖は通らなかつた。それは食道の乾びた粘膜を刺戟して、針で突き刺されるやうな疼痛を與へた。彼等は釜で煮たてて、一種の蒸溜法に依つて、せめて少しの水をでも手に入れようとしたが、それも成功しなかつた。その上天氣は順調に復して、毎日靑い空が續き、風もなく、波も穩やかで、暖かでもあつた。それだけ又彼等はいつ雨が待ち受けられるか見當がつかなかつた。

この時分から、船長は强い覺悟をした。若し今度の遭難が船乘としての自分の受けなければならない運命であるならば、悅んで受けてもよい。兄たちも皆んな海で死んだことだ。――彼の兄は朝鮮沖に漁に出たまま行方不明になつた。叔父は日露戰爭の時御用船に乘つてゐて、その船と共に黃海で沈んだ。――けれども、いつ死ぬとしても、せめて末期の水だけは飮んで死に度い。自分は兎に角として、あの若者たちにそれだけは十分飮ませた上で死なせ度い。彼はこれをこの頃の金比羅樣のお祈りに入れてゐた。

すると、一と晩夢を見た。彼の前には象頭山の靑々した山が聳えて、木立の間からは琴平神宮の壯嚴な宮居がちらちら透いて見えた。丁度中腹の噴水のあるあたりの景色が、殊にはつきりと見えた。噴水には水が涸れてゐた。此處にも水がないのだと思ひながら船長が悲しんで佇んでゐると、何處からともなく一つの聲があつて、

『水はあるぞ。心配することはない。腹一杯飮ましてやるから待つてゐろ。ほら、この通りだ。』

と叫んだかと思ふと、涸れた吖水からさつと一筋の水が吹き出して、見るまにそれは瀧のやうに四方八方に迸つた。船長は餘りの嬉しさに我を忘れて駈け寄らうとすゝと目が覺めた。まだ暗かつた。彼はこれが若しかしたら神樣のお告げと云ふものではあるまいか、と思ひゝから、床の中で夜の明けるのを待つた。何んとなくよい事がありさうな氣がしてたまらなかつた。

が、明け放れた朝は近頃にもました晴天で、何處を探しても雲の影一つ見えなかつた。これでどうして雨の降つて來る筈があらう。——船長はすつかり失望した 彼は昨夜の賴もしい夢の話を口に上せる勇氣さへなかつた。而して泣き出したいほど落膽して、さう云ふ場合にはその表情を他の者に見せぬために彼がいつもするやうに、部屋に閉ぢこもつて寢台に打ち倒れてゐた。併し彼はまだ諦らめきれなかつた。それで時々甲板に出ては 目を八方にくばつて、空模樣を窺つた。

丁度午後の三時と思ふ頃であつた。——船の時計は、八角時計も彼の船長の懷中時計も波をかぶつて銹びたり、船體の動揺で針が留まつたりして利かなくなつて以來、彼はコンパスで太陽の位置を計つては、僅かに時間の見當をつけてゐた。——北の空に當つて一滴の墨汁を落したほどの小さい點が現はれた。船長の水の底まで探り馴れた目は譯なくそれを見つけ出した。彼は直ぐ双眼鏡を持ち出して一心にその一點をねらひ詰めた。同時に彼は餘りの嬉しさに大聲をあげて叫んだ。

「見えるぞ。——皆んな來うい。——見えるぞ——」

すべての用事を失つて、今は毎日甲板に立つては當途のない船と島を探すのを仕事にしてゐた若者たちは、この聲に驚いて彼の周りに駈け寄つた。

「島か？」

「船か？」

彼等は興奮して口々にわめいた。

『雲ぢや、雨雲ぢや。雨が降るぞ、雨が降るぞ。』船長は殆んど我を忘れてゐた。若者たちはもうその時には彼から双眼鏡を借りる必要はなかつた。一點の雲は忽ち鷲の翼位に育ち、續いて百疊敷の絨氈ほどに擴がり、その絨氈がまたくるくと無限に廣く押し擴げられると見てゐるうちに、天の一方はまつ黒に塗り潰されて、太陽は消滅し、それに代つて風の一軍が空を占領した。而してまだ半時間にもならぬうちに物凄い豪雨がやつて來た。船長をはじめ若者たちはこの悦びにすべての苦勞も、悲しみも、不幸も忘れて、瀧のやうな雨の中を踊り舞ひながら、水を集めた。勿論飲みたいだけがぶくと飲んだ。而して夕方雨が上つた頃には、彼等は七八升入の米研ぎ桶一つと、一斗入の醬油の空樽二つと、四斗入の荷負ひ桶一荷と、一升入の德利三つと、その他船内にある容器と云ふ容器に悉く水を湛へることが出來た。

その後で船長は彼等に自分の昨夜の夢の話をした。

『斯う云ふ不思議があつち見りや、まあ氣を落しちやならんぞ。金比羅様は矢張りおれたちのこつう心配しち下さるのちやけんのう。有難う思ふち、皆んな信心をしち呉りい。』

彼は嚴肅な調子で、諭すやうに、また賴むやうに云つた。若者たちは感動した。八藏さへも殊勝に頭を垂れて聞いた。

けれども若者たちはこの感動を長く持ち續けることはむつかしかつた。水が豐富になつて、彼等の久しい望みが遂げられ、その上いつでも飲み度いだけ飲まれると云ふことになると、神に對する感謝も信念もいつとなしに消えて、彼等の心はまた絶望狀態に返つた。一番惡いことは船の一切の用事から放たれた手と心の紛らしようのないことであつた。若しお天氣でもいけなければ、それに敵對する必要上からでも却つて氣が引きしまつたかも知れなかつた。然るに毎日美しい日ばかりが續いた。而して明けても暮れても目に入るものは空つぼの無限に廣い二つの空間——空と海、その間

にたゞ一つ大きな紙のやうに留まつてゐる太陽のみであつた。人間や、犬や、猫や、馬や、山や、河や、野原や、草や、樹や、鳥や、あらゆる物象があれほど豊かに充滿してゐた世界は何處に消滅したのか。――彼等は其處から追はれてもう何千年も經つたやうな氣がした。この空虚な思ひと、いつ其處から脫せられると云ふ當のない、苛立たしい怒、悲しみ、嘆き。どの漂流船の船員をも半分氣狂ひにしないでは置かないその共通の發作が、今海神丸にも襲ひかけてゐた。而して味噌と里芋の量がだん／＼乏しくなるに從つて、その怖ろしい狀態は一層悲劇的場面を增して行つた。

　船長は八藏の無謀な飯炊に懲りて以後は、殘りの食料を全部自分が保管して、毎日の分量だけを、それも極度に切り詰められるだけ切り詰めた量を、その度に三吉に渡すことにした。これは八藏を憤らせた。彼は奪ふことをはじめた。而して犬のやうに鼻をくん／＼させて、當りをつけた場所を根氣よく探し歩いた。味噌の匂ひですぐ嗅ぎつけられた。所詮、船の中ならば、何處に隱してあらうとも、彼には自分の懷を探ると同樣に容易なわけであつた。船長は終に自分の部屋に持ち込んだ。而して自分がその場所を離れる時には三吉に番をさせた。

『畜生、おれたちにや、壁ん洗ひ汁んやうん味噌汁ばかり吸はしちよいちかん、自分たちや後ぢ二人ち好きなほど吸ふたり、食ふたりするに相違ねえ。そげん馬鹿々々しい話があつちたまるか。のう、五郎助。』

『まあ、そげえ云ふたち、向ふは何んちうたかち船長さんぢやけん、仕樣がねえわい。』

　五郎助のこの返事は一層彼を怒らせた。

『馬鹿たんが。貴樣がそげん量見ぢやけんけん、二人かんおれたちが踏みつけられるのぢや。へん、船長さんが呆れたもんぢや。たつた二圓五十錢で船長になれるんなん、磯のそだ拾ひでん、一人殘らず船長ぢや。』

　海神丸は今の海神丸が最初ではなかつた。第一の船は、三年前に大阪に生石灰を積んで行く途中、播磨灘で灰に潮が

入つて、船火事を起こして丸焼けになつた。而して第二の海神丸たる現在の船は、彼の勇氣と熟練を知つてゐる町の問屋筋や、大きな商家が集まつて拵へてくれた頼子講の掛金で出來上つものであつた。一口二圓五十錢の掛金であつた。而して彼はほんの名前を連ねる意味で一口しか入つてゐなかつた。八藏の罵倒はこれを意味するのであつた

『何んでんいい。おりゃ默つちやをらん。これかん船長に逢ふち、うんと云ふちやる。われも一緒についち來い。』

『ついち行ち、おれに何う云へちうのか。』

『阿呆。――何でんいいけん來い。』

二人立ち止つて、ドアを開けて後の船長室に出掛けた。其處には三吉が一人悲し氣な陰欝な顏をして、足を投げ出したまま壁に凭りかかつてゐたが、入口に現はれた二人の姿を見ると共に、彼の顏色はさつと變つた。部屋の寢台の下の布團入には味噌と里芋が隠してあつた。若い三吉は或る怖ろしい想像に膽を消したのであつた。

『おつさん――、おつさん――。』

彼は野兎のやうに部屋から飛び出して、けたたましい聲で叔父を呼び立てた。船首に立つて、いつものやうに島と船を探してゐた船長は、その聲を聞きつけると驚いて駆け戻つた。

『われたちや何事か、二人揃ふち。』

彼は入口に立ち塞がつてゐる彼等を尻目にかけながら、立ち留まりもせずその儘ずつと奥へ通つて、金比羅様の下に趺坐をかいた。

『話があんなん、まあ入つち坐つたなんよからう。それとも坐つちよられんほど急な用事でん出來たんか。』

彼は斯う云つて一人でから〳〵と笑つた。この潤達な笑聲に一番に引き入れられたのは五郎助であつた。事實、彼は

八藏がどんな重大な用事で自分をまで引つ張つて來たか、その瞬間まで氣がつかないでゐたので、にや〱して、そのまゝ坐り込んで、馬鹿話でも始めさうな樣子を見せた。八藏は忌々しさうにその馬鹿な相棒を睨みつけた。而して自分だけは丸め込まれないぞと云つた調子で、猛々しく船長に突つかゝつた。

『わしたちや、食ふ物う分けち貰ひに來たんちや。』

『ふーん。』

船長は驚かなかつた。彼は鋭い目でぢつと八藏の鬚面を見据えながら反問した。

『と云ふと、味噌も芋も半分わけにしち置かうちうのぢやのう。』

『さうぢや、こげん何處ん世界の果とも分らん海まぢ引つ張つち來られち、そん上食ふ物まぢお前と三吉にいいやうにせられちや、死んでん浮ばれん話ぢやけんな。今んうちいお前たちん分はお前たちん分、わしと五郎助ん分なまたその分と苦情のねえやうに分けち下だんせ。』

船長の鋭い鷹のやうな目の中がちよつと發つた。「八、わりやこの體たらくの中ぢ、おれたちが芋の一つでん餘分に食ふちよると思ふのか。」――と云つてゐるやうに見えた。が、彼は言葉には出さなかつた。

『よし、それもよからう。早速分けちやるけん、われたちん容れ物う持ち來い。』

五郎助は一つのざるを取つて來るために追ひ立てられた。すぐ持つて來た。それから船長の命令で三吉は布團入からすべての貯藏物を持ち出した。味噌はもう二百目足らずしかなかつたが、里芋は儉約して食べてゐたのでまだ三升ばかりあつた。彼はそれを一つ〱數へ上げてきつちり二等分した。その他に今一つ意外な分け前が附け加へられた。それは三吉がその場で急に思ひついて炊事場の隅から持つて來た梅干の種子であつた。船乘仲間では、梅干の種子を海に捨

捨てると天神様が嫌ふと云ふ昔からの云ひ傳へを守つて、決して海の中へは捨てなかつた。海神丸でも勿論捨てないで、しやぶつた後の種子は皆一と纏めにして一つの空罐に入れてあつた。三吉の思ひ出したのはそれであつた。まだ幾らか鹽氣のついたその梅の實の種子は、今の場合何よりの珍味であるべき筈であつた。數を見ると丁度六十あつたので、それも等分に三十づつ取つた。ただ水だけはまだ十分澤山あつたし、また雨が降らないでもないと思はれたので、今までの通り共同で使ふことにして、それで取引がすんだ。五郎助は味噌と里芋と、梅干の種子で八分目に滿たされた小いさいざるを見ると、米の千俵も貰つたやうに嬉しさうにしてゐた。

『おい、おい、八。』

二人が船首に面した方のドアから甲板に出て行つた後で、船長は急に大きな聲で呼び留めた。八藏は振り返つた。さるを抱えて先に立つた五郎助も、一緒にぼんやり顏を向け變へた。

『もう一遍念を押しちよくが、もうそれつきりぞ。それが無うなつたち、此處にやもうやる物あ何んにもねえのぞ。それこそ帆綱でん食ふより外にや仕方がねえのぢや。分つたか。そんこつう忘れめえぞ。』

八藏はそれでも返事をしなかつた。而してふゝんと云つたやうな冷然とした態度で身を返した。船長は部屋の外まで出て二人の姿がすぐ隣りの船員室に入らうともしないで、向ふの船首の艙口の方へ遠ざかるのを見送つた。彼はすべてを知つてゐた。これから彼等が何處へ住まはうとしてゐるかを。また今一つのことをも知つてゐた。彼等の手に委した以上、食物は三日とはないことを。併しこの場合、その要求を拒むことは出來なかつた。彼等は彼等の當然な分け前を取らうとするに外ならない。けれども彼等の危險な生命のために、無理にその權利を保留しようとすれば――それには一人の相手が餘りに愚か過ぎ、今一人はまた餘りに狂暴過ぎた。船長は八藏が怒りに目がくらめばどんな無茶な眞似も

しかねない男だと云ふことを心得てゐた。彼は座に歸ると、三吉と向ひ合ひに足を投げ出したまゝいつまでも默つて、考へ込んだ。この頃の彼はどんな時でも三吉だけには悲しみや絶望を見せないで、にこ〳〵した風を裝ふのが常であつたが、今日ばかりは隱さなかつた。實際、二十日近くも伸び放題に伸びた髮と鬚で、船の者の顏が大抵變つた中でも、彼の變化は最も著しかつた。日に燒けて、たるみ一つなかつた額や頰の上に、幾筋も苦惱の跡がついた。而して瘠せて青黑くなつた。たゞ變らないのは目だけであつた。目は寧ろ彼の强い意志を證明するランプとして、一層炯々と燃え續けてゐたが、それも今はたるんだ瞼の下に包まれて、からみ合つた上下の長い睫毛が、稍潤みの出た目の下に黑い陰を作つてゐた。三吉はその顏を見るに堪へなかつた。彼はこみあげて來る淚を唇にかみしめながらぢつとしてゐた。

間もなく海の入日時が來て、船は一としきり火に包まれた家のやうに眞つ赤に燃えた。たつた一本殘つて突つ立つてゐる船の帆柱は、さながら火焰の柱であつた。焰の一片は開け放した戸口から船長室の中まで侵入した。けれどもその盛んな光線も、室内の默り込んだ黑い二つの像だけに對しては、陰慘な妖怪じみた赤い背景を添へるに過ぎなかつた。

頓て入日は夕闇に代りかけた。それでも彼等は尙身動きもしないで暗い部屋に元のまゝの姿勢で坐つてゐた。――灯をつけぬことに彼等は既に馴れてゐた。油も蠟燭も久しい以前に盡きてゐたのである。彼等はまた部屋の戸を締めようともしなかつた。けれどもこれは彼等の苦惱が立ち上つてそれを締める餘裕を奪つたと云ふだけではなかつた。この邊の海の氣候は日本の六月より冷たくはないのである。

その日以來、船は二つの家にはつきり別れてしまつた。八藏と五郎助は船具部屋を根城にして船首の甲板下に居り、船長と三吉は甲板の上の船長室と隣りの部屋を占めて船尾の方にゐた。而して仲たがへをした隣り同士のやうに、彼等は往き來もしなくなつた。船首の者等は甲板へ出ても決して船尾の方へは近づかなかつた。たゞ船尾の者だけは日に少

くとも二三回は船首へ足を向けなければならない用事があつた。それは、雨の度に骨折つて溜めて來た水槽が、船首に置いてあるためであつた　水汲みには三吉が行つた　三吉は船首の艙口の縁を通る時、下の船室に大の字に横たはつたまゝ、ぎよろつとして彼を見上げる五郎助の目によく出逢つた而　して一日〳〵と日が經つに從つて、その目は一層もの凄く燃えて來るやうに見えた。三吉は何んとなしに怖ろしい者に追つかけられる氣がして出來るだけ足早に其處を通つた。

『三吉。』

或る日、八藏は寢たまま大きな聲で三吉を呼び留めた。

『何んちやい。』

三吉が立ち留まつて覗くと、薄暗い艙口の底で例の目がぎよろつと光つた。五郎助も一緒に轉ころんでゐると見えて彼の二つの大きな毛脛が八藏の頭の上に投げ出されてあつた。

『われたちん處にやまだあるらうのう。』

八藏の聲は幾らかしやがれてゐた。

『何がや。』

『何がやた何か。とぼくるな。われたちや、おれたちと分けたよりや別に隱しちよつたに相違はねえ。さうぢやろが。ああん時いそれう出させさつたんが、おれん扱かりぢやつた。』

八藏は實際無念さうに口惜しがつた。

『そげんこつがあるか。味噌でん芋でんあれだけかありやせさつたんぞ。おりや嘘う云やせん。』

『乾度ぢやのう。』

『乾度ぢや。』

一瞬間默り合つた。それから八藏はまた改めて聞いた。

『それが本統なん。われかたにももう食ふ物あねえ筈ぢやのう。』

『あん時おつさんが云ふたぢやねえか。何んにもありやせん。おつさんでん、おれでん、こん一二日あ渇ばつかり飲んぢよるのぢや。』

斯う答へてしまふと三吉は急に悲しくなつた。彼は小桶を下においたまゝ、顏に兩手を當てゝ激しく泣き出した。

同じ狀態は八藏と五郎助の方へはずつと早く來てゐた。彼等は最も激しい飢えに苦しみ出した。今では胃の腑は單なる內臟の袋ではなしに、それ自身で貪婪な且つ怖るべき巨大な齒を持つた一つの怪物と一變したやうに見えた。彼は引つきりなしに食を求めた。一秒時もその强請を捨てなかつた。他の諸機關はおとなしく眠りに就かうとする場合でも、その生物のみは眠らないで何かしら食はうとあせつた。而して幾らあせつても、求めても、一と嚙みの食物すら運び込まれないことを見出す度に、彼は暗い胸腔の中で牙を鳴して怒り、自暴自棄になつて暴れ廻つた。この騷で他の者の眠りは皆妨げられた。――八藏でも五郎助でも、寢た間も飢えを忘れることは出來なかつた。とろ〳〵とすれば直ぐ食ふ物の夢を見て目が開いた。覺めてゐてさへ同じ眩覺に惱まされ續けた。彼等は彼等の三升炊の釜がぷう〳〵吹きこぼれてゐるところや、おいしい味噌汁の鍋がたぎり立つてゐる光景をよく夢見た。また眞つ赤な刺身や、旨さうな匂の立つてゐるねぎまや、ほんがりと狐色に焦げた燒肴や、うどんや、そばや、すしや、牡丹餅や、あらゆる食べ物を次々に目の前に思ひ浮べた。而してこれ等の玄覺の特長として、すべてが驚くべく大きく嵩ばつて、豐富であつた。刺身は小山ほど盛り上がつて見えた。ね

ぎまの鍋は洗濯盥より小さくはなかつた。また燒肴と云ふと、それが何尾となくあつて、いづれも目の下何尺と云ふ大物で揃つてゐた。彼等はがつ〳〵してその集團の中に突入した。而して片つ端からむさぼり食つた。――この眩覺の食事は彼等を一層空腹じがらせ、滿たされない飢に對する苦惱と焦燥をます〳〵深刻に味はせるに過ぎなかつた。

『空腹じいなあ。――何か食ひてえなあ。――はもんすき燒が食ひてえ。――ぼた餅が食ひてえ。――何んでんかんまん、あゝ食ひてえ。――』

五郎助は泣くやうな調子で斯んな叫び聲をあげながら、部屋中をのた打ち廻つた。

八藏にはこれ等の食物以外に今一つの別種な物が記憶の底から現はれて、不思議な魅力で彼を引きつけてゐた。それは大阪の築港のごた〳〵した裏通りの一軒の肉屋の店先で、通りすがりによく見かけた牛の太い股肉であつた。彼は漁村で育つただけに、牛肉を一斤食べるよりは雜魚でも魚を選ぶ方で、年寄たちが四つ足物を忌むとは違つた意味で、自分から肉を買はうなぞと考へたことなどはなかつた。然るに、奇妙なことには今になつてその馴れない肉の味覺が彼を誘惑しはじめた。八藏は血のしたゝる赤黑い肉の壁が削がれて、金串の上でじゆう〳〵燒けるところや、白い葱や豆腐やこんにやくなどゝ一緒に、旨さうに縮みかへつて煮えて行く光景が目の前にちら〳〵した。

『何んぼ旨えもんか分らん。肴よりも餘つ程旨かつたに相違ねえ。今まぢあれう食はさつたんが殘念ぢや。』

水だけしか口には入れなくなつてから、もう氣重くだるんで來た身體を、大の字にそつくり返らせたまゝ、彼は明けても暮れても同じ食ひ物の妄想に耽つてゐた。三吉が水汲の度に彼の怖ろしい目を見つけたのは丁度その時分であつた。而してその目が一日一日と物凄く輝き出したことを感じたのも、單に三吉の思ひなしのみではなかつた。實際八藏は一

つの畏怖すべき考へに捕はれ初めてゐたのであつた。

彼は一日に幾度か頭の上を通り過ぎる三吉を見てゐるうちに、自分の食物の妄想とその少年とを切り離して考へることが出來なかつた。殊にこの頃は暑いために短いあつしになつてゐるので、下からだと一と目に見通される三吉のすらりとした兩足や、青いさるまたを穿いたまだ娘のやうなむつちりした丸い股は、八藏の殘忍な興味をそゝつた。あの足の恰好から、股の附け根の工合から、人間も獸も變りはないのだ。――あの築港裏の肉屋の店先にぶら下つてゐた牛の股肉は、たゞあれよりかもつと大きいと云ふだけだ。――斯う思ひながら彼はちつと自分の頭の上を通り過ぎる今一つの股と足に目を据えた。――その瞬間、肉屋の肉にさつと夕日が照りつけた。肉はまつ赤な、絨氈のやうに燃えた。八藏は齒をむいて、行きなりその大きな肉片に飛びついて、むさぼり食つた。が、それが本統に牛肉であつたか、または三吉の引き裂かれた股であつたか、彼の意識には區別がつかなかつた。

我に返ると流石に彼は自分の怖ろしい慾望に對して身を震はせた。

『こげんこつう思ふち、おれや鬼いなるのか知らんぞ。』

彼はすべてを眠りに忘れようとして目をつぶつた。けれども飢は熟睡させなかつた。その內に甲板の上を船尾からこちらへ歩いて來る三吉の足音が聞こえ出す。素足の力のない、幾らか引きずるやうな足音が。――その音がうと〳〵してゐる耳に入ると共に八藏の眼はひとりでにぱちりと開く。彼は頭の上をねらひ詰めて待つ。そこへ彼の旨さうな肥つた股とすらりとした足が通り過ぎる。――彼は胴震ひをした。起き上るのが怖ろしかつた。それで飛び出して手當り次第に食ひつき度いほど空腹じかつた。彼は呻いた。獲物を見つけながら、見す〳〵取り逃した狼のやうに。

この怖ろしい發作は飢に比例して進んで行つた。彼は自分で自分を制しきれなくなると、

『五郎助。』
　と大きな聲で呼びかけた。
『何か話さうや。』
　彼は談話に依つて紛らさうとした。けれども何を話すことがあらう。食べ物より外のことは口には止らなかつた。二人は知つてゐる限りの食べ物の話をした。
『わりや猿う食うたこつがあるちうたのう、五郎助。』
『去年痢痢の流行つた時、お呪ひぢやちうち、婆やんが食はしたんぢや。』
『どげん味のするもんか。』
『どげん味ちうち、四つ足の味あ皆んな大抵似たもんぢや。』
『むじなは臭えちうぞ。』
『狸なら食へるがなあ。』
『蛇も旨えもんちうぢやねえか。』
『さうちうのう。日向ん山ん木挽や、眞蛇う取つちやかき燒しち食うが、鰻かつこうとてん及ばんさうな。』
『さうしち見りや、生き物なん此ん世界ぢ食はれん物は何んにもねえのぢやのう。』
『生き物に限りやせん、昔の大飢饉の時にや茅の根ぢやん、草の根ぢやん取つち食ふたちうぜ。おれたちでん、これぢ山の中でんうろついちよるなん、草の實う取つてん、木の根をほじつてん、何か食ひ物はあらうがなあ。──ああ、忍ふと空腹じうち堪らん。』

五郎助はおい〳〵泣いた。

『五郎助、まあそげん泣くな。おれが好いこつう考へちよるわい。』

何んなよいことを考へてゐるのか。――八藏は口に上せて見て怖ろしかつた。が、彼はその話を中止することは出來なかつた。

『五郎助、人間はどげん味のするもんぢやろか。』

『石榴ん實のやうん味がするちうぢやねえか。』

『おりやもつと旨えもんに相違ねえと思ふがのう。』

『さうぢやろか。』

『そりや左樣ぢやわい。魚でん四つ足でん、あげえ旨えに、人間だけ旨うねえちう筈あねえけんのう。おりや牛肉よりやもつと淡泊したもんぢ、肴え比べりや、もつと油があるちうところぢやねえかと思ふ。』

『そんなん一番旨えもんの筈ぢや。』

『さうぢや、一番旨えもんぢや。』

『あゝあゝもうそげん話あしち呉るんな。話が腹にたまりやせん。却つち空腹じうなるばつかりぢや。』

『話ばかりぢやねえ、われの量見次第ぢ、そん一番旨え物う二人ぢ腹食はるるのぞ。』

八藏は其處までの決心は自分ではまだしてゐない積りであつた。が、言葉が先にそれを極めてしまつた。すると不思議にも後は何等の氣咎めもなければ恐怖もない冷靜な態度で話し續けられた。五郎助がその怖ろしい企てに仰天して

『何んぼ何んでん、おりやそげんこたあしきらん。』

と云つて怯えた時には、彼は相手の意久地なさを嘲笑ひさへした。

『ふん、弱蟲が。何にもわれに殺せちうのぢやねえ。彼奴が上を通る時に、ただ呼び下ろせちうだけんこつが、何が怖いのか。』

『そげえ云ふてん三吉もむげえねえ（可哀想）ぢやねえか。』

『何がむげねえもんか。船長と二人ぢ今日まぢ狡猾いことばかりしちよる奴が、味噌でん芋でん、彼奴らおれたちん何倍も取つちよるんぞ。それだけでん殺しちいいのぢや。——何んでんいい。われが怖ぢいんならわれにや頼まん。そん代り後ぢ何んにもやりやせんけん覺えちよれ。』

五郎助は今彼に突つ放されて生きられようとは思はなかつた。彼は終に哀願した。

『まあそげえ云ふな、何んでんわれん云ふこつう聞くわい。』

『そん言葉う忘るんな』

『忘れん。』

八藏は、自分に對しては三吉が何んとなしに本能的に警戒を怠らなくなつたのを見拔いてゐた。それ故五郎助を利用することが必要なのであつた。その夕方、彼はそつと甲板へ出て行つて、彼等が薪割に使つてゐる大きな斧を持つて來た。斧は小さくはなかつたが、銹びてをり、その上、この頃は切り倒した帆柱を薪代りにぶつかいでゐるので刄も缺げてゐた。彼は砥石を探すために血眼になつて船ぢうをうろついた。船尾の船底に、もう使はなくなつたがらくた類と一緒にころがつてゐた。この二つが揃ふと、彼は今度は部屋の隅に趺座をかいて、念入りに研ぎ出した。而して時々立つて舷側の高窓の下に持つて行つては、明るい星の光で刄を透かして見た。最後にそれは、部屋の片隅に突つ込んであつ

たぼろの帆ぎれの下に寢された。

夜が明けた。八藏は今朝はいつまでも寢くたれてはゐなかつた。小早に身を起して、三尺をしつかり締め直すと、

『おい、五郎助、起けんか。』

と呼びながら、仲間の寢ころがつた大きな身體を亂暴にゆすぶつた。同時にきつい壓しつけた聲で囁いた。

『しつかりせんか。もうぢき來る時分ぞ。』

彼等は長くは待たなかつた。船尾の方には頓て三吉の聞き馴れた足音が起こつて、それがだん／＼近づいて來た。八藏の目は燃えた。が、彼は成るたけ平氣な態度を裝ふために、わざと舷側の方へ向いて趺座をかいて、朝の湯を沸かすやうな風で瀬戸の小火鉢に火を燃しつけてゐた。部屋ぢう煙がもう／＼としてゐた。

終に足音は艙口（ハッチ）の上に來た

『三吉。』

八藏は素早く聲をかけた。

『何んぢやい。』

三吉は立ち留まつた。起きたばかりで彼はまだ素つ裸體でゐた。八藏は、そのふつくらした身體の肉置を煙の中から食ひつくやうに見上げながら、調子だけは快活に續けた。

『われに里芋やらうと思ふち待つちよつたんぞ、取りに來いよ。』

『今時どげん里芋があらるるもんか。いらぶかす（欺す）な。』

『馬鹿たんが。われういらぶかしち何になるか。昨日（きのふ）ん夕方おれが砥石う探し歩いちよつたら、がらくた場ん叺ん中か

る出ち來たんぞ。三つあつたけん、われにも一つやつちやらうと思ふち取つちよいたんぢやねえか。有り難う思へ。のう、五郎助。』

八藏がすぐ側にゐるらしい五郎助に保證を求めると、今度は五郎助の聲で叫んだ。

『三吉、嘘ぢやねえぞ。本物の里芋があるんぞ。――久しぶりに食ひたからうが。』

この最後の言葉が三吉からすべての推理力を奪つた。殊に、昨日の夕方八藏が何かを探し廻つてうろついてゐたことは、彼もうすうす知らないではなかつた。――彼は終に釜の小桶を甲板に置き放しにしたまま、艙口から彼等の部屋に飛び下りて行くと、

『さあ吳りい。そん里芋うおれい吳りい。』

と泣くやうな聲でせがんだ。

『其處あるぢやねえか。』

『何處や。』

『そら、五郎助の向側のざるを見い。』

『暗うち分らんのぢや。』

三吉は目をしばしばさせてまごついた。その間に八藏の手にはもう斧が握られてゐた。而して三吉が彼の方に裸體身の背中を向けて、膝をついて、うす暗い艙側の隅に里芋を探し初めた瞬間、斧は振り上げられ、而して打ち落された。

怖ろしい叫び聲があがつた。三吉は腦天を叩き破られて、頭から眞つ赤に血をかぶつて倒れた。

斧が三吉の頭の後でぎらつとしたと共に、我を忘れてうつ伏した五郎助は、死骸の倒れた音で何んとなしにほつとし

て、おづ／＼頭をあげた。が、血と無惨なその場の光景は彼の恐怖を十倍にした。彼はがた／＼震え出した。而して震えながら、ヂフテリア患者の咽喉から出るやうな聲で夢中に繰り返した。

『大丈夫か――死んだか――生き返りやせんろうのう。』

彼は鮭の腸のやうな肉の彈け出した、眞つ赤な血だらけな頭が、今にもむく／＼と動き出して、自分を目がけて、飛びかかつて來さうな氣がしてならなかつた。

『大丈夫ぢや。もう死んだんぢや。』

八藏は平氣な積りでゐた。けれども五郎助に劣らず震えてゐた。實際、生きてゐた間は、鰯一尾以上の生き物とも思つてゐなかつた、ちつぽけな三吉が、死骸となると共に急に不思議な威力を持つて彼に迫まつて來たのであつた。手向ひならば、どんな手向ひでも怖れはしなかつた。進んで、鬪つて、打ちひしぐまでであつた。けれども血だらけの、無言な、冷たい威壓のみは鬪ひようがなかつた。それだけ怖ろしかつた。彼は一刻も早く後始末をしなければならないとあせりながら手も足も動かなかつた。どうしてよいか分らなかつた。まして、何處の肉を削がうの、どちらの股を裂かうのと云ふ慾望などは、全然消滅して、たゞ我ともなく戰慄と恐怖の中に、數分間すべてを忘れて突つ立つてゐた――彼は斧をさへまだ持つたままでゐた。

丁度その時、船尾の方で船長が釼を呼ぶ聲が聞こえ出した。

『三吉、三吉。』

叔父は頻りに呼んだ。死骸の側の二人はその聲に顏を見合はせた。五郎助は一層震え上つた。けれども八藏は却つてその新たな刺戟で平常の意識を取り戻した。何をすべきかを直ぐ知つた。

『五郎助、立たんか。』

彼はうろ〳〵してゐる仲間をもどかしさうに叱咤しながら、それに手傳はせて、前に斧を隱しておいたぼろつ切れの中に三吉の死骸を卷き込んだ。あたりに迸つた血や、また自分の手や顏に飛んだ血は二人の古手拭でなすり廻はして、それも一緒に死骸の下に押し込んだ。けれども斧は隱さうとはしなかつた。八藏は血だけを手拭で拭き取つて、いざと云へばまた直ぐにも掴めるやうに火鉢の側に置いた。――艙口(ハッチ)からは、其處は見えなかつた。

船長は、三吉が水汲に出かけた時には、毎朝の例で金比羅樣の前に熱心に坐つてゐたので、船首に起つた出來事は何んにも知らなかつた。けれども彼の可なり長い拜みがすんだ後までも、三吉がまだ歸つて來ないのを見た時、彼は何んとなく氣がかりになつて來た。それで彼は部屋の外に出て呼んで見た。返事がなかつた。帆を失ひ、その他重な船具は皆流してしまひ、一本の帆柱は根元から切り去られ、僅かに殘つた一本が、村端れの電信柱のやうにぽつんと突つ立つてゐるだけの空つぽな甲板は、一と目で船首まで見通されたに拘はらず、三吉の姿は何處にもなかつた。が、ただ一つの物が、遠くから船長の注意を引きつけた。それは船首の艙口(ハッチ)の入口に置き放しになつてゐる三吉の小桶であつた。

『あの小桶がどうして彼處にあるか。』

この不審は激しく船長の胸を騷かした。三吉が水汲の序でに下の部屋に遊びにでも行つたか――今の事情ではそれは有り得べからざることであつた。若しまた小桶が舷側に近くでもあるならば、飢えに衰へた身體がどうかしたはづみで海に辷り落ちたと考へられなくもないであらう。けれどもその場所では決してさうは考へられなかつた。それならば何が三吉を隱してただ小桶のみを殘したか。――分けてもあの場所に。――一人の向ふ見ずな無賴漢と、今一人の獸のやうな馬鹿が、飢えに狂うて、怒つたり、騷いだり、吠えたりし續けてゐる危險な穴の入口に。――一つの閃めきは船長

の全身を震え上らした。その瞬間、彼は人類がなし得る限りの最も怖ろしい想像を――同時にそれは事實に近い洞察であつたが――容易に描き出すことが出來た。彼は三吉の血みどろになつた死骸を見た。ばら〱になつた手と足を見た。それから引き裂かれた肉を。その肉にしやぶりついてゐる二つの、眞つ赤に染まつた人間の齒を。――彼は罪人が罪人を見拔くやうにすべてを見拔いた。――彼も同じく、激しく飢えてゐる一人であつたから。

彼は一刻も猶豫出來ないことを感じた。それで部屋に歸つて、荷役用の短い劍鳶を摑むより早く彼等の艙口へ突き進んだ。怒りの聲で斯う叫びながら。

『おい、八、五郎助。三吉を出せ。――三吉を出せ。』

其時は下の船具部屋の二人が、死骸の後仕末をし終つてから、まだ五分とはたつてゐなかつた。彼等は勿論返事をしなかつた。その沈默が船長にます〱怒りと恐怖を與へた。

『何故默つちよるのか。――三吉はどげえしたんか。――われたち二人が知らん筈あねえ。――こら、おい、八藏、出て來い。五郎助、われまち何んちうこつちや。何故返事うせんのか。われたちや、おれに返事の出來んような事うしちよんのか。こら、白狀しよ。』

船長は地團駄を踏みながら劍鳶で艙口の緣を打つ叩いた。すると終に八藏の聲で怒鳴つた。

『八釜しい。――三吉がどげえしたかおれたちの知つたこつか。見えんなん自分ち探せ。おれたちや三吉の番をしちよりやせん。』

『なにや、八、われがそげん大けん口が利かれたわけか。――おれにや何もかも分つちよるのぞ。われたちや三吉う殺したんちやろうが。さあ、どげえか。』

船長は憎みと復讎の念に燃えながらも、その儘飛び込んで行つて打ちかかるほどの勇氣はなかつた。それは求めて猛獣の穴に飛び込むに等しかつた。彼等は待ち構へてゐて、足がまだ船底に達せぬ前に、彼をも三吉と同じ運命に陷れたであらう。船長はどうにかして彼等を甲板に引き出さなければならないと考へた。三吉の死骸にその上のむごたらしい汚辱を加へさせないためにも、それが一番必要なことであつた。而してそれにはただ一つの方法きりなかつた。船長は酷烈な調子で續けた。

『ほら見よ。返答が出來んぢやねえか。何んぼわれでん、した事うせんたあ云ひきらん筈ぢや。まあ善う考へち見よ。船乘となつち一つ船に乘つちよりや、他人でん親兄弟ぢや、よかれ惡かれ助け合うち行かにやならんに、われたち二人や、この間ぢうかん散々極道口う叩いち、最後にやとうとうこげんこつまで仕出かした。おれも今日と云ふ今日は覺悟をした。われたちでん人まち殺しちおいち、その儘にしうたあ思ふちやをるめえ。さあ、尋常に出ち來い。甲板に上ち來い。今度はおれが相手ぢや。三吉ん仇打をしちやる。——何故默ちよるのか。何故上つちこんのか。——怖いのか。』

船長は今度は冷罵と嘲弄を浴びせ出した。

『ふん。何んちう兵子きれか。われたちや二人ぢや。おりや一人ぢや。そりい何が怖ぢいのか。そげん弱蟲ぢ良う人殺が出來たのう。よし、そんなん斯うしちやる。』

船長は摑んでゐた劍鳶をがちやんと向へ放り投げた。

『さあ、もう素手ぢや、何んにも持つちやをらんぞ。また、われたちが甲板に上つち、尋常に立合ふまぢや、おれの方から決して手出しやせんけん、安心しち上つち來い。八、五郎助。——何んちや、それでんわれたちやまだ上つち來きらんのか。——ふん、よくよく臆病者が揃ふたもんぢやのう。口ばかりはふだん偉さうなこつ云ふち、恥かしうはねえ

か。卑怯者！骨無し！海月野郎！』

この時下では一つの爭闘が起つた。それは八藏が怒つて駆け出さうとする、それを五郎助が行かせまいとする、取つ組合ひであつた。これ等の船長の烈しい侮辱は、野獣の穴の入口で立てられる苦しい煙であつた。分けても平常から仲間の强者を以て誇つてゐる八藏の自尊心には到底我慢されない煙であつた。彼は終にからみつく五郎助を突き飛ばして、片手に斧を攫んだまま、想像されない素早さで甲板に躍り上つた。

『さあ、もう包みも隠しもせん。三吉やおれたちが殺したんぢや。殺ろしち食うちやろと思ふたんぢや。それがどげえしたか。』

彼は却つて高びしやに食つてかかつた。而して斧を振りかぶつて、寄らば一と打と云ふ身構で、船長を睨みつけて突つ立つた形相は、もう人間ではなかつた。彼は人の心を失ふと共に人の姿をも失ひかけてゐるやうに見えた。殊に人一倍毛深い、伸び放題に伸びた髪毛や鬚は、肉を失なつて平常より一層大きく尖げ〱しくなつた眼と共に、彼の上半身を飢えたライオンの頭部に變へてゐた。而して咆哮に近い叫び聲で、尚ほ怖ろしい言葉を續けた。

『それが悪りいなん、何んでんいいけん食ふ物う呉りい。さあ、呉りい。さあ出せ。さあ食はしい。——食はしきるめえが。——何んにも有りやしめえが。——どげえか。おれたちや空腹じうちたまらんのぢや。死ぬほづ空腹じいちや。——こげえなつち人間でん何んでん構ふこつがあるか。おれたちや食はにやをられんのぢや。』

『われたちや生きながら餓鬼道に落ちたんぢや。』

この一言が船長の云ひ得た僅かな一言であつた。劍幕は再び彼の手にあつた。

『そんなん、餓鬼道にや誰が落したんか。——皆んなお前のしたこつちやろうが。』

『おれのしたこつか誰のしたこつか見る人が見りや分る話ぢや。』

『ふん、狸奴。』

八藏は終に斧を打下ろした。

『畜生。』

船長は身を交はしながら叫んで、自分から劍鳶を振りかざして打ちかかつた。

二人とも普通の歩行では飢えてよろめく樣になつてゐながら、敵對では不思議な力が現はれた。

が、彼等は長くは戰はなかつた。丁度その時五郎助は甲板に轉がり上つて二人の間に飛び込んだ。彼は八藏の足にしがみついて叫んだ。

『八、止みい。そん手を下ろせ。――おれたちが惡るかつたわい。三吉ら殺したなあどげえ考へてん惡かつた。――何んぼ空腹うでん人間が人間を食うちう法はねえ。おれたちや量見違ひをしたんぢや。彼處いひとりぢ居つたら、おりや怖うなつた。三吉が幽靈になつち出ち來るよん氣がしちこたえんのぢや。さあ船長に謝罪つちもう皆んなぢ仲ゆうしうぢやねえか。――船長、どうず堪えち下だんし、わしたちが重々惡かつたんぢや。こん通り手をついち謝罪るけん、お前が堪えちやるちうち下んし。さうぢなけりやわしや怖うちたまらん。』

五郎助は實際船長の前に身を投げ出して、額を甲板の板にすりつけながら、咽き込んで怖ろしく泣いた。而してこの涙に反抗し得る人間は決してなかつた。船長は武器を下すといつとなしに目を潤ませて一緒にすゝり泣いた。八藏も謝罪の言葉は出さなかつたが、それでも默つて突つ立つて、頭をうな垂れてゐた。

その夕方、三吉の死骸は殺された場所から殺された者の手に依つて甲板に運び上げられた。叔父は一遍の讀經もなし

に葬られる男のために、金比羅樣の御札を一枚死骸の胸に置いた。而して血に染みた帆ぎれをその儘の經帷子として、その上を綱で堅く結ばれた上で、海の中に投げこまれた。

この出來事は大きな悲しみと共に強い恐怖を船長の胸に植ゑつけた。それは今度のやうな怖ろしい考が假にも八藏の心に根ざしたとすれば、この失敗でそれがその儘消滅する筈はない。――飢餓が消滅しない以上。――而して今一度同じことが企てられるとすると今度は自分の番だ。彼は斯う思つたのであつた。彼は臆病にはならなかつた。けれども平常の身體と違つて衰へてゐる上に、兎に角向ふは一人ではなかつた。五郎助の涙は長くは當にならない。彼は八藏の一言でまたいつでもその相棒をつとめるに極まつてゐた。若し不意に二人に打つてかかりでもすると打ち勝つ自信はないと思つたので、船長は極度の警戒をはじめた。彼は自分の部屋とその隣りの船員室のドアを内から全部釘づけにして、外部からは決して侵入されないやうにした。而して自分も滅多に部屋を出る必要のないやうに、殘つてゐた水を二分して、自分の分前をば部屋の板敷の上に持ち込ませた。それは荷ひ桶の方のと、醬油の空樽の方のと兩方殘つてゐた。而して空樽に詰めた方は醬油の鹽つ氣と匂ひが移つて味が惡かつたにも拘はらず、船長は自分にその方を取り、旨い方の水を八藏と五郎助に讓つた。斯して彼の籠城の支度は出來上つた。

その後は彼は殆んど部屋にのみ閉ぢ籠つてひたすら金比羅樣を念じてゐた。幾ら諦めようとしても、また諦めきつた積りでゐても、その下から尙ほ生きようとする力が押し上つて來た。どうにかしたらば助かりさうな氣がした。今にも突然何處かの島が見えるか、何かの船が現はれて來さうでならなかつた。彼が釘づけにしたドアの一つを内から開けて、よろ〳〵と甲板へ現はれるのは、斯う云ふ思ひに、居ても立つてもゐられなく感じ出す時であつた。それでも彼は油斷しないで、なるたけ八藏や、五郎助のゐる艙口（ハッチ）からは隔たつた舷側に近づいて、四方八方を熱心に探し求めた。

が、何んにもなかつた。相變らずの、見飽き果てた、空と海と太陽のみで、世界は空つぽであつた。彼はその度に絶望を新しくしては部屋に引き返した。而して寢臺に這ひ上つて寢た。時に依ると二日も部屋から出ないことがあつた。けれども暦を持つてゐて、一度潮に濡れたけれども、破れないで完全になつてゐたので、日だけはよく分つた。それに依ると彼等は故郷の海岸を離れてもう四十日以上になつてゐた。彼はまた時々兩親や若い妻の夢を見た。而して目が覺めると氣狂ひになりさうなほど懷しかつた。船長は枕に顏を押しつけてはよく男泣に泣いた。斯う云ふ夢の後では彼の氣持は平常とはまるで違つた程感傷的になつて、現在の孤獨の苦痛が一層強く胸を刺した。蟲とでも寄り合つて一緒に暮らし度い今の場合に、それも同じ運命を分け合つてゐる同じ難破船の上で、仲間同士が怖れ合ひ、怒り合つて別れ〴〵に住むと云ふは何んと云ふ因果だらうと、彼はつく〴〵さう思つた。

『八よい、五郎助よい。話に來んか。』

彼は斯う呼びかけ度い發作にしば〳〵襲はれた。が、その瞬間、三吉の血塗れの死骸が目先にちらついた。

漂流から丁度四十五日目の日であつた。二三日前から崩れかけてゐた天氣はこの日になると非常な強風になつて、雨は降らなかつたけれども、その代り海で育つた船長すら今まで知らないと思ふほどの大浪を伴つてゐた。その一つは、部屋の疊の上に横になつてゐた彼が、彈仕掛の機械からはじかれたやうにまつ直ぐに突つ立たされて、その餘力で向ふの寢臺に膝頭を打ちつけ、その膝頭の肉を骨に達するまで※ぐられた程の激浪であつた。水を貯めた醬油樽は狹い部屋をごろん〳〵轉け廻つた。船長は兵子帶を解いてそれで身體を寢臺に縛りつけて、もう二度と彈き上げられない工夫をした。

それから間もなくであつた。五郎助の聲で

『船長、船長。』

と叫び立てるのが、波の突喊の間々に聞こえた。而して終にその聲は釘附けになつた入口のドアをどん〱叩いた。

『船長、此處い入れち下んし、表ん方にや浪が打込んち居られんのぢや。どうずわしたち二人う助くると思ふち入れち下さんし。』

五郎助は叫び續けた。船長はすぐには返事をしないで、ぢつとその言葉を聞いてゐるうちに、最も冷靜な分別を廻らしてゐた。彼は五郎助の言葉を信じた。この浪で船具部屋にゐられる筈のないことも分つてゐた。が、何故八藏は默つてゐるのか――このことは彼の注意を集めさしたが、眞逆にこの騷動の中で、大つぴらに、五郎助に前觸れをさして打ち込んで來る氣遣ひはなかつた。とすれば、彼等は追はれて巣を求めに來た鳥であつた。見捨てる譯には行かなかつた。船長は終に決心して身體を寢臺から解いて戸を開けた。五郎助が先に立ち、その後に八藏が默つて立つてゐた。

が、船長は直ぐには入れなかつた。

『此處入りたけりや入れちやるけん、二人とも裸體えなつち見よ。』

彼は反抗を許さない嚴格な調子でこのことを命令した。五郎助は直ぐあつしを抜き、しやつとずぼん下を取つて猿股一つになつた。

『よし、入てんいい。』

五郎助は許された。けれども八藏の方はいつまでもぐづ〱して裸體にならなかつた。

『八あどげえしたんか。何故裸體えならんのか。』

船長は斯う促しながら、八藏のあつしの背中が何んとなしに不自然にだぶついてゐるのに目が留まつた。

『八、ちよつと見しい、われん背中う。』

彼は素早く手を伸ばして背中を摑んで見た。堅かつた。無理にあつしをめくると斧が現はれた。

『八、こりやどげえしたんか、わりや何んの用がありやおれん所い、斧う持ち來たんか。』

船長は怒と驚に顏色を變へて詰つた。が、八藏は却つて驚かないで平然と答へた。

『わしかんどげえもする氣はねえけんど、先日ん今日ちやけん、若しお前が劍嶌でん振り廻はしや、そん時にや何か無うちや困るけん持ち來たんちや。』

若しその言葉が嘘でなかつたら、それは誰でもしかねない手段であつた。自分でもしたかも知れない、と船長は考へた。それ故彼は今一度誓はせた。

『屹度そん通りちやのう。』

『屹度ぢや。』

八藏はきつぱり返事をした。

『よし、そんなんわれん前ぢ斯うすりやよかろう。』

彼はその斧と、寢臺の下から取り出した劍嶌とを手拭で縛つた上でそれを持つて部屋の外へ出て、八藏と五郎助が見守つてゐる目の前で、海の中へ放り込んだ。

『さあ入れ、その代りおかしなこつうすりや聞きやせんぞ。』

其晩から三人は船長室の狹い部屋へかたまつて寢た。この部屋だけは、寢臺の上の方の一つの高窓と、船員室に通ずる戸と、後甲板に出る今一つの戸と開くところは、三つきりしかなく、それもきつちり隙間なく出來てゐるために、幾ら波をかぶつても、内側まで濡らされる心配はなかつたのであつた。けれどもその一室の起臥しは、船長に取つては怖

ろしい生活であつた。彼は自分の甥の加害者であり、同時にまた、氣の變り方一つでは、いつ何時自分の身體にも手を下さないとも限らない人間と、身體をすり合せて眠るのであつた。彼は寢た間も氣を許さなかつた。また武器も斧と共に海に投げ込んだ劍鳶のみではなかつた。彼はもと炊ぎ場にあつた出刀庖丁を別に秘密に持つてゐて、寢る時には寢臺の布團の上に今一枚布團を敷いて、間にその庖丁を隱して寢た。

『來ち見よ、突いちやる。』

　彼は絕えずこの決心をしてゐた。

　その內にまた水が乏しくなつて來た。この間の大浪の時に、船首にあつた八藏と五郎助の水は桶と共に浚はれた上に長く雨が降らなくて、移轉以後は船長の殘してゐた醬油の空樽の水を、三人して飲んでゐたからであつた。その樽は、三人が移つて來てからは部屋が狹くなつたので、隣りの船員室に移してゐた。而して起きてゐる力を段々に失つた三人は、一日ぢう寢床の上に橫になつてゐて、水を取りに行く時だけ這ひ出して行つては、茶飲茶碗に僅かに一二杯づつの水を大事に吸つた。

　その水も頓て盡きる日が來た。

『とう／＼こん儘え死んぢしまふのかのう。情けねえことぢやのう。』

もうしやがれて、大きく出なくなつた聲をあげておい／＼泣く五郎助を中央にして、船長は奥の寢臺に、八藏は入口の寢床に、同じ喝きと悶えに壓し潰されて橫たはつてゐた。

『けれど思ふち見りや、おれたちが救からんのも尤もかも知れん。のう八。三吉う二人ずあげん目に逢はしたんぢやけん、何んぼ金比羅様う念じてん、信心が利かんのぢやあわい。ああ、あげんこつうせにやよかつた。三吉ーー耐えち哭

りいや。どうず耐えち呉りい。おれたちが悪かつたんぢや。おれが八歳を留めきらざつたんが悪かつたんぢや。三吉、おれあ今謝るぞ。』

五郎助は後では斯う云つて頻りに三吉のことを口に上せ出した。而して三吉の幻影が見えでもするかのやうに、大きく見開いた目で丁度彼の頭上になつた神棚のあたりを見詰めては、泣きながら謝まつたり、訴へたりした。船長はそれを聞くと何んとなしに怖ろしくもあれば、不運な甥を痛む心持を新にされて悲しくもなるので止めた。

『五郎助、三吉のこたあもう云ふち呉るんな。われがそげえ謝る氣がありや、三吉でんもうどげえも思やせんわい。皆んな因緣事ぢやと思つち恨やせんけん、もう云ふな。』

『船長、わしや三吉う殺したばつかりに、死んでん地獄い落んのぢやと思ふと、死ぬるのが怖うちたまらんのぢや。』

彼の骸骨に近づいたやうな顏は、恐怖で震えてゐた。

『こげえ空腹じうち、幾日も水も飲まん位なん、いつそ海にでん飛び込んぢ一と思ひに死んだ方がましぢやと思ふけんど、そんこつう思ふと死にきらんのぢや。怖うぢ〱たまらんがなあ。』

『まあそげえ心配するな。誰も一つぢや。』

船長は優しく慰めてやつたが、五郎助の恐怖は決して人事ではなかつたのであつた。平生は船乘の單純さで、船が沈沒すれば死ぬまでのこと、また先の世は船底の下に何處にでも横はつてゐる位にしか考へてゐなかつた問題が、この長い死との睨めくらの間に、だん〱複雜な姿を取つて彼を脅かしてゐた。先の世は本統にあるのか、ないのか。而して地獄は、極樂は子供の時から運命とか、神樣とか、人力以上の特殊な偉大な力を信ずることに傳統的に結びつけられて育つた船乘の彼には、來世を受け入れることはむづかしくはなかつた。が、それがどんな形象を取つて存在してゐる

ものか、自分は極樂にやられるか、地獄に追ひ落されるか、すべて分らなつた。その分らないのが怖ろしかつた。彼は一生懸命金比羅樣にすがることに依つて、その恐怖から遁がれようとした。終日祈つてばかりゐた。するとその祈は先の世の怖ろしい地獄から自分を防いで下さるやうにと云ふ哀願のみではすまなかつた。彼は矢張り死なないで救はれてゐることを祈つてゐた。生き度い一念を捨てきれなかつた。

或る晩、彼はまた不思議な夢を見た。夢の中で金比羅樣が現はれて、サンフランシスコから石油を積んで歸る一ツの汽船が、航路を誤つて明日あたり海神丸の近所を通る。救はれるならその船だ。若しそれを取り遁がしたらもう二度とさう云ふ機會はないぞ、と云つて聞かされたやうな氣がしたのであつた。船長は前のあらたかな水のお告のことを思ひ合せて、勇氣が出た。

夜が明けると彼は夢の話を二人にして聞かして

『まあ、甲板に出ち見らうぢやねえか。あん金比羅樣ん仰しやつたこつが、おれにやどうしてん嘘とは思はれんのぢや。』

と云つて誘つた。それで三人は連れ立つて久しぶりに甲板に出た。近頃珍しい上天氣で、透明な大空から降り注ぐ眩ゆい日光は、飢えた彼等の目を暫くちか〳〵と射た。が、視力の調節が出來ると、彼等は全神經を悉くその機關に集めて、思ひ〳〵の方角を探つた。今三人に取つては自分達を取り卷いてゐる四方の海は、運命の圓盤であり、それを縁取る周圍の圓い一線は、生死を分つ目盛に等しかつた。若しその線のどの一點かに、一筋の煙が現はれさへしたら。——彼等は氣狂ひじみた願望に燃えながら、ふら〳〵する身體を動かしては、或場所から他の場所へとよろめいて歩いた。僅か二三尺の位置の變化が、目に入る物を變へでもするやうに。而して其處でちつと暫く立ち留まつて眺めて、矢張り空つ

ぽで何んにもないのに失望すると、呻いて、目を轉じて、また場所を移して行つた。一つしかない船長の双眼鏡は手から手へ奪ひ合はれた。

終に、太陽が船の眞上に來た時分まで待つても何んにも姿を見せなかつた時、彼等は待ちあぐんだ。

『何んにも見ゆりやせんにい、馬鹿々々しいこつうした。』

八藏はその不平と失望を一番に口に出して五郎助にもう船室に歸らうと云つた。

『さあ、もう去のうや、五郎助、いつまぢ待つたち一つぢや。』

『去のうかのう、――情けねえこつぢやのう。』

彼は甲板の上に突き坐つたまま嘆いた。

『斯うなりや、神樣も佛樣も當なつたもんぢやねえのぢやわい。そげん物う當する方が馬鹿ぢや。』

八藏は明かに船長に當てつけがましく云つて、詰らない空騒ぎで、弱つた身體に目暈ひがし出したと不平をこぼしながら、一人で後甲板の船室の方へ歩いて行つた。五郎助は暫く後に殘つてゐたが、それでも三十分もすると、

『船長、もうわしも去ぬるで。――お前も入らんし。』

と誘ひながら、よろ〳〵と八藏の後を追うた。船長は一人默つて殘つてゐた。彼は今一度はつきり確かめて見ようとするやうに、前甲板のたつた一本殘つた帆柱の下へ這つて行つて、その柱にすがりついたまま圓い水平線の東から北を、北から西を、西から南を、熱心に探し求めた。而して相變らず空つぽで、何んにもなくて、青く、遠く、無限に廣いばかりであるのを見た時、彼は帆柱の下に打ち倒れて聲をあげて泣いた。

『こげんい〻お天氣なん、助けてん助けられてん、何んぼ仕事がし好いか分らんと思ふたに、よく〳〵運がねえのぢ

や。』

彼は口に出してくどいて、いつまでも一人涙に暮れてゐた。

それから幾時間たつたか彼は知らなかつた。眠つたとは思はなかつたけれども、眠つたのであらう。彼は一つの汽笛の響で目を覺まされた。

彼はまた夢を見たのだと思つた。けれども身を起して東の方の海を眺めた瞬間、彼の全身の血は一時に躍つた。

『船ぞ。――船が來たぞ。――八い。――五郎助――出ち來んか――。』

船長は大聲をあげてわめき立てた。丁度彼と同じやうに疲れて船長室で眠つてゐた二人の若者は、この聲が耳に入ると跳ね起きて甲板に轉がり出た。船は――それも三本マストの黑い立派な貨物船らしい船は、もう一海里とはない彼方に現れて、且つ自分たちの方をさして近づいて來ることが分つた。

『好う見よ。此方い來よんのぞ。』

『本統ぢや、來よる――來よる――。』

『有り難えなあ、有難えなあ。』

彼等はその方に頸をさし伸ばして、口々に悦んで、躍つて、終には三人ともしがみ合つて泣き出した。――八藏さへも純粹な悦びと感謝に鬚面を輝やかして五郎助と共に船長に抱きついてゐた。船長とても、この大きな歡喜の前に何を思ひ、何にこだわる隙があらう。彼は二人に抱きつかれたまゝ、啜り泣きの間々に、

『嬉しからうが、八。どげえか、五郎助も嬉しいか。――誰でんこげん嬉しいこつがあるか。』

と叫んでゐた。が、彼等は幾ら夢中になつてゐても、この際一番に何をすべきか、と云ふことを忘れはしなかつた。

二人の若者は船長の命令で船室に引き返すと、二枚の信號旗を持つて來て、兼ねてそのため計りに殘してあつた帆柱の上に、それも大事に殘してあつた一本の綱で引きあげた。而して青と白とで元祿になつた旗と、白地に小さく赤い圓を染め出した三角の小旗が、檣頭に閃めくと同時に、汽船の方では今一度高く汽笛を鳴らした。

『合圖があつたぞ。助い來ち吳るんのぢや。』

『どん／＼來よらあ。ほら、ほら。』

『金比羅樣！金比羅樣！皆んな。あなた樣のお蔭でござります。お蔭でござります。』

船長は帆柱の下へ坐つて、船長室の方を向いて手を合せて拜んだ。彼は悅びで我儘になつた子供のやうに、神棚の下まで行く氣にならなかつたのであつた。——片時もその救け船から目を放す氣にならなかつたのであつた。

その內に汽船はだん／＼近づいて、半丁ばかりのところへ來ると靜かに停まつた。海神丸からはその船の甲板に大勢の船員たちの群が現はれてゐて、珍しさうにこちらの方を眺めてゐるのや、また自分たちに對してこれから爲されようとする作業の準備やらが手に取るやうに分つた。頓てボートが六挺のオールで漕いで來た。而して船まで來ると、彼等はボートを風上の方の舷側に寄せて、その舷側に一筋の綱を結びつけると、その綱を辿つて、一人の敏捷な顏つきをした三十恰好の船員が上つて來た。その徽章に依つて、それは一等運轉手だと彼等は知つた。が、その運轉手は、其處に三人の遭難者が口も利けなくなつて、かたまり合つたまゝ手を合せてお辭儀ばかりしてゐる姿を見出しても、たゞじろりと一瞥したゞけで、優しい言葉一つかけなかつた。而して下のボートの方へ向つて、

『氣をつけろ。』

『もつと離れた、離れた。波が高いぞ。卷き込まれるな。』

とか云ふ風な指圖を冷靜に下してゐた。最後に

『よし、大丈夫だ。オールを渡せ。』

と命令すると、下から二本のオールが差し出されて、海神丸の船側からボートへ向けて橋が出來た。

『さあ下りた。その橋へ乘るんだ。』

船員はその時初めて彼等に言葉をかけて、嚴格な調子で促がした。八藏はその言葉を聞くと待ち構へてゐたやうに、身を起して、左右のオールを兩手で摑んで、躄者が這ふやうにして下のボートに辷り込んだ。けれども船長と五郎助はすぐ彼の後に續くことが出來なかつた。二人は腰が立たなかつた。幾らオールの方へ這つて行かうとしても、行けなかつた。五郎助は終に泣き聲を出して哀願した。

『運轉手さん。濟まんけんど負んぢ下りち呉れんな。腰が拔けたんぢや。』

すると運轉手は怖ろしい聲を張りあげて怒鳴りつけた。

『何んだ。一人で下りられなけりや下りなくもよろしい。そんな奴あ殘して置く。』

二人はその威嚇にはつとした。途端に腰はひとりでに立つた。彼等は取り殘されてはならないと云ふ一心で、オールにかじりついてボートに轉がり込んだ。

本船の下まで辿り着くと、彼等は甲板の群集の顏が悉く驚と好奇心と、而して幾分の憐れみを以つて自分たちを見守つてゐるのに氣がついた。どの人間の顏も皆畫に描いたやうに美しく見えた。懷しさはまたそれに劣らなかつた。彼等は相手構はず抱き着き度いほどの氣がした。けれども彼等は其處でも決して優しい聲では迎へられなかつた。

『おい、確かりしろ。めそついてる奴あ構はず海の中へ放り込むぞ。』

一人の男が甲板の上から斯う叫ぶと共に上から一筋の綱が下された。而してその綱を船長の胸に卷きつけて、一番に彼が引き上げられた。それから八藏と五郎助とが同じ方法で順々に引き上げられた。その間ぢう彼等は怒鳴り續けられた。

『目を潰つてゐろ。開けるときかないぞ。確かりしろ。』

三十分の後には彼等は三人とも甲板の上にあつた。――空と海と太陽ばかりのうつろな空間から、右を向いても左を向いても人間のゐる、而して話聲のする世界へ歸つて來た。彼等が九州の海岸から出發した日から數へると、丁度五十九日目であつた。

汽船に乘せられてしまふと彼等は今までとは打つて變つた船員達の親切な聲と手とに取り卷かれた。船醫もゐた。而してその時その醫者から飮まされた、長い脚のついたコツプに八分目ほど湛えてゐたうす赤い液體は、海神丸の船長に、世の中に斯んな旨いものがあるのかと驚いた程のものであつた。彼は生涯その一杯の赤い水の味を忘れなかつた。

船は彼等の想像通り貨物船で、船員の寢台より外に餘分の寢台はなかつたので、後甲板の野菜畑になつたところに幕を張つて彼等は其處に假の寢台を作つて寢かされた。船員は一人づつ交代で側に附き添つて看護をした。他の船員たちもよく覗きに來て細かい世話をした。二三日して粥が食べられるやうになつた頃には、一人の船員が彼等の海松のやうに伸びた頭髮を刈つてやつた。それから、顏も手足もアルコールで拭き廻して、三人にどうにか元の人間らしい形を取り戻さした。たゞ着物だけはまだ變へさせることが出來なかつた。彼等の極度に瘠せ衰へた身體は、打ち身の後のやうな紫色に變色して、皮膚のない骨格ばかりになつて、露出した神經はちよつと觸つても彼等を赤ん坊のやうに泣き叫ばせた。助けられたのに氣がゆるんだせゐもあつた。而して三人とも今は本統の病人で、聲も囁くほどにきり出なかつた。

斯んな狀態であつたから、船員たちは勿論その三人の船乘りから彼等の遭難の委しい話を聞くことは出來なかつた。が、彼等の方は聽覺は別に衰へてゐなかつたので、その貨物船がどうして自分たちを見出したかを聞くことだけは出來た。それは靜丸と云つて神戶の或る汽船會社の船で、サンフランシスコからの歸途暴風雨に逢つて、十日以上も航海日數を超過させて、航路の外に出てゐたのだと云ふことであつた。これはその儘海神丸の船長の夢に符合することであつた。彼は今更のやうに金比羅樣の威德に打ちおのゝくと共に、仲間の二人に囁いた。

『八、五郎助、この御恩を仇おろそかに思うちやならんぞ。皆んなあなた樣のお蔭ぢや、無事に歸りついたなん、三人ぢお禮詣りいお四國をしうのう。』

三人はそれを誓つた。

斯うして彼等はこの船の野菜畑の側の寢台の上で十三晝夜を送つた後で、明日はいよ〳〵横濱へ着くと云ふ知らせを得た時には、今更夢のやうな氣がした。午後二時過には大島沖を通る筈であつた。而して三原山の噴煙はかすかな黑い島影と共に、大廣間の遠くに置いた煙草盆の煙のやうに左手の空に眺められるのが極まりであつた。彼等の側によく附いてゐる一人の若い船員は、彼等にその事を知らせて悅ばせた。同時に彼は、若しその二つが彼等の目に入つたとしても決して悅び過ぎてはならないと云ふことを、堅く念を押した。

が、その命令は最も守り惡い命令であつた。頓てその時刻が迫まつて、何んでもない船員たちまで、旅から歸つた人が遠く自分の家の門を望んだと同じ氣持で、その方へ顏をさし向け、忙しい用事の者も手を留めて挨拶しようとするやうな氣持に誘ひ込まれる時、その三人が冷靜に知らぬ顏をしてゐられる筈はなかつた。彼等は船の人々が

『島だ、島だ。』

とか、」

『今日は馬鹿に煙が濃いね。』

とか口々にさゞめき立つてゐる、一つの賑やかなどよめきを耳にすると共に、どうにかして自分たちも見ようと氣をあせつた。けれども彼等は身を起こすことは出來なかつた。勿論まだ舷側まで歩いて行く力はなかつた。彼等は非常な努力で、痛い身體をせめて左の方へ向け變へた。けれども島の影も、煙の末も、視野の中には入つて來なかつた。

『見てえなあ、――ちよいと向ふまぢ行きや見らるゝにい。』

五郎助は最初斯う云つてくどいてゐたが、どうして起きたか彼は終に一人で寢床の上に上半身を起こすと、今度はさも嬉しさに堪へない樣子で、しやがれた聲でうたふやうに叫び出した。

『構まん、構まん、島ぢやん見る沙汰入らん。明日になりや横濱ぢや。何んでんかんでん横濱ぢや。さうなりや家い戻つたんも一つぢや。船長、嬉しいぢやねえな。――八、わりやそげん顏うじち默つち寢ちよつち、嬉しうはねえのか。おりや思ふと嬉しうぢたまらん。寢ちよられん程嬉しい。踊りてえ程嬉しい。踊るぞ――踊るぞ――』

彼は實際、寢床の中で左右の手を魚の鰭のやうに振りながら、上半身をゆすつて、氣狂ひじみた目を見据えて踊り出した。船長が驚いて、

『五郎助、わりや氣でん狂うたんか。先刻船ん人も云ふたろが。今ん身體ぢそげん騷ぎうしち、死んぢ仕舞うぞ。』

と制しても、彼は耳にもかけなかつた。

『死んでんいゝ。何んでんいゝ。戻つたんぢや。明日あ横濱ぢや。踊らぢをらるゝか。』

彼は尙踊り續けた。その內にどうしたはづみかよろ〳〵となつたかと思ふと、五郎助の彈んだ上半身は寢床から辷り

出て、下の甲板の、冷たい鐵板の上に轉がり落ちた。船長と八藏は吃驚して、

『五郎助、どげえしたんか。早い起けんか。』

『どつか打つたんぢやねえか。おい、五郎助。』

と幾ら呼んでも、五郎助は返事をしないで、苦しさうに呻いてゐた。寢台の上の二人ははら〳〵して氣を揉んだけれども、寢台は高いし、且つまだ身體の自由が利かないので、下りて行つて彼を救ひ上げる譯に行かなかつた。不意な驚きはその氣力をさへ奪つてゐた。せめて誰かに來て貰つてとあせつても、遠くの人を呼び立てるほどの高い聲は出なかつた。その上、常は側を離れても二三十分置には屹度誰か見廻つて來る船員たちも、明日の入港の準備に取り紛れて、姿を見せなかつた。而して二時間ばかり經つた後、やつと廻つて來た船員が、寢台から轉げ落ちた五郎助を認めて、驚いて駈け寄つて見た時には、彼はもう冷たくなつて息をしなかつた。

明けの日の午前十時、海神丸が横濱港に着いて、臨檢した檢疫官から取調べを受けた時には、五郎助の寢台はもう空つぽであつた。役人たちは後甲板の野菜畑に來て調べた。彼等は海神丸の長い漂流に對して強い好奇心と興味を以つて、出來るだけ委しくその話を聞かうとした。が、その間にも彼等は自分たちの役目を忘れはしなかつた。而して大事な條々に就いては鋭い質問が發せられた。中でも最も嚴しい訊問の的となつたのは三吉の死のことであつた。

『病氣で死んだのだね。』

『左樣でござります。』

海神丸の船長は何處までも病死を主張した。

『どんな病氣だ。』

『食べる物がなうなつたとこりい持つち來ち、熱病を煩うたんぢござります。』

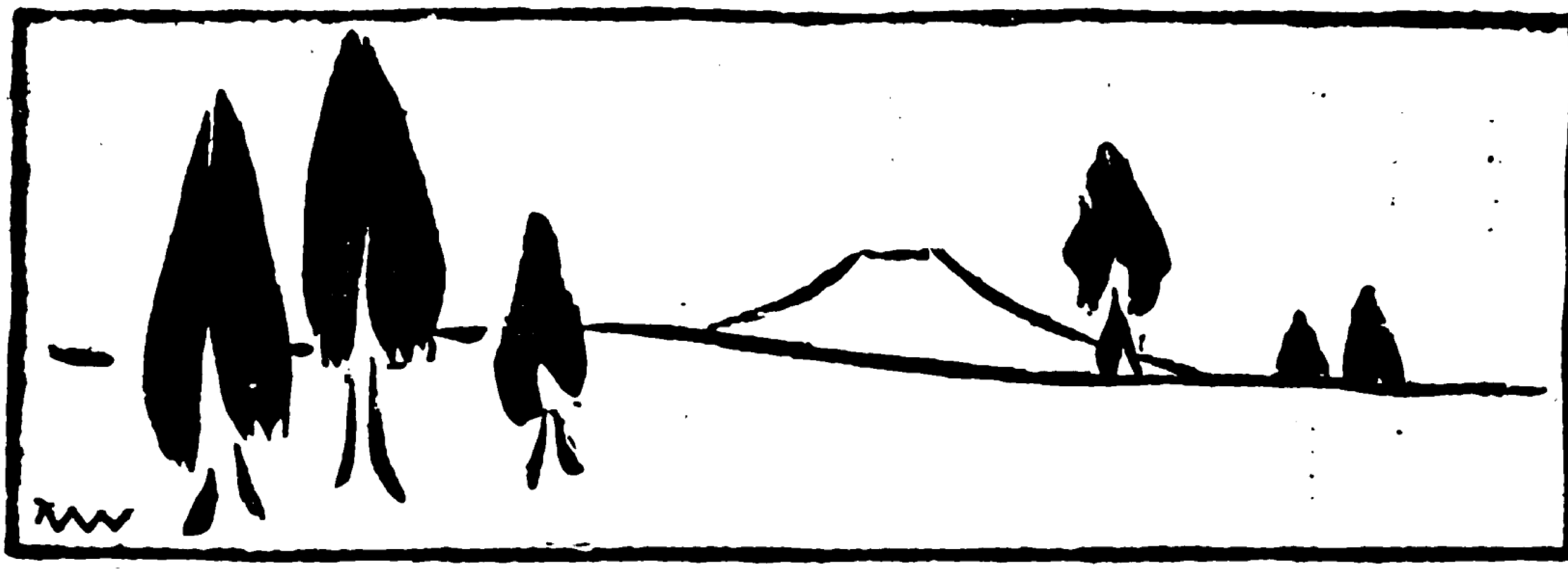
『幾日位惡かつた。』

『さあ、四五日も惡うござりましたろうか。――よう覺えませんが。』

『五日目に死んだとして置かう。それで水葬にしたんだね。』

『左様でござります。帆木綿に包んぢ海い投げ込みました。』

その時突然一つの激しい泣聲が八藏の寢台から起つた。彼は仰向けに寢たまゝ、骨ばかりの兩手で顔を蔽うて、癲癇の發作のやうに全身を痙攣さして泣き入つた。船員たちが近づいて、餘り興奮しないやうにと優しく慰めても、彼は耳にもかけないやうに、尙ほます／＼咽き込んで泣き續けた。役人たちは彼は不運な仲間の死を新たに思ひ出して泣くのだと思つて、その儘にして無遠慮に訊問を進めて行つた。たゞ船長だけには、八藏が急に何故泣き出したかゞよく分つてゐた。船長は寧ろ彼の現在の心持を憐んだ。何んにも心配することはない、と云つてやり度い氣さへした。けれども今それを口に出すことは出來なかつた。彼は冷靜な態度で、知らぬ顔をして役人の訊問に答へてゐた。(終)



續山戀ひ

宇野浩二

しかしながら、私は自分の情熱に驅られて山と彼女との國に出かけようとして、例へば旅の仕度を始めるとか、鞄に品々を詰め込むとか、さては帽子を被つて、一足門を外に跨ぐとか、――そこまで足を踏み出しながら、忽ち目の前に、雨の大井川にでも出會したやうに、棒立ちになつて、危く前にのめりさうな體を後へ引かねばならない氣持を味はねばならなかつた。彼女から貰つた絶交狀の思出がホムプでのやうに私の燃える情熱に水をそゝぐのである。私は犬のやうに尾を卷いて、私の部屋の中に引返すのである。

小說家である私は、この時までに既に二三編の、彼女とのいきさつを骨子とした小說を書いてゐた。私が旅を思立つて、忽ちそれを思止まつて、落膽して私の部屋の中に坐つたところが、私はそれを誰に嘆きも訴へもする者がないのであるから、私は私の爲に子守唄でもうたうやうなつもりで、何と恥づべき話ではあるが、それ等の自分の昔の小說をそこはかとなく取出して讀むのである。

私の友達の西向觀山が、彼の郷里の甲斐の國から、私の心に愛する彼女が、二度目の子供を腹に持つて、近いうちに藝者を引くと知らして來てから、私はその時彼の手紙を手に摑んだまゝで、これは是非とも彼女が藝者を引く迄に、たとへ私が遙々と彼女の國まで出かけて行つて、客として彼女を招いても、すると彼女が私と知つて、招かれて來ることを拒むやうな目に遭ふとしても、その結果はどうならうともそれは神任せにして、私は行かうと決心したのであるが、一日經ち又一日經ちするうちに、忘れる譯ではないが、それからそれと引續いて起る色々な俗用やら、そんな俗用は何としても切拔けるとしても、と、又例の彼女から貰つてゐた筈の絶交狀が、蓋をするやうに私の情熱を抑えるやら、そして一日と過ぎ又一日と過ぎて、一箇月も二箇月も過ぎてしまつたのである。

私の斯ういふ戀の心持は、病氣の言葉で譬へて言ふと、それは慢性の狀態に這入つてゐたに違ひなかつた。それは目に見え、心に思ひ當る刺擊に依つては言ふ迄もなく、殆どその理由の分らない、氣の附かない刺擊に依つてゞも、例へば或晩眠られなくて、何度も寢床の上で寢返りをしてゐた時とか、或ひは又突然人込の電車の中で吊革にぶら下つてゐる時とか、かと思ふと夜遲く自分の家に歸つて來る途で、ふと空を見上げてきら〳〵と輝いてゐる星を眺めた時とか、ありとあらゆる場合に、私は思ひがけなく私の病氣がちく〳〵と痛み出すのを覺えるのである。まして、町の屋並の間の地平の上に、遠くの山の姿を見出した時とか、或ひは西向から手紙を受取つた時とか、町でたま〳〵彼女に似た女を見かけた時とかには、病氣は忽ち急性の徴候に變つて、私は二十歲の靑年のやうな惱みを感じねばならなかつた。

けれども、どういふ譯か、その後西向から寄遣す手紙の中には、幾ら期待しても、幾ら期待しても、彼女に就いての消息が少しも齎されなかつた。到頭、又信州に舞ひ戾りました。しかし今度は諏訪ではなく、岡谷の町に參りました。それは諏訪には適當な家がなかつたのと、何か大望を抱いての如くに、はる〳〵東京に出て行きながら、又こそ〳〵と

泥坊のやうに元の町に歸つて來た後目たさと、何や彼やで、諏訪は私に今は古里よりも懐しい町ではありながら、最早や夜でなければ歩けない所でもあるやうに思ひますので、堀戸君とも相談して此方に定めたのです。岡谷といふのは、先生の諏訪の宿屋の、先生のお好きな三階の西の窓から、夜になると影畫の町のやうにちら〳〵と火の光つて見える町です。さういふと大變いゝ町のやうですが、町中が製糸工場で、實は未だ戸籍の上では岡谷村と言つて、町にもなつて居ないのに、工場の男工と女工とで五萬も人間がゐるといふ變なところです。そこで私と堀戸と二人で暮すことになりました、二人とも未だ何をして食つて行かうかといふ見當が附かずにゐます。云々といふのが、彼が古里の甲府から二度目に信州に歸つた時の第一信であつた。

諏訪の町に時々出かける事がありますか、ゆめ子の消息をお聞きになりませんか、彼女はもう藝者を引きましたか、おついでの折お聞き込みになつたこと、或ひは心安い人で適當な人がありましたら調べて貰つて、次のお手紙の時にでもお知らせ下さいませんか、と私は彼に書いた。

次に西向から來た手紙には、封筒の裏に「鶴湖樂舍」といふ、長方形の立派な判が捺してあつて、その判の横手に小さなペンの字で西向觀山と認めてあつた。彼の筆蹟は拙くて、そして絹糸のやうな細い書體であるのが特徴だつた。中には、今度數人の應援者を得て、表記のやうな音樂會をこしらへました、鶴湖といふのは、先生なぞは勿論御存じでせうが、諏訪湖の異名ださうでございます、で、鶴湖樂舍と人が附けてくれたのでございます、「樂舍」といふのは可笑しいでせうね。今のところで十五人ばかり弟子があります、堀戸君は助教手といふ役目です、それと、隔日位に、方々へ弟子を勸誘に廻つてくれてゐます、先生一度入らしつて下さい、とそれだけであつた。

私はその返事には、唯、彼の新しい仕事の繁昌することを祈る意味の文句だけ書いてやつた。私は、私がいくら諏訪

の彼女の動靜を知らしてくれと言つてやつても、多分一ヶ月に一度もさういふ藝者の出る席に行くことは、今の彼の境遇としては出來なからうし、さう私が考へるやうに幾ら狹い田舍のことだからと言つて、一人の藝者の消息を誰も彼もが知つてゐるといふ譯ではなからうし、（恐らく彼の町の百の工場を埋めてゐるところの、男工女工の唯一人でさへもが、私がそんなに心の底から戀慕してゐるところの、彼等の隣の町の藝者の名を知る者がゐなからう。）だが、彼の手紙に依れば、一日おきに彼の代師匠である堀戸が、音樂の勸誘に歩いてゐるとのことであるから、今に何事か聞いて知らしてくれるに違ひない。だから、私は我慢して彼女に就いては何にも書いてやらなかつた。

それから又ざつと一ヶ月ほど後に、鷲湖樂舍から來た手紙に、私は今度こそゆめ子に就いて何か書いてあるだらうと思つて、大急ぎで開いて見たところが、言ふには、一昨日の日曜に、（第三日曜日は稽古の休日になつて居りますので、）堀戸君と二人で、彼が以前諏訪の電氣會社から轉勤になつて行つた先の、島々といふ所へ行つて來ました。そこの彼の昔の同僚に、日本アルプスの三十幾つかの山に上つたといふ男がゐまして、その男の案内で、私たちの足さへ丈夫で元氣があつたら、稽古の體をもう一日位延ばすつもりで、上高地まで行つて見ようといふ考だつたのです。ところが、上高地どころか、私は徳本峠の項上まで行くのに、幾度引返すことを提議したか知れない程です。が、堀戸君はあんな小さな女のやうな恰好をしてゐる癖に、中々弱らないで、案内してくれる男と一緒に、私を押し上げるやうにして、せめて穗高山の見える峠の項上まで行かうと行つて、無理耶理にそこ迄は行つて來ました。そんな思ひをしてまで行つたのに、どうでせう、肝腎の穗高山は山一面に化物のやうなもく／＼した雲を被つて、どろ／＼どろ／＼と鳴つてゐるのです、鳴つてゐるのは雷なのです。今に晴れるだらうと言ふので、峠の上で一時間近くまつてゐましたが、晴れるどころか、もく／＼した物凄い雲はだん／＼私たちの方にも擴がつてくる模様なので、流石に連の二人も私の言ふことを聞い

て、大急ぎで島々まで驅け下りて來ました。そしたら私たちが島々に着くか着かない時分に大夕立が頭の上から落ちて來ました。先生ともよく話し合ひましたことですが、山は見るべきもので上るべきものぢやありませんな。私はつく〴〵さう思ひました。その癖、そんな高い山に上つたのは、私は生れて初めてのことですので、峠の上に上り切りますまでは、穗高のやうな高い山を、面と向つて見に行くのですから、嬉しくて本當に胸がどき〴〵した位です、そしてそんな思をして行きましたのに、到頭會ふことが出來なかつた譯でした。山に會ひに行くのは、勤めの女に會ひに行くやうなものですね。――

その手紙の中には、同封して、珍しく堀戸からのも這入つてゐた、彼のは唯簡單に御無沙汰してゐるといふことと、暑さの折から先生の御自愛をお祈りします、と唯三行ばかりの手紙であつた。

西向の山の話は久しぶりで私を喜ばしたことは言ふまでもないが、久しぶりで見た彼の手紙に、やつぱり彼女のことが一行も書いてなかつたのは、私を溜息に殘した。

私はその返事に、私たちの職業は毎月定つて勤めに出る譯でもなく、と言つて、商賣人のやうに家に坐つてゐなければならない筈もなく、所謂道樂商賣で、他所の人が見たらまるで毎日遊んでゐるやうに見えやうが、それでゐてこれ程心の中のせか〳〵した、絶えず夢にでも魘されてゐるやうな、氣持の落着かぬ仕事はないので、と言つて毎日毎日夜になつて見ると、結局はごろ〳〵して何一つしずに日を潰してゐる、近頃あなたの山上りの話は誠に面白く讀んだ、それに反して私の今は、氣持さへ落着いてゐれば、そんな思をしないで濟むのかも知れないが、この肝腎の暑い盛りに、私は雜誌の仕事に何かなしに襲はれてゐるやうな氣がして、これではならぬ、何處か靜な所へ旅に出て、そして書いて來ようと思つて鞄を取出したり、かと思ふと、いや、浮か浮か旅などしてゐては却つて仕事が遲れるから、などと思ひ直

しては又鞄を押入にしまつたり、旅は旅でも、あの私の好きな四方に窓の附いた三階の部屋が、最早や封じられたやうな今の場合、實際毎日をどうしてゐるかと人に聞かれても返答に困るやうな狀態にある、(何故その三階の部屋が最早や私に、謂はゞ『開かずの部屋』のやうに、封じられたやうなものであるか、その實相は西向も知らないのであるが、私の嘆きの餘り、つい書いてしまつたのである、)といふやうな事を書いて、何月何日、西向觀山樣と認めてから、わざと次手のやうにして、一寸、ゆめ子の消息はまだお耳に這入りませんか、と書いた。書いて私は赤くなつた。

すると、西向からはやつぱり返事はなくて、それから十日程後のこと、同じ鷲湖樂舍の封筒に、西向の感化に依つてか、やつぱり絹糸のやうな細い書體で、堀戸よりと認めた手紙を受取つた。その時は私はゆめ子のことは考へてゐなかつた。堀戸から單獨で手紙をもらふのは、いつかの御柱の祭の時以來のことなので、何だらう、と不思議がりながら、開いて讀んで見ると、拜啓とも何とも書いてなくて、だし拔けに、昨夜諏訪に用事があつて行きましたら、先生のいつもお泊りになる角屋の門の前の阪道を、褄をとつて下りて來るゆめ子樣に會ひました。私は若しかすると先生が入らしつてるんぢやないかと言ふやうな氣がしましたので、よつぽど尋ねて見ようかと思つたのですが、私こそ彼女を知つて居ますが、彼女の方では私を覺えてゐないと見えて、どん〳〵行き過ぎてしまひました。確に、さう思ふと幾分か大きいとは見えましたが、知らなければ殆ど分らない位です。それには、もつとも、褄を取つてゐる左手で隱すやうにもしてゐましたし、帶の結び方などで大分分らなくなるのでせうが、妊娠してゐる人とは一寸も見えません。人の話ではもう五ケ月以上とのことですが、つまり前孕み脊孕みと言つて、あの人のは脊孕みの方なんでございませうね、脊孕みは然しお產が重いといふ話でございますね、と書いてあつた。

この手紙は私を大變喜ばせもしたが、大變悲しませもした、そして長い間私の頭の中を往來する繪になつた。どんな

女でも悲しみを與へると多少美しくなるものであるが、女の腹から生れた女の中で、彼女ほど悲しんで美しくなる女はあるまい、と戀の爲に一層愚人になつて居る私には思はれるのである。彼女がどんなに美人でないかと言ふことは、私はこれまで私のいくつかの小說の中で、餘り屢々書き過ぎた程である、だが、それ等の平生は美人の資格にならないところの、目鼻立なり、身體の恰好なり、諸々の彼女の肉體の部分々々は、悲みの表情をする爲にだけ造られたものゝやうに見えるのである、と言つても、諸君、笑ひなすな。屢々私が言つたやうに、女の腹から生れた女の中で、彼女ほどこの世の喜びにつけ、悲みにつけ、誇るべきことにつけ、秘すべきことにつけ、自分のことにつけ、他人のことにつけ、物言はぬ女を私は見たことがない、この世に生れて、人は他人のことを惡く言つたり、他人のことをよく言つたり、自分のことを善く言つたり、自分のことを惡く言つたり、兎に角何等かの形で告白することに依つて、どれだけ色々の悲みから救はれてゐるか知れない。だから、どんな男でも女でも、それをしないものは殆どない。そして私の彼女だけはそれをしないのである。これは千萬人に一人であるに違ひない。たとへ彼女が十人の違つた男の子を孕まうとも、たとへ彼女が泥坊の癖があらうとも、或ひは又寢小便する病氣があらうとも、このことだけで、彼女は天才と同じ椅子に腰かけることが出來ると私は思ふのである。そして私はその爲に彼女をこんなにも戀するのである、と喇叭をもつて言ひ得るのである。

私は又、そこで早速彼女の町へ出かけようかと立上つた。が、いつかの絕交狀のことがある上に、私たちの間には（私には戀であるが、彼女にはさうでなくとも、それにも拘らず、）いろ〳〵と入組んだ氣持のもつれがあるのだから、たとへ一寸目には見えない程の體裁ではあらうとも、彼女はそんな腹を抱えて私に會ふことは拒絕するだらう、と思つて、私は又机の前に落膽して坐つてしまつたのであつた。

そして到頭、私はその年の冬が來るまで、私はそんなにも憧れながら、山と彼女の町に行くべき機會を持たなかつたのである。

その年の夏は、五十日間に、晝間に一二度夕立があつたのを除いて、たつた二度しか雨が降らなかつた。何故私がそんな事を言ふかと言ふと、私はその五十日の間、毎日毎日、日が暮れる頃になると、ステツキを振つて、京橋區のとあるカフエーに出かけた、一日も缺かさずにである。そしてその間にステツキを、舌皷打ちながら傘に持ちかへた日は、たつた二度しかなかつたのを覺えてゐる。

それは大通から、俥も通らない細い横町を這入つて、又一つ角を曲つた裏町の、何々商事會社だとか、何某法律事務所だとか、何通信販賣部だとか、何貿易部だとかいふ、夜になると、軒燈一つを殘して悉く目を閉いでしまふやうな家々の間に、どうしてさういふ所にそんな店を開いたのかと怪しまれるやうな場所に、そのカフエーはあつた、道に迷つた醉つ拂ひか、大通を歩くことを避ける二人連かの外には、どんな通り掛りの客といふ種類の客をも豫想出來ないやうな店であつた。夏のことで、普通には硝子の扉の嵌まつてゐるところに、風通しをよくする爲に、三尺から六尺位の位置に、ギイと開いたら自然にパタンと閉まる仕掛けになつてゐる、三尺ほどの簾の扉が附いてゐたが、だから道を歩きながら、少し腰を屈めてその扉の下から中を覗くと、そのカフエーの中の卓子や椅子の足の部分が見透かされた。しかし、いつの時でも無生の卓子や椅子の足があるだけで、そこに客らしい人間の、生きた足が見えることは稀であつた。

私には妙な一つの病癖があつた。それは或る何か一つの事を始めたり、樂んだりし出すと、その事にばかり溺れ込む性質、といふよりは、やつぱり病癖があつた。と、こんな風に言ふと、讀者が何か鹿爪らしいことに取るといけないか

ら、例を擧げると、私は不斷慢性の便秘症で、薬なしにはどうしても健康が保てない體質になつてゐた。が、これで今迄は何か彼か出鱈目の薬を飲んで濟ましてゐたのに、ふとしたことから、一體便秘症にはどんな色々の薬があるだらう、その内どんな薬が最も自分の體質に合ふだらう、といふやうな事から、日本發賣のあらゆる便秘用の賣藥、さては阿米利加製のもの、獨逸製のもの、佛蘭西製のもの、などと出來るだけ集めて、それ等を飲み比べて見るのである、つまりこの例が示す位の意味の、極く愚かしい、何でもない病癖のことなのである。これは熱心といふ部類に入れるよりは、寧ろ浮氣といふ部類に入れるのが至當であらうか。さて、その頃、私は蠅が非常に不潔で、不愉快なもので、是非とも退治なければならぬといふ考と、それを捕ることに、初めは飛んで來る彼等の不愉快さに苛々してだつたが、終には隅々を探し廻つたり、捉まへるとぶうんと鳴いたり、そんなつまらぬことにまで興味を持ち出した。だから、その頃盛んに賣出されてゐた、ゼンマイ仕掛の蠅取機械は言ふ迄もなく、昔からある蠅叩きとか、弓形の蠅彈きとか、酢を入れる硝子の壺の蠅取瓶だとか、黐を着けた竹の皮とか、阿米利加製の蠅取紙だとか、或ひは蠅取散だとか、悉く目に觸れる範圍の蠅取の道具といふ道具を集め出した。ところが、或日の新聞に吸蠅管、一名蠅取杖といふ不思議な廣告が出てゐるのを、私は見逃さなかつた。何でもその廣告文に依ると、在來の蠅取道具は大體蠅が集まつて來るのを待つてゐて捕るといふ、謂はゞ消極的なものばかりであつた、中には蠅叩きなどといふ、稀に積極的、攻撃的なものもあるにはあるが、それは敵の止まつてゐる場所に依つて、それが高過ぎるとか、物の角とか、柔軟な物質の上とか、天井のやうな逆様の位置とかにゐる場合には、用をなさない、それに反して我が蠅取杖はその尖が漏斗形になつてゐて、管は硝子管だが延び縮み自在で、下端についたゴム球を抑えることに依つて、どんな所に止まつてゐる蠅でも悉く吸ひ込んでしまふ仕掛のものである。殊に、日本の家庭の婦人たちは一體に運動不足である、本機を一本具へ附けておくと、かの有

害不衛生な蠅を絶滅すると共に、運動不足を補つて、間接に健康を增進することが出來る、だから、中流家庭の婦人に特にお勸めする、云々といふのであつた。如何にもよく捕れさうな氣がするのと、その捕り方が奇拔であるのと、殊に私を喜ばしたのは、私は婦人ではないが、私の職業上運動不足であることから、それを補ふ云々といふ言葉であつた。私はその廣告に依つて、それを賣つてゐる家の番地を紙の端に書きつけて置いて、京橋區何々町といふ所を その夕方尋ね當てる爲に歩き廻つたのである。そしてその時、私は先に言つたカフエーを發見したのであつた。

私は朝起は割合に早い方で、大抵七時には床を出て、それから飯を食つたり、新聞を讀んだり、雜、を拾ひ讀みしたり、そして漸くのことで、仕事であるところの原稿紙に向ふのである。それを二行か三行かも書き續けないうちに、疲れた欠伸が出て、私はペンを擱いて、蠅取杖と持ちかへるのである、私はそれを持つて家中の部屋を順々に歩いて廻る、一順廻つた時分には、又初めの部屋に戻つて來て見る、さうして、私は仕事の時間の大凡五倍を蠅取ることに費した。いつかの蠅取杖は勿論廣告文程には行かなくとも、それは天井とか、窓敷居とか、一般に仰向いて捕る時には確に最も適當なものではあつたが、疊の表とか、米櫃の蓋とか、食臺の上とかいふ、手近にゐる蠅を捕るには、捕れるが、餘り面白さがなかつた。そこで私はさういふ所の蠅には、例の昔からある底の大きく開いた、その周圍に酢が這入つてゐて、下から蠅が這入ると、どうしてもその酢の這入つてゐる部分に落ちる外に、逃げ場のないあの蠅取瓶を持ち出して、それは普通ならその下の方に蠅が集まつて來るやうに甘い物を置いて誘き寄せて、彼等が飛ぶ時に自然に硝子のその器の中に這入るやうになつてゐるところの、所謂消極的蠅取器であるのを、それを何處でも彼等の止まつてゐる上に私自身でそつと持つて行つて、上から被せてしまふことに依つて取る方法を考案した。私はさうして彼等を捕る事に甚だ興味を持つた。蠅を捕るのに疲れると、私は又原稿紙のところに二三十分間戻つて來て、二行なり三行なり書きつゞ

けたり、それでもどうしても書けない時は、手近に置いてある本を取つて五六頁讀んだりするのだが、暑さと疲れとで私は危くそのまゝ眠つてしまひさうになると、そこへ何處からか飛んで來た蠅が顏の上に止まるのである、すると私は忽ち立上つて、蠅取杖と、蠅取器とを交る交る持ちかへては、部屋部屋から、臺所から、湯殿の隅々にまで、泥坊のやうに足を忍ばして歩き廻るのが常であつた。

しかし、夕方が來ると、私はそれ等の蠅捕道具を悉く見捨て、どんなに差迫つた仕事の時でも原稿紙の上にペンを置いて、何か大切な用事でもあるやうに家を出て、蟻の道のやうに私は毎日毎夕、同じ道を電車に乘つて、そして同じ横町を拔けてかの裏町のカフエーの、簾の扉を開ける習慣になつてゐた。そこで私は市木直吉と友達になつたのである。

市木直吉はこのカフエーでの、私よりも先輩の客であつた。このカフエーと言つても、それは私が見付けた時の一ケ月ほど前に出來たもので、市木がそこへ行き始めたのは私よりも半月ほど前からとのことであつた。不思議な因縁には　市木をそのカフエーに紹介した友達といふのは、彼の中學時分の同窓で、私がその家を探す爲に偶然このカフエーを見付けたところの、例の蠅取杖を賣出してゐるS－商會の店員だといふ話であつた。更にその話を嘘のやうに脚色づけたことには、その蠅取杖は、市木の友達の、そのS－商會の店員が發明したもので、その發明には市木も亦大いに相談に預かつて、現に私が讀んで好奇心をそゝられたあの廣告文は、市木その人が草したものであるといふことであつた。市木が悲んで言ふには、「あの機械がもつと賣れたなら、僕も今頃は多少分け前にあづかつて、もう少しいゝ境遇になつてゐた筈なんですが……。」私がそこで、「どうして、では、いつも君一人で、その發明者はこゝに見えないでんす？」と聞くと、

「それが、……」と彼はひどくしんねんづべりとした、口の重い男で、「その男が初めは僕をこゝへ案内してくれて、一

週間ほどはずつと二人で一緒に來たんですが、もう今はその商會にゐないんです、」と言つた。

彼はそれ以上説明しなかつたが、その後私とずつと親密になつてから、何かの時に話したところに依ると、その友達の男といふのは、その蠅取杖を發明して、主人の店から賣出させることに定ると共に、隨分色々な名目で金を借りたり、無斷で融通したり、さては使ひ込んだりした爲に、當時は市木からも姿を隠してゐるとのことであつた。

だが、そんな話はみな、ずつと後になつてから知つたことで、初め私たちは一週間も、或ひは十日も、互ひに毎晩顔を見合してゐながら、卓子越しに目と目が合ふと、あわてゝ目を反らし合つて、そして何方からも聲を掛け合ふどころか、寧ろ敵意をさへ持つてゐるやうに、相對してゐたのである。と言ふのも、彼は見たところ、如何にもつんと澄ましてゐて、目がばかに大きくてぎよろりとしてゐて、一寸給仕女に物を言ひかけてゐるのを見ても、實に口數が少なくて、それを笑ひ顔をしないで言つて、一口に言ふと、私は嘗てこんな親み難い印象を與へる男を見たことがなかつた。

けれども、先にも言つたやうに、そのカフエーの宵のうちの客といへば、殆ど私と彼との二人に限られてゐたと言つても間違ひではなかつた。私たちの外には、稀にその邊の何々貿易部とか、何々通信販賣部とかの店員や小僧やが、湯歸りとか、寢る前とかにアイスクリームとか、ソーダ水とかを飲みに來るのと、そこから程遠からぬ所に散在してゐる待合邊から散歩の次手に來る、氣まぐれな男女の一對くらゐに過ぎなかつた。無論、料理などは出來なかつた。アイスクリームと、ソーダ水と、シロツプ珈琲とそして四五種の洋酒とだけであつた。それに、不思議なことには、私はそんなに毎日ほど出かけながら、そこの主人らしい人間を見かけたことはほんの二三度しかなかつた。いつでも眠たさうな、しよぼしよぼした目をしてゐる給仕女と、始終講談本か何かを讀んでゐる、アイスクリームやソーダ水をコツプに注ぐ役目の、白い洋服を着た三十がらみの男と、それ切りであつた。そして彼等は二人が二人とも、申し合はしたやう

に甚だ無愛想であつた。それから、私の一つ氣の附いたことは、その五脚ほどしか卓子のない、小さな土間の店がそんなにいつも閑散を極めてゐるにも拘らず、その上の二階の部屋に當る主人の居間らしいところには、何となく大勢の人がゐるやうな氣配がすることであつた。無論、それは唯氣配が感じられるといふことだけで、實は毎晩私のゐる間に定つて二三人の人が、別々にそのカフエーの土間を素通りして、その白い洋服の男に一寸會釋して、奥の方に這入つて行くのを、――その奥に二階への階段があるらしいのであつたが、主人は何をしてゐるものか、兎に角、それ等の人々は皆相當の裝をしてゐたが、その主人の友達か何かに違ひないのであらうが、――さういふのを見るにつけ、私は私の頭の上の二階の部屋には、始終大勢の人間がゐるやうな氣配を感じた譯である。だが、私が或時、そのしよぼしよぼした目の給仕女に、

「主人たちの部屋はこの二階なの？」と聞くと、

「いゝえ、もつと奥の方です。」と彼女は曖昧な調子で言つた。「私、よく知りませんけど、この上の二階と、それから三階とは別の人が借りてゐるんです。」

そして、私はそれ以上何にも聞かなかつた。

一體、さういふ雰圍氣の中で、どうして私と市木とが口をきゝ合ふやうになつたか、私はその經偉をよく覺えてゐない。だが、どんな物言はずの、人見知りする人間同志でも、例へば彼等が無人島に漂着して、そこで二人が顔を見合つたとしたなら、屹度何方からともなく物を言ひかけて、いつとなく親密になるに違ひないやうに、私たちも亦そのカフエーでいつとなく物を言ひ合ふやうになつたのは不自然ではないのである。そして又、さういふむつかしやに限つて、大抵は心の中は人一倍の寂しがりやである事も、私たちは似てゐたものだから、自然、日が經つうちには、でも口數は

お互に性來のことであるから、極く少なかつたが、隨分親しくなつてしまつたのである。私は先にも言つた通り、朝起きて夕方迄の間は、家にゐて、自分の仕事であるところの　文章を書くことに骨を折つてゐた。暑さは暑いし、仕事ははかどらないし、それで一日に何人となく、私のその仕事の出來上りを催促しに來る新聞雜誌の記者とか、或ひは私を先輩として訪問して來るより若い人たちとかに應接もしなければならなかつた。だが私の受合つた仕事の締切の日が更に一層迫まつて來たので、私はもう大抵の客には會ふことを斷つて、若し都合がよければ、或ひは氣が向くなら、夜の八時から以後ならば、京橋のこれ〳〵のカフヱーにゐるから、そこへ來ていただきたい、と玄關で女房に詫を言はせた。が、玄關で彼女が言ひにくさうにさう斷りの言葉を述べ、客は又客で禮儀正しくそれに應答してゐるのを聞きながら、私は、私自身も元より首の縮まる思をしながら、大抵の場合、原稿をそつち除けにして　蠅取杖と蠅取壺とを替り替りに持ちかへながら、菓子鉢の上に止まつてゐる金蠅をねらふことや、天井の隅に馬蠅を追ひ詰めることや、さては熊蠅や小蠅やを捉へることやに、汗を流してゐた。蠅を取ることには飽きなかつたが　仕事の原稿を書くことには直に疲れを覺えるものだから、蠅五十疋に原稿一枚が中々比敵しないのである。そして、そんな思をしながら、私はやつぱり日が暮れると、原稿紙やら、ペンやら、本やら、字引やら、總ての私の仕事の諸道具を見捨て、杖やら、壺やら、箱やら、悉く蠅取の諸機械を片附けて、鼬のやうにいつもと同じ道を、例の京橋の裏町のカフヱーへと志して行つた。

すると、大抵の場合、市木直吉は私より二十分か三十分か、早くからそこに來てゐて、彼はいつも彼の定席にしてゐるところの、入口から一番遠い部屋の隅の卓子の前に腰かけて、そのぎよろりとした目を、壁の繪を見てゐるのか、卓子の花瓶を見てゐるのか、入口を通して往來を見てゐるのか、否、實はその何れの方に目は向つてゐたにしたところが、その何れのものをも見てゐない、何故といつて、それは空氣を見詰めてゐるやうに、何處かぽかんとした表情をしてゐ

たから、そして大抵の場合ゴールデンバットの煙を、無味無臭の煙を吹かしてゐるやうな顔附で、ぷかぷかと吹き出してゐた。けれども、私がそんなに長い間の、卓子越しの、しんねんむつりとした睥み合ひの最中にも、何となしに、始終彼に引きつけられたのは、彼のその目であつた。一口に言ふと、それは物を考へ詰める人間の目に違ひなかつた。つまり探偵とか、相場師とか、さては思想家とか、或ひは又さういふ職業上からばかりではなく、どんな人でも胸に心配のある時にする目附である、この男は一體何を職業とする人だらう、と私は屢々考へた。

果してこの男は、私が彼と口をきゝ合ふやうになつてから四日目だつたかに、私とは年も一つ違ひで、その所屬してゐた學校こそ違つてゐたが、同じやうな科目を研究した者であることを私は知つた。私は文科で、彼は哲學科の出身であつた。その後、私たちが次第に親しくなると共に、折に觸れて彼は屢々私に嘆いて言つたことには「今は昔と違つて文學の方だと、いくら無名でも、翻譯するとか、その他文學的の雜文を書くとかして、どうやら斯うやら身過ぎが出來るやうですが、哲學では未だ未だどうにも金の取りやうがありません。と言つて、私は無器用な爲か、どうしても文學的な雜文や、通俗的の文章が書けないのです、いや、實は二三度書いて、雜誌社に足を運んだことがあるのですが、どこでも受取つてくれないのです。……」

「失禮ですが、さう言へば僕は君のお名前を、雜誌の廣告面か何かで時々見たやうに思ひますが……」と私が言ふと、

「えゝ、時々書くことは書くんです。」と彼は、さういふ辨と見えて、怒つてゐるやうに見える物の言ひ方で、「と言つて、私の書いたものをたとへ六號活字で載せるにしても、受取つてくれる雜誌といふのが二種しかないんですが　もつとも私等よりもつと有名な人のでも、哲學の文章などを今日載せる雜誌といふものは幾らもありませんがね、さあ、それで私の得る收入を毎月に平均すると、金五圓に充たないのですから、笑ひ話にもなりません。それでゐて、どういふ

因果か、私は哲學といふものが好きで、これが止められないのです。少しばかり方向を變へて、近頃流行の經濟問題とか、社會問題とかいふものを論じたら、もう少し色んな點で融通がきくんでせうが、これ亦どういふ因果か、私にはそんなものに一寸も興味がないんです。」

斷つておくが、彼が物を言ふのは決してこんな風につゞけてはしないのである。私が色々口數多くきいた後で、私の百に對する一位の割合で、彼はぽつりと一言、怒つたやうな言ひ方で、吐き出すやうに、文章にすると一行ほど言ふだけである。だから、これだけの言葉は、その外の無駄な言葉を省いた上でのことだから、私が彼から聞くのに二日かゝつたと言つても決して嘘にならない。つまりこゝで彼の言葉として言ふのは、私が彼に代つて、自分の言葉に直して、時間の上で言ふと、そんな風に縮めて、言ふものだと承知しておいて貰ひたい。

ところが、彼、市木直吉に、――哲學の專攻者で、哲學より外に何も出來ない人で、それで一ケ月の收入が金五圓に充たないといふのに、外にもう一つ重要な仕事があつたことを、私は長い間知らなかつた。彼が哲學などやる人としては、いつも珍しく洒落た裝をしてゐるのに私は氣がつかない譯ではなかつた、そんなに裕福な生活をしてゐるらしくも見えないのに、明石や、上布の着物を素肌に着て、殊に目立つのは、彼と會ふ場合がいつもそんなカフエーのやうな場所だつたからでもあらうか、私は彼が羽織を着てゐる姿と、帽子を被つてゐたところと、足袋を穿いてゐるのとを、夏の間ぢう見たことがなかつた。或時、珍しく私の方が彼より早く行つた時、その家の唯一人の女給である、目のくしやくしやした女が、何かの話の次手に、市木のことを「株屋さんでせう。」と言つたことがあつたが、私はそれを、彼女が彼の風采から推して言つたのだらうと思つた。「どうして?」と聞くと、「だつて、赤木さんと以前よく場の方へ入らしつたやうですもの。」「赤木さんつて……?」と私が聞くと、「蠅取杖の赤木さん。」と彼女は言つた。つまり、それが彼を初

めにこのカフエーに連れて來たといふ、彼の中學の同窓の、蠅取杖を發明して、その後間もなく行方不明になつた男の名前に違ひないのである。

そして、實際、哲學の外の彼の重要な仕事といふのは、相場のことなのであつた。更に驚いたことには、その相場に手を出したのは、彼の方が初めで、彼の行方不明になつた同窓の友達の、赤木は彼に誘はれて相場を覺えたのであるといふことを、私は後に彼自身の口から聞かされたことがあつた。そして、その當時だつても、彼は細君と主人の子供との一家の生活を、哲學ではなく、相場に依つて立てゝゐたのであつた。彼は言つた、「さういふと、私は勝負事は何でも好きなやうに思はれるかも知れませんが、よくよく變つた生れ質と見えて、相場の外は勝負事は至つて嫌ひな方なんです。その反對に、例の蠅取杖の赤木なんかは、今まで機會がなかつたので、相場をすることは私から初めて教はつたやうなものゝ、その前から花でもトランプでも、將棋でも、相撲でも、野球でも、何でも金を賭けなければ承知しないといふ男でした。どうしてあの男が今迄相場を知らなかつたらうと、不思議でならない位です。」

これ等の言葉も、彼が極く斷片的に、一句づゝ話したのである。「今頃は何處にゐるか、何にしてもやつぱりそんな事ばかりして暮してゐるでせう。」と彼は言つた。そして、彼自身に就いては、彼はさういふ小相場をやる人間としては、珍しく殆ど仲買の店などに出かけないとのことであつた。もつとも、近頃では赤木に教へる時に二三度と、赤木に勸められて一二度と、場の方へ行つたことがあるが、普通には、彼の相場のやり方は、謂はゞ哲學者的といふのか、毎日夕刊で一寸上り下りの値段を見る外には、賣も買も悉く自分の頭の中で斷らうと定めたら、それを速達葉書で取引の店に通知するだけなのださうである。これは相場を月に一度か二度位、ほんの慰みにやつてゐる人なら別として、彼のやうにそれで曲りなりにも生活してゐる人間には、殆ど類のないやり方に違ひなかつた。

すると、私がさうして、晝のうち、家で蝿五十匹と原稿一枚と、原稿一枚と又蝿五十匹とを、交る交る取り又書き、書き又取りしてゐる間、彼、市木直吉は何をしてゐたかと言ふと、彼は私と違つて大變な寢坊で、起きるのはいつも午後一時頃であつた。彼は夏の汗の出る間は、讀むことも書くことも、何にも出來ないのださうであるが、その癖、起きて、朝と晝とを兼ねた食事を認めると、降つても照つても彼は麻布にある家を出て、神田か、本郷か、牛込かの古本屋の町に出かけるのが常であつた。彼は神田の古本屋を三區に、そして本郷と牛込とを各一區づゝに分けて、一日に一區づゝ、だから、六日目には又同じところを廻る譯で、毎日二時頃から夕方までの何時間かを、それ等の古本屋の店を覗いて歩くのである。それは彼の言ふところに依ると、無論目下の彼はさうして毎晩カフエーに來る位の金はどうにか工面するとしても、氣に入つた本を片つ端から買ふほどの經濟狀態にゐないので、唯さうして本の景色を眺めに行くだけなのださうである。初めのうちは、それでも一冊や二冊は時々買つてゐたが、今では全然買はなくなつた。又初めのうちは可成り根氣よく拾ひ讀みしたり、毎日續けて何處から何處までといふ風に讀みに行つたりしたものであるが、今ではそれさへしなくなつて、唯行きあたりばつたりに、これと思ふ本を棚から拔き出して、出鱈目に一頁の半分か、半分の半分かを讀んで、そしてその本全體を想像したり、それからそれと別の彼自身の空想を呼んだりすることを、彼は無上の樂みとするのであつた。そしてそれがどういふ種類の本であるかといふと、それは三種類に限られてゐた。言ふのは彼自身の專攻であるところの、哲學書と、それから今の重要な仕事であるところの、相場に關した本と、さて第三番目がどんなに私を喜ばしたか、又その爲に私が彼と一層親しくなつたか、――つまり山に關する本なのであつた。

だが、こんな風に書くと、讀者はうつかりして、その京橋の私たち二人の外に殆ど他の客を交へないカフエーで、私と彼とがどんなに仲よく、雄辯に、毎日の夕方を語り合つてゐるかと想像するかも知れないが、それが先にも言つた通

り、私も決して口數の多い方ではなかつたが、彼は無口な中の最も無口なものであつたから、私たちは十分に一言、二十分に一言位しか話すことはなかつた。似てゐたのは、どんな暑い晩でも、彼も私も滅多にアイスクリームとか、ソーダ水とかいふ冷いものを飲まずに、いつも熱い紅茶ばかり命じて、例の始終講談本を讀んでゐる、白い洋服を着た、酒の番や、湯沸しの番をしてゐる男を困らすことであつた。そして、唯、いつとなく、私たちは、彼の卓子であるところの、部屋の一番隅に向ひ合つて椅子に腰かけるやうになつたことである。

さうして夏が過ぎて、やがて秋にもなつたのであるが、私も彼も日が暮れると、京橋のそのカフェーに出かけて行く生活はちつとも變らなかつた。變つたのは、季節の移るにつれて、日が早く暮れるので、私たちがそこに行く時間がそれと共に早くなつた位のもので、そして私自身の晝間の生活で言へば、いつか蠅も少なくなつたので、原稿を書く間々には、山の寫眞を眺めたり、それに關する本を讀んだり、山の國の地圖を調べたり、更に又その最も多くの時間を、山とゆめ子に就いて色々の思案に耽ることに、原稿を書くことの五倍もの時間を潰した。そして市木に就いて言ふと、彼は此頃では一日おき位に哲學の論文を書いたり、それに就いて考へたり、又別の一日おきには、夏からの癖がつゞいて、相變らず古本屋町を逍遙して暮してゐた、そして二人は日が暮れるとそのカフェーで落合ふのである。だから、恐らく私たちの生活を第三者の位置から見る人があつたら、その單調さと、その餘りに定り切つてゐるのに呆れるに違ひない、多分役場の書記でもが私たちよりは單調でない生活をしてゐるに違ひない。

それは何でも十月の極く上旬のことだつたと思ふ、——夏中、薄物の時でも、單物になつても、必ず襦袢なしにそれ

等を素肌に着るのを得意にしてゐるらしい、洒落者の哲學者である市木が、やつぱり素袷の着流しでやつて來たので、私は何にも言はなかつたが、心の中で驚いたのを覺えてゐるから、——最早や私等のそのカフエーの、綠の扉がいつの間にか普通の硝子のそれに變つてゐた或晩、相變らず市木も私も銘々飲みさしの紅茶の茶碗を前に置いて、默りこくつて、椅子に倚りかゝつてゐた時、私は珍しく扉の外に人の氣配を聞いたやうに思つたので、ふとその方を見ると、果して硝子越しに人間の顏が覗いてゐるのを見出した。が、妙なことに、顏は足音と一緒にそこで止まつたまゝで、扉が開かないので、私は變に思つた。それに私の氣のせゐか、顏は此方の室内が明るくて、外の方が暗い爲に、はつきりと見分けられないが、白い小さな顏に見えた。そしてそれが確に見覺えのある樣な氣がしたので、私は目を反らさないで、寧ろ多少腰を上げてその方を一層よく見極めるやうな目附をした。と、その時、向うでも私をはつきり見極めたらしく、瞬間にギイと音を立てゝ扉が開いて、そこに現れたのは、あの西向の友達の堀戸なのであつた。

「やあ！」と叫んで、私は驚いて立上つた。

堀戸は何年か前に見た時のまゝの、年取つてゐるとも、若いとも附かない顏を、恥かしさうに幾分か赤くして、昔ながらの女のやうな恰好で歩きながら、私の方へ歩いて來た。

「いつ來たんです？　どうして……」と言ひかけて、私は一寸口を噤んだ。私は咄嗟の間に、いつか山の發電所から彼や西向やと一緒に下りて來る途で、彼が東京に出たがつてゐる事、就いては私に何か彼が音樂の研究がさして貰へるやうな家に、書生にでも、樂隊の一員にでも、彼を世話してやつてくれと西向から頼まれたことを思出したのである。それにしても、もう二三ケ月以上も、彼からも西向からも、そんなにも山の消息を待つてゐる私に、何の手紙もくれなかつた私の不滿をも私は思出した。が、それは考へて見ると、彼等に手紙を書くのは、彼等の町にゐるところの、今は私

から直接に手紙を書くことの出來ない、私のゆめ子に書くやうなつもりで、即ち彼等の安否に事寄せて、彼女の安否を聞く意味に外ならぬのである。即ち又彼等からの手紙に、私は彼等の消息よりも、彼等の町とそして彼女との消息を讀まうとするのである。それに對して彼等が返事をくれなかつたからとて、私は怒る代りに私自身の自分勝手を恥ぢねばならなかつたのかも知れない。だから、今、突然そんなところに現れた彼を見て、私は正直に言ふと、彼そのものではなく、彼を通して或者を見るやうな思がして、甚だ心の勇躍するのを覺えねばならなかつた。

堀戸が言ふことを聞くと、彼は二三日前に東京に來て、昨日の晝私を訪問したのであるが、私の女房が玄關に出て、晝間は原稿で忙しいから、失禮だが、夜分に京橋のこれ〲のカフエーに行つてくれ、そこに屹度私がゐるからと聞いて、それで今夜尋ねて來たものなのである。私がそれを今まで知らなかつたのは、彼が來た時丁度私が一生懸命に仕事をしてゐた十分間ほどの最中でもあつて、その時直に私の女房が私に傳へるのを遠慮して、そのまゝ忘れてしまつたものなのであらう。

「今、何處にゐるんです！」と私が聞くと、

「四谷區の須賀町の……」と彼が答へたので、

「あゝ、あの西向君のゐた印判屋ですか、」と私は引取つて言つた。「君も判屋さんになつたんぢやないでせう！」

「えゝ、私はあの昨日から、神田區の、東洋音樂學校へ入學しまして、勉强することになりましたので、」と堀戸は多少誇らしさうな樣子で言つた。

「さうですか、それや結構ですな。まあ、然し、その方の話は後でゆつくり伺ひませう、」と言つて、私はそこで彼を市木に、簡單な言葉で紹介した。それからは私たちはいつとなく山の話に移つて行つた。堀戸は私たちや西向のやうに、

取立てゝ山が好きといふのではなかつたが、生れが信州の木曾で諏訪で、暮したり、島々に住んだりした事があるだけに、私たちと十分話を合はすことや、私たちの問に答へることが出來たのみならず、部分々々の話になると、私たちよりは無論よく知つてゐた。そして、彼は段々馴れて來ると、次第に雄辯になつた。だから、彼が最もよく話し、次が私で、やつぱり市木が一番無口であつた。堀戸の話に、夏はどうしても登山客のこぼれが諏訪あたりにも立寄るので、何となくごた／＼してゐて落着かないが、今はもうそれ等の人たちも殆ど影をひそめたから、私たちが出かけて行くのに最もいゝ時期である、もう遠い、高い山の上には白いものが見舞はれ出した「先生、しかし此地はまだ夏のやうですね、信州ではもう朝晩はめつきり寒くなりまして、年寄などには炬燵を入れてゐるものがある位でございますよ、」と彼は言つた。

「私たちのやうな、山を見て樂むものにはこれからの旅がいゝですね」とその時、ざつと三十分間も、何にも言はずに人の話を聞いてゐた市木が、傍から言つた。

その言葉は私に感動を與へた。その瞬間、私の長い間見ない、甲斐の山や、信濃の山や、彼女の町や、彼女の姿やが、涙をもつて眺める景色のやうに、濡れたやうな水々しさで私の心に畫き出された。

「一度、信州の方に一緒に旅して見ませんか？」と私が言ふと

「えゝ、行つてもいゝですな、」と市木は珍しく熱のこもつた聲で答へた

「西向君はどうしてゐます、ちつとも便りをくれませんが……？」と私は次に堀戸に向つて聞いた。

「えゝ、」と堀戸は何だか曖昧な答へ方で、「西向さんは相變らず……えゝ……音樂をやつて居りますんですが……」

「何か變つたことでもあるんですか？」

「えゝ、いえ、別にさう……」と堀戸は言葉を濁した。

私は無論、やつぱり何か變つたことがあるんだらうと想像した。で、その晩、堀戸と別れる時、明日の午後に遊びに來ないか　と誘ふと、學校の歸りに寄らうとの相手の返事だつた。私は一人で秋の夜更の道を歩きながら、西向にどんな變つたことが起つたのだらうかとか、あの山の町に變りはないだらうかとか、彼女はまだ藝者をしてゐるとのことだが、恙ないだらうかとか、そんな事ばかり考へられた。翌日起きても、直にそれ等の事ばかりが繰返して考へられた。で、今日は仕事を一切念頭から捨てゝ、堀戸が來る迄、積極的にそれ等の事を縱まに考へようと決心した。堀戸は間違ひなく、三時過に尋ねて來た。さて、彼の話に　彼もこれ迄は話にだけで聞いてゐたのださうであるが、西向に、六七年前に別れた細君があつたが、彼女は印判屋渡世で、思ふ樣に發展せず、從つて始終貧苦に惱まされねばならなかつた西向との生活に愛想を盡かして、それに折から町に來た旅役者と戀に陷ちたのを機會に、夫を捨てゝ駈落してしまつた。西向が印判屋の店を閉ぢて、電氣會社の養成所に這入つたのはそれから五六ケ月後のことで、彼が發電所に勤めるやうになつてから、誰から聞き傳へたのか、彼の逃げて行つた細君は彼の新しい住所に宛てゝ、時々手紙を寄越したことがあるさうである。西向の發電所時代に友達になつた堀戸は、彼に以前彼を見捨てた細君があるといふことを、誰からとなく薄々聞いてゐたが、その頃東京から、――西向がそれに就いて聞かれても何にも言はないところの、どうも彼と深い關係のあるらしい女から、時々手紙が來て、更に不思議な事には隨分無理な金の工面をして、その女に送つてゐるのさへ一二度見たことがあつたが、その女と、昔の彼の細君とが同じ女であるとは、思ひも寄らなかつたと言つた。

それ等の色々のいきさつは、西向が東京に一年餘り出かけてゐて、今度ふらりと元の町に歸つて來て、音樂の教授を仕事に始めるに就いて、同じく無職で困つてゐた堀戸が、彼と一緒に住むやうになつてから、折に觸れて見聞きして知

つたことなのである。といふのは、この新しい仕事に、西向が多少成功し出してから間もなくのこと、或日素人女とも、と言つて藝者とも見えない、若い女が停車場からの俥に乘つて、彼を尋ねて來た。その女が西向の以前の細君で、彼女はその時からずる〳〵べつたりに住み込んでしまつたのである。そして、初めのうちは多少音無しくしてゐたやうであつたが、一週間、十日と經つうちには次第に我儘になつて來て、明らかに西向をお尻に敷くやうな振舞をし出した。だが、西向はその氣の弱い性質から、初めは謂はゞ半分は居候であるところの堀戸に對して、彼女と同棲してゐることを氣兼ねしてゐるやうに見え、そして彼女が次第に我儘になつてからは、彼女に對して、彼女の餘り氣に入らないらしい堀戸の存在を、蔽ひ且つ遠慮してゐるやうに見えた。

さういふ中で、堀戸は西向とその細君との屢々喧嘩の仲裁に這入つたり、もつとも喧嘩と言つても、彼女の方から持ちかけて、西向を苛める行動に外ならぬのであるが、又或時は夜が更けてから彼女が彼に口汚く罵りかけてゐるのを壁越しに聞いたり、あれやこれやの行ひや言葉から、堀戸はこれ迄の西向と彼の細君とのいきさつを大方知ることが出來たのである。多分、彼女は以前はその町の或生糸工場の女工らしかつた、そして西向と夫婦になる迄にも、無論何人かの男と接してゐたらしいし、西向と同棲生活の後も、例の旅役者と駈落する迄にも、やつぱり幾人かの男と交渉を持つてゐたやうだし、更に西向を捨てゝ、暫くその旅役者との關係がつゞいた後、彼女が捨てたのか、彼女が捨てられたのか、又別れてから、或ひは大阪に行つたり、名古屋にゐたり、さては東京に行つたり、その間、無論、男なしには暮してゐなかつた、そして、その間、彼女がどんな生活をしてゐたか、それは人間以上の者でなければ誰にも分らない、それにも拘らず、徹頭徹尾西向はそれに就いて何の反抗もしなかつたのみならず、先にも言つたやうに、屢々彼女からの圖々しい無心の手紙を受取つて、苦しい工面をしてまでそれ等に報いてゐたのである。餘程、あの人は惚れてゐるのに

違ひございませんね。でないと、逆も出來ることぢやございませんよ、と私は思ひますが……ね、先生、」と堀戸は私に言つた。それに答へて私は言つた「だけど、幾ら惚れてゐると言つても、唯の惚れてゐるとか、甘いとかいふだけでは、それは出來ない藝當ぢやあないですかね。僕はそんな話を聞いて、西向といふ人は、多少えらい人間ぢやあないかと言ふ氣さへしますね。」

だが、何にしても、その西向の細君といふ人は、可成りなヒステリイ病者に違ひなかつた。それは彼女が何年振りかで、今度西向の元に歸つて來てからの、彼女のいろ〳〵の動靜に就いて、堀戸が細大洩らさず私に話したところに依つても、さう確める外はなかつた。さうして、私が堀戸と色んなことを話し合つてゐるうちに、いつか中西向が東京に來てゐたのは、無論、何か身を立てたい考があつてゞあることは間違ひではないだらうが、それと共に、それ等の彼の行動の裏には、彼女がゐたといふことの推量が十分に出來ることであつた。現に、それに就いて、堀戸が言ふには、西向が四谷の印判屋を出て、牛込で二階借をするやうになつたのは、彼女が彼を唆したものらしく、而も唆しておいて、到頭彼女は彼と同棲することを拒んだらしいのである。さういへば、その頃から彼が一層元氣をなくしてゐるやうに私にも見えたのは、多分にその細君とのいきさつの結果だつたとも思へないことはないのである。彼はその不思議な女の爲に、始終腹の中で泣かされながら、山を見て歩いたのであらうか。そしてそんな女との惱みを人に（例へば私に）告白する代りに、山の話をしてゐたのであらうか。――

さて、彼の細君が來てから、堀戸は辛抱しいしい大方三ケ月も西向の家に同居してゐたのであるが、次第に居辛くなつて來たのに違ひなかつた。だが、それを傍觀してゐる主人の西向は、その同居人へと、自分自身の細君へと、即ち堀戸の二倍分も、遠慮し、氣兼しゝて日を送つたに違ひないのである。彼は今まで決してそんな事はなかつたのに、弟子

たちに音樂を教へながら、時々うつかり樂譜を讀み違ふやうなことがあつた。又、或日は細君がヒステリイの發作を起してゐた爲に、弟子が四五人も來てゐるのに、奥の方で何かどたばたと音する騷をしてゐて、二時間以上も彼が顏を見せなかつたり、もつと甚しい時は、弟子たちが待ちくたびれ、且つ當惑して、一人立ち二人去りして、到頭悉く歸つてしまふ迄彼が稽古場に姿を見せなかつたり、だん〱と彼は人氣を落して行つた。或日、彼は細君が何處かへ出かけて行つた留守の時に、そつと堀戸に言ふには、兎に角斯ういふ狀態では、誠に君に氣の毒でならぬ、それにしても、君のお蔭で斯うして隨分弟子も增え、どうにか斯うにか今日を送つて行けるやうになつたのは、非常に有難いことに思つてゐる、ところで、君もいつ迄こんな所でこんな事をしてゐては、要するに自分と同じ位の人間になるのが關の山だ、君は未だ年も若いんだから、日頃の望みの通り、東京に出てはどうか、この家で御存知のやうな、あゝいふ自分の細君の我儘を辛抱して暮してもらつたところが、君に何の得にもならない、さうと氣はつきながら今までよく見當が附かなかつたので自分は見て見ぬ振をしてゐたんだが、どうだ、東京に出て見ないか、東京では四谷區の斯う斯ういふ所に、自分の懇意な印判屋がある、そこに紹介して上げよう、そこから神田に斯う斯ういふ、割合に誰でも樂に這入れる學校があるから、そこへ行き給へ、その印判屋での食料と、音樂學校の月謝とは、自分が屹度引受けた、その代り、小遣は自分からも手紙でよく頼んでおくが、君もそこの主人と相談して、何かその家の用事をして、それでこしらへてくれ給へ、ところで、いつの時でも金が着いても返事をくれないように、そして若し何か用事があつたなら、さうだね、家へ來る人の中で、さうだね、時計屋の永井君のところへでも二重封筒にして出してくれ給へ、いや〱、遠慮は入らない、その位のことは、君が骨折つて世話してくれた弟子の月謝の代からでも出來るんだから、決して決して遠慮はいらない、あんな、自分の細君のやうな女の犧牲になるのは、自分一人で澤山だ、自分は覺悟してゐる、間違つてあんな者と

夫婦になつたのは、自分の惡運だとあきめてゐるんだから、その惡運を君まで脊負ふ必要はない、いや〱、君、決して遠慮することはない、といふよりも、これは僕の方で頼みたい位なんだ、そして僕のと二人分勉强してくれ給へ。――そして、二人はめそ〱と女のやうに泣き合つたさうである。だが、實を言ふと、その話は、それを堀戸から又聞きした私の目にも、きゆつと鼻の上の邊が痛んで來た上に、幾ら堪へても、到頭涙を零さないでは濟まなかつた。

その時分から、私と市木との坐つてゐる例の京橋のカフエーに、隔日か二日おき位に、必ず堀戸がその小柄な、女のやうな物腰をする姿を現すやうになつた。彼は木綿の双子か何かの縞の着物を、その小さい體にぞろりと下駄が隠れる程に長く着込んで、無暗に帶を、胸の上の邊に高く結んで、お辭儀する時には必ず一寸首を曲げて、兩手を膝の上にそろへて、すべて女のやうな仕方で行動するので　例の目のしよぼ〱した女給仕など、時々蔭で　厭味な人ね、女見たいに、いけ好かない!」と言つた程だつた。

彼の話に依ると、あの山の町の、私の心の愛する藝者ゆめ子は、もう腹の子は十分六ケ月にはならうかと思へるのに、彼がその町を見捨てる時分までは、未だ確に藝者を止めてゐないとのことであつた。が、それに就いて、もう少し詳しいことを、西向に手紙でも尋ねてやりたいが、と私が遠慮しいしい聞くと、藝者の動靜などを聞いてやる手紙を、彼の細君は甚だ喜ばない、それどころか、ヒステリイ婦人一流の邪推心を働かして、そんなことを夫に聞きに來る位だから、屹度彼もその藝者と何か怪しい關係がありはしないかと疑つて、私からの手紙には彼女が嚴重に監督して、彼に返事を出させないやうにしてゐるとの、堀戸の話であつた。この事は、私に糧食の道を絕たれたといふ事を聞いたより

も、もつとの打擊に違ひなかつた。私は閉口して、堀戸を前にしながら、それから五分以上も無言でぽかんとして、考へてゐるやうな狀態に陷つた位であつた。

もうその頃は、私と市木直吉とでは、十年以上もの友達であるやうな、親密な仲になつてゐた。で、幾度も言ふ通りこれ迄に私が發表した彼女とのいきさつを書いた幾篇かの小說に就いて、その事實は色々に違へたり、又筋としても半分以上も小說的空想を加へて書いたりしてはゐるものゝ、その根本の實感さに於いては、愚かに見えるまでに私は私の正直な氣持を表現してゐたので、自然それ等の文章を讀んでゐた、市木は時々冗談のやうにして私に、山の女に就いて尋ねた、そして、私も亦、冗談のやうにして、その實は心に思つてゐることを、彼に明かしてもゐた。「私も一度、今度君がその山の方へ入らつしやる時にはお供したいものですな。」と市木は屢々言つた。「えゝ、どうか。」と私は答へた。「どうせ僕は、彼女に會ふにしても、會はないにしても、一人ではどうしても變に氣恥づかしくて行けないんですから、願つても一緒に行つて欲しいものです。」

さういふ風にして、市木その人も亦、冗談のやうにして、彼自身の目下の境遇に就いての嘆きを時々洩らすことがあつた。彼は彼の生活の元であるところの、相場の方でこの半年といふもの、損に損を重ねてゐるらしかつた。彼の例のぽつり／＼とした言葉で、何日間かに渡つて、聯絡もなしに言つたことを綜合して見ると、彼は相場をやり始めには、細君の金をもつてしたのであるが、損をしたり、得をしたりしながらも、やつぱり計算して見ると、結局損をしてゐた、何故と言つて、二三年するうちには彼の細君の財產は悉くなくなつてしまつたのだから。そこで、彼は細君の斡旋で、彼女の親類や、彼女の知合ひの筋やから、少しづゝ少しづゝの融通をしてもらつては、それで相變らずつゞけてゐた、それも結局損をしてしまつた、何故と言つて、彼は今ではそれ等の人々からも最早や融通してもらへなくなつて、彼自

身で隨分ひどい工面をしなければならない狀態にあつたのだから。然し、それに就いて、彼の意見は、それは儲けたといふことは言へないにしても、考へて見ると、損をしたとは絶對に言へない、そんなことを言つたら罰が當る、何故と言つて、その何年かの間、彼と彼の細君と、そして三人の子供と女中との一家が、米を買つたり、着物をこしらへたりして來たのであるから、つまり借りた金を增やすことは出來なかつたにしても、それ等の金で彼の一家が暮したことになるのだから。結局相場では得も損もしなかつたといふ勘定になる譯ですよ、と彼は言つて、彼の癖で、目の端に深い皺を寄せて、そこだけで笑ふ笑ひ方で笑つた。

　そのうちに、彼は秋の末頃からは、月末と、月の五日と、それから十五日とに限つて、そのカフエーに姿を見せなくなつた。何氣なく私がそんな風に彼の休む日が定つてゐるとは知らずに、どうして來ないのですか聞くと、彼は「いゝえ借金取がこのカフエーにゐることを知つてゐるものですから、」とさう答へた切りで、後はその頃の彼の癖の、旅行をしないか、旅行先は何處がいゝでせう、といふやうな話ばかり、それをぽつり〳〵と嚙むやうに言ひかけた。私は春以來外に出たことがないので、旅の心が甚だ動いてゐたことだつたから、堀戸を度外視して、彼と熱心にいつから行かうといふことの一寸も定らない旅に就いて、そこの壁にかゝつてゐる鐵道省のポスターの日本地圖を卓子の上に下ろして來ては、その上に二人の頭を近々と並べて、中學生のやうに熱心に話し合つた。そこで、私たちの間に例へばこんな話が出たとする。「身延山といふ所へ行つたことがありますか?」「ありません、」「身延山は何だけど、あの隣の七面山といふ山に上ると、甲州の盆地が目の下に見えて、從つて甲州の山々の展望が可成りいゝさうですね。」― すると、それから二日後か、三日後かに、私が彼とカフエーの卓子に向ひ合つて、一寸目禮をし合つた後、二言三言何か話してから、暫く經つて二人とも稍々ぼんやりした時分に、市木は相變らず無言のまゝの狀態で、懷中から二三枚の原稿紙の綴ぢたの

を私の前に默つて突き出すので、私が何だらうと思つてそれを開いて見ると、

「東京發、午後十一時　車中一泊。

「富士着　翌午前四時頃　乘換。

「身延着　同七時頃　三門迄一里二十町、俥或ひは馬車にて三十分。自働車の便もあり。

「身延山久遠寺着　同八時頃。

「七面山　久遠寺より約五里、山頂の七面堂にて一泊。

「七面山發　翌午前六時。

「身延着　正午、晝食。

「身延發、午後一時、馬車、俥、或ひは自働車等の便に依つて、富士川の景を賞しつゝ、その日の夜甲府着の豫定。

「甲府發　翌日正午頃の汽車。

「東京新宿着　夕方。

さつとこんな風に、一字も消字のない叮嚀な書體で、原稿紙に認めてあるのである。

「東京より身延まで、汽車賃八圓十二錢、車中の朝辨當四十錢、茶八錢、計八圓六十錢。

「身延より三門まで　俥賃一圓。

「富士川橋賃往復　十錢。

「身延山晝食　一圓五十錢。(茶代を含む、

「七面山一泊料　三圓五十錢。(前同)

「身延町晝食　二圓。(前同)

「身延より甲府迄の車馬賃。約八圓。(稍々不明」

「甲府一泊料　六圓(茶代、女中祝儀を含む)

「甲府花代　六圓の豫定。

「甲府より東京まで　三圓九十二錢。

「晝食　汽車辨當(茶を含む)四十八錢。

「雜費　十圓。

「計　五十一圓十錢。

そして、最後に一枚の原稿紙に、その旅程の大體の略圖をかいたのが添へられてあつた。

私はこの鹿爪らしい顏の、哲學の研究者で、同時に無口な相場師であるところの男が、いつどんな暇に、どういふつもりで、斯ういふものを書くのかと思ふと、幾度口元に微笑が浮かんで來て、それを抑へるのに苦心したか知れない程であつた。

「この甲府一泊代の次にある、甲府花代といふのは何ですか?」と私は略々見當が附かないこともなかつたが、念の爲に聞いて見ると、

「それは藝者です、多分一人前その位あればいゝだらうと思ふんです、」と市木は笑はずに答へた。

「はあ、藝者代のことですか、」と私も笑はずに斯う言はねばならなかつた。

そして私たちは、この身延から富士川を遡るのは面白い道でせうね、甲府から見ると、この七面山といふ山は實にい

ゝ恰好に見えるさうですね、とか言ひ合ふだけで、結局、いつの時でも、それを實行に移さうとは、何方からも發言したことはなかつた。そして又十日か十五日もすると、「甲州御嶽へ行つて、あそこから下黒平、増富といふ順序で行くと、木賊峠の展望がいゝさうですね、金峰山が直傍に見えて、それから遠くに富士山が眺められるさうです、」「金峰山といふやうな山なら、僕たちにも上れないことはないでせう、」「いや、金峰山とか、國師とか、甲武信とか、却つてあの位の山が一番上りにくいと言ふぢやありませんか、」そして、そんな話の出た後は、屹度その三日か五日の後には、市木は例の道順と、費用と、それから略圖とを叮嚀に原稿に書いたのを持つて來ては、それを默つて卓子の私の目の前のところに置いた。

その頃、堀戸はだん／＼私たちのカフエーへ顏を出す度數が少なくなつて、初めのうちは大抵一日おきに來てゐたのが、二日おきになり、三日くらゐ中をおくやうになり、近頃では一週間に一度位しか來なくなつた。無論、其間私の家に顏を出すことなど滅多になかつた。稀にカフエーで會つた時、私が、

「どうです、學校の方は？」と聞くと、

「えゝ、大して面白くございません、」と餘りはつきりしない聲で言つた。

初めのうちは、東京に來たことだけで、而も田舍にゐた頃には思ひも寄らなかつた、そんな音樂の學校に這入つたといふことだけで、如何にも有難いことのやうに喜んでゐたのに、そんな風な口をきくやうになつたのは、僅の間に隨分變つたものである。それは所謂墮落したのかとも思はれるし、或ひは又進歩したのかとも考へられた。で、それとなく注意してゐると、彼は時々音樂を一所懸命にやつたところが、餘程の天才でゞもない限り、それで身を立てるといふことは、田舍で西向さんのやうにやれば兎に角、東京で暮して行くなんて、迚も見當が附かない、どういふものでござい

ませう、と彼の年頃の、彼の境遇の青年によく見るやうな、前途に對する不安を洩らしたり、かと思ふと、印判屋の半分居候のやうな境遇に對する不平をこぼしたり、さては東京で一番安い下宿生活をするには、どの位の金がいるでございませう、といふやうなことを尋ねたり、要するに、可成り動揺してゐるらしかつた。

或晩、もうそれはいつの間にか冬の季節が來てゐたのだつた、私と市木とが向ひ合つてゐる四角な卓子の、空いてゐる一方の側の椅子の上には、鮮の入つた瀬戸の火鉢が載せてあつた、私たちはいつもの通り默つて、私は紅茶ばかり馬のやうにがぶ〳〵飲んでゐたし、市木は、一日にどうしても敷島を四袋すふと言つてゐた通り、煙突のやうに煙を吹き出してゐた。そこへ新しく私に紅茶を運んで來た、昔ながらの目のくしや〳〵した女給仕が、次手に火鉢の火を調べながら、

「此頃はあの、何さんと仰有いましたつけね、女のやうな人、さうさう、堀戸さん、ちつともお見えになりませんのね、」と言つた。

「あゝ、來ないやうだね、何處かもつといゝ所が見付かつたんだらう、」と私は言つた、「こゝは堀戸君のやうな若い人には向かないよ。」

「ぢやあ、あんた方は年寄り？」

「さうだよ、まあ中老だね。こゝはその中老のうちでも、僕等のやうに一風變つた人間でなければ來ないんだよ。」

その時まで相變らず、默つて煙をぷか〳〵と吹き出してゐた市木が、私に向つて、

「堀戸君が二三日前に僕んとこへ來ましたよ、僕が未だ寢てるうちでした。」

それを聞いて私は、此頃堀戸は私の家に一寸も來ないのに、市木の家に行つたことが、多少不愉快に思へたが、

「さうですか、相變らずですか」と聞いて見た。

「えゝ、相變らずでせうな。此頃、然し、あの人は少し遊蕩でもするやうですな、」と市木が言つた。

そして、それからも幾らか堀戸に就いての話が出たやうに思ふが、何分相手が市木のことなので、大して發展しなかつた。そのうちに私の方から話題を變へて、彼が卓子の隅に載せてゐた、可成り容積張つた、何かの買物の紙包らしいのを指して、

「今日も亦、何か玩具ですか？」と聞くと、

「えゝ、」と彼は答へた。

何故私が買物の包を見てそんな事を聞いたかといふと、彼は三日に上げず、それに此頃の彼は隨分貧乏らしいにも拘らず、始終さういふ買物の包を下げてゐて、それがいつの時でも彼自身のものでもなければ、彼の細君のものでもなく、子供への玩具だつたからである。のみならず、彼は上の九歳になる子は言ふ迄もなく、二番目の七歳になる子、三番目の四歳になる子などを、別々に、例へば私が自分の所有の何本かのステツキを、その時その時の氣の向き方で、その中から選び出した一本づゝを持つてくるやうに、彼は任意にその第何番目かの子を連れてカフエーに來ることがあつた。子は男の子も女の子も皆彼に似てぎよろりと光る大きな目を持つてゐた、そして二番目の女の子を除いては、子供ながらに彼に似て、みんな口數の少ない、音無しい子等であつた。彼はそんなに可愛がつてゐるやうに見える子供を連れてゐる時でも、やつぱり無口であることは、子の代りに買物の荷物を携帶してゐる時と一寸も變らなかつた。

「君は、」と或時彼は私に言つた。「君の小說で拜見しますと、厄介者がおありにならないやうですな。」

「厄介者つて……子供のことですか？」

「さうです。」

「えゝ。子供があるといゝでせうね、」と私は言つた、それは未だ夏の時分だつたので、「子でもあれば、僕も蝿なんか取つて日を暮すことは止めるでせうがね。」

「ですけど、坊さんの言ひ草ぢやありませんが、此奴は悟りの邪魔になりますよ。」

「ぢやあ、やつぱり蝿を取つてゐる方がいゝんですかな、」と私が半分笑ひながら言ふと、

「さうですとも、」と彼は相變らずにこりともせずに、「蝿を取ることでも、三年もつゞけてゐたら、石の上の達摩大師と同じことで立派な修養ですな。」

「所謂子は三界の首械といふ譯ですかね。」

「子に限らず、物を所有するといふことが抑も皆いけませんな。それも大事なもの、高價なもの程いけないやうですな。」

「なる程、さういふ點で、子は我々の所有品の中では一番大事で、一番高價なものでせうね。」

「君のステツキも中々高價らしいですな、」と市木はそこで初めて、その口の端に皺を寄せる笑ひ方で、少しばかり笑つて言つた。

「如何にも。このステツキでも、成程悟りの邪魔になるやうですね。ハヽヽヽ。」

だが、子の話になると、私の心は二重の物思ひに沈まねばならなかつた。それは私に、今や第二番目の子を腹に持つて、山では最早や人々が炬燵に親しむ頃であらうから、お座敷の炬燵か、我家の炬燵か、兎に角その傍で行儀よく俯向いて坐つてゐる彼女の肖像が浮ぶのである、それは又、子を持つて難儀してゐる彼女と共に、子のない故に家の空氣が

荒つぽくなつて、それが市木の所謂逹磨の道かも知れないが、いつも冬の景色にあるやうな私自身の家庭の境遇を思起させるのである、私の一番上等のステツキでも、その外どんなよい持物でも、それ等が足下にも追付かない程高價なものであるところのものを、私たちが持たないといふ寂しさに襲はれねばならぬのである。
「だが、君にはこんな厄介者の代りに、君の小說によく出て來るゆめ子といふ人があるぢやありませんか、」と或時哲學者の市木が言つた。「あれは君のやうな考へ方の人には、つまり私は君を浪曼派と見てゐるのですが、如何です？　あの人こそ君には最も大事な、最も高價なものぢやないのですか？」
「恐れ入りますね、」と私は、多分彼の笑ひ方に似てゐたに違ひないやうな、微笑を浮べて言つた。然し、實のところ、私は彼に言はれる迄もなく、私はその通りに考へてゐるのである。「子供らしいことを言ふやうだが、子は死ぬこともあるだらうし、所謂色戀なら醒めることがあるだらうし、夫婦となれば別れることもあるだらう。だが、私が山の彼女を思ふやうな思は、彼女が一ダースの子の親にならうが、人の妾にならうが、或ひは彼女が死んでしまはうが、私自身が墓に旅せぬ限り、消えることはないであらう。

或日、何月振りかで山の西向觀山から手紙が來た。
「長々御無沙汰して居りますが、お變りはありませんか。今年は隨分寒い冬になりさうで、もう一ケ月もしたら湖水も凍つてしまふでせうと存じます。山の雪もいつもの年から思ふと、ずつと多いやうに思ひます。
「堀戶君にお會ひですか。私も一度東京に行きたいと存じて居ります。

「昨日の新聞にこんなのが出て居りましたから、切拔いてお送りいたします。」

その切拔といふのは、一段六七行の小さい紙片だつたので、封筒の底にくつ附いてゐて、中々見付からなかつた位だつた、田舍新聞によく見る通りの、磨り減つた五號活字で、それも何か外の記事の間に、それだけの五行分か六行分かを、二本の線で仕切りをしたもので、

「藝妓廢業　諏訪町二業藝妓、夢の家の娘で、ゆめ子事、丸見あい（二十三さい）は昨日限り廢業届を出した。原因は
まめ太鼓の爲なり。」

と讀まれた。この拙い、不愉快極まる文章の記事ではあるが、私は長い間引破ることも忘れて、これ迄私は人の噂や、或ひは堀戸や、西向からの手紙で既に聞き知つてゐたことで、決してそれを疑つてゐた譯ではないのだが、今この不鮮明な、磨り減つた五號活字の表現に依つて、最後の宣告を聞かされたやうな氣がした。まめ太鼓とはどういふ言葉であるか、兎に角腹が大きくなつた事を言ふのであらうか。更に私に一種の感慨を持つて來たのは、泥棒や身投やの新聞の記事並に、彼女の名前の下の（二十三さい）といふ註であつた。私が初めて彼女に會つた時、彼女は二十一であつた、だから、今二十三、そしてもう四十日もしたら、年が明けて二十四になるのは當然の事に違ひないのであるが、女の二十一歳と二十四歳とでは、何といふ違つた感じであらうといふ感想ばかりでなく、その新聞記事にもある通り、夢の家の娘分でもあり、同時に殆ど主婦の位置でゞもある彼女は、最早二人の子も持つて、二十四歳にもなつて見れば、今度藝者を止めたら、もう永久に藝者になることを止めはしないだらうか、といふ心配であつた。それに、昨日までは、せめて呼ばない迄も、その町へ出かけて行きさへすれば、夜の町を褄をとつて歩いてゐる彼女を見るかも知れないと思つて、一縷の希望を抱いてゐたのであるが、今日からは、彼女はもうその大きな腹を持つて、彼女の家を一歩も外に出な

いだらうと思ふと、折角山の國に行つても、悲みを買ひに行くに過ぎない譯だと私は嘆息しなければならなかつた。

私はその晩、いつものカフェーで市木に會つた時、出來るだけ自分を抑制した、直接法でない言ひ廻し方で、彼に今日の打撃の感じを打明けた。すると、彼はその持前の、口數の少ない、出來るだけ簡單な言葉で、私の言ふことに合槌を打つた。然し、言ひ終ると、私は又自分の言つたことに甚だ極りの悪さを覺えたので、彼がいつ迄經つても、五分間目に一度か、十分間に三度位の割合で、ぽつりぽつりと忘れた時分に、突然「君の永遠の女性も、新聞記者に掛つちやかなひませんな。」とか、「ゆめ子事、何の某（二十三歳）は不愉快ですな。」とか、「まめ太鼓とは可笑しな言葉ですな。」とか言ふので、私はその話題を變へる爲に、心の中では決して不愉快ではなかつたが、隨分心を苦しめなければならなかつた。すると市木は最後にこんなことを言つた「考へて見ると、君と私とでは位置顚倒ですな。君の煩悶の方が哲學的で、私の苦勞の方が小説的ですよ、今のところ……」

私は、いつ頃からか、彼の笑ひ方が傳染してしまつて、その時も口元で笑ふことで答へた。

「どうです。」と彼は又二三分經つてから、多少附元氣に聞える聲で、「一度思ひ切つて、机上のでなしの旅行をしようぢやありませんか？」

「行きませう、是非。僕もつく〴〵此頃旅に出たいと思つてゐるのです。行くとすれば何處がいゝでせう？」

「行くとすればやつぱり山がいゝでせう。」と彼は言つた。「遠慮は入りませんよ、信州に行かうぢやありませんか？」

「えゝ。」と私は多少恥かしさうに、然し肯定の意味で言つた。「もう山には雪が深いでせうし、今年は殊に寒さが厳しいといふことですが……」

「然し、雪國とか、例へば諏訪のやうな謂はゞ氷の國とかに、夏行つたつてつまりませんよ、冬の國は冬に行つた方が

面白いぢやありませんか。」

「それやさうですね、」と私は出來るだけ嬉しさを隠して合槌を打つた。

それから確か一週間を經たない日のことだつたに違ひないのである、何故と言ふと、その晩　私たちはいつもの卓子の上に、市木がこしらへて來た、信濃行の旅程と費用との見積り書を置いて、今迄になく珍しく二人とも氣が合つて、それに就いて二人で意見を戰はしたのを、私は覺えてゐるからである。

「東京飯田町發　午後十一時。

「木曾福島着　翌午後一時或ひは二時頃の豫定。天候の都合に依つて、鹽尻下車、約一時間半附近散步。日本北アルプス展望。……

……………

例に依つて、例のやうな、彼獨得の、恐らく先づ文案をこしらへて、それを小學生のやうな丹念さで淨書するのであらうと思へるやうな、叮嚀な書體で原稿紙に書いたものを、私たちは遠足に行く前の小學生のやうな熱心さで讀み、尋ね、教へられして、時の移るのを忘れてゐた。彼のその計畫書に依ると、先づ車窓から冬の木曾街道を樂みながら、木曾福島に行つて一泊する、それから松本へ戻つて、輕便鐵道で大町まで行つて、そこで一二泊する、「途々、穗高、鎗、或ひは有明、それから大町に行けば白馬、みんな雪で眞白でせうからね、見てゐて目が痛くなるやうな景色に違ひありませんよ。君は机上の山嶽通だから、知つて居られるでせうが、有明といふ山は實に恰好のいゝ山ださうですね。信濃なる有明山を西に見て心ほそのゝ道を行くめり、といふ西行法師の歌がありますね、西行法師などと言ふ人は隨分步いたものなんですね、」と彼は私が初めて見た程、興奮して、雄辯になつてゐた。さて、大町から松本に歸つて、淺間温泉で

一泊するか、都合に依つたら妙高山の麓の赤倉温泉に一泊するか、然し多分赤倉は又の機會にして、愈よ諏訪に行つて、

「諏訪着　午後五時十分着。滯泊日數任意、宿泊料不定、花代不定。

「飯田町着　午前五時二十一分。」

と認められてあつた。

「長い間、君の小説でだけ見てゐた人を、ゆめ子君を愈よ見る機會を得ましたかね、」と市木は珍しい雄辯さでつゞけた。「あゝ、さうさう。その人は今藝者を止めてゐるんでしたつけな。然し何にしても、君の憧憬の國と、いや、私にも憧憬の國なんです、そして君の憧憬の町に行けると思ふと、實に愉快ですな。」

だが、そんなに迄話が進んでゐながら、では愈よいつ出發しようといふ相談にまで至らなかつた。或ひはその晩、私たちがいつもの歸る刻限である、十一時半まで坐つてゐても、それが定らなかつたかも知れなかつたが、然し、多分相談が定つたかも知れなかつたのである。ところが、私が彼と向ひ合つて、私の位置が斜めに表の入口の方を見る位置にあつたので、私が何かの話半ばに、何氣なしにふと入口の方に目をやつた途端、そこの硝子の扉の向うに、變な、見知らぬ男が立つてゐて、その男が頻りに私を手招きしてゐるのを發見した。私は初め、それが私ではなくて、市木を呼んでゐるのだらうと思つたので、彼に注意して見たが、彼もその方を見て知らないと言つた。その男は私たちが彼の方を見ると、急に顏を引込めたり、又その方が氣に掛つて私が顏を上げると、頻りに手招きを繰返してゐる。もう可成り夜更のことではあり、そんな人通りのない裏町の事であり、そんな硝子戸に見知らぬ男の暗い、陰の多い顏がちら〳〵と覗いて手招きするのでもあり、私はひどく氣味惡さを覺えたが、どうやら私を呼んでゐるらしいその男の手招きを見なが

ら、知らぬ顔をしてゐる譯にも行かなかつたので、勇氣を出して、戸の外に出て行つた。

私が扉を内から開けると、その男はそこから一間ほど離れた外にゐて、尚も手招きをつゞけた。それは鳥打帽を被つて、白地に夏羽織を着た、しかし一見色の黒さうな、目のぎよろりとした男だつた。而も先程からの彼の行動が、手招きに依つて、だん〳〵私を何處かへ誘ひ出すやうにも思はれるので、私は更に一層氣味惡くなつたが、思ひ切つて一二歩その方に歩き出した瞬間に、ふと刑事ぢやないかな、といふ氣がした。だが、何の用があつて、刑事が私に？　と思ふと、益々氣味惡くなつた。

その男は果して刑事で、私に鑑札を見せて、カフエーから二三間離れた家の軒かげに私を連れて行つて、割合に叮嚀な言葉で私を不意に呼び出した失禮を詫びてから、言ふには、實はあそこのカフエーの二階で大勢の者が賭博をしてゐる、今夜彼等を一人殘さず捕縛するつもりで、もうすつかり手筈を終つたのであるが、その時、罪のないあなた方に怪俄でもあつてはいけないから、一寸注意しておきたい、就いては、あなたの友達の市木さんにも、あなたこれから一度あそこへ歸つて、譯を何にも言はないで、いつも歸る時のやうにして誘つてあそこから出てほしい、あなた方が出るのを合圖に攻めかゝるから……

私がどんなに驚いたかは言ふ迄もない。流石、探偵だけに、話の最中に、私の名も、市木の名も既に知つて、それを出したのも氣味惡かつたし、話最中に私は氣が附いたのであるが、彼方の家の蔭にも、此方の軒の蔭にも、丁度米騷動とか何とか言ふ、あゝいふ場合の警官のやうに、帽子の顋紐を下ろして、サーベルを音しないやうに、要所々々を紐で縛つて、更に物々しく見えたことには、いづれも皆脚絆に草鞋穿きであることだつた。どんな同盟罷業とか、政治騷動の時にでも、こんなに彼等が私に所謂武裝して、攻撃的な樣子に見えたことはない、さういふのが、蛔のやうに何人と

なくその邊をこそ〳〵と、戰爭の始まる前の氣配で動いてゐるのであつた。

私は明らかにがた〳〵震へながら、一刻も早く市木と一緒にこの場を逃れようと思つて、刑事に挨拶して一二歩行きかけてから　ふと思ひついて、後戻りして「あの、カフエーの番臺の男や、給仕女にも何か知らせてやらなければいけなかないですか？」と聞くと、

「シッ！」と刑事は私をたしなめて、「彼奴等(あいつら)もぐるですから、決して彼奴等に言つちやいけませんよ。あなたは唯默つて、市木さんと一緒にあそこを出て下さい。」

私はカフエーに歸つて行きながら、成る程、さういへば、今し方あの刑事が覗いて私を手招きした時といひ、さては考へて見ると、堀戸が初めて私に會ひに來た時、やはり扉から覗いた時といひ　あの番臺の男が變にぎよつとした恰好といひ　色々な事を思ひ出した。私はもう恐くなつて、その入口から足が中に進まないものだから、扉を半分開けて、「市木君、市木君！」と呼んだ。すると、市木は變な顏をして戸口の方に出て來た。が、市木の後を追驅けるやうにして、例の番臺にゐた、白服の男が私の方へ驅けつけて來たので、私ははつとして、思はず表の方へ二三歩後退りした。そして市木が一歩そのギイと鳴る扉を先に出て、つゞいてそれの閉まらないうちに、白服の男が出て來るのと、何處に隱れてゐたのか、先の刑事が突然飛び出して來て、その白服の男の手を掴へたのと、文字通り間髮を入れなかつた。

その時が、丁度譬へば爆烈彈で言ふと、火を點けた時であつた。もう武裝した警官隊は八方から攻撃を開始したらしかつた。一瞬間後の、そのカフエーの二階の騷と物音とは、私の樣な氣の弱い者には、事の譯を知つてゐなかつたら、腰を拔かしたかも知れなかつた。表口から飛び込んだ五六人の警官、いつの間にか兩側の屋根の上に現れた數人の警官。――そして、多くの賭博者等は、普通の心理として裏の方へ逃げたらしかつたが、裏の方は私たちが見てゐた表の

方より、一層警戒が嚴重だつたに違ひない。表の屋根からは一人飛び下りて捉まつたものと、カフエーの土間の方へ出て來て、捉まつた者と、例の女給と、そして先の白服の男と、合はしてたつた四人だつた。

それから、私たちは、二人とも各々足を震はせながら、その場を去つて、京橋の橋詰のところで、二人とも氣拔けしたやうな狀態で、「ぢや、さよなら、」と云つて夢中で別れたのであるが、その晩、そのカフエーの二階で賭博してゐて捉まつた中に、かの市木の中學友達で、蠅取杖の發明者で、今は行方不明になつてゐた筈の、赤木某がゐたといふことを、私は後になつて聞いて、一層驚いたことがある。赤木某といふのはどんな男だらう、とその話を聞いた時、一時間ばかりといふもの、私はいろ／＼に想像したことを覺えてゐる。

そして、十二月の二十日過のことであつた、私の家の玄關に突然西向觀山が立つたのである。一見して、私は彼がひどく憔悴してゐるのに驚かされた。裝(なり)は流石に私が彼に最後に別れた時分とは違つて、秩父大島か何かの、新しい對の着物を着て、手に傘杖などを持つてゐたが、その肉體から言ふと、例へばこの前の時は物質的の營養不良の爲に衰へてゐたのだとすれば、今日の彼は何か心の非常な病氣の爲に衰弱してゐるやうに思はれた。

「いつ來たんです？」と私は座敷に通してから、誰にも同じやうなことを尋ねた。

「昨日の朝五時に着きました、」と彼は答へた。

「ぢやあ、昨夜は四谷の印刷屋さんの家に？」と聞くと、

「えゝ、その……一寸、」と彼は曖昧な返事をした。

「堀戸君に會ひもしたか？」

「えゝ、その事なんでございますが、」と西向は久し振で、その恥かしさうに腕で頸を卷くところの當惑さうな表情を私に見せながら、「先生、市木といふ方を御存知でございませう。昨日私は此地に參つて、四谷へ行きましたところが、堀戸が半月程前にそこへ引上げて、麻布の斯う斯うした所の市木さんといふお家に御厄介になりに行つたといふことを聞いたのでございます。」

「へえ！」と私も少し驚いて、「何でも堀戸君は近頃大分遊ぶといふやうな話も聞きましたが……」

「えゝ、それはあの男、田舍にゐる時分からなんでございます、」と西向は別に驚かない調子で言つた、「もつとも、此地へ來てからは少し激しくなつたらしいのですが、そんな事は兎に角、學校まですつかり怠けてしまつたのは困つたものでございますよ。やつぱり東京は恐いところでございますな、堀戸君なども、田舍にゐた時分から遊びはしましたが、さう、その爲に勉强を怠るといふやうなことはございませんでした。」

「それで、君は市木君のところへ行つて來たんですか？」と私は聞いた。

「えゝ、此方へ參ります前に、一寸伺つて來ましたんですが、市木さんにはお目にかゝりませんでした。未だお寢みになつて居られましたので……。先生は一度も入らしつたことがないんださうでございますね、隨分廣いお家でございますよ。二階が確か六疊と八疊と四疊半とになつてゐるとか聞きましたが、私はその六疊のお座敷で、堀戸と會ひましたんです。堀戸は弱つて居りました、彼も氣のいゝ男なんでございますからね、私に會はす顏がないと言つて、あの男は女のやうな形をする男でございましたでせう、私の顏を見ると、袖を顏に當てゝ泣き出したんですよ。學校を怠けましたのは、もう三ケ月も前からなんださうでございますが、此の頃ではもう月謝も何も收めないもんですから、行かうに

も行けないんださうでございますよ。初めは何でも四谷の家の職人に誘はれて、その、此地の遊びを覺えたものらしいんです。ところが、覺え出しますと、職人の方では休の日が定つて居りますから、よく〳〵の事でもなければ、さう出たくても出られませんが、あの男はまあ言はば學生見たいなものですから、つい暇があるでございませう。然し、それに何よりも小遣に困つたらしいですな、元々小遣だけは自分で稼ぐ約束になつてゐたものですから……」

西向は話の要所々々に來ると、まるで自分自身のことのやうに、恥づかしさうな樣子をして、更に話し續けるには、堀戸は根が小器用な男なので、田舍にゐた時分にも、西向から教はつて、多少判を刻む眞似事くらゐは出來たので、彼は四谷に來てからは三文判とか、安物判とかを刻んで、小遣を稼いでゐた、ところが一旦遊びを覺えてからの彼は、もう音樂を稽古することも、學校へ行くことも、悉くそつち除けにして、朝から日が暮れる迄、外の本職の職人が驚くほど、一所懸命に判を刻み出した。それは、まるで、音樂を修業に來たのか、判を刻みに來たのか、主客顚倒の形になつてしまつた位で、即ち彼は毎日毎日、日のある間は小遣錢を稼ぐことに、それは取も直さず夜の遊びの資にする爲に、出來るだけの速力で、判を刻んだのださうである。そのうちに、堀戸自身もその家に居辛くなり、外の職人たちにも厭がられ、無論遊びの相方の女にもはつきりと輕蔑せられ出して、どうにも斯うにもやり切れなくなつた結果、これ迄にも二三度尋ねたことのある市木を訪問して、賴んで居候に置いてもらふことになつたらしいのである。

「堀戸君はこれ迄にも時々市木君のとこへは行つたやうですが、僕のとこへはちつとも顏を見せないんですよ。妙ですね、」と私が言ふと

「私も一寸そのことを言ひましたんです、」と西向が例のきまりの惡さうな表情で言ふには、「すると堀戸が言ひますのに、どうも先生は何となしに恐いやうな氣がして、お伺ひしにくいんださうでございます。先生、一體、市木さんとい

ふ方はどういふ方なんでございます？」

「どういふ人つて……一寸、一口に言へませんね、」と私が當惑して言ふと、

「兎に角、御深切な方に違ひございませんね。いろ／＼誠に有難う存じます。今日は今も申しました通り、お目にかゝれませんでしたが、一度先生がお出でになる時にでも、お供さしていたゞけませんでせうか？」

「えゝ、僕も一度遊びに行つて見たいと思つてますから、その時一緒に行きませう。で、堀戸君はこれからどうしようと言ふんです、又學校をやり直すつもりでもあるんですか？」

「さあ、今日、私が會ひました時には、もう國に歸りたいやうなことを言つて居りましたんですが……」

そして「君の方は？」と私は幾度彼に聞かうと思つたか知れなかつた、が、私が思ひ切つて言はうとする時に限つて、彼はそれを感じて避けようとするのか、それとも偶然にさうなるのか、屹度何か彼か新しい話に移つた。

「先生、四五日前の晩のことでしたが、私は胸のくしや／＼したことがありましたので、諏訪へ行きまして、久し振りで湖心亭で一杯飲んで、もう十時過ぎでしたが、岡谷に歸る汽車の時間の都合で、ぶら／＼と町を歩いてゐたと覺召し下さい。大分酩酊したものですから、あの角屋の前を北へ歩いて行きまして、夢の家の前から、發電所の山へ行く道の方へ、醉を醒ますつもりで、一二町も歩いて行つたりしました。あそこは御承知の通り、諏訪の町と湖水とが直左手に谷底のやうに見えるところでございませう、ですものですから、寒い風がビユウ／＼吹いて來まして、如何に酩酊してゐましても二町と歩いてゐられないのです。で、ぶる／＼震へながら、又町の方へ行き返して來ますと、その時どうしたのか夢の家の入口の戸が開いて居りましてね、あそこの家は先生も御存知かも知れませんが、變な建て方でして、門の中が一寸した庭になつてゐて、直、丁度芝居の屋敷のやうに、二間間口ほどの、四枚の障子の篏まつた部屋が見えます

でございますね、あの障子は、先生、子供がゐるからでございませうが、破れてゐないのを見たことがない位ですが、丁度そこを通りました時、あのゆめ子さんの男の子が、その破れた障子に捉まつて、あーあー、と何だか頻りに分らないことを言つて、障子の破れから表を覗きながら叫んでゐるのでございます。多分ゆめ子さんが何か用事で外にでも出て留守なのか、おばあさんがゐないので呼んでゞもゐたんですか、あーあー、とまるで呂律の廻らない、失禮な話ですが、動物見たいな聲で叫んでゐるのです。いえ、話はそれ切りのことなんですが、あの子は、先生、もう明けて四歳になるんださうでございますが。後で人に聞いたんですが、未だあのあーあーといふ言葉より外に、何も言へないんださうでございますね。……」

やがて彼が歸り仕度をした時、私が何氣なく、もう一度「君は何處にゐるんです、あゝ、さう〳〵、四谷の家でしたね？」と聞くと、

「えゝ、一寸、その……」と彼は狼狽したやうに言つて、「又近いうちにお邪魔に上ります。あの何つてもいゝでせうか？」と言つた、そしてどういふつもりなのか、「それからあの堀戸も一度近いうちにお詫に上ると申して居りました。」

そして、彼は歸り際に、玄關のところで、「あの、これ……」と言つて、土産物のやうな新聞包を置いて、逃げるやうに歸つて行つた。それは例に依つて、彼一流のもので、可成り上等の半巾が半打と、白粉が二瓶とを、別々に白紙で包んで、水引を掛けたものであつた。

すると、その翌々日、ひよつこりと堀戸がやつて來た。彼は初めの二三分間は、餘り長い間尋ねて來なかつたことや、私に内所で市木の家に居候に行つたことや、いろ〳〵と私にきまりの惡いことがあるので、その小柄な、女のやうに振舞ふ身體を、一層小さくして恐縮してゐる樣子であつたが、直に持前の、變に昔憮しやかな圖々しさと雄辯とを發

押して、

「先生、ゆめ子さんは到頭引いたさうですね、もつとも、もうお腹の子は七ケ月とか八ケ月とかになるさうですから、來年の夏頃になつたら又出るでせうと思ひます。えゝ、それや屹度出ますよ、何しろ未だ若いんですし、それにお母さんといふ人が隨分嚴しい、何方かと言ふと因業な人ださうですし、それやもう屹度出ますよ、」などと、彼は私を喜ばせるやうな事を言つた。

「西向君にそれから會ひましたか？」と私が話題を變へるつもりで聞くと、

「えゝ、今日も一寸會つて參りました。」

「何處にゐるんです、やつぱり四谷ですか？」と私は大した意味もなく、又そんなことを聞いて見た。

「いえ、あの人はあんな遠慮深い人ですから、今は新宿一丁目の甲信館といふ宿屋にゐるんでございますよ、それには、もつとも、上さんが追驅けて來るかも知れないといふので、半分隱れてゐるつもりでもあるんでせうけど……。然しね、宿住居ではとてもやり切れないから、今日あたり、前に此地にゐた時に二階を借りてゐた、牛込の家とかへ空き間を探しに行つて見ると申して居りました。」

「細君が追駈けて來るつて……？」と私は驚いて、「西向君は、ぢやあ、細君を嫌つて逃げて來たんですか？」

「えゝ、もう前の家へは歸らないつもりなんださうですよ、迚もやり切れないつて言つて居りましたが、成る程、あのたゞさんぢや、辛抱が出來ないと私も思ひますね。此頃では、音樂のお弟子なんかもずつと少なくなつてしまつたといふことですから、西向さんも決心したんでせうね、あの音無しい人が、そんな思ひ切つた決心をしたんですから、もうよく〳〵のことに違ひございません。」

「ぢやあ、又當分東京にゐるつもりで來たんですね。」

「いゝえ、ところが、此地(こゝ)ぢや、まさか田舍のやうな譯には行きませんでせうからね、西向さんは斯ういふんでございますよ、あの上さんは西向さんが東京へ來たと知つたら、一人で迚も田舍になぞ引込んでゐられる人ぢやありませんし、それにね、」とそこで堀戸は女のやうに袖を口に當てゝ、一段と聲を低くしながら、「これはこゝだけの話ですが、あの上さんは近頃又旅廻りの手品師と出來たらしいんです、松玉齋天坊とかいふ手品師でして、何でもこの二三ケ月、あの邊の田舍を彼方此方と興行して廻つたり、傍ら催眠術の治療とかをして歩いて居た男なのださうです、それが來年から東京の方へ歸るとか云ふので、その男と一緒に西向さんの上さんは、西向さんが今迄通り岡谷にゐようが、又東京に出ようが、それにはかまひなく、駈落するつもりらしいといふのです。で、西向さんは一度東京に來て、東京に住むと見せかけて、直に田舍へ歸るつもりにしてゐるらしく、現に又元の發電所勤めに戾るつもりで、××電氣會社と言つて先生、近頃新聞の廣告に株主の募集をしてゐるのがありますでせう、あそこへ這入る口が殆ど定つてゐるんださうでございます、その方に私も、ひよつとすると行くことになるかも知れません、西向さんが私の事を心配してくれて、私さへいゝと言へば大抵行けるやうに、或人に頼んでおいてくれたんださうです、西向さんの音樂の弟子で、それでその會社の今度發起人の一人になつてる人ださうですから、それやもう大抵大丈夫なんです。……」

「それや結構ですね、」と私は言つた。が、私が私の愛する西向に起つた色々の事件や、境遇やに就いて、十分に考へたり味はつたりする暇も與へずに、この二十歲の、驚くべき老熟(ませ)た口をきく雄辯家は、更に話頭を一轉して、

「先生、話は違ひますが、市木さんのお家といふのは又實に變つて居りますね、」と彼は始めた。「お世話になつてゐて、こんな事を言ふのは何ですが、お家の中は隨分苦しいやうでございますよ。東京の家といふのは、みんなあんなもので

せうかね、もつとも先生のお家なんぞは別物でせうが、市木さんのお家なぞ、贅澤なものをお上りになつて、子たちなぞにも氣儘のしたい放題にさしてあつて、一寸見ますと、迚も田舍の萬や十萬の金持位では夢にも見ないやうな派手な暮しをして居られるやうですが、此頃あそこに毎日お客が五人見えますか、十人見えますか、隨分來るやうですが、それが借金取でないものは一人もないんでございますよ、いえ、實際です、俗に、都會では借金で暮しが立つといふことをよく申しますが、まつたくその通りでございますな。それで、市木さんは御存知の通り寢坊でせう、然し主が寢てゐると聞いた位で歸る生優しい借金取は一人も居りませんから、市木さんのお起きになる時分には屹度二人や三人もう待ち構へてゐると言つた按排ですよ。ところが、市木さんは御存知の通り、あんなむつつりした方ですから、さて借金取に會つたと言つて、『今は都合が惡い』とか、『もう少し待つてくれ給へ』とか、『何とかするよ、近いうちに』とか言ふだけで、その外に無駄口なんて一口もおきゝになりませんからね。そして、あの人は起きて、借金取を一通り返すと、それから夜の十二時頃まで外へ出られた切りなんですよ。後のは皆お上さんが談判されるんです。これは又、市木さんとは反對で、始から終まで喋り續けて、何とか彼とか巧く誤魔化して行かれる手際は、これは確に千兩の値打がありますね、先生、それや巧いもんでございますよ。けれども、流石にもう餘り長く持ちさうにはありませんね、一つぐれたら、それこそ一遍に五組や六組の差押へが重なるでせうと思ひますよ、この暮がどうしても危いと私は睨んでゐるんでございますが……。先生、市木さんは相場を盛んにおやりになるやうですね、もつとも、此の頃はそれも向うの方から斷られて、おやりにならないやうですが……。」

そして、到頭、その年も暮れて、あけて一月一日の夜の十一時半に、私たちは新宿から汽車に乘つたのである。初めそれは暮の三十日の夜の發にしようといふことになつたのであつたが、私の色々の用事の都合で、二日日延べすることを止むを得なかつたのである。が、市木直吉は、何にしても三十一日は家にゐられないといふ譯で、西向の泊つてゐる新宿一丁目の甲信館といふ宿屋に來て居た。彼は詳しい事は何にも言はなかつたが、彼の細君と子供三人とも、やはり同じ日に國の岐阜縣の方へ年越しに行つてしまつて、その留守番を堀戸がすることになつたのであつた。だから、二日の晩、山に向つた私たちといふのは、市木と、西向と、私との三人なのである。西向が信州に歸つて、××電氣會社の口を、自分のと堀戸のとをしつかりと定め次第、堀戸を電報で呼ばうといふ約束になつたらしいのである。ところで、私と市木とは、言ふ迄もなく、市木が先に定めた見積り書に依つて、木曾福島から大町へ、大町から松本へ、そして松本から私の愛する諏訪の町へと、唯何といふ目的もない旅に出るといふ譯なのであつた。「私は然しその中で氣に入つた町があつたら、一月でも二月でも坐つてゐるつもりですよ。」と市木が言つた。「いや、僕も、僕も當分東京に歸りたくないなア。」と私も言つた。

そして、一日の晩、私たちが新宿から汽車に乘る時、堀戸が一人プラットフォームまで送つて來た。その時、堀戸は私たちとは殆ど話する間もない程、市木と頻りに何か小聲で話してゐた。多分、市木が家にゐる事を恐れた暮の三十一日に、彼の家に起つたことを、留守番の役目として堀戸が報告してゐるのであらう、何でも、市木の家は到頭差押處分に遭つたらしいのである。といふのは、汽車が出てから、私が彼に、

「家の方は都合はよかつたんですか？」と聞くと、

「なアに、豫定の如くやられたんですよ。」と彼は例に依つて、簡單な言葉でさう言つた切りだつた。

「やられたつて……？」と私が聞くと、

「官權……ぢやない、つまり私權の脅迫に遭つた譯ですよ。」と言つて、彼は口の端に一寸皺を寄せて笑つた。「さあ、明日の朝は、丁度夜明け時分が日野春でせう、夜明けに起きなければ山が見えませんよ。早く寢ませうか？」

「さうしませう。」と私は言つた。

「ぢやあ、お寢みなさい、お寢みなさい。」と私たちは言つて、市木と、西向と、私とはそれ〴〵の寢台の青いカーテンの中に身を入れたのである。

だが、さうしてゴト〳〵ゴト〳〵と揺れる、狹い寢台の上に横になつて、暫くすると、――その暫くの間は、市木のこと、西向のこと、堀戸のこと、これから行く私の愛する町の彼女のこと、さては私の妻のこと、――種々雑多の物の思が、戰の繪圖のやうに私の頭の中で渦を卷いたが、いつとなくとろ〳〵と眠り入つてしまふと、それ等の物の影は一切、私の頭から霧が晴れたやうに消えて行つてしまつて、私は時々ふと目を醒ますと、子供のやうな心でむく〳〵と寢床の上に起き上つた。そして寢間着の上から外套を羽織つて、明日の天氣はどうだらう、と窓を覗きに、汽車の昇降口の台のところへ出かけて行つた。すると、思ひがけなく市木が立つてゐるのに會つたのである。私たちは譯もなく極りの悪い狼狽を感じて、「君は未だ寢ないんですか？」「いや、もう一度寢たんですが……」「どうも汽車の寢台といふものは暑苦しいものですね。」「冬の星といふものは如何にも冷たさうですが、實に奇麗ですね。」「明日はいゝお天氣でせう」そして私たちは車室の中に歸つて來て、「お寢みなさい。」と言ひあつて、各々の青いカーテンの内に這入つた。

だが、先にも言つた通り、汽車が進むに從て、私が一寢入りしては目を醒まし、又一寢入りしては目を醒ます毎に、私の心持は山と共に高く晴れて行くのを覺えた。私はこの夜が明けたら、と、あゝ、久し振りで見る甲斐の山の事を考

へると、終にはその爲に段々眠れなくなつて困つた位であつた。そして私は目を醒ます毎に、傍の網棚に引掛けてある腕時計を見た。恐らく市木も、又西向も私と同じ感じを經驗してゐるに違ひなかつた。そして、私は第何度目かに目を醒まして、時計を見た時、丁度五時であつた。で、もうか〳〵寢てはゐられないと思つたので、私は早速起きて身仕度をして、取敢ず大急ぎで、昇降口の台に出かけて、外の景色を透かして見ると、外はまだ夜の最中のやうで、眞暗な中に星がきら〳〵と輝いてゐた。そこで、私が元の車室に歸つて來て、今の間に手水などを使つておかうと思つて、洗面所に這入つて出て來た時、不斷はそんなにも寢坊である市木が、丁度彼の寢台から起きて出て來たのに驚かされた。同じ車室の中の、どの寢台にも悉く青いカーテンが張られてゐて、私たちのを除いて、その中の他のどの一つでもが起きて居る氣配のするのはなかつた。が、六時前になると、西向が、「やあ、皆さん、早いんでございますな、」と言つて、私と市木とが腰かけてゐた喫煙室に顔を出した。

私は嘗てそんなに冬の夜の明けるのが遲いのを恨んだことを覺えない。私は屢々立つて昇降口のところへ出て見たが、その冷々した温度なり、走つてゐる速力なりから推して、最早や確に、私たちの汽車が甲斐の國の、次第に高くなつて、信濃の國へと近づいて行く道の邊を走りつゝあることを感じなければならなかつた。そして、到頭、待ち兼ねた夜が明けたのであつた。それは云ふ迄もなく、夜から朝へかけて初めて通る汽車に違ひないので、線路に夜露か霜かが凍りついてでもゐるのであらう、ギイ〳〵ギイ〳〵といふやうな軋む音が、間斷なく汽車の下で鳴つてゐた。無論、窓の硝子などは、まるで磨り込んだやうに曇つてしまつて、外の景色は少しも見えない、開けようとしたが、迚も開きさうにない。私は便所と、洗面所とに這入つて見て、そこの硝子窓を開けようとしたが、やはり孰でも動きさうにない。又驅け出して、昇降口の所で、西向と力を合はして、各々轉げ落ちないように鐵の欄干を片手で掴まへて、片手で

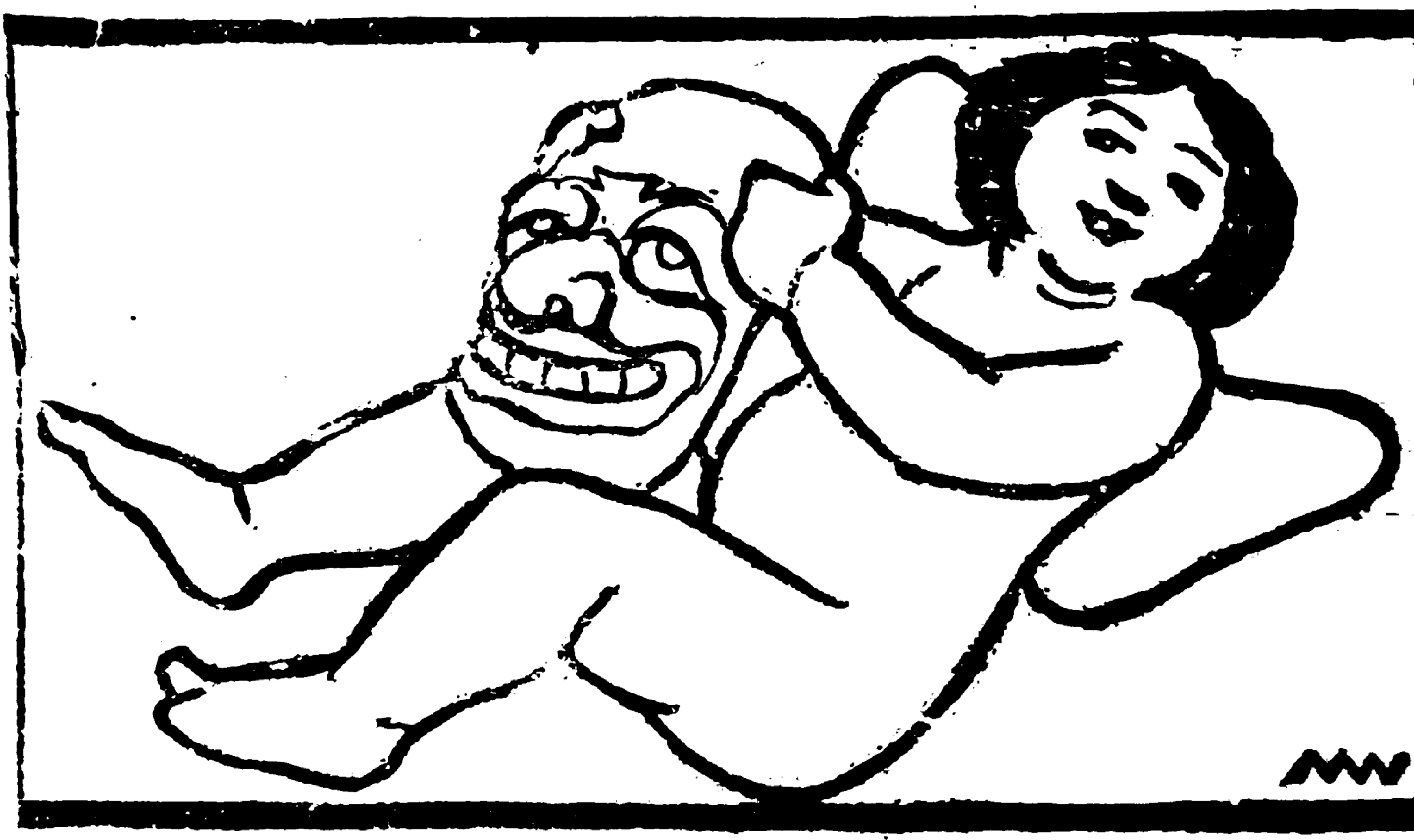
出入口の扉を、そこも凍つて容易に開かないのを、死物狂ひの力をこめて、漸く開けることが出來た。と、目の前に、眞に文字通り飛び込むやうに、殆ど全山雪に蔽はれた南アルプスの山々が、夜明けの黄色の空を背景にして、嚇かすやうに聳え立つてゐるのが見られた。だが、それは一瞬間のことで、扉を開けると同時に、さつと水が流れ込むやうに、痛い冷い空氣が這入つて來て、私の肝腎の眼鏡が俄に曇つてしまつたのである。が、それがいつもの湯氣か何かで曇つたやうなつもりで、幾ら待つてゐても、晴れないどころか、次第に甚しくなつて來るので、外して見ると、それは自分の息が凍りついてしまつてゐるのであつた。

私は並んでゐる市木と西向とに支へられて、眼鏡を拭き、前の景色を眺めた。甲斐駒ケ嶽のいびつになつて、傾きかゝつた恰好の頂が、氷のやうな色をして光つて見えた。その後に、與仙丈、地藏、鳳凰の山々の頂が、別々の氷の塊のやうな色をして、すく〳〵と兵隊のやうに競ひ立つて見える。さて、目を後にやると、駿河との國境の、薔薇色をした空に、富士山がくつきりと板畫のやうな葡萄色して染め出されてゐる。それから、私たちは又右側の扉を、前と同じやうな難儀な思をして開けて見た、と、そこには直目の前に、築山の石の山のやうな恰好をして、頂から砂糖を振り掛けたやうに雪を被つた、八ケ嶽が藍色して聳えて見える。

「到頭來ましたね、」と私は言つた。

「素的ですね、」と市木が言つた。

そして、私たちを乗せた汽車は信濃へ、信濃へと走るのであつた。



人間萬歳（狂言）

倉田百三兄に捧ぐ。

武者小路實篤

一

天使。神様

神。なんだ。

天使。地球がやつと冷えて表面がかたまりました。もう生物をお放しになつても大丈夫と思ひます。いかゞとりはからいませう。

神。それならアミーバーでも一疋地球の水のなかに入れて見たらいゝだらう。

天使。それだけでやう御座いますか。

神。それだけでも多すぎる位いだらう。

天使。あんな目にも見へないやうなものを一疋つかまへると云ふのは骨が折れますが。

神。それなら、一滴の水のうちにゐる生物をのこらず入れてやれ。何が入つてゐてもかまはないから。

天使。それならさういたしませう。

神。地球は一億年もたゝない内にさぞいろ〳〵のものが生れるだらう。そして又亡びてゆくだらう。

天使　彼等はなんの爲に生るのか、知ることは出來ないでせう。

神。俺だつて考へても見ないことを、彼等が知ることが出來るものか。だがいくら知らなくつたつて、彼等は生なければならない。

天使。それならこの水溜りのなかゝら、この耳かきで一しやくいして地球におとしますがやう御座いますか。

神。少し多すぎるがまあいゝだらう。さぞ多くのものがふへて食ふものに困るだらう、

天使。それならこれだけおとします。之からどんなものが生れるでせう。

神。あのちつぽけな地球ぢやあまり大さなものは生れないだらう。その内には地球を七巻半でも出來る動物だつて生れる力をもつてゐるのだが。地球ぢや高々それの五億三千萬兆倍位のもの切り生れないだらう。

天使。隨分利口なものも、この内から生れますかね。

神。それは生れなければならない用意は出來てゐる。それが本當に生たら、地球は面白いものになるだらう。何しろ俺の脳味噌の垢のかけらが入つてゐるからな。

天使。それでは大したものが生れるで御座いませう。

神。それを本當に生かすことが出來る奴が出來たらな。しかしそれまでに地球がつぶれるかも知れない。

天使。地球はそんなに早くつぶれますかね。

神。そんなことは俺も知らない。知りたいとも思はない。俺の子供は多すぎるから、何處で衝突しないとも限らないし、衝突しないだつて、何んな風にならないとも限らないからね。しかしまあ、俺の考へぢや、俺の精神が地球を支配し切つてから一億年は地球の壽命があると思つてゐる。

天使。たつた一億年ですか。

神。俺達にとつて一億年はなんでもないが、地球にとつてはそれでも退屈すぎる位、永く思ふだらうよ。

天使。それなら之をこぼしますよ。（こぼす）

神。あゝ。それなら地球のことはお前にまかせるよ。

天使。はい。いろ〳〵のものが生れましたら、どう云ふ風にゐたしませう。

神。默つて見てゐればいゝ。隨分お互に殺しあつたり、食ひあつたり、泣きさけんだり、苦しがつたりするだらうが、ほつたらかしておけ、たゞ他の星にぶつからないやうにするのと、天候のことを、一寸注意するといゝ。それも、いゝ加減でいゝ。どうせ、お前は無情で居眠りが好きだから丁度いゝだらう。

天使。御冗談を。

神。はつは。

（他の天使登場）

他の天使。神樣、すまないことをいたしました。

神。どうした。

他の天使。私が計算を一寸狂はしまして、私の星の軌道を髪の毛の太さの百分の一、右にかぢを取りましたら、とう〳〵一つの星と衝突いたしまして、とう〳〵兩方の星を丸焼にして發散さしてしまいました。

神。あはゝゝ、馬鹿な奴だ。そんなにかぢをとり損ふ奴があるか、あき盲目、だが焼けてしまつたら仕方がない。その容地を何かでふさぐ必要がある。

他の天使。誠にすみません。

神。すんだことは仕方がない。

天使。それでは失禮します。

神。さうか。それならよろしくたのむ。

天使。はい。

神。それから、あの數學の大先生の處に行つて、星が二つなくなつたから、あとの星の軌道をかへて調和をはかるか、又別に二つの星をつくらなければならないか、計算してもらつて來てくれ。

天使。はい。(退場しやうとする)

神。一寸待つた。お前の星は何號だつたかね。

他の天使。十五億三千三百六十番で御座います。

神。そしてお前の衝突したのは。

他の天使。あまりあはてましたので、つい見おとしました。

神。(笑ひながら)困つた奴だな。

（第三の天使登場）

第三の天使。私の星が、十五億三千三百六十番の爲に衝突されまして消えうせまして御座います。私のかぢのとり方は正確だつたと存じております。

神。うん。さうだらう。そのあはてもの丶十五億三千三百六十番の運轉手はこ丶にゐる。

他の天使。さつきはどうも失禮しました

第三の天使。あ丶あなたでしたか、どうも困りましたね。あなたには。

他の天使。誠にすみません。

第三の天使。折角私がたのしみにしてゐた、計畫がすつかり駄目になつて、乘つてゐる生きものなんかは、實にあはてふためいて見てはおれませんでした。折角、神樣にお願ひして生命の泉をいたゞいて、それがやつとものになつて、どの星にもない程の美しい、立派な生物が生れ出したので、私はどんなにか樂しみにしておりましたのですのに。

他の天使。どうもすみません。

第三の天使。本當におどろきましたよ。あんな處にあなたの星が出てくるとは思ひませんでしたからね。地圖を見たら、あなたの星は、十三億七十八番さんの向ふ側に出てくるはずなのですからね。おどろきましたね。

他の天使。どうも面目次第もありません。

第三の天使。本當にがつかりしましたよ。何しろ十三億年の間、丹精したのですからね。出來たら歸して裁きたいと本當に云いたい處なのです。

他の天使。本當にすみません。

第三の天使。どうも皆も、おどろいてゐましたよ。私の星に住んでゐた、一番偉い天文學者は、あなたの星があすこにのこつと顏を出したのを見た時、自分の頭の方が狂つたのかと思つて死んでしまいましたよ。私もおどろきましたね。

他の天使。面目ありません。

第三の天使。本當にどうしてあんな馬鹿なことをしたのです。

他の天使。私の計算だと、あなたの星の方がもう三分早くあすこを通過なさると思つてゐたのです。

第三の天使。（他の天使の顏をいきなりぶち）馬鹿！　きちがい、あき盲目。（ぶちつゞけやうとする）

神。よせ！　すんだことを怒る馬鹿があるか。怒つたつて星は歸つて來ないんだ、馬鹿。

第三の天使。はつ。

神。お前にはもつと面白い星をその内、つくつてやるから、あきらめろ。

第三の天使。はつ。

神。お前の星は何番だ。

第三の天使。九億七千八百六十三萬九千八百七十三號で御座います。

神。（天使に）お前は覺えたか。

天使。かきとめておきました。

神。云つて見ろ。

天使。十五億三千三百六十號と、九億七千八百六十三萬九千八百七十三號とです。

神。それに相違ないな。
他の天使達。はい。
神。それなら數學者にさう云つてくれ。星をつくるのは簡單だからいくらでもつくるが、軌道の計算が厄介ならどつちでもいゝと。俺には力はありすぎるが、この宇宙は狹すぎるからあんまり星をつくるわけにもゆくまいから。
天使。はい。

二

天使。神樣。
神樣。なんだ。
天使。地球にこんなものが生れました。（蛇を見せる）
神樣。繩のやうなものが生れたな。
天使。どうも、見て氣持のいゝものではありませんが、どうしませう。
神樣、生れたら仕方がないから生かしておけ。
天使。處が、こいつが、こんな美しい小鳥や、こんな可愛いゝ動物（兎）を食ふのですが、どうしませう。
神樣。仕方がない、食はしておくさ。
天使。これが今に地上を全部占領しさうに見へるのですが、大丈夫でせうか。
神樣。大丈夫だよ。お前は本當に氣の小さい奴だな。俺の頭の垢のかけらはまだ芽を出さないかな。

天使。まだ出しません。

神様。それが出れば、それが自分に氣に入らないものは段々退治てしまうだらう。

天使。早く出てくれるといゝのですが。

神様。出たらもつて來て見せろよ。

天使。はい。

第三の天使。(登場)神様。

神様。なんだ。

第三の天使。私の星がやつと形が出來出して來ました。

神様。さうか。

第三の天使。今度は大きいので、張合があります。ありがたう御座います。

天使。それでは失禮いたします。

神様。さよなら。

(天使退場)

第三の天使。あの天使は何の星をうけもつてゐるのです。

神様。二十三億何番だつたかな、地球と云ふ星だ。

第三の天使。あゝ、あの小ぽけな、しかし何かあなたが飼つてゐらしやる。

神様。飼つてゐるわけでもないが。一寸生命の水をやつてやつたのだ。

第三の天使。あんな小ぽけな星では碌なものは出來ないでせう。

神様。しかしあの生命の水には俺の腦味噌の垢のかけらがとけこんでゐるから何か面白いものが生れるかも知れない。

第三の天使。勿體ないことをなさいましたね。

神様。だつて、そんなもの持つてゐたつて仕方がない。あの小ぽけな星では小ぽけ相當なものが出來るとたのしみにしてゐるのだ。

(天使達七人登場、中に女の天使もまぢつてゐる)

七人の天使の一人。神様。御機嫌伺ひに參りました。

神様。お前達も達者で結構だ。變つたことはないな。

七人の天使の一人。はい、すべて無事にやつております。

神様。それは何よりだ。一つお前達兄妹のおどりでも久しぶりに見せてもらはうかな。

七人の天使。畏まりました。

神様。(第三の天使に)七つ星が舞るさうだから手のすいてゐる奴は皆見にこいとさう云つてくれ。

第三の天使。はい。

神様。(一番若い女の天使に)お前はいつ見ても美しいな。子供はほしくないかな。

一番若い女の天使。結構で御座います。

神様。いゝ子供がほしければ遠慮はゐらないぞ。

一番若い女の天使。まあ御遠慮申しませう。

（皆快活に笑ふ）

神様。可愛いゝ奴ぢや。身體を大事にしろ。

一番若い女の天使。ありがたう御座います。

（多勢見物にくる）

（靜かなる音樂により、フラアンゼリコーの繪のやうに踊りおどる）

（天使あはてゝ登場。皆居るのでおどろく。おどりすむ）。

神樣。なんだ。

天使。神樣。こんなものが生れてゐました。これが、あなたの待つてゐらしやつたものではないでせうか。（人間の小さい人形をもつてくる）

神樣。俺は何にも待つてはゐなかつたが、俺達によく似てゐるな。ふんこんなものが生れるとは思はなかつた。之は少し見つけものらしいぞ。皆に見せてやれ。

誰と云ふことなく。まあ可愛いゝこと。これがあなたの星に生れたのですか。

天使。えゝ。

誰といふことなく。之はたつて歩きますか、はつて歩きますか。

天使。生れたてははつて歩きますが、すぐ立つて歩くやうになります。

誰と云ふことなく。之では他の動物にやられることはありませんか。

天使　あります。ですが中々利口です。

神様。利口か。

天使。えゝそれは利口です。素手では勝てないのでいろ〳〵の武器を考へ出して使つてゐます。弓なんかも、もうつかつてゐます。

神様。ふん。それは面白い。

女の神の一人。それは感心ですね、

天使。それから火をつくることを考へ出しました。

神様。さうか。それは有望だ。大事にしてやれ。

天使。それから。

神様。もうその話はそれでいゝ。さあ、もう一度おどつたり、おどつたり。

七つ星の天使達。はつ。

（七つ星おどる）

神様。さあ、今度は皆でおどらう。賑かな音樂をやつてくれ。

音樂の天使。はつ。

神様。さあ、のこらずおどれ。おどれ、俺の相手はお前だ。

一番若い（七つ星の）女の天使。はい。

三

神樣。こゝから見える星の運行の美しさはどうだ。(星が大きく美しく目に見えて動いてゐる)。

女の天使(七つ星の一番若い)。本當に美しゆう御座いますね。

神樣。だがお前はなほ美しい。

女の天使。御世辭は澤山。

神樣。だが、たまには俺も御世辭も云つて見たい。御世辭許り云はれてゐても面白くないからな。

女の天使。他の天使達が氣にしてゐますわ。

神樣。それが氣になるなら、あつちへゆけ。だがお前は俺のそばをはなれることは出來まい。

女の天使。えゝ。

神樣。俺はこの美しい眺めを一人で見てゐるのにあきたのだ。たまには二人で見たい。

女の天使。あなたにはいくらだつていゝ方があるのでしよ。

神樣。ないとは云はない。だが、お前を美しく思ふにはかはりはない。そしてかうして二人だけで、この世界を見てゐるよろこびは格別だ。

女の天使。本當に、私もこんなうれしいことは始めてゞす。こんな美しい高殿から、こんなに美しい天空を、あなたとこうやつて靜かに見てゐることが出來るとは思ひませんでした。あゝあの二つのぐる〳〵廻る星の美しさ。また、あの青くゆき遠つた光りの美しさ。あの箒星のおかしさ。あの星の月を澤山もつておりますこと。いろ〳〵の星がありますのね。

神樣。さうだ俺はいつも一人で、之を靜かに眺めてさうして思ふのだ。俺は何のために生てゐるとね。

女の天使。あなたはそれを御存知ないのですか。

神様。お前は知つてゐるか、何のために生てゐるかを。

女の天使。えゝ、知つてゐます。

神様。なんのためだ。

女の天使、あなたのためよ。

神様。可愛いゝ奴、(接吻しようとする)。

女の天使。よして、星が笑つてゐますわ。

神様。そのとばりをおろせ。

女の天使。いや。もう少しかうして見てゐませう。

(鳥がなく)。

女の天使。あゝあの鳥の美しい聲。

神様。さあ、お前一杯のまないか。(ついでやる)

女の天使。ありがたう。まあ、おいしいこと。

神様。何か面白い話でもしてくれ。

女の天使。ある處に。

神様。うん、ある處に。

女の天使。非常に好色な神様がありましたつて。

神樣。それから。
女の天使。その神樣は澤山の子供を生みましたつて。
神樣。それから。
女の天使。それでおしまい。
神樣。あはゝゝ。つまらない話だな。それなら今度。俺が話してやらう。一人の大變賢い神樣がありましたつて。
女の天使。それから。
神樣。あんまり賢こすぎて、他の神樣とは話が出來ませんでしたつて。
女の天使。それから。
神樣。それで、どうせわかつてもらへないなら、愛らしい言葉で呼ける相手をさがしましたつて。
女の天使。それから。
神樣。それでおしまい。
女の天使。何てつまらない話でせう。
神樣。夜はふけて來た。さあ、家に入らうか。
女の天使。今度は私が話しますわ。可愛いゝ鳩が。
神樣。うん、可愛いゝ鳩が。
女の天使。二羽でねぐらをさしていそいでゆきましたつて、その時、ふと雌鳩が思ひますに。
神樣。それから。

女の天使。どうせおちつく處はきまつてゐるのだから、一つ夫をちらすだけちらしてやらうとさう思つたのですつて。

（この時、滑稽天使、尻尾をもつてゐる、うれしい時それを動かす。登場）

滑稽天使。神樣。神樣。

神樣。なんだ。

滑稽天使。大變なことが出來ました。（泣き出す）

神樣。（おどろき立ち上り）どうしたのだ。何が起つたのだ。

滑稽天使。それは〳〵大變な大變な大變なことが起りました。えん〳〵〳〵。

神樣。早く云へ。早く云はないと、この棒で打つぞ。

滑稽天使。それでは申します。私の大事な大事な神樣の魂が、別嬪さんにさらはれてゆきました。

神樣。あはゝゝゝ。馬鹿。

滑稽天使。魂のぬけた神樣、お目出たう御座います。やがて魂がもとの古巣にお歸りになる時は、別嬪さんのおなかのなかゝらもそれは美しい魂がとび出すで御座いませう。謹んでお祝ひ申します。

神樣。馬鹿。

滑稽天使。夜の子供等、來ておどれ〳〵。よき神の生れくるやうおどれ〳〵。

（夜の天使、黑い風して來ておどりながら退場）

女の天使。まあ、滑稽な天使ですこと。

神樣。さあとばりをおろさう。
女の天使。えゝ。

四

天使。滑稽な天使さん。
滑稽天使。なんだ、小ぽけな星の神さん。
天使。神樣はまだお起きにならないか。
滑稽天使。まだ〱今眠りの最中だらう。
天使。困つたな。どうも。
滑稽天使。どうした奴さん。
天使。俺の星に大水が出て、切角の生ものが皆死んでしまいさうなのだ。(泣き出す)
滑稽天使。それは困るだらう。死んでは困るだらう。大水が出たら困るだらう。あなたが涙をこぼしたらなほ地球の水がふへるだらう。
天使。どうしたらいゝだらうね。
滑稽天使。どうも仕方がないな。
天使。一寸神樣を起してくれないか。
滑稽天使。駄目駄目、今はそれ處ぢやない。

天使。もう神樣は起きてもいゝ時分だよ。
滑稽天使。處が大將別嬪さんにとつかまつたから駄目だよ。
天使。本當にしほがない神樣だな。
滑稽天使。まあさうせくまい、せくまい。たまにはぐつすり眠かしてやるものだ。
天使。だつて神樣ともあらうものが。
滑稽天使。だつて力がありや仕方がない。神樣だから仕方がない。お前が神樣だつたら毎日起ては來ないだらう。
天使。そんなら俺は歸るよ。
滑稽天使。勝手にお歸り。
神樣。(登場)何を云つてゐるのだ。うるさい。
天使。大、大變なことが出來ました。
神樣。何にが出來たのだ。
天使。大水が、大水が出たのです。
神樣。何處に大水が出たのだ。
天使。私の星に大水が出たのです。
神樣。なんだ。お前の星の話か。もう歸つたら水もひいてゐるだらう。そしてのこらず死んだかも知れない。
天使。あの昨日お見せした人間が死にたへるかも知れないのです。どうしたらいゝのです。(泣く)
神樣、ほつたらかしておけばいゝ。俺の智慧が生てゐれば、お前よりも百倍も利口だらうよ。早く歸れ、ぐずぐずして

ゐると打つぞ。

天使。はい。はい。（退場）

神樣。人のいゝ天使だが、あいつは大げさ野郎で困る。

滑稽天使。本當にあいつはお人よしです。きつと人間をつかまへて、お前は神の子だ。神に愛されてゐる。神樣はわるいやうにはなさらない。神樣がいゝやうにして下さるから安心してゐるといゝ。なぞと教へこんでゐるのでせう。

神樣。俺は與へるものだけ與へたのだから、あとは勝手にするがいゝ。

滑稽天使。あなたの好色も人間と云ふものにうつつたら一寸困りますな。

神樣。馬鹿。

滑稽天使。別嬪さんはどうしました。

神樣。今、お化粧してゐる。

滑稽天使。七つ星の他の連中が待つてをりますよ。早く仕度するやうにおつしやらないと他の連中が氣の毒ですよ。

神樣。餘計なお世話だ。

女の天使。（登場）他の方はどうしてゐます。

滑稽天使。あなたのお目ざめになるのを謹んで待つてをゐでになります。

女の天使。それなら、もういつでも御一緒にゆきますと、さうおつしやつて下さい。

滑稽天使。畏こまいつて御座ります。（退場）

神樣。もうすぐ歸るのか。

女の天使。さうして又今度一人で來ますわ。

神様。來られるかい。

女の天使。それはあなたの力の内ですわ。

（二人接吻する。滑稽天使、七つ星の他の連中をつれて來。それに氣がつき）

滑稽天使。廻れ右！（皆の前の方にとんでゆき）諸君に御忠告する、見ざる、聞かざる、云はざる、ことに御なし下されたく候 終り。廻れ右！

神様。皆さんお早やう。

七つ星の他の連中。お早やう御座います。

滑稽天使。いや遲やう御座います。

神様。馬鹿！

七つ星の連中。それでは失禮いたします。

神様。又時々來ておくれ。

七星の他の連中。はい。（退場）

（天使又あわてゝ登場）

天使。神様。

神様。なんだ。

天使。御安心下さい。水はひきました。人間が、二人助かりました。

神様。（窓からそとを見不愛想に）それはよかつたな。
天使。ありがたう御座います。
（神様何かを認め、笑ひ顔して別れのしるしに布をふる）
天使、神様！
神様。なんだ。
天使。二人のこれば大丈夫でせうな。
神様。さうだらうな。（布をふりながら）
天使。ありがたう御座います。さようなら。
神様。さよなら。

五

神様。滑稽天使！
滑稽天使。はい。何か御用で御座いますか。
神様。むしあつい晩だな。
滑稽天使。殊にむし暑い晩で御座います。
神様。誠に寝苦しい晩だ。
滑稽天使。誠に御意の通りで御座います。

神様。昨日と今日とどうしてかうもちがうのかな。昨日は随分氣持がいゝ晩だつたかな。

滑稽天使。それはかの天女が御ゐでになると、ならないのとのちがいかと存じます。暑さから申しますと、昨日も今日も正しく同じで御座ります。

神様。本當に同じか。

滑稽天使。誠に同じぢや、たゞ心の持ち方一つぢや、馬鹿神様がかう申してゐられます。

神様。あの女をよんで來い。

滑稽天使。それはおよしになつた方がいゝと存じます。

神様。なぜだ。

滑稽天使。それでも、この頃あなたの御評判が甚だよく御座いません。神の奴なんかゐなくたつてちつとも困らないなんぞと申しております。

神様。さうか。ゐなくつてよければ、結局幸ひぢやないのか。俺もとつくに神様にはあきてゐるのだからな。

滑稽天使。それでも皆謀反を起してあなたが座敷牢に入れられたらどうなさります。逢ひたい方にも逢へませんよ。

神様。滑稽天使。俺は神の位置におかれてゐるものぢやない。神そのものなのだからいくら座敷牢に入れられたつて、俺はその内に又樂を見出すことが出來る。

滑稽天使。それなら今晩は一人でゆつくりお休みになつた方がいゝかと思ひます。昨晩のことでは皆憤慨しております。殊に道徳天使なんかは、神様からあれでは、夜ばへ星が澤山出來て困るだらうと申しております。

神様。俺の子供をつくると云ふことをよろこぶことが出來ないのか。世も末になつたものぢや。

滑稽天使。本當にさうで御座います。神様が一人の女天使のために夜も眠れずなぞと云ふ時代が來たのですからね。

神様。そんな時は今までに何億遍あつたか知れやしない。尤もその時から俺の評判はあまりよくなかつたが、少くも彼等は俺の利口さと俺の他人の快樂や自由の邪魔をしないと云ふことを知るだけの利口さをもつてゐた。處がこの頃の天使と來たら頭が惡くつて、俺の心はまるでわからない。そして俺の行爲だけを自己流になるべく賤しく解釋して得意になるやうになつた。昔もたまにはそんな天使もゐたが、近頃程、やかましくはなかつた。ともかくあの女天使をよんで來い。

滑稽天使。他のものにお命ぢになつて下さいまし。私はそんな使ひをするのは嫌ひで御座います。

神様。勝手にしろ。誰か。

道德天使。はい。（登場）何か御用で御座いますか。

神様。（獨白）どうもいやな奴が來たな。（道德天使に）まあ其處にこしかけたらいゝだらう。別に用ぢやないが、話相手がほしかつた。

道德天使。それは丁度よう御座いました。私もあなたとお話したいと思つておりました。

神様。さうか。何の話だ。

道德天使。どうも近頃、天上界におきまして、私を輕蔑するものが非常にふへて來ました。之は非常に危險なことゝ思ひます。之では段々秩序が亂れ、天使達は眞面目に自分の仕事をするのをいやがり、ずるけること許り考へるやうになり、快樂を逐つて他を忘れる傾が御座います。殊に男女間の問題になりますと、殊に甚しく、今年になつて私の見るに耐えない事實が、一億三千三百三十三萬三千三百三十三、御座いましたが、昨晩又一つふへました。一億三千三百

三十三萬三千三百三十三、いや、四になりました。どうも困つたもので御座います。

神樣。(嚴格に)道德天使!

道德天使。(思はず立ち上り)はつ。

神樣。お前の役目は何だか知つてゐるか。お前は探偵でも、刑事でもないぞ。天の一方からたゞ美しい光りをもつて天使の心を照してやればそれでいゝのだ。

道德天使。だと申しまして、今のまゝでは恐ろしいことが起ります。私は見るに忍びません。(泣く)

神樣。馬鹿、出しやばり、見るに忍びないで泣く奴があるか。そんな意氣地がないから、皆に馬鹿にされるのだ。泣く奴があるか、大事な時に、俺の顏でも平氣でにらみつけろ。さうして俺でも穴に入りたいやうな恥かしい氣を起させるやうな強い目をむき出せ。お前は少しおいぼれたな。さあ、泣かないでいゝ。お前は天上界には大事な星だ。何にも驚かずに、默つて見つめてゐろ。さうすれば皆、お前を馬鹿にするやうなことを云つても、お前を怖がるのだ。そしてお前を怖れながらも尊敬し、愛しなければならないのだ。處がお前が出しやばつて、後悔してゐる人を責めすぎれば、相手は益々やけになる許りだ。お前はたゞ見つめてゐればいゝのだ。そして少し位いな罪は大目に見てやるのだ。お前の力を本當に知るものは、罪をいくらかつくつてゐるものだ。天使共が時々罪を犯すのは、お前の力や、御利益をましてくれるのだ。ありがたく思つていゝのだ。以後は少し心得ろ。

道德天使。はつ。それでは先づ第一に、あなたのお顏をにらんで上げませう。

神樣。それには及ばない。

滑稽天使。偉いぞ、偉いぞ、道德天使。睨め、睨め、神樣をうんと睨め。神樣を穴のなかにちゞみ上らすまで睨め。

神様。（少し閉口したが）。處が俺は駄目だぞ。貴樣を俺がつくつたのは天使を怖がらす爲で、俺をこはがらす爲ぢやないのだ。俺には俺の道德がある。俺位い賢くなければ、又ちがう道德天使が必要だ。俺の道德天使を見せてやらうか。

道德天使。はい見せて下さい。

神樣。一寸切り見せられないぞ。俺の道德天使、一寸おいで。

生命天使。はい。（登場）

道德天使。誰かと思つたら生命天使か。

神樣。俺達は生てゆくのに、死滅しないためには、道德天使だけでは駄目だ。だが生命天使を皆に見せるのは、まだ少し强すぎ、早すぎる。もうよい、ひつこめ、ひつこめ。

生命天使。はい。（退場）

神樣。わかつたか。

滑稽天使。相變らず喰へない親爺だ。俺の親爺だ。あゝ云やこう、こう云やあゝ。手がつけられない親爺ぢや。

神樣。道德天使。他に用はないか。だが俺はお前を尊敬してゐるぞ。お前の光りと威嚴のます〳〵强くなるやう、俺はのぞんでゐるのだぞ。俺もお前には皆の前では頭の上らないことにしてあるのだ。さあもう用はないのだらう。歸つた。歸つた。

道德天使。はつ。（退場）

滑稽天使。どうです一つ別嬪でもよんで來ませうかな。あいつの顏を見ると少し生命の洗濯がしたくなりますからな。

神様。いゝよ。あいつの顔を見たら、一人で寝る氣になつたよ。

滑稽天使。それではお休みなさい。

神様。お休すみ。

（滑稽天使退場。神様、帳をあけ星の運行を見）

神様。道徳天使の目を見たら久しぶりに清い力がわいたぞ。愛する星の天使達、愛らしい我が子供達よ。俺はお前達に祝福を送る。愛する、美しい我が天使達。あまり氣持がいゝ。笛でも吹きたくなつた。一つ久しぶりにふくかな。

六

天使。神様は何處にゐらつしやる。

滑稽天使。神様は今、散歩に出かけた。

天使。何處にいらつしたらう。

滑稽天使。知らないね。どうした人間は死にたへたか。

天使。いや、段々景氣がいゝ、隨分ふへた。しかし折角何か面白いものをつくり出すかと思ふと、すぐ呑氣になつて、快樂におぼれて、野蠻な人間達にやられてしまう。

滑稽天使。さうか。矢張小さいだけあつて望みも小さいし、先のことを考へる力がないのだな。

天使。まあそんな所だらう。何しろよく戰爭するよ。そして勝つたものは大得意だが　負けた奴は可愛さうに男は皆、殺されて、女や子供は奴隷にされてしまうのだ。

滑稽天使。何しろ、小さい處に住んで得意になつてゐるのはいゝが、仲がよくなくつて、他の奴はどうなつてもかまわない。自分達さへよければと云ふのだから、中々うるさいし、面倒だし、腹がたつよ。どうせ生れてすぐ死ぬのだから仲よくすればよささうなものだが、馬鹿で、量が小さくつて、意氣地がなくつて困るよ。時々は一思ひにひねりつぶしたくなる程、それで生意氣と來てゐるのだからね。しかしよく見ると、滿更、すてたものでもないとも思ふのだがあてにはならない。だが、自分より大きなものや強い他の動物をどん/＼やつけることには感心する。それに中々よく働く奴もゐるし、頭のいゝ、何か考へ出しさうな、又天使のなかでも珍らしいやうな美をちやんと具へてゐる可愛い女もゐるよ。

滑稽天使。小さいだけ可愛いゝだらう。だがすぐ子供をつくつて皺とつてくたばつてしまうのだらう。

天使。それはさうだ何のためにあんなにして生てゐるのか。一寸わからないね。だが當人は得意でゐるよ。恰かも永遠に自分は生られるものゝやうに考へてゐる。その點矢張りあの神樣の腦味噌の香ひ位いはもつてゐるらしい。

滑稽天使。さうか。まあいゝ玩具が出來て君も仕合せだ。俺は又神樣と云ふ玩具をもたされてるので時々厄介だよ。あいつは中々利口で、お人よしで、好色で、威張りやさんだが、見てゐるとすきになるから不思議だ。一寸あいつが笑ふと俺は本當に死でもいゝと思ふのだよ。（でんぐり返しをうつて）時に好人物の天使さん。俺は君にかう云ふことを注意するがね。神樣は人間のことには冷淡なのだが、人間の内にある、神樣の腦味噌の爪の垢のかけらのかけらのそのかけらは、信用してもいゝ。そいつがあるから人間はいつか目がさめるだらうよ。生命を愛すると云ふことが本當にわかればさ。死ぬと云ふこともわかるわけだ。そして骨折ることも生てくる。まあ、人間のことは安心して呑氣にしてゐるがいゝよ。それはさうと俺の玩具は何處をうろついてゐるのかな。あゝ歸つて來たな、俺の尻尾が獨りで

に動く處を見るとあいつは歸つて來たと見へるな。

（神　様　登　場）

天使。おゝ神樣！

神樣。なんだ。

天使。私の人間に、もつともつとあなたの腦味噌をわけて下さい。

神樣。あはゝゝ、そんなことは出來ないよ。

滑稽天使。神樣の腦味噌を人間におしつめたら面白いだらうな。人間が神樣のやうに大きなこと許り考へたら面白いだらうな。地球が太陽の腦味噌をもらつて、俺れが太陽を照してやりたいと思つたら面白いだらうな。人のいゝ天使さん。神樣の腦味噌の爪の垢の百億萬分の一でも人間には一寸藥がきゝすぎますよ。

天使。でもさつきあなたは人間が神樣の腦味噌をいかせば戰爭なんかしないで、お互に助けあつて仲よくして、そして幸福に生てゆかれるやうに云つたぢやありませんか。

滑稽天使。それは人間に身分相應に與へられた、何萬兆倍に神樣の腦味噌の爪の垢を稀薄にしたものを持つてゐるから大丈夫と云つたのですよ。それ以上、もらつたら大へん。大へん。

天使。それでも今の人間では少し馬鹿さがひどすぎます。

滑稽天使。食ひものが足りないのでせうよ。その内にどうにかするでせうよ。君より人間の方が人間としては利口かも知れない。

天使。それならいゝのですが、とても馬鹿なのです。

神様。さうか。そんなに馬鹿なら、一つ見たいものだな。コッケエ、一つ望遠鏡をもつて來てくれ。それから聽音器とな。

滑稽天使。私の役命がなくなつては困りますよ。（望遠鏡をとつてくる）さあよく御らんなさい。

（神様、望遠鏡で見、聽音器を耳にかける）

滑稽天使。見へますか。

神様。見へだして來たやうだ。うん見へる。何してゐるのだ。さうだ三人が木にゆはいつけられてゐるよ。眞中のは釘にうちつけられてゐる。おゝ皆あはて出したぞ。うん望遠鏡のガラス玉が反射したのだな。あれは矢張り神様の子だつたつて、うん、その眞中にゐるのが俺の子供ださうだ。「なぜ俺をすてるか」とその男はどなつてゐるよ。はつはつは、おかしな奴だ、こつちは又何んだ。大勢人がゐるな。小ぽけな家をつくるのに大さわぎだ。こつちでは又戰爭を始めてゐるな、馬鹿な奴だな。おや、死にかけた病人が、俺にたすけてくれと云つてゐる。死んだ方がましだらう。おや、俺に感謝をさゝげて死んでいつた。感心な奴だ。處が親達は神様はゐないと云つて、泣いてゐる。呪つてゐやがる。馬鹿だな。俺を呪ふと、安心が出來るのかな。變な奴だな。

滑稽天使。一寸見せて下さい。神様。

神様。よし見せてやらう。だがあんまり面白くもないやうだ。

滑稽天使。まあ見せて下さい。（望遠鏡と聽音器とをかりてそれをつかいながら）どうもうるさい奴だな。あゝ、之りや、見當がちがつたぞ、うん、人間の奴、なる程小さい、さわしい奴だな。あの服裝と來たら滑稽だな、あの歩きつき、どいつもこいつも妙な歩きつきしてゐるな。すました顏してゐるよ。偉くもないくせして。ひどい奴だな、人間

が人間をぶつたり、蹴つたり、殺したりしやがる、亂暴な奴だな。こつちでは御宴會か、女がおどつてゐるた、まづい恰好して、おや、こつちでは隨分働いてゐるな。よくあんなに働けるものだな。だが要するに人間と云ふ奴はよく生れて、よく死ぬ奴だな。こんなせはしい、偉がりで、馬鹿で、可愛いゝ、憎らしい動物は宇宙にも少ないだらうな。

天使。それは少ないさ。

神樣。もう、いゝ加減にしろ。それより俺は今日大しくじりした。

天使。どうしたのです。

神樣。俺は今日いろ〳〵のことを考へて歩いてゐたら、急にあの女に逢ひたくなつたのだ。それで俺は一つ非常な立派な青年に化けて、あの女の處に出かけたのだ。

滑稽天使。えゝ。

神樣。處が女は俺が行つても逢はうとしないのだ。私は神樣より他の男の方とはおつきあいは出來ませんて、斷られてしまつたのだ。

滑稽天使。それから。

神樣。其處で大いによろこんで、實は俺だと云つて神樣の正體だしたらこの惡魔奴だまさうと云つたつて駄目だぞと皆でおいかけて來た。其處で俺は考へたが、逃げることにした。其處でわざと眞逆樣におちられるだけおちて見た、そしたら皆手をたゝいてよろこんでゐた。一人いたづらな奴が上からはいたつばだけが俺をおいかけて來たが、俺の方がそれよりずつと早いから安心だ。そしたらあづちこつちから天使が顏を出してよろこんで見てゐるには閉口した。

其處で俺は自分の身體を百六十三にわけて歸つて來た處だ。

天使。へー大へんでしたね。身體がそんなにわけられるものですかね。

滑稽天使。奴さん、神樣に嘘は云はないものとは思ひなさるな。神樣も冗談を云はれる。都合のわるい處は嘘でぬりつぶす。何處まで本當で、何處から嘘か、誰が知るものですか、又知りたがるものですか。

（女の天使登場）

女の天使。神樣、

神樣。なんだ。

女の天使。あなたは今日は何處かへお出かけになつて。

神樣。いや、何處へも、さつきからこゝにゐた。

女の天使。さうを。まあよかつた。

神樣。どうかしたのか。

女の天使。今ね。私の處へ、惡魔があなたに化けて來たのです。それで皆で逐かけたのですが。あなたが此處に逃げ込むのを見たと云ふ天使があるので、もしあなただつたら怒つてゐらつしやるといけないと思つて一寸來ましたの。

神樣。それはよく來た。惡魔がこゝに忍び込んでゐるといけないから一つ調べて見よう。（天使に）貴樣だらう。惡魔は。

天使。いゝえ〳〵、どういたしまして、御存知のくせして。

神様。そんならこいつだらうきつと。(滑稽天使に)

滑稽天使。はい〳〵誠にすみません。たしかに私がその悪魔奴をおかくしゝました。今ひきとらへてお目にかけます。

神様。さうか。早くとらへて來い。

滑稽天使。處がその悪魔は非常に强いので、私の手ではつかまり兼ねます。それにその悪魔は今でも神様に化けてゐるので、一寸私の手ではつかまい兼ねます。

女の天使。早くその悪魔をつかまへて下さいな。

神様。つかまへてやらうかな。しかしその悪魔は滑稽天使の風をしてゐるので。俺には一寸つかまへ悴いのだ。

女の天使。何處にかくしてあるのだい。

滑稽天使。この室に。

女の天使。この室に。

神様。この室に。

女の天使。何處にゐるの、氣味がわるいわ。

滑稽天使。あなたの前にゐる、嘘つきがさうです。神様は今朝程からおでかけで、まだ歸つてゐらつしやいません。

神様。冗談云つちや困るよ。おどろかないで大丈夫。實はお前の處に美男子になつて出かけたのは俺なのだ。そして皆に逐ひかけられてわざと逃げて來たのも俺なのだ。さうすればお前が來ることを知つてゐるのも俺なのだ。悪魔はこの俺には化けることは出來ないのだ。出來ても天使をそれでだますことは出來ないのだ。まあ安心するがいゝ。そして、今日はお前に御馳走してやるよ。

（武裝した天使達大勢登場）

神樣。どうしたのだ。

大勢の一人。貴樣は、惡魔だらう。正體を出せ。

神樣。化けることなら出來るが、之より他、正體を出すことは出來ない。

大勢の一人。處が本當の神樣は俺達の所にゐらしやる、お前は惡魔だと云ふことは證據が上つてゐる、早く正體を出せ。

神樣。俺の他に又神樣が出たつて、それは面白い、よんで來い。

大勢の一人。それならお前は、神の玉璽をもつてゐるか。

神樣。（搜す）、さあ大變だおとしてしまつた。

大勢の一人。それ見ろ。

滑稽天使。だが、この方こそたしかに神樣だ。玉璽はぬすむことが出來る。だが俺の尻尾は噓の神樣の前ぢや動かない。處がこの神樣のそばにゆくと俺の尻尾は氣まりのわるい程動くのです。

大勢の一人。何と云つてもう駄目だ。玉璽をなくなすやうな神は神ではない。それにもう俺達はこの神にはあきた。我々は我々の神を選擧する。もう我々は神よりも利口になつた。そして我々は神よりも力強い。

神樣。それはいゝだらう。俺も神にはあきて來た。

滑稽天使。そんなことを云つては駄目です。

大勢の一人の女。それならお前は今日から地獄に落ちなければならないぞ。

大勢の一人。さうだこの神を地獄におしこまなければならぬ。

女の天使。いや、この方は本當の神様です。この方の云ふことを聞かないでは天界はくずれるでせう。

大勢の一人の女。餘計なお世話だ。天界には私達がゐる。そして、本當の神様がゐらつしやる。その神様は道德堅固の神様だ。

滑稽天使。いや、その神様は嘘ものにきまつてゐる。こゝに本當の神様がゐるのだ。この光り、この力、この愛、この權威が君達にわからないか。

大勢の一人。わからないね。

神様。俺が本當の神様でなければ、お前達は俺を地獄におとすことも出來るのだらう。處が俺は本當の神様なのだ。俺も殘念に思ふ。君達の云ふことを聞いて上げたい。しかし俺は實際神なのだから仕方がない。俺は考へて見たが、矢張り俺はこの椅子にからやつて腰かけるより仕方がないことを知つてゐる。腰かける。(音樂が聞へる)

大勢の一人。もしかしたら、之は矢張り神様かも知れないぞ。

(道德の天使、生命の天使登場、)

道德の天使。君達は、神様を見あやまつてはいけない。この神様こそ、本當の神様だ。

生命の天使。我々は神様を忘れることは出來るが、しかし神様でないものを神様にするわけにはゆかない。處が之は神様なのだ。

大勢の一人。どうして神様と云ふことがわかるのです。

生命の天使。さあ、神様、あなたの力を顯はして下さい。

神様。信仰のうすい奴だな。さあ之でも俺は神ではないか。光あれよ!

(異様の光り、室内に溢る。妙なる音樂と共に、童男、童女おどりながら顯はれる)。

神樣。惡魔よ地獄におちろ。

惡魔。(群集にまぢつてゐた。急に身をふるはせもがく)あつ。(落ちる)

滑稽天使。ふん惡魔の奴が糞をしやがつた。(キタナさうにつまみ)あゝ糞かと思つたら玉蜀黍だつた。(神にきたないもの ゝやうにわたす)。

大勢。(皆ふるへ上る)おゝ神樣、あなたは神樣だ。どうぞおゆし下さい。(跪く)

神樣。俺のゐることは忘れて皆、自分のすることだけしろ。他の天使を支配したり、他の天使の支配をうけてはいけない。するだけのことをしろ。それから俺の云ふことも合點がゆかない時はいふことをきかないでもいゝ。しかし俺を不必要なものだと思ふな。俺がなければ、お前達は生てゐるのが無意味になり淋しくなることを知れ、一つしらしてやらう

(神樣は今迄あかなかつた重い扉をあけて入る。あたりはうすあかりになる)

大勢。神樣、わかりました。わかりました。私達の內に力が段々しなびて來ます。

(急に又、あかるくなり、神樣あらはれる)

神樣。俺がゐなくともお前達は生てもゐられ贅澤も出來るだらう。だが生きてゐるよろこびは得られないぞ。わかつたらいゝ。歸れ歸れ!

大勢。はい。(皆お辭儀する)

七

女の天使。昨日は私どうなるかと思ひましたわ。

神樣。馬鹿だね。俺が神だと云ふことをお前は忘れてゐるからいけない。

女の天使。本當にあなたは圖太いのね、落ちつきはらつてゐらつしたわ。

神樣。別に心配することはないからね。狂言のやうなものだから。面白いだけの話だ。皆、可愛いゝ天使だよ。

女の天使。だがたよりにはなりませんわ。其處へゆくと滑稽天使は感心ね。

神樣。あいつは馬鹿ぢあない。しかしもうそんな昨日の話はよさう。

女の天使。なぜあなたは、あんな力をもつてゐながら、普段はお出しにならないの、だから皆、惡氣でなくあなたを馬鹿にするのよ。あなたが本當の價値を出してゐらづしたら、皆、どんなによろこび、ありがたがるかわからないわ。

神樣。處が俺はちつともありがたくないね。俺が全力を出して生たら、宇宙は今とちがつた形になつてしまつて、その後は俺がいつでも力まなければ、宇宙に空虛な處が出來るやうになる、それも俺の力が强いだけなほ大きな空處が出來る。そしたら俺はいつも力んでゐて、呑氣にかうやつて、お前と話することも出來なくなる。そして皆は俺がゐると云ふことを强く知りすぎて獨立性を失なつてしまう。何んでも一々、あの地球の天使のやうに質問に來たり、報告しに來たりしなければならなくなる、さうしたら一體、俺はどうしたらいゝのだ。俺の時間は少しもなくなつてしまふ、俺と云ふものは自由のない、皆の奴隷になつてしまう。俺はそれは閉口だ。だから俺が居ないでも萬事がよくゆくやうに俺は自分の力を内に蓄へてあらはさないのだ。

女の天使。さうね。さうおつしやれば、その方がいゝわ。

神様。そしてその方が、いざと云ふ時に、更に強い力をもつて立ち上ることが出來る。

女の天使。あなたは矢張り私より利口ね。

神様。考へるのは俺の仕事だ。俺に愛されるのが、お前の仕事のやうなものだ。

女の天使。私の仕事はいゝ仕事ね。私はあなたに愛されなければ、生てゐる氣はしませんわ。

神様。子供でも生れて見ろ。お前は生き甲斐を感じるだらう。

女の天使。私はあなたを清よく遠くからたゞ愛してゐようと思ひました。

神様。處が、幸か、不幸か、お前と俺との間をさへぎるものはなかつた。俺の力が強すぎたのかも知れない。俺は愛すれば、子供を生ますのが生命天使の法則なことを知つてゐるのだ。

女の天使。あの天使の前へゆくと本當に生々しますわね。しかしあんまり生々して苦しくなりますわ。

神様。其處へゆくと道徳天使は、顔を見るのは五月蝿いが、しかし俺の心を清めてはくれる。

女の天使。私、あの方の前へゆくと泣きたくなりますわ。だがその涙はいやなものではありませんわ。

神様。それなら食事をさげるといゝ。

給仕の天童。はい。（食事をさげ退場）

神様。どうだ。こゝから天使達の歩いたり、舞つたり、飛んだりしてゐる姿を見ると、俺はよく泣きたくなる。あれ達が幸福で平和で仲よくしてくれることをのぞまないわけにはゆかない。

（滑稽天使登場）

滑稽天使。又あの人間氣違ひが參りまして、お目にかゝりたいと申しますがいかゞいたしませう。
神樣。こゝによべ。
滑稽天使。今日は又偉い勢でおります。
神樣。何か面白いことでもあるのか。
滑稽天使。なんでも人間の内に、偉い思想が生れ出したと申してゐます。
神樣。さうか。それは面白い。つれて來い。
滑稽天使。はい。（退場）
神樣。どんな思想が生き出したかな。
女の天使。あんな玩具のやうな人間が、思想なんかもつてゐるのでせうか。
神樣。それは持つことが出來るやうに、種にしかけはしてあるのだ。何しろ人間と云ふ奴も澤山生れるから、くずがあつてもたまにはまぐれあたりにいゝものが出來ないとも限らない。尤も俺の播いた種からはわりにいゝものが生れるはづではあるが、あてにはならない。
（天　使　登　場）
神樣。どうした。
天使。神樣、やつとあなたの意志が人間社會の中に生れたやうに思ひます。人間も目がさめて來たやうで御座います。之からはきつと目に見へて世界はよくなると思ひます、實に實にたのしみです、どうもありがたう御座いました。もう之から戰爭もいたしませんでせうし、同胞をいぢめたりなんかもしないで御座いませう。之から仲よくして目に見

えてすゝむで御座いませう。或は私達天使よりも賢こく、そして立派な社會をつくり出してくれさうにも思ひます。うれしくつて仕方がありません。一寸御禮にまで。さようなら。

神様。一寸まつた。

天使。はい。

神様。よろこぶのは早すぎるかも知れないが、まあ、いゝ報告をもつて來た御禮に、この酒を一杯やらう。

天使。どうもありがたう御ざいます。

神様。まあ、其處に腰かけたらいゝだらう。人間はどういふ風に目がさめたのだ。

天使。まだ少數では御座いますが、殺されながらも神を讃美し、兄弟姉妹を祝福してゆく人々が生れ出しました。彼等は實に貧しい、粗末なくらしはしてゐますが、その心の清さは、天使の心もそのそばにゆくと、濁つて、くろずんで見へます。そして彼等は神の國が近いた、悔ひ改めよと叫んでゐます。そして神を愛し、隣人を愛せ、その敵をも愛せと申しております。道徳天使よりも更に自己の慾望にうちかつ力をもつております。

神様。さうか中々感心な奴がゐるな。

天使。それから又一方では、自分の心を清め正しくし、惡に抵抗せず、眞理をとき、涅槃に入る道をといております。それ等の仲間には實にお目にかけたい程、立派な人間がおります。

神様。さうか、それはお前がよろこぶのはあたりまいだ。俺は話だけきいてもうれしい。本當に氣持のいゝ話だね。

女の天使。本當に私聞いてゐて涙が出る程うれしくなりましたわ。

神様。酒をもつとついでやれ。

天使。ありがたう御座います。

女の天使。御遠慮なく。

天使。それでは戴きます。こんな嬉しいことは御座いません。

神樣。しかしよろこんでゐる内に、どんなことが起らないとも限らない。だが人間の内に、あの小ぽけな人間の内に、そんな力があると云ふ事は不思議な氣がする。あせらずに氣ながに樣子を見てろ。俺の一寸見た處では人間には、まだいろ〳〵さう云ふ生活するには不適當なものがある。しかしそれも生かしやうによれば面白いのだが、中々面白く生かすのには骨が折れるだらう。之からまだいろ〳〵のことが起るだらうが、お前はあはてずに、希望をもつて見てゐろ。

天使。ありがたう御座いました。それでは失禮いたします。

神樣。さよなら。

（天使退場）

神樣。お前は今日歸らなければならないのか。

女の天使。えゝ。私は歸りたくはないのですが、いつまでもこうしてゐたいのですが、世間の義理で歸らなければなりません。私にも私のつとめがありますから。

神樣。それでももう暫くはいゝだらう。

女の天使。少し位いわるくつてもかまいませんが。本當に今日は氣持のいゝ天氣で御座いますね。そしてそよ風がふいてくる氣持のよさ、氣が遠くなるやうで御座いますわ。

（滑稽天使登場）

滑稽天使。大變な奴が參りました。

神樣。又爭鬪でも起つたのか。

滑稽天使。使そんなことでは御座いません。私達がまるで考へてもおりませんでした。隣りの宇宙の神樣からのお使ひが參りました。

神樣。さうか、それは感心な話だ。しかしよくあの境ひを通りこして來たな。

女の天使。宇宙はそんなに澤山ありますの。

神樣。いくらでもある。

女の天使。あなたはその全部の神樣ではないの。

神樣。さうだ、俺はたゞこゝだけの神だ。しかし使のものを禮儀正しく通せ。

滑稽天使。はい。

神樣。だが大きようにしては駄目だぞ。おどろかし損つたら反つて、こつちの貧弱な處がわかる許りだから、紙幄にお通ししろ。

滑稽天使。先刻承知しました。

神樣。誰か。

外で。はつ。（大勢給仕天使が來てかたづける）

女の天使。私はどうしませう。

神様。其處でいゝ。

女の天使。それでも失禮になるといけませんわ。

神様。それなら、女官のやうに其處に立つてゐたらいゝだらう。

女の天使。それなら私、こゝであなたを扇ぎながら、使のものを見てやりますわ。

（滑稽天使と隣りの宇宙の使者從者二人をつれて登場）

滑稽天使。あすこにおられますのが、我が神様で御座います。

隣りの宇宙の天使。（丁寧に挨拶し）。兼ねてからお目にかゝりたいと存じておりましたが、今日お目にかゝれてうれしく存じます。私の方の神が、今度急に向ふ三軒兩隣りの宇宙へ御挨拶に上りたいと考へましたので、こちらにお伺ひしてもおよろしいかどうか私は聞きに參りましたのですが、いかゞで御ざいますか。

神様。勿論來ていたゞけばうれしく思ひます。

隣りの宇宙の天使。それを伺つてありがとう御座います。之は殊におそ末で御座いますが、進呈いたしたく思ひますがいかゞのもので御座いませう。

神様。元よりうれしく戴きます。（送り物を女の天使にとつてもらい見）之はまあ何よりの品をありがたう御ざいます。これは何するものですか。

隣りの宇宙の天使。それはこの度、私の方で發明いたしました丸藥で、之を口にふくんで飛びますと、隣りの宇宙でも、何處の宇宙へでも疲れず息が切れずにゆけて、その上、其處の言葉を自由自在に聞きわけ、つかいわけることが出來ると云ふ丸藥で御座います。さしづめ二箱差し上げるやうに、なほ御用のせつは、こちらの器械で、御用命下さ

れば早速持参いたさせます。
神様。この器械だとあなたの宇宙の人と話が出來るのですが。
隣りの宇宙の天使。さやうで御座います。
神様。それでは本當におとなりづきあいが出來ると云ふもので御座いますね。
隣りの宇宙の天使。さやうで御座います。
神様。どう云ふ風につかふのですか。
隣りの宇宙の天使。一寸お貸しをねがいます。このしるしの處にこの針をやりまして、この針を押へて、之を耳にあてれば、それでいゝので御座います。一寸お話してお目にかけませう。
神様。どうか。
隣りの宇宙の天使。もし、もし、あなたは神様ですか、はい、首尾よくこゝにつきまして、今こちらの神様にお目にかゝつております。はい誠に氣持ちよく御承諾下さつたので、うれしく思ひます。はい畏まりました（神様に）誠に失禮で御座いますが一寸でも御話し下さるわけにはゆかないかと云ふことです。
神様。さうですか。（丸藥を口に入れやうとする）
隣りの宇宙の天使。それには及びません。私の神の方が藥をくはへておりますから。
神様。もし、もし、あなたはお隣りの神様ですか、始めてお目に、いや御宇宙の方にお目にかゝれてうれしく思つております、えゝ、之から私の方こそ御交際していろ〳〵のことを教へて戴きたいと思ひます。いえどういたしまして、私の方はまだ野蠻で、いろ〳〵教へていたゞかないと、いへ御世辭では御座いません、全くの話です、えゝ是非おい

で下さい。私も是非お伺ひしたく思ひます。えゝ、それを伺つて安心しました。勿論、私の方ではお隣りへ手を出す程の餘裕は御座いません。本當にさうです。野蠻な宇宙とは、御交際なさらない方がいゝと思ひますよ。どんな宇宙がまだあるかわかりませんから。ありがたう御座います、私の方でも何か御役に立つものがありましたらお命じ下さい。私を御信じ下さつてありがたう。私もあなたを信じ切れるのをうれしく思ひます。それでは、御いでの時どうか、御知らせ下さい。少し前に御知らせ下されば、きつと御待ちしております。さよなら。(隣りの宇宙の天使に)本當にいゝものを發明されたものですね。私は、あなたの神樣のお聲を聞いただけで一兆年來の御友達のやうな氣がします。本當に偉大な、誠意ある、御賢明な神樣と御交際出來るのを私はどんなにうれしく思つてゐるか、わかりません。

隣りの宇宙の天使。それでは失禮いたします。誠にありがたう御座いました。

神樣。どうかお歸りになつたらよろしく。

隣りの宇宙の天使。ありがたう御座います。皆さん、さようなら。

(隣りの宇宙の天使達退場)

神樣。(歩き出し)さあ面白くなつたぞ、俺にも話相手が出來、競爭者が出來たぞ。

女の天使。隣りの宇宙からせめて來たら大へんですね。

神樣。大丈夫。そんなわからずやではないことは一言聞いたゞけでもわかる。俺達は人間ぢやないから。宇宙の調和をお互にやぶるやうな馬鹿なことはしない。だが急に世界がひろくなつた。俺が安心してゐる内に隣の奴は大したものを發明しやあがつた。しかし之から俺も眞價を發揮してやるぞ。さあ一つ氣持のいゝ立派な歡迎會をしてやりたいも

のだ。誰か。

外。はい。（給仕天使登場）

神樣。接待の天使をよべ。

給仕天使。はい。

神樣。面白くなつて來たぞ。

天使。（登場）神樣、大變です。大變です。

神樣。なんだ。

天使。人間がよくなるかと思ひましたらわるくなる許りです、どうしませう。迫害されても神を讃美してゐた人間が、今度はいつのまにか、神の名で他の人を迫害してゐます。もう人間は駄目です。どうしたらいゝでせう。（泣き出す）

神樣。そんな小さいことはほつとけ、今それ處ぢやないのだ。今に隣りの宇宙の神樣がやつてくるぞ。宇宙と云ふものさへ小ぽけな時代が來たのだぞ。馬鹿！　人間のことは人間にまかせておけ。そんな小ぽけなことを一々相談にくる奴があるか。

天使。（獨白）宇宙が小さい。隣りの宇宙、何のことだらう。神樣が氣が狂はれたのかも知れないぞ。之りや大へんだ。どうしたらいゝのだ。えん〱〱（泣く）

八

天使。滑稽天使さん。

滑稽天使。なんです。人間狂印さん。

天使。一たいあなたに神樣の心はわかりますか。

滑稽天使。わかりますよ。

天使。それなら神樣は人間のことなんと思つてゐらしやるでせう。

滑稽天使。何とも思つてゐらつしやらないでせう。

天使。私にもさう見へますが、あんまりひどすぎると思ひますね。人間は苦しい時はきつと神樣の名をよぶのですがね。

滑稽天使。それはよびたければよべばいゝでせう。よぶことが人間にとつてよろこびなら。しかしその呼び聲が神樣に聞へて神樣からどうかしてもらへると思つたらまちがへですね。

天使。私は神樣がもう少し人間のことを思つてゐらつしやると思つたのですがね。人間がよくなつて來たと話したら隨分よろこんで下さつたのですからね。

滑稽天使。神樣は氣まぐれですよ。誰でもいく分氣まぐれですが、神樣は力が强いだけ氣まぐれの度も劇しいやうですよ。しかし人間のことは人間に任せるより仕方がないでせう。僕の見た處ぢや、人間は段々賢くなり、賢くなるに從つて馬鹿なことはしなくなると思ひますね。尤も天使にだつて隨分馬鹿がゐるのですから、人間に馬鹿がゐるのは仕方がありませんがね。しかしいくら馬鹿でも、あんまり馬鹿げた目に逢へば少しは目がさめるでせう。まあ氣にしないで希望をもつて、ゆつくり見てゐらつしやい。

天使。しかし愛して見てゐると隨分、はがゆいことも、腹の立つこともどうにかしたい氣がすることがあります。もう

一息と云ふ所で、切角希望をもつて見てゆくのにこわれてゆくのですからね。そして善人が亡びて惡人が盛へ、愛すべき人間がしいたげられて、惡どい人間が威張つてゐるのですからね。尤も時々は氣持のいゝ事件も起るのですが、それも大事な時にいゝあとつぎが出ないのでそのまゝ倒れてゆきます。

滑稽天使。それは仕方がありませんよ。その内には段々人間の内にある神様のまいた種がはへて來るでせう、まあ氣ながにするより仕方ながいでせう。それは氣の毒な人もあるでせう。しかしそれは人間自身の手で段々なほしてゆくでせうよ。

天使。しかし私は氣になるのですが、神様は氣でも違はれたのではないでせうか。

滑稽天使。大丈夫、あれは氣違ひになるには、少し圖太すぎます。

天使。だが隣りの宇宙だとか、宇宙が小さいなぞと云つてゐらつしやいましたよ。

滑稽天使。それは本當でせう。神様の目から見たら宇宙は小さいかも知れません。それにこの宇宙の隣りにも向ひ側にも宇宙があるのは本當だそうですよ。そして隣りの宇宙からこゝの神様に使が來たのも本當ですよ。

天使、それではこの宇宙の他に、まだ宇宙があるのですか。

滑稽天使。えゝ、あると見へますね。

天使。困つたことが出來たな。

滑稽天使。なぜです。

天使。それなら地球なんて、あるかなきかの砂つぶ一つにも當らないものなのですね。

滑稽天使。まあそんな處でせうね。

天使。私はそんな小ぽけな世界の天使になつていろ〳〵心配してゐる自分が可愛さうになりましたよ。

滑稽天使。だが愛するものがあればいゝぢやありませんか。そんな小ぽけな所にうぢやうぢや生てゐる人間、そして生たかと思ふとすぐ死ぬ人間、それは反つて同情すべきものであり、又愛すべきものでせう。そしてそんな小ぽけな處で爭つて得意になつてゐられることは、彼等のためによろこんでいゝでせう。

天使。私はいやになつた。人間が可愛さうになつた。

滑稽天使。だが御安心なさい、人間の内にはさう云ふ生活の内に、本當に神を愛すれば本當の深い、我々でさへやつと味はへるやうな深いよろこびを感じることが出來てゐるのですから、すべての人間のそれが本當に生るやうになつたら、彼等は自分の小さいことを不幸だとは思はないでせう。寧ろそんな小さいものにまで、無限の心の深さが與へられてゐることを感謝し、其處に救ひを求めるでせう。まあ、泣くのはよし玉へ。人間のことは僕が保證する。あの生命の一滴の内にはあらゆるものがふくまれてゐる。それはあまりに生る欲望が强すぎるが、しかしそれは萬難を排して最後の到達點に達するために必要なのだ。乞ふ安心せよ。之は俺の言葉ではなくつて、神の聲色だ。泣くな、泣くな、いゝ天使さん泣くな。泣くのはよしてくれ、俺は泣かれるのは大嫌ひだ　泣くとこの箒ではき出すぞ。

天使。それでも、人間は可哀さうです。食ふものもなく、着るものもなく、餓えてゆき、凍えてゆく人間は可愛さうです。抵抗力を失なはされてその上なぶり殺しになる人間の顏をあなたは見たことはない。あゝゝ、早く彼等を、神の國につれてゆきたい。あゝゝ。

滑稽天使。なさけないね、君は。しかし仕方がない俺も一緒に泣いて上げやう。わあ〳〵〳〵。

神様。(登場) 何を泣いてゐるのだ。うるさい奴だな。泣く稽古をしてゐるのか。

滑稽天使。人間が可愛さうです。わあ〳〵。

神様。處が俺は人間に腹を立てることを、さつき聽音器で偶然きいた。それは角のはへた動物だがね。人間に毎日々々追ひつかはれて、その上殺され、その上食はれるのだと云つてゐたよ。その上人間のゐる處は、他の動物は皆、弄り殺しにされるさうだ。人間と私達と何處がちがうのです。とさう云つてゐた。人間はあんまり勝手な眞似をしすぎてゐるやうだぞ。そして他の動物許りぢやない。他の仲間、他の主義の人間も、同じく弄り殺しにしてい〻ものと思つてゐるさうだ。そんな奴のために泣く奴があるか。泣くなら、もつと同情すべき、心がけの美しいもの〻ために泣け。

滑稽天使。それでも人間が可哀さうです。わあ〳〵。

神様。馬鹿。もう泣くのはよしてもらはう。それより隣りの宇宙と我々は仲よくしなければならない、もし萬一隣りの宇宙と戰爭でもして見ろ。地球なんか、けしとんでしまうぞ。

天使。そ、それは本當ですか。

神様。いや、大丈夫。俺達は馬鹿ぢやない。お互に尊敬しあい、助けあい、愛しあふことを知つてゐる。お互はたゞ讃美しあい、そして愛しあい、そしてよろこびあへばい〻のだ。お互の内生活が豐富に、よろこべる材料を多くすればい〻のだ。宇宙を二つもつことがどんなにうるさく、馬鹿氣てゐるかと云ふことを俺は知つてゐる。俺達は何よりも平和のよろこび、調和のよろこびを愛するものだ。

滑稽天使。あなたは自分に滿足し、又境遇に滿足してゐらつしやる。好き勝手なことをしてゐらつしやる。之以上望むことのない生活をしてゐらつしやる。そして今の生活をかへずにすべてと調和してゆける心の廣さと、呑氣さをもつて

ゐらつしやる。それで平和を愛す。調和を愛すと云つたつてあたりまいです。しかし實力相當な生活をしないもの、實質相當の生活の出來ないものが、出來ないなりに平和にしろ、とか調和を愛せとか云はれたつて承知は出來ないでせう。どんなものです。

神樣。それは自己の力を知つてゐるものと云ふことだ。お前は俺に馬鹿と云はれりや、それでよろこんで尻尾をふるそれはお前が利口だからだ。一たい、自分が蟲のいゝことをしながら、蟲のいゝことを望みながら、不當のことをして、調和を求め、平和をのぞむのは、のぞむのがまちがつてゐる。處が俺は不當なことはしない。俺は好きなことはするが、他人に嫌ひなことはさしはしない。俺を愛しもしないものに愛しろとは云はない。俺にくれたくないものを俺にくれろとは云はない。だから俺達は調和を愛する資格があるのだ。人間どもは、境遇に支配されて、少しでも得をしやう、少しでも我意をのさばらさう、樂をしやう、偉がらうと云ふのだから、一方その犧牲者が出來ないわけにはゆかない。反動は反動を生んで、殺しあはないでは我慢が出來ない。殺しあふのが正當になつてくる。どうしてそんな奴に、平和や、調和が得られるものか、それが得られるためには心がけをかへて、不當な利益を得てゐるものが、それだけ兄弟姉妹に讓步しなければならない。處が讓步しだすと切りがない、生きられなくなつてくる。元も、子もとられてしまふ。今度は自分がとる方にならなければならない。うるさいことだ。ほつとけ、ほつとけ、その内には自分で目がさめる。もうそろ〳〵さめだしたかも知らないよ。一寸見て來たらいゝだらう。

天使。さめましたか知らん。

神樣。さめたかも知れないね。

天使。それなら一寸見て來ます。

神様。見て來たらいゝだらう。
天使。さようなら。(退場)
(神様と滑稽天使、高笑ひする。電鈴なる)
神様。隣りの宇宙から何か云つて來たな。(器械をとりあげ)もし〳〵、さうです。あしたですか、かまいません。是非來て下さい。さうですね。お互に名前をつけないと不自由ですね。いつか、集れるだけ宇宙の神が集つて相談してもよろしいね。さうですまだ野蠻な處はこまりますが、利口なよく物のわかつたものなら面白いでせう。何人でおいでになります。あなたと他に、十天使ですか、承知しました。それでは明日お待ちしてゐます。さよなら。
滑稽天使。とう〳〵明日くるのですか。
神様。さうだ。
滑稽天使。となりの神様はどんな顔してゐるでせう。
神様。まあ、俺と伯仲の間だろうな。元は同一なのだから、それが完全に發達したと云ふにちがいないのだから、つまり俺のやうなものだらう。
滑稽天使。どつちの宇宙の方が大きいでせうな。
神様。向ふの方が少し大きいかも知れない。
滑稽天使。それでは肩身がせまいわけですな。
神様。しかし仕方がない。實質でやつけるよりは。
滑稽天使。處が實質も向ふの方が上らしいですな。もしさうだつたらどうします。向ふの神様の力があなたより強くつ

て、天使達が皆、その神様に喰ついたらどうします。

神様。さうしたら、俺もその神様に喰附いてやるが。それ程偉い奴でもなささうだ。まあ俺位いなものだらう。

滑稽天使。もう少しは偉いでせう。

神様。生意氣云ふな。

滑稽天使。たしかにあなたよりは三層倍も大きく、手の大きさはこの位いありませう。そしてあなたが何か云ふと、生意氣なことを云ふなと云つて、あなたの頭を押えつけるでせう。するとあなたは、四つんばいになつて、降参なさるでせう。

神様。馬鹿云ふな。

滑稽天使。しかしそれが本當ぢや困りますね。こないだ來た隣りの宇宙の天使に心配だつたのでそつと聞いたら、さう云つてゐました。あなたよりは比較にならない程立派な、大きな方だと云つてゐました

神様。それは本當か。

滑稽天使。本當ですとも。あなたが小さいのでおどろいてゐましたよ。

神様、嘘だらう。

滑稽天使。いゝえ、本當です。そして女にかけてもあなた以上ですから。別嬪はお目にかけない方がいゝと注意してゐました。

神様。嘘つけ。

滑稽天使。本當ですよ。

神樣。本當か。
滑稽天使。本當ですとも。
神樣。それは少し困つたな。
滑稽天使。何しろこゝにくる目的は別嬪さんを搜しにくるのが第一の目的ださうです。
神樣。馬鹿云ふな。しかしそんなに、大きくつて、立派なのか。
滑稽天使。へい左樣ださうです。上には上があるものだと云ふことが始めてわかりました。どうなさります。お困りでせう。
神樣。仕方がない。事實さうなら仕方がない。あきらめるより仕方がない。
滑稽天使。他に仕方がないのですか。いくらあなたでも。あなたはまだ全力を出したことがないとおつしやつてゐましたね、一つ全力をお出しになるとよろしい。
神樣。だがそれ以上、相手がつよければ仕方がない。さても世間は廣いものだな。
滑稽天使。どうです參りましたらう。
神樣。まだ參りはしないよ。
滑稽天使。だがあなたのお顏が少し蒼つて來ましたぜ。珍しくあなたの元氣がなくなり、額から汗が出て來ましたぜ。
神樣。噓つけ。
滑稽天使。いや本當です。
神樣。皆はそれを知つたらがつかりするだらう。そして俺に愛想をつかすだらう。

滑稽天使。それはつかしますね。今迄だつてあなたを本當の意味で愛してゐる天使なんて實に少ないのですからね。あなたが力をもつてゐるのでいや／＼云ふことを聞いてゐるものが多いのですからね。

神樣。お前もその一人だらう。

滑稽天使。いゝえ、殘念ながら私はあなたを愛してしまつてゐるのです。どんな神が出て來ても、私の尻尾は動きません。

神樣。あてにはならないな。

滑稽天使。皆があなたから背いたらどうなさりますかね。

神樣。俺は平氣でゐてやるよ。俺は無益な煩悶はしないよ。自分の力を知つてゐるから。不可能なことはのぞまない。だが本當に隣りの神樣はそんなに偉いのか、お前の聞いたことを委しく話してくれ。

滑稽天使。出來るだけ本當のことを申しませう。お怒りにならない約束をして戴かないと饒舌れません。

神樣。怒らない。

滑稽天使。それなら申します。私は本當のことを遠慮なく申します。私は心配してかの使者にそつとたづねました。あなたの神樣はどんな方だ。私の神樣より大きいか。すると彼の男は答へました。正直に申しますが、どんなことを私が申しましてもお怒りになりませんね。

神樣。怒らないと云つたら怒らない。

滑稽天使。すると彼の使者は答へました。大きさはまづ同じだと申しました。

神樣。それは本當か。」

滑稽天使。本當で御座います。それで私も安心していろ〳〵のことを聞きましたら、宇宙の大きさも、はつ切りしたことはわからないが、宇宙のはづれから、こゝまでは、お隣りさんのはづれから神の宮迄よりも、三尺三寸程長かつたと申しておりました、それだけこちらの方が大きいだらうとのことで御座いました。尤も宇宙は丸形ではありませんから、或は向ふの方が大きいかも知れませんが、何に大したちがいはないと思ひます。隣りの事まで氣になる處を見ると、少しあつちの方が小さいやうにも思はれますが、あてにはなりません。

神樣。そんならさつき云つたことは皆嘘なのだな。

滑稽天使。へー。一寸おどかしてあげたのです。

神樣　馬鹿！　それなら明日の用意はすつかりお前にまかせるから、皆と相談していゝやうにしてくれ、俺は一寸之から出かけてくるから。（退場）

滑稽天使。いつてゐらしやい、又何かに化けて行つてゐらつしやい。とう〳〵行つてしまつたな。隣りの神樣はどんな奴かな。うちのより立派だと少し困るな。だがうちの大將の方がきつと立派だらう。どれ掃除でもするかな。

九　（暮）

女の天使。（登場）神樣。神樣。大變ですよ。

神樣。なんだ。（目をこすりながら起きる）

女の天使。あの火は何の火でせう。へんな火が三つこつちに向つて彗星のやうにとんで來ますよ。

神樣。おどろくことはない。

女の天使。それでもあの火の色は、今迄に見たことのない色ですよ。それにこつちに向つてとんで來ますわ。

神樣。本當に見たことのない色してゐる。わかつた。あれは隣りの宇宙の神樣だ。さう云へば今日くると云つてゐた。

女の天使。それだつてまだ夜中よ。あの星を見て御覽なさい。

神樣。それでも俺の宇宙にはあんな光りを出す奴はゐない。

女の天使。やつて來ますわ。私なんだか氣になりますわ。

神樣。氣にしたつて仕方がないよ。くるものはくるし、來ないものは來ない。來たらその時、最上の力を出しさへすればいゝのだ。安心してゐるといゝ。俺は、無益な心配はしないことにしてゐる。

女の天使。それでも來ますわ。

神樣。くるものはこさしておいたらいいだらう。それより、お前の歌でもきかしてくれ。まさか、この室には入つて來まいから安心しろ。

女の天使。私、心配で歌なんか唱へませんわ。

神樣。臆病ものだな。それなら俺が笛を吹いてやらう。（笛をふく）どうだ。氣が靜まつたらう。

女の天使。本當に聞いてゐる内は夢中でしたわ。

（神又笛をふく。覆面の神窓から二人の從者をつれて登場。神は氣がつかないふりして笛を吹く、女はきゝ惚れて氣がつかない。）

神樣。よく來たね。

覆面の神。僕は君が待つてゐるやうな者かどうか知らない。たゞ一寸逢つて見たいのでやつて來た。

神様。よく來たね。まあ、其處に腰かけ玉へ。誰か。

覆面の神。いや、誰もよばないでくれ玉へ。こゝにゐる天使はかまわない。僕はなぜそつと來たか。それは君と僕とどつちが、力が強いか、又どつちが、この宇宙を支配することが必要か、それを知りたくつて來たのだ。

神様。僕は君と力の競爭をしやうとは思はない。僕は力と云ふものをつかつて君に勝つた處がそれが自分の自慢にならないことを知つてゐる。僕と君とは力の關係で關係をきめるのはよしたいものと思つてゐる。強いものが弱いものに勝つ、それは地獄での事實で、天界の事實ではない。

覆面の神。それならこゝでは何が力をもつてゐるのだ。

神様。こゝでは愛だ。生命だ。心のよろこびだ。深いよろこびを與へる力をもつものが勝利者だ。こゝでは天使の魂をよろこばす力をもつものが尊敬される。

覆面の神。それなら、君は天使の心をよろこばす力をもつてゐるのだね。處が、天使達のうちでは、君を神にしておくのをよろこばないものが多いと聞いてゐる。しかしそれ等のものはたゞ君の力を恐れてゐる。

神様。それはそう云ふ天使も、澤山の天使の内にはゐるだらう。ものには例外があるから。星にだつて軌道をふむのを好まない奴がある。しかし僕は何處までも暴力で天界がおさまるとは思はない。もしそれで無理におさめたら、その時は天界は天界ではない。そして天使は天使ではない。

覆面の神。だが強大な力の持ちぬしが出て來て、そして君の腕をかう握つたらどうする。

神様。(その絶大の力におどろき、又痛さを耐えながら)握らしたいだけ握らしておく、他に方法がなければ。

覆面の神。(手をはなし)この力が君に命令したらどうだ。それでもまだ力はつまらないものと思ふか。

神樣。腕力は天界では流行しない。それは野蠻なこと、地獄的なこと、禮儀を知らぬことゝして嫌はれる。勿論一時は、暴力は勝つだらう。しかしそれは天使の心を喜ばさない。又それで天界を支配したものは自分の心の空虚さにへたばるだらう。それは稀有な花園があるのを奪はうと思つて、その花園を破壊しつくしたやうなものだ。占領は出來るだらう。だが其處に花園は出來ない。そして占領した人の心を喜ばさない。花園は再び出來るかも知れない。しかしその時は、神の愛によつて花園を支配した時だ。立派な寶玉がある。それがほしいからと云つて、それを破壊してはならない。この宇宙は、まだ隅々や、小さい部分では愛は支配しつくしてゐない。愛の支配しない處には暴力が巾をきかすのは當然だ。しかし暴力で天界を支配しやうと考へ思ふな。それは天界を地獄にする。少くも天使の心は君に從はず、よし從つてもそれは外見だけだ。心ある天使は、生命天使も、道徳天使も、その他の天使も君に魂の光りをおくることをしまい。それなしに我々は生ることは永遠に罰せられることだ。君が僕に勝たうとするならそれはたゞ愛による。君の愛が僕のよりも強く、この宇宙をくまなくつゝみおゝせたら、僕は甘じて、君にこの宇宙をさゝげる。それは僕にとつて宇宙を愛することだから。しかしそれには君は僕よりも禮儀を知り、僕よりも謙遜で、僕よりも平和を好み、他のものゝ不幸に同情がゆきわたらなければならない。

覆面の神。理窟はどうでもいゝ。俺は君をこゝから逐ひ出す。そしてこの宇宙を俺のものにする。

神樣。だめだよ。僕はこの宇宙のために、君の云ふことはきかない。僕はまだ力が十分とは云はない。僕の光は地獄や下界にまではまだ十分に達してゐない。其處ではまだ暴力や、不正が時を得てゐる。しかし君は僕程迄も、この宇宙を愛してもゐないし、又君の愛の光は僕よりも遠くまで照すと云ふわけにはゆかない。

覆面の神。それならこの女の天使に聞いて見よう。(覆面を荒々しくとる)さあ、俺のこの腕を見ろ。俺は自分を尊敬し

ないものにたいしては罰を與へる。この神は自分を尊敬しないものも罰しないと云つてゐる。さあどつちを尊敬する。どつちがお前は神として恐れるか。默つてゐてはわからないぢやないか。早く云へ。俺の方を撰ぶと云へ。云はないか。(持つて來た杖でテーブルを力一杯たゝく、大理石テーブルは二つに切れる)さあ早く云へ。

女の天使。(立ち上り、靜かに云ふ)。私は私達の神樣を愛します。

覆面の神。なんだつて、もう一度云つて見ろ。

女の天使。私は私の神樣を愛します。

覆面の神。さうか、俺を愛するのだね。そしてこの宇宙を俺に獻げてくれるのだね。

女の天使。ちがいます。私はあなたを輕蔑し憎みます。私はこの私の神を限りなく愛します。

覆面の神。(打ち)之でもか。こんなにお前を打つても默つて見てゐる意氣地なしをお前は愛するのか。この意氣地なしを笑つてやれ。この神はお前を愛すると云つてゐるが、自分が打たれるのが怖くつて、ぢつとしてゐる。

女の天使。私は、私の神樣を愛します。愛します。愛します。

覆面の神。馬鹿、馬鹿、馬鹿。(亂打する)

神樣。よせ。

覆面の神。(神をうち)、こゝから逃げろ、さうすれば之を許してやる。

神樣。さあ、俺を打て。俺は打たれるに從つて力が加はるぞ。十ぺん打てるなら打て見ろ。十ぺん打つた時、お前のその杖はへし折られ、お前の腕の力はしなびてしまうだらう。さあ打て。力限りうて。打てまい。

覆面の神。そんなことがあつてたまるものか。打つとも、打つとも、打つとも。

神様。一つ。二つ。三つ。さあ打て。もう參つたか。

覆面の神。打つとも。

神様。四つ。五つ。六つ。遠慮なく打て。もう打てないのか。

覆面の神。打てなくつて。

神様。七つ。さあ、あと三つだ。力限り打つて見ろ。(段々神の方が攻めつけてゆく。覆面の神やつと打つ)。感心。感心。さあもう二つだ。

覆面の神。死んでも打つぞ。

神様。九つ。十。(杖十目に打つと共に折れる。覆面の神達逃げ出す)あつはゝ。

一〇

神様。(椅子によつて居眠りしながら苦しさうに笑ふ)あつはゝ。

(滑稽天使。登場)

滑稽天使。呑氣な方ですね。居眠りしてゐらつしやつたのですか。隣りの宇宙の神様が遠くから來るのが見へたと知らせがありました。

神様。さうか。皆のものに知らせろ。どれ迎へにゆくかな。(二人退場)

(男や女の天使登場)

女の天使一。隣りの宇宙の神様はどんな髮してゐるでせう。

女の天使二。矢張り私達とは少しちがうでせうね。
女の天使三。それは隨分ちがうと思ひますわ。
女の天使四。さうでせうか。私は矢張り同じだと思ひますわ。神様のくせに、之より他の髮してゐたら可笑しいわ。
女の天使五。私は見たらきつと吹き出したくなると思ひますわ。第一私は目玉も二つぢやなくつて、一つか三つか、四つと思ひますわ。
（皆　笑　ふ）
女の天使四。それは目は二つでせう。一つや、三つなんてつりあいがわるくつて、第一ものを見るのに、一つでは不自由でせう。それに三つある必要はないわ。神様ですもの不足なものや、くだらないものは、いくらお隣りさんだつてないと思ひますわ。
女の天使一。私はきつと角が生へてゐるかと思ふわ。
女の天使二。生へてゐれば一本でせうか、二本でせうか。
女の天使三。そんなものは生へてはゐないでせう。それより私、きつと素敵に立派な方だと思ふわ。こゝの宇宙よりも、お隣りの方がきつと大きくつて、立派だと思ふわ。
女の天使五。私はさうは思へませんわ。こゝより立派な宇宙は考へられませんもの。
女の天使四。それはあなたに考へられなくつたつて神様には考へられるわ。
女の天使五。そんならあなた隣りの宇宙へ行つたらいゝわ。
女の天使四。まあひどい。（打つ眞似をする）

男の天使一。僕はさうは思はない。それは、こつちより隣りの宇宙の方が平等かも知れない。しかし僕は星の大きさが、どれも平等で、星の光りが、どれも同色でなければならないとは思はないよ。

男の天使二。僕だつて同色になれと云ふのではない。たゞ價値だけは同一にするのが本當と思ふ。僕が神ならこんなに不平等なつくり方はしない。

男の天使三。だが僕は小さい星の方が大きい星より不幸だとは思はない。むしろ小さい方が歩く處も小さいし、樂だと思ふよ。價値はプラス、マイナスできまる。なんでも大きければ價値があるとは云へない。プラスが多いだけマイナスが多かつたら、プラスが少なくつてマイナスの少ないのと同一價値だと思ふね。

男の天使四。ともかく僕は大きな星の方が小さい星よりずつと幸福だと思ふ。實際小さい星は、可哀さうなものだ。迷兒になつたつて誰も何とも思はしない。存在さへ認めないのだから。

女の天使一。あの女の天使はまだ見へないの。

女の天使二。あの人は幸福か、どうか、と皆とないだ議論があつたのですよ。

女の天使三。あの女の何處が神樣に氣に入つたのでせう。私は一晩考へて見ましたが、見つかりませんでしたよ。

女の天使四。それは好き好きですわ。私はあの方を矢張り奇麗な方だと思ひますわ。

女の天使三。へー、さうですかね。

女の天使五。そんな話はよしませう。好き同志は好き同志で勝手にさしておけばいゝわ。

女の天使一。萬歳、と云ふ聲が聞へましたわ。きつといらつしたのよ。隣りの神樣が來ても笑つてはいけませんよ。

女の天使五。大丈夫。

男の天使一。いよ〳〵來たね。僕はこの宇宙より外に宇宙があるとはてんで考へても見なかつた。しかし宇宙がある以上はそれ以上のものがなければならないと思つてゐた。宇宙以外が空なわけはないと思つてゐた。無限と云ふものは無限のさきに又無限があることを意味してゐるからね。

(音樂が聞へ出す)

男の天使二。しつ。やつてくるぞ。

(皆起立する。兩宇宙の神樣話しながらくる。天使の男女、ついてくる)

神樣。さうだ、本當に、君がこの世にゐてくれるとは知らなかつた。まあ其處に腰かけてくれ玉へ。皆も遠慮なく腰かけたらいゝだらう。

隣りの神樣。どうか御遠慮なく。私を君達の友達と思つて下さい。

接待の天使。恐れ入ります。

神樣。本當に僕は君はもつと恐ろしい神かと思つてゐた。實は内々心配してゐた。しかしあへば矢張り君は神だけのことがある。僕の心はすぐ君の心にふれた。不安は何處かへ行つて、千萬億年の知己を得たやうなものだ。

隣りの神樣。僕も君を見た時、千萬億年の知己だと思つた。求めてゐた者にとう〳〵あつたと思つた。僕は來た甲斐があると思つた。之から仲よく出來ると思ふと實にうれしい。皆さんの元氣さうな樣子を見るのも實にうれしい。

神樣。どうだ皆、お隣りの神樣の萬歲をとなへやう。萬歲。萬歲。萬歲。

皆。萬歲。萬歲。萬歲。

隣りの神樣。ありがたう。僕は實にうれしい。君達に僕の祝福を捧る。

神様。ありがたう。僕達は君が本當の神であると云ふことを知つた。君に逢つたよろこびは、眞理や、美や、生命にまのあたりあつた時と同じよろこびを感じる。僕はこんな隣りをもつたことを實に感謝する。もし君がわからずやだつたら隨分困ると思つた。

隣りの神様。大丈夫。僕達の宇宙だつて、少しは小さいかも知れないが、馬鹿にはしたまうな。矢張り、一番ものゝわかつた、一番、平和と美を愛する者でなければ、彼等は尊敬しない。調和の王冠を戴けるものが神の第一の資格だ。さう君は思はないか。

神様。思ふね。恐ろしいものが神になるそんなことは許されてはないことは知つてゐた。しかし宇宙がちがうと又どんな法則がその宇宙を支配してゐるかわからないと思つてゐた。

隣りの神様。僕も來て見るまではもつと珍らしいものに逢ふかと思つてゐた。矢張り僕達は兄弟であり、隣り同志であることを知つた。矢張り僕達は同じ神の子であることが感じられる。

神様。どうだ。もう一杯のまないか。

隣りの神様。ありがたう。（つれに）お前達も遠慮なく戴いたらいゝだらう。この酒は僕達の處と實に似てゐる。君が好きなら今度とゞけやう。

神様。ありがたう。途中で悪くならないかね。

隣りの神様。大丈夫のやうに荷づくりさせやう。

神様。皆、一つおどつたらどうだ。

隣りの神様。是非拝見したいものです。

（音樂始まりおどる）

隣りの神様。僕はこんなうれしいことはない。君とかうやつて並んで、皆のよろこびを見てゐる程うれしいことはない。僕は皆に一こと御禮を云はしてもらはう。

神様。是非どうぞ。

隣りの神様。皆さん。今日はこゝに參りまして、心からの御歡迎を受けて、私は何んと云つていゝかわからない程、よろこびに滿されます。我々は今までお互の存在さへ知らなかつた。處が今日は君達と御友達になれる。御互に助けあふことが出來る。お互の經驗や智識の交換が出來る。お互に永い歷史で得たお隣りの寶物を自分のものにすることが出來る。私達は今日私達はお隣り同志であることを知ると共にいろ〳〵の點で教はることの多いことをよろこびます私はこの宇宙の立派さに驚嘆しました。そして美と愛の光りが宇宙のすみ〴〵まで行つてゐるのをうれしく思ひます。私達の所へどうか皆さんも遊びに來て下さい。少しは珍らしいものもお目にかけられると思ひます。皆さんの内で、何か聞きたいことがありましたら遠慮なくおきゝ下さい。（沈默）

天使。それならば一寸おたづねしますが、私のおります世界に、かう云ふ人間（小さい人形を見せ）がおります。あなたの宇宙にはかう云ふ生きものはおりませんか。

隣りの神様。一寸お見せ下さい。えゝ、ゐたことがあります。今は滅亡しましたが。

天使。えゝ、滅亡した？　あなたはそれをお救ひにならなかつたのですか。

隣りの神様。彼等はよろこんで死んだのです。彼等は實に不思議な生物でした。ある時は私達にまけない程利口です。しかしある時は、他のどの生き物に比べても殘酷です。狂氣ぢみます。しかし一方臆病で、平和好きで、名譽心が强

く、要するにいろ〳〵の性質をもつてゐました。調和的なあらゆる美點と、不調和的なあらゆる缺點をもつてゐました。だが滅亡する一萬年程前に、彼等は不意に目ざめました。そして不調和的な性質を公明正大な生長慾と、仕事と、美の創造とに變形さしました。そして調和的な性質から、協力的な社會組織を生み、全體と部分が同時に生る骨をのみ込みました。又自分達にゆるされてゐるあらゆる智識と經濟と努力で、その世界の持つてゐる、あらゆる自己に役立つものを、最高の方法に役立たせました。始めはそれで便利や、物質的の慾望を滿してゐました。その爲に一時は反つて性質が惡化したやうに見えましたが不意に精神的のよろこび、魂のよろこびを完全に滿すことの必要を知りました。そしてそれを完全に生かすことによつて彼等はよろこんで働き、よろこんで遊び、よろこんで生き、よろこんで死にました。それ等あらゆる生活を彼等はよろこびにかへることを會得し、ついに彼等の星が滅亡した時、大會堂に生き殘つてゐたものが集り、宇宙を讃美し、神を讃美し、自分達の生命の再生を讃美して、實に見上げるやうな死をとげました。我々は何か苦しい時や、心をいためたり、怠惰心が起つたり、不平が起つたりする時、お互にかう云つて誡しめあふのです。人間を見ろ。人間。あの小ぼけな虫けらにおとることを恥ないか。人間を手本にしろ。

天使。(思はずすゝみ)へー。そんなにまで立派になりましたか。

隣りの神様。えゝ、思ひもかけぬ時、不意に立派になりました。それまでは皆に嫌はれてゐたのですが。

天使。さうですか。どうもありがたう御座いました。

神様。本當に面白い話ですね。どれ、この頭にそんな力が入つてゐるのですかね。一つ餘興に皆で人間萬歳をとなへてやりませう。あなたと二人で音どをとつてやりませう。

隣りの神様。いゝでせう。

神様。それならやりませう。

神様。
隣りの神様。 ｝人間萬歳、萬歳、萬歳。

皆。萬歳、萬歳、萬歳。

天使。ありがたう。ありがたう。僕は死んでもいゝ。（泣き出す）

滑稽天使。泣くな。泣くな。いゝ子さん泣くな。俺も死にたくなつて來たぞ。あんまりうれしくつて、神様の仲のいゝのを見てゐるのは實にうれしいものだ。二人の神様。萬歳。萬歳。萬歳。

皆。萬歳。萬歳。萬歳。

神様。さあ、賑かな曲をやれ。皆おどれ、おどれ、元氣におどれ。

（音樂始まる皆おどる）

――（終り）――



おぎん

芥川龍之介

元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてゐた。しかし迫害が烈しいだけに、「萬事にかなひ給ふおん主」も、その頃は一層この國の宗徒に、あらたかな御加護を加へられたらしい。長崎あたりの村々には、時々日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞ふ事があつた。現にあの さん・じよあん・ばちすた さへ、一度などは浦上の宗徒みげる彌兵工の水車小屋に、姿を現したと傳へられてゐる。と同時に惡魔も亦宗徒の精進を妨げる爲、或は見慣れぬ黑人となり、或は舶來の草花となり、或は又網代の乘物となり、屢同じ村々に出沒した。夜晝さへ分たぬ土の牢に、みげる彌兵工を苦しめた鼠も、實は惡魔の變化だつたさうである。彌兵工は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙りになつた。——

その元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

やはり浦上の山里村に、おぎんと云ふ童女が住んでゐた。おぎんの父母は大阪から、

はるばる長崎へ流浪して來た。が、何も仕出さない内に、おぎん一人を殘した儘、二人とも故人になつてしまつた。勿論彼等他國ものは、天主のおん教を知る筈はない。彼等の信じたのは佛教である。禪か、法華か、それとも淨土か、何にもせよ釋迦の教である。或佛蘭西のジエスウイツトによれば、天性奸智に富んだ釋迦は、支那各地を遊歷しながら、阿彌陀と稱する佛の道を說いた。その後又日本の國へも、やはり同じ道を教へに來た。釋迦の說いた教によれば、我々人間の靈魂は、その罪の輕重深淺に從ひ、或は小鳥となり、或は牛となり、或は又樹木となるさうである。のみならず釋迦は生まれる時、彼の母を殺したと云ふ。釋迦の教の荒誕なのは勿論、釋迦の大惡も亦明白である。（ジアン・クラツセ）しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、さう云ふ眞實を知る筈はない。彼等は息を引きとつた後も、釋迦の教を信じてゐる。寂しい墓原の松のかげに、末は「いんへるの」に墮ちるのも知らず、はかない極樂の夢を見てゐる。

しかしおぎんは幸ひにも、兩親の無知に染まつてゐない。これも同じ山里村の農夫、憐みの深いじよあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぷちずものおん水を注いだ上、まりやと云ふ名を與へてゐた。おぎんは釋迦が生まれた時、天と地とを指さしながら、「天上天下唯我獨尊」と獅子吼した事などは信じてゐない。その代りに「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童貞さんた・まりあ様」が、自然と身ごもつた事を信じてゐる。「十字架に懸り死し給ひ、石の御棺に納められ給ひ、」大地の底に埋められたぜすすが、三日の後よみ返つた事も信じてゐる。御糺明の喇叭さへ響き渡れば、「おん主、大いなる御威光、大いなる御威勢を以て天下り給ひ、土塊になりたる人々の色身を、もとの靈魂に併せてよみ返し給ひ、善人は天上の快樂を受け、又惡人は天狗と共に、地獄に墮ちる」事も信じてゐる。殊に「御言葉の御聖德により、ぱんと酒との色形は變らずと雖も、その正體はおん主の御血肉となり變る」尊いさがらめんとも信じてゐる。

おぎんの心は兩親のやうに、熱風に吹かれた砂漠ではない。素朴な野薔薇の花を交へた、實りの豊かな麥畠である。

おぎんは兩親を失つた後、じよあん孫七の養女になつた。孫七の妻、じよあんなおすみも、やはり心の優しい女である。おぎんはこの夫婦と一しよに、牛を追つたり麥を刈つたり、幸福にその日を送つてゐた。勿論さう云ふ暮らしの中にも、村人の目に立たない限りは、斷食や祈禱も怠つた事はない。おぎんは井戸端の無花果のかげに、大きい三日月を仰ぎながら、屢熱心に祈禱を凝らした。この垂れ髮の童女の祈禱は、かう云ふ簡單なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん禮をなし奉る。流人となれるえわの子供、おん身に叫びをなし奉る。あはれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらさせ給へ。あんめい。」

すると或年のなたら（降誕祭）の夜、惡魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはひつて來た。孫七の家には大きい圍爐裡に、「お伽の焚き物」の火が燃えさかつてゐる。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす樣の産湯の爲に、飼桶に水が湛へられてゐる。役人は互に頷き合ひながら、孫七夫婦に繩をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然惡びれる氣色はなかつた。あにま（靈魂）の助かりの爲ならば、如何なる責苦も覺悟である。おん主は必我等の爲に、御加護を賜はるのに違ひない。第一なたらの夜に捕はれたと云ふのは、天寵の厚い證據ではないか？　彼等は皆云ひ合せたやうに、かう確信してゐたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行つた。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの國にお生まれなされたおん若君樣、今はいづこにましますか？　おん讃め尊め給へ。」

惡魔は彼等の捕はれたのを見ると、手を拍つて喜び笑つた。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらし

い。悪魔は一人になつた後、忌々しさうに唾をするが早いか、忽ち大きい石臼になつた。さうしてごろごろ轉がりながら、闇の中に消え失せてしまつた。

じよあん孫七、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるやうに、いろいろの責苦に遇はされた。しかし水責めや火責めに遇つても、彼等の決心は動かなかつた。たとひ皮肉は爛れるにしても、はらいそ（天國）の門へはひるのは、もう一息の辛抱である。いや、天主の大恩を思へば、この暗い土の牢さへ、その儘「はらいそ」の莊嚴と變りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、屢彼等を慰めに來た。殊にさういふ幸福は、一番おぎんに惠まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすたが、大きい兩手の手のひらに、蝗を澤山掬ひ上げながら、食へと云ふ所を見た事がある。又大天使がぶりえるが、白い翼を疊んだ儘、美しい金色の杯に、水をくれる所を見た事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釋迦の教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情を張るのか、さつぱり理解が出來なかつた。時には三人が三人とも、氣違ひではないかと思ふ事もあつた。しかし氣違ひでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獸とか、兎に角人倫には緣のない動物のやうな氣がし出した。さう云ふ動物を生かして置いては、今日の法律に違ふばかりか、一國の安危にも關る譯である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも燒き殺す事にした。（實を云へばこの代官も、世間一般の代官のやうに、一國の安危に關るかどうか、そんな事は殆ど考へなかつた。これは第一に法律があり、第二に人民の道德があり、わざわざ考へて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。）

じよあん孫七を始め三人の宗徒は、村はづれの刑場へ引かれる途中も、恐れる氣色は見えなかつた。刑場は丁度墓原

に臨つた、石ころの多い空き地である。彼等は其處へ到着すると、一々罪狀を讀み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじよあんなおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云ふ順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦の爲、急に年をとつたやうに見える。孫七も髭の伸びた頰には、殆ど血の氣が通つてゐない。おぎんも――おぎんは二人に比べると、まだしもふだんと變らなかつた。が、彼等は三人とも、堆い薪を踏まへた儘、同じやうに靜かな顏をしてゐる。

刑場のまはりにはずつと前から、大勢の見物が取り卷いてゐる。その又見物の向うの空には、墓原の松が五六本、天蓋のやうに枝を張つてゐる。

一切の準備の終つた時、役人の一人は物々しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん敎を捨てるか捨てぬか、少時猶豫を與へるから、もう一度よく考へて見ろ、もしおん敎を捨てると云へば、直にも繩目は赦してやると云つた。しかし彼等は答へない。皆遠い空を見た儘、口もとには微笑さへ湛へてゐる。

役人は勿論見物さへ、この數分の間位ひつそりとなつたためしはない。無數の眼はぢつと瞬きもせず、三人の顏に注がれてゐる。が、これは傷しさの餘り、誰も息を呑んだのではない。見物は大抵火のかかるのを、今か今かと待つてゐたのである。役人は又所刑の手間どるのに、すつかり退屈し切つてゐたから、話をする勇氣も出なかつたのである。

すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉へた。

「わたしはおん敎を捨てる事に致しました」。

聲の主はおぎんである。見物は一度に騷ぎ立つた。が、一度どよめいた後、忽ち又靜かになつてしまつた。それは孫七が悲しさうに、おぎんの方へ振り向きながら、力のない聲を出したからである。

「おぎん！　お前は悪魔にたぶらかされたのか？　もう一辛抱しさへすれば、おん主の御顔も拜めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な聲をかけた。

「おぎん！　おぎん！　お前には惡魔がついたのだよ。祈つておくれ。祈つておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。唯眼は大勢の見物の向うの、天蓋のやうに枝を張つた、墓原の松を眺めてゐる。その内にもう役人の一人は、おぎんの繩目を赦すやうに命じた。

じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたやうに眼をつぶつた。

「萬事にかなひ給ふおん主、おん計らひに任せ奉る。」

やつと繩を離れたおぎんは、茫然と少時佇んでゐた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪きながら、何も云はずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉ぢてゐる。おすみも顏をそむけた儘、おぎんの方は見ようともしない。

「お父樣、お母樣、どうか勘忍して下さいまし。」

おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その譯はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、氣のついたせゐでございます。あの墓原の松のかげに、眠つていらつしやる御兩親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お墮ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはひつたのでは、どうしても申し譯がありません。わたしはやはり地獄の底へ、御兩親の跡を追つて參りませう。どうかお父樣やお母樣は、ぜすす樣やまりや樣の御側へ、お出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。………」

おぎんは切れ切れにさう云つてから、後は啜り泣きに沈んでしまつた。すると今度はじよあんなおすみも、足に踏ん

だ薪の上へ、ほろほろ涙を浮し出した。これからはらいそへはひらうとするのに、用もない歎きに耽つてゐるのは、勿論宗徒のすべき事ではない。じよあん孫七は、苦々しさうに、隣の妻を振り返りながら、癇高い聲に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？　天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは　それは――」

おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶやうに言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません。唯あなたの、――あなたのお供を致すのでございます。」

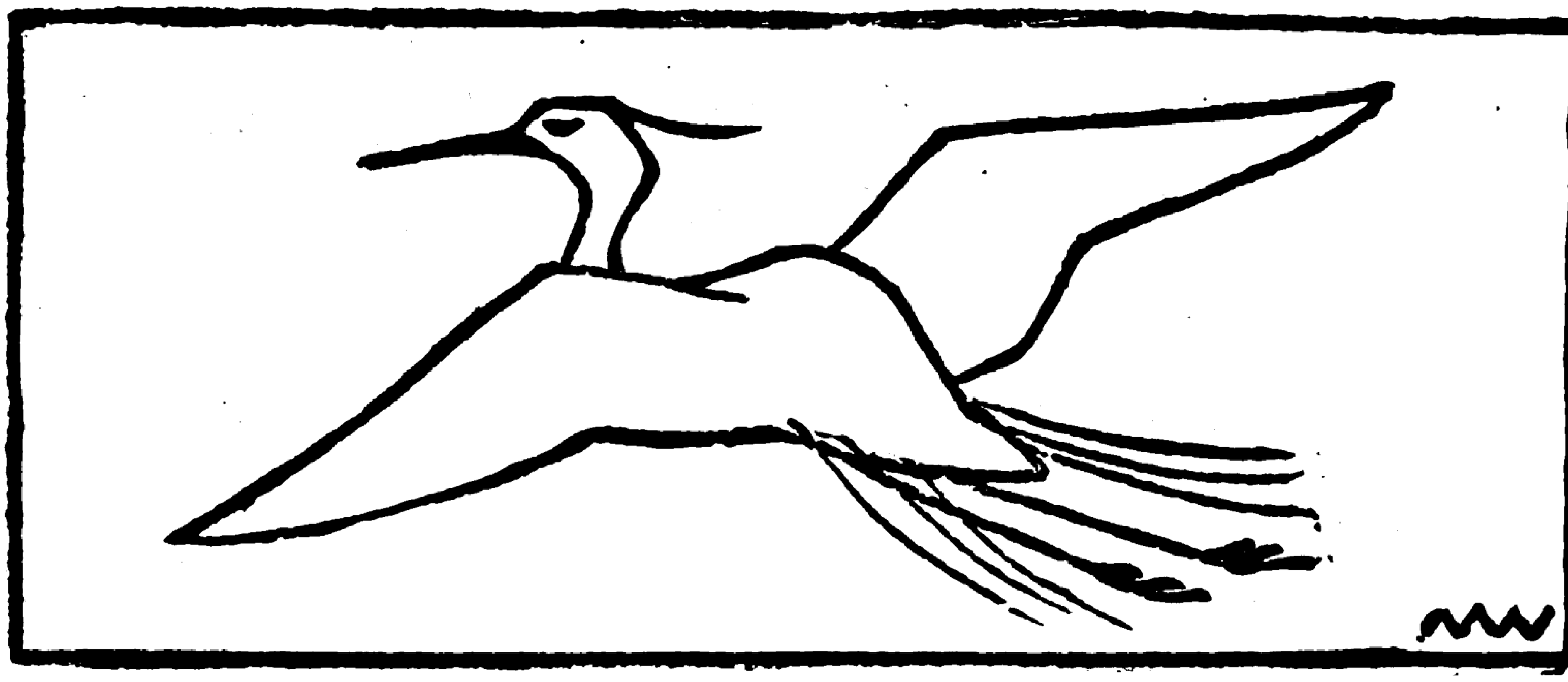
孫七は長い間黙つてゐた。しかしその顔は蒼ざめたり、又血の色を漲らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼のあにまを見てゐるのである。彼のあにまを奪ひ合ふ天使と悪魔とを見てゐるのである。もしその時足もとのおぎんが、泣き伏した顔を擧げずにゐたら、――いや、もうおぎんは顔を擧げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、ぢつと彼を見守つてゐる。この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪氣な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！　いんへるのへ参りませう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、――みんな悪魔にさらはれませう。」

孫七はとうとう堕落した。

これはこの國に多かつた、奉教人の受難の中でも、最も恥づべき躓きとして、後代に傳へられた物語である。何でも

彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなつた時には、天主の何たるかをわきまへない、見物の老若男女さへも、悉彼等を憎んだと云ふ。これは折角の火炙りも何も、見そこなつた遺恨だつたかも知れない。更に又傳ふる所によれば、惡魔はその時大歡喜のあまり、人面の梟になりながら、夜中刑場に啼いてゐたと云ふ。これもさう無性に喜ぶ程、惡魔の成功だつたかどうか、作者は甚懷疑的である。



火のついた踵

中條百合子

人物

奥平振一郎　統計學者（卅才）
みさ子　振一郎の妻（十八才）
橋詰英一　みさ子の從兄（廿四才）
谷　三郎　英一、みさ子の友人（同）
吉澤朝子（登場せず）　みさ子の友達（十九才）
女中　きよ

場所
東京。

時
現代。或五月。

第一

奥平の客間

上部の壁や天井は白く、下部を、暗緑色の壁紙で覆ふた洋室。

正面は、淺く廣いヌツク。大きい三つの窓に、極く薄い肉桂色の窓帷が、黒い鮮やかな飾紐で片よせられ、簡素な形のマホガニーの圓卓子、布張の椅子、たつぷり薔薇を盛つた花瓶等が置かれて居る。

上手の壁際には、大きな金縁の額。書棚。長椅子。重い暗色の垂帳で、隣室と境して居る。

下手は、一間半ばかり、透硝子のフォルディング・ドーアになつて居る。前後三尺づゝの壁間は、ヌツクよりに彫像、繁つた灌木の鉢。下方には、背の高いヴイクター、二人掛の腕椅子等。硝子の折疊扉から差す日が、如何にも晴々と、床に流れ、家具を照し、扉の金色の把手や、鉢植の新緑を爽やかに耀かせる。

幕開く。舞臺は空虛。

光りや色彩の快感が、徐ろに渾然とした健康や活力の感を看る者に味はさせた頃、上手の垂帳から、みさ子が出て來る。(藤色のネルの着物、全體、さつぱりした服裝)

みさ子。(部屋に入り乍ら、振返り)一寸此方へ來て御覧にならないこと? 綺麗よ。今日は、私がすつかり大掃除をしたんですもの。

振一郎。(默つて入つて來る。黒つぽいセルの着付。四邊を見廻し、ほう。綺麗だね。

みさ子。此部屋は、日がよく差すから、猶氣持が好いわ。(ヌツクの方へ行く)御覧なさいませ。一寸此書棚! 案外で

せう？　私此那のが咲くとは思はなかつたわ。

振一郎。（氣がなさゝうに）よく咲いたね。

みさ子。匂ひをかひで御覧遊ばせよ。いゝぢやあないの？　ほら！（花盃を持ち、顔を埋めるやうにして匂をすひ、良人の鼻先に出す）

振一郎。うむ。いゝね。花を持つた枝は切る方が、來年の爲に好いんだよ。

みさ子。さうを。私が好きだから、どうせお部屋の花に切ることになつて仕舞ふわ。（ヌックの卓子の上に花盃を置き、（其處の椅子に坐る）貴方もおかけにならないこと？

振一郎。（ぶら／＼行つて、向ひ合はせに掛ける）英一さん達は幾時頃來るの？

みさ子。わからないの。只、お晝つからつて云つてよこした丈なんですもの。——でも、きつともうぢきに來るんでせう、どうせ日曜ですもの一日、彼の人達は暇なんだわ……（調子をかへ）貴女も今日はいゝでせう？

振一郎。さあ……。

みさ子。駄目？

振一郎。仕なければならないことがあるからね。

みさ子。（失望を抑へ）たまだからいゝぢやあないの？　一寸でいゝから一緒にお茶でも召上れよ。

振一郎。仕なければならないことを控えて、表面ばかりおつきあひをしなければならないことはないだらう？

みさ子。其は左様だわ。——だけれども——彼の人達だつて、隨分久し振りで來るんですもの……

振一郎。貴女が、ゆつくり遊んであげれば結構ぢやあないか。

みさ子。だつて……(深く顔を曇らせる、遠慮し乍ら)貴方、彼の人達の來るのがお厭なの？

振一郎。如何して？　僕が其那ことを云つたかい？

みさ子。仰云りやしないわ。けれども――若し、悦んで下さるなら、暫くの間位、皆で、氣持よく樂しんで下さるのぢやあないかと思ふの。貴方は、私獨りで遊んであげれば好いゝだらうつて仰云るけれど――さうぢやないのよ。

振一郎。僕は僕で、仕事の責任があるんだから、仕方がない。ね？　左樣でせう？　貴女や、英一さん達みたいに、遊んで居て好い人間ではないんだから。

みさ子。(淋しさうに)何だか、きめつこのやうね。私一度でも好いから、貴方にも一緒に面白く遊んで戴きたいわ。いつも、いつも――お仕事！

振一郎。其那子供のやうなことを云ふものぢやあ無い。

みさ子。(涙組み)子供のやうなことぢやあないわ。何處に、自分の好きな人も一緒に樂しまないで居るのに、平氣で嬉しがつて居られる人があつて？(強いて確かりし)ね、貴方、此から斯うしようぢやないの？　貴方が來て貰つては困るとお思ひになつたら、はつきりさう云つて頂くの。そして、私、斷つて仕舞ふわ。その方か……どんなに心持が好いか判らない……

振一郎。何も貴女の處へ來ようと云ふ人を、僕が厭だつて斷る譯はないぢやあないか、其那エゴイストぢやあ無い。

みさ子。其が間違ひだとはお思ひにならない？　來る人は、私共二人の處へ來るのよ。それだのに(涙が危くこぼれさうになる)いつも、私一人ぼつちでお相手をして、與平さんは如何なさいましたつて訊かれるの……おまけに

貴方はちつとも樂しさうでは無いんですもの——私。どうしていゝか判らなくなつて仕舞ふわ。

振一郎。判らないことは無い。貴女は僕のことなんか忘れて、愉快にすればいゝんだ。其方が、僕にとつたつて、どの位吞氣だか判らない。

みさ子。（疑はしさうに、良人を見）さう？　眞個に？

振一郎。（力を入れ）眞個に左樣だとも！　若し僕が暇で氣が向いたら、いつでも出て來て仲間に入ればいゝでせう？

みさ子。左樣なら眞個にいゝわ。（嬉しさうに）ぢやあ、後で出て來て下さること？

振一郎。いつ？　今日？

みさ子。（勿論と云ふやうに）左樣だわ。

振一郎。判らない。まあ貴女だけで接待して居てくれ。

みさ子。——其ぢやあ同じだわ……あゝ眞個に（椅子を立ち、歩き出し乍ら嘆息する）

振一郎。（氣にし）如何うしたの？

みさ子。（凝つと、憂はしげに良人を見る）私共の處でさへ斯うなんだから、他處の奥さんが、自分のお友達さへ呼ばなく成るのは無理もないと思つたの。

振一郎。物事を、何でもさう惡意にとるものぢやあない。僕の云ふ眞意を諒解しなければ、いつでも、詰らない衝突を起すばかりぢやあないか。

みさ子。（熱心に、眞個に、私も私の心の奥の奥が判つて頂き度いわ。理屈ぢやあなく、私の感じることを、貴方の胸で感じて頂きたいわ。

損一郎。――お互のことだ。……要求は限りないものだからね。人間は、五のものを與へられると、必ず七のものまで得ようとする。――

みさ子。――

損一郎。兎に角、僕は失禮させて貰ふから、皆さんによろしく。――勿論用があつたら、いつでも來ていゝんだからね。

來た垂帳の方から去らうとする。みさ子、思はず後を追ひ、何か云はうとする。が、やめ、元氣を失ひ、詰らなさうに、ぐつたりと傍の長椅子にかける。

みさ子。（ひそやかに、獨白）あゝ、どうして、あゝなんだらう……？

長椅子の端に肱をつき、凝つと前を見つめ考へに耽る。軈て、寂しさに堪へられないらしく、急に立上り、書棚の傍のベルを押す。きよ登場。

きよ。お呼びでございますか？

みさ子。あゝ、あのね、私の部屋へ行つて、やりかけのステイツチを持つて來て頂戴な。

きよ。はい。（去る）

みさ子所在無ささうにヌックの方に行き、腰を下して、花壺の花をいぢる。寧ろ、心は内へ内へと沈み、指先だけが無意識に微かな運動をすると云ふ風。

きよ。愛らしい紅色の繻子張小箱を持つて來る。

きよ。此でよろしうございますか？

みさ子。有難う——紙があつたかしら　箱の中を一寸検べる）あゝ、此でいゝわ。これからね　お客様がお越つたら、直ぐ此方へお通しして頂戴。私此處に居るから——

きよ。はい。——先程のお菓子は、いつものお皿でよろしうございますか？

みさ子。あゝいゝわ、あの花のついた方ね。

きよ、輕く會釋して行きかける。

みさ子。あ、きよや、旦那様は何をして被居るの？

きよ。（立止り）さあ……先程、御書齋の方においで遊しましたが……

みさ子。それならいゝのよ。有難う。

きよ。去る。

みさ子、卓子の上の小籠から、白い、センター、ピースを出し、ぽつ〳〵縫取を始める。けれども、心は落付かず、折々凝つと、細い指に嵌つた結婚指環を眺めたり、我と我心をなだめるやうに、髮を撫であげたりする。感じは内に滿ち、滿ち、而も、表すに途のない素振り。程なく、垂帳の裏から

きよの聲　奥様？

みさ子。（頭を抑へて居た手を落し）なに？

きよ。（部屋に姿を現し）橋詰様が被來いました。

みさ子。おひとり？

きよ。いゝえ、あの……

云ひ切らないうちに、足音。若い男の聲

谷。　僕も一緒ですよ。

谷三郎、橋詰英一、連立つて快活に現れる。

谷。　やあ！　今日は。

みさ子。(ひとりでに、活々とし)まあ、よく被來つたわね。今日は。

英一。　今日は。

みさ子。先程は、お電話をありがたう。

英一。　どう致しまして。

谷。　實はね。あの電話は、僕がせつついて掛けさせたんですよ。たまに上るのに留守をくわされては堪りませんからね。

谷、英一、各々程よい處に自分で席を定める。

みさ子。(縫取を片づけながら)左樣だつたの？　大丈夫よ。私共が二人で留守をすることなんか、一年に、ほんの數へるほか有りはしないわ。

英一。　然し、何にしろ、素晴らしい天氣だからな――戸外は、なか／＼暑いですよ。――一寸其處をあけてようござんすか？

みさ子。あゝ、どうぞ。眞個にね、すくんで居るもんだから……

英一、フォールディング・ドーアの一方を開く。

みさ子。（其方に顔を向け）あゝ好いこと。まるで夏のやうね。

　英一、席に戻る。

みさ子。此頃はいかゞ（笑顔で二人に）相變らず？

谷。別に目醒ましい程のこともありませんね。教師は教師で、生活難で萎縮し切つた講義をやるし、學生は學生で、浮腰だし……（それとなく室内を見廻す）

英一。おまけに君は、中で一等の遊動體だらう（笑ふ）——其にしても、隨分會ひませんでしたね、あの音樂會は、何でも正月頃だつたでせう？

みさ子。もう左様なること？　ミス、ペブロスカの時だつたわね、あれは——

英一。さつともう半年だ。貴女の方にこそ、興味津々たる話があるでせう？

みさ子。（笑はず）さう見えて？

英一。（稍てれ）詰問されても困るけれど……（苦笑）相變らずですね。

　きよ、茶菓を運んで來る。皆默つて居る間に、配り終り、靜に退場。沈默を破り

谷。（みさ子に）奥平さんは？　御變りなしですか？

みさ子。えゝ有難う。相變らずよ、表ばかり拵へて居るわ。

谷。はゝ、表ばかり！　か。……（さりげなく）ほかにお客様はなしですか？

みさ子。なし。有る筈だつたんだけれども——

英一。（急に大笑ひをする）はゝゝゝゝ。三郎、到頭兜を脱いだな？

谷。――(知らぬ振り)

みち子。いやね、いきなり。如何うなさつたの?

英一。何ね。(谷を顧み)いゝだらう? 云つても――。

谷、わざと煙草の環をふく。

英一。昨日、或友人の處へ行つたらね、吉澤のお孃さんの噂が出てね、わあ〳〵云つて居ると、その男の妹が、あの方なら、貴女の親友だ。きつと今日あたり、奧平さんの處へ被行つてよ、なんかと云つたものだから……

みさ子。まあ! 其で來て下さつたの? (谷の方を向き、わざとおどけ)どうも有難う。

谷。(笑ひもせず)いや、どう致しまして!

皆、笑ひ出す。

谷。で、どうなつたんです? 來ないんですか!

みさ子。えゝ、おやめになつたの、いつか靜かに二人きりで話したいからつて。――(眞面目に)あの方も近頃は、結婚問題や何かで、隨分苦しんで被居るのよ。餘り美しい方だもんで、却つて、種々いやな事もおありになるのね。

谷。それで、結婚生活では、少くとも半年の先輩である貴女に、指導を仰ぎたいと云ふ譯ですか?

みさ子。(谷の一種の調子には頓着せず)默つて獨りで考へて居るよりは、私にでも話して相談して見たいとお思ひになるらしいの。無理もないわ。――お父樣だつて、阿母樣だつて、お金こそ澤山おありなさるけれど、隨分變な方なんですもの……

英一。兩親が其那で、娘が評判の美人では、悲劇だね。

谷。我々が來るんぢやあ、しんみりしないからと云ふことになつたんですね。

みさ子。まあ、さう云ふことね。——でも、(間)私、どうせ、御相談は受けても、其程頼りになる決定なんか與へてあげられる處ではないと思つて居るわ。

英一。どうしてゞす?

谷。珍らしい弱音ですね。

みさ子。(二人を見)眞個よ。却つて、結婚しないうちの方が、頭で丈考へて、明快に、善、惡でも云つたと思ふわ。事實に入つて見ると——難しいんですもの。まるで、概論ぢやあ、行かないのよ。例へば、相手の人の人格とか教養とか云ふことだつてもね、其は勿論、何かの標準にはなるに違ひないけれど、友達と良人とでは、何だか、まるで違ふものが現れて來るのよ。——ね、さうお思ひにならなくつて?

英一。さあ——

谷。其處まで行くと、我々は未丁年ですね。

みさ子。(考へつゝ)結婚生活では、普通、正しい人間とか、善い人とか云つて居る、もう一重底の蕊が現れるのぢやあ無いかしら。うまく云へないけれども。つまり、斯う云ふことになるのね。或人が、誰にきかせても、正しいとほか云はれないやうな考へを持つて居るとするのよ。考へよ。友達の間は、或程度まで、その考へだけで、つき合ひ調和して行けると思ふわ。けれども、結婚した生活では、その考へと、實際の物事に觸れて起つて來る、その人のしんからの心持とが、どの位ぴつたりして居るか。其が直接の問題になつて來るのね。だから、

幾何、その考へが、思想なり、理論なりとして間違つたものではなくても、自分が、事實、胸ではこだはつて居乍ら、正直に其を見ないで、自分も相手も、只理攻めにしようとするなんか、眞個に堪らないわ。

谷。(眞面目になり)貴女の話しようが、ひどく抽象的だが、人間が純粹か不純粹かと云ふことが、第一の問題だと云ふことでせう？

みさ子。さうね、左樣云ふことになるでせう。

谷。昔から、殴られても、實意のある亭主が好いと云ふのは、其處でせう。

みさ子。——兎に角、厭なら厭、好いなら好いで、芯に一點の曇もないやうな人があつたら、どんなにいゝでせうね。言葉の奥を考へずに、さうと云つた丈で安心して居られるやうだつたら……

谷。(しげ〳〵とみさ子を見る)貴女も段々大人になりますね。

みさ子。(片頬笑む)——だから、朝子さん、吉澤さんね。あの方のことだつて、私が、何も權威あるらしい口は利けないのよ。お互に、學校の成績とか、手腕ぢやあないわ。内の内の、内のものを、見極めなければならないんですもの。——各々の直覺、心の力と、運。ね？

谷。處が、如何程鋭い天稟の直覺を持つて居たつて、多くの場合、日本の現在の狀態では、その觸角を動す餘地さへ、ないぢやありませんか。苟も、わが心のエッセンスを凝して、その底までしみ入らうとするやうな價値のあるサークルは、皆、煉瓦の塀で圍まれて居る。少し云ひ過ぎかもしれないが、僕から見れば、貴女だつて、自由が最も必要な時期がすんでから、その必要を高唱し得るのだ。びつくり箱の蓋を開ける前に、中から大凡どんな形のものが出るか、豫め教へて下さつただけ、他人の親より、貴女の御兩親は優種だつた。

みさ子。奥平と交際させて呉れたこと？　比較すれば、有難く思はなければいけない譯ですわね。だけれど――（苦笑）
奥平もその時は、未婚者で、私の家に遊びに來て、眞逆――數字ばかり書いても居られなかつたでせう。
谷。はゝゝ。然し、何ですね――（躊躇する）
みさ子。（無邪氣に）なに？
谷。いや――。
みさ子。――（次第に亢奮が鎭る。先刻から自分が谷とばかり喋つて居たのに心付き）まあ、隨分ひどい御主人役ね、
一人で喋り込んで。
（先程から、硝子扉の傍の椅子にかけ、獨りでレコードを見て居る英一に）
みさ子。どう？　何かお氣に入りさうなのがあつて？
英一。大分殖えましたね。
みさ子。シヤリアピンやなにかのが來たからでせう？
（立つて、英一の處へ來る。英一椅子から立ち、みさ子を掛けさせる。餘り浮かぬ顏。ヌツクの方で、此方に
背を向け庭を見て居る谷の方を一寸見、低聲に）
英一。あれに、矢鱈なことを云つてはいけませんよ。
みさ子。（かゞんでレコードを調べて居た手を止め、仰向き、訝しげに）何故？
英一　（尚低聲に）彼奴は危險だ。ドン・ジユアンだもの……
みさ子。（笑ふ）平氣よ。（改まり）私、誰にきかれたつて、惡い事なんか云ひはしません。

英一。貴女はその氣で無くたつて――

みさ子。いゝのよ。(氣を惡くし)ぢやあ、貴方は、二年も前から、其那人を、私のお友達にさせた譯?

英一。(言葉なし。みさ子が取らうとするレコードを手早く抜取つてやる)――遣りますか?

みさ子。どう?

英一。いゝでせう。

英一、把手を廻し、針をつけ等してレコードをのせ、蓋をする。

みさ子は、椅子の上手よりに悠くりと靠れ、英一は反對の腕に輕く腰を休ませて聽く。谷、煙草を持ち、時々歩き、立ちどまり、凝つと、みさ子の集注した横顔を見守る。暫くの間、ピアノ、ヴァイオリンの前奏。

谷。何です?

みさ子。(その方は見ず、低い聲で)アディオ。

靜かな、明るい部屋の裡に、伊太利の小曲が、感じを以て滿ちる。

戸外では、雲が湧いたと見え、微かな陰翳が、輝やいたフォールディング、ドーアの面を過ぎる。歌、終る、沈默。やがて、聽とれて居たみさ子が、感動の溜息とともに頭を擡げる。

みさ子。いゝぢやあないの?

英一。何にしろ伊太利語は響がいゝな。

みさ子。眞個にいゝわ。(詩句を暗誦する)

Cadon stanche le foglie al suol, Bianche strisce serpon sul l'onda, ……

歌へたら、どんなにいゝでせう！

谷。稽古なさい。

みさ子。駄目よ、私の聲は。――ね、だけれども、誰でも、時々、種々の事を感じて、感じて、もう歌でも歌はずに居られないやうに成ることがあるでせう？　其那時、はあつと、すつかり自分の心持を歌ひつくせたら、どんなにか嬉しいだらうと思ふわ。私なんか、自分の感動を、まるで現はせないんですもの（だまらうとし、又、我知らず云ひつゞける）元なんか、一寸悲しいことでも考へて、涙を一粒こぼせば、すつかり氣分が變つて仕舞つたけれ共、此頃は――（獨白的になる）段々、段々胸が一杯に成つて來るばかりですもの。歌ひ度いわ。眞個に歌つたら好いと思ふわ。歌つて、すつかり私の悲しさや、寂しさや種々なものを、皆空へ溶かして仕舞ふの……

谷。みさ子さん。歌へないでも、貴女の寂しさや悲しさが飛んで行つて仕舞ふ法を教へてあげませうか。

（英一、きつとして谷の方を見返る。谷、關せず。）

みさ子。（自分の考へに沈んだまゝ、漠然と）何なの？

谷。奥平さんを、もつと貴女へ引つけて置くんです。心持の上でね。

英一。（嫉妬を感じるやうに）おい、詰らないことを干渉するなよ。みさ子さんだつて――

谷。一人前の淑女だ、と云ふのだらう？　決して失禮なことを云ひやしないよ。僕だつて、一箇の人間だからね。（聲を大きくし）ね、みさ子さん、貴女は自分の歡びも悲しみも、只奥平さんに丈的を置いて被居るでせう？

みさ子。（單純に）左樣よ。

谷。　だから、奥平さんは、平氣で貴女を打つちやつて、青だの、赤だの1.2.3.ばかり書いて被居るんです。

みさ子。だつて――私は、奥平ほか――奥平だからこそ、一緒に樂しんで呉れゝば眞個に嬉しいんだし、左樣でなければ淋しいんだわ。ほかの人なんか――いくら私を放つて置いたつて平氣よ。

谷。　實にはつきりしたもんですね。（笑ふ）然しね、此は、青二才の僕が云ふのぢやあなくて、ちやんとした大學者も云ふことですがね、異性間の感情と云ふものは、決して其程簡單明瞭に片の付かないものなのです。だから御覽なさい、貴女の方こそ、左樣、はつきりして居るけれども、それが果して奥平さんの胸にどれ丈響いて居るか、疑問でせう？

みさ子。――其は解らないわね。安心して居るのか、もうどうせ他に向きようもないときめて、放つて置くのか、……………。

英一。（突然、口を挾む）斯う云ふ問題は、議論すべきものぢやあないと、僕は思ふね。時間が自ら說明する。まして、みさ子さんなんか、失禮だけれども、結婚してから、半年ほか程經たないんだもの。傍から攪亂するやうなことは……。

谷。　――攪亂は穩やかでないね。――君は、みさ子さんが、僕の一寸云ふ事位で支配される人だと思ふのか？

英一。（曖昧に）左樣ぢやあ無からうさ。然し――

谷。　それに、夫妻と云ふものだつて、如何程、鴿と鴿とでお伽噺に仕ようとしたつて、結局生きて居る人間の、男性と女性との生活だらう？

英一。其那ことは定つて居る！

谷。其なら、一般論として、男性女性の相對的關係を話したつて、何處に惡い事もない筈だ。

英一。(焦々し) 一般論に止つて居ればよいさ。然し僕は……

　谷の、耀いた、冷靜な眼で見つめられ、英一、むしやくしやとなる。

谷。仕舞まで話させて呉れ。――其でね(みさ子に向ひ)人間は通性として、反動的なものです。自分が、何なく手に入れられ所有されると定つたものには、何と云つても興味が薄れ、無感興に成つて仕舞ふが、どうも難しい、餘程の忍耐や手段を講じなければ、到底指も觸れられないとなると、假令、實際そのものゝ價値は低くても、人間は熱中し夢中になる。だからまあ、選擧などゝ云ふものが、飽きもせず亢奮的(エキサイティング)な譯でせうがね。――同じ心理が、矢張り、異性間の感情にもあるのです。

みさ子。(卒直に) 思はせぶりがいゝの?

谷。眞逆!(苦笑)そればかりといふことぢやありますまい。――然し、夫婦の感情が鈍重(ダル)になるのは、確に一つは、互がもうすつかり互の所有になり切つて、動きの取れない處に在るんだらうと思ひますね。一方から云へば、もう死ぬまで、厭でも應でも、此男、此女、と定つて仕舞つた處に――現在の社會では、定めるべく餘儀なくされる處に、第一の苦源があるんです。だから、双方の感興、新鮮さを潑剌とさせて置く爲には、どうしても感情的變化に富んで居なければ成らない――或不安、緊張、亢奮が藥になるんです。

みさ子。(眞面目にきゝ、考へつゝ、疑はしさうに) さうを? 左樣かしら――左樣云ふ胸のわく〳〵するやうな心持は、戀人同志の時代のものぢやあなくつて? 若しかしたら(笑ふ)戀人前期よ。戀人だつて、お互の眞個の愛がわかり、信じられたら、其那に氣は揉まないんぢやあないかしら。勿論、相手の人が、どれ丈自分を愛し

て見れるか、まして、好きか嫌ひかさへ解らないうちなら、不安にもなり、緊張もするだらうけれど。

谷。　結婚して仕舞ふと、男も女も　昔左樣云ふ樂天家！　凡庸主義に墮して仕舞ふから、生活が重荷に成るんですよ。大抵の女の人が曾つて面白いのも　結婚する迄ぢやありませんか。一旦、奧さんになつたと成ると、誰某アンネツクスで、まるで氣拔けになつて仕舞ふ。

みさ子。だけれども、生活が氣持よく行くと云ふのは、只相手の技巧や「面白い人」許りではなくつてよ。面白い人間と云ふ人なら、ざらに在るわ。ちつとも面白く無い人だつていゝから、氣持の滿干が、ぴつたり兩方で合ふと云ふことが大切だと思ふわ。

谷。　氣持の滿干そのものが、既に感情の彈力ぢやあないかな。活々した流動を起すには、いさゝかの冒險、心もとなさが、入用だと云ふのです。

みさ子。貴方は――斯うなのね。此人が厭で詰らなければ、又別な人、と云ふ人の方が變化があると仰云るんでせう？

谷。　假令、實際行つて仕舞はないでも、其だけ張のあると云ふことですね。

みさ子。まあ一寸風をする、と云ふの？　いやあね。私共那のは嫌いだわ。行くんなら眞個に左樣ならをするほかない、居るんなら、どんなにでもして居る。――

谷。　其で――貴女は後の方だ、と仰云るんでせう？

みさ子。（殆ど痛ましい程の顏をし）あの人ほか私に大切な人は居ないんですもの。

谷。　その大切さを奧平さんにも感じさせる爲には、貴女が、もう少し彼の方を、はつ、とさせなければ駄目です。自分の心には、今二つの愛がある。その何方を取るかと云ふやうな事で、彼の方を、もうちつと反省させ苦し

ませて上げるのです。しんから、眞個の愛が輝き出すか、詰らない石ころが轉り出るかを、知る爲にね。

みさ子。（絶望的な烈しさで）私二つの愛なんかありはし無いわ。たつた一つよ。（思ひ切つて）奥平が可愛いだけだわ。彼の人に可愛がつて貰ひ度いだけだわ。

谷。だから、それ程の愛に報ひられるためには。

二人の會話をきゝ、歩き廻つて居た英一、殆ど、顔色を變へ

英一。谷！　やめろ。まるでみさ子さんを苦しめて居るぢやあないか！

谷。（微かな亢奮を持ち）苦しめるのぢやあない。終局に於て、持つて居られる感情を、一層純粋に生かす爲だ。

英一。傍で聞いては、まるで誘惑して居るとほか思へやしない！

谷。——橋詰。君の態度は、失敬ながら、崇高ぢやあないよ。他人を非難することは、何も自己の優越を表しはしない。——（英一を見守り）男一人の心、で當つたらいゝぢやあないか。（獨白的に）君のみさ子さんに對する友情はよく判つて居るよ。

英一、みさ子の方をちらりと見、あはてゝ何か云はうとする。みさ子、二人の會話はきかず、掌に顎をのせて考へて居る。此時、さつと立上り、考へを變へようと、頭を振り。

みさ子。さあ……もう議論はやめ。——紅茶でも入れさせて來ませうね（去る）

沈默、穩やかでない雰圍氣の裡に、谷、英一、顔を見合せず、動かず、幕。

第二
庭

常綠樹の深い植込み。間を縫つて、奥の方に小徑があり、上手、屛風のやうに刈込んだ檜葉の下には、白い石の腰架(ベンチ)が一つ在る。

傾いた午後の日が、穩やかに明るく、綠樹の梢、腰架(ベンチ)の緣などを燦めかせる。

幕開く。

みさ子、谷、上手の方から悠くり連立つて出て來る。

みさ子。あの薔薇だつて、爺やが丹精して呉れるから綺麗に咲いたのよ。私も、奥平も一向構はないんですもの。

谷。此處はいつも氣持がようござんすね。(四邊を見廻し、腰架(ベンチ)に掛ける)

みさ子。(離れて立つたまゝ)英一さんは如何したんでせう、直ぐ來るつて云ひ乍ら――

谷。奥平さんに用があるんでせう。(皮肉な調子)

みさ子。奥平に? さう? ちつとも知らなかつたわ。其なら左樣仰云ればいゝのに――。妙な人!

谷。左樣、くさゝずに置いてお遣りなさい。あの男は、貴女の事と云へば、眞劍なんだから。

みさ子。――(意味を解し兼て谷の顔を見る)

谷。僕が、貴女に勝手な熱を吹くと思つて、御冠を曲げたのでよ。然し……彼の男の思ふ程、僕は「不良」ぢやあ有りませんよ。此でも――(調子を變へ)實際、今日のやうな話が、貴女と出來るとは思ひませんでしたね。

みさ子。(谷の心持が解らず) 如何うして？ ――別に、何にも、人間の仕ない話を仕たのぢやあ無いわ。

谷。 ――一年昔の貴女は、幸福過て、思ひのまゝでありすぎて、僕なんかには眩しいやうでした。却つて、薄すり雲の湧上つた今の方が、遙に人間的(ヒユーマン)で、貴女の情熱も純粋さも美しく見える。(みさ子の顔を見る)

みさ子。(漠然と不安を感じる) 何を云つて被居るの。美しければ美しい程猶結構ぢやあないの。――さあ、裏へ行きませうよ、彼那に薔薇、薔薇つて云つて被居つた癖に……(谷を促す)

谷。 ちき行きます。然しね、實際、僕は、いつかきつと今日のやうな時が來ると思つて居たんですよ。まるで、輕風に頬を吹かれて、花束を振るやうな貴女が、いつか、自分の愛や、人間の愛と云ふことに就て、深い疑や苦しみを味ふやうに成るだらう。左樣したら、始めて、私の、貴女に對して持つて居る心持も理解して貰へるだらうとね。

みさ子。(疑はしさうに、凝つと谷の顔を見守る) 私、自分の苦しみや寂しさを、假令、誰にでも、利用されては居られなくつてよ。

谷。 まるで異ふ。一つの道から、もう一つ先の、明るい、輝やいた路へ出る手助けを、僕ならさせて頂けると信じて居たのです。僕の、貴方に對する愛は――云ふことを許されゝば――恐らく、貴方の御良人のやうに、所有慾から生えたものでもなければ、英一君のやうに、自分の無力を僞善で被ふたものでもありません。貴女と云ふ人を心にも體にも、美しさ、愛らしさの絶頂に置いて見たい。何からも自由にし、私が陰から照らす光りで、貴女を、漂ふ金色雲のやうにしてあげたいのです。

みさ子。(不快と畏れとを示し) 貴方はいやね。左樣云ふことを仰云る爲に、わざ〳〵薔薇をだしにお使ひになつたの？

私、こそ〳〵話は大嫌いよ。其に（力を入れ）――私は、ちつとも、貴方になんか助けて頂かうとは思つて居なくつてよ。又貴方こそ、私を眞個に愛して下さる方だとも思へやしないわ。芝居はやめ！　お友達か？　さうでないか？　それつきりよ。

谷。奥平さんの存在を、直ぐ頭に持つて來るから、貴女はさうむきになるんだ。左樣でなく、深く、冷靜に、人間の感情生活と云ふことを考へて――抑制と爆發は、決して別々なものぢやあない。いつか

みさ子。貴方――貴方は、私のしんの心持が解つた積りで被居るの？（靜かに、寂しさうに）若しさうだつたら、大違ひよ。奥平さへ解つて呉れないんですもの。私位の年の女が、一旦可愛いと思つたら其人の爲にどれ程全心を集注させるか、其爲に歡び悲しむか、大抵の男の人になんか、わからないんだと思ふわ。選擇以上なのよ。唯つた一人つきりなの。見限つて棄てられる愛なんか、まるで、まるで遊びだわ。よからうが、悪からうが、其人の可愛い自分の心を、如何うしようもないから、苦しむのぢやあないの？

谷。左樣云ふ心持も、僕は時間と程度の問題だと思ふな。人間が愛されずに生きて行かれますか？　まして、貴女のやうに暖い、愛されたい人が。

みさ子。谷さん！　それ丈で、もう貴方が、どんなに私から遠い人だかゞわかつてよ。どうして、私が求めても得られないで苦しんで居る愛を、さう慘酷に摘發なさるの？――もうおやめなさい。――お友達にしたつて、變な、いやな氣持になつて仕舞ふぢやないの。

　みさ子、歩きかける。

谷。まるで子供扱ひでは、僕も云ひようがなくなります。然し――みさ子さん、此だけは云はせて下さい。愛に

は、勿論、種々様々な形と内容とがありませう。けれども、結局、鳴らぬ笛は、鳴らぬ笛なのです。——

（腰架（ベンチ）から立つ。）それでは、裏へ行つて見ますか？

みさ子、默つて先に立つて行く。

殆ど、入れ違ひに、下手から、英一、奥平、低聲に話し乍ら出て來る。

英一。（壓へた聲調で）——實際、僕として斯う云ふことを云ふのは苦痛です。一方では、爺との友情を裏切ることになるし、又、貴方に對しては、其那責任のない交際を始めさせたと云ふ點で。けれども、貴方が、僕にかけて居て下さる信頼を思ふと、つい默つて居られなくなつたのです。

奥平。（陰鬱に）いや、有難う。御厚意は感謝します、

英一。（奥平を偸見）けれども、呉々、僕の申上た點を誤解なさらないで下さい。此だけは、僕一生の願ひです。僕は只、みさ子さんが、まるで無邪氣で、子供のやうに思つたことを云ふのに、其を間違つても、彼の男になんか惡用させたくないから、御注意したのですから。

奥平。（神經的に）實に人間の心などは頼みがたいものです。自分は、自分のよしとする處を實行するほかない。（考へに沈み、兩手を兵兒帯の後に挾み、彼方此方歩く）彼女（あれ）が、心に確かな根柢の出來て居ないことは　私も前から知つて居ました。よく云ひもしたのだ。いつか斯那ことでも起らねば好いがと思つて居たが……

英一。（絶えず不安さう、奥平に近より）ね、奥平さん貴方は眞個に誤解して被居るんぢやゐないんでせうね。何も、不名譽な事實なんか決して在るんぢやゐないんです。たゞ、

奥平。誤解はして居ない積りです。——然し、事實と云ふものゝ範圍を、どこまでに限つたら好いか。

英一。貴方の立場として、どれ程不愉快に感じられるか、僕は御同情します。けれども（俄に）みさ子さんに、不當な監督なんか成さりしはしないでせうね。

奥平。（投げたやうに）彼女は、彼女の仕たいやうにすれば好いのです。私は、其を兎や角云ふ權利はない。

英一。（呟く）何だか不安だな。恐ろしいことに成りさうだ。奥平さん、どうか、僕にだけ、貴方の取らうとなさる方法を話して下さいませんか。ひどく不安心です。

奥平。私が、自分の心持なり考へなりを、小説家のやうに巧く云ひ表せれば、何も面倒はないのです。私は、喋れない。思つたこと、考へたことを實行する丈だ。又、其でよいと思つて居ます。默つて居て解つて呉れないやうな者に、何も自分から説明する必要はない。――君は、兎に角私の信頼する一人の友人として、自分の責任と思ふ處を果されたのだから――どうぞ安心して下さい。成るようにほか成らない。

英一。（猶壓迫を感じ）けれども……

奥平。人生は、快樂の爲に出來て居るものではないのです。生きて居る間ぢゆう、苦しまなければならないのが、人間だ。與へられた杯なら、飲まなければ成らない。

英一。どうぞ、貴方もみさ子さんも傷つけるやうな事はなさらないで下さい。――實際、僕は、何もみさ子さんまで……

奥平。――（陰氣に光つた眼で、じろりと、臆病な英一の顔を見る）

突然、背後の植込みの蔭から、甲高く、はつきり

みさ子の聲　いやよ！

奥平、英一、思はずきよつとする隙へ、みさ子、足早に出て來る。二人を見、

みさ子。まあ、貴方も被居つたの？（嬉しさうに、奥平の方によつて行く。）

直ぐ後から、谷、兩手をポケットに入れ、眉を顰めて來る。

英一。（意を迎へるやうに）どうだね。いゝ花があつたかい？

谷。（英一を見、奥平を見、鋭く）花なんかないよ。昔話だ！（さつさと一人で通り過ぎようとする）

奥平。（近づくみさ子を避けるやうに、二三歩動き乍ら）――私に構はず置いて異れ！

英一、不決斷について行かうとする。その時、たゞならない奥平の聲が、彼を振返らせる。

みさ子、驚き、良人、英一、谷と、順に顔を見る。英一、頭を動してその視線を避け、見向きもせずに彼方に行く谷の後から、救ひを得めるやうに、蹤いて行つて仕舞ふ。みさ子、再び、良人を眺める。

みさ子。貴方――どうなすつたの？

奥平。…………………

みさ子。ね、どうなすつたの？

奥平。（傍を向き）悲しいことに、私も人間だから、自分と直接、關係のある者の行爲には、心を支配されるのだ。

みさ子。……（苦しさうな表情となる）……。

奥平。私は、就くものはつき、離れる者は時が來れば離れずに居ないと思つたから、別に云ひもしなかつたのだが……。今でも、私は何の制限も、貴女に加へては居ないよ。斷つて置くが……

みさ子。（實に驚き）まあ、貴方！　何を思つて被居るの？　何を感違ひして被居るの？

奥平。何も、感違ひなんかして居ない。事實は、事實だ。

みさ子。(一層、良人の傍により)私が何をして? 貴方。――(思ひつき)あゝ、今私が彼那大きな聲をしたのを變に思つて被居るんぢやあないこと? 何でもないのよ、あれは。谷さんが、今日は妙に感情的だから、もう散歩なんか一緒にするのは、いやよ、と云つた丈なのよ。

奥平。(險しい眼付きをし)感情的には誰がしたのだ。

みさ子。(良人を仰ぎ)貴方!

奥平。獨身の、彼那生若い男に、若い、結婚したばかりの女が、自分の生活の不滿や苦痛を訴へるのは、何を意味するか。考へて見たら、誰にでも解るぢやあないか。

みさ子。(思ひがけず。却つて落付き)聞いて被居つたの? ――却つてよかつたわ。でも――立ち聞きをなさるなんて――(消え入るやうに)何て方でせうね。

奥平。英一君に聞いたのだ。

みさ子。(はつきりと侮蔑を感じ)彼の人が? 何て云つたの?

奥平。其那ことを、今此處で再び繰返す必要はない。只――私は――僅かの間でも、貴女の良人であつたことを氣の毒に思ふよ。適當な人間ではなかつたのだ。少くとも、貴女の悦ぶ男ではなかつたのだ。然し(刺すやうに)誰一人私に其事を知らせて呉れる者は無かつた!

みさ子。(蒼くなり、良人の手を摑み)貴方! 後生だから、その變な、貴方の頭にあるものを棄てゝ頂戴! ひどい思ひ違ひをして被居るわ。何て云ふことだらう。私は、此つぽつちだつて、谷さんなんか愛して居やしなくつてよ。

奥平。（疑ひ深く）如何うして其が斷言出來る？　自分が侮蔑し、價値を感じないものに、貴女は自分の苦痛を訴へるか？　下男に泣言が云へるか？　自分が、より好意を感じて居る者に對してゞなければ、人間は、決して自分の弱點は示さないものなのだ。

みさ子。――私は、ちつとも其那風には考へなかつたわ。私の苦しみは、私の弱點？　私は、たゞ、元から種々な事を話して來た友達に、自分の心持ちを云つた丈だのに。――

奥平。つまり其程、心の親しみが深いと云ふことになるのだ。離れ難く思ふからこそ、どんなに境遇が變つても、その友情だけは、保つて行かうとする――（堪へ難いやうに、ばし〳〵と）私は、はつきり云つて置くがね、決して貴女の重荷となる積りはないのだ。私はいつでも、悦んで、貴女に自由を與へる。よく考へて、遠慮はいらないから、自分の行き度い道を進めばよい。あゝ云ふこともあつた、と私は萬事を、過去に埋めて仕舞はふ。それが一番いい。私には――私の書齋がある。……

みさ子。（涙をこぼし）さうよ！　貴方には貴方の書齋がある。だから、其那ことを仰云れる。自分が、どんな大間違ひをして居るか、考へようともなさらないで、よく貴方は、其那ことが仰云れるわね。……私には……私には貴方つきりほか、ありはしないわ。何も、ありはしないわ。だからこそ、貴方になんか、相手にもされない苦しみをもするのぢやあないの。

奥平。（冷やかに）愛は、苦しい筈のものではないよ。愛し難い者を愛さうとするからだ。

みさ子。（首を振り）いゝえ。いゝえ。どれ丈、私が可愛いか、貴方が判つて下さらないからよ。

奥平。――私は、若し强いられたのなら、假令、事實上過ちがあつたとしても、許す。けれども自分から、自分の心も相手の心も翻弄する人間との關係は堪へられない。――苦しめられたくないのだ。――幾何、價値のない人

間でも自分の魂の平安を守る位の權利は與へられて居るだらう。

みさ子。(涙と一緒に奥平の手を搖すり)あゝ。貴方は恐ろしい方ね。言葉の裡に在る眞實を、ちつとも聞かうとはなさらない。ね、どうしたら、私の心がわかるの? 如何うしたら嘘を云つては居ないのがわかつて?

奥平。事實が言葉と合致すれば。

みさ子。だから、さつきから云ふぢやあないの? 私は——あゝ(激しく泣く)云ふのさへいやだわ!

奥平。人間には、言葉以上に微妙な世界があるものだ。まして、異性間の感情には。——貴女は、谷を愛して居ないと云ふ。或は、事實だらう。然し、一方に、私は、又、愛して居る事實も認めずには居られない。(憤りをはくやうに)愛します、と誓つた愛が嘘になる時もあるやうに、愛さない、と云ふ愛が、却つて眞實なこともあるのだ!

みさ子。あゝ。あゝ。此那に愛して居るのに。貴方には! 此那に、可愛いのに!

みさ子、泣きつゝ、子供のやうに自分の額を、良人の手に擦りつける。

奥平。(苦々しげに)亢奮が、何の解決になるのだ。……

みさ子、頭を擡げる。良人を見、絶望でくひ入るやうに

みさ子。あゝ、貴方は開かない扉よ。叩いても、叩いても開かない扉よ。——私はどうすればいゝの?——人間は、言葉でほか、自分の心が表はせない。(烈しい歔欷。)その言葉を信じられない時、——(蒼白な顔となり)昔の女の人は死にました。私が死ねなかつたら——。貴方は、それ見ろ! と仰云ること? (良人に、じり〳〵と迫る)それ見ろ! 谷を愛して居たのだと仰云ること?

奥平の手を掴み、そのまゝ凝固したやうに立ち竦む。恐ろしき寂寞。一秒……二秒……さつと　幕。

馬

長谷川如是閑

『確かにアカツキだ。！』

見物の一人は、呟くといふよりは寧ろ叫ぶやうにさう云つて腰を浮かせた。

貧弱なテント張りの曲馬小屋で、ブリキを擦り合はせてゐるやうな奏樂につれて、姿の好い一頭の馬が頻りに曲藝を演じてゐるのを絶えず喝采するに忙しい見物には、無論そんな叫び聲は耳に入る氣支ひがなかつた。

けれどもさう叫んだ男は、自分の聲が近所隣りの人達は愚か、テント内のすべての見物を驚かしはしなかつたかと懸念したやうに、狼狽して四方を見廻した。が彼れの方を見向いてゐるものさへ一人もなかつた。男は自分だけ眞赤な顏をして、更らに熱心に所謂『大夫』の藝當に目を注いだ。

馬は、今度は梅鉢形に立てられた丸太の間を縫ひながら、或は速や足、時には駈け足で驅け廻る藝當をやり始めた。その丸太は、たゞ地面に突立てたゞけなので、馬の身體が少しでもそれに觸はれば倒れてしまふのであつた。馬はそれを倒さないやう

に、梅鉢形の間を、長い身體をバネのやうに、右に左に曲げながら、いろ〳〵に驅け廻るのであつた。

今しがた『確にアカツキだ!』と叫んだ男は、そんなことはすつかり忘れてしまつたやうに、固津液を呑んでそれを見物してゐるのであつた。梅鉢の外側や內側を圓く驅け廻つてゐるかと思ふと、一つ〳〵の丸太をグル〳〵廻りながらSの字8の字に目まぐるしく廻轉する。

見物は割れるやうに喝采した。

男は顏を眞赤にして、頻りに額の汗を拭いた。

そのうちに、馬の廻轉は益々急になつて、ゼンマイ仕掛でもあるやうにクル〳〵廻り始めた。ト少し身體の調子の狂つた故か、頭だか尻だかが、中心に立つてゐる丸太に觸れて、その丸太は、長い鞭で馬を追つてゐた怪げの燕尾服を着た男の方へ倒れかゝつて、その横面をしたゝか叩いた。

燕尾服が、眞赤な顏をして、その丸太を立て直してゐる暇に、それまで首を揚げ胸を突き出して走つてゐた馬は、急にその首を長く前へ差し出したと思ふと疾風のやうに樂屋を指して逃げ込んでしまつた。

見物席は、割れるやうな笑聲と混ぜ返しの拍手とで賑つた。

『確かにアカツキだ!』と叫んだ男は、馬が姿を消すと同時に、汗ばんだ眞赤な顏をして、竊むやうに四方を見たが、直ぐに俯向いて、再び顏を擧げた時には、その男の眼に涙が一杯たまつてゐた。

此男は、日本に軍制が敷かれて以來、始めて行はれた『軍縮』――それは今からはもう五六年前のことであつた――の最初の犧牲者の一人であつた。

洗ひ晒らした單物ではあるが、ひどく糊が利いて、肩の邊りが石部金吉のやうにイカつてゐるのも、五分刈頭に、剃

れ上つた四角や、尖つた眼鏡、跳ね上つたやうに結ばれた口付、それに、一々の動作がオイチニといふ律奏を作つてゐるかのやうに區劃的なのも、すべて此男の前身を自白してゐるのであつた。

軍縮の初期には、さういふ軍人精神の滓で出來たやうな男も珍らしくはなかつたが、もう此頃では、昨日軍隊生活を廢めたといふ男でも、そんな風に見へるのは鮮なかつた。世間では、融通の利かない軍人の運命に頻りと同情したのだが、それは全くの素人考へで、サーベルを棄てないうちに、もうサーベルのブラ下つてゐるのが訝しく思はれるやうな人達も鮮くなかつた。

けれども、此の男は、全くそんな時代とは沒交渉に出來てしまつた男で、失職して後も、軍人精神が單物を着て下駄を穿いてゐるのだといふ恰好をしてゐた。人間をこんな風にこしらへ上げてしまつて、それを今の社會に抛り出すのは、佐野源左衛門常世を銀座通りにウツちやつたやうなものだと、同僚の誰れ彼れが評判した位、此の男は、文字通りの軍人に出來上つてゐた。

尤も此男はよく八木節を唄つた。さうして地方にゐた頃は、醉ふと酌婦を捻ぢ伏せるので有名であつた。『猪河少佐酌婦の腕を折る』と田舍新聞で、カイゼルが逃亡した時の活字と同じ大さの活字で報道されたのが、現役としての最後の逸事であつた。猪河といふのは此男の姓だが、『俺の姓はイヌシカワと讀むんだ』といふのが此男の口癖だつた。けれども誰れも此男をイヌシワカと呼ばずに、必ずヰカワと呼んだ。そのことが此男をローマ字論者にしたのであつた。

然し佐野源左衛門は、偶々八木節を唄ひ酌婦を捻ぢ伏せても、又ローマ字を主張しても、矢張佐野源左衛門であるやうに、此男も、それこれに拘らず洗ひ曝らした軍人精神の、糊の利いたのであつた。

失職當時の彼れは、他で心配するほど、彼れ自身慌てはしなかつた。陸軍の方針として犧牲に擧げられた譯で、自分の落度の故でもなければ無能の故でもないので、顧みて耻づるところはすこしもなかつた。生活といふことについても、大和魂をしやぶつてゐても、五年や十年は生きて行けるやうに思ひ込んでゐた。尤もそれは比較的豐かな手當を貰つた當座の氣分であつたのだが、本人そこには氣がついてゐなかつた。

軍縮の初期には、よく人間が馬と一緒に淘汰されたものだつた。將校連がめい〳〵の首を懸念してゐる時に、數千頭の馬が拂下げにされて市中に職を求めなければならなかつた。その中には荷車を曳かされる練習を強いられて、憤慨して馬子を蹴死ろしたりしたものもあつたが、大抵はそんな我儘もいへずに、それ〳〵秣を喰ひ外さないやうに心懸ける外はなかつた、それは人間の方も同じであつた。人間が、馬の運命に同情してゐるうちに、自分の番が來たので、賣れ口のない人間は、却つて馬の賣れて行くのを羨んだりした。けれども二年三年一つ馬を手馴づけたものは、それと別れるのに泣き顔をしないではゐられなかつた、まして自分も馬と同じ運命に落されたものは、全く馬そのものになつたやうな氣がした。しかも馬でないことが殘念でもあつた。又は馬が人間でないことが殘念でもあつた、一方が人間で一方が動物である爲め、互の同情の通じの悪いのが痛ましい程殘念だつた。尤も猪河少佐は、人間と動物との生物學上の區別を全く忘れてしまつた位、馬と一體になつてしまつたのであつた。双方の同情は、少佐の手綱が馬の銜に感ずるよりもしつくりと通じ合つた。少佐が涙を流しながら馬の首を撫でた時に、馬も潸々と泣いた。――と少佐は信じた。

少佐は騎兵出身の將校中にも、特に調馬にかけては專門の調馬師に劣らない自信を有つた一人であつた。普通の將校は下士のやる新馬の調教を監督するだけだが、少佐は、手に終へない新馬を自分で手がけるのが得意で、兵卒と一緒になつてそれをやつた。少佐は素人をつかまへると、よく自慢に、自分の左手の拇指を見せた。その拇指は右手の拇指に

比べるとずつと短かく、且つその爪は半分ほどに減つてゐるのであつた。

『これは君、馬を調教する時、左の手でから手綱を抑へるのに、グイと拇指の先に力を入れるものだから、とう〳〵こんなに減つてしまつたんだ。』さう云つて少佐は、その半分殘つた薄氣味の悪い拇指を、西洋人が念を押す時にするやうな恰好で、人の眼の前に差し出すのであつた。

『自分の馴らした馬は、まるで自分の教育した子供だからね。全く動物といふ氣はしないんだ。しまひには、僕の顔色や、指先を一寸ふれたゞけですぐ僕の心持を知つてしまう奴なんかもあるからね。人間を教育したつて、さうは行くものぢやない。それを君、動物がそこまで僕の心持通りになるのだからね、ほんとうに涙がこぼれるぢやないか。』そんなことをいつては少佐が、氣に入つた馬の頸を撫でながら眼をしばたくのを見なかつた少佐の友人は一人もなかつた。

そんな馬を、誰れかゞ一寸でも下手に扱つたり苛めたりするのを見つけると、少佐の憤怒は恐ろしいほどであつた。兵卒だらうが、同僚だらうが上官だらうが、容赦はなく、生れる前から少佐の頭に植ゑつけられたかと思はれるほどの階級觀念も、その時だけは少佐の頭から吹き飛ばされてしまつて、全く同じ音聲、同じ文法で怒鳴りつけるのであつた。上官などが、彼れのその非階級的の調子に立腹して、彼れの警告を聴かぬふりでもしやうものなら、彼れは、顔を眞青にして、唇を噛みしめて上官を睨みつけながら、固く握つた兩手を腰の邊でブル〳〵ふるはせるのであつた。で大抵の上官は、彼れを三分間もそんな状態に置くと、彼のでなく、自分の身の上に面倒なことが起り相に思はれるので、彼れの命令に從ふ氣にならざるを得ないのであつた。

軍社會では、馬は、少くとも兵卒よりは重んぜられることになつてゐるが、猪河少佐はそれに疋をかけて、馬を將官以上の動物とした。

『將官だつて君、馬に乘る時に、馬自らの法則に從はにやならんだらう。人間を働す時にはあべこべだよ、將官の法則に我々が從うんで、將官が我々の法則に從うんぢやないからね。馬の方が權威があるだらうぢやないか。』

馬以外のことでは、理屈らしい理屈を云ふ詮も知らないで、部下にやり込められてばかりゐる猪河少佐は、馬のことになると、そんな風にこぢつけた理屈を際限もなく列べるのであつた。

『君等は、肉體美の極度は人間の肉體だと思つてゐるが、僕に云はせれば、馬の肉體美は人間の比にあらずだよ。最も完全な馬の肉體は、線といひ角度といひ實に微妙を極めたものぢやないか。殊に角度だが、あれは人間の肉體美には全く缺けてゐるものだよ。人體の線は好いが、角度はなつちやをらんよ。馬の前半身や後脚の角度の美は、實に生物の形態が有つてゐる幾何學美の最たるものだよ。人間のダンスなんぞで、角度の美を出さうとするやうだが、馬の角度の美にはとても及ばん。』

酒の席などで同僚が『オイ猪河にあんまり飮ませるなよ。又アングルを出すと助からないからね』といふのは、即ち此の馬體美論をいふのであつた。

『馬に對しては君、全く互助的精神を以て對するより外ないんだよ。强制的や命令的の態度で向つたら、馬といふ奴は決して本心から從順にはしてゐないよ。引出す時だつてさうだらう。眞ともから「サア出ろ」と引張つたら出やしない。馬と一緒に列んで「サア一緒に歩るからね」といふと出て來るぢやないか。乘つてゐたつてさうだよ。乘手が馬ばかりに歩るかせたり、廻らせたりする氣だと決して、馬は歩かないんだよ。つまり此方が一緒に歩るくといふ心持ちがすつかり馬に呑み込めてゐないとダメなんだよ。僕のやうな名人になると、乘つたばかりで、もう僕の心持がすつかり馬にわかつてしまうんだからね、何の事はない掌がブランセツトの上に乘つたのと同じなんだよ。ブランセツトといふ

は、此方の心持ちが、掌の感じでプランセットに移つて、此方の心持通りをプランセットが字に書くのだらう。馬と乘手の關係もさうなんだ。人間と馬の合せ物ぢやなくつて、人馬一體となつた一つの生物なんだよ。』

相手が一人逃げ二人逃げ、殘つたものが新聞を讀み出しても、彼れはそんなことを何時までも云つてゐるのであつた。

『人を馬鹿にするよりも、君の、馬を人にする方が餘ッぽど質がよくないね。』同僚はよくそんなことを云つて彼れを冷かした。

『厩が燒けたら、「馬を傷れりや否やと、人を問はず」だらう君は。』などゝ師團長にからかはれたこともあつた。

そのやうな周圍の形勢は、益々馬に對する猪河少佐の眞劍さを增さしめるのみであつた。さうしてその眞劍味は、馬と彼れとが一緒に失職した當時に於てクライマックスに達したのであつた。

無論少佐は、彼れ自からの失職については、殆んど何の感じもなかつたといつてい丶位であつた。それは例の大和魂をしやぶつても當分は生きて行けるといふ理由があつたせいでもあらうが、然し馬との別離が彼れの胸裡を占領し盡したことがなかつたならば、彼れはも少しは自分のことを考へたに違ひないのであつた

少佐は、夫人――それは少佐に恩義のある上官の令孃であつた――が殊の外、失職を氣にかけたのであるが、彼れの愛馬が、少しでも彼れの失職を氣にかけたら、少佐は、夫人の心配よりも、馬のそれを一層氣にしたに違ひない。幸ひに馬は、主人の失職については、主人との別離に於て表したほどの萬分の一の表情をも示さなかつたので、少佐は、自分の失職を氣にする夫人を無視することが出來た。

夫人は先年たつた一人の子供を喪くした代りにヒステリーを獲たのであるが、そのヒステリーも馬の方であつたら、

少佐には大分の惱みとなつたのであらうが、幸ひ夫人の方だつたのでたいして問題にもしずにすんでゐた。

　これに反して受馬アカツキと別れることは、全くごまかしや知らぬふりの利かない悲しみとなつて少佐の胸を抉ぐるのであつた。愈引渡しの日の近づくに從つて、少佐は、毎日／＼厩から馬を引出して、乘るのでもよく、引いて歩くのでもなく、たゞ庭先へ引いて來て、絶えずクド／＼と何か馬に話しかけながら、馬の鼻面を撫つたり、腮を抱いたり、キツスするやうな風をしたり、態々自分で買つて來た飴をたべさせたり、自分と馬の飯時を除いては、終日そんなことをしてゐるのであつた、始めのうちは、眼をしばだたきながらそれを見てゐた夫人も、しまひには、まるで自分の夫が見知らぬ婦人とふざけてゐるのでも見付けたやうな尖々しい眼付でそれを見るやうになつた。さうしてお飯時でも、碌々自分には口も利かない少佐を、忌々しい相に睨みつけて、つけもない所で、フンと鼻で笑つて見せたりした。がそれを馬がした譯ではないので、少佐は一向感じなかつた。

　愈、隊に馬を引渡す當日になつて、少佐は自からそれに乘つて隊に行くつもりで、軍裝をつけて、玄關に出た。少佐は踏石の上に置いてある長靴を穿かうとして、それを手にとると同時に、少佐の眼からこぼれ落ちた大粒の涙が、黑光りにみがかれた靴の上にバラ／＼と散つた。と少佐は取り上げた靴を抛りつけるやうに投げ出して、そのまゝふいと立つて奥へ入つてしまつた。

　送つて出た夫人は驚いて夫の後へついて奥へ入ると、少佐はソラ／＼と椽を通つて書齋に入るなり、襖を手荒くしめてしまつた。

　馬丁の作爺が待ちあぐんで催促したので、夫人は書齋の襖をそつと開けると、少佐はテーブルの上に組んだ肱に面を伏せて身動きもしずにゐた。

夫人は 同情したやうな、けれども隨分馬鹿らしいと云つたやうな顔付で、徐かに「あなた、あなた。」と呼んで見た。が返事がないので、夫人はや〻持前のヒステリー聲で、

『おでかけにならないの？作藏が待ちくたびれてゐるぢやありませんか。』

もつと何か云ひたいのを打ち切つたといふやうに、夫人は口の端をピク／＼させた。

『作に連れて行かせ。俺は今日は行かん。』少佐は顔を上げたが、夫人の方とは正反對の方を向いてさういつた。

『馬鹿／＼しい、まるで女の腐つたの見たいに、見ツともない！』夫人は、書齋を出て、襖を閉て切らないうちに、少佐に聽へよがしに、さう云つて慳貪に襖を柱に叩きつけた。

この猪河少佐其の人であつた、今曲馬を見物しながら「確かにアカツキだ！」と叫んだのは。

樂屋に逃げ込んだ大夫の後を追ひかけて燕尾服も樂屋に驅け込んだが、暫らくして大夫の口を取つて再び舞臺に現はれた。馬は、樂屋で餘程嚴しい懲罰を受けたらしく燕尾服の一擧一動に、その敏感らしい首をバネのやうに刎ね上げ刎ね上げした。そのオド／＼した樣子には、誰れの眼にも彼れが嚴罰をうけて來たことがあり／＼と見へるので、見物も同情したやうに、鎭り返つてしまつた。燕尾服は、馬にお詫びをさせると稱して、前足を折らせて首を上げたり下げたり、お辭儀をするやうな風をさせた。見物は大喜びで喝采した。

唇をかみながらそれを見てゐた少佐は、急に立ち上つて、混雜した見物席を、八方から劍突を喰うのをかまわず荒ツぽく割つて通つて、樂屋口の方へ出て、揚幕を潜つてその中へ入つて行つた。

そこには肉襦袢の男女や、道化の裝をした男達が、豹の檻や、馬や、玉乘りや輕業の道具や、藁束やと一緒にガヤ

〳〵してゐたが、見知らぬ男が舞臺の方から入つて來たので、一同の驚いたやうな視線が八方から少佐を射た。
『支配人に逢ひたいんだが……』少佐は誰れにといふとなしに、そこの空氣に向つて、軍人口調でさう云つた。が誰れも返事するものはなかつたので、少佐は焦ら立たしい聲で怒鳴つた。
『支配人は居らんのか、こゝの支配人は。』
白い詰襟に辨慶縞の乘馬ヅボンをつけた恐しく體格の好い、四角な顔の、怖い眼の男が少佐の前に現はれて、默つて少佐の姿をジロ〳〵と眺めた。
『支配人は居らんのかと云つとるぢやないか。』焦せれば焦せる程軍人口調になつて、少佐は其男を睨め附けた。
『一體おめへさんはナンなんだい。』怖い眼の大男は、さう云つて、少佐の頭から足の先きまで見てゐるのだといふ風に態と首を上げたり下げたりした。
『僕はイヌシ河と云つて、在郷將校だが、支配人に一寸話しがしたいのだ。』
『わツしは又新めへの刑事かと思つた。』辨慶縞は、そんな失敬なことを云つて笑つて。『支配人にも社長にも、わツし一人だが、一體何ういふ御用なんです。』
用件を聽かれて見ると、少佐は一寸躊躇しない譯に行かなかつた。實をいふと、何のつもりで樂屋に飛び込んだか、それさへはつきりしなかつた。愛馬アカツキに不意に出會しただけでも、少佐にとつて一種のショックだが、それが殘酷な興行人の手で虐使され侮辱されてゐるのを見たので、急に逆上したやうな心持になつて、我慢し切れずにこゝに飛び込んだのであつた。
その時の少佐の心持は、自分の愛馬がそんな風に取扱はれてゐることの不平を支配人に訴へてやらうといふやうな昂

筈にハチ切れさうになつてゐたのは事實だが、それだけのことでは、こゝまで出て來られる筈もなかつた。逆上したやうな少佐の頭の裡にも、もつと立派な計畫が突差の間に湧いたのであつた。然かも不平と腹立ちとで攪亂された刹那には、少佐はそれを忘れてしまつて急に答へが出なかつたが、しばらくして漸く切り出した。

『實は今あそこで藝をしてゐる馬は　多分見違ひではあるまいと思ふが、あれは僕のもとの乘馬のアカツキといふ奴なんだ。』

『ハ、ア成程ね。』根つから面白ろくないことを聽いてゐるやうな風で、支配人は空々しく調子を合せた。

そこへ大喝采と共に、その馬が獨りで舞臺から驅け戻つて來て、支配人の傍で立ち止つた。少佐は眼の前に來たその馬を見ると混ふべくもないアカツキであつた。

堪へ切らずに、少佐はいきなり支配人を押しのけて。「ホー／＼」と聲をかけながらアカツキの肩の邊に近づいて首筋を撫でてその長い顏を抱いた。

馬は、普通さうされた時に示すやうな懷かし相な表情をしたが、別段舊主人に逢つた嬉しさを示すやうな風を見せなかつたので、少佐は俄かに物淋しさを感じた。それは、外にやられた兒が年經て親に逢つても、疑はしい眼で自分の肉身の親を見てゐるやうな光景であつた、少佐は、遣る瀬ない悲しさに打たれると同時に、一しほ棄てられた兒のいぢらしさをあはれに思ふ外はなかつた。

「何うでも俺は、再び此馬を連れて行かねばならない。」少佐は腹の裡にそれを考へて、馬の頰のふくらみを撫でながら、支配人に云つた。

『實は、それで相談だが、僕は、何うしても再び此馬を手に入れたくなつたのだ。』

『あなたがですかへ？』支配人は少し馬鹿にしたやうな調子でさう云つた。

『僕がだ、で讓つて貰へれば大變仕合せだと思ふんだがね。』少佐は、もう此馬が再び自分の手に入つたやうな心持になつて、自分の肩を馬の頸につけて、その氣持だけを滿足させた。

『さういつちや失禮ですが、あなたは將官ででもおありですか。』支配人は矢張り、『さうぢやあるまい』と云はぬばかりに、そんな餘計なことをいつた。

『いや實は少佐なんだ。』

『ぢや失敬だがお家は財産家とでもいふんですね。』支配人は、何處まで少佐を見縊つてゐるかを見せやうとするやうに、又そんなことを云つた。

『いやそんなことは全くない。』少佐は、支配人の擧動に全く氣付かないで眞面目にそれを取合つてゐる。それはアカツキが彼れの傍に來たので、馬以外の生物の擧動なんかはもう少佐には沒交渉になつてしまつてゐたのである。

ぢや失敬だが、あなたのお身分で例へ一頭でも馬なんか飼つて行くのは無理でせうぜ。けふ日は昔と違つて馬糧も滅法高くなつてゐますし、馬丁だつて安い給料ぢや來やしませんや。外へ預けるたつて五六十圓を缺かしちや何處だつて預るたア云ひませんぜ。

そのことは突差の間の計畫のうちに、多少見込をつけてゐないでもなかつた。それは夫人の里方の中將に賴んでその空いてゐる廐に入れて貰うと同時に、中將の乘用にもして、費用は中將と半分づゝ持つ位に相談して見やうといふのであつた。で、

『それは十分成算があるのだが、所で讓り渡して貰へるか何うか、それが肝要の點なんだが……』

『エヽわッし共は儲かりさへすりアいゝんですから、話によつちやお譲りしまいものでもありませんが、然し今此奴を持つて行かれると一寸困るからマア六かしい方でせうな。』

少佐には、相手の口調が懸引としか思はれなかつた。で少しは相場より高くとも讓るには讓るだらうと思つた。

『然しその興行の方の損を多少値段に見込んで手渡したら好いだらう。少しは高いのは承知だから、もと〳〵此方から望むんだからね。』

『サア。』支配人の顔には明かに話しにならないと書いてあるに拘らず、もう馬の顔しか讀むことの出來ない少佐には、それが全く見えなかつた。

『エヘッへ。』支配人は人を馬鹿にするやうに笑つて、『興行の損なんぞ見込んだらそれア大變でさア。そんなことはなしにしても 隨分高く無くつちやね。あれだけ仕込んであるんだから、もしあんたが興行人だつたら、すぐ萬て金を此奴が稼ぎ出すんだからね。』

好い加減にして歸りなさへと云はぬばかりに、支配人は、少佐の抱へてゐる馬の首を引離して、愛想氣もなく馬を引いて歩るき出した。

手の裡の寶物を浚はれて行くやうな氣がして、少佐は夢中でフラ〳〵と馬の尻を追ひかけながら、

『マア思つた通りの値段を云つて見んかい。云ふだけなら好いだらうが。』そんなことを煩々と云つて、支配人に迫つた。

支配人は、少佐の言葉を、振り向きもせずに聽き流して、さつさと厩の方へアカツキを引張つて行きながら、鼻唄でも唄うやうな調子で、

『さうさね。マア五千兩にピタ一文缺けてもご免だね。』

その鼻唄のやうな聲は、玄翁で腦天をグワンと喰らはせられたほど、少佐をボーッとさせてしまつた。少佐は肉襦袢や道化服が、八方から嘲けり笑ひを自分に浴びせかけてゐるのも眼に入らずに、まるで誰れも見てゐない書齋に居る氣になつて、そこへ打ッ倒れてしまひ相になつた。全身に血が無くなつて、頭だけが熱湯のやうな血でハチ切れ相になつて、遠ざかつて行くアカツキの姿も、周圍の汚さくるしい光景も、一時に湧き上るキラ〳〵する雲につゝまれてしまつた。

グル〳〵廻轉する頭の裡の世界だけを歩いてでも來たやうに、少佐は不意に廣い並木通りに出た。

此通りを左に折れた細い往來に、少佐の馬丁だつた作爺が、少さな鹽煎餅屋を出してゐるのであつた。少佐は、時々態々此邊へ廻り道をしても、その店によつて、爺とアカツキの昔話をして、うまくもない煎餅を買つて歸るのであつた。

少佐は何時しかその店の前に立つてゐた。煎餅の型を押してゐた作爺は、慌てゝ店先へ飛んで出て、何時もの通りの挨拶をするのであつた。

『作爺や、』少佐はさう云つて、今思ひかけず出會したアカツキのことを話さうとしたのだが、急に胸が塞がつて、次の句が出なかつた。

作爺が怪訝な顏をして此方の面を見守つてゐるので、少佐は、言ひ泥らす事も出來なかつた。でかすれ聲で、

『今日偶然アカツキに出逢つたよ。』

『へエツ、アカツキに、それア何處ででござせいす。』作爺は、芝居の中間のやうな聲を出して、眼を丸くした。

『あの燒け跡に曲馬の小屋があるだらう。あすこにゐるんだよ、アカツキが。』

『へエあの小屋にね。あれは私共の心安い人間がやつてゐるんですが……』

『何？お前あの支配人を知つてゐるのか？』少佐は意外の便宜を得たやうに思つた。もう萬事ダメになつたあとではあるが、作爺があの男を知つてゐるとすると、たゞ漠然と、そこにまだ一縷の望がつながつてゐるやうな氣がした。

『エ、あの男は、あつしの子供の時分からの友達で、もとは伯樂で、隊へも時々やつて來たんです。あつしが旦那様のとこを下つた時にも、一緒に一座の仕事をやらないかなんて云つたんですが、あつしは香具師なんぞにはなり度ないつて斷つたんでごせへすよ。アカツキがあいつの手に入つたことはちつとも知りませんでした。さうと知つたら早く行つてやるんでしたつけ。何しろあの一座は年中日本國中をぐる／＼廻つて時々公園裏へ來るんで、めつたに逢へねへでごぜへすよ。』

少佐は、けれども先刻のいきさつを作爺に洩らす氣にはなれなかつた。

『何か藝當でもやつてるんでごぜへすか。』

『あゝ中々うまいことをやつてるぞ。けれども俺は……』少佐はその先を何と云つていゝかわからなかつた。さうして齒をくひしばつて言葉を途切らした。

『うまいことをね。』作爺は、急に眼をショボ／＼させて、『やれ／＼△△中將閣下や××少將閣下や旦那様を御乘せ申した名馬だがなア。世が世なら一生飼ひ殺しで御隱居の身分なのに、香具師なんどの手に渡つて苦勞をしなきやならねへなんて、旦那さま、可愛想なもんぢやごぜへせんか。禁忌め／＼しい世の中になつたもんですなア。あア長生きはしたくねへ。』

作爺はさう云つて、窃むやうに舊主の見すぼらしい姿を見たが、堪へ切れずに皺だらけの手の甲で眼をこすつた。

『作や、もうアカツキの話はしツこなしだ。』少佐は、態とらしい作り聲でさう云つて、仰々しく煎餅の箱をあつちこつち見廻しながら『煎餅をくれツ煎餅をツ』と號令をかけるやうに怒鳴つた。

『ヘツヘツ。』作爺もベソをかきながら作り笑ひをして『年をとつちや、旦那樣、ダメでごぜへすよ。』

『でもお前なんかア寧ろ結構な身分なんだ。伜は一廉の職人になるし、店は繁榮するし、もう苦勞はない。僕等のやうな素浪人はそこへ行くと寧ろ始末が惡るい。アツハツハ。』

笑つて見たやうなものゝ、われながら戯談を云つてゐるやうな氣はしなかつた。少佐自身の暗らい前途に比べると、此の煎餅屋の方が遥かに明かるいのであつた。

『ご戯談を仰しやる。然しマアお蔭樣で店の方は足かけ四年何うか斯うか持ち耐へて來ましたんで、もう御得意樣も出來ましたやうな鹽梅で、年寄の小使取りには十分でごぜへす。然し肝心の伜が葬儀屋の棺桶職人ぢや、一生うだつが上りッこはごぜへせんや。然し職はありがてへもんで、かう諸式が高い〳〵と云つても、マア親子三人ご飯をいたゞいて行けるてもんでござんさア。』

少佐が作爺の手から煎餅袋を受取つてゐると、作爺の伜の若い嫁が外から歸つて來た。下町の娘らしいあどけない顔付に、丸髷を結つた恰好はまるで子供芝居のおやまのやうであつた。少佐はいつもうちの下女ほども興味を持たずに見てゐた此の嫁が、今日は絽の單衣に博多の夏帶を結めて、商家の家内のやうなキチンとした姿で現はれたので、頗る物珍らしく眺められた。無論棺桶屋の職人のかみさんとは思はれなかつた。

『おゝ今日は大層立派な奥さんになりよつたな。働きものゝお亭主を持つて仕合だなア。』少佐も、失職を五六年も鼓

けてゐるうち、こんな人間並の愛相をいふことを覺へたらしい。
嫁は氣がつかへて持ち上げられない首を据へて、上眼使ひで少佐を見ながら、氣まりのわるいやうな艶めかしいやうな笑ひ聲を立てた。
少佐は、やつぱり此の煎餅屋の店の方が、自分の家の内より餘ツ程明かるく感じた。アカツキの一件も、忘れたやうに頭から消へて、少佐は輕い氣分になつてそこを去つた。
電車へ乘らうとして並木道へ出て、停留場に佇んでゐると、樂隊を先頭にして、赤い幟を何本も立てた廣告隊が通りかゝつた。見る氣もなく見ると、『東金曲馬團大一座』とある。先刻の曲馬の廣告である。ハツト思ふと、その中程に、如何にも不恰好で劣等な、花火から飛び出したやうな洋裝の少女が、西洋西瓜を倒さにしたやう醜い太い脛をブラ下げて、男乘りに馬に跨つてやつて來る。
『アカツキだ！』少佐はその少女の乘つた馬を一目見ると、それを發見して、カツとなつた、さうして無意識にそつちの方に二三歩驅けよつた。
少佐は、矢庭にその少女を馬から引ズリ下ろして、この屈辱の狀態で市中を引廻されてゐるアカツキをこの場から救ひ出してやりたい氣がした。少佐はそれを敢てする力が自分にないことを知ると同時に、醜怪な行列の中央にアカツキがゐるのを手を拱ねいて眺めてゐる自分が、此の往來を歩るいてゐる澤山の人間の誰れよりも一番の意氣地なしだとしか思へなかつた。もし自分に勇氣があるならば、前後構はずあの行列の中に飛び込んで、アカツキを辱めてゐるすべての人間を片端から薙ぎ倒すことが出來る筈だと思つた。
少佐は、辱められてゐるアカツキを見てゐるのは、自分の苦痛を增すだけで何の役にも立たないことを知つてゐたけ

れども、こゝから避けて、その行列の眼に止らないところへ行つてしまふ氣には何うしてもなれなかつた。寧ら反對に、少佐は、行列が行き過ぎてアカツキの姿が見えなくなり相になると、我れ知らずその方へ足を進めて、再びアカツキの姿を見出して安心するのであつた。

『俺は何うしてもアカツキを見棄てることは出來ない。そんな勇氣は已れにないのだ。』少佐はフラ〳〵と行列を追ひかけながら、そんなことを思つた。

それは墮落して行く自分の子供を見つけ出した親が、その子供の墮落に絶望してそれを棄てゝしまふことの出來ないのと同じであつた。そうしてその子供が自然の傾斜面に沿ふて深味へ落ち込んで行くのを何うすることも出來ない親の運命が少佐自身のそれであると思つた。

『ヤイどいた〳〵。何を往來の眞中でぼんやり突立つてやがるんで。』

後ろから息のつまるほど横腹を突かれて、少佐は歩道の方へよろける途端に、境の滸石に躓つまづいて、大の男が、叩きつけられたやうにプラターナスの根元に打ち倒された。

『コラ待て。』少佐がさう叫んで立ち止つた時には、割れるやうな大勢の笑ひ聲を後にして、威勢の好い男が二三人で先引きをしてゐる荷車は、さらに突き倒す人間を見つけ出したやうに走り去つてしまつた。新聞紙に包んだ煎餅袋は何かに當つたと見へて、歩道一杯に散亂して、通行人は皆、その煎餅の零落と少佐の顔とを見比らべて、その間に多少の聯絡を見出したやうに、氣の毒相に苦笑して行つた。

『不埒な奴だ。』少佐は、影も形も見えない荷車の跡を睨んでさう叫んだ。そこらの人達には無論、何が不埒なのだか解らぬらしかつた。無上に腹の立つた少佐は、そんな顔をして少佐の砂まみれの姿を見てゐる通行人を皆毆り倒したい

氣がした。それをする勇氣のない自分を、少佐は先刻の意氣地なしに是をかけた意氣地なしだと思つた。

少佐は、電車に乘るためにこゝに立つてゐたのであつたことを忘れてしまつて、幾臺かの電車を行き過ぎさせた後、見當も構はずに歩き出した。

二三町歩くうちに、又何かに蹴つまづいたので、少佐は髪の根がムツ〳〵するほど肝癪が起つた。さうして自分と同じ意氣地なしの足を、ぬげてしまつた下駄に突き込まうとして、鼻緒の切れてゐることを發見して、往來の人全部が自分を見てゐるやうな恥辱を感じた。

蒲燒の臭ひが鼻を突いたので、ふと見ると、こゝは少佐が作爺を連れて時々やつて來る馴染の蒲燒屋の門前だつた。鼻緒の切れた下駄を引ずりながら少佐はその門を入つた。

變挺な大男が、肩から腰にかけて砂まみれになつた、糊の利いた古絣の、西洋紙の紙屑のやうにクシヤ〳〵になつた單物を着て、鼻緒の切れた下駄を引きずり〳〵入つて來たので、下駄番の若いのも『いらつしやい。』といふのも忘れて、ジロ〳〵と少佐の姿を眺めて居るのであつた。

『君のところは客を上げんのか。』少佐は、餘憤のゴミ溜めのやうになつてゐる胸のクシヤ〳〵から、さう云つて若い者を怒鳴りつけた。

その聲に驚ろかされて現はれた女中は、

『マア何うなすつたの？』と見覺へのある少佐の變な樣子に目を丸くして、『喧嘩でもなさつたの？』

少佐は、通された薄暗い小さい座敷に座り込むと、急にがつかりして、今までのことが夢のやうに思はれた。

『一體何うなさつたの？』借し浴衣を持つて來た女中は、さう云つて少佐の着物をぬがせた。

『何だか馬鹿に景氣の好い男共が五六人で前後から引張つて驅けて來た荷車に突飛ばされたんだ。一體あれは何の事だらう。』

『さうね、今時分河岸の歸りでもないでせうね。けれども矢張りそんな連中でせうよ。』

『もう少し早く起き上れたら引捕へて仇を打つてやるんだつたが、石に蹴躓いてひどく倒れたものだから間に合はなかつた。畜生ッ。』

『でもあなた、あんな連中が五六人もゐるのに、あなたお一人で喧嘩なんかしたらひどい目に逢はされますよ。手出しをなさらないでよかつたんだわ。』

さう云はれて見れば、復讐どころではなく、返り討は必然だつた。物事は少し遲れた方が好いやうだ。少佐はそんなことを考へて、今自分は、ヤケ酒でも呷りつけるつもりでこゝへ飛び込んだのだが、少し考へる必要があるかも知れないと、甚だ反省的な氣分が兆した。が、すぐとそれが亦意氣地なしの口實のやうにも思はれた。

『酒だ、酒だ。』と少佐は叫んだ。

その晩、蒲燒屋から少佐が作爺を呼びによこしたのは、もう九時過ぎだつた。作爺は、とうに歸つたと思つた少佐が、まだこの邊に居たのを不審に思ひながら來て見ると、少佐は浴衣がけで、見知らない、藝者にしては年を取り過ぎた女を相手に頻りに酒を飲んでゐた。

『ヤア作爺か、よく來て吳れた。實は貴公に是非一寸賴みたい用事があるんだが、それは後刻として、マア一杯やれ。』振子のやうな手つきで少佐は杯を作爺に差し出した。

作爺は、少佐がもう十二分に醉つてゐることに氣がついた。傍の姿藝者といひ、少佐がこんなところへ來てへゞレケになることゝいひ、何だか唯事でないやうな氣がして胸に不安の動悸を感じた。

『コレ作爺や、何んでそんな怪訝な顏をして、ジロ／＼俺達を見るんだ。』と少佐は眼をすへて、そこの藝者の姿を改めて睨んでから、作爺に向つて『作爺、此婦人はな、先達まで赤阪で鳴らした老妓なんだよ。……アッヘッヘ、老妓は失敬々々、然し、老妓とはこれ國寶的藝者のことでな、決して侮辱にあらず。さてその老妓が、今日偶然我輩の尊敬する△羅教大主教猊下の一座に侍つてこのうちに居つたので、我輩は、大主教猊下及び老妓閣下に拜謁の光榮を得た譯なんだ。猊下ではダメ……彼奴は僞せ物だ。我輩がチヤンと此黑い眼で睨んだ 彼奴は確かに僞せ物だ。云ふことが成つちや居らん。此の老妓閣下の方が遙か上わ手だ。相撲にならん程上わ手だ。今晩は偶然この老妓閣下とこゝで出會する光榮を得ちやつたんだ。偶然こゝで……』

『およしなさいよ馬鹿／＼しい、云譯けなんかして、餘ッ程奥さんが怖いんだよ此の人は。』女は卷煙草をふかしながら、そんなことをいつて、その煙を少佐の鼻の先へ吹きつけた。

『それで旦那樣、そのお用と仰つしやるのは？』作爺は、まだ落付かない腰を浮かせながら、『ご用を先きに承つてしまはねへと、御酒をいたゞいても氣づまりでおいしくござせへせん。』

『作爺は相變らず忠僕だな、我輩感服仕る。實に慙愧に堪へん。然らば賴みぢやが、あの輩に話をした曲馬の支配人を一寸こゝへ連れて來て貰ひたいのだ。何うだ、お前心安いといふから出掛けて行つて賴んでくれんか。實は、今日あの支配人と一寸話しをしたんだからね、その人間だといへば知つてゐるに違ひない。』

少佐は如何に醉つてゐても、流石に用件を云ふ時は判然してゐると作爺は思つた。

『承知しました。でお用はその今日お話のあつた件についてゞございますか。』

『いや、それは違ふ、大違ひ。さうだ、その點をよく云つてやつてくれ、實の話とは全然違ふんだといふことを、實は、我輩の身上に關したことなんだが、マアそんなことは逢つて話すとして、とにかくも決して迷惑になるやうなことではないからとよく云つてくれ。』

作爺が、辨慶縞の乘馬洋袴を連れて戻つて來た時には、少佐は、青い顏をして、眼を据へて、もうすつかり女を捻ぢ伏せる形勢になつてゐた。が幸にもう前の老妓なるものは姿を見せなかつた。

支配人は座敷に入るなり、實の態度とは打つて變つて、遠くの方に平突く張つて、

『手前は先刻御目にかゝつた曲馬團東金一座の元締めをいたして居ります東金新寅と申すものでございます。今日は存じないとは申しながら失禮をいたしまして、何とも相濟みません、作藏老人の御主人とはちつとも存じませんでしたので、……』

『いやく失禮はお互様だ、殊に主從なんてことは昔の話で、今は友達同士だ。小笠原流はぬきにして、さあくまづ一こん。作爺、それ支配人閣下に杯を……』

實際少佐は、實は、馬にばかり氣をとられて、支配人が何んな態度をしたのか殆んど氣づかなかつたので、失禮の詫をうける理由なんぞは全く無いと思つたのであつた。

作爺は主人が眼を据へながら、案外應對が確かなのを意外に思つた、これなら誰れの腕も捻ぢ上げる虞はなさ相に思へた。然も、用事といふのは何事だか、早く片付けさせるに如くはなしと思つて、口を切つた。

『で連れて參つた此の新寅に御用と仰つしやるのは……』

『マアく/＼ゆつくり聽いて貰はんければならん。二人とも、十分飲んでくれたまへ。』

二人が好い加減赤くなつた時分に、少佐は、益々青白い顏に、薄氣味惡るい眼を据へてその用件を語り出した。

『實はだ、僕はだ、今日といふ今日、一身上の大問題にぶつかつたといふ譯なんだ。話は眞劍だぞ、笑つたりしちやいかんぞ。一言一句が眞劍だ。眞劍だぞ。』少佐は頻りに眞劍を繰り返して容易に話の歩を進めなかつた。

作爺は、矢張り少佐は醉つてゐるんだと思つた。從つて話し出す用件なるものが、果して素面の話か、酒の上の話か見當がつき兼ねると思つた。

『何しろ、今日は如何なる吉日ぞだ。』少佐はまだそんなことを云つてゐる。『△羅教大主教猊下の一座がこゝに見えたについて我輩は、「猊下、本日は特に一身上について御教を賜りたいから、失禮ながら別室へ」とこゝへ請じて、御教を乞ふたんだ。所が何うだ。あいつは……と申しては失禮だが、我輩の話が頓んと理解出來んのだ。我輩の話といふのは外でもないんだ「猊下、こゝに我輩は、二大公案を提つて猊下の御教を仰ぎ奉る。第一に、我輩は喰つて行けない。これを如何。第二に、我輩は命にかけて愛馬アカツキと離れることは出來ない、これを如何」。すると猊下の曰くだ。「二つながらアラズぢや」アツハハ、何がアラズぢやだ。あるからいふんだ、何がアラズぢやだ。「喰へんといふ法はない、人間△羅を體し、正道を踏み、己れを正くし、努めて已まずんば、山川それこれを棄てんや。喰へないといふのは汝の懈慢、緩怠の致すところぢや」だとさ。「第二に、牛馬、犬猫如き畜類に煩惱の愛を生じて悶々するはこれ汝の心境裡に獸畜の心の宿れるものぢや。會ふものは別れ、生あるものは死す。これ天地の通理、△羅の大法、陳芬漢芬でござる」だとさ。

『「これ猊下、人を馬鹿になさるなよ。我等の喰へないのは、正道を踏み、已を正くし、努めて已まない故に喰へな

いのですよ。邪道を踏み、已れを曲げ、怠けて已まない奴等は、皆立派に喰つてゐる。さういふ猊下もその一人だ。」と我輩さう云はふと思つたが、その一句だけは差し控へた。何うだ、作爺我輩は決して醉つて管を卷くのでないことは、それでわかるだらう。第二にだ。獸畜の心が我輩の心境に宿つてゐるか居ないか知らないが、アカツキが居ないぢや居ても立ても居られないんだから、誰れが何といつても、これは讓歩出來ない。死んでも讓歩しない。割引もしない。月賦でもいけない。卽時現金拂ひでなくちや承知出來ない。△靈教でも佛教でも耶蘇教でも大本教でも此の仲裁はゴ免蒙る。サア第一が喰へない。第二がアカツキだ。猊下何うしてくれる。猊下曰く、「御前は今日は醉つてゐる。何れ素面の時にとくと敎へを授ける」だと、「天下皆醉ひ△靈教獨り醒む」なんかんとぬかしてゐる癖に、醉つたものに敎が利かないで醒めるまで待つんぢや、藥が病の癒るまで待つてるやうなものだ。「エ、もう知らない」。我輩はさう云つて猊下を破門しちやつたぞ。

『そこへやつて來たのが、今までこゝにゐた老妓だ。我輩此度は二大公案をあの女に持ちかけた。女の曰くだ、そんなことはイト安い、二つとも一度に解釋するに雜作はない、とかうだ。然らば、何うするんだと聽くと――兩君これから本文だ、よく聽いてゐてくれ給へ……女の曰く、「あんたが東金一座に入つてアカツキを使ふ役になるんですよ」だと。何うだ兩君、成程さうすれば、我輩は喰つて行ける、アカツキと夫婦くらしが出來る、一擧兩得、一石二鳥、ウーンウーン……』

少佐は妙な唸り聲を發して二人を睨んだ

作爺は、少佐が卒倒でもするのぢやないかと、びつくりして腰を浮かせた。

『成程ね。』と新寅は、よく話がのみ込めないで顏で、たゞそんな合槌をうつた。」

『成程ねぢやないよ君、僕は彼れ老妓の一言で、君の一座に加はる決心をしたんだ、何うだ東金君、貴意如何ッ』

『旦那様、何を戯談仰るんです。そんな馬鹿〳〵しい話を、誰れがほんとにするもんですか、二人を舁いで笑つてやらうなんて、旦那様にしちや念入りの御戯談でごせへすね。』と作爺は眞個にそんな風に思つてゐるやうな顔でいつた。

『戯談だ？先刻から僕は、一言一句眞劍だと云つてるぢやないか、何を物好きに僕が今夜に限つて戯談をいふか。これ作藏、今日は我輩の一身にとつて、實に切ない、苦しい、淋しい、悲しい、——死ぬ方がよつぽど樂なやうな思ひをした日だぞ。その今日、我輩が何うして戯談なんぞ云へると思ふ。我輩は醉つてゐるかも知れん、然し醉つても本性はコレほども失つちや居らんぞ。』

『でもそんなこと、第一中將閣下や奥様に御話も御相談も出來ることつちやないぢやごさんせんか。』作爺はまだ眞個にしなかつた。

『そこだ、猊下なるものもさう云つた。「中將閣下や令夫人を何うしめさる。一家一族を辱めなければ喰つて行かれんのなら喰はんがよい」だと。ヘッ人のことなら、一生でも喰んでゐられるだらう。第一我輩目下の問題は、中將閣下や婦の爲めに何うしたら好いといふんぢやない。己れが喰へないから何うしたら好いといふんだ。俺は十數年軍人生活をしたが、軍紀風紀に觸れるやうなことは毛ほどもしなかつたぞ。御用商人や請負人達には役所以外で顔を會はしたことなんかたゞの一度もなかつたぞ。而かも退職してから職業を求めれば、會社でも銀行でも、此方へ來いつてものは唯の一軒だつてありやしない。その癖言ひ草がいゝ、貴下のやうな厳正な方には、我々商人は大分苦しめられたものだが、それだけ信任するに足る譯で、實に模範的人格でござるだと。そんなら使つてくれといへば、もとの官職の因縁を辿つて大官や役所へモグリ込む役には立ち相もないから使つたつて仕方がないだ。つまりあんたは泥棒が出來ないからダメだてん

だ。老妓はほんとうの事を云つたぞ。あんたは、悪い事が出來ない辯に、泥棒の中にお辭義をして割込まして貰うと思ふから皆に肱鐵砲を喰らんだ。そんなことをしないで、自分の腕で自分の仕事をして、買ひたいものは買ひに來いと云つてたらいゝぢやないか。それで買ひ手が來なかつたら、腕がないんだから餓え死にするより外はないとあきらめなさい。さうだ、さうに違ひなからうが、此の我輩には、その腕がないんだと云つたら、老妓の曰く、ちや電車の車掌にでも、ガタ馬車の馭者にでもなりなさいだと、殘酷千萬なことをぬかすやうだが、泥棒の出來ない人間は、そんなことでもするより外生きて行く道はないらしいぞ。僕の腕と來たら、何だらう。まあ馬の兵隊上りだから、曲乘りの一つ二つは出來るから、東金一座の末席を汚す資格がある位のもんだ。何うだ東金君。役に立ち相か、六かしいか、それが六かしいとなると、我等の二大公案は永久の謎になるんだ。』

少佐の呂律は大分怪しいが、云ふことは作爺にも觧つてゐた。それだけ作爺は、大變なことになり相な氣がして、動悸が烈しくなつて來た。東金の方は、凝つと考へ込んでゐたが、少佐の言葉の終ると同時に、

『そいつは面白ろい。近頃の珍事件だ。だが全く眞劍ですかい。』

『ダメを押し給ふな、今晩だけは、我等の咽喉から出るものは、オクビまで眞劍だ。』

『眞劍と定つたら旦那、わつしは乘り出しますぜ、あとで逃げを打つちや助りませんぜ。』と新寅は身體をのり出した。

『バ、バカいふな、これ新寅。』『作藏は胸の動悸で聲が慄へて、思ふやうに口がきけなかつた。『旦那樣、そんなつまらねへこと、酒が云はせてるんですぜ。明日まで、そんな相談には此作藏に御預け下せへし。新寅、おめへも、好い加減慌てなさんなよ。旦那樣にそんなことが爲せられるか何うか、つもりにも見るが好い。』

『作爺、今晩は、僕は、いくら忠僕のいふことでも聽かないぞ。僕は全く決心した。誰れが何といつても此の決心は

曲げん。」

さういふ少佐の唇は、だらしなくゆるんで、涎がだら〳〵顎を傳つて流れた。眼はどんよりとして、物を見る役は何處か外でしてゐるとしか思へなかつた。

作爺はこんな醉つぱらひの言ひ草を、本氣にして乘り氣になつてゐる新寅の方が氣狂ひじみてゐると思つた。見れば、新寅も、隨分酒が廻つたらしく、赤い顏に太い青筋を出して、塗りかけの仁王のやうな顏で、瞳を寄せて、無暗と舌なめずりをしてゐた。

『えゝ旦那、大にやつゝけませう。』新寅は商賣人らしく、これも呂律は怪しいが、頗る事務的な調子で云つた。『前以てお話をして置きますが、あツし共の一座ちや、あつし始め皆給料で、純益は山分けといふことになつてゐるんでさア。世間の香具師とは大變違ふんです。だから皆兄弟同然にしてゐまさア。尤も旦那がおいでだつたら、一座の元締めは旦那にして、儲けのとこは何んなにでも御相談しまさア。』

『何、今まで通りでよし、それで結構、それで結構。』少佐は應揚にそんなことを云つた。

作爺には、尤もらしい二人の應對が可笑しかつたが、全くの戯談とも見へないので不安だつた。

『面白へな。世間の奴等吃度膽をつぶしますぜ、陸軍少佐の曲馬師てんですからね、こいつは一度で御釜を起しちまうな。うめへことになつたぞ。』

『そんな馬鹿なことが出來るかい。』作爺は出鱈目にしても聞すてに出來ない氣がして、『帝國軍人の面汚しだ。』

『馬鹿いへ。大將の中將のつて働き盛りの年をしてブラ〳〵穀つぶしをしてゐるよりは、自分で働いて世の中の役をしてゐれば立派なもんだ。帝國軍人だつて、食客しかしちやいけねへて理屈はあるめへ。第一陸軍少佐が香具師の仲間

入をするなんて、我々の格を上げるだけでもおほ人助けだ。菩賢菩薩は花魁になつたてへぢやねへか。凡夫が凡夫の仕事をするのに墮落もヘツたくれもあるもんか。藝妓のいふことは間違へねへや。旦那の仰るのもほんとうだ。ゲーカとか何とかいふ先生だけが飛んだわからねへ唐變木だぜ。』

乘氣になつて饒舌り出した東金は、再び事務的態度に返つて、

『ぢや旦那、堅くお約束いたしましたぜ。お互の間で證文もオツでねへから、紳士的てところで、間違ひなしにしなせうぜ。作藏老人は、立會ひ人だぜ。』

『俺は知らねへよ。勝手にするが好い。』作爺はまだ相手にするほど本氣に出來なかつた。

『好いや、こゝに居るから立會人だ、紳士的で、間違ひねへとこだ。所で旦那、旦那の本名で名乘りをあげちや惡うがせうか。』

『いゝともいゝとも、陸軍少佐イヌシ河一座大曲馬か、アツハツハ、痛快々々。』少佐は身體をゆすつて好れしがつた。

『陸軍大佐イ…ヌ…何ですて、それア一體何ですへ。あゝさうか、猪の河でイヌシカワか。ちといけねへな、やつぱりキ河一座でなくちやいけねへ、イヌシ河一座なんてをかしいや。』

『いやイヌシ河でなけれア許るさんぞ、イヌシ河一座だ。』

『いけねへね。イヌシガワなんて、第一緣義がわるいや。犬死に河と間違へら。イヌシガワなんてだめだ〳〵。』新寅は呂律の廻らない舌で、イヌシガワを態とイヌシニガワ〳〵と、さもいやな名のやうに繰り返した。

『默れツ、香具師めが！』少佐はいきなり割れるやうな聲で怒鳴つて、ヒヨロ〳〵と立ち上つて新寅につかみかゝつ

た。

「何んだ此のイヌシニガワめ。」新寅もヨロ〳〵と立ち上つた。

二人は一寸ぶつかつたまゝ一二間離れて更らにヨロ〳〵とぶつかり合ふ途端に、からみ合つて膳の上に倒れた。そうしてそのまゝころがりながら拳骨をふり廻して、そこら中の道具を刎ね飛ばして、ガラ〳〵と大きい音をつゞけさまに立てた。

作爺は面喰つて、仲裁に入つたが、これも隨分あぶない足どりで、すぐと二人の上に重り合つて顚倒してしまつた。飛んで來た男や女中が三人を引離すに隨分骨を折つた。漸く離された三人は、がらくたになつた諸道具の上にペツたりと座つてゐたが、少佐と新寅とは、そのまゝそこへ倒れて、大きい鼾をかき出した。

作爺だけは、少し殘つてゐる生氣が、さつきの少佐と新寅との固い約束を想ひ出させると、又不安になつて變な動悸がやまなかつた。（をはり）

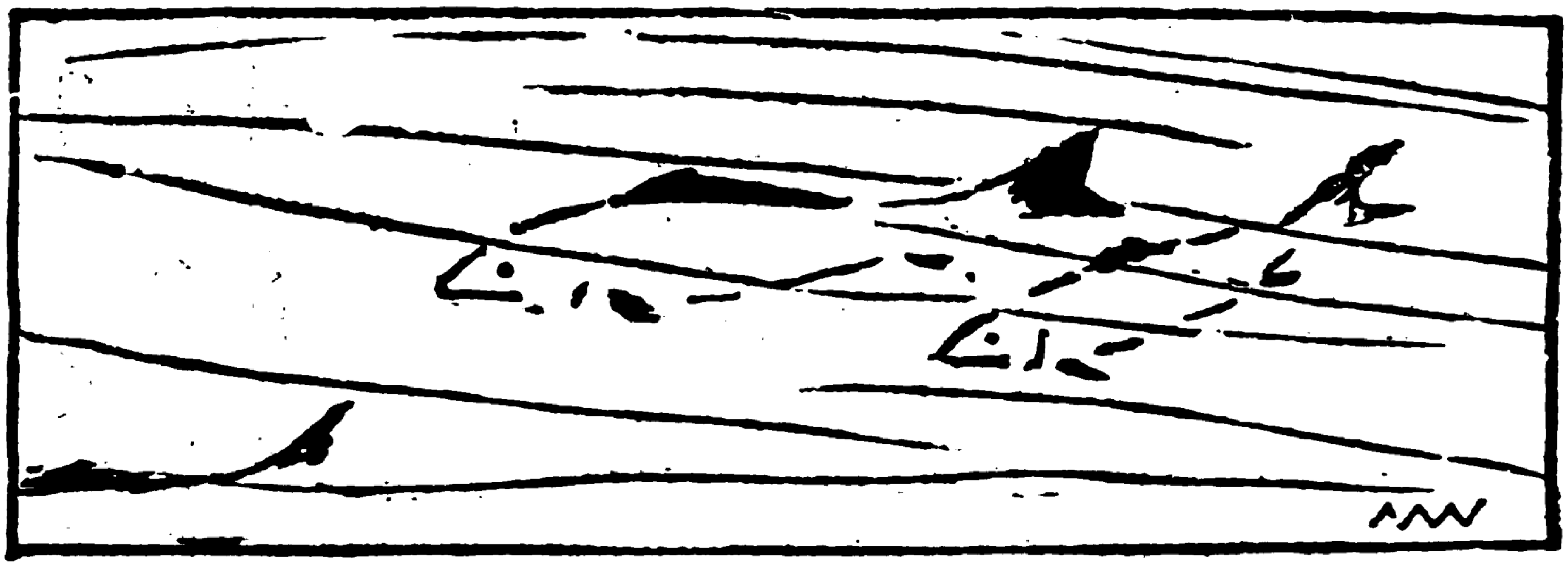
洛陽堂十五週年紀念圖書大特賣

□今回弊堂創立十五週年紀念の爲發行圖書大割引販賣仕候に付
□御引立御買上の榮を蒙り度く伏して願上候
□期限九月一日より十月卅一日迄右は其一部にて詳細目錄は御通知
□次第進呈可仕候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵稅
▲文學に現はれたる我國民思想の研究（貴族文學の時代）	津田左右吉	五、〇〇	四、四〇	、二七
▲武士文學の時代	同	五、五〇	四、八〇	、二七
▲平民文學の時代（上）	同	六、〇〇	五、三〇	、二七
▲ロダンの藝術	木村莊八	四、五〇	三、九〇	、一八
▲後期印象派（上下）	同	各二、五〇	各二、〇〇	、〇八
▲ボッチエリ	同	一、五〇	一、二〇	、〇八
▲エルグレコ	同	一、三〇	一、〇〇	、〇八
▲レオナルド・ダビンチ	同	二、三〇	一、八五	、〇八
▲チオット	同	二、三〇	一、八五	、〇八
▲デューラーの手記	同	二、八〇	二、二〇	、〇八
▲ギリシヤ	同	二、三〇	一、八〇	、〇八
▲ファンアイツク	同	二、七〇	二、〇〇	、〇八
▲少年藝術史ニールの河草	同	三、五〇	三、〇〇	、一八
▲ミレー傳	武田雨水	三、六〇	三、〇〇	、一二
▲ポール・セザンヌ	税所篤二	三、六〇	三、〇〇	、一二
▲藝術家の生活柊の花	中村亮平	三、〇〇	二、四〇	、一二
▲ロダン生涯と藝術	モークレール	二、五〇	二、〇〇	、一〇
▲痴人の懺悔	木村莊太	三、八〇	三、一五	、一八
▲トルストイ一日一想	加藤一夫	一、八〇	一、五〇	、〇八
▲ある青年の夢	武者小路實篤	二、〇〇	一、六〇	、一〇
▲美學汎論	稻垣末松	五、八〇	五、〇〇	、二七
▲基督に倣ひて	アケンピス	三、〇〇	二、五〇	、一〇

書名	著者	定價	特價	郵稅
▲ダンテ新生	中山昌樹	二、二〇	一、八〇	、一〇
▲ゲーテとシルレル	正富汪洋	五、〇〇	四、〇〇	、一八
▲死の舞踏	山本有三	三、三〇	二、八〇	、一二
▲心と心	武者小路實篤	二、五〇	二、〇〇	、一二
▲泰西の繪畫及彫刻（全九冊）	洛陽堂編	目錄參照	|	|
▲哲學概論	帆足理一郎	四、五〇	四、〇〇	、一八
▲哲理と人生	同	二、〇〇	一、七〇	、一〇
▲宗教と人生	同	二、五〇	二、一五	、一〇
▲國民生活の改造	同	三、三〇	二、八〇	、一八
▲人生詩人ブラウニング	同	二、五〇	二、一五	、一〇
▲古事記及日本書紀の新研究	津田左右吉	五、五〇	四、八〇	、二七
▲滅び行く宇宙及人類	兒玉昌	二、八〇	二、四〇	、一二
▲教育哲學概論	デューウイー	五、〇〇	四、四〇	、二七
▲吾等何を爲すべき乎	トルストイ	三、〇〇	二、五〇	、一二
▲吾等何を信ずべき乎	同	二、五〇	二、一〇	、一二
▲哲學的三詩人	サンタヤナ	三、〇〇	二、四〇	、一〇
▲聖アウグスチヌス懺悔錄	中山昌樹	二、八〇	二、三〇	、一二
▲ダンテ神曲	同	八、五〇	七、五〇	、二七
▲アシジの聖フランチエスコ	同	四、五〇	三、七〇	、一八
▲ベエトオフエンとミレエ	ロマン・ロラン	二、二〇	一、八〇	、一〇
▲ミケルアンゼロ	同	三、五〇	二、九〇	、一〇
▲日本基督教史（上下）	山本秀煌	各二、二〇	各一、八〇	、一二
▲生物學と哲學の境	永井潜	六、〇〇	五、四〇	、二七
▲生命論	同	六、〇〇	五、四〇	、二七
▲進化論者ヘッケル	岩崎重三	三、〇〇	二、四〇	、一〇
▲カーライル思想及評傳	佐久間操	一、八〇	一、四〇	、一〇
▲湖上の美人（スコット）	馬場睦夫	三、五〇	三、〇〇	、一〇
▲詩聖ゲエテ	中山昌樹	二、八〇	二、三〇	、一〇
▲藝術の革命	木村莊八	五、〇〇	四、二〇	、二七
▲チエホフの手紙	内山賢次郎	三、五〇	二、八〇	、一〇

東京市麴町區隼町廿番地
洛陽堂
電話九段九六六・五一二
振替東京二〇・九一四



酌（一幕一場 幻想時代）

大森眠歩

所、東京市内――山の手。
時、現代の晩秋――夜。
人、西野貞造――五十四五歳、會社員。
同、かよ――四十七八歳、貞造の妻。
同、完二――卅歳頃、貞造の息。
幻像（かよ）――現實の本人と同齢。
幻像（完二）――現實の本人と同齢。

舞臺を七三に分けた上手七分は、入口の格子先を下手へ向けた西野宅の内部。その下手三分は眞ッ黒い隣屋敷の板塀（上端には金屬製の忍び返しが觀客へ向かつて植えてあるのが高く見ゆ）に沿ふた細い路地の奥で『西野貞造』と書いた表札が其の突き當たりになつてゐる。

上手七分の舞臺裝置は中央正面に閉めたる襖ありその上手寄りは中仕切りの押入れ、その下手寄りは壁になつてゐて、粗末な茶道具や炭取りなどが長火鉢の傍に、チンマリと置き寄せて在る。上手の最端側面には障子を閉めてあるが、其處は裏口へ通ずる臺所。（障子を閉め切つてあるので觀客には見えない）下手の戸締まりをした格子先と障子を閉めた上がり框との間は下駄を脫ぐ土間。格子先の上には丸い軒燈が一個點いてゐる。

座敷の上手寄りに寢具を一ト組敷き、頭部を觀客の方へ向けたる貞造一人、靜かに仰臥す。その枕元には水藥、散藥、或は茶碗等を載せたる盆など在り。下手寄りの長火鉢の傍には、かよ一人、繕ひの針仕事をしながら時々手を休めては何か不安な物思ひに耽つたりして居る。座敷の中央に下がつてゐる一個の電燈は、かよの手元を明るくしてゐる。舞臺全面の光線は（軒燈一個、座敷に一個）內外二個の電燈以外、脚光も無し。音も無く靜かに幕開る。

――間――

學者タイプの洋裝凛然とした西野完二（黑い風呂敷包みを持つて）步調尋常に下手より登場。

自家（西野宅）の表口に立ち停まつて屋內の容子に耳を澄まして後、靜かに輕く雨戸を叩く。二度、三度……。

完二（屋外で低い聲）「私……私」（猶も輕く叩く）

貞造（かよに向かひ直覺的な眼を輝かし）「完二だ」（言ひながら、かよと共に耳を澄ます）

――間――

かよ（表口へ向かつて）「完二なの？」

完二　え、「！」

かよは貞造に眼でことわつて急ぎ戸締まりを開ける。貞造は蒲團の上に半身起きなほる。

貞造夫婦は我が子（完二）の風采を見て先づ驚いたが忽ち安心から喜悦に變る。完二は元氣よく框へ腰掛けて靴を脫いたりする。その姿を貞造は動々呆氣にとられた風で見てゐる間に、かよは戶締まりをして了ふ。かよと完二は殆んど一緒に座敷へ上がる。かよは、そわ〳〵として縫ひ物を片隅へ押し寄せ、座蒲團を出して「まあお敷き」と座らせる。完二は黑い風呂敷包みを長火鉢の傍へ無雜作に置く。

突然な、八九年振りの親子對面である。あまりに突然な喜び（？）に、いづれも俄かに言葉の出しやうもなく、緊張した短かい沈默が互の胸に飛び交ふ。貞造は一と膝のり出して漸く口を開らく。

貞造（胸から聲を出す）「どうした？」（完二の顏や姿を見上げ見下ろす）

かよ（完二の姿を眼一ツぱいに吸ひ込んで）「まあお前、八九年も消息が無いものだから、ほんとに、どうしたかと思つて、家中でそりやもう大變な心配さ、あの當座は搜索願ひのなんのツて、隨分無理なお金まで使つたけれども、なんの甲斐も無いところへもつてきて、何やかやと不幸ばかりが續いて（言ひながら佛壇より位牌を二つ持ち出して來て座り直し）まあ是れを見てごらん」（と、完二の前へ差し置いて、既う淚ぐむ）

完二（二個の位牌を兩手に持つて眺め、驚きを自制し）「……千重子は十九にも成つて……篤坊は十三……」

かよ「千重子なぞもお前の事に就いちやそりやもう呼吸を引き取る間際まで心配してゐたよ、あの子は肋膜が惡いところへ絡んで遂々いけなかつたし、篤坊はその明くる年の春、學校の運動場で……今更なんと言つても仕樣がないけれども……お前は是れまでまあ何處に居て、何をしてゐたの？誰も知らない間に、ぶいと居なくなつちまつて……」（喜びの裡にも半ば恨みを含んだ表情）

完二（冷然として位牌を置きながら追憶的な語調）「私が默つて家を出ましたのは、値打ちのある、新しい生活をしたい

が爲でした。さうして先づ、足手纏ひな舊い生活をサツパリと捨てちまつたのです（聲を落とし）人間も涙を流して泣く事が出來るうちは未だ幸福なのです（言ひながら貞造の枕元に置いて在る藥に目を止め、不安さうに）……阿父さんは……何處かいけないのですか？」

かよ「お醫者の言ふには心臟がどうとかツてねえ……けれどもお前は是れまで何處に居て何をしてゐたの？」

完二（かよには返辭もせず、貞造の傍へ躄り寄つて）「一寸、脈を……」（言ひながら靜かに手を出す）

貞造は殆んど無意識に完二の方へ手を差し伸ばす。完二は熟練した手付きで金時計を見ながら脈搏を數へてゐる。

かよ（眼を瞠つて）「お前、お醫者にでも成つたの？」

完二（稍々暫くして獨り首肯き、手を離し時計をポケットに入れ）「さうです、醫者に成つたのです」（言ひながら體溫器を貞造に渡す）

かよ　喜びを含んだ驚きの表情）「まあ」

完二は腕組み俯向いてゐる。體溫器を腋の下へ挾んだ貞造も默つて俯向いてゐる。

かよは時々貞造の容子を窺ひながら、まじ〳〵と完二の姿を見守つてゐる。

――間――

やがて完二は貞造から體溫器を受け取つて、それを凝乎と見詰めてゐる。何等の表情もなく、靜かにそれをポケットへ入れてからも、矢張り默つた儘俯向いてゐる。何をか既に全々別な事を考へてゐるらしい容子。やがて愈々不安な表情。重い溜息一度。貞造夫婦は完二の容子に氣付いて、各々不安に引き込まれて行く。

――間――

完二（獨り言のやうに低い重い語調）「就いては、どうしても打ち明けなければならない事があるのです……それが爲に今夜、突然歸つて來たやうなわけなのです」

貞造夫婦、眼を瞠つて完二の言葉の續きを待つ。

完二（底力の籠つた語調）「私は、自分の仕事を生かし度いが爲に……といふよりは一般世間の爲に、博士論文を提出したのです」

かよ（ときめく）「まあお前が博士論文を……？」

貞造、自然の表情あり。

完二「けれども……」

かよ「……駄目だつたの？」

完二「……いざ内幕へ這入ると……矢つ張り金錢が要るのでした」

かよ（一と膝のり出し小聲で）「そして？……お前どうかしたの？」

完二（冷然として俯向き、沈着な言動）「屑背きなんて詰まらないものですが、食ふ爲には看板ですからね、食はなければ値打ちのある仕事も出來ない事は勿論ですから、私は出來得る限り奔走してみました。事情も話して方々へ頼んでみたのです金の工面を……自分の爲と言へば言へますが、本當に新しい價値のある仕事は、一般世間の爲と言ふよりは人間全體の爲なのですからね……けれども、眞面目な金錢といふものは、誰も貸しては呉れないのです（語調漸時に、愈々力強く、眞劍な熱が籠つて來る）私は……さうです、私は、仕事が一番大切ですから……何を棄てやうが、何を殺さうが（昂奮を自制して悠々沈着な言動）仕事は一番大切ですからね」

貞造夫婦は或る豫感に悸乎とする。

かよ「それで？……お前どうかしたの？」

完二（依然として沈着な言動、聲低く）「仕方がないので……詐欺を働きました。さうして、醫學博士の肩書きを貰ひました。……未だ齢も若いのにと言つて褒められたのです」

かよ（思はず身を浮かす、恐怖切迫）「勿論、お前のした事は、直ぐに見付けられたのだらうね？」

貞造は不思議な苦悶と烈しい焦燥を強いて自制す。

完二「今月今夜の……夜が明けるまでは大丈夫です……（時計を出して見ながら逸る心を自制し）時計の針は休みなく動いてゐます（俄に兩親の顔を見較べながら）……なんとか……なんとかして與れませんか？」

かよ（極めて低い、おろおろ聲）「なんとかッて……我家ぢや十年ばかり前とは、まるで異ふのだからね……永い間とり憑けてゐたお米屋だつて半年分を悉皆入れなければッて、お米を持つて來ては與れないし……質入れる物は入れちまつて、賣れる物は掻き浚つて賣つちまつたし……既うそんな具合で、ニッチもサッチも廻しが付かないものだから又、古道具屋を呼んで來てサ、空ッぽの簞笥まで捨てるやうに賣つて了つて漸く昨日、別なお米屋から現金拂ひで五升だけ持つて來て貰つたり家主さんへもホンノ言ひ譯に顔出しをして來たやうな始末なのだし……（語調一轉）それはまあ、それとして……お前が今夜要るッてのは幾らぐらゐたの？」

完二「なんのかの引ッくるめて六百圓はどうしても要るのです」

かよ（驚く）「六百圓！」（と。言つた自分の聲に、思はず四邊へ氣を配る。愈々恐怖）

完二（低い聲ではあるが、力強い語調）「私には今、赤い着物を着て牢屋にうづくまッてるやうな、不氣な暇は少しも無

いのです。大切な生命を棒に振つてもやり遂げなければならない、本當に値打ちのある仕事を爲なければならないのですからね」

かよは『赤い着物』といふ言葉を聽いた時、ギヨツと身を竦め貞造と顏見合はす。

完二（悠々としてポケツトから數枚の紙を出す）「私が書いた論文は『快素の進化、及び其の培養法』といふ題です……是れは序文の下書きですが、簡單なお話しをする前に一遍讀んでみます……「不肖、僭越ながら私かにおもふ。醫學は單に、疾病を癒す事に依つてのみ其の目的を達し得たるものに非ず。況んや、醫學なるものが將來に於いて如何に發達すると雖も、徹底的に疾病の斷絕は不可能なる限り、勞働或は慈善なるものが徹底的に貧困と飢ゑの斷絕は不可能なる限り、衞生なるものが徹底的に死といふ大自然的な約束に抵抗し能はざる限り、吾人は何を以つて生活を營む結局の目的と爲すや、人間の渴望する幸福の絕頂とは、如何なるものなりや、不肖、一言以つて是れに答ふ、卽ち【常に新しき快樂の滿足なり】と。こゝに於いて不肖、本論を發表して猶も先輩の叱正を乞ひ、造化の力と病源菌の精力を利用し、今後益々【幸福なる病人】を創造せんとす。……解りましたか？つまり、世界中に生きてゐるものは、皆ンな此の『快素』といふものから出發してるといふ事を、具體的に發表したのです。そして今後の人間生活を。本當の幸福なものにして行けるといふ事を確かな實驗で證明したのです。是れを引き伸ばして行きますと、科學ばかりではなく、戀愛も、哲學も、宗教も、藝術も、道德も、さうして勿論法律にも影響して來るのですが、まあ、さうした種々な方面は、それにたづさわツた人々にお願ひして、私は醫者としての役目を貫いて行かうと思つてゐます。（別の紙を捲げる）……此度は凡例の一節を讀んでみます、……『快素、卽ち、快感性元素は有らゆる生物の生活要素にして、最も多く是れを含めるものは生殖細胞なり。眼、耳、舌、肌、卽ち視覺、聽覺、味覺、觸覺、更に緊覺、或はインス

ピレーションと稱する感覺等、いやしくも生物が享ける快感といふ快感は、悉く快素の運動作用に依つて明らかに知覺し得るなり。勿論、生物たる以上、有らゆる病源菌も該元素を多分に含む事、實驗に依つて明らかなり。世に、變體性慾、或は變質等と稱するは該元素が或る特殊なる個所に於いて異常なる缺乏を來たし、或は、異狀なる集積、又は發達を遂げたる結果にして、當然明確なる現象なり。(中略)該元素の培養と快感性細胞の發育に關し、不肖、多年實地研究の結果、人工培養法なるものを發見したり。卽ち本論に於いて明徹微細に報告す。』……解りましたか?例へば、どんな種類の病でありませうとも、病そのものは矢張り人間の生活と同じやうに、此の偉大な自然が作つた立派な生命であり、生活なのですから其の自然の力を利用して『快素』といふものを培養するのです。つまり、病が重くなればなる程、病人は快い氣持ちに醉ふ事が出來るといふ譯で、是れは既う理窟ではなく事實出來るのです。そして不思議でもなんでもなく、極く當然の事なのです。けれども、其の病が必ず癒るといふ意味ではないのですよ。今、呼吸が絕えやうとしてゐる病人が、必ず呼吸を吹き返すといふ意味でもないのですよ。科學の力は人間生活を或る方向へ、或る程度まで導いて行く事は出來ますが、死といふものは、人間の知識や、感情を超越したものですからね、ですから科學の力で人間の苦痛を快樂の方へ導いて行くにも、大自然の原則にさへ隨つてゐれば必ず間違ひなく出來るのです。……私が發見した『快素』の培養法といふのは、藥品を一つも使はないのですから金錢といふものは、少しも要らないのです、けれども、素人考へとしては詰まらないもののやうですが、『空氣』だけは是非とも必要なのです。そして培養法といふのは、生活法の事を謂ふのです。なら、其の生活法とは、どうすればいゝのかと訊かれますと是れは却々むづかしくて今簡單に言ひ盡すことは到底出來ませんから省きます。兎も角、私は新しい病を創つたとも言へますが、又、新しい快樂を創つたとも言へます。が、本當に言へば實は此の私が創つたのではなくて、此の大宇宙の

生命といふものが出來た時から既に在つたのです。私の仕事は人間生活を幸福なものにし度いが爲に、新しい名前を付けて利用したに過ぎないのです。新しい名前といつても直ぐに又、舊くなつて了ふでせうが……（語調更め）病とは意味が異ひますけれども、例へば、腹が空いても喰べる物が無い飢餓のやうな場合にでも自分の體に此の『快樂』といふものを培養しますと、あの餓唾々々して咽喉から手が出さうな苦しみを完全に避ける事が出來ます。そして、特殊な快い氣持ちに醉ふ事が出來ます。ですが、快い氣持ちに醉ふといふ事は、死なないといふ意味ではありませんよ、もう一ト言、附け加へて今夜は此の話しをやめて置きます。……此の『快樂』といふものは、病人であらうと健康な人であらうと『空氣』の中に住んでゐて培養法が精確でさへあれば、必ず完全な、そして、特殊な快感に醉ふ事が出來ます。ですから、現代生活のドン詰まりで亂雜な知識と、惱ましい性慾と、飢ゑと、烈しい勞働に困憊した人達も、やがては必ず生活を享樂する事が出來るやうになります（力強い嚴格な語調）私は必ずと言つて斷言します」キリツと口を結ぶ）

―― 間 ――

やがて、かよは、ふら〳〵ッと蹌踉めき立ち上がつて中仕切りの押入れを開け（觀音へ背を向け）何をか探してゐる。その容子に凝乎と目も離さずにゐた貞造は彈けたやうに飛び寄つて、かよの背後より抱き付く。全く無言の爭ひが稍々暫く……間もなく、かよは死人の如く貞造の兩腕に抱かれた儘、座敷の中央へ戻り、貞造に援けられて、ぐつたりと横に寐る。貞造はかよの體を仰向けに寐かせ、その額へ掌を當てゝみる。と、自分の枕を持つて來て當てがひ、臺所から手拭ひを濡らして來て、かよの額へ丁寧に載せ置き、悠々として蒲團（夜具）の上に戻り完二と相對して座る。

完二（貞造に對つて沈着な低い語調で）「どうしたのです？」

貞造（懐中より西洋剃刀を出して完二に示す、呟くやうな重い語調）「先月……の、末だ、……俺が眠つてゐる際に……あの天井の釘へ細い紐の輪を掛けちまつてから踏み臺の上へ針箱を載せたのだ……俺が、ふと眼を醒ますと（腭で、かよを指し）恰度其時……其の上へ乘らうとしてるのだ。……俺は直ぐに抱き止めたがね……（重い溜め息、西洋剃刀を眺め）今は是れだ……もう僅かで、際どいところだつた！」

完二（何をか重く、考へてゐる）「…………」

貞造（獨り言のやうに）「……無理もない事なのだ！……あとで泣いて謝罪ッたがね……その晩……今度は反對に、俺がやらうとして、止められた夢を見た」

かよは極めて微かに時々、呻り聲を洩らす。何か意味の解らない囈言のやうにも聽こえる。」

――間――

貞造（剃刀の刄を剝いて、それを熟々と眺めながら重い語調）「俺が今、是れを取り上げたのは、おふくろに對して、必ず親切な行爲ではなかつたのだ！……實は、俺の心に住んでゐる惡魔が、俺自身を助けたのだ……此の俺を救つたのだ……！（氣を換へて剃刀を懐中へしまふ）お前は何か？、世間の人達が一番大切か、それとも生みの親が一番大切か……どう思ふね？」

完二（低い聲ではあるが斷乎たる語調）「私は、自分の仕事が一番大切です！」

貞造「む、さうか！」

――間――

貞造（靜かに起ち上がつて帶を締め直しながら低い聲ではあるが底力の籠つた語調）「少しの間、待つてるがいゝ」

完二「どちらへ？」
貞造（重く）「直ぐに歸る」
貞造は臺所の裏口から音も無く出て行く。（退場）

——間——

完二は靜かに立ち上がつて、かよの脈を診たり、額に載せてある手拭ひを絞り直して來て靜かに冷やしたりしてゐる。
更け沈んだ晩秋の夜は風の音も無く、森閑としてゐる。

——間——

かよは漸く正氣にかへる。むつくりと半身を起こして、暗い憂鬱な眼付きで四邊を見廻す。
かよ（傍に座つてゐる完二の容子を見ながら）「阿父さんは？」
完二「直ぐに歸ると言つて何處へか出て行きました」
かよ「まあ此の眞夜半に……」（考へてゐる）

——間——

かよ（氣を換へて）「お前は是れまで、何處に居て何をしてゐたの？」
完二「詳しい事は、あとでゆツくり話しますが……兎も角、東京の或る病院に雇はれて、小使と一緒に働きました。毎日々々、ベツとり青い痰壺を洗つて、よごれた機械を消毒したり、病室の拭き掃除から庭掃きまでやりました。最初は意地の惡い小使にヒツ叩かれて齒を食ひしばつた事もあるのです。けれども私は懸命に働いて漸く大學を卒業しました。さうして、どす黒い血痰を吐く患者の世話もしました。強盜に切られた怪我人の手當てもしました。肉の腐つ

た淫賣婦の愚痴も聽きました。腹を斷ち割る院長の手傳ひもしました。」

かよは熱心に聽いてゐる。

完二「……生きた人間の腸の中を覗いてゐますと、何か斯う物凄い……世の中の內幕を見せ付けられてゐるやうな氣がして……フトした瞬間に自分が醫者である事をさへ、忘れて了ふやうな事もありました」

——間——

かよ「お前の着物や洗濯物は、誰が世話して呉れてるの！」

完二「時に依つて、いろ〳〵です……新しいものは大概院長の奥さんが面倒見て呉れてますが、洗濯物は大概女中がして呉れます。場合に依つては心易い看護婦に賴んで他所でやつて貰ふ事もあります」

かよ「どういふ譯で八九年も此の家へ歸つて來なかつたの？……せめて年始狀ぐらゐ寄越したつていゝぢやないか。幾ら苦勞してゐたからツて、幾ら勉强に忙しいツたツて、同じ東京に住んでゐたのなら、例令一年に一遍でも、一寸の顏出しぐらゐも出來ないなんて事があるものかね……わたしやお前の氣持ちがチツとも解らないよ……？」

——間——

完二「私は、なまぬるい、中途半端な、そして而も煮え切らない生活が堪らなく嫌だつたのです。（强く）今でもイヤです」

かよ「お前は家を飛び出る前にもそんな事を言つてたが、未だにそんな無茶な事かんがへてるの？……生意氣盛りの昔と違つて、少しは世間で苦勞したのなら、もういゝ加減に氣が付いてもよかりさうな物ぢやないか……いつまでもそんな强情張つてゐて、世間が通せるもんかね」

完二「阿母さんの思想も、矢つ張り昔と同じなのですね……ですが私は、十年前の親子喧嘩を、又、更めて繰り返す氣には既うなれませんよ」

——間——

かよ（悲痛な眼付きで詰迫するやうに完二の顏を見つめ）「一寸した口爭ひさへする氣になれなくなつた者が、なんだツて監獄へ行くやうな事を爲でかして與れたの？」

完二「値打ちのある、尊い仕事を爲遂げ度いからです」

かよ（怒る）「なんですツて？……懲役に行く事を恥とも思はないやうな、性根の腐つた人間が、言ふ事に事をかへて、よくもそんな口がきけたもんだ」

完二（制するやうに）「もう少し低い聲でものを言つて與れませんか……阿母さんのやうに、さう昂奮しちまツちや解る事も解らなくなつちまふぢやありませんか」

かよ「だつてお前。自分の生んだ子が懲役に行くなんて事を考へたら、幾らあたしだつて昂奮せずに居られツかね（强度の不安）一體まあ阿父さんは何處へ出掛けたのかしら……健康な體でもないのに、此の眞夜中に……」（言ひながら物狂ほしく立ち上がつて臺所の障子などを開けて見たりする。髮もおどろに亂れてゐる）

完二は默つて座つた儘、膝を摑んで俯向いてゐる。

かよは貞造が寢てゐた蒲團の端へ俯伏して聲も立て得ず身を藻搔いてゐる。

——間——

其處へ貞造は悠々として（登場）何事も無かつたやうに裏口から戻つて來る。かよは驚いたやうな表情も暗く貞造の

顏を見詰めてゐる。貞造はそんな事には頓着もなく、深徹な態度を以つて完二の前に座る。疾病から起こる肉體的な苦悶を非常な克己を以つて端然と堪え、紙幣の束を默つて（完二に）渡す。

かよ（驚く）「阿父さん、そのお金はどうなすツたの？」

貞造（見向きもせず重い語調）「解り切つてるぢやないか」

かよ「どういふ具合に？」

貞造「借りたのだ」

かよ　嘘です」

貞造（凄い眼付きで、かよの顏を見詰める）「…………」

かよ「今日この頃のわたし達に、誰がホイソレとお金なんぞ貸すものですか……わたしはどうせ馬鹿ですがね、幾ら馬鹿でも子供を騙すやうな譯にやいきませんよ」

貞造（かよの相手にはならず、完二に對つて重く）「お前に一つ、敎へて置く事がある」

完二「？」

貞造（低い聲ではあるが強い斷乎たる語調）「生きるといふ事は、誰にも遠慮は不要ないのだ。……お前は仕事が一番大切だと言つた。それでいゝ！それを貫け、何ものを蹴破つても貫いて行け。いゝか、是れだけはヨク記憶えて置け。……（語調更め）今の金は、シッカリとしまツたか？落とすやうな事はないか？」

完二（ポケットを輕く叩いて）「大丈夫です」

貞造「さうか！……なら直ぐに行け、直ぐ行け」

かよ（完二に）「これッ、一寸お待ち」

完二「いゝ折を見て直ぐに又戻つて來ます」（靴を履き掛けてゐる）

貞造（かよに）「お前は自分が生んだ子に、番號の付いた赤い着物を着せると言ふのか？」

かよ（完二に）「一寸お待ちッてば」

完二（かよに）「直ぐ歸つて來ます、二三日、永くても一週間の内には……」

貞造「おい完二、誰が歸れと言つた？（或る强迫觀念を振り拂ふ如く）……俺は、お前といふ人間を見てゐると、怖ろしくて堪らないのだ。早く行け、俺は今後、お前に遇ひ度いとは思はない。否、斷然遇ひ度くない！。早く行け、早く行け、お前はお前の一番大切な仕事を爲遂げれば、俺は充分に滿足だ。……早く行け」（戸締まりを外す）

完二は格子の外へ出る。

かよ「これッ、一寸お待ちッてば」蹌踉き迫る）貞造は、かよの肩先をぐッと摑み、默つて睨み据え、機敏に完二へ向かひ『行けッ』と、眼で追ふ。

完二退場。

其處へ完二と入れ換り怪しげな粋い男（完二と同齡、絹布ぐるみの粋い着流し、凛とした風貌、冴えた眼には精氣を含み、口元キリッと引き締まつてゐる）登場。悠々として挨拶もなく、格子の中へ這入り、默つて自ら戸締まりをして了ふ。

貞造と、かよ、二三歩退いて此の怪しげな粋い男を見詰める。貞造の眼にも、かよの眼にも妾にも疑惧の氣配が閃いてゐる。

逞い男の顔には微笑が浮かんでゐる。

三人の視線、相交錯す。

逞い男は依然として一言の挨拶も無く、靜かに疊の上へ上がり、そして悠々と膝を開らいて座る。

貞造と、かよは、更に五六歩退いて、此の怪しげな男を見詰める。

三人の視線、更に相交錯す。

――間――

逞い男（こぼれさうな微笑を包みながら、不審さうに）「……阿父さんも阿母さんも　どうしたツてんです？そんな妙な格好をしてないでマア座つたらいゝでせう……　私をお忘れになつたのですか、私は完二ですよ、此の家の悴ぢやありませんか」（無邪氣さうに輕く短く笑ふ――微笑を殘す）

貞造も、かよも、依然として逞い男を見詰めながら立ち竦んでゐる。

――間――

貞造（相手の容子を猶も深く見詰めながら重い語調）「……刑事とは異ふのだね？」

逞い男は依然として微笑のみ。

貞造「と、すると……ユスりか？」

逞い男「完二ですよ」

貞造（首を強く横に振つてから前へ伸ばし、太い力の籠もつた語氣）「惡黨ッ（沈着な言動）……う、訴へるなら訴へて見ろ」（腰を据える）

澁い男「そんなケチ臭い仕事は旣う七八年前に年期があけました。マア今ぢやア十幾人も捫んでゐます。手下を……先刻私の名を騙つて來た奴も其の內の一匹ですが彼奴は鈍智なんで際どい仕事にやカラキシ役に立たんぢやありません」

貞造（直覺的な語調）「お前は俺を殺す氣なのだな……俺は旣う、死ぬ事は恐しくないのだ。人間として爲なければならない事を　タツク今、俺は爲遂げて了つたのだ……さ、殺るなら殺つて見ろ……人を殺すなんて事は、やつて了へば案外雜作も無い事た（力强く、殺害の手眞似）……これで其の人間の生涯も帳消しだ。思つたより手輕く仕事は捗るんだ」

澁い男　眼を眞ン丸くして自分の鼻を指し）「本職ですよ、本職……」

かよは思はず襟を掻き合せ、眼、異様に輝く。

貞造　身を開らき、澁い男に迫る）「殺れツ」

座つてゐた、かよ、思はず小腰になる。

澁い男（苦笑「私が初めつから殺る氣なら、旣う疾うに片がついてますよ」

貞造「お前は一體何だ?、そして何しに來たのだ!」

澁い男「眺めに來ました……それから、も一つ……」（悠々として寛ぎ、充分に餘裕のある態度にて、かよと、貞造の身心を凝視）

かよは恐怖を凝乎と堪えて澁い男のすべてを銳く見守つてゐる。

貞造は何をか口籠もる。と、意味の無い拳を固めて自分の膝頭の片方を强く打ちながら或る怯えを嚙んで、澁い男の視線を避けるやうに、ぐツと顏をそむけてゐる。

――間――

かよ（突然、貞造に向かひ、驚きの語調）「阿父さん、此處に居るのが眞實の完二です、是れが眞實の完二です。私が生んだ子なのです（俄かに表口の方へ振向き）あゝ、とんだ事になつて了つた（言ひながら立ち上がつて）わたしはどうしても、どうしてもあのお金を取り返して來る」（常識を失つて家を飛び出る）

かよ退場。

貞造は依然として澁い男に顏をそむけ、打つてゐた自分の膝頭を固く掴んで俯向き、人形の如く不動。

澁い男は悠々として充分に餘裕のある態度を保ち、貞造の身心を凝視してゐる。

貞造は恰も根強い幽靈をでも見る如く、時々そツと澁い男の容子を窺ふ。が、互の視線が衝突すると彈けたやうに顏をそむけ、物凄い恐怖、戰慄の表情。

――間――

かよ。顏に兩手を押し當て、物狂ほしく身を振りながら戻つて來る。（登場）疊へ上がると、恰も破壞された自作の彫像を悼む如く、悲慘な眼付きで澁い男の身の周圍を足元危く彷徨しながら『吾が子』（澁い男）の姿を見上げ見下ろして廻る事、二回、三回…遂に全く絕望。微かに呻きながら、ばたりと死人の如く伏す。と、同時に、更に全き同裝同齡のかよ下手より戻つて（登場）來る。表情極めて明快。疊へ上がる。

喜びのかよ（誰に向ふともなく）「犯罪にならうが、貧乏にならうが、此の子に遇へた事に較べりや今のわたしにや何の苦でもありやしない（死人の如く俯伏してゐる絕望のかよに近寄り輕く背中へ手を掛け、その顏を覗き込み）お前はホントに氣が小さいよ、マアなんて意氣地のない事たらう、自分が生んだ子に八九年目で遇へたんぢやないか、健康な

體で歸つて來たのだからチッとも歎くこたないぢやないか(こんどは澁い男に向かひ)まあお前はよく歸つて來てお呉れだつたね……わたしやなんと言つて喜んでい丶か解らないけれども、お前にやわたしが、どんなに喜んでる事たか、此の胸の内がスッカリ解りはしないだらうね?」

澁い男は、かよが俄かに双人になつたので强度の不審。

貞造も驚きの眼を瞠つてゐる。

澁い男(かよに)「阿母さん……私の眼がヘンになつて來ました」

喜びのかよ「何故?」

澁い男(眼を擦つて見直す)「おゝ、矢つ張り阿母さんが双人に見える(更に見直す)あゝどうしても矢つ張り双人に見える」(言ひながら疑懼の眼を光らして双人のかよを見詰めてゐる)

喜びのかよ(澁い男に)「まあお前は何をそんなに驚いてるの、大の男が可笑しいぢやないか(絶望のかよを指し)是れはね、わたしの嫌ひな、わたしの精神……なんのかのッて五月蠅いわたしの靈魂なの、打ッ捨ッといても死ぬ氣づかひはないから大丈夫よ。でもお前はホントによく歸つて來てお呉れだつたね、お前が世間でやつて來た苦勞も、女のわたしが思つた程仰山なものではなかつたかも知れないけれど、まあ斯うして見るところ、何から何までお蠶ぐるみで生活て行けるんなら、どうにか相當な暮らしをしてるんだらうねえ(一寸眞面目な表情になる)冗談にもあんな脅かし文句を言はないでお呉れね、八九年も遇はないからウッカリしてると、あんな冗談までも本氣で聽くのは無理もないぢやないか、泥棒の親分に成つたの、ヤレ、人殺しが本職ですなんて(俄かに愉快な表情)まあそんな事アどうでもいゝね(言ひながら貞造の方へ振り向く、と、此度は貞造の傍へ近寄り)阿父さんはどうなすつたの?(遠慮し

ながら額のぞき込む。半分獨り言のやうに）何をそんなに物怯えしてるんでせう……」

貞造（憑かれたやうな怯悸）「離れて…… そッちへ退いてろッ」（身を竦める）

喜びのかよ（居座り寄る）「わたしですよ、わたしぢやありませんか」

貞造（猶も身を引いて竦む）「お前が、お前が、双人居る筈はない……どッちか、どッちか……」（戰慄、愈々身を竦める）

喜びのかよは、呆れたやうに貞造の姿を見上げ見下ろしてゐたが、忽ち喜びの表情消え（驚きのかよ）貞造の衣服の一個所を、そうッと摘んで見る。そして、ぶるぶるッと手を縮込め、ぎッくりした表情。

驚きのかよ（おどおど慄へる低い聲「阿父さん……阿父さんの着物の裾に……血、血のりが附いてます。ペッとりこびり附いてゐます……）貞造と逞い男を見較べながら胸に兩袖を重ね驚怖。半ば獨り言のやうに）わたしなんだか……寒氣がして來た」（言ひながら危い中腰で後退りにたじろぐ。と、既に倒れてゐる絶望のかよに躓いて悸乎と身を竦め『く』の字形に立ちおののく。

逞い男は鋭い眼を光らして双人のかよを見較べてゐる。その表情、恐怖——警戒——自勵——更に一切征服の態度。

——間——

逞い男は先刻、博士の完二が長火鉢の蔭へ置いて行つた黒い風呂敷包みを持ち出して來て、それを解く。と強烈な洋酒の大きな壜が二個現れる。逞い男はそれを自分の膝の前へキチンと並べ置き、風呂敷を悠々と疊みながら酒の壜と貞造の額を等分に見較べ、凄みの籠もつた誘惑的な微笑。

貞造は意外な眼を瞠つて酒の壜と逞い男の容子を見較べる。——その視線は次第に熱を含み溶けたやうに壜の中へ沸き込む。凄愴な喜悦に輝く眼、渇求の口、全身は感電せる如く微動。

——希望のかよ（即ち驚きのかよ）は、此の酒の壜に對する双人（若い男、貞造）の態度に驚異の眼を光らす。

——間——

發芽したやうに立ち上がつた貞造は、突然、壜を狙つて飛び寄つた瞬間、二つの壜は既に、希望のかよが胸元へ確固と握り込んでゐる、非常な速度を以つて希望のかよが奪つたのである。

希望のかよ（貞造に）「阿父さん、お醫者の言つた事、もう忘れたのですか？」

貞造　俺は生命が惜しくて醫者に掛かつたのではないのだ。……（語調更め）金を拂つて買へる『幸福』は、既う俺には何にも無いのだ。……『金錢』と同じやうに、俺は『生命』を支拂つて『快樂』を買ふのだ」

希望のかよ「そんなら、わたしはどうなるのです？」

貞造（力強い語調）「……世帶を持つてから今日まで、俺はお前に責められ通して來たのだ。お前自身の缺點は棚へ上げて置いて眞實しやかに俺を責めた、何かに就けてお前は俺一人を責めた。或る時は甘へながら責めた。或る時は泣きながら責めた。又或る時は金切り聲に責められた、俺が默つて聽いてゐたのは、お前の言葉に屈伏してゐたのではない。馬鹿々々しくて相手になれなかつたのだ。それも、お互ならば我慢もし易いが、俺は今まで、決してお前を責めなかつた。と、俺はキツパリ言ひ切る事が出來る、それもお前は知つてる筈だ。けれども、何から何までお前が行き屆いてゐたからでは勿論ないのだ。俺は唯、人間のやる仕事に『完全』を求めるといふ事が恐ろしかつたのだ。お前は俺を指して意氣地が無いと言ふかも知れないが、俺はそれだけ強かつたのだ。若し俺が弱かつたら、必ずお前を責めたのだ。俺の『不足』を相手のお前に求めたにちがひない。だが相憎と俺は強かつた。そして絶えずお前に絞られた。責められ通してゐたのだ。……お前に斯んな事を話してもサツパリ譯が解らないだらう、さうしてお前は初めて俺に、何

か斯う。……責められてゞもゐるかのやうに、或は思へるだらうが、決してさうではないのだ。……けれでもお前が平生俺一人を責めてゐたのは、何が偽だ、……答へは短かい、唯、俺がお前の亭主だ』といふだけの事ぢやないか。お前は俺に、どんなに多く満たして呉れたらう？……殆んど『不足』ばかりぢやないか―でも俺に、その『不足』に甘んじてゐた。お前を責めなかつた。少しも責めなかつた。けれども、お前はどうだ？……自分の胸に訊いて見るがいゝ、俺は何も言ふまい……だが、もう此のうへ俺を責めないで呉れ……俺は俺として悩むだけ悩んで來た。苦しむだけ苦しんで來た。そして今夜は、最後の苦しみを突き破つたのだ。先刻、家を出て行つた、あの完二は、俺の『生命』と、俺の『仕事』を、持つて行つたのだ。俺は喜んで持たしてやつたのだ。……今この場合だから打ち明けるが、俺は『仕事』を生む爲にお前と一緒になつたのだ。そして、あの完二こそ俺が生んだ本當の『仕事』に違ひないのだ。俺が生んだ眞實の子に違ひないのだ」

希望のかよ（反撥的な語調で）「いゝえ、あの男は泥棒です、詐欺です」

逞い男「阿父さん、彼奴は此の私の子分です。此の私が本當の完二です」

貞造（双人のかよを指し、重い語調にて逞い男に向かひ）「此の不思議な生き物を見ろ……」

―間―

貞造（依然として逞い男に）「……お前が今、俺に呉れやうとする幸福、その幸福は俺の生命を奪ふかも知れない……だが、今となつては文句なしに、俺はお前が可愛いのだ。……俺が生んだ子のやうに可愛いのだ」

逞い男「私は眞實の子ですもの」

貞造（強く、重く）「否、俺には信じられない……（語調更め）お前には、生活の信仰といふものがあるか？」

澁い男「在ります」
貞造「どんなものが在るね？」
澁い男「快樂です。私は快樂の爲に生きてるのです」
貞造 俺は『快樂』を生む爲に家を持つたおぼえはない」
希望のかよ（貞造に）「なら、わたしを騙したのですね？」（迫る）
貞造（双人のかよを見較べ）「否、お前が俺を騙したのだ。……俺はお前が双人居るとは思はなかつた」
希望のかよ「それぢや卑怯です、自分で生ました子を認めないなんて……」
貞造「これが確かに自分の子だ。と、女のお前は信じても、男の俺には信じられない」
希望のかよ（怒る）「なんですツて？」（肉迫）

貞造イキナリ希望のかよの手から酒の壜を奪はうとして爭ふ。――とゞ、澁い男が二個の壜を奪ひ取つて了ふ。

俯伏してゐる絶望のかよは微かに呻り聲を洩らすが、その體は死人の如く、全々動かない。

希望のかよ（澁い男に）「阿父さんの病氣はね、今お酒が一番毒なのですツて……こんな强いお酒を飲ませやうものなら、直ぐに死んで了ふかも知れないよ。後生だからね、斯んな物は直ぐに棄てちまつてお呉れ、せめてお前一人でも、わたしの言ふ事をきいてお呉れ、ね？」
澁い男（壜の栓を抜きながら希望のかよに）「阿父さんは酒を欲しがつてゐます。人間の役目を爲遂げたと言つてゐます。死ぬ事を喜んでゐます」
希望のかよ（躍起となる）「お前は阿父さんを殺す心算なのだね？」

澁い男「阿父さんは今、自分で犯した罪に感謝してゐます。酒を飲んで死ぬ事を喜んでゐます」(壜の栓を抜き取つて了ふ)

希望のかよ(狂氣の如く酒の壜を奪はうと爭ひながら)「後生だから……後生だから、わたしを助けてお呉れ、ね、わたしを助けてお呉れ」(必死と爭ふ)

澁い男の腕力のハズミに突き離された希望のかよは、既に倒れてゐる絶望のかよを、夢中で揺り起こす。絶望のかよは髮もしどろに半身を起こし、今、危く貞造に酌を始めやうとしてゐる澁い男の容子を見ると、跳ね起きて驚愕――

四人(絶望のかよ。希望のかよ。貞造。澁い男)は縺れ縺れて愈々烈しく酒の壜を奪ひ爭ふ。

絶望のかよ(息堰きながら希望のかよに)「早く、早く、伯父さんを、伯父さんを呼んで來て……」

希望のかよ、急遽退場。

三人(絶望のかよ。貞造。澁い男)は酒の壜を中心に物凄く犇き合つてゐる。

――やがて、かよ(絶望のかよ)は、貞造と澁い男の腕力に突き倒されて慟哭。

澁い男は素早く壜を貞造に向ける。貞造は枕元の茶碗を掴み取つて、壜の口を受ける。受けながら胡座掻いて、ぐッぐと飲む。澁い男(自身は一滴も飲まず)は貞造が飲んでゐる一個の茶碗を狙つて間斷なく酌を續ける。――かよは身心に激烈な打撃を受けたる爲に積極的な力を失ひ、悶々として悲痛、懊惱、呻吟――

間斷なく酌は續く。

――間――

澁い男(猶も酌をしながら明瞭な語調)「阿父さん、私が誰か、ハツキリと解りましたか?」

貞造（酒の大氣を吹きながら下ッ腹を据え、豪邁な語調）「……今となつては、お前が誰であらうと、此の俺にとつては區別が無い。……俺には既う、そんな吝嗇な根性は無くなつて了つた。……自分の子であらうが他人の子であらうが（強く）人はみんな人の子だ。……生れた子供に名前を付けるといふ事も、こいつあ考へ物だ。……（新しく注がれたのをぐッと飲み急き込む）俺はお前が可愛い！それでいゝのだ。お前は酒を飲まして呉れた。俺は心から喜んでゐる。それでいゝのだ。……人間といふ名前が、此の世の中に出來る前から、お前も俺も生きてゐたのだ。さうして人間といふ名前の消えて了ふ、ずッと未來の果てまでも、俺達みんなは此の世の中に住んでゐるのだ。……産れたとか、生きるとか、死ぬとか言ふ事は、唯、住む所が變はるだけの事なのだ。……愛も知識も、神も佛も、此の世のすべては（飲みさしの茶碗を持ち上げ、それを強く見据えて）是れッ、此の俺の生命なのだ。在りと在らゆるものに、舊いものは一つも無い。又、どんなに珍らしいものが生れやうと、それは決して新しいものではないのだ。生命の中に在るものが唯動いてゐるだけの事だ。隠れてゐたものが、人間の眼の前に現れたのだ。……眞ッ闇な夜が來ても、太陽が無くなつたのではない（強く）俺は今、死に度いのだ（首を、ぐッと逞い男の方へ伸ばす）お前は、俺を殺す事が出來るか？」

逞い男（キッパリした語調）出來ます！」

貞造 殺したあとで 怖ろしい夢でも見るやうな事はないか？」

逞い男「？…………？」

貞造「お前の心を踏ン縛つてる、繰りの絲が働き出しはしないかと言ふのだ」

逞い男（明瞭な強い語調「私は、さういふものを、みんな斷ち切つて了ひました」

貞造「自分でか？……お前が勝手にか？」

逞い男「さうです！……名譽も、常識も、悔恨も……恥も、責任も、みんな殺して了ひました。殺して了つたのです」

貞造の眼には、次第に醉ひが廻つて、受ける茶碗も震へ始める。

貞造（更に飲み干して、ぐツと茶碗を差し伸ばす）「も……もツと、た、澤山注げ……」

逞い男（滿々と注ぐ）「…………」

貞造「ぢやア、お前が八九年振りで此の家へ戻つて來たのあ……屍骸を運んで來たのか？」

逞い男（微笑を含み强い語調）「否、そんなものア、みんな棄てちまひましたよ」

貞造「なら、お前は何しに來たのだ？」

逞い男「阿父さんの生活を取り卷いてゐた、狹ッ苦しい圍ひを打ッ壞しに來たのです」

貞造（喜悅）「む、さうか！（愈々喜悅）む、さうか！……（有頂天な喜悅、勵々凄みの籠もつた表情）俺は……俺は、生れて初めて本心から踊つてみたい氣持ちになつた。……俺は生れて初めて本心から歌つてみたい氣持ちになつた。（全身の力を振り起こして立ち掛からうと焦りながら）俺は踊るんだ。俺は歌ふんだ（言ひながらも遂に立ち得ず跪くも、のめツて了ふ）あゝ駄目だ。チエツ……おいツ、おいツ、お前踊れツ、お前歌へ」

逞い男（慰む如き表情）「夜が明けてから踊ります。夜が明けてから歌ひます」

貞造「俺は生れて五十五年目に、漸く眞實の自由を見た。……俺には既う、なんにも恐ろしいものは無い。……俺の氣持ちは、大きな喜びの世界に生れ代つた。（ぐツたりとして虫の息）おい、……此の蒲團を……丁寧に敷き直してな……俺の體を、靜かに、らくに、寢かして呉れ。……手も、足も、首も、生き生きと、眞ツ直に……姿勢正しく寢かして呉れ」

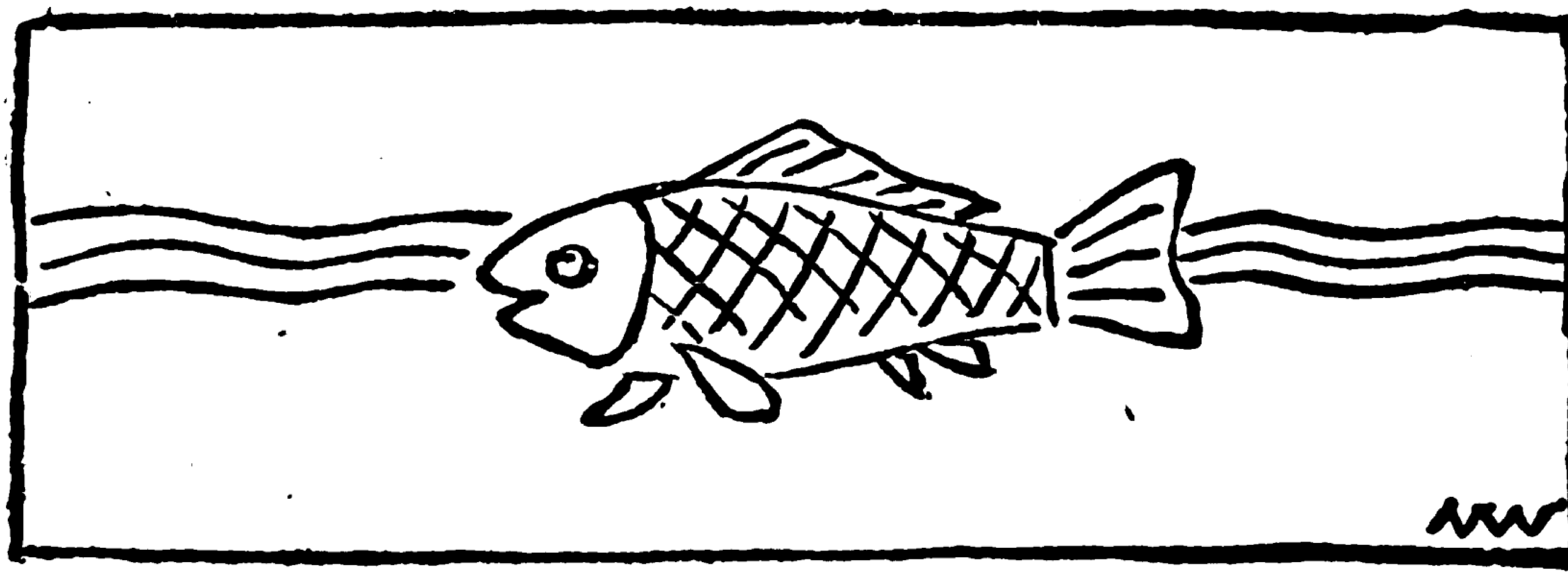
逞い男は直ぐに頷いて立ちあがらうとする。

貞造「待て…その前に、もう……もう一度、酒を……酒を飲まして呉れ（言ひながら茶碗を取らうとするが既う手も自由にならない、む！……俺の口へ、その罎を當てがッてな……直接に飲まして呉れ」

逞い男は快活に頷き、急いで新しい罎の栓を抜き取り、貞造の口へ直接に酌を始める。身を振り起こしたかよは此の新しき酌を見ても今更制めるだけの勇氣は無く、込み上げて來る悲痛を凝乎と押し悶えて俯伏し、嗚咽……が忽ち起き直ッて謹嚴端座――双人（逞い男。貞造）に向かひ無言の儘。涙を拭き拂ひながら泣きを食ひしばつて瞑目合掌。

――舞臺粛然として息を呑む。（重い幕、【了】

――一九二二・七・脱稿――



直輔の夢

里見弴

老婢と二人きりの、幾日となく言葉らしい言葉も利かずに過すことの多い、寂な、むしろ佗しい田舎住居では、自然自分ひとりの考に閉籠るよりほか、日の暮しやうもないわけだつたけれど、その考と云ふものが、よそ目の佗しさには似ず、存外その場かぎりの、斷片な、暢氣らしいものだつた。云つてみれば、明日天氣がよくつて暖だつたら、久振りで東京へ出やうかしら、新橋で降りて、銀座をどことどことどことどで、何と何と何を買ひながらぶら〳〵尾張町まで歩いて、あすこから乘合自動車で醫者によつて本家へ行けば丁度午になる、午後はどこそこの展覽會でも見て、三時頃の汽車で歸つて來るかな、それとも一晩とまるかな、とか、老婢のやつ、また今日も明治屋に牛酪を頼むのを忘れやアがつて、すみませんがもうひと朝お砂糖で召上つてくださいませんかなんて、癪にさわるから飯を焚かしてやれ、飯とすれば、なんかうまい干物でもないかな、ちよつと魚屋に見せにやつてみようかな、とか、散歩がてら、どうしてか今朝入れてなかつた時事新報でも貰ひに通りまで行つて來るか、ちつと鳳

が冷いからうちでだれそれの手紙に返事を書かうか、それともまた、奮發してもう一枚敗荷圖をやつてみようかしら、とか云ふやうな他愛のない思案でも、すぐ一時間やそこらは消えて了ふ。始終動きどほしに動いてゐながらも、さう云ふ意味では、わりに暇なあたまだつた。中學時代に肋膜炎を患つたことはあるが、癒つてからずつとなんの氣もなかつたのに、三十三の一昨年の冬、風邪のあといつまでも微熱がとれないので、然るべき醫者にみせると、肺結核の初期と云ふ診斷で、その當時こそ可なりまゐりもし亢奮もしたけれど、晩い發病だから、うまくかたまつて了ひさへすれば、なにも決して短命ときまつたわけではないと聞かされ、そのうへこのごろでは、大分元氣が出て來たやうに、自分にも感じられるので、不治の病人らしい憂鬱で、哲學的な瞑想に耽ると云ふやうな傾きはまづなかつた。一つは年齡のせいかも知れないが、病氣以前よりも、却つて氣持に餘裕が出來たほどだつた。それには、十年ほど前に貰つた女房と、徹頭徹尾氣が合はないために、一年になるかならずで離別して以來、なんの係累もない獨身生活に、格別死んだあとの煩ひとてもなく、生活費は、皆それぞれ立派な實業家になつてゐる兄たちの心持のいゝ仕送りで、これも心配は要らなかつたから、何もさうぢツと考へ込まなければならないたねもないわけだつた。殊に、病後は、相應の名聲を得てゐた油繪をさつぱりとよして了つて、もうスケツチ板の習作くらゐはよからうと醫者の許が出てからでも一年以上になるのに、たまに南畫じみた自己流の日本畫を試るくらゐのことだつたが、それほどいつか心持が、東洋風の恬淡に傾いて來てゐた。年若な肺病患者にありがちな陰鬱、過敏、偏執、反抗、焦燥、と云ふ風なところへは、めつたに陷るやうなこともなかつた。お天氣者の、江戸ツ子の老婢を相手に、いかにも轉地療養の患者らしい靜寂な日々を送つてゐた。――かう云ふ越智直輔のあたまに、ふとお愛のことが、妙な具合にしみついて、離れ惜くなつて了つた。

直輔がお愛を知つたのは、もう六七年も前、女房と別れて後の放蕩時代のことだ。梯子と云ふ方ではないが、飲みだすと切上げがわるく、ぢッとお神輿を据えて、早くて一時、相手さへあれば三時でも四時でもお構ひなしに、ちびりちびりやつてゐるのがきまりだつたから、待合にとつてはいづれ鼻つまみの客だつたのに、珍らしくもその無理を、あまり不愉な顔も見せずに通させてくれる女將を見つけて、まるでもうそこを我が家のやうに暮してゐた頃だつた。女將はその時分で五十いくつ、吉原そだちで、もう夙に死別れた亭主と云ふのが、當時ちよつと人に知られた俊英な、佛蘭西仕立の政治家で、一面、團十郎と兄弟同様の交りをしてゐたと云ふ風な通人だつたが、それが氣の合つた客でも迎へると、矢張り夜を徹して飲まなければ承知しない方で、それに燗加減がやかましくて他手には任されず、年ぢう夜どほしのお燗番をさせられたものだ、と云ふやうな述懐を、つい直輔に聞かせて了つた手前にも、自分はよほど氣が向いた時でも一本とは飲まない口で、おそくまでつきあはされるわけだつた。が、直輔にしてみれば、わきでおいてくれるかぎり飲んでゐて、なほ飲み足りない時など、そのまゝ碌に火の氣もないやうなうちへ歸つて行く氣にはどうしてもなれないで、迷惑とは知りつゝも、待合沖津へ廻らないではゐられなかつた。もう表も勝手も水口も、すつかり締りをして了つたあとでも、醉漢らしい我儘で、あたり構はずドン／＼と叩く。なかでは「それ、四時ごうじさんだ」と女中たちが怖毛を震つて、寢込んで了つたふりをするか、時にはほんとに寢込んでゐるのだが、直輔はたゞの一遍でも、思ひ諦めて歸つたことはなかつた。仕舞には、横手の露路からはいつて、水口の硝子戸ちまりを、うまくひッ外す呼吸を會得して了つて、

「おい、駄目だぞ／＼。寢たふりなんぞしたつて駄目だぞ」。

などゝ、ドタバタと臺所から上り込んで行つた。

「ほんとに仕様のない人だね、あなたは」

さうは云つても笑顔で、廊下に寢間着の裾を引きずりながら、女將が出て來た。

「すまない、女將さん、すまない。重々相濟まないが、たつた一本……、二本だけ、枕もとへ持つて來たら、それでみんな寢て了つてくれりやいゝんだ。ねえ、たのむ、お願ひ……」

「それアいゝけれどさ、そんなに、あなた、毒よ」

「わかつた〳〵。さアもう女將さんは寢た〳〵！」お清や、床を敷いて、枕もとにお銚子が二本だよ」

そんな風でゐながら、醉はない直輔は、からきし意氣地がなく、翌る朝、ゆうべのお浚でもされようものなら、頭を擁えて、女中にまで「すみません〳〵」と、ひたあやまりにあやまつて了ふ。その、大きな圖體をして、ひとたまりもなく縮みあがつてゐる容子を見ては、誰しも憎めはしなかつた。

藝者は二の次の、酒では、けれども、結局待合にとつて有難くはない客なので、女將も、少しでも氣に入つたらしい妓でもあつたらと、そばで直輔の容子に氣をつけてゐたり、これならと思はれる妓を見せて、あとで露骨に、あれはどうだと訊いてみたりしたが、

「とんでもない、どうかう云つちア罰があたるさ。醉つてゝも身の程は忘れないよ、これでしんは利口なんだからね」

などゝ茶化して了つて、一向にとりとめがなかつた。

「ぢア、一體あなた、どうしておいでなの？ 奥さんがなくつて、……なアんて、隨分失禮なことを伺ふやうだけれど」

「ちつとも失禮なことはないさ。誰しも、すぐさう不都合を起さなくつちアならないところだからね。だが、それアなん

でもないんだ、時々お女郎買ひに行くだけのことさ」

「嘘ばッかり」

と、半信半疑なだけに、ぷいと横を向いて、一言のもとに云ひ消してから、「それア、いづれどこかほか土地に、いゝ人がおありでせうけれど……」

「なアんて、せめてもの氣慰めを云はれてるのはひでえなア。ちつとも遠慮しずに信じていゝんだよ、事實お女郎買ひなんだから」

「ぢアね、さう云ふ時にも、矢ツ張りこんなにお酒をあがる？」

「成程ね、その不審も尤だね。だが、それア飲まないよ、飲んでもほどよく飲むよ」

「へえ、あなたにも、そんな藝當が出來るんですかね」

「出來ても出來なくつても、その方は用事だもの。こつちは遊びだらう。そこは、公私の別は明かなもんさ」

「こういし當ンならないわね」

「おや〳〵、舌ッ足らずの洒落だ」

「ぢア、こうし〳〵あわゝの洒落？」

「あんまり利口ぢアないね」

「口惜しいから、どうしてもこうしても洒落にしようと思つて」

「呆れた人だ」

秋も大ぶん深くなつてからの或る晩、つれの友達が歸り、それと前後して藝者たちもゐなくなつて了つて、たつた一

人、廣間にぽつねんと直輔が飲んでゐると、女將が襖のそとから聲をかけて、

「ちよいとあなた、拾ひものをして來てあげましたよ」

と、手を把つてつれて來たのが、そのとき初て遇ふお愛だつた。色の淺黑い、少しも豊な感じはないけれど、小じめにきりゝと整つた目鼻だちで、すらりとした丈格構に首や手足が小さすぎるほどに見えた。銀杏返しに結つてゐたが、それがほかのどんな結び方よりもよく似合ふだらうと思はれる、どこまでも藝者らしい藝者だつた。

「今晩は、いらつしやまし」

と、もの馴れた調子で、はつきり云ひはしたけれど、そのなかにも、初ての客に對するはにかみを微に匂はせて、もう一度立つて食卓(ちやぶだい)のそばへ歩みよりながら、「ひどいわ、女將さん……」

「なにがひどいのさ。折角あたしが稼がしてあげれば……」

「あら、さう云ふ御親切からだつたの、それはどうも」

と、座につくと、疊の上に綺麗に指さきをそろえて、頭をさげないお辭儀をしながら、眞面目くさつた巫山戯た顏つきで、「お初にお目にかゝります。わたくし小しんと申します。何分どうぞ御贔負に……」

突嗟に、それに應じるやうな態度がとれないで、直輔がどぎまぎしかけるのを、そばから女將が引取つて、

「こちらは四時どうじの御前……」

「あゝさようですか、お名前は兼て承つて居ります。あの、なんでございますか、御前様のごぜんは、おひるまへの午前で……」

「へえ、小しんちやん、お前さん案外あたまがいゝね」

「まア女將さん」
と、形のいゝ顎を襟へ引いて、横目に睨みつけながら、「案外は御挨拶だわねえ」
自分が口を利く番が廻つて來てゐることを感じながら、直輔は、へんに調子に乘りそびれて了つて、急いで盃をあけると、
「まア一つ」
と、いかにも智慧のない繼ぎを入れて、すぐまたその拙さに氣を腐らせながら、「あゝさうですか、小しんさん……でしたね？」
「色氣があつていゝ名前だけれど」
女將は酌をしてやりながら、「ちよつと云ひ憎いわね。あたし、藝者衆を矢鱈ちやんづけで呼んだりするの大嫌ひだけれど、お前さんばかりは、さんぢア呼び憎いわ」
「成程ね、小しんさん、小しんちやん」
兩方云ひ試みたりして、それからだん〳〵直輔の重い口も解けて行つた。その晩は、女將がつききりで、兩方の人となりや何かを、それとなく說明するやうな話ばかり出た。下駄を穿きかけてゐる小しんを見つけて、眠むがるのを無理につれて來た、と云ふやうなことだつたけれども、直輔には、女將に下心があつて、見合ひのやうな意味で、そんなお互を紹介し合ふやうな話ばかりするんではないかと邪推されるほどだつた。若しさうだつたら、として考へると、一も二もないやうな氣もした。また、あんまり調子がよすぎるのが、すぐお互を勞らせるだらう、とも思はれた。座敷の調子がいゝだけに、生地では、くすんだ、世帶じみた、ひよつとすると、ひどく利己的な女かも知れない、そこまで行つて

了へばそれでもいゝわけだが、中途半端の間は、可なり不愉快なものに違ひない、などゝ、そんなことまでも考へてみたりした。

一時と云ふ時間がほどもなく來た。小しんがもじ〱しかけると、女將は、

「それアね、この妓は感心な妓でしてね」

と、眞面目くさつて直輔に話しかけた。「別にこれぞつて取柄もないんですけれど、たゞお客樣が召上つていらつしやる間は、一時が二時にならうと、ちやアんとお座敷を勤めてくれるんですよ。それだけは、みんなが貰ひ上手になつて了つた今の世の中に、ほんとに珍しいくらゐでしてね、いつでもさう云つて褒めてますの。今夜だつてあなた、まだなか〱、……よしんばこつちで歸れたつて、すぐ羽根を生やして飛んで歸るやうな人ぢアありませんわ。ねえ、小しんちやん」

その横顔を、呆れ返つた、と云ふ風に見詰めてゐた小しんは、呼びかけられると、すぐしとやかに胸を折つて頷いてみせて、

「えゝえ、それアもう……。ですけれどね、こちらの女將さんて方も、それアまた感心な方でしてね、いつでも、時間が來るとさつさと藝者を歸らしてくださるんですよ。さぞお前さん眠からう、なんて、そこはね、以前に御商賣をなすつていらしつただけに、思ひやりも深いわけでせうけれどね。いつもあたしたちがよると、それを云つちア感心してゐますんですよ」

「あたしがさう云へば、大抵の人なら、ぢアつて云つて歸りますよ。それにね、この人にかぎつちア、でもまだお客があがつていらつしやるのに、なんてつて、それアね、決してほかの妓みたいに、さつさと歸つてつて了ふやうなことは

ありませんからね、それだけはほんとに義理がたいもんですわ」

「俺もね、別にこれぞつて取柄はないけれど、そんな風に遠廻しに叱られるのを聞きながら、いつまでも酒を飲んでるのが大好きでね、これだけはまアあんまり類と眞似てのない藝當だらうと思つてるよ。どうだね、そんなのは感心してくれないかね？」

「いゝえ、感心しますわ。あの、なんですつてね、さう云ふ方にかぎつて、そばに藝者なんぞゐると、却つてお酒の味がわるくなるもんですつてね」

「えゝ、でもいゝわ、こゝには藝者衆はゐないんだから。ねえ、お愛さん」

と、本名で呼びかけると、急にもの云ひを鄭重に、「あの、どうぞごゆつくりお話なすつていらしつてくださいまし」

「いやアもう女將さん！」

小しんは、子供のやうに體を左右に振り動し、少し甘ツたれた聲で、「ほんとにもう女將さん、勘忍してくださいな」

そんなことで、やがて小しんは歸つて行つて了つたが、この最初の印象が惡くなかつたので、直輔は、それ以來、いつも必ずよぶことにしてゐた三四人のきまつた顏ぶれの一人に加へて、ちよく〳〵遇うやうになつた。小唄一つ唄ふでもなく、ものになりさうだとみれば、相手かまはず手を出さうと云ふ方でもない直輔にとつて、藝者の價値標準は、つまり性質だつた。藝なども、出來てゐると云ふことが心持の上に及ぼす影響は別として、藝それ自身としては、どうでもいゝのだし、容貌も、不愉快でない限り、何もさう美人には及ばないので、たゞこちらの氣持が解り、話が順當に延びて行けば、それがなによりだつた。その點、ちつくりした落つきは兎も角も、入組んだ言葉の遊戯などには、小しんはもつて來いの相手だつた。それに、畫家である直輔が殊に嬉しく思ふのは、髮結の往き歸りなどに、ちよつと道草を

して帳場で女將と話し込んでゐるやうな時の、素顏で普段着のまゝの小しんだつた。襟かけの唐棧に、じみなお召の前掛で、丸帶の古くなつたのを半幅に切つた廢物利用までが、何か日のある古代布かと思はれるほどに、取合せが巧者だつたし、また、淺黑い、きりゝとしまつた顏だちには、さう云ふなりが一番よく似合つた。見つけ次第に直輔は、無理やりに自分の座敷に引ッぱつて來て、一緒に午飯をたべたりした。そんな風だつたが、いつもになく女將は、あれはどうだ、などゝ云ひ出さなかつた。むしろ直輔の方からそんな風に切り出されることを惧れでもするやうに、小しんが或る有名な料理屋の四男と夫婦で、その男さへ當り前にしてゐれば、立派な女將さんで暮してゐられる身分なのだが、手慰の癖がどうしてもやまないで、本家への出入も差止められてゐる良人のために、あゝして稼いでは、尻から持つて行かれて了ふのだ、と云ふやうな話をした。

「へえ、亭主があるかい」

「えゝ、ですから、あの人にかぎつちア、その方は絕對に駄目」

「ウーム」

空を握んで、のけ反つてみせたりしてから、直輔は、「で、なにかい、そんなにまでされても、やつぱり亭主に惚れてるのかね」

「えゝ、それア惚れてればこそ、稼ぎもするんでせうから」

「ア、成程。然し馬鹿げた話だね。なんとかして、惚れてないで、而も稼いでると云ふ風に理屈がつけられないもんかね。　れてればこそ、――こそと來ちアもう脈がないわけかね。兎に角いやなこそだな」

名を聞いてみると、その料理屋の三男の嫁と云ふのを、嫂が世話してゐたりして、なんとなく遠いながら親類の奥さ

ん、と云つた感じが、直輔には、動かせないものになつて了つた。好きではあつたが、また惚れたと云ふほどでもなかつたところへ、さう分つてみると、わりに几帳面な彼の性分としては、さばさばと色氣が消えて了つた。それだけに永續きがして、二年あまりも通ひつゞけた。初めのうちは、時折亭主の惚けを云つたりしてゐた小しんに、けれども、その二年目ごろから旦那が出來た。云ふまでもなく、內證の上にも內證にしてゐたけれど、それが、同じ待合沖津での出來ごとだつただけに、そこに入浸りの直輔には、遂に隱し終せなかつた。旦那の桐谷と云ふのは、或る大會社の專務で、やりての評判の高い、――そんな方面に緣の遠い直輔にさへ聞き覺えのある名前だつた。覿面にも、すぐ小しんの指に、大きなダイヤモンドが光りだしたりしたが、それでも、亭主の暴狀の數々を聞き知つてゐた直輔は、大して反感も感じなかつたから、前々とほり通つてゐた。そのうちだんだんに、然し、小しんは陰欝になつて行つて、仕舞には、以前の冴え冴えとした會話の調子などが、まるであとを斷つて了つた。多分、うちの方にごたくさでも起つてゐるのだらう、と直輔は、心に氣の毒がつてゐた。が、その時分から、健康の方も衰えだしてゐたので、暫く顏を見せないと思つてゐるうちに、脊髓炎で入院した、と女將の話に聞いたが、その一方では、直輔の推察どほり、沖津での秘密が亭主にばれて、相手にとつて損はない、と云つた風な訴訟沙汰も持ち上つてゐたのだ。ところが、そこには不思議な間違ひがあつた。內緣ならば兎も角、籍のはいつた正妻として、藝者稼業に就くことは許されてゐない筈だのに、それがどこでどう間違つたものか、藝名小しんで、立派に鑑札がさがつてゐた。惡くほぢくれば、とんだところに首になる人間が出來て來ないとも限らないやうな關係もあつたのだらう、結局示談になつて、桐谷は、それでも金錢上の痛事だけで、世間へ不面目を曝すやうなこともなくてすみ、小しんは生家の小林姓に返つたわけだつた。

それは首尾よく片づいたのだが、間もなしに、もつと致命的な事件が桐谷に起つて來た。と云ふのは、市吏の瀆職疑

獄に連聯して、彼が專務を勤めてゐた會社の贈賄が曝露されたのだ。やれ〳〵、と云ふやうな氣持で、直輔は、朝ごとに、社會面の半を占めてゐるその記事に、特別の注意を拂つてゐたが、そのうち所謂「醜類」十何名中の巨魁として、桐谷は、眞つ先に收監されて了つた。

「小しんちやん、どうしてゐるだらうね」

「ほんとにねえ、病氣のところへ、こんた騷動ですものねえ、さぞまア案じ暮してゐるだらうとは思ふんですけれど……」

「やつぱり病院？」

「さアそれがね、二三日前にもちよつと電話をかけてみたんですけれど、こちらにはさう云ふ方はおいでになりません、なんて……。ですけれど、まだとても退院出來るやうな體ぢアなかつたし、ひよつとすると、警察の方の呼び出しでも用心して、それで一切ゐない〳〵で通してるんぢやアないかと思ひますわ」

「うん、それアさうかも知れない。さう云やア、あなただつて、一昨年何月以來の帳簿持參、いつ幾日午前何時出頭なんて差紙を廻されないとも限らないぜ。一時は、隨分こゝで仲間の密談があつたやうだから……」

「あら、いやですわ、そんなこと」

「いやでも應でも、これぱかりは仕方がないさ。小しんちやんより、どつちかと云へば、あなたの方へ一足おさきに來る理屈ぢアないか」

「いやよ〳〵、おどかしつこなしよ」

けれども、勿論女將には何事もなかつた。なほさら小しんに、問題のありさうな筈もなかつたが、それを惧れてか、一

身を恥じてか、それとも入院料にも差支へるやうなことになつてか、兎も角も、桐谷のこと以來親子のやうに親しみ合つてゐた女將にさへ、その後の容子が一切分らなかつたほど、きれいに居どころを晦らまして了つた。

そして、この事件からほどもなく、直輔の發病となつたのだ。あの賑かずきな沖津の女將が、旦那にやかましく云はれて、いや／＼ながら商賣をやめ、山の手の小綺麗な二階家かなんかに納つてゐる、と云ふやうな噂も、病床で聞いた。彼には、然し、そこに思ひを殘すやうな妓もなく、たまに通りがゝりに、以前贔屓にした萬壽と云ふ幇間が、見舞によつてくれるくらゐのもので、さう云ふ巷の空氣からは、自然さば／＼と離れて行つた。殊に逗子に移つてからは、尋ねて來る友達さへ稀で、都の雜沓を思ふだに、眉の顰まる思ひだつた。そんな風で、どうかした拍子にふと思ひ出すことはあつても、どこまでもそれは過去の人としてゞ、もう一度小しんとの間に、どんなに淡いにしろ、何か交渉が起らうなどとは、思ひもかけないところだつた。

二月末の、雨もよひに凪いで、薄日ながらも、戸外が存外あたゝかさうな日だつた。去年十二月にはいつてから、突然もとの沖津の女將が手紙をよこして、都合でこのごろ鎌倉に移つて來た、そのうちお見舞にもあがるつもりだが、序があつたらよつてくれ、と云つてよこし、近日序でなく尋ねて、久振りに昔話でもしよう、などゝ返事も出して置きながら、寒さを恐れてそのまゝになつたきり、年始狀の末にもう一度それを云つてよこしたのには、つい返事も出さず仕舞になつてゐたので、ふと思ひついて、午飯をすますと、厚い襟卷や外套にくるまつて、僅か六分の汽車を鎌倉まで乘り、あとは散步がてら雪ノ下までぶら／＼歩いて、藤波りゑと云ふ表札を探した。低い生垣のなかに、夏ならば胡瓜や茄子で

もつくらゐと云ふくらゐの空地があつて、そのさきがだら〳〵登りの芝生で、南に向いた平屋建を、横手から望むやうになつたのがそれだつた。ヂヤリン〳〵不景氣な鈴の音をたてゝ、門のくゞりをはいると、涎掛などした狆が、砂を蹴立て跳んで出て來た。沖津の女將時代には、ひとが抱いてゐても汚ながるほど、犬猫その他飼ひもの一切大嫌ひだつた人が、いかにお妾に附物とは云ひながら、狆とは……、と、直輔は思はずひとり微苦笑を催しながら、遠よせに吠えたてる鼻面へ、ステツキのさきをぐる〳〵廻してやつた。

「あらまア」

その時、日よけ代りに藤棚を吊つた南緣に、主人りゑの丈の高い姿が現れると、相變らずの、年に不似合なほど若々しい聲で、「越智さん、あなたまア、どうなすつて」

それは、以前、どうか云ふ都合で、半月ぶりくらゐに、沖津の玄關に立つた彼を迎へる時と、全く同じ調子だつた。

「どうも暫く」

惹き込まれて直輔も、懷しげな、はしやいだ聲をだして、庭木戸からすぐに緣さきへはいつて行つた。胡亂なやつでないと解ると、首の鈴を鳴らして、狆も緣側へ跳びあがるなり、主人の裾へまつはりついたり、あたりを駈けづり廻つたりした。

「これ〳〵」

「中々社交的な狆だね」

「社交的……」

と笑つて、「あの、お花や、お客様ですよ。それから、ちよつとまア先にこの一ちやんをどうかしておくれ」

さう奥へ聲をかけながら、座布團を、八疊二間の、床の間の附いてゐる方へ持つて行かうとした。

「旦那のほか入るべからず、かも知れないが、そつちの、長火鉢の置いてある部屋の方が結構だな。何しろ御病體のことで、火の氣が戀しいんですからね」

「でも、あんまり……」

「なに、そちらにお構ひさへなければ、こちらは、これから火を入れようと云ふ部屋より、どのくらゐ有難いか知れないんです」

「あゝ、さうですか、ぢア御免かふむつて、汚いところへお通し致しませうかね。……でも、いゝ按排に今日は、風がありませんから……」

「あツたかですよ。……どうぞ何も構はないでください。ねえ女將さん」

茶よ菓子よと立騷ぐ主人に、さう聲をかけながら、襟卷や外套を緣側にかなぐり捨て、づかづか茶の間へ通ると、改めて一別以來の挨拶を交した。直輔からは、商賣をやめた祝の詞、さきからは病氣の見舞と云ふ風に。

「然し、結構な身分ですね」

と、直輔はやゝ揶揄(からかひ)額に、「狆のなき聲でもすぐ緣側に出てみる、あれだけでもう御境遇のほども思ひやられて、そぞろに……」

「哀を催すでせう」

「どう致しまして、羨望に堪えませんよ。それに引かへあたしなんざア、すきな相手の顏を見るぢアなし……」

「へえ、今だにさうして思ひ出されるもんですかね」

「え？　一體だれの話？」

「お酒のことでせう」

「流石に女將さんだ、感心！……それがね、情ないことに、やつぱり時々思ひ出されるんですよ。たかゞ飲み食ひのことでね、我ながら淺間しいとは思ふんだけれど……。かうなると、まるツきり酒の飲めない人なんてものは、どうも大した仕合をうけて生れた人だとつく〳〵さう思ひますね。今の私なんてものは、そら、よく地獄の繪にあるでせう、ペちやんこに腹をすかして、飯をかツこまうとすると、茶碗のなかからホロ〳〵ツと火が燃えあがる、なんのことはないあれですからね。とまア思つて、それでも辛抱してゐるんだから、ちつと褒めてくださいよ」

「それアまた、あなた、大事なお體ですもの。そのくらゐのこと……」

「それがね、あんまり大事に仔細のある體でもないんだけれど、やつぱりこれで、自分のものとなると、正直な話、慾が出らアね。なアんて、來る匆々、酒の飲めない愚痴はひどいけど……」

「またよくあがりましたものね。一生あがるだけの分は、もう夙に召上つて了つてますわ」

　そんなことから思ひ出話になつて、あの時にはどう、この時にはかうと、舊い酒の上の失策をいろ〳〵と洗ひ上げられたが、今となつてみれば、直輔には、それも懷しかつた。何か食べもの丶話から、蔦謠が、目黑の羅漢寺の普茶料理がうまい、と云ひ出したのがもとで、すぐ葉書で翌日の午飯を頼んで置いて、女將に蔦謠に、あと二三人の醉者づれで、或る年の初夏、態々出かけてみると、肝心の案内役が、通がるばかりで一向あやしく、天麩羅の汁だけ先に出たのを、擬製豆腐のやうなものへかけて食つたり、出るもの〳〵誰もちつともうまがらないのにてれて、初めのうちひとりで結構がつてゐた蔦謠までが、たうとう本音を吹いて了つたりして、大笑ひしたことがある、その時の話も出た。

「また運わるく、あなた初め口の悪い連中が揃つてたからね。可哀想に、お謙の引込みのつかなさ加減と云つたら……」

「でも、あなたはわりに召上つたわね」

「腹はすいてるし、四面楚歌の聲で、あんまり萬壽が氣の毒ッたらしいし、それに、なに、あなた方が云ふほどまづくもないんだよ。一人が云ひだすと、すぐ雷同しちまふんだから仕樣がないや」

「いゝえ、さうばがりでもなかつたわ。あなただつて、すんでから、あゝうまかつた〳〵つて仰有るから、どれがお氣に入りましたつて、誰かゞ訊くと、酒がうまかつたつて。そのお酒は、さぞむかふのが悪からうつて、態々うちから一升瓶につめて持つて行つたんですもの。それぢアなんにもならないつて、大笑ひしましたわ」

「さう〳〵、そんなことだつたね。それから、御飯で笑ひましたさ。みんなは焦くさいとかなんとか云つて食べないのを、あたし一人でうまがつてゐると、小しんちやんがさ、それアさうかも知れない、いづれお布施米でいろんなのが混つてゐるだらうから、きつとあなたのお茶碗には、いゝうちで貰つて來たところがあたつたんでせう、なんて」

「ア小しんちやんてばね」

と、おりゑは急に眞顏になつて、「もう凧からこゝにゐるんですとさ」

「え、鎌倉に？　さうかね。實は今あなたに訊かうと思つてたところだつたが、ぢアなんですか、病氣の方は……」

「え、まだギプスとかをはめて、横になつたつきりださうですけれど……」

「うん。で、なには？　旦那は、やつぱり續いて世話をしてゐるんでせうね、一體あの人は、今どうなつてゐるんだらう」

「保釋つて云ふんですか執行猶豫つて云ふんですか、兎も角出てゐるんでせう。とても十分なことにはいかないやうで

すけれど、世話はずつと續いてしてゐますつて」
「ふうん。そのねたつきりの病人をね。感心な人だね」
「でもあなた、そのくらゐ當り前ですわ。たゞ藝者を引かしたつて云ふのとは、譯が違ひますもの」
「それアまアさうだけれど、自分が苦しくなつて來りや、中々さうは出來ないものでさアね。それも、病人でなきア兎も角ね」
「あすこらぢア、あなた、いくら吐き出したと云つたところで、それア苦しいなんてことはありやしませんわ」
「それで、女將さん……、女將さんは惡いな、なんて呼ばふ」
「結構ですわ。あたしもうこんな生活……つて云んですか、中々學者でせう、ほんとにいやですわ。やつぱり以前つやうなことでもして、ガチヤ〳〵ガチヤ〳〵忙しく暮してゐる方が、あたしの性分には合ふんですね。退屈で、つまらなくつて、仕樣がないんですもの」
「榮耀の餅の皮、つて云ふやつですかね」
「いゝえ、あのね、なんて云ふんです、もつとかう、意義ある生活、つて云ふんですか、それがしてみたいの」
「驚いた。やつぱり違ふもんだな。さう云ふ言葉使ひをするんなら、いつそ奥さんつて呼びますよ」
「いや〳〵。それよりや、やつぱり女將さんにしといてくださいよう」
「女將さん、はいけないさ。かうつと、なんとかいゝ呼び方はないかな。……ねえ、ちつと不足かも知れないが、……おこるかな」
「なんです」

「刀自ぢアどうだらう。藤波刀自、ね、語呂も惡くないし、いゝでせう」
「刀自つて、だけど、お婆さんつてことでせう」
「さアね　詳しいことは知らないが、あんまり若い人にやア云はないやうですね」
「ぢア、いやアね、……なアんて嘘ですよ。結構ですとも」
「まア負けといて貰ふとしてさ、なんだつけ、話かけてゐたことは」
「小しんちやん……」
「うん、さう〳〵。それで、もう刀自は一ぺんでも見舞つてやつたんですか」
「いゝえ、それがね、つい一週間ばかり前に、うちの旦那が」
と、流石にその言葉を、ちよつと云ひ淀んで「或るところで聞いて來さしてね、早速行つてあげろ、大變人戀しがつてゐるんだけれど、さうかつて自分の方からは、どこへもたよりをしたくない、……つて云ふのは、つまりひけた氣持になつてゐるんだらうから、時々見舞つてては、さう云ふ氣持をなくなすやうにしてやらないと可哀想だ、たんて云はれてますんですけど、つい二三日寒さがひどかつたりしたもんですから……」
「それアいけない。早速尋ねてやつたらいゝでせう。あたしも久振りに遇つてみたいけれど……」
「あゝ、それア行つてやつてくだされば、どんなに喜ぶか知れやしません」
「でも、旦那でも來てゐると惡いからね」
「それア以前一ぺんでもなんかあつたんならなんですけど、お互に疚しいことがないんですもの……」
「お言葉の中だが、ひどく簡單に扱ふね。お互に疚しいことがあつたかなかつたか、年中そばに附きりに附いてたわけ

ぢアなし、女將さん……ぢアなかつた、いかに藤波刀自でも、さうは受合へない筈だぜ」

「さう云へばあなた、小しんちやんには、ちよつと岡惚れしてなすつたわね」

「今更そんなことを云つて間に合ひますかよ。小しんちやんが引き、あなたが待合をやめ、あたしがお客を廢業して、一體もう何年になると思ふんだ。さう云ふ働のないことだから、商賣よさなくつちアならないやうなことにもなるんです」

「だけど、かうなつてみて、初てあたしの有難味が解つたでせう。御亭主との間に、あれだけの騷動があつて、それからあとはねつかれたつきりとしたら、……さつき頻と桐谷さんに感心してゐなすつた口ぶりでは、あなただつたら、今ごろはぼいかも知れやしない。あたしにしても、餘計な罪を一つつくらないですんだわけだ」

「あゝ云へばかう云ふと、相變らず負けることの嫌ひな人だな。……冗談は冗談として、ほんとに見舞つてやりたいな。もう一度あの人に遇へようとは思はなかつたけれど、遇へれば是非遇つてみたいな。實際、旦那に出ツくわしたつて構やしないし……」

「ぢアいつそ、これから御一緒にお伴しませうか」

さうなると、然し直輔は、やつぱりなんとなく躊躇された。少しでも喜んでくれるものなら、こつちがまごつくくらゐはなんでもないが、もし萬一にも迷惑をかけるやうだとすまない、そんなことを思ひながら、

「だけど、どうだらうな」

「よし旦那が來てゐたつて、ちつとも構やしませんわ。それに、さうめつたに來てやしますまい。何しろこゝんところ謹愼してゐなきアならない人でせうからね。……行きませうよ。いゝ按排に今日は穩かだし、思ひたつたが吉日です

よ」

「一體うちが分つてるんですか」

「大佛のそばださうで、番地も書きとめてありますから、大抵知れるでせう」

「さう、ぢア出かけるなら、ちつとも早い方がいゝ。夕方、寒くならないうちに歸りたいし、すぐあなた仕度なさいな」

いつの間にか、妙に緊張した心持になつて、例へば、暗い嵐の夜、堤防の毀れ具合を見に行くとか、怪しい足音に、思ひ切つて、提灯をつけて庭を見廻りに出かけるとか、さう云つた場合に、それを促す時のやうな、ひどく厳かな顔つきで、直輔にさう云はれると、ついりゑも吊り込まれて了つて、

「えゝ、ぢア大急ぎで何しますから、ちよつと失禮いたします」

と、あたふた奥の間へ立つて行つた。ひとりになつて、直輔は、冷めきつた茶の色を、薩摩のひゞ焼の茶碗に見詰めた。ふと、寂しく心が暗み、靜に落ち沈んで行くのが感じられた。——恰も、彼と小しんとの間には、胸の奥底ふかく秘めた戀があつたのを、どちらからも明さうとするけぶりすらなしに別れ〳〵になつて了つて、以來幾年となく、心の操を立てとほして來た二人でゝもあるかのやうに、そして今、逢ふまじと私に誓つてゐた人と、ふたゝび茲に相見ようとしてゞもゐるかのやうに。ちつとさう云ふ思ひに浸つてゐるうちに、何年にも覺えのない涙の味が、——あの鹹い味が、いま現に戀人の目から吸ひとつてやつてゐるやうなあさやかさで、舌の上に蘇つて來た。同時に、氣まぐれな、あたゝかい液體は、彼の目のなかにもたまつて來た……。

「どうもお待遠さまでした」

手に持つた肩掛をしさへすればいゝやうに、すつかりコートまで着込んで、そこへ出て來たりゑは、ちよつと疊に片手をついて、「あたし、あつちから廻りますから」

「さう」

と、直輔が立ちあがるうしろから、手早く外套を着せかけて、

「まア、お愛さんがどんなに喜ぶことでせう」

直輔には、それに直接の返事をすることが出來なかつた。はつきり憶えてゐたその本名を、さもさう云はれてから思ひ出しでもしたやうに、

「あゝさう〳〵、お愛さんだつたね。建部愛か、」

「いゝえ、それア先の御亭主の姓ですよ。あの人のうちは小林。ですから今では小林愛子です。……ぢア御免ください、すぐそちらへ廻りますから」

りゑは小走りに玄關の方へ、直輔はすぐ緣さきの沓ぬきからおり立つて、庭木戸を出た。

「どうしませう、八幡前の通りの方へ行けば、俥宿もあることはありますが……」

「電車にしようぢアありませんか。その方が早いくらゐでせう」

話ながら二人は門を出て、薄日の下を、ぶら〳〵停車場前の方へ歩いて行つた。ずつと家續きで、めつたに畑はたかつたが、たまに芋の葉でも見ると、却つて直輔には昔が思ひ出された。

「このへんもすつかり變りましたね。あたしは、先にも話したと思ふが、これで鎌倉ツ子ですからね、丁度三十年まへ、五ツ六ツ七ツと、三年こゝで育てられたんですからね　八幡前の師範學校の附屬小學校へ、肩から鞄をさげて、毎

日通つたもんですよ。うちは滑川の川口で、今なんと云ふか知らないが、その時分は閻魔橋と云つてた橋の近くだつたから、可なりありますさア。それに一ノ鳥居からむかふには、五十嵐さんて云ふ別荘と、もう一軒と、たつた二軒しか家がなかつたんだから、淋しくつてね、日の短い最中なんぞは、あの松並木の下の道がいやだつたもんです。このへんは、勿論畑ばかりでしたね」

「さうでしたわね、あたしも若い時分に、英吉利公使館の人で、大へん贔屓にしてくださる異人さんがありましてね、時々海濱院につれられて來ましたが、夜なんぞ狐の鳴聲が聞えるんですもの。晝まはいゝんですけど、日が暮れるといやで〱。仕舞には、鎌倉行きだけは勘忍してくださいつて、みんなでお願ひしましたわ」

そんなことを話しながら電車の終點へ來て、長谷へ運ばれた。

「かうつと、何かお見舞を買つて行きたいんだが……」

「ぢア龜屋まで戻つて、なんか見ませうか」

そこから、葡萄酒の瓶を提げて、大佛前に行つて、八百屋の小僧に小林と云つて訊くと、うちはすぐに知れた。さゝやかな門をはいつて右手の、目隱しの竹垣の上に、はね釣瓶と、愛子の寢間着らしいフランネルが一枚、重たく物干竿にかゝつてゐるのが、曇つた冬の空に、くツきりと浮きあがつて見えた。格子戸をあけて、

「御免なさいまし」

と、案内を乞ふと、靜まり返つた奥の間から、まぎれもない主人の聲が、不安げに少し尖つて、

「どなた」

「あたし。あがつてもよごさんすか」

「どなたです」

と、今度は急に柔いだが、まだ本當に誰とも見當がつかないらしく、「相憎いま女中が使に出て居りませんが……」

「まア、たつた一人でゐるの」

「あら！ 女將さん？」

「えゝあたし」

入れる筈の沓ぬぎ石を、何かの都合でよしたらしい馬鹿高い踏段を、匍ひあがるやうして、「あなたが吃驚するやうな方をおつれしたわ」

「まアどなたでせう」

「あてゝごらんなさい」

云ひながら、まだ格子のそとに立つてゐる直輔に、あがれと目で促して、「それアお珍しい方」

「あらア、どなたでせう。女將さんだつて思ひがけないのに、その女將さんが珍しい方だなんて、とても分らないわ」

「それでもまア云つてごらんなさいよ」

襟卷やコートを片隅によせて、りゑは、首から先に覗き込むやうにしながら、聲のする方へそろ〳〵とはいつて行つた。

「まア女將さん、暫く。いつも御無沙汰ばかりしてゐてすみません」

「いゝえ、あたしこそとうにお尋ねしなくつちアならないんですけど……」

「どう致しまして、とんでもない。何やかや、もうどなたにもお逢はせ申す顔もございませんので……」

「なに云つてるの、お愛さん。……でも、まるで思つてたやうぢアないわ、血色だつて、元氣だつて……」

「さうですか、有難うございます。おかげさんでまア、どうやらかうやう……」

二疊の玄關に、外套をぬぎながら、あぶなく溢れかゝる涙を、手の甲で拭きとつて、直輔は、これアいけない、今日は俺は、よつぽどどうかしてゐるぞ、と思つた。

「女將さん、ほんとにどなたかいらつしやるの」

「だつて、格子戸がひとりでに締るわけはないでせう？　あてゝごらんなさい」

「さアどなたでせう、分らないわ」

「あてないうちは……」

そこで急に聲を張つて、玄關の方へ、「出ていらしつちアいけませんよ」

仕方なしに直輔は、大人しく立つて待つてゐた。聲には出さずに、口だけ動かして見せたか、何か手眞似のやうなことでもしたか、お愛が、

「……ぢアない？　違ふ？」

「さうよ。でも、一ぺんにあたるのは可訝しいわね。さては……」

「えゝえ、それアもう……。ねえ、オーさん」

さう聲をかけられては、直輔も、泣ツ面どころか、眞面目くさつてはいつても行かれなかつた。强ゐて氣輕な調子で、

「兼て打合せがしてあるとも知らないんだから、存外これで、女將さんも甘いもんでさアね」

さう云ひながら、八疊の客間を踏み切つて、づか〳〵と奥の六疊へ通つた。お愛は、夜着の襟を胸まで引きさげて、その上に兩手の指を組んで乘せ、顏だけを振り向けてゐたが、仰臥とは云ひながら、ペシヤンコに、へんに薄べつたく見えた。

「女將さん、すみませんがちよつと手をかしてくださいませんか」

「どうするの」

「ちよつと肩の下へ手を入れてくださいませんか」

「いゝえ、もう、どうぞそのまゝで……」

「でも、あんまり失禮ですから」

「いゝぢアないの、ほかの方ぢアなし……」

「さうですか。それぢア、失禮ですけれど、このまゝで御免かうむります」

と、首だけで辭儀をして、「暫く。御機嫌よろしう。いかゞでいらつしやいます、少しおわるかつたやうに伺つて居りましたが……」

「有難う。まアやつとかうして出歩けるやうになりました。あなたは、どんなです。元氣は大へんいゝやうだけれど……」

「有難うございます。おかげさんで、一時からみればよつぽどいゝ方なんでございますが、何しろこんな病氣でございますから……」

「お困りですね、ずツとねたきりで……？」

「いゝえ、やつとこのごろ起ッ返へれるやうになりましたのですけれど、何ぶんコーセットをかけられてゐますから、ひとりではどうすることも出來ません……」

「あゝコーセットですか、あたしはまたギプスと間違へてゝ、さつきもあなたに、さうお話しましたわね」

「うん、どうも少しへんだと思ひながら聞いてたんだよ。ギプスつて云へば、腕なんぞ折つた時にやるんだらう」

「この病氣でもどうかするとやられる方があるやうですけれど、どつちにしたところで、簀卷にされたも同樣なんですから、殺されようと持つてかれようと、どうすることも出來やしません。尤もこんな病人を、殺してみたところで、擔いでつてみたところで、なんにもなるわけぢアなし、まア安心みたいなもんですけど……」

「そら早速出たぜ」

「なんです、愚痴がですか」

「いゝえ、みたいがさ」

「あゝ、しよつちうあなたに眞似されましたわね。なんか、おいしいみたいなもんが食べたいな、なんて。まさかあたし、そんなに矢鱈つかやアしませんでしたわ」

「小しんちやんのみたいに、お若さんの何かと……、よく皆さんに眞似をされたもんね」

「さうね、あの人のは、何かとうるさい、何かと面倒だ、なんて、なんにでも何かとがくッついたわね。今どうなすつて?」

「あたしの方を向いて訊いたつて知らないよ」

「おや、さうですかしら、そんな他人みたいなもんでしたかしら」

「それアあたしの方では圓惣してましたさ、だけど、つまりふられたみたいなわけだつたからね。それにあなた、一體もう何年になると思ふ。つい昨日のことのやうな氣もするが、あなたとだつて、足かけ四年目で逢ふんですぜ」

「さうですかね、もうさうなりますかね」

「女將さんとは、あの後一ぺん銀座で逢つたことがあるね」

「えゝ、あれは、昨年の夏です」

「それで、今日がそれ以來なんですか」

「えゝ、あたしどちらへもすつかり御無沙汰になつてゐるもんですから……」

「何しろこの動物嫌ひが、うちに狆を飼つてゐようと云ふ生活なんだから、どちらへも御無沙汰になるわけですよ」

「いゝえ、あれはね、いやなんですけれど、うちの旦那が支那から持つて歸つたもんですから……」

「それは、この場合の申開になりません。却つて御無沙汰生活の裏書をするやうなもんです。……それでね、手紙のたんびに來る〳〵云つてよこすばかりで、ちつとも顏は見せてくれないんです……」

「こんな、パセドウで眼のくり玉の飛び出した顏なんぞ、見せたつて仕樣がないと思つて……」

「なにいゝさ、團十郎みたいで……」

「團十郎ぢアいや、源之助と云つてもらいたい」

「うるさいな。……でね、仕方がないから、今日わざ〳〵團十郎みたいなくせに、源之助がつてる顏を見に來たんですよ」

「へえ、東京からですか」

「いゝえ、あたしいま逗子に住んでるんです。もうこつちに來てから二年になりますよ」
「あたしはまだ鎌倉に居ります。もうこちらへ參つてから、十一、十二、一、四ケ月になります」
「さうですつてね、女將さんのことは、ちよつと伺つてました。あゝさう云へば、話があとさきでめちや〱ですけれど、お目出度うございました」
「えゝ有難う。でも、それがあんまりお目出度もないんですがね」
「もつと意義のある生活がしたいんですとさ。どう云ふのが意義のある生活かと思つて考へてみたんですがね、つまりお金が儲かることとなんでせう」
「いゝえ、お金なんぞはどうでもいゝの。やづぱりあの時分みたいに、こちらや皆さんのやうな方々にお目にかゝつて、賑かに暮してゐたいの。狆と二人で、眼玉の飛び出させつこなんぞしてたつて始らないわ」
「成程、狆から見りやア、君の方が大分奥眼だな」
「憎しい、あんなこと云つて……」
「でも、女將さん、そんなにひどいことはないんでせう」
「えゝまア大したことではないんですけど……。それにどこが痛むんでもなし、病氣としちアまア樂な病氣ですからね。……ねえあなた」
と直輔の方へ、「この病氣は、智識階級に多いんですとさ。知慧があり餘つて來ると、自然と、この、眼玉や咽箱がふくれだすんですつて」
「してみると、狆やペリカンに馬鹿はないわけだね」

「勝手になさい！」

「だけど、考てみるに、よくまアかう病人ばかり揃つたもんだね。どれもこれも満足ぢアないんだからな」

「ほんとにねえ。でもみなさんのは、病氣と云つても、さうして起きていらつしやれるんだからいゝわ。あたしなんぞ、失禮なお話だけれど、はゞかりへも一人では行けないんですからね、ほんとにもう人樣に御厄介をかけるばかりで、生きてたつて仕樣がないわ」

「そんなことがあるもんですかね。氣永に養生して、もう一度もとのやうにおなんなさいよ。あなた方はまだこれからぢアありませんか。そこへ行つちア、やつぱり年ですね。あたしなんぞ、なんてつたつて、もう先が見えてますからね」

「やつぱりトジの加減かね」

「あれだ！……あのね、越智さんッたら、あたしのことを刀自ですつて、もう女將さんぢア可笑しいからつて、藤波刀自とされちまつたの」

「あら、可哀想だわ」

「いゝえ、どこから見たつて刀自ですよ、藤波デメ子刀自ですよ。もうあたしが遊ばなくなつて了へば、かう云ふ人を待合の女將さんなんぞにしとくのは勿態ない。それより、刀自として、末永く御交際を願ひたい」

それには、ちつと頬で笑つて答へて置いて、お愛の方へ、

「一體お宅の女中さん、どこまで使に行つたの。隨分永いのね」

「いゝえ、使ぢアないの、お湯なのよ。いつでもそれア永くつて、困つてるの」

「病人さんを一人置いて、さう氷湯をしてゐられちア困るわね」
「第一無用心ですね。婆やさんかなんか、もう一人おいたらいゝでせう」
「えゝ、ですけど、一人で二人の人を使ふのも、あんまりすまないやうな氣がしまして。……折角いらしつてくだすつたのに、お茶一つあげられませんで、ほんとに申譯ありませんけれど、さう云ふわけですから……」
「あなたお茶あがりたい？」
と、りゑは腰を浮かしたが、直輔は斷つて、
「それより、もうちつと火を起しといてあげやうぢアありませんか」
「女將さん、すみませんが臺所の火鉢を見てくださいませんか。よくいけて行くやうに云ときましたから……」
「いゝえ　あればいゝんだけれど、こゝが少しあやしくなつて來たから、絶やすといけないと思つてさ。臺所にあるんなら、それでいゝんですよ」
「でも、もう少しついどいてあげませうよ」
　臺所へ立つて行つたりゑは、そこらをカタコト云はせてゐたが、「あゝあ、駄目々々。こつちの火は、眞ツ黒になりかゝつてますよ」
「あらさうですか。……ほんとに困つた人！　ぢアすみませんが、こちらへ澤山おこしといてやつてくださいませんか。それから序に鐵瓶を持つて來てくださいな。なんて、だん／＼圖々しくなつちやつて……」
「一つ、二人で働かうかね」
「まアあなたはそこに座つていらしつてくださいましよ。汚い臺所で、とてもあなた……」

「晩の仕度でもしてつてあげやうか。この頃あたしは、婆や相手に暮してるんで、料理の本なんぞ買つて來て、自分でいろ〳〵やつてみてるんだが、中々おいしいものが出來ますよ。あなたは、食べものはなんでもいゝんですか」
「えゝ、あんまり不消化でないものなら、なんでもいゝんですつて。でも、何しろねたッきりですから、肉類なんぞちつとも頂きたくありませんわ」
「然し、食べて消化れさへすれば、食べた方がいゝんでせう」
「それア、どん〳〵攝れるだけ營養はとらなくつちアいけないんださうですけれど……」
「肉汁なんぞ嫌ひですか」
「えゝ、あんまりどうも……」
「ヴアレンタインの肉汁なら、臭くもなんともないし、ちよつとうまいですがね」
「へえ、なんて云ふのです」
「ヴアレンタイン。……歸りに藥屋によつて屆けさせますから、飲めるかどうか、一度ためしにあがつて御覽んなさい」
「えゝ、有難うございます」
「湯飲みに一杯くらゐの水か微溫湯に、茶匙で一杯半か二杯もいれて、まぜて飲むだけのことですから、世話もありませんし……」
「あ、さようですか。どうも有難うございます」
伏目になつて、それきりお愛は默つてゐた。ひとりでにさうなつたのだけれど、直輔は、感動し易い病人の感情につ

け入つて、何か親切めかした言葉を云ひすぎでもしたやうに、心が咎められて、これもぴたりと口を噤んで了つた。硝子戸のそとに、――ない方がましなくらゐな哀ッぽい植込の下に、夕闇がそろ〳〵迫つて來た。暫く眺てゐて、

「日が短くなりましたね」

「えゝ、日の短いのは有難いのだすが、夜が永いんで閉口して了ひます。目を醒して、もうやがて夜のあける時分だと思つて、時計を見ると、やつと十二時廻つたばかりだつたりしますとね、もうがつかりして了ひますわ。……以前のことを思ふと、隨分變つたもんだと、我ながらつく〴〵さう思ひますの」

「うむ……。どうです、障子をしめないでよござんすか」

「えゝ、あたしは寒くはありませんが、あなた……」

「さう、ぢアしめさせて貰はふかな。あたしも寒いわけぢアないが、まア成可く冷い風にあたらない方がよささうですから」

そこをしめて、序に枕もとの方の鴨居へ釣りよせてある電燈をひねつてみたが、まだ灯は來てゐなかつた。

「女將さん何してるんだらう」

「あつちで火をおこしてなさるんぢアないでせうか。……女將さん！」

「え」

「なになすつていらつしやるの」

「炭酸瓦斯がこもらないやうに、赤い火を持つてつてあげようと思つて……」

「あら、構ひませんわ。どうぞもうこちらにいらしてくださいませんか。そこは北風がはいつて、それア寒いんですか

ら」

「えゝ、今すぐ行きます。……ちつとこの臺十能はあぶないわね」

「えゝ、大ぶもう風通しがよくなつてるやうですね。買はせときませう」

やがてりゑが火を持つて來、鐵瓶をかけた時分には、電燈が灯つた。

「ぢア、おいとましようぢアないか」

「まアおよろしいでせう。……つて云つたところで、なんにもお構ひ出來ないし……。あゝ慥か葡萄酒があつたわ。寒さしのぎに一杯召上つていらつしやいませんか」

「いゝえ、もうそのお酒とも手を切つて了ひましてね……」

「へえ、あんなに召上つたのを、よくまア……。でも、お體のためには、その方がおよろしいんでせうけど……」

「あゝ、葡萄酒つてば……」

と、りゑは立つて行つて、玄關から見舞の品を持つて來た。

「これを越智さんが……」

「あら、どうもすみません」

「いゝえ、つまらない……。ねえ、刀自さん、おいとましようよ」

「えゝ、ですけど、ぐうツと一杯葡萄酒をあがつていらしつたらどうです」

「いゝえ、もう澤山」

「葡萄酒ならいゝんでせう」

「それアなんだつていゝんだけれど、どうせうちまでもちアしないし、もたないもんなら飲まない方が却つて安全ぞよ」

「さう。……ぢアそろ〳〵おいとましませうか」

「だが、呆れた風呂だな。なんだか、こんな日暮がた、病人さん一人殘して行く氣にもなれないが、一體どうしたつてんだらうね。もうちつと待つてみようか」

「でも、あなた、あんまりおそくなつて大丈夫ですか」

「大丈夫。今日は風がないから」

とは云ふものゝ、直輔は、夜の風が、覿面にわるいことを知つてゐたから、一刻も早く歸りたかつた。「汽車の時間表ありますかね」

「えゝ、そこの簞笥の上の鴨居にはつてありますから、どうぞ御覧んなすつてください」

「あゝ、さうか」

と立つて、時間をきめ、それに間に合ふかぎり待つことにしたが、たうとう女中は歸つて來なかつた。

「ぢアまた伺ひます。御大事になさい」

「どうも態々有難うございました。ほんとにお茶一杯差上げられませんで、申譯ありません。あなたもどうぞお氣をおつけなさいまして。また、お暇がございましたら、どうぞおよりくださいませんか。……女將さん、どうもいろ〳〵お働かせ申しましたりして……」

「もううちが分つたから、これからは、あたし、ちよく〳〵お邪魔に出ますわ」

「どうぞほんとに……」

冗口まぢりの永い挨拶をしい〳〵、りゑが身仕度をするのを、直輔はもうおもてに出て待つてゐた。格子戸の棧を見詰めてゐるうちに、自分たちが歸つたあとへ、一足違ひに惡者かなんかゞはいり込んで、とんでもない兇變でも起りさうな氣が、急にして來た。

「なんだか心配だな」

と、出て來たりゑに、「あたしは先に失敬するが、あなたどうだい、もうちつとゐてやらないか。別に用はないんだらう」

「えゝ、別にこれぞつて……」

「ぢアさうしないか」

「さうしませうか」

「さうしてあげたまいな」

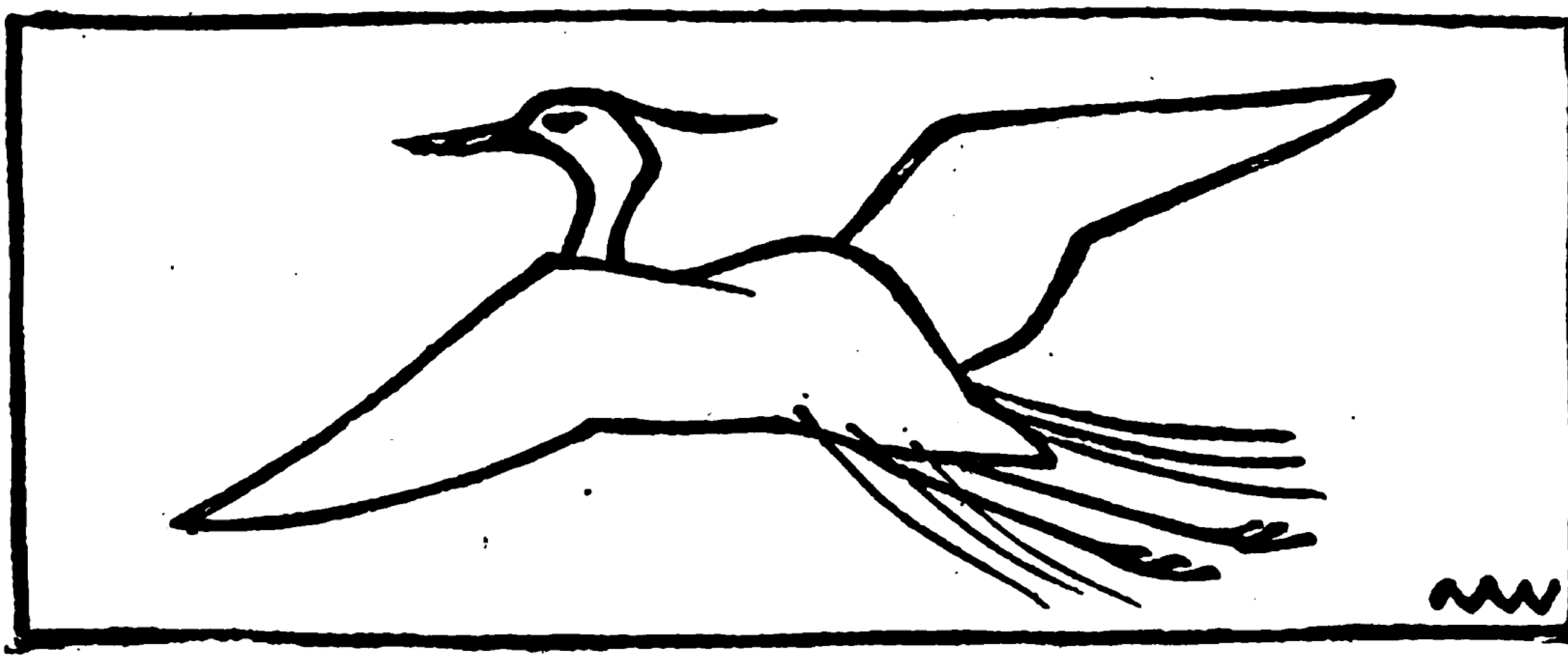
で、直輔だけ別を告げて、長谷の停留場の方へ急いだが、途中で思ひ出して、小戻りして鍋屋へより、これ〳〵のうちにヴアレンタイン の肉汁を屆けるやうにと賴んで、近くの俥屋から俥に乘つて了つた。へんな興奮のしかたで、思ひが、概念的に、哲學的に動いて行つた。死期の極つた病人の生活、――その場合では、一體なにをしたらいゝのか、生きようとする方がいゝのか、死なうとする方が本當か、犧牲的な死をでも生きようとする方がいゝのか、それより成可く他に厄介をかけないやうに、ぢッと蟄して空寂の生を死んでゐる方がいゝのか……とか、病氣と云ふものが全くなくなつたら、何か人類に不都合が起るのだらうか……とか、そんな風なことを考へ續けた。

汽車には、二十五分ほど間があつたので、停車場前のカフエーで、熱い紅茶を煎れて貰つて、夕刊を見ながらゆくり飲んだが、そのうちふと、先達からやりかけてゐる敗荷圖の心持が、うまく摑めたやうな氣がして來た。渇き切つて、カサ〳〵になつた葉、折れ曲つた先を泥のなかに埋め、三角形に立つてゐる莖、水の涸れた池の底、さう云ふもの〻、味もそつけもない味はひが、どうにか實感として摑めて來たやうに思はれた。一刻も早くうちに歸つて、玄關前の蓮池を眺めたくつてたまらなかつた。汽車のなかでもそればかり考へ續けた。

停車場から俥で、うちへ歸りついた頃には、もうすつかり夜になつてゐた。宵闇だつた。俥夫に賃金を渡しながら、提燈の灯で、池のなかをすかしてみたが、目を射られて、却つてなんにも見えなかつた。

あた〻かさうなうちのなかの電燈の色に、惹きつけられるやうになつて、そのま〻玄關をあがり、襟卷や外套をかなぐり捨てると、急にヘト〳〵に勞れが出て、長火鉢の前の座布團の上に、ごろりと横になつて了つた。婆やが何か云つても、返事をする元氣もなかつた……。

お愛のことが、へんにあたまにつきだしたのは、却つて、それから一日おいた翌日からだつた。——いくら描いてみても、直輔の敗荷圖は、みづ〳〵しく勢をもつて來た。或る日射の暖な午前、二階の畫房の緣側にころがつて、肘枕をしてゐるうちに、つい二三時間前に起きたばかりなのに、うと〳〵と眠つて了つたりした。すると、お愛の夢をみて、目をさました。日向にチカ〳〵と光つてゐる緋毛氈のけばを見詰めながら、まるで戀人を思ふやうに、お愛のことばかり思ひつゞけて、いつまでも直輔は、そこにころがつてゐた……。(次號完結)



玄宗の心持

菊池寛

人物

玄宗皇帝。六十を出でたる老天子。

楊貴妃。年三十七。美貌なり、されど、日本の俳優が扮して大なる幻滅を感ぜしむるほどの美貌にはあらず。豊艶なる顔、然れども衰頽の色、漸く著し。

楊國忠。右丞相。楊貴妃の兄。

秦國夫人。
韓國夫人。　いづれも大國に封ぜられたる楊貴妃の姉妹。
虢國夫人。

高力士。

陳玄齡。

その他、重要ならざる多くの人物。

時及び所。

天寶十五年六月。

長安を去る百餘里。馬嵬と云へる寒驛。

情景。

長安を蒙塵した玄宗皇帝の鳳輦が、馬嵬ケ原に止まつてゐるところ。外に、三人の夫人が乘つてゐる車と、楊國忠の乘つてゐる車とがある。車を引いてゐた馬は、水を飼ふために、連れ去られてゐる。

三の車を圍む、混亂した侍臣宮女の群、殊に徒歩の宮女が目立つ。玄宗の車の扉が今開けられたところ。

背景に一つの酒店がある。下手、樹立の間に、休息してゐるらしい三軍の旌旗がほの見える。

侍臣甲。（鳳輦に近づきながら）。陛下。殿をしてゐます李孫勇からの使の者が參るやうでございます。あんなに。馬を飛ばせてゐます。

玄宗。（車から顏を出す）湯が一杯ないか。

侍臣甲。李孫勇からの使の者でございます。李孫勇からの……。

玄宗。そんなことを訊いては居ない。湯が欲しいと云ふのだ。貴妃が齒が痛むので、嗽をする湯が欲しいと云ふのだ。

侍臣甲。はつはつ。（かしまつて退き、酒店の中へはいつて行く）

侍臣乙。（急ぎ足で出て來る）。李孫勇からの使の者が走しつて參るやうでございます。

玄宗。うむさうか。李孫勇？たしか殿を引受けてゐたのだね。

侍臣乙。左樣でございます。陛下を心安く落しまいらせるために、奮闘してゐます忠義第一の大將でございます。

玄宗。（それには答へないで、車の内を振り返りながら）、そんなに痛むのか。
楊貴妃。（姿がハッキリとは見えない。たゞ燦爛たる綾羅がうごく丈で）。はい。
玄宗。困つたな。齒が痛むと云ふのは、一番厄介なものだ、侍醫頭はどうしても見えないかい。
宮女。（車についてゐた）はい。先刻から探してゐますが、見當らないやうでございます。初から、供奉の列には加らなかつたのだ、とみんなが申して居ります。（その時上手の方に、使者が着いたと見え物騒しい音が聞え、人々がその方へ驅けつける）。
侍臣乙。あゝ着きました。どんな知らせを持つて參りました（驅け出す）。
玄宗。（使者の方へは、あまり注意を拂はないで）、どんなに痛むのだ。齒ぐきが痛むのかそれとも、神經が痛むのか。
楊貴妃。あゝ痛い。痛い！齒が痛まなくて済むんだつたら、妾の持つてゐる夜光の珠を、みんな手離してもいゝのに。あゝいたい！
玄宗。困つたな。一層早く拔いて置けばよかつたのだ。
楊貴妃。さうなのです。私はぐら／＼するから、拔いてくれ拔いてくれと云つたのです。あの侍醫頭が、もつと待て、もつと待てと云ふものですから、こんな苦しみをするのです。侍醫頭が居たら鞭打たせてやりたい位です。
（侍臣甲。湯を持つた茶碗を、恭々しく捧げて來る。）
侍臣甲。お湯でございます。
玄宗。おゝ湯が來た。これで嗽ひをして見るといゝ。（玄宗楊貴妃に取りついでやる。）

楊貴妃。（それを飮む。）おや鹽を入れてないのだね。まあ氣が利かない。

（侍臣乙。あはたゞしく登場する）。

侍臣乙。陛下、御安心遊ばしませ。使者が申しますには、安祿山の兵士共は、長安の都へはいると、もうみんな腰を落付けて、掠奪を始めるやら酒浸りになるやらで、陛下のお跡を追ふ容子は少しも見えないとの事でございます。先づ御車から、降りて暫らくの間、御休息なされてもよろしからうと存じます。

玄宗。さうか。俺もさうしたいのだ。道がわるいので、車が搖れ腰が痛んで仕方がなかつた。貴妃！お前の齒が痛むのもそのためだらう。あんまり身體が搖れたから齒が痛むのだ。降りて休息するといゝ。

楊貴妃。はい！妾もさうしたかつたのです。車の中は、暑くつて暑くつて。のぼせるから、齒が痛むのです。どれ。

（玄宗先づ、車より降り貴妃もつゞいて降りる。侍臣宮女達、皇帝の周圍を避ける。楊國忠及び三人の夫人達も、車から降りる。皇帝に目禮したる後、下手の方へ行きて座を取る）。

玄宗。高力士は何うした。

侍臣丙。何か、用事がありまして、陳玄齡殿の所へ行つて居られます。

玄宗。李孫勇からの使者を劬はつてやれ。（傍に頰を押へて苦しがつてゐる楊貴妃を振り返つて）どうだい。少しはよくなつたか。

楊貴妃。いゝえ。前よりも、もつと烈しい位です。

玄宗。困つたな。いつそ動いてゐるのなら、思ひ切つて拔いてしまつたらどうだ。

楊貴妃。出來れば、さうしたいのです。でも、觸ると飛び上るやうにいたいのです。

玄宗。どれ、お見せ。
楊貴妃。勿體なうございます。
玄宗。なにかまふ事はない。俺が拔いてやらう。
楊貴妃。でもお手が汚れます。
玄宗。なに、そんなことを。お前と俺との間で。
楊貴妃。侍臣や宮女達が見てゐます。
玄宗。かまふことはない。かう云ふ場合だから。もつと傍へお寄り。さう、私の身體に身をもたせるやうにして、もつと口を開けなければ。
（玄宗、楊貴妃を身ぢかく引き寄せ、右の手を口中に入れて病める齒を求む。侍臣宮女達、顏を背けてゐる）
楊貴妃。おゝいたい！
玄宗。辛抱しておいで！これは、ぐら〳〵動いてゐる。もう少しでぬける！
楊貴妃。おゝいたい！いたい！あゝ、もう勘忍して下さい。あつ！
（齒が拔ける）
玄宗。それ御覽！拔けたではないか。
（侍臣甲、湯を持つて來る。）
玄宗。嗽をなさい。そして、氣を鎭めておいで。いまに痛みが無くなるだらう。お前に苦しまれると、氣が氣でない。自分で苦しむよりも、よつぽど苦しい。

(楊貴妃。しばらくの間、手で口を押へ、うつむいてゐる。口から、しきりに唾を吐く。そして嗽ひをする。)

玄宗。どうだい！痛みは止みさうか。(楊貴妃うなづく)さうか。それはいゝ。それは助かつた。

楊貴妃。(しばらくの間。無言。やがて抜けた齒を懷より出した紙に包みながら)。これが、妾の最初の齒ですわね。

玄宗。最初の齒つて、それは一體どう云ふことなんだ。

楊貴妃。妾の身體から抜けた最初の齒だと云ふことです。妾はいつか詩人の李白から聽いたことがあります。桐の一葉が、落ちて秋が來たのが知れるやうに、最初の齒が抜けるのはやがて肉體の秋が來るしるしだと、かう云ふのでございます。(暗然とする)

おゝ、痛みはだん〳〵取れて來る！が、妾は何だか、物さびしい。何だか、物足りない。妾の心の中からも、何かゞ抜け落ちたやうにさびしい。おゝ陛下、妾の胸に手を當てゝ置いて下さい！妾はたまらなくさびしいのです。

玄宗。(楊貴妃をかきよせて、胸に手を當てながら)かうかい。かうすればいゝと云ふのかい。

楊貴妃。(頰をさすりながら)おゝ何だか、顏の相恰までが變つて來たやうだ！何だか頰の肉が、ゆるんで來たやうです。

玄宗。そんなことが、あるものか。お前の頰は十六七の小娘のやうに、ふくよかだ。

楊貴妃。あゝ陛下、妾にどうぞ、年のことを聽かせて下さいますな。十六七！　妾は、十六七などゝ云ふ聲を聞くと、魂を裂かれるやうに悲しいのです。

玄宗。俺が、わるかつた！　ゆるしてくれ。

楊貴妃。いゝえ、陛下がわるいのではございません。それは、妾へ忍ばなければならぬ眞實なのです。それはごまかす

ことの出來ない眞實なのです、妾が今年もう三十………。
玄宗。おゝ俺も、それは聽きたくない。お前の頬がいつまでも、ふくよかで髮がいつまでも黑ければそれでいゝのだ。
楊貴妃。そんな、そんなことは人間の妾には望めないことなのです、それを思ふと……。
玄宗。おゝよして呉れ。さう一々、俺の言葉を氣にかけることは。あはゝゝ。もつと元氣でゐてくれ。俺はお前にさう悲しまれると、苦しいのだ。ねえ、もつと元氣でゐてくれ。
楊貴妃。(急に思ひ付いたやうに)鏡が見たい!(宮女に)金華お前は、鏡を持つて來たどらうねえ。
宮女甲。えゝ。
楊貴妃。お前は、妾の化粧係りだから、妾のために、一面の鏡位は、持つて來てお呉れだらうねえ。それを玆へ持つて來ておくれ。
宮女甲。あゝ貴妃樣! 忘れました、忘れました。あまりに取いそぎまして、持つて參ることを忘れました。
楊貴妃。おゝ何と云ふうつけ者!妾に、鏡がどんなに大切であるかを知つてゐるくせに。おゝ腹が立つ!誰でもいゝこの女をそちらへ、連れて行つて縊り殺しておくれ。
宮女甲。あつ!(駭いて泣き伏す)
玄宗。可愛相に。ゆるしておやり。こんな騒動のときには、お前の後に、附いて來た丈でも一の手柄だ。ゆるしておやり。
楊貴妃。でも………。
(何か云はうとしてゐると、宮女乙が、三人の夫人の所から來る。一面の鏡を持つてゐる)

宮女乙。貴妃様。こんなものでもよろしければ、お使ひ遊ばせと、韓國夫人が仰せられました。

楊貴妃。仕方がない。それを借りやう。(鏡を手に取る)。おゝ、鏡を見るのが、何だかこはいやうだ！(躊躇した後鏡を見る)おゝ何と云ふ醜い顔、額の所にはこんなに霄が浮いてゐる。白粉は剝げ落ちてゐる。おゝ、顔の皮膚に少しの力もなければ、光澤もない。眸がにごつてゐる。あゝいやだ！いやだ！何と云ふ醜い顔だらう。おゝ陛下、妾の顔を、どうぞ見ないやうにして下さい。妾は耻づかしい。耻づかしい。

玄宗。おゝ何を云ふのだ。お前の亂れてゐる髮にも、風情がある。お前の白粉剝のした頰にも、ある美しさは宿つてゐる。

楊貴妃。(玄宗の言葉は、耳に入れないで)あゝ情ない。顔全體から、生氣がなくなつてゐるのだ。これが、妾の顔かしら、大唐の天子さまから、愛されてゐる妾の顔かしら。長安の都を落ちたことよりも、妾は自分が醜くなつたのが悲しい。さうなのだ！ 妾は、もう今までも醜くゝなつてゐたのだ。それを日日化粧でごまかしてゐたのだ。今日、一日化粧しないものだから、かくされてゐた醜くさが、一時にマザ／＼現はれたのだ。おゝ情ない。こんなに醜くなるより、いつそ死んでしまひたい。

玄宗。おい氣を靜めてくれ。何と云ふことを云ふのだ。誰がお前を醜いなどゝ云はう。唐の天下は、お前の美しさを讃へる聲で、充ち滿ちてゐるではないか。お前の美しさのために國が亂れた。とさへ云はれてゐるではないか。

楊貴妃。陛下のお言葉も、大唐の天子のお言葉も、この五寸の鏡にうつる眞實を、どうすることも出來ません。貴君の御車から妾を、突き落して下さい。妾は、こんな顔をして貴君のお傍に居り、行幸の先々で、あれが楊貴妃だと指さゝれたくはありません。

玄宗。氣を靜めておくれ。お前は、あまり昂奮しすぎていけない。美しいとか醜いとか、そんなことを云つてゐる時でもないのだ。今は、一旦緩急の秋なのだ。女は、だまつて俺の胸に、寄り添つて居ればいゝのだ。

楊貴妃。でも妾は……。おゝ、これから一日一日醜くなるのだと思ふと……。

（上手に、物さはがしい聲がする。）

侍臣宮女達。あゝまた使者が來た。また使者が來た。（五六人その方へ走つて行く。玄宗も楊貴妃も、だまつて、その方を見てゐる。侍臣甲、あはたゞしく歸つて來る。）

侍臣甲。李孫勇からの、再度の使者でございます。

玄宗。うむ、どうしたと云ふのだ。

侍臣甲。安祿山の兵が、二千騎ばかり、後を追つて來たと云ふのでございます。一戰に、追ひ斥けましたが、いつ本軍が後を慕つて來るかも分らないと申すのでございます。御猶豫なく落ちさせられるやうにとのことでございます。

玄宗。さうか。よし、それでは出發の仕度をするやうに、陳玄齢に傳へてくれ。

（侍臣甲下手へ行く）

玄宗。どうだい！歯はまだ痛むかい。

楊貴妃。もう歯のことなどは、何うでもよくなりました。それよりも…………。

玄宗。うむ。それよりも、氣を直して車に乘る用意をしてくれ。しばらくの間の辛抱だ。直ぐ都へ歸れるだらう。さうすれば。また、お前は自分で好きな丈、美しくなつて俺を駭かしてくれ。

（玄宗、楊貴妃を促しながら、席を立たんとす。突如下手の樹立の彼方、兵士が休息してゐる邊が騷がしくなる。兵

士が楯を打ち鳴らす音が烈しく聞える。侍臣甲狼狽して馳けもどつて來る。)

侍臣甲。陛下!

玄宗。何ぢや、何ぢや。

侍臣甲。謀反でござりまする。

玄宗。(愕然としながら)えゝつ!馬鹿なつ!謀反などゝ、そんなたはけた!

侍臣甲。でも、陳玄齢が、號令いたしましても動かうとしないのでございます。

玄宗。(青くなりながらも)仔細があらう。高力士を呼べ!陳玄齢を呼べ!

(下手から、高力士が出て來る。兵士達は益々さはがしくなる。)

玄宗。高力士か。一體何うしたのだ。何うしたのだ。

高力士。陛下。一大事でございます。

玄宗。何ぢや、謀反か?、

高力士。いゝえ、謀反ではござりません。彼等は、みんな忠實な兵士でございます。たゞ今度の兵亂の責任者を罰せよと、かう申すのでございます。責任者を罰しない裡は、一歩だつて動かないとかう申すのでございます。もし、責任者を罰しないならば、戟を逆まにして、祿山に降ると申してゐる者さへござります。

玄宗。陳玄齢までも、さう云ふのか。

高力士。陳玄齢は、一生懸命になつて、兵士を宥めてゐますが、かうなると、强いものは、實力です。陳玄齢も、平生の威嚴が少しもございません。

玄宗。だが兵亂の責任者と云はばこの俺ぢやが。
高力士。いゝえ、兵士どもは、さう申しては居りません。一天萬乘の至尊に、責任がある譯はないと申して居ります。陛下の、聰明を掩ふてゐる權臣がわるいと申してゐます。
玄宗。うむ。誰の事ぢや。
(問答を離れて聞いてゐる楊國忠、もじ〳〵する)
高力士。お察しを願ひます。
玄宗。火急の場合、察してゐる暇はない。あからさまに申して見い。
高力士。恐れながら、楊國忠どのでございます。
玄宗。(憤然として)馬鹿なつ!國忠は貴妃の兄だと云ふことを忘れたのか。
高力士。(割合冷靜に)忘れねばこそ申して居るやうに、私には思はれます。
玄宗。兵士達に、俺の言葉を傳へてくれ。楊貴妃の兄を失ふことは出來ぬと。いゝか。俺の親しい外戚を失ふことは出來ぬと。いゝか、さう傳へてくれ。
(兵士の烈しく柄を鳴らす音が、聞えて來る。玄宗たぢろぐ。陳玄齡、登場する。玄宗と同年輩の老將軍。)
陳玄齡。陛下、一大事でございます。陛下の軍隊を失ふか、楊國忠殿を失ふか、二つに一つでございます。
玄宗。俺の言葉を傳へてくれ。
陳玄齡。恐れながら、無駄でございます。兵士達は、氣の狂つた獅子のやうに、荒れ狂つてゐます。恐らく陛下のお言葉も、耳にはは入るまいと思ひます。

（楯を鳴らす音が、すさまじく聞える）
陳玄齡。あれでございます。あの通りでございます。
玄宗。困つたな。唐の社稷も覺束なくなつて來たな。
高力士。そんなことは、ございません、兵士の願ひを叶へてさへやれば、兵士達は欣んで、陛下のために戰ふだらうと思ひます。
楊國忠。（決然として前へ出る）陛下私の死ぬときが、來たやうに思ひます。
玄宗。おゝ。
楊國忠。私を兵士達に與へて下さい。それが、陛下に對する私の最後の義務かも知れません。
楊貴妃。おゝ兄樣。（すがり付く）
楊國忠。おゝ妹機嫌よく暮してくれ。陳玄齡どの、私を兵士達の所へ案內してくれ。
陳玄齡。よいお覺悟です。どうぞ、貴君の立派な態度で、貴君の最後を飾つて下さい。
（楊國忠と陳玄齡と去る）
楊貴妃。（玄宗に取りすがつて）陛下、私の可愛相な兄を、兄を。
玄宗。ゆるしてくれ。かうなつては、俺の力にも及ばない。
（玄宗と楊貴妃、相擁して泣いてゐる。忽ち下手の方で、兵士達の罵しり騷ぐ聲が聞える。楯を叩く音が、それにまじる。玄宗と楊貴妃耳を掩ふやうにしてゐる。高力士、馳けもどつて來る。）
高力士。陛下！

玄宗。おゝ、國忠は殺されたのか。

高力士。はい。

（楊貴妃泣きくづれる。舞臺にゐる三人の夫人も泣き倒れる）。

玄宗。おゝ早く、出發の仕度をしてくれ。俺は、こんな呪はれた場所には、一刻も止まつてゐたくない。

高力士。陛下！

玄宗。何ぢや。

高力士。兵士どもは、まだ滿足してゐません。

玄宗。えゝつ！何と云ふのぢや。

高力士。まだ、責任者はあれで盡きないと申すのでございます。

玄宗。なにつ！無禮な。この俺を何と思つてゐるのぢや。俺が、自分で行く。俺が行つて。無禮な奴等を懲しめてやる。

高力士。それは、徒勞でございます。兵士達は、本當に陛下の御身上と、唐の社稷とを思つてゐるのでございます。思つてゐればこそ、國の痛病を除かうと一致團結してゐるのでございます。

玄宗。おゝ俺には、何も分らなくなつた！　そして、その責任者は誰だと云ふのだ。まさか……

（楊貴妃、屹となる。）

高力士。恐れながら、楊貴妃の御姉妹に當る、三人の夫人達でございます。

玄宗。えゝつ。

楊貴妃。えゝつ！

玄宗。なぜ、なぜ、この夫人達に罪があるんだ。彼等は高かゞ女だ。彼等が、悪い謀はない。彼等が悪いとすれば、俺が悪いのだ。兵士達は、俺の親しいものを罰して、間接に俺を罰しようとするのか。

高力士。何う致しまして。彼等は、かう申してゐます。婦人が、大國に封ぜられてゐるのが、國の亂れの基だとかう申すのでございます。それを誰が、封じたか、そんなことよりも、先づ形を……、さうです。大國に封ぜられてゐる夫人の方々を、無くしたいとかう申してゐるのでございます。

（脅迫するやうな、激しい罵聲が聞える。つゞいて、何かを促がすやうな激しい桶を叩く音。陳玄齡出て來る。）

陳玄齡。陛下、兵士達は楊國忠殿の血を見てから、血を嘗めた虎のやうに兇暴になつてゐます。大抵の者は、劍を抜き放つてゐます。もし、彼等の要求を拒んだならば陛下の御前へまでも、殺倒して來さうな容子をしてゐます。あれをお聞き下さい。あの叫びを。

（烈しい叫びがつゞいて起る。「三夫人を殺せ！」。「三夫人を殺せ！」の聲が嵐のやうに起つて來る。）

高力士。到頭あんな所まで、參りました。もし、要求をきゝませんと、陛下の前で、どんな殺伐なことをしないとも限りません。

玄宗。あゝ俺には、もう何うしていゝか分らない。

（泣いてゐた三夫人、決然として身を起す）

三人。あゝ、妾達を連れて行つて下さい！

楊貴妃。そんなことは、妾がさせません。陛下、お止め下さい。陛下。陛下。

玄宗。(顔を掩ふて聲なし)……。

楊貴妃。(狂氣のやうに)決して行つてはなりません。妾が命に換えても。決して、決してそのやうなことはさせません。

韓國夫人。貴妃よ、かうなつては力には、勝てません。貴女のお蔭で、妾達は長い間樂しい時を過したのです。こんな運命になつても、それを恨めしくは思ひません。妾達は、あまり樂しみ過ぎたのでした。行きませう。姉妹三人揃つて。

楊貴妃。あゝ行つてはなりません。待つて下さい! 待つて下さい! 行つてはなりません。

高力士。貴妃。御姉妹達は、あんなに立派な覺悟をしていらつしやるのです。どうぞ、お止めにならないやうに、大唐帝國の運命は、この刹那々々にかゝつてゐるのです。祿山の兵隊は、後を慕つて來てゐるのです。今兵士の心を失つたならば、國の滅亡はもとより、陛下の御身の上もどうなるか分らないのでございます。

楊貴妃(だまつて泣き崩れる!)……。

(三夫人、侍臣達に助けられて歩み去る。陳玄齡も後につゞく。)

玄宗。(顏を上げて)あゝ死んでしまつた方がました。

(兵士の激しい怒號、どよめき、舞臺の人々は、誰一人聲を出すものはない。…………ふと、上手が騷しくなる。)

侍臣丁。使者だ! 使者だ!

(上手へ馳け込む、舞臺の人々は、化石のやうになつて動かない。侍臣丁歸つて來る。)

侍臣丁。陛下。李將軍からの使者でございます。

玄宗。（顏を背けながら）あゝ。そんなものは、もうどうでもいゝ。

侍臣。ところが、よいどころではございません。一旦斥けた祿山の軍が、三萬近い援兵と一緒になつて押し寄せて來たと申すのでございます。味方苦戰のため、いつ何時退却するか分らないから、一刻も早く鳳輦を進まされるやうにと、かう申すのでございます。

高力士。御車の用意をするやうに。（兵士の烈しく罵しる聲、耳を掩ふやうに聞えて來る。三夫人を送つた宮女達、泣きながら歸つて來る。やがて、白馬を附けた車が、引き出される。楊貴妃も玄宗も、なか〳〵それに乘らうとはしない。

………兵士の罵聲が益々、烈しくなり、益々近づいて來る）

高力士。おゝ彼奴等は、まだ滿足しないと云ふのか。

（玄宗も楊貴妃も、不安に襲はれる。………突如、「楊貴妃を斃せ」「楊貴妃を殺せ」と云ふ叫びが、嵐のやうに起つて來る。）

高力士。おゝつ！

玄宗。えゝつ！

（「楊貴妃を斃せ！」の聲益々近づく。戟が、樹の間に隱見する。）

玄宗。あゝ彼奴等は、最後のものを求めてゐる。

楊貴妃。（玄宗にすがりつく）おゝ陛下。

玄宗。心配するな。日月が、逆さまに墜ちてもお前を渡さぬぞ。この俺の眼の黑い間は。

兵士の聲。楊貴妃を斃せ！

他の聲。眞の國賊を亡せ！

他の聲。患難の源を除け。

（樹の間から、劍戟の光がほのめく。陳玄齡、色を失つて出て來る。）

高力士。兵士達は、貴妃を要求してゐるのか。陳玄齡。（それに答へないで玄宗に）お聞きの通りです。陛下。

玄宗。おゝ、俺を先きへ殺して呉れ。俺を先きに殺してから、女を何うにでもしてくれ。陳玄齡、俺を兵士の所へ案内してくれ。

陳玄齡。滅相な。彼等は、陛下に對しては、忠實な兵士です。たゞ國家の……。

楊貴妃。（決然して起ちながら）おゝ何も云ふな。陳玄齡、妾を彼等の所へ案内しておくれ。

玄宗。（駭いて楊貴妃を抱きしめる。）おゝ、何を云ふのだ。馬鹿な。お前を渡してよいものか。俺から、お前を奪ひ取らうとするものは、先づ俺の息の根を止めてからにしろ。

高力士。陛下、今日の場合は、

玄宗。何もきゝたくない。云ふな〳〵。

陳玄齡。陛下……！……。

玄宗。何も云ふな、亡ぶのなら亡んでもいゝ。この女を抱きながら亡びたい！

（「楊貴妃を弑せ！」の聲益々盛になる）

高力士。陛下！

陳玄齡。陛下！

玄宗（答へず）………。

楊貴妃（つと、身を玄宗の把握から脫しながら）陛下、どうぞ、妾を死なせて下さい！

玄宗。馬鹿な！

楊貴妃。いゝえ、妾は死にたいのです。十年來妾の願を一つとして、お斥けにならなかつた陛下は、どうぞ妾の最後の願を許して下さい。妾は、心から死にたいのです。本當に死にたいのです。

玄宗。なぜ。なぜ。なぜ！

楊貴妃。妾は、逃れる道がないから、死にたいと云ふのではないのです。先刻、自分の顏を鏡に映してから、世の中が嫌になつてゐたのです。これから、年が寄るに連れて一日一日一年一年、顏容が醜くなるのかと思ふと、妾は死ぬよりは悲しいのです。一年々々醜くなり、これが揚貴妃のなれの果かと、指さゝれるやうな、皺だらけのお婆さんになるのかと思ふと、ゾッとするほど怖しかつたのです。陛下よ、妾を死なせて下さい。少しでも、妾が美しい裡に、死なせて下さい。そして陛下の御心の裡に、少しでも美しいまぼろしを止めておいて下さい！

玄宗。馬鹿を云ふな。それはお前の理屈だ。そんな理屈で俺の心が、慰められるものか。

楊貴妃。いゝえ理屈では、ありません。妾の心全體が、妾の身體全體が、それを要求してゐるのです。どうぞ、死なせて下さい。妾は、先刻鏡を見たときから、死にたひと思つてゐたのです。その機會が、こんなに早く來る！、しかもこんなに晴がましい死が、帝王の妃として三軍の前で殺される。大唐の天下を動かした傾國の美人として。おゝ、女としてこんな晴がましい死に方が外にあるものか。

（「楊貴妃を殺せ！」の聲が聞える）

おゝ、あれは妾の死を讃へる聲だ。おゝ、妾の死は後世まで、歌はれる。妾の美しさは、後代に傳はるのです。おゝ、陛下お欣びなさい！貴君の愛人は、中華第一等の美人になりますよ。おゝ手間取つてはならない！陳玄齢、妾を案内しておくれ！

玄宗。貴妃！待て。

楊貴妃。いゝえ。どうぞ、やつて下さい、これが、妾の最後の最後のお願ひです。おゝ私の愛する陛下。御機嫌よくお榮えあそばせ。

玄宗。（今は言葉なし）………。

楊貴妃。おゝ陳玄齢よ。妾をなるべく、美しく殺しておくれ。醜くい死様はいやですよ。あゝ、柳英、妾はお前に羅の布を預けておいた筈だ。

柳英。（持つて來る）玆にございます。

楊貴妃。おゝ、これで身體を包むから、その上から縊り殺しておくれ。

（楊貴妃、それを髪の上から被ぶる。）

玄宗。おゝ楊貴妃！。

楊貴妃。おゝ陛下。妾のために、あまり心を痛めて下さいますな。妾はうれしく死ぬのです。それから、陛下妾をいつまでも忘れないで下さい。おほ……、それから、もう一事、云つて置きたいことがある。都へお歸り遊ばしても、あまり美しい方を、お近づけ遊ばしますな。

玄宗。おゝ何を云ふのだ！俺の心は、いまそのまゝに地獄だのに。

楊貴妃。陛下、おさらばでございます。（宮女達に）みんな左様なら、陳玄齡！大唐國の妃が、どんな美しい勇ましい死様をするか、兵士達に見せておくれ。

（楊貴妃、陳玄齡高力士に伴はれ退場する。）

玄宗。（その跡を見送りながら）おゝ、誰か俺を支へてゐて呉れ、斃れさうだ。

（玄宗、侍臣達に支へられて、ぢつと面を伏せてゐる。烈しい苦悶に堪へてゐることが分る。兵士達の聲、怒濤のやうに、高くなりしばらくあつて、急に「皇帝萬歳」の聲が起る。）

侍臣甲。（走しつて出て來る。）楊貴妃には、立派な御最後でございました。お亡骸を、一目お目に入れようかと、高力士殿が仰せになりました。

玄宗。（苦悶が漸く消え去つてゐる）見たいけれども、よさう。それが、彼女の志だらうから。どつかへ深く埋めてやつてくれ。

侍臣甲、はつはつ。（馳け去る。）

（「皇帝萬歳」の聲が、潮のやうに盛になつて來る。玄宗ぢつとそれに耳を傾けてゐる。高力士が出て來る。）

高力士。（玄宗の前に踞まりながら）立派な御最後でございました。兵士達も、さすがに感じたと見え、みんな甲を脫いで、罪を謝して居ります。

玄宗。（ほのじろい顏をして）さうか。

高力士。御心中のほど、申し上げる言葉もございません。

玄宗。（默つてゐる）………。

高力士。御悲嘆のほど、お察しいたします。

玄宗。(默つてゐる)……

高力士。お悲しみのほどお察しいたします。

玄宗。(青白い顔が漸く澄んで見える。靜な深い聲で)うむ。むろん悲しい。が、思つてゐたのとは少し違ふ。

高力士。ははつ。

玄宗。彼女に死なれると、生きてゐる甲斐はないだらうと思つてゐたが、死なれて見るとさうばかりでもないな。悲しいことは悲しいが、十年來心の上に、かぶさつてゐた重みが、ひよつくりと、除れたやうな氣もする。何だか手足を、延ばしてみたいやうなノビ〳〵とした氣もする。

(兵士達が、段々近づいて來て、その中の隊長らしいのが、十人ばかりは入つて來る)

隊長達。皇帝陛下萬歳!。

玄宗。(淋しい微笑で彼等にうなづいてから、高力士に)萬歳と祝はれるほどの心持でないが、お前が心配するほどの氣持でもない。解脫、そんなあは〳〵しい氣がしないでもない。お〻車に乘らう。時が移る。高力士、お前もこの車に乘らないか!急に一人だとやつぱり淋しい。

高力士。はつはつ。

(高力士車に乘る。車動き出す。「皇帝萬歳」の聲また一しきり聞える)

幕。


カルピス
おいしい
滋強飲料
兄さん
花子さん
おとうさん
おなかの大きいおかあさん
坊や
賣所●酒店●食料品店●藥店●發賣元 東京國分商店 製造元 東京ラクトー株式會社

◉本號特價　金壹圓六拾錢　郵稅　金四錢五厘

中央公論大賣捌所

同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

廣告取次所
博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
豊國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社　一星社

一誌代郵稅は一切前金にて[illegible]
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年八月三十日印刷納本
大正十一年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地　中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◎本號に限り特價金壹圓六拾錢

郵税金四錢五厘